

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第438集

# 上郷岡原遺跡（2）

八ツ場ダム建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第21集

2008

国 土 交 通 省  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第438集

<sup>かみ</sup>上 <sup>ごう</sup>郷 <sup>おかの</sup>岡 <sup>はら</sup>原 遺跡 ( 2 )

八ツ場ダム建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第21集

2008

国 土 交 通 省  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 序

八ツ場ダムは、首都圏の利水および治水を主な目的とする多目的ダムです。群馬・長野県境を源とする吾妻川中流に建設される予定で、1.075億m<sup>3</sup>の貯水量を持ち、利根川水系最後の大規模ダムと呼ばれています。

八ツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、当事業団が平成6年度より実施しております。これまで長野原町、東吾妻町地内で縄文時代草創期から江戸時代まで、数多くの遺跡が調査されてきました。

上郷岡原遺跡の発掘調査は平成13年度より着手されました。そして天明三(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流に埋もれた村の跡が確認されたことは新聞・テレビなどのメディアでも取り上げられ大きな話題となりました。この他にも中世から近世にかけての掘立柱建物や土坑群、平安時代・縄文時代の竪穴住居など、地域の歴史を明らかにする数多くの資料を得て、平成19年10月にすべての調査が終了しました。

発掘調査の成果は『上郷岡原遺跡(1)』で平成14年度調査分が縄文時代の成果を残して既に刊行されています。本書はこの後を継いで縄文時代の成果を除いた成果のうち、平成18年度までの成果を取り込んで『上郷岡原遺跡(2)』として上梓するものであります。

本書刊行に至るまで、国土交通省八ツ場ダム工事事務所はもとより、群馬県教育委員会、東吾妻町教育委員会をはじめとする関係機関、および地元の皆さまから多大なご協力を賜りました。ここに心より感謝申し上げますとともに、本書が埋もれていた地域の歴史を解き明かす一助として活用されることを願い、序といたします。

平成20年3月25日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 高橋 勇 夫

# 例 言

1 本書は八ツ場ダム建設工事に伴い事前調査が行われた、上郷岡原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。2002年（平成14年）度に発掘調査を行ったⅠ～Ⅲ区の平安時代以降に関しては、2007（平成19）年に『上郷岡原遺跡（1）』として刊行されている。

2 遺跡の所在地は、群馬県吾妻郡東吾妻町大字三島字上郷である。

3 事業主体者は国土交通省である。

4 発掘調査は群馬県教育委員会の調整に基づき、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が国土交通省の委託を受けて実施した。

本報告書では2001（平成13）年と2003～2006（平成15～18）年に調査を行ったⅣ・Ⅴ区の成果のうち、平安時代以降を扱った。2007年度調査の古代から中世面および全遺跡の縄文時代については今後引き続き刊行予定である。

5 本報告に係わる発掘調査の期間および担当は以下のとおりである。

平成13（2001）年度 2001年7月13日～2001年10月31日 田村公夫・新井英樹・田中雄

平成14（2002）年度 『上郷岡原遺跡（1）』で報告済み。

平成15（2003）年度 2003年4月1日～2003年8月31日 杉山秀宏・篠原正洋・石川雅俊

平成17（2005）年度 2005年11月14日～12月31日、2006年3月1日～31日 瀧川仲男・関俊明

平成18（2006）年度 2006年4月1日～12月31日 飯田陽一・麻生敏隆・瀧川仲男

6 整理作業の期間および担当は以下のとおりである。

期間 平成19（2007）年4月1日～平成20年3月31日

担当 飯田陽一 岸トキ子 小菅優子 萩原光枝 高橋優子 吉田明恵

（保存処理）関邦一 小材浩一 森田智子 津久井柱一 多田ひさ子 （遺物写真撮影）佐藤元彦

（スリースペース測図）田中精子 福島瑞希 （デジタル編集）牧野裕美

7 発掘調査および整理期間中の管理指導・事務担当は以下のとおりである。

（管理指導）高橋勇夫 小野宇三郎 木村裕紀 吉田豊 赤山容造 住谷永市 神保佑史 津金澤吉茂  
水田稔 巾隆之 佐藤明人 中束耕志 住谷進 萩原利通 矢崎俊夫 萩原勉

（事務担当）下城正 野口富太郎 町田文雄 中沢悟 吉田有光 笠原英樹 石井清 大木紳一郎  
矢島千恵子 富沢よねこ 須田朋子 柳岡良宏 斉藤恵利子 矢島一美 狩野真子 若田誠  
武藤秀典 佐藤美佐子 本間久美子 北原かおり 今井もと子 松下次男 吉田茂

8 本書の執筆は第6章1を榑崎修一郎（写真撮影を含む）、他を飯田が行った。

9 発掘調査および整理事業での委託業務は下記のとおりである。

掘削請負 株式会社 歴史の杜 株式会社 測研 吉沢建設株式会社

遺構測量・壁材撮影実測 株式会社 測研

10 本遺跡に係わる遺構記録図面および写真、出土遺物・実測図等は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

11 発掘調査・整理事業にあたり本遺跡調査担当職員のほか、下記の職員から助言を得ている。

飯森康広 井川達雄 岩崎泰一 大西雅広 斎田智彦 斉藤利昭 深澤敦仁 真下裕章 宮下寛

- 12 発掘調査および整理事業・本書の作成にあたり、次の機関・諸氏よりご指導・ご教示を頂きました。記して謝意を表します。

国土交通省関東地方整備局八ッ場ダム工事事務所 群馬県教育委員会文化課 東吾妻町教育委員会  
長野原町教育委員会 岩島麻保存会 村田敬一

## 凡 例

- 1 本書で使用した座標値は日本測地系によるものであり、挿図に用いた方位は座標北を表している。
- 2 面積はデジタルプランメーターを用いて3回測定し、その平均値を示したものである。
- 3 遺構図表示には下記の縮率を用いた。

(第1面・天明三年泥流下) 建物1:50 壁材1:10 畑平面1:250(詳細1:20)  
畑断面1:20~1:50 平坦面1:50 林跡1:100~1:250 道平面1:100~1:150  
道断面1:20~1:100 溝平面1:50~1:150 溝断面1:20~1:50  
積石遺構(ヤックラ)1:80および1:100 同断面1:60および1:80  
(第2・第3面)土坑および墓坑1:40 溝1:50~1:250 同断面1:50 掘立柱建物1:80  
竪穴住居1:60 同掘り方図等1:100 カマド1:30

また、第1面には泥流による多数の攪乱があったが、これを破線で表し、註は省いている。
- 4 テフラ標記には次の略号を用いた。

As-A(浅間A軽石:1783年) As-Kk(浅間粕川テフラ:1128年)
- 5 遺物図表示には下記の縮率を用いた。

土器・陶磁器(小型)1:3(大型)1:4 古銭1:1 金属製品1:3 煙管1:2 鉄砲玉3:4  
木製品(小型)1:2 同(大型)1:10 石製品1:3
- 6 遺構写真は調査担当者が撮影した。
- 7 遺物観察表は本分末にまとめて掲載した。観察表には口径→口、底径→底、器高→高、長さ→長等の略語を使用している。また、復元値には( )、残存値には[ ]を付けて区別した。

# 目 次

序	
例言・凡例	
目次	
第1章 調査の経緯と方法	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法	2
3 調査日誌抄	3
4 整理作業の経過	4
第2章 地理的・歴史的環境	
1 周辺の地形と地質	5
2 周辺の遺跡	5
第3章 調査の方法	
1 遺跡の基本土層	7
2 遺構調査の概要と呼称の変更	8
第4章 IV区の調査	
第1節 第1面の調査	11
1 建物および構造物	12
2 畑と平坦面	26
3 積石遺構（ヤックラ）	61
4 道	67
5 溝	79
6 林跡	83
7 IV区遺構外の遺物	86
第2節 第2面の調査	93
8 溝	94
9 土坑と墓坑	100
第3節 第3面の調査	139
10 竪穴住居	139
11 IV区遺構外の遺物	147
第5章 V区の調査	
第1節 第1面の調査	148
1 畑と平坦面	148
2 溝と道	167
3 V区遺構外の遺物	176
第2節 第2・3面の調査	178
4 掘立柱建物	178
5 土坑	185
6 2面畑	196
7 2面溝	197
8 竪穴住居	198
9 V区遺構外の遺物	214
第6章 付編	
1 出土人骨分析	215
2 成果と問題点	217
遺物観察表	220
抄録	

## 挿図目次

第1図	上郷岡原遺跡 位置図	1	第59図	6号B積石遺構	63
第2図	区・グリッド設定模式図	2	第60図	4～6号B積石遺構断面 および遺物	64
第3図	周辺遺跡位置図	6	第61図	7・8号積石遺構	65
第4図	遺跡の基本土層	7	第62図	9・10号積石遺構	66
第5図	調査区設定図	8	第63図	Ⅳ区1号道	67
第6図	Ⅳ区の調査範囲	11	第64図	Ⅳ区1号道西隅部分	68
第7図	模式図	12	第65図	Ⅳ区1号道中央部分	69
Ⅳ区1面			第66図	Ⅳ区1号道東部分	70
第8図	1号壁	13	第67図	Ⅳ区2号道	71
第9図	1号壁 材1実測図	14	第68図	Ⅳ区3号道(1)	72
第10図	1号壁 材2実測図	15	第69図	Ⅳ区3号道(2)	73
第11図	1号壁 材3実測図	16	第70図	Ⅳ区4号道	74
第12図	1号壁 材4実測図	17	第71図	Ⅳ区道遺物	75
第13図	1号壁 材5実測図	18	第72図	Ⅳ区5号道	76
第14図	2号壁	19	第73図	Ⅳ区5号道(南)	77
第15図	2号壁 材1実測図	20	第74図	Ⅳ区6号道	78
第16図	2号壁 材2実測図	21	第75図	Ⅳ区1号溝	80
第17図	3号壁	22	第76図	Ⅳ区2号溝	81
第18図	1号建物平面確認状況	23	第77図	Ⅳ区3号溝	82
第19図	1号建物平面および柱痕断面	24	第78図	林跡	83
第20図	1号建物壁材および遺物	25	第79図	林跡部分(東)	84
第21図	Ⅳ区畑区画概念図	26	第80図	林跡(東)断面および林跡(西)	85
第22図	12区画1号畑	27	第81図	Ⅳ区遺構外遺物(1)	87
第23図	12区画2号畑	28	第82図	Ⅳ区遺構外遺物(2)	88
第24図	12区画2号畑内作物痕	29	第83図	Ⅳ区遺構外遺物(3)	89
第25図	12区画3・4号畑	30	第84図	Ⅳ区遺構外遺物(4)	90
第26図	12区画5号畑	31	第85図	Ⅳ区遺構外遺物(5)	91
第27図	12区画6・7号畑	32	第86図	Ⅳ区遺構外遺物(6)	92
第28図	12区画6号畑平坦面	33	Ⅳ区2面		
第29図	12区画8号畑	34	第87図	Ⅳ区2面調査概念図	93
第30図	12区画9～11号畑	35	第88図	Ⅳ区4号溝	94
第31図	12区画12号畑	36	第89図	Ⅳ区5・6号溝	95
第32図	12区画12号畑平坦面	37	第90図	Ⅳ区7号溝	96
第33図	12区画13号畑	38	第91図	Ⅳ区8号溝	97
第34図	12区画14号畑	39	第92図	Ⅳ区9号溝	98
第35図	15区画1・2号畑	40	第93図	Ⅳ区10・11号溝	99
第36図	15区画3～5号畑	41	第94図	Ⅳ区12号溝	100
第37図	16区画1号畑	42	第95図	Ⅳ区 土坑(1)	101
第38図	16区画1号畑 円形平坦面	43	第96図	Ⅳ区 土坑(2)	102
第39図	16区画2・3号畑	44	第97図	Ⅳ区 土坑(3)	103
第40図	16区画2号畑 円形平坦面	45	第98図	Ⅳ区 土坑(4)	104
第41図	16区画4号畑	46	第99図	Ⅳ区 土坑(5)	105
第42図	16区画4号畑 円形平坦面	47	第100図	Ⅳ区 土坑(6)	106
第43図	16区画5・6号畑	47	第101図	Ⅳ区 土坑(7)	107
第44図	16区画5号畑 円形平坦面	48	第102図	Ⅳ区 土坑(8)	108
第45図	17区画畑	49	第103図	Ⅳ区 土坑(9)	109
第46図	17区画畑 円形平坦面	50	第104図	Ⅳ区 土坑(10)	110
第47図	17区画北畑	51	第105図	Ⅳ区 土坑(11)	111
第48図	北西隅畑	52	第106図	Ⅳ区 土坑(12)	112
第49図	14区画畑および平坦面	53	第107図	Ⅳ区 土坑(13)	113
第50図	13区画畑	54	第108図	Ⅳ区 土坑(14)	114
第51図	13区画畑 平坦面	55	第109図	Ⅳ区 土坑(15)	115
第52図	18区画1・2号畑	56	第110図	Ⅳ区 土坑(16)	116
第53図	18区画3・4号畑	57	第111図	Ⅳ区 土坑(17)	117
第54図	Ⅳ区上位段丘面畑	58	第112図	Ⅳ区 土坑(18)	118
第55図	19区画の畑	59	第113図	Ⅳ区 土坑(19)	119
第56図	18区画東側の畑	60	第114図	Ⅳ区 土坑(20)	120
第57図	4・5号積石遺構	61	第115図	Ⅳ区 土坑(21)	121
第58図	6号A積石遺構	62	第116図	Ⅳ区 土坑(22)	122
			第117図	Ⅳ区 土坑(23)	123
			第118図	Ⅳ区 土坑(24)	124

第119図	Ⅳ区 土坑 (25)	125
第120図	Ⅳ区 土坑 (26)	126
第121図	Ⅳ区 土坑 (27)	127
第122図	Ⅳ区 土坑 (28)	128
第123図	Ⅳ区 土坑 (29)	129
第124図	Ⅳ区 土坑 (30)	130
第125図	Ⅳ区土坑出土遺物	131
第126図	1号墓坑	137
第127図	1号墓坑出土遺物	138
Ⅳ区3面		
第128図	Ⅳ区1号住居	140
第129図	Ⅳ区1号住居カマド	141
第130図	Ⅳ区1号住居出土遺物(1)	142
第131図	Ⅳ区1号住居出土遺物(2)	143
第132図	Ⅳ区2号住居	144
第133図	Ⅳ区2号住居カマド	145
第134図	Ⅳ区2号住居出土遺物	146
第135図	Ⅳ区遺構外遺物	147
Ⅴ区1面		
第136図	Ⅴ区1面畑概念図	148
第137図	Ⅴ区1～3号畑	149
第138図	Ⅴ区1～3号畑断面	150
第139図	Ⅴ区4号畑	151
第140図	Ⅴ区5・12号畑	152
第141図	Ⅴ区6号畑	153
第142図	Ⅴ区6号畑断面	154
第143図	Ⅴ区6号畑 円形平坦面	155
第144図	Ⅴ区7号畑	156
第145図	Ⅴ区7号畑断面	157
第146図	Ⅴ区8・10号畑	158
第147図	Ⅴ区8号畑断面	159
第148図	Ⅴ区10号畑断面	160
第149図	Ⅴ区9号畑	161
第150図	Ⅴ区11号畑	162
第151図	Ⅴ区11号畑断面および平坦面	163
第152図	Ⅴ区7B号畑	164
第153図	Ⅴ区13号畑	165
第154図	Ⅴ区14号畑	166
第155図	Ⅴ区 溝配置図	167
第156図	Ⅴ区1号溝	168
第157図	Ⅴ区1号溝断面	169
第158図	Ⅴ区2号溝	170
第159図	Ⅴ区3号溝	171
第160図	Ⅴ区4～6号溝	172
第161図	Ⅴ区5・6号溝	173
第162図	Ⅴ区7号溝	174
第163図	Ⅴ区8・9号溝	175
第164図	Ⅴ区遺構外遺物(1)	176
第165図	Ⅴ区遺構外遺物(2)	177
Ⅴ区2・3面		
第166図	掘立柱建物配置図	178
第167図	1号掘立柱建物	179
第168図	2号掘立柱建物	180
第169図	3号掘立柱建物	181
第170図	4号掘立柱建物	182
第171図	5号掘立柱建物	183
第172図	6号掘立柱建物	184
第173図	Ⅴ区土坑配置図	185
第174図	Ⅴ区 土坑(1)	186
第175図	Ⅴ区 土坑(2)	187
第176図	Ⅴ区 土坑(3)	188
第177図	Ⅴ区 土坑(4)	189

第178図	Ⅴ区 土坑(5)	190
第179図	Ⅴ区 土坑(6)	191
第180図	Ⅴ区 土坑(7)	192
第181図	Ⅴ区 土坑(8)	193
第182図	Ⅴ区 土坑(9)	194
第183図	Ⅴ区 2面畑	196
第184図	Ⅴ区 10号溝	197
第185図	Ⅴ区住居配置図	198
第186図	Ⅴ区1号住居	199
第187図	Ⅴ区1号住居掘り方	200
第188図	Ⅴ区1号住居カマド	201
第189図	Ⅴ区1号住居出土遺物(1)	202
第190図	Ⅴ区1号住居出土遺物(2)	203
第191図	Ⅴ区1号住居出土遺物(3)	204
第192図	Ⅴ区2号住居	205
第193図	Ⅴ区2号住居出土遺物	206
第194図	Ⅴ区3号住居	207
第195図	Ⅴ区3号住居出土遺物	208
第196図	Ⅴ区住居配置図	208
第197図	Ⅴ区4号住居	209
第198図	Ⅴ区4号住居カマドおよび出土遺物	210
第199図	Ⅴ区5号住居	212
第200図	Ⅴ区5号住居カマドおよび出土遺物	213
第201図	Ⅴ区2・3面遺構外遺物	214
写真1	上郷岡原遺跡Ⅳ区1号墓坑 出土人骨確認状況	215
写真2	上郷岡原遺跡(2) 出土人骨	216
第202図	壁復元図	218

## 表 目次

Ⅳ区土坑一覧	131
Ⅴ区土坑一覧	195
表1 上郷岡原遺跡(2) 出土人骨下顎骨 計測値及び比較表	216
表2 上郷岡原遺跡(2) 出土人骨永久歯歯冠 計測値及び比較表	216

### 遺物観察表

Ⅳ区出土遺物観察表	
1号建物・積石遺構・道	220
遺構外の陶磁器	220
遺構外の金属製品	222
遺構外の木製品	224
土坑・1号墓坑	224
1号住居出土遺物	224
2号住居出土遺物	225
遺構外の遺物	225
Ⅴ区出土遺物観察表	
遺構外の陶磁器・金属器	226
1号住居出土遺物	227
2号住居出土遺物	228
3号住居出土遺物	228
4号住居出土遺物	229
5号住居出土遺物	229
遺構外の遺物	229



## 写真図版目次

### PL-1

吾妻川対岸より見た上郷岡原遺跡（東から）

### PL-2 1号壁1

全景（上方が南）

南からの俯瞰

北東からの近接

北西からの近接

調査風景

### PL-3 1号壁2

①材3 下側ホゾ穴

②材3 上側ホゾ穴

③材2・3 屈曲状況

④材4 通枘差し口

⑤材5 ホゾ穴破断状況

⑥材1 杈首東ホゾ穴

⑦材4 目地ホゾ

1号壁材 撮影方向略図

### PL-4 1号壁3

⑨材3 目地ホゾ

⑩材5 ホゾ破断状況

⑪材4 目地ホゾ タケ材差し口

⑫材5 横板と楔

⑬材4 貫通し

⑭材5 貫通し

⑮材4 破断状況

⑯材5 タケ材差し口

### PL-5

1号壁 材1

### PL-6

1号壁 材3

### PL-7

1号壁 材4

### PL-8

1号壁 材5

### PL-9 2号壁1

2号壁全景（上方が東）

東からの近接

北からの近接

北東からの近接

2号壁材 撮影方向略図

### PL-10 2号壁2

①内側から見た材1

②外側から見た材1

③材1 ホゾ（東側）

④材1 ホゾ（西側）

⑤材2（西から）

⑥材2（東から）

⑦材2上のタケ材

⑧材2 東隅部分

### PL-11

2号壁 材1

### PL-12

2号壁 材2

### PL-13 3号壁

屋根材全景（上方が東）

北東側 タケ材

全景（南東側から）

南側 近景

### PL-14 1号建物1

1号建物全景（柱・壁材残存状況西から）

壁材残存状況（北から）

壁材残存状況（北西から）

床下礫確認状況（南から）

掘り方下確認状況（西から）

### PL-15 1号建物2

P1確認状態

P1断面（北から）

P2確認状態

P2掘り方（北から）

P3断面（北から）

P4掘り方（北から）

P5柱痕（南から）

P5柱痕（南から）

P6柱痕（南から）

P6掘り方（南から）

P7柱痕（南から）

P7掘り方（南から）

P4掘り方（南から）

P8掘り方

P10柱痕（西から）

P10掘り方（西から）

P10下層断面（西から）

P3確認状態

### PL-16 IV区畑1

12区画畑（2005年度調査区）全景

12区画2号畑と1号トレンチ

12区画2号畑作物痕跡

12区画5・6・8号畑境（西から）

12区画8号畑断面（北から）

12区画10号畑断面（南西から）

12区画11号畑（西から）

12区画12号畑（西から）

### PL-17 IV区畑2

12区画13号畑（南から）

12区画13号畑畝上の足跡

13区画1号畑断面（東から）

15・16・17区画畑全景（上方が北）

### PL-18 IV区畑3

15・16区画畑遠景（東から）

4号道と15・17区画畑（南から）

15区画南東隅付近（西から）

15区画1・2号畑境（東から）

4号道と15区画・17区画境（東から）

1号建物と15区画4号畑（北から）

12区画4号畑（南から）

15区画5号畑（北から）

### PL-19 IV区畑4

16区画畑（西から）

15・16区画畑（東から）

16区画3号畑（西から）

15区画3・5号畑境の窪み（西から）

15区画2号畑北隅の境木（北東から）

17区画畑北側（東から）

### PL-20 IV区畑5

13区画畑（西から）

13区画畑（南東から）

13区画1・2（手前）号畑境（南東から）

18（左）13（右）区画畑と6号道（北から）

18（手前）・13区画畑境（東から）

18区画畑（南から）

19区画畑（東から）

上位段丘面の畑（南から）

### PL-21 IV区円形平坦面1

16区画1号畑1号円形平坦面（北から）

16区画2号畑1号円形平坦面（北から）

16区画1号畑2号円形平坦面（北から）

16区画2号畑2号円形平坦面（北から）	1号道断面	9号溝（南から）
16区画1号畑3号円形平坦面（北から）	1号道脇の礫	10・11号溝（西から）
16区画2号畑3号円形平坦面（南から）	1号道溝内の礫	PL-35 IV区土坑-1
16区画1号畑4号円形平坦面（北から）	Bトレンチ内の2号溝断面（東から）	1～6号土坑全景（北から）
16区画2号畑4号円形平坦面（北から）	Bトレンチ全景（北から）	1号土坑（北から）
PL-22 IV区円形平坦面2	Cトレンチ内の2号溝（東から）	2号土坑（北から）
16区画4号畑1号円形平坦面（北から）	3号道脇の石垣（北から）	3号土坑（北から）
16区画4号畑2号円形平坦面（北から）	PL-28 IV区4・5号道	4号土坑上面（南から）
17区画畑1号円形平坦面（北から）	境木除去後の4号道（西から）	5号土坑（西から）
17区画畑2号円形平坦面（北から）	4号道と境木（東から）	6号土坑（西から）
16区画5号畑1号円形平坦面（北から）	5号道中央付近（南から）	7号土坑（北から）
南西隅の境木痕（南から）	5号道石敷き（北から）	8号土坑上面（東から）
南西隅の境木痕（東から）	5号道掘り方（北から）	8号土坑（南から）
PL-23 麻根・葉	PL-29 IV区1～3号溝	10号土坑（南から）
麻根確認状況（南から）	1号溝（北東から）	9号土坑上面（北から）
同左（東から）	1号溝西側（北から）	9号土坑（北から）
麻茎集中出土状況	1号溝A断面（南から）	11号土坑（西から）
麻茎集中出土状況	1号溝B断面（西から）	12・13号土坑（西から）
麻葉確認状態（北から）	1号溝西側屈曲部分（北から）	14号土坑（東から）
同左（南東から）	1号溝C断面（南から）	15号土坑（北から）
PL-24 3号道周辺の積石遺構1	1号溝北隅（南から）	PL-36 IV区土坑-2
6号A積石遺構と12区画畑（西から）	2号溝（西から）	16号土坑（北から）
6号B積石遺構全景（北から）	3号溝（南から）	17（右）・18（左）号土坑（西から）
6号B積石遺構全景（東から）	3号溝A断面（南から）	19号土坑（北から）
6号B積石遺構断面（南から）	PL-30 IV区林跡	20号土坑（西から）
6号B積石遺構北側へ続く掘り方（北から）	東側林跡確認地点全景（東から）	21号土坑（北から）
6号B積石遺構掘り方（北から）	倒木3（南西から）	23号土坑上面（西から）
PL-25 1号道周辺の積石遺構2	倒木4（南西から）	24号土坑（東から）
9号積石遺構（東から）	中央付近林跡確認地点（南東から）	26号土坑（東から）
8号積石遺構（西から）	西側林跡確認地点全景（西から）	23号土坑（東から）
1号道下の8号積石遺構基底部分（東から）	倒木1断面（南西から）	27号土坑（南から）
8号積石遺構断面（東から）	倒木5断面（南東から）	31号土坑（南から）
8号積石遺構と1号道（南から）	PL-31	32号土坑（東から）
10号積石遺構（東から）	IV区1面遺構外遺物1	33号土坑（南から）
10号積石遺構断面（東から）	PL-32	34号土坑（南から）
PL-26 IV区1号道	IV区1面遺構外遺物2	35号土坑（南から）
1号道東側（東から）	PL-33	36号土坑（北から）
1号道中央全景（東から）	IV区1面遺構外遺物3	39号土坑（北から）
1号道東側全景（西から）	PL-34 IV区2面溝	40・41号土坑（北から）
1号道側溝（礫除去後西から）	4号溝北側（南から）	PL-37 IV区土坑-3
8号積石遺構上の1号道（東から）	6号溝西側（東から）	42号土坑（南西から）
8号積石遺構上の1号道（北から）	7号溝西側（東から）	43号土坑（西から）
PL-27 IV区1～3号道	8号溝西側（西から）	44号土坑（南から）

46号土坑 (南から)	95号土坑 (南から)	160号土坑 (西から)
45号土坑 (南から)	96号土坑 (南から)	161号土坑 (西から)
47号土坑 (南から)	97号土坑 (南から)	162号土坑 (西から)
48号土坑 (南西から)	98号土坑 (南から)	163号土坑 (西から)
50号土坑 (南から)	96号土坑 (南から)	164号土坑 (西から)
49号土坑 (南から)	97号土坑 (南から)	PL-42 IV区土坑-8
52号土坑 (南から)	99号土坑 (南から)	165号土坑 (西から)
51号土坑 (南から)	100・101号土坑 (南から)	166号土坑 (西から)
53号土坑 (南から)	103号土坑 (南から)	167号土坑 (西から)
52号土坑 (南から)	104号土坑 (南から)	168号土坑 (西から)
54・55・56号土坑 (南から)	PL-40 IV区土坑-6	169号土坑 (西から)
58号土坑 (南から)	105号土坑 (南から)	170号土坑断面 (西から)
59号土坑 (南東から)	106号土坑 (南から)	160・171号土坑 (西から)
60号土坑 (南から)	107号土坑 (南から)	172号土坑 (西から)
61号土坑 (南から)	108号土坑 (南から)	170号土坑 (西から)
PL-38 IV区土坑-4	109号土坑 (南から)	173号土坑 (東から)
62号土坑 (南から)	110号土坑 (南から)	174号土坑 (西から)
63号土坑 (西から)	112号土坑 (南から)	175号土坑 (北から)
64号土坑 (北から)	116・117号土坑 (南から)	175・176号土坑 (南から)
65・78号土坑 (北から)	120・121号土坑 (南から)	178・179号土坑 (南から)
66号土坑 (南から)	122号土坑 (南から)	177号土坑 (南から)
67号土坑 (南から)	124号土坑 (南から)	180号土坑 (西から)
68号土坑 (南から)	128号土坑 (南から)	181号土坑 (南から)
69号土坑 (東から)	137号土坑 (南から)	PL-43 IV区土坑-9
70号土坑 (東から)	127・144号土坑 (南から)	182号土坑調査状況 (西から)
71号土坑 (南から)	127・144号土坑 (南から)	183号土坑 (西から)
72号土坑 (南から)	131・132号土坑 (南から)	184号土坑 (東から)
74号土坑 (東から)	146号土坑内碟 (南から)	182号土坑 (北から)
76・77号土坑 (南から)	146号土坑 (南から)	185号土坑 (西から)
79号土坑 (南から)	PL-41 IV区土坑-7	186号土坑 (東から)
80号土坑 (南から)	138・139号土坑 (南から)	187号土坑 (東から)
81号土坑 (東から)	147号土坑 (南から)	188号土坑断面 (南から)
82号土坑 (東から)	148号土坑表面 (南から)	188号土坑 (東から)
83号土坑 (東から)	149号土坑 (北から)	189号土坑 (東から)
PL-39 IV区土坑-5	150号土坑 (南から)	190号土坑 (東から)
87号土坑 (西から)	148号土坑 (北から)	191号土坑 (東から)
88号土坑 (東から)	151号土坑 (南から)	192号土坑 (東から)
89号土坑 (東から)	152号土坑 (南から)	193号土坑 (東から)
90号土坑 (東から)	153号土坑 (南から)	194号土坑 (東から)
91号土坑 (南東から)	154号土坑 (西から)	195号土坑 (東から)
92号土坑 (南東から)	155号土坑 (東から)	196号土坑 (北から)
93号土坑 (東から)	156号土坑 (南から)	197号土坑 (東から)
94号土坑 (北から)	158・159号土坑 (東から)	PL-44 IV区土坑-10

198号土坑 (西から)	1号墓坑人骨確認状態 (上方が南)	3号溝 (東から)
199号土坑 (西から)	1号墓坑人骨確認状態 (東から)	4号溝
200号土坑 (東から)	古銭出土状態	5・6号溝 (北西から)
198号土坑断面 (西から)	1号墓坑下面人骨出土状態	5～7号溝
201号土坑 (東から)	1号墓坑下面人骨出土状態	5号溝C断面
202号土坑 (東から)	1号墓坑掘り方	PL-54 1～3号掘立柱建物
203号土坑 (西から)	PL-47 IV区1号住居	1号掘立柱建物 (南から)
204号土坑 (南から)	全景 (西から)	1号掘立柱建物 P2
205号土坑 (西から)	遺物出土状態全景 (西から)	1号掘立柱建物 P4
206号土坑 (南から)	カマド (西から)	2号掘立柱建物 (南から)
207号土坑 (西から)	カマド前遺物出土状態 (北から)	2号掘立柱建物 P1
209号土坑 (南から)	掘り方 (西から)	2号掘立柱建物 P3
210号土坑 (東から)	PL-48 IV区2号住居	3号掘立柱建物 (南から)
211号土坑 (南から)	全景 (西から)	3号掘立柱建物 P1
212号土坑 (南から)	断面と出土遺物 (南から)	3号掘立柱建物 P6
213号土坑 (南から)	掘り方 (西から)	PL-55 4～6号掘立柱建物
214号土坑 (北から)	カマド (西から)	4号掘立柱建物 (西から)
215号土坑 (東から)	カマド掘り方 (西から)	4号掘立柱建物 P1
PL-45 IV区土坑-11	PL-49	4号掘立柱建物 P6
216号土坑 (東から)	IV区住居出土遺物	5号掘立柱建物 (西から)
217号土坑 (東から)	PL-50 V区畑1	5号掘立柱建物 P3
218号土坑 (南から)	2～4号畑 (西から)	5号掘立柱建物 P4
219号土坑 (南から)	1・2号畑 (西から)	6号掘立柱建物 (東から)
220号土坑 (南から)	2～4号畑 (東から)	6号掘立柱建物 P3
221号土坑 (南から)	5・6号畑 (東から)	6号掘立柱建物 P6
222号土坑 (南から)	4号畑西境 (南から)	PL-56 V区土坑-1
223号土坑 (南から)	PL-51 V区畑2	1号土坑 (東から)
224号土坑 (南から)	7・8号畑 (南から)	2号土坑 (東から)
225号土坑 (南から)	6号畑 (西から)	3号土坑 (東から)
226号土坑 (北から)	6・7号畑 (南から)	4号土坑 (東から)
224号土坑 (北から)	5・12号畑境 (東から)	5号土坑 (東から)
227号土坑 (北から)	8・10号畑 (南から)	6・7号土坑 (東から)
228号土坑 (南から)	PL-52 V区畑3	8号土坑 (東から)
229号土坑 (北から)	10・11号畑 (上が西方)	9号土坑 (西から)
230号土坑 (北から)	10号畑周辺 (南から)	11・15号土坑 (南から)
231号土坑 (東から)	8号畑 (西から)	10号土坑 (東から)
232号土坑 (南から)	10号畑 (東から)	12号土坑 (西から)
PL-46 IV区土坑-12・1号墓坑	13号畑 (西から)	13号土坑 (東から)
233号土坑 (北から)	14号畑 (西から)	14号土坑 (西から)
234号土坑 (北から)	11号畑円形平坦面 (東から)	11号土坑断面 (西から)
235号土坑 (北から)	PL-53 V区1面溝	16号土坑 (西から)
233号土坑断面 (西から)	1号溝	17号土坑 (西から)
235号土坑断面 (東から)	1号溝西隅と道	

PL-57 V区土坑-2	39号土坑（北から）	3号住居カマド
18号土坑（西から）	37号土坑（北から）	PL-61 V区4号住居
19号土坑（西から）	36号土坑断面（西から）	全景（南から）
20号土坑（東から）	39号土坑断面（西から）	炭化材
21号土坑（南から）	38号土坑（東から）	炭化材
22号土坑（南から）	40号土坑（東から）	カマド確認状態
23号土坑（南から）	41号土坑（西から）	カマド
24号土坑（南から）	42号土坑（西から）	PL-62 V区5号住居
25号土坑（南から）	43号土坑（西から）	全景（西から）
26号土坑（東から）	46号土坑（西から）	炭化材・遺物出土状態
27号土坑（東から）	44号土坑（南西から）	遺物出土状態
28号土坑（東から）	45号土坑（北から）	カマド
29号土坑（南から）	PL-59 V区1号住居	カマド基部
31号土坑（西から）	全景（西から）	PL-63
30号土坑（北から）	カマド（西から）	V区1号住居出土遺物
32号土坑（南から）	カマド構築材	PL-64
31号土坑断面（南から）	遺物出土状態（西から）	V区1・2号住居出土遺物
32号土坑断面（北から）	カマド脇遺物	PL-65
PL-58 V区土坑-3	PL-60 V区2・3号住居	V区3～5号住居出土遺物
33号土坑（南から）	2号住居（右）3号住居（左）全景（西から）	PL-66
34号土坑（南から）	2号住居全景	V区遺構外遺物
35号土坑（南から）	2号住居掘り方	
36号土坑（北から）	3号住居全景	

# 第1章 調査の経緯と方法

## 1 調査に至る経緯

吾妻川は群馬・長野県境の鳥居峠付近を水源として東流し、渋川市で利根川に合流する総延長76.2<sup>キロ</sup>の一級河川である。

八ツ場ダムは吾妻川の中ほど、吾妻溪谷の西隅にあたる入口部に建設が予定される総貯水量1075億<sup>立方メートル</sup>の重力式コンクリートダムである。この建設計画は、「昭和24年利根川改修改定計画」の一環として、昭和27年の調査着手を経て、平成4年「八ツ場ダム建設事業に係わる基本協定書」等の締結を経て本格着工された。ダムサイトおよび水没地域は群馬県吾妻郡長野原町にあたるが、下流の吾妻郡東吾妻町内にもダム建設に関連する工事が予定された。

これらの建設工事に係わる埋蔵文化財の調査については、平成6年3月18日に当時の建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で「八ツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に

関する協定書」が締結された。この協定を踏まえ平成6年4月1日に建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受委託契約が締結され、同日付けでさらに群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査受委託契約が締結された。これにより八ツ場ダム建設に係わる埋蔵文化財の発掘調査が開始されることとなった。

その後、平成11年4月1日付けで建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長および財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で「八ツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書の一部を変更する協定書（第1回変更）」が締結され、受託者が群馬県教育委員会教育長から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長に変更になった。平成17年4月1日には第2回変更が締結され現時に至っている。

上郷岡原遺跡はダムサイト予定地点から約2.5<sup>キロ</sup>下流の吾妻川右岸の吾妻郡東吾妻町（東村と吾妻町が合併する平成18年までは同郡吾妻町）三島に位置



第1図 上郷岡原遺跡 位置図（1：100,000） [国土地理院 1：50,000地形図、草津・中之条を縮小して使用]

## 第1章 調査の経緯と方法

し、東西長約670m、南北幅最大約150mの広大な範囲がある。ここに八ツ場ダム建設工事に付帯する三島造成工事が実施されることとなった。そのため平成12年度に群馬県教育委員会文化財保護課（当時）による試掘調査が行われ、縄文時代から江戸時代にかけての遺跡の存在が明らかとなった。平成13年度より財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団により遺跡西隅にあたるV区南側で発掘調査を開始したのを皮切りに、平成19年度まで断続的に調査が実施されていった。

## 2 調査の方法

（方法） 上郷岡原遺跡は北東方向へ流れていた吾妻川が直角に近い屈曲をして南東方向へ流れを変える吾妻渓谷出口部分の下位段丘に位置している。吾妻側右岸にあたる遺跡地周辺は、天明三年（1783）の泥流が最大で4mを超える厚さで堆積していた。発掘調査はこの天明泥流直下を第1面とすることとした。泥流下の遺構にはヤックラと呼ばれる最大1m近い高さの積石があり、試掘によって得られた泥流の層厚を1m残して大型重機で掘削し、残りの泥流を重機によって丁寧に剥がしながら泥流面直下の地山を探る手順を採用した。第1面には泥流直前に降下した浅間山を給源とするテフラ（As-A）が堆積する部分も多く、このテフラが鋤き込まれた部分もあり、厳密には数次の遺構面となっている。

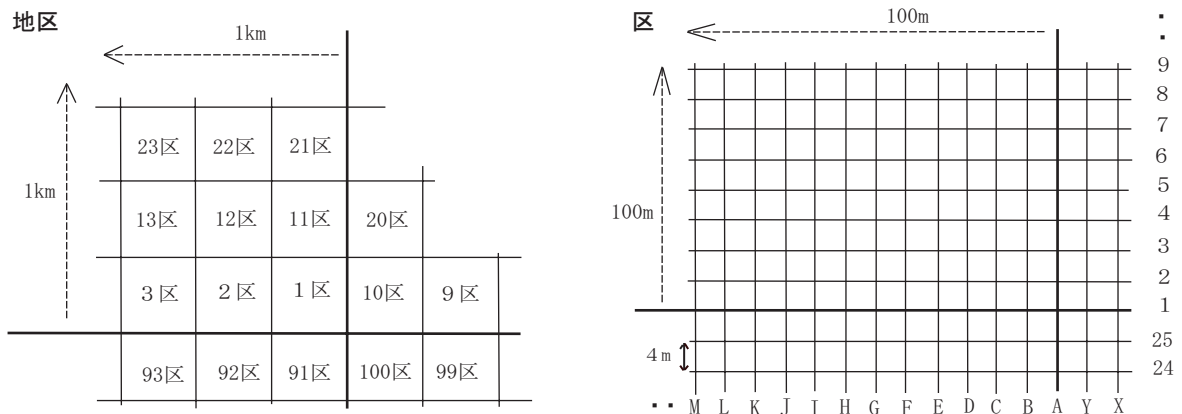
第1面は遺構の有無に関わらず全面を広げ、泥流直下の記録を残した。第1面の調査終了後、トレンチ調査によって下面の遺構・遺物の状況を把握しながら、最大4面の調査を行った。中世から近世に該当する第2面、古代に該当する第3面、縄文時代に該当する第4面が主な調査面であるが、1面から4面までの厚さは30cm未満から2m以上とまちまちで、調査できた面数も一様ではなかった。掘り下げにあたっては層厚と遺物量から判断して一部で重機を使用した。

旧石器試掘トレンチを随所に設定したが、基盤層と考えた面は南側から崩落した礫混じりのローム状土層で、1次堆積と分かる確実なローム層自体が確認できていない。

調査は用地確保の問題と工事工程との係わりのなかで、連続した調査地点を確保できなかったことが多かった。湧水が激しい地域であったため排水溝を設けたり、調査終了箇所が残土置き場となったため安全対策上、土盛り直下の調査ができなかった地点もあった。調査地点と調査地点の間に空白部分が生じた地点を多出させてしまった。

発掘調査は八ツ場ダム地域の調査原則に沿って、凍結のきつい1月から3月の期間を除いて実施した。

遺構測量については、遺構の種類に合わせて測量委託業者によるデジタル平板測量とラジコンヘリによる空中写真測量を行った。断面記録に関しても委



第2図 区・グリッド設定模式図

託によりデジタル処理を行ったが、一部で発掘調査班によるアナログ測量も混じっている。遺構写真については現場担当者がモノクロフィルムとカラーズライドフィルムによって撮影したが、平成18年度よりはデジタルカメラとモノクロ中版カメラ併用の撮影に切り替わった。

(調査区の設定) 平成6年から開始された八ツ場ダム建設に伴う発掘調査では、遺跡の名称や略号の付け方およびグリッドの設定方法について「八ツ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」を関連町村と協議のうえ定めて対応した。本遺跡の調査についてもこの方法に準拠したもので、以下にその要約を掲載する(第2図参照)。

① 発掘調査対象地には国家座標(2002年改訂以前の日本測地系)を基としたグリッドを設定した。

座標値 $X = +58000.0$ 、 $Y = -97000.0$ を原点として、発掘調査範囲を覆う60箇所の1km方眼区画を設定し地区と呼称した。本遺跡は東側が51地区、西側が52地区にかかっている。

次にこの地区を100m方眼による区に分割した。区は地区の南東隅を1区と呼び、東から西へ向かって10区まで連続して呼称した。1区の北側を11区として西隅へ20区まで続く。地区と定めた範囲の北西隅が100区となるよう規則的な区を設定した。

この区をさらに4m方眼に分割し、これをグリッドとした。グリッドには南から北へ1から25の数字を充て、東から西へAからYまでの25のアルファベットで呼称することとした。グリッドは4m方眼の交点を指し、併せて交点北西側4m×4mの面部分を指す2つの意味を有している。

② 八ツ場ダム関連の遺跡には先ずYD番号(八ツ場ダムの略)を設定した。長野原町に該当する5地区に続き、東吾妻町三島地区はYD6と呼んだ。この地区の2番目の遺跡ということで上郷岡原遺跡にはYD06-02という遺跡番号が与えられた。

③ 本遺跡では①の区名称のほかに、便宜的な調査年度ごとの地点名称が付けられた部分があった。整

理作業を通じて『上郷岡原遺跡(1)』で新たな区名称の設定が行われたので、本書でもこれを引き継いだ呼称を行っている。調査段階での区の呼称については第5図(本文8頁)に記した。

### 3 調査日誌抄

平成13年度(2001年度)

調査区西側(V区)の調査

6月まで上郷B遺跡(文献3)の調査

7/5 重機による掘削開始

7/13 作業員による掘削開始 31・32区の泥流下畑(1～8号畑)の調査

7/24 畑平面測量開始

7/27 31・32区畑の空中写真撮影

8/1 東側より重機によるⅢ層掘削開始

8/13 32区1号住居確認

8/28 31区で4基の土坑確認

9/16 1回目の地元向け現地説明会開催

10/4 As-A下畑の空中写真撮影

10/22 空中写真撮影 32区2・3号住居確認

10/30 調査終了・埋め戻し作業へ

平成14年度(2002年度)

調査区東側(I～Ⅲ区)の調査

『上郷岡原遺跡(1)』で報告済み(文献1)

平成15年度(2003年度)

調査区西側(V区)の調査。上郷A遺跡(文献2)と並行して調査を行った。

4/22 重機による表土剥ぎ開始

6/4 As-A下畑の空撮

6/9 第2・3面の掘削開始

6/30 上郷A遺跡の調査終了

7/11 竪穴住居2軒(4・5住)の調査終了

7/25 2・3面の空撮 4面(縄文面)の調査へ

8/27 調査終了 埋め戻しへ



## 第1章 調査の経緯と方法

平成16年度（2004年度）

14年度調査区周辺のトレンチによる試掘調査のみで、本調査は行われなかった。

平成17年度（2005年度）

調査区中央（Ⅳ区）南側の調査 試行的に年度末の3月にも調査を実施

10/23 天明泥流を1m残しで、表土上面の掘削開始

11/8 表土下面の掘削開始（天明泥流下の検出）

11/11 畑面およびヤックラ等の関連施設の調査開始

11/18 平面測量開始

11/29 全景空撮

11/30 泥流下面のトレンチ調査開始

12/6 重機による泥流下面トレンチ掘削開始

12/19 南側拡張トレンチ高所作業車による撮影

12/20 埋め戻し

3/2 平成18年度調査地点の先行調査。排水溝設置など準備作業より着手

3/6 重機による掘削開始

3/14 作業員による泥流下面の精査開始

3/23 養生等行い年度の作業終了

平成18年度（2006年度）

調査区中央（Ⅳ区）・西側（Ⅴ区）の調査

4/10 重機による掘削、および先発メンバーによる作業準備開始

4/19 泥流で押し流された小屋壁を確認

5/14 3回目の地元向け現地説明会開催。158名。その後も見学者多い。

5/16 NHK取材。翌日、テレビニュースで放送。

5/25 2号壁材一部を保存のための処置開始

6/19 1区調査終了

7/7 2区調査終了

7/19 集中豪雨のため、廃土置き場の一部崩落。

9/1 担当交代（麻生→滝川）

9/2 5区の空撮

9/21 6区の作業終了。7・8区掘削準備。

10/12 5区作業終了。

11/16 5'区調査終了

12/20 8区より平安時代住居確認

12/25 9・10区作業終了

12/27 平安住居2軒を調査し、年度の作業終了

北東隅地点は埋め戻しを行わず、翌年度の下面調査に引き継いだ

## 4 整理作業の経過

2006（平成18）年度まで、ハツ場ダムに関わる遺跡の整理作業は長野原町のハツ場ダム調査事務所で行ってきた。2007年度の整理班増班に伴い、本遺跡は渋川市北橘町にある本部分室で並行して整理作業を進めることとなった。

調査区および遺構名称や番号については調査の際に年度ごとに付けられ、統一は図られていなかった。『上郷岡原遺跡（1）』の整理作業にあたっては平成14年度調査時の遺構名称について新規の名称・番号につけ直し作業を行っている。本書も基本的にこれに沿って調査区名称等を変更したが、調査時の遺構名称・番号を可能であれば残す立場から、一部で規則性を欠いたり、欠番を生じた部分もある。

発掘調査での写真撮影は2006年度より主にデジタルカメラに切り替えたため、それ以前のアナログとデジタルの各データが混在した。このため遺構写真図版に関してはアナログデータもデジタルに統一して編集した。

遺構測量委託図に関しては2005年度まではCADデータで納品されていたものを2006年度以降EPSデータとなった。このEPSで納品されたデータを中心に整理班でデジタル図版を作成し、それ以前のデータをアナログ図版として併用する変則的な編集作業を行った。

遺物に関しては水洗・注記まで調査時に終了させてあった。整理班では接合復元を行った後、実測作業には手実測のほか、スリースペース測図、写真実測などを併用し、図版は全てアナログ版下とした。写真撮影はデジタルカメラで行い、デジタル図版を作成して遺構写真に準拠させた。

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 1 周辺の地形と地質

上郷岡原遺跡は吾妻郡東吾妻町三島字上郷に所在する。遺跡名となった岡原は小字上郷の中の現在の集落周辺（主に上位段丘上）を指して呼ばれるようだが、その範囲は明瞭ではない。

遺跡は北西方向へ流れる吾妻川が険峻な吾妻溪谷を脱し、南東方向へ直角に近い屈曲を始める内側地点、川の右岸にある。遺跡南に地元で天狗山と呼ばれる898mの山がそびえ、山裾部分を迂回するように川が屈曲している。ここから河岸段丘が現れ、遺跡付近は上下二段の段丘となり、調査地点のほとんどは下位段丘に位置する。ここは層厚最大4mを超える天明三(1783)年の泥流に覆われていたが、調査の対象となった泥流下の様相は次のとおりである。

段丘面はローム層に相当する基盤層と、礫やパミスの混入の多い黒ボク土に近い黒色土で覆われている。下位段丘部分の基盤層内には長野原町の調査で確認されること多い応桑泥流層（浅間山の火山活動を起源とする大規模な山体崩落層：2.1万年前）や浅間草津黄色軽石層（As-YPk：1.3万年～1.4万年前）の堆積が明瞭には確認できない。天狗山の山体に相当すると思われる巨礫（安山岩）が露出する部分もあり、古代以降の段丘上堆積物は比較的浅いようだ。

黒色土内には部分的に浅間山を給源とする粕川テフラ層（As-Kk：1128年）が確認できるが、遺構と直接結びつくものはなかった。

天明三年の泥流下に相当する調査第1面の標高は西隅V区で479m、東隅I区畑で471m前後であった。遺跡北側は吾妻川へ落ちる高さ25m前後の崖となっている。遺跡南側の上位段丘は天狗山へ駆け上がる急峻な斜面へと繋がっている。この上位段丘面にはV区一部を除いて泥流は押し寄せていない。

天狗山を源とする湧水は段丘面に小規模な解析谷をつくっている。上郷岡原遺跡II区にはこの狭い谷

部分に平安時代の水田が作られていた。また谷地形の周囲に縄文時代や平安時代の集落が存在し、江戸時代の居住域となっていた。

調査前の遺跡地は果樹園や畑地および畜舎で、吾妻川縁のみ雑木およびスギの林となっていた。

### 2 周辺の遺跡

本遺跡のある東吾妻町西隅の吾妻川流域周辺にあたる三島地区・松谷地区は、山地地帯が広く発掘調査の少ない地域であった。また、河岸段丘のある平坦地は天明三年の泥流で厚く覆われている。遺物採取も極めて難しく、現在でも遺跡存在の不明瞭な地域である。以下に記す遺跡のうち、第3図に示せたのはわずかで、大半はさらに東側に吾妻川下流域に展開している。

吾妻川上流方向は吾妻溪谷の険峻な地形となる。溪谷の終わる長野原町まで、岩陰など存在する遺跡の種類は限られたものとなる。

**旧石器時代** これまでに発見例は1例もない。

**縄文時代** 本遺跡では縄文時代前期・後期の遺構・遺物が多数調査されている。この時期の遺構が調査された郷原遺跡は、本遺跡東側へ約6km離れている。本遺跡東側4.5km付近にある郷堀遺跡や上反遺跡などでもこの時期の遺物包含層が確認されている。

本遺跡に隣接する上郷A・上郷B遺跡でも該期の遺構・遺物が調査されており、吾妻川沿い両岸は、点在する湧水を抛り所とした縄文時代の遺跡が存在するはずである。

**弥生時代** 集落の存在は明瞭ではない。再葬墓等の縄文時代晩期から弥生時代中期の遺跡や、遺物採取地点が点在している。

**古墳時代** 四戸古墳群や生原遺跡などの古墳群が存在するのは本遺跡から5.5km下流の吾妻川右岸であるが、周辺は南西方向から流下する温川と吾妻川の合流点にあたり、温川沿いの古墳群と考えるべき遺跡かもしれない。

この地点より吾妻川上流域には本遺跡より3km



第3図 上郷岡原遺跡 周辺遺跡位置図 (1:25,000) [国土地理院 1:25,000地形図、長野原・群馬原町を使用]

東側の左岸に竪穴式石室を持つ机古墳が唯一存在している。この古墳の南側、下位段丘面の前畑遺跡では古墳時代の集落が調査されている。机古墳の西側でJR吾妻線岩島駅の周辺と前畑遺跡のある南側にかけては現在付近で最も水田の広がる地点である。  
 奈良・平安時代 縄文時代以降集落の途切れる本遺跡に、9世紀代になると再び集落の存在が明らかになる。この傾向は吾妻川上流の長野原町における八ッ場ダム関連の調査でも明確になりつつある。

本遺跡の集落は2地点に別れているが、いずれも狭い谷地形に隣接した小規模な集落である。上位段丘上の遺跡の様相が不明瞭ではあるが、水田耕作を主な生業とする大集落の存在は難しそうである。

吾妻川下流の奈良・平安時代集落調査例は、前述の前畑遺跡まで離れている。

中世 戦国時代の城館跡群が吾妻川左岸を主体に展開している。軍事用の路線が吾妻川溪谷を抜けることは考えにくく、松谷付近から雁沢川沿いに迂回したルートが存在が推定されよう。本遺跡周辺は山越

えルートの出口に面したとはいえ、吾妻川と現在25mの高さのある両崖に隔てられている。砦などの軍事施設とは離れた地点と推測するが、それら施設を支えた生産域として立地した可能性を考慮し、本遺跡の建物などの遺構を検討する必要がある。

近世 天明三年の泥流下から、極めて詳細な当時の様相が明らかになりつつある。本遺跡周辺に限っても吾妻川下流の三島大島遺跡や吾妻川対岸の松屋前田遺跡等の試掘調査で、泥流下の家屋や畑の存在が明らかになっている。

- 1 上郷岡原遺跡
- 2 上郷A遺跡 (文献2)
- 3 上郷B遺跡 (文献3)
- 4 松谷前田遺跡
- 5 雁ヶ沢城
- 6 三島大島遺跡

# 第3章 調査の方法

## 1 遺跡の基本土層

調査区域のほとんどは下位段丘面にあたり、最大で厚さ4mの天明三年泥流に覆われている。泥流が確認されないのは平成19年度調査のIV区堂宇跡付近など、上位段丘面上の調査地点およびV区南端の上位段丘面に向かう斜面上など僅かである。

調査の対象となった天明三年泥流下から縄文時代までの土層は、地点は離れていてもおおそ同じ傾向を示している。そこで40区と42区の2地点での土層観察所見を元に、以下のように基本土層を設定しローマ数字で表した。4章以下の遺構挿図中で使用する土層説明の中で、個別遺構の説明で記載する算用数字とは区別して用いた。

40区C-24グリッド (IV区)

- I 現耕作土・表土
- II 天明三年の泥流堆積物

III As-A軽石層。最大厚10<sup>cm</sup>。粒径1<sup>cm</sup>前後で均質。最下部に火山灰が見られる部分あり。

IV 黒10YR3/2 泥流下の旧耕作土・旧表土。ややしまり欠く弱粘性土。

V 灰黄褐10YR4/2 やや明るく見える弱粘性土層。風化岩片や不揃いの軽石が混じる。上部に鉄分凝集部分 (V') が顕著。

VI 黒褐10YR3/2 均質な埴壤土。ややしまり欠く。炭化物粒を含む。古代～中世の包含層

VII 黒褐10YR3/1 不揃いの軽石が不均等に混じる黒ボク質土。層厚に著しい差があり、上位段丘寄りで2m近い部分がある反面、北隅吾妻川寄りでほとんど見られない地点もある。ローム粒・細礫等の雑多な混入物やや多い。縄文時代の包含層。

VIII にぶい黄褐10YR5/4 ローム漸移層。

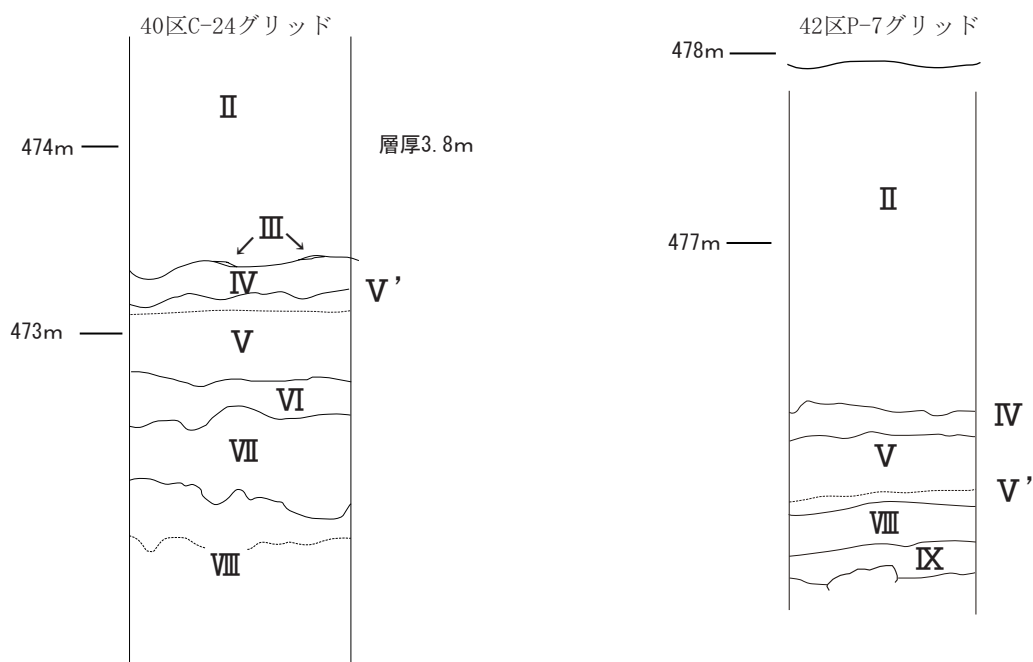
IX 黄褐10YR7/8 しまりあるローム状土。軽石・細礫等を不均等に含む。

42区P-7グリッド (V区)

(前記IV区土層と内容の重複する部分は省略した)

V 黄褐10YR5/4 鉄分凝集層 (V') が下方に形成されている。

IX 黄褐2.5Y5/4 礫混じり層となっている。二次堆積ロームか。



第4図 遺跡の基本土層

## 2 遺構調査の概要と呼称の変更

### ① 調査区と呼称

発掘調査は2001（平成13）年から2007（平成19）年まで断続的に続けられたため、調査区と呼称は統一されていない部分があった。『上郷岡原遺跡（1）』で東側から調査された3箇所ブロックをⅠからⅢ区と名称を付け替えたので、本書もこれを踏まえ中央部分をⅣ区、工事中道路を挟んで西側をⅤ区とした。Ⅳ区とⅤ区の境に上位段丘面が北側へ向かって突き出た部分があり、地形的にも妥当な区分けと考えた。

Ⅳ区は平成17年から19年度に調査した範囲で、17年度調査部分を17区、18年度以降の調査部分を18区と呼んでいた。18区と呼んだ部分は調査着手の順にさらに1から10の枝番号を付け、18-1区・18-5区のように呼称していたが、新Ⅳ区にはⅤ区に含めた18-6区以外が含まれる。

Ⅴ区は平成13・15・19年度の調査部分が主体である。平成13・15年度の調査は100m方眼で分けた区呼称を使用していた。32区を中心に31・33・42区などが該当する。

### ② 調査面と呼称

これも、『上郷岡原遺跡（1）』に準拠して統一した。

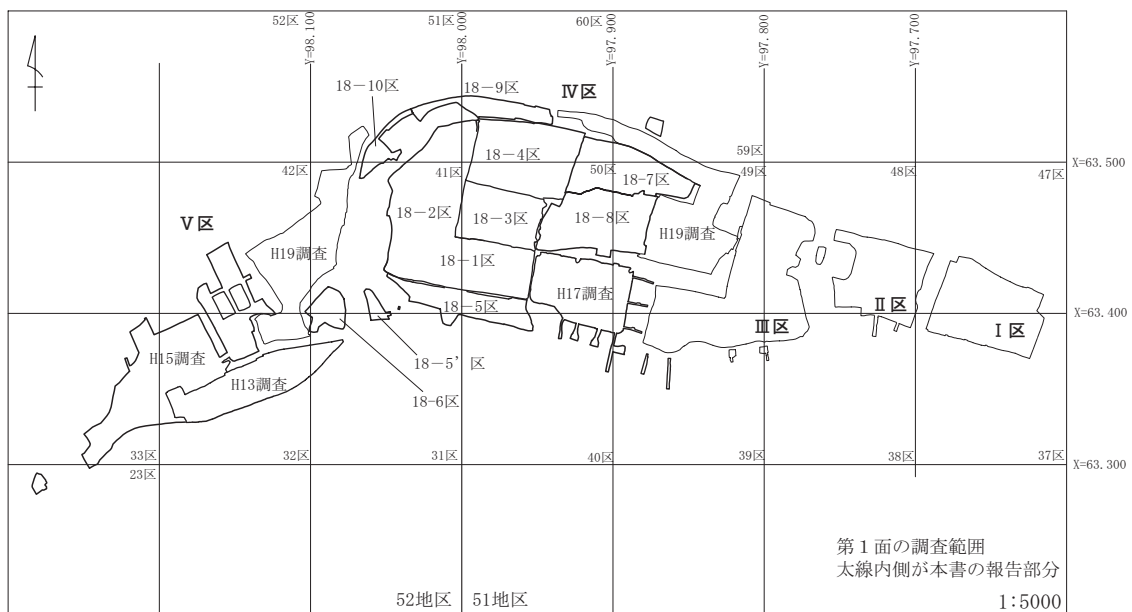
#### ・第1面の調査

上郷岡原遺跡では最大4mを超える厚さの天明三年泥流に覆われている。この直下およびAs-A軽石下の面を第1面とした。

泥流が押し寄せたのは天明三（1783）年の新暦8月5日であるが、この年の浅間山は春から盛んに軽石を降下させていたことが知られている。泥流が押し寄せた日と軽石直下の遺構面では最大数ヶ月の時間差があり、さらに軽石が鋤き込まれている部分も調査されている。すべてを第1面として括ることは厳密ではないが、泥流直下を基本的に第1面と呼び、軽石下の遺構もここで扱い、調査面の相違がある場合は本分中に記載した。

#### ・第2・3面の調査

第1面以下の調査面を第2面から第4面まで3つの面に分けたが、共通する明確な鍵層はなく、区別は曖昧な部分がある。層相は必ずしも全体に共通していないが、一部に粕川テフラ（As-Kk）の堆積が認められる地点があり、この上を第2面とした。



第5図 調査区設定図

第2面は中世から天明三年以前の江戸時代を含んだ調査面となる。大部分の土坑と掘立柱建物がこの面の成果である。粕川テフラ下の黒色土（基本土層の第Ⅵ層下半）に相当する部分を第3面とした。平安時代の竪穴住居が主な遺構で、陥穴状の土坑もこの時期にあたるようだ。

#### ・第4面の調査

ローム状土上の調査で確認された縄文時代の遺構をこの面の成果としたが、上面で確認しきれなかった遺構も多く含まれている。明らかに縄文時代の遺構でないものはこの面の成果から除外し第2・3面に含めた。本書では4面の遺構・遺物は扱わない。

### ③ 遺構の呼称

#### 1 天明三年泥流下畑

区画の概念 2001年度から始まった上郷岡原遺跡の調査では、天明三年泥流下の畑は毎年調査されてきた対象である。畑やそれに伴う平坦面の呼び方には統一が図られていなかった。『上郷岡原遺跡（1）』では2004年度調査の畑を3つの調査区に分け、各区に1から番号を付け直した。この畑の単位は下に述べる中区画にあたる。本報告ではこの調査区の呼び方を踏襲した。ただし個別の畑の呼称には2005年度以降に調査段階で使用した下記のような大-中区画を用いた呼称を用いるため、統一を図っていない。

**大区画** 畑を囲う四周を明瞭な境で区切られた最大区画。主に道路によって区切られているが、溝・境木・積石遺構（ヤックラ）・段差等を境とする場合もある。

**中区画** 前記大区画を、多くの場合南北に細長い短冊状に区切った区画。中区画同士の境界は不明瞭ながら踏み分け道や畝サクの切れ目などで区切られている。サクの方向や規模の違いで区別できる区画（小区画と同一の場合も想定される）もこれに含める。

**小区画** 最小区画として『単位畑』の呼称が提唱された区画（註1）。円形平坦面によって存在が想

定される。単位畑間の境界は区別できず、畑の呼称には用いていない。サク方向のわずかな相違で検討できる場合もあろう。

註1 文献4 『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁遺跡』  
p366～p472

#### 2 積石遺構

近世の集石遺構に対し、「ヤックラ」という呼称が用いられていた。石を畑の縁に積み集めた施設で群馬県北西部から長野県北部付近で用いられるようだが近年はこの名称もあまり使われていない。「ヤックラ」のある部分を耕作を放棄した地点とすると、集石土坑のように上面は畑とした施設は「ヤックラ」と呼ぶにはふさわしくなさそうである。調査時に使用したが検討が加えられていない民俗用語なので本書ではそのまま使わず、積み上げられた集石を積石遺構（ヤックラ）、土坑内に廃棄して地表面では見えない集石を集石土坑と呼んだ。集石土坑は土坑の項で扱っている。

#### 3 道・溝・境木

畑脇に廻る施設として、道・溝・境木がある。これらの施設が単独で確認される場合にはこの分類に沿って扱った。多くの場合はこれらが複合的に確認されているが、最も広範囲で確認できた中心的な遺構の項目に併せて扱ったので、道・溝の順で記載が偏っている。各遺構は区ごとに番号を付け直した。調査面が異なる場合でも上面から順に通し番号としてある。

#### 4 土坑

土坑埋没土の説明には、共通化できる部分に以下のようなローマ数字・アルファベットを用いた共通記号を使用して表した。この部分の各土層について説明を省いている。共通化できない個別の説明については、算用数字を用いて表し、遺構ごとに説明を加えた。

### 第3章 調査の方法

→ローマ数字 標準土層に準拠した土層 これは土坑以外の遺構にも用いている。

Ⅳ 天明三年泥流下耕作土。土色は黒褐色10YR3/2を基準としている。

Ⅴ 風化岩片や粒径不揃いの軽石混じりの層。灰黄褐色10YR4/2を基準土色としている。

Ⅵ 炭化物等の混じるやや腐食土質の層。古代・中世の包含層中に見える層。黒褐色10YR3/2を基準土色としている。

→アルファベット大文字 土坑のみに使う土層名

- A Ⅵ層か縄文期のⅦ層か区別の付かなかった黒褐色土層
- B Ⅳ層土とローム状土の混土
- C ローム状土もしくはロームブロックを主体とする粘性土層
- D 地山砂質土の混じる黒色土
- E 地山と区別の難しい層

→アルファベット小文字 上記土層に付帯して記す埋没土の特徴。重複する場合もある。

- a As-Aが混入している
- b 砂質土が混入している
- c 炭化物粒が混入している
- d ローム土またはローム状土がブロック状に混入している
- e ローム粒が混入している
- f 小礫（拳大程度）が混入している
- g 大礫（人頭大程度）が混入している
- h きわめてしまり強い
- i きわめてしまり弱い
- j 鉄分凝集が見られる
- k 焼土ブロックが混入している

本遺跡では第2面の土坑として182基の土坑を報告する。Ⅲ区やそこに隣接する2007年度調査区に比較すると数は多くない。

天明三年の泥流面では28～30号土坑の3基を除き痕跡の認められなかった遺構である。明確な時期決定の根拠を持たない施設で、平安時代より新しそうな土で埋没していた。発掘担当者間では観念的に中世遺構として扱っていたが、江戸時代まで存在する可能性のある遺構である。天明泥流面で比較的多く見られた18世紀後半以降の陶磁器破片類の出土がご

く少ないことから、町ゴミとして人糞尿とともに畑に撒かれる以前の17世紀代まで、推定時期を広げる必要があろう。しかし同様に陶磁器片の少ない溝に先出していることを考慮すれば、中世の遺構としたことは的を得た推定と考えたい。

土坑の中に、短軸方向にくらべ、長軸方向が著しく長い、『ヨーカン土坑』などの通称をもつ遺構がある。形状から種芋等の貯蔵穴と考えられている。八ツ場ダム関連の中・近世面の調査で確認されるこの種の土坑には、平野部の土坑と形状に若干異なる特色がある。長辺側はオーバーハングするように鋭く立ち上がるのは一般だが、短辺側は緩やかに立ち上がっている場合が多い。また、地山にある一抱え以上もある巨石に短辺を重ねるように掘り込まれたものも目立つ。これらの礫には掘り込み面より上に見えていたと推定されるものがある。礫にあたって掘り下げを止めたのではなく、礫を目印にして脇から掘り始めたという印象を受けた。

柱穴状の遺構も土坑として扱ったが、数は多くなかった。Ⅳ区南隅4号溝南側に柱列状に並ぶものがあった。18-5'区と呼んだⅣ区南西隅では柱穴状の土坑が多く、建物の復元に留意したが、成果はあげられなかった。

## 第4章 IV区の調査

### 概要

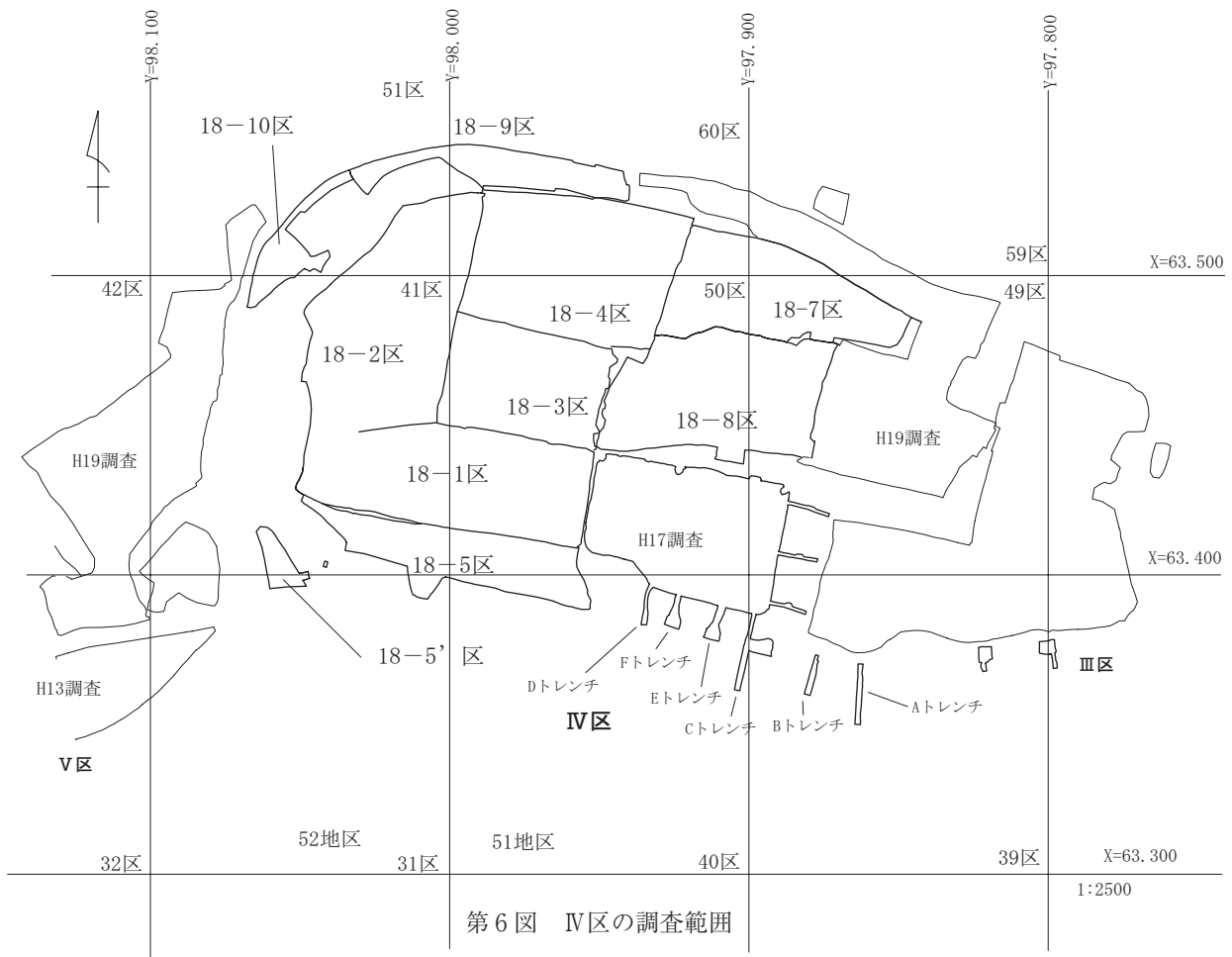
IV区と呼んだのは平成17年から19年に調査した遺跡のほぼ中央、51地区50区を中心に東西約250m、南北約150mの最も広い範囲である。『上郷岡原遺跡(1)』で報告されたI～Ⅲ区の西側にあたる。

IV区は吾妻川が流れの方向を変える地点の右岸・南側に位置し、遺跡内では最も広い下位段丘面となっている。

第1面の天明三年泥流下、第2面の中世から近世面、第3面の古代面、第4面の縄文面でそれぞれ遺構を確認した。本報告では縄文面を除いた平成17・18年調査分を扱う。

### 第1節 第1面の調査

IV区は全面が南西方向から押し寄せた天明三年(1783)の泥流で覆われている。層厚は最大で4mを越えている。調査区の南側は、上位段丘面に向かって緩やかに高くなる斜面であり、泥流は斜面を南東方向へ駆け上がるように遺構面を覆っていた。このため畑を中心に遺構の残存状態が良く、作物や建物壁材などが見つかっている。北側は泥流によって地表面を削られ、遺構の残存状態はきわめて悪い。泥流内の礫が櫛の目のように遺構面を削っていた。それでも道の両側溝と思われる施設や畑境木の痕跡が部分的に確認でき、一面に畑地が広がっていたことが分かる。



第6図 IV区の調査範囲



1 建物および構造物

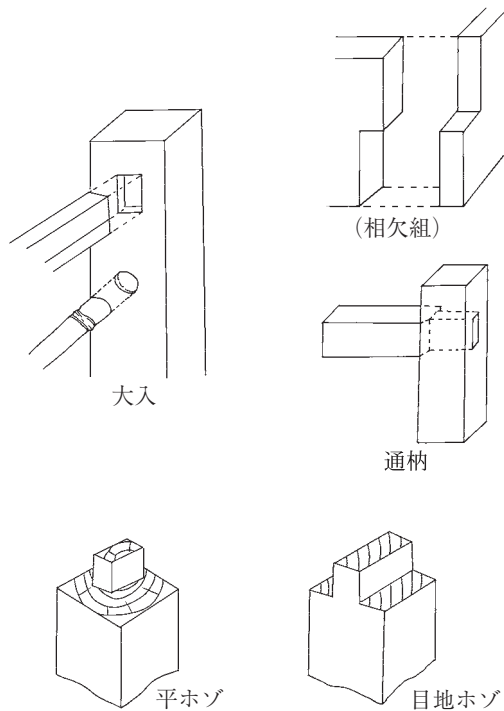
壁

IV区では天明三年（1783）の泥流で押し流されたと思われる建物構造物（壁部分）が2ヶ所出土した。2点の壁は同一建物の壁材であった可能性がある。泥流で押し流された事を考慮すれば破損は激しくなく、出土地点付近に建っていたと考えられる。

遺跡地周辺には、現在でも麻屋（おや）と呼ばれる3間×4間の土台建物を見ることができる。これらは収穫後の麻を乾燥するための収納施設で、本来は壁に麻柄（おがら）を立てて葺いた建物である。

その他にも、壁か屋根か判別できなかった部材の出土がある。麻柄を使っておらず、壁材であれば前述の建物とは異なる建築物の部材であるが、この項で一括して扱った。

建物材の樹種については同定を済ませていないが、柱はクリ材、横板はスギ材と思われる。また、壁材の仕口説明にあたっては、第7図に示した用語を用いている。（文献6より引用）



第7図 模式図

1号壁（PL-2～4）

41区E-7グリッド周辺で調査された遺存状態のきわめて良い構造物(壁)である。付近は収穫前の麻畑で、麻は北西方向から南東方向へ向かってなぎ倒されていた。構造物には隅部分を含む3本の柱が残存していた。3本の横板も一本が完在しているようで、3間分の壁一面が復元できる。

壁はどちらが上方になるか不明である。材1・2はどちらも土台として十分使用できる屈曲のない材である。二つの材を欠かずに段差をもって組んでいることから土台部分とはなりにくいと考えた。特に材1には柱配置と無縁の通しホゾ穴が見られる。建物構造物であれば梁上に立てた扱首東部分のホゾ穴と考えられ、1号壁が梁方向の壁材ということが確認できる（第202図参照）。材2を桁とし、材1の梁の上に組んだと推定した。以下の文中にはこの推定に拠った上下方向および桁・梁の語を用いているが、材1が廃材でホゾ穴も本壁と無縁な可能性もあり、明確なものではない。

柱は太さ12センチ前後（4寸）の角材である。両端に目地ホゾを設けている。ホゾ部分を除いた柱の高さはコーナーにある材3で178cm、最も高い材4で180cmとなる。柱間は芯々距離で125cm前後ある。横板のほか、麻柄を留めるための竹材を大入り状に受ける差し口がみられるが、材3の差し口穴配置より、当壁が建物内側を見せて倒れていることが分かる。

横板は幅12cm前後、厚さ2.5cm前後で、残存する範囲では継ぎのない板材である。長さは370cm分を確認できる。

竹材は横板で区切られた3箇所を用いられており、麻柄を挟んでいる。建物内側では割らずに2本の柱材の間に差し渡してあるが、外側では半裁状の割り竹を、割れ口を内側にして使用していた。紐留めが残存する箇所もあった。

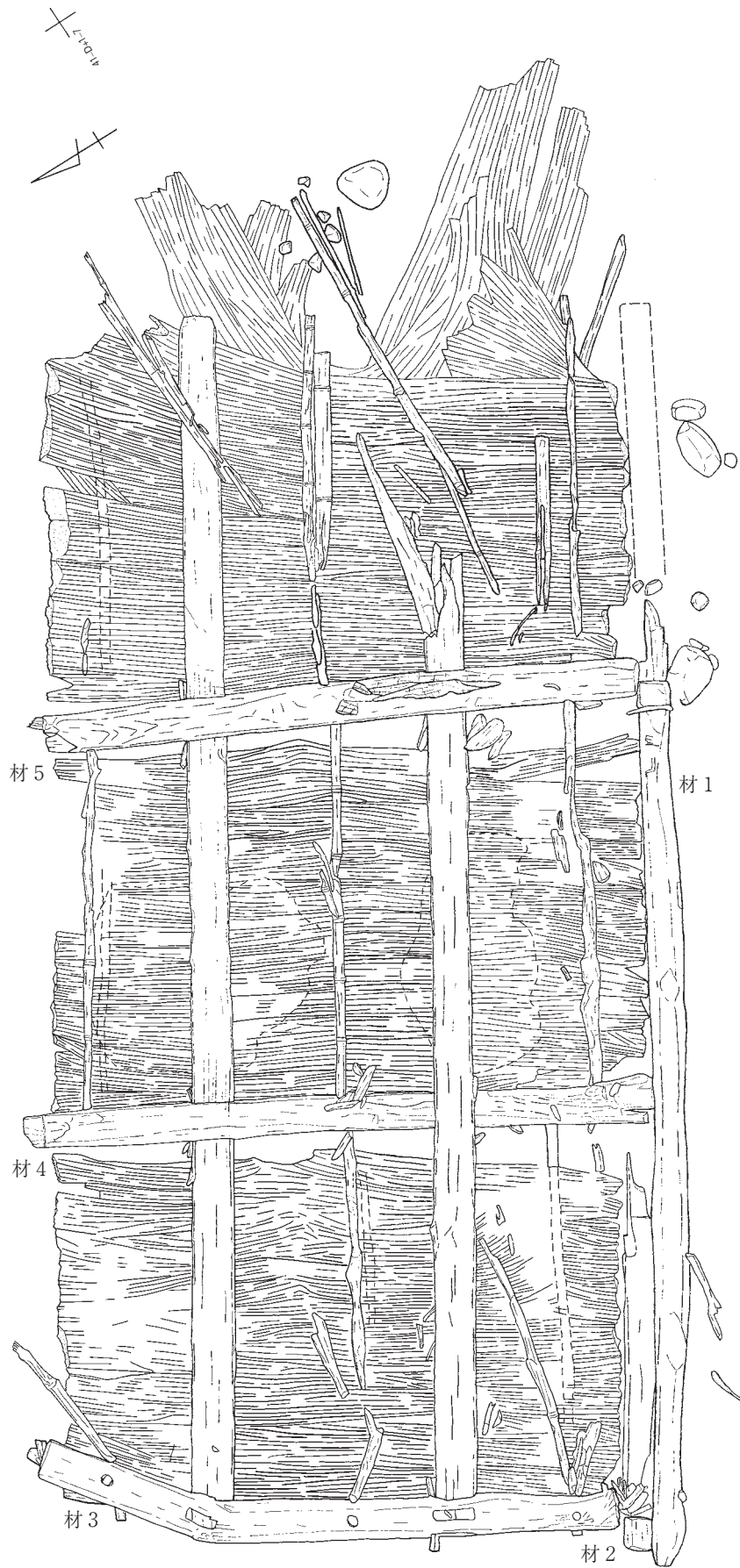
2枚の横板は柱に貫き通しになっている。ホゾの隙間には下側を中心に楔が打たれている。欠損のない下部分横板（材6）は長さ366cmで、建物一辺の

第1節 第1面の調査

規模を復元できる。横板仕口は建物隅の柱（材3）ホゾ穴内で第7図（相欠組）のように組まれていた。残存部分を先に据え、欠損した横板を後から差し込んだことが分かる。この点からは、残存部分は桁方向と考えるべきで先の推定とは矛盾する。

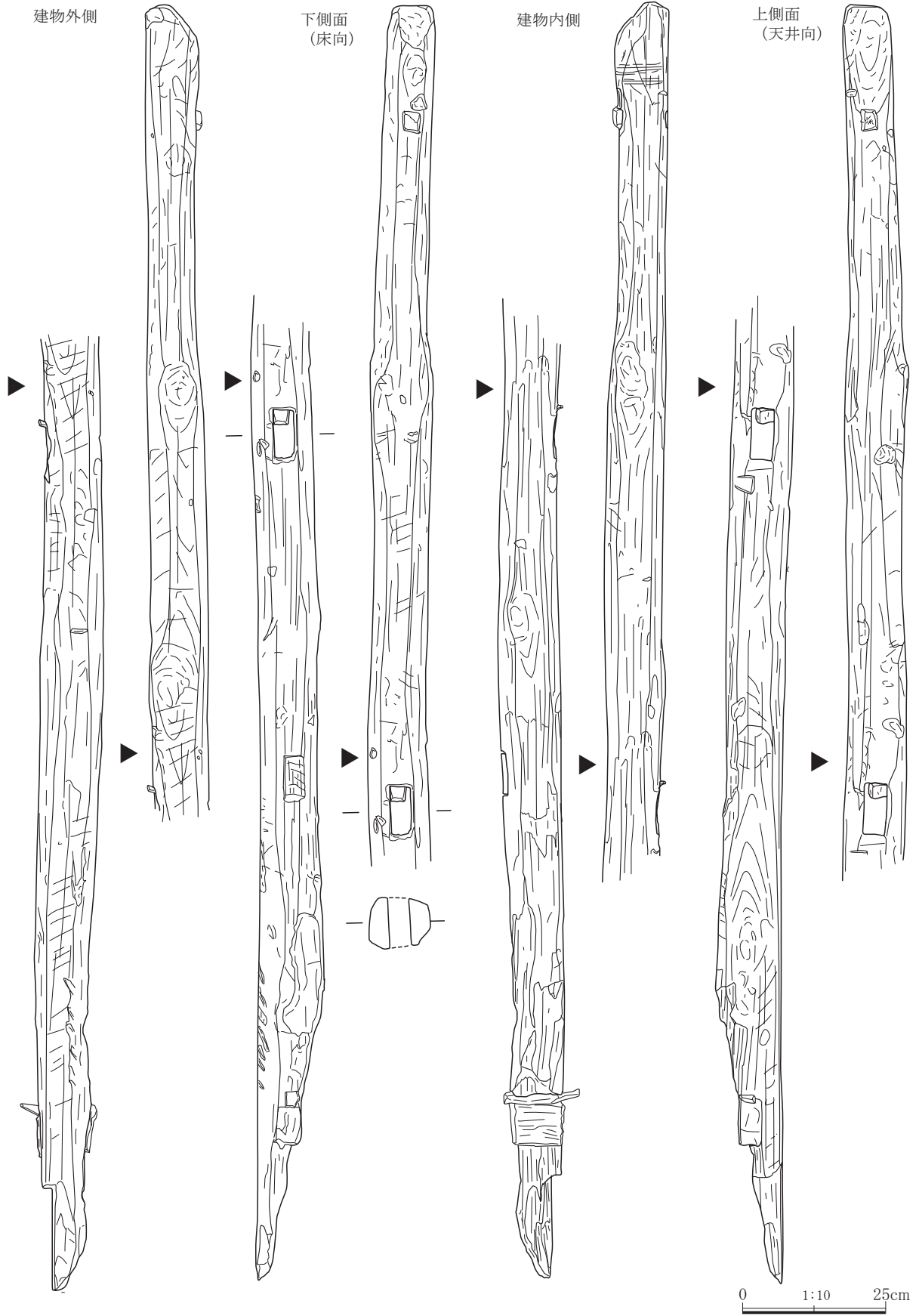
壁材周辺や下に径15cmほどの礫が数点見られたが、配置に規則性はなく、建物礎石とは考えにくい。周辺に麻が繁茂していたのが確認できることから、これら礫は建物礎石ではなく、建物がこの位置にあったものではないことが分かる。

なお、柱材は取り上げのため横板から切断し収納した。写真と実測はこの状態で行っている。



0 1:20 50cm

第8図 1号壁



第9図 1号壁材1実測図

柱材および梁・桁材と思われる5点については以下に説明を加える。樹種同定が済んでいないが、いずれも硬い広葉樹である。

材1（第9図）は梁材と推定した節の多い芯持ち材である。一端を欠いている。残存する一端から140cmの位置が中心になるよう通柄穴が穿たれている。これが扱首束孔であれば全長280cm前後の材と推定される。残存部分長189cm、厚みは一定でないが最大10.5cmを測り、柱材より細い。端部から160cmの位置に破断された柱の目地ホゾが、ホゾ穴内部に残存している。端部付近に柱のような圧痕が残るが、桁材を交差させた面ではないので成因は不明である。



第10図 1号壁材2実測図

材2（第10図）は桁材と推定した残存長118cmの芯持ち材である。厚みは9cm前後で他の材より細い三寸角材である。

ホゾ穴が2ヶ所残り、ここから材全体が引きちぎられるように縦方向に破断している。ホゾは2ヶ所とも通柄で、ホゾ穴の幅は11cmあり4寸柱材を受けていた。柱の間隔はホゾ穴中央で計測して80cmで、梁方向より短いことがわかる。コグチ部分に直径3cmの円形の圧痕が残っている。

材3（第11図）は下側ホゾ穴部分で折れかけて屈曲した柱材である。材5に次いで厚さがある。桁材と組んだホゾ部分は潰れて復元が難しいが、8cm以上の長さがあり通柄とした目地ホゾと思われる。土台と組んだ目地ホゾは高さ5cmに満たず、通柄ではなかったと考えたい。ホゾ穴の中で横板を相欠状に組んでいる。この時梁方向横板を下に、桁方向横板を上に行っている。

桁方向にも横板受けのホゾ穴のほか、タケ材を大入りに受ける丸いホゾ穴があるが、配置・数は梁方向と同じである。

材4（第12図）は上側の横板ホゾ穴から破断した柱材である。多少反りを生じている。

残存全長は187cmを測る。厚み11cmの4寸角材で、梁材と組んだホゾが欠けている。土台と組んだ目地ホゾは高さ6cmで材3同様に短めである。

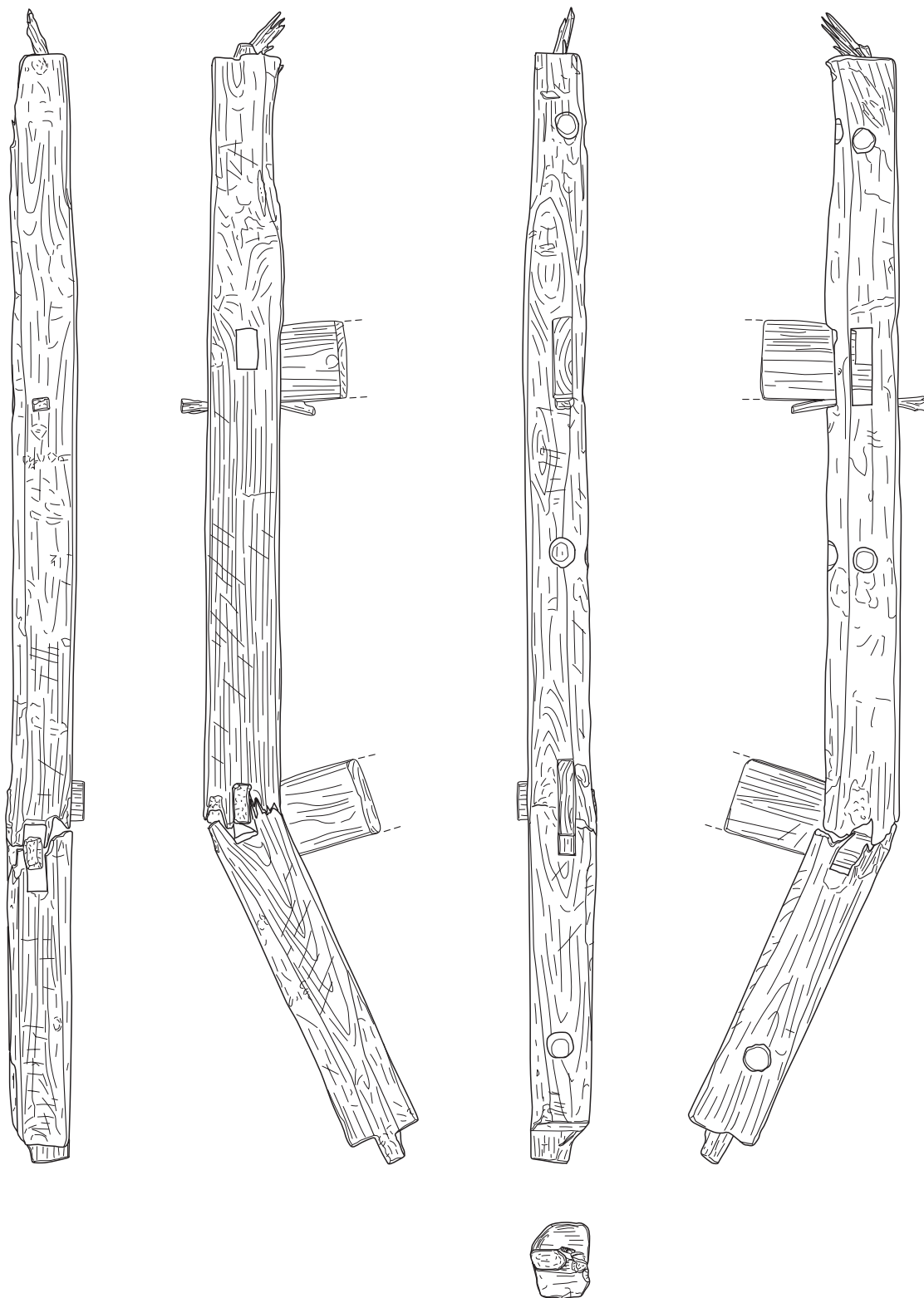
材5（第13図）は残存長185cmの柱材である。梁と組んだホゾ部分が根元から破断している。土台と組んだホゾも大半を破損しているが、高さ5cm分が確認できる。厚さ12cmの四寸角材で、5本の材の中で最も太い。

梁方向外側

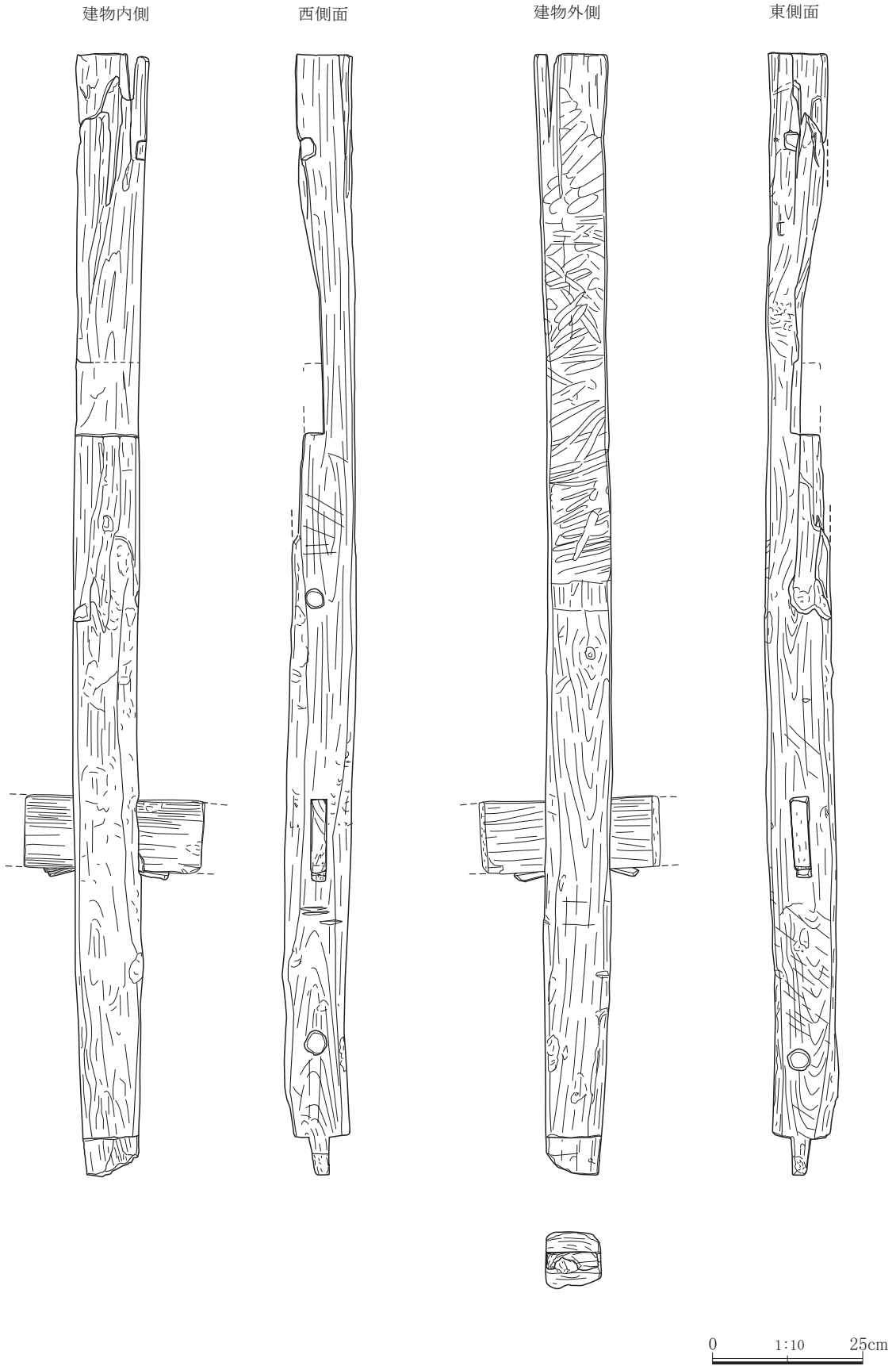
桁方向外側

梁方向内側

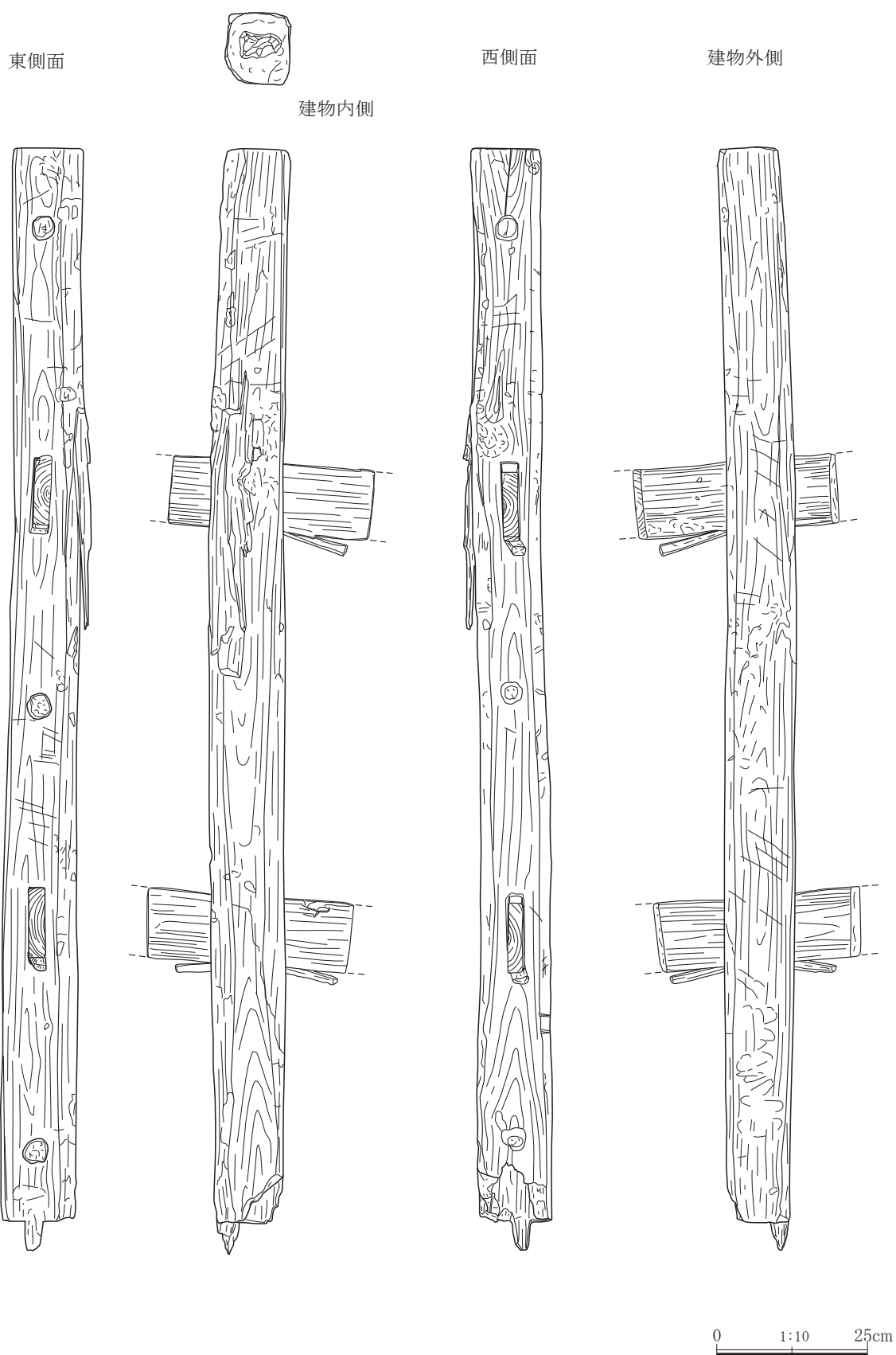
桁方向内側



第11図 1号壁材3実測図



第12図 1号壁材4実測図



第13図 1号壁材5実測図

2号壁 (PL-5・6)

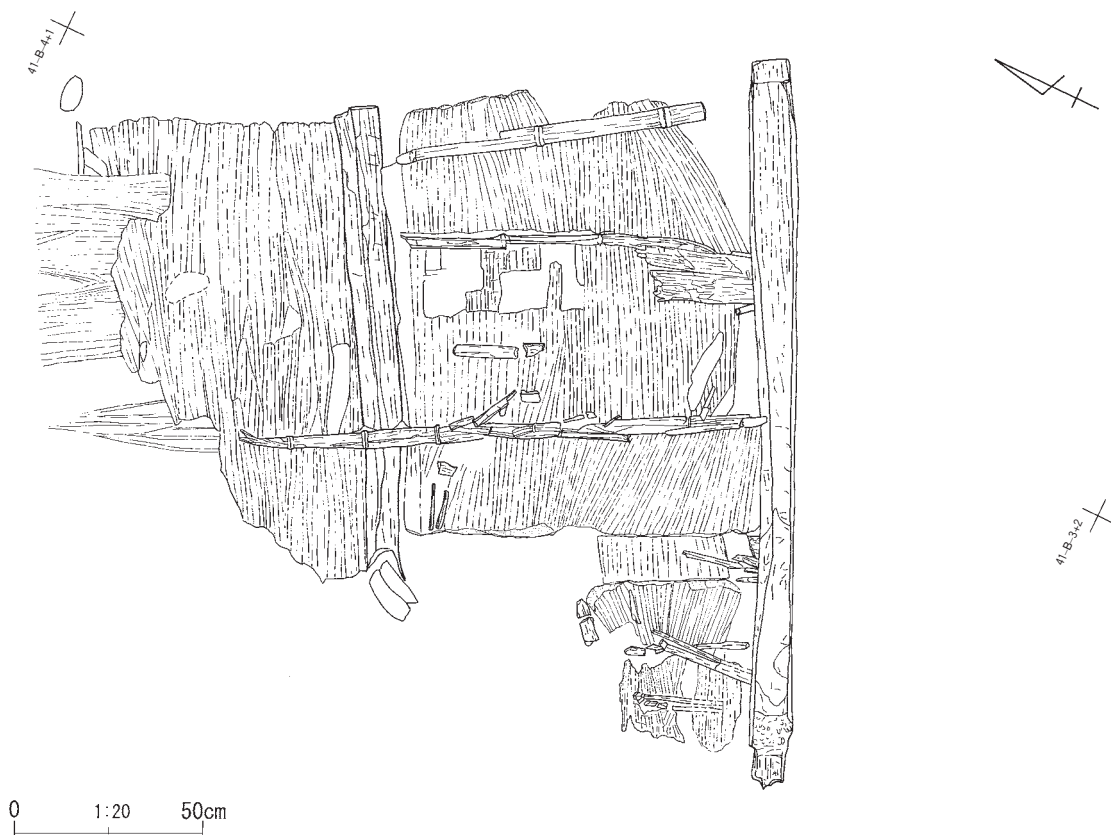
41区B-4グリッド周辺で調査された。1号壁から南東へ約15m離れている。付近は収穫前の麻畑で、壁材はなぎ倒された麻の上であり、壁を葺いた麻柄と区別しにくい部分もあった。

土台や梁・桁等の痕跡はない。2本の柱が残存していたが、破損が進んでいる。1号壁と同様に柱に横板を組み、立てた麻柄を竹で押さえた壁材である。

1号壁と同じ麻柄を外から貼る構造であれば建物内側を上面として倒れている。壁の天地を推測する資料は得られなかった。2枚の横板のうち1枚は部分的に残存していたが、もう1枚はホゾ穴周辺にねじ切られたような破片が残存する以外欠如し、麻柄に圧痕を残すのみであった。

柱間は現状の芯々距離で105cm前後あり、梁部分と推定した1号壁に比べ20cm短い。しかし、1号壁の桁部分では80cm間隔の柱間を示している。1号壁と同じ建物の壁とするには、柱が動いて隙間ができたと想定しなくてはつじつまが合わない。本壁では柱はホゾを使わずに横板を受けているので柱が動いた可能性は認められよう。

材1 (第15図) は両端に目地ホゾのある柱材である。全長191cm、目地部分を除いた高さは175cmで1号壁の柱材より短い。桁材が梁材の下に組み込まれていたことが1号壁で推定できたが、同じ建物の桁方向壁材に相当すると考えて齟齬がない。厚みは最大12cmの四寸角材であるが、中央付近が大きく痩せて



第14図 2号壁





第15図 2号壁材1実測図

いて良材とは認め難い。ホゾは両側とも目地ホゾで高く、通柄で桁・土台に組んだと思われる。竹を受けるための差し口が1側面にしかなく、横板も1面のみに付けられており、出入り口部脇に相当する柱材であることが分かる。出入り口側に扉を受ける設備の痕跡は見られない。この柱の出入り口反対側面に竹を受ける指し口は2枚の横板間では1ヶ所、横板と桁材・土台の間で各2ヶ所の併せて5箇所を受けていたこと分かり、3箇所だった1号壁と異なっ

ている。1号壁に比べ柱間が狭いにもかかわらず、竹材の押さえが嚴重なことが分かる。1号壁と本壁は横板の位置が同じであり、同一の建物構築材と推測するが、入り口周辺のみ竹材による押さえが丁寧であった可能性もあろう。

材2（第16図）は引きちぎられたように半分欠けた、残存長126cmの柱材である。厚みは9cm前後で細めのうえ、厚みも一定ではない。角材と呼ぶには角が不整で割り材の範疇であろう。1号壁も含めた他の柱材と比べ、本材のみ目立って貧弱な材である。

横板を受けるホゾ穴がなく、竹材も垂直に交差していることが出土時に確認されている。

残存する端部に、他の柱材に見られた目地ホゾの痕跡は残らない。相欠き組手のような段差が見える。



第16図 2号壁材2実測図

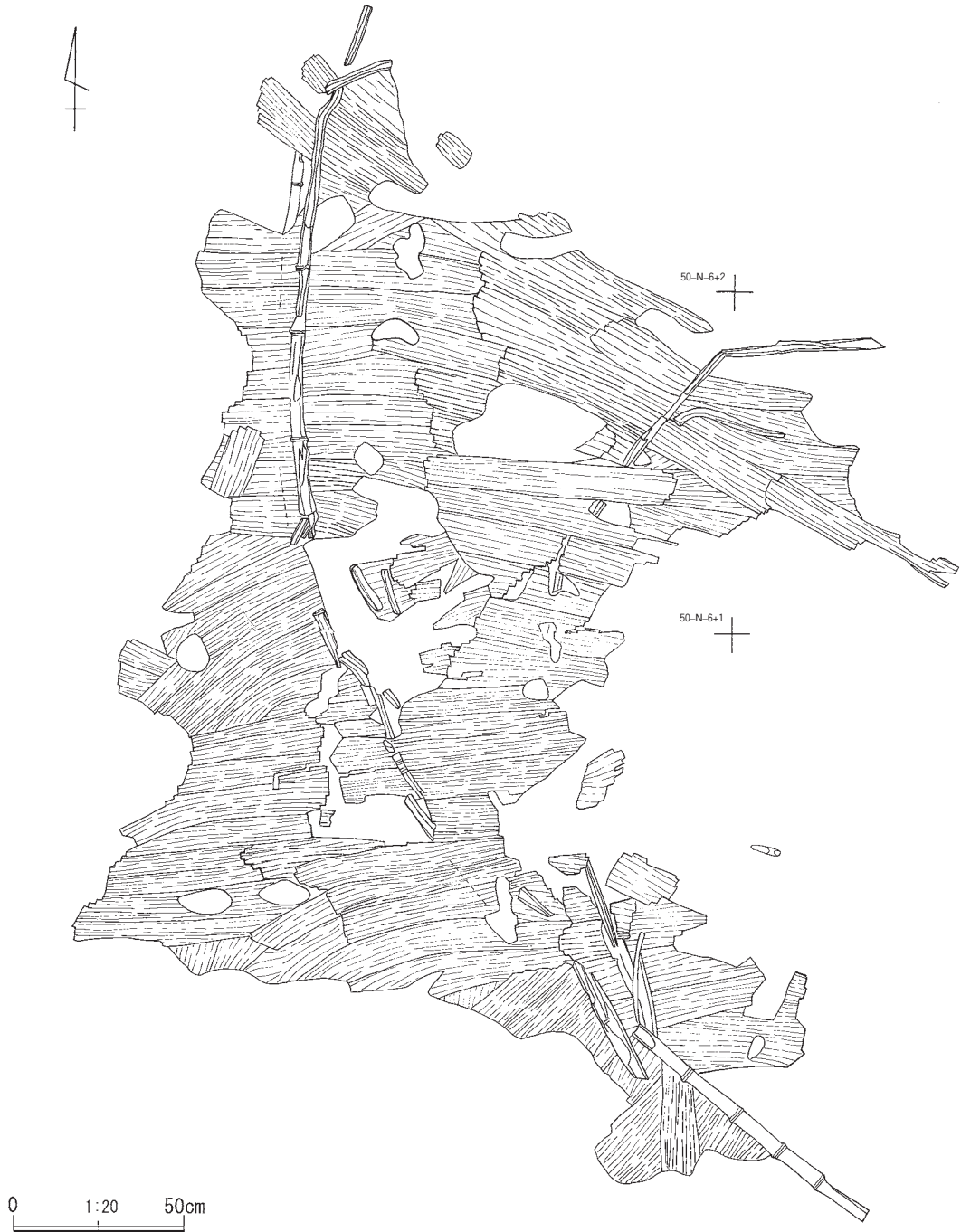
### 3号壁（PL-7）

後述する1号建物から東側へ33m離れた50区N-6グリッド付近の畑面直上で調査した。破損が顕著で泥流で押し流された、建物本体から離れた材と推測する。カヤかアシのような茎を束ね、タケを横板として押さえたもので、柱材の痕跡は認められない。タケの長さは約4mある。破損が進み不確実であるが、束ねた植物の範囲から壁や垣根であれば高さは2m以上が想定される。

第4章 IV区の調査

本資料は建物の壁または屋根部分、あるいは垣根のような用途が考えられる。垣根であれば付近から同種施設が数多く確認されるはずで、本遺跡の検出傾向から考えにくい。竹材から推定される4mの横幅に対し柱材が見つからないことより、壁材の可能性も低いと推測する。2m以上の高さがあることか

ら屋根材の可能性が最も高そうだが、前述の1・2号壁に伴う建物の屋根材を想定した場合、垂木の痕跡もなく、麻柄を使っていない点に民俗例と齟齬を生じる。また、後述の1号建物の壁には本資料と類似する部材の出土があり、本例も壁の項に含めて扱ったが、明確な根拠はない。



第17図 3号壁

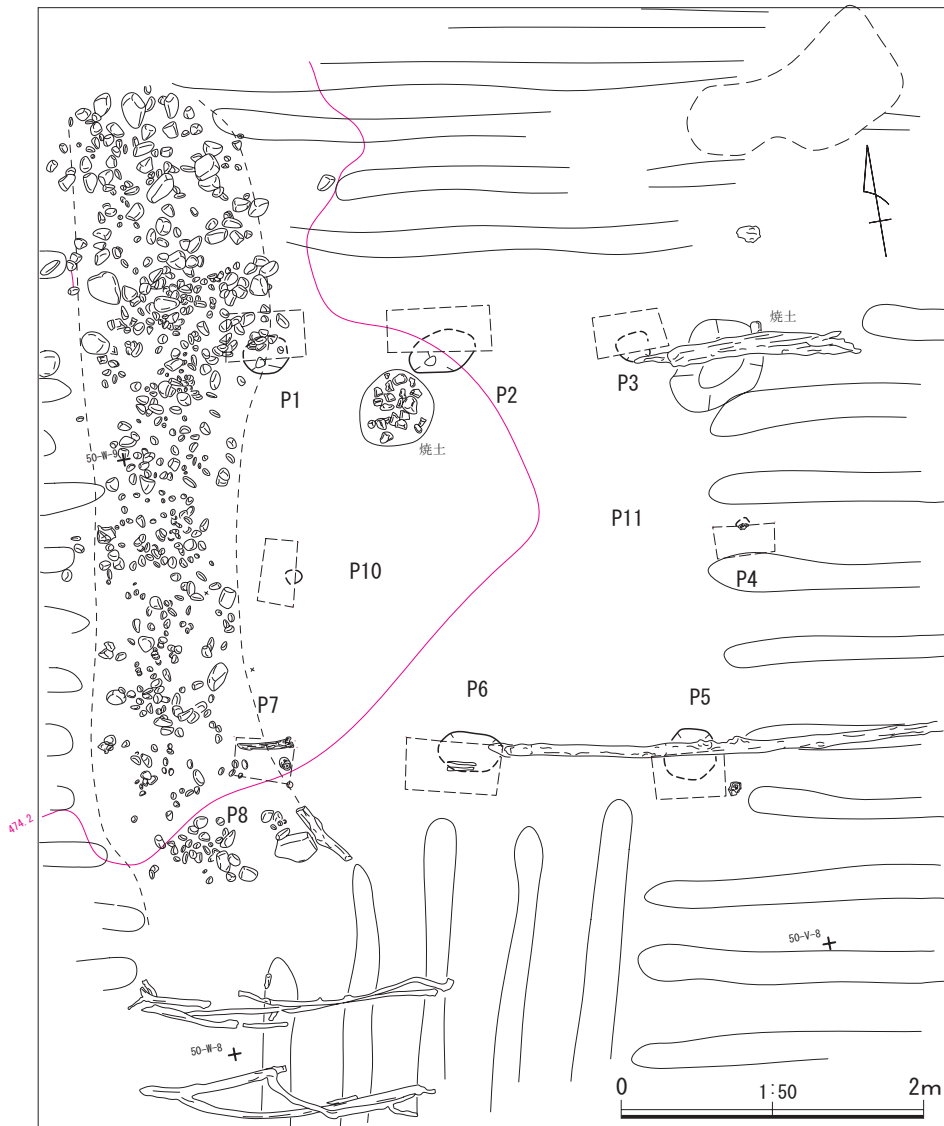
1号建物 (PL-8・9)

12区画4・5畑は麻畑に囲まれた、南北に細長く極端に狭い特異な区画内の畑である。この区画の北隅、50区V-9グリッド付近で掘立柱と壁材の一部から確認された建物跡である。

建物は、南東側15区画、西側16区画、北東側17区画と呼んだ3つの畑大区画が交差する位置にある。建物西側に接して16-17区画間の石敷きの5号道があり、建物から東側へ伸びるようにして15区画と17区画を分ける境木の密集した4号道がある。区画の境が最も明瞭な部分にあたる。

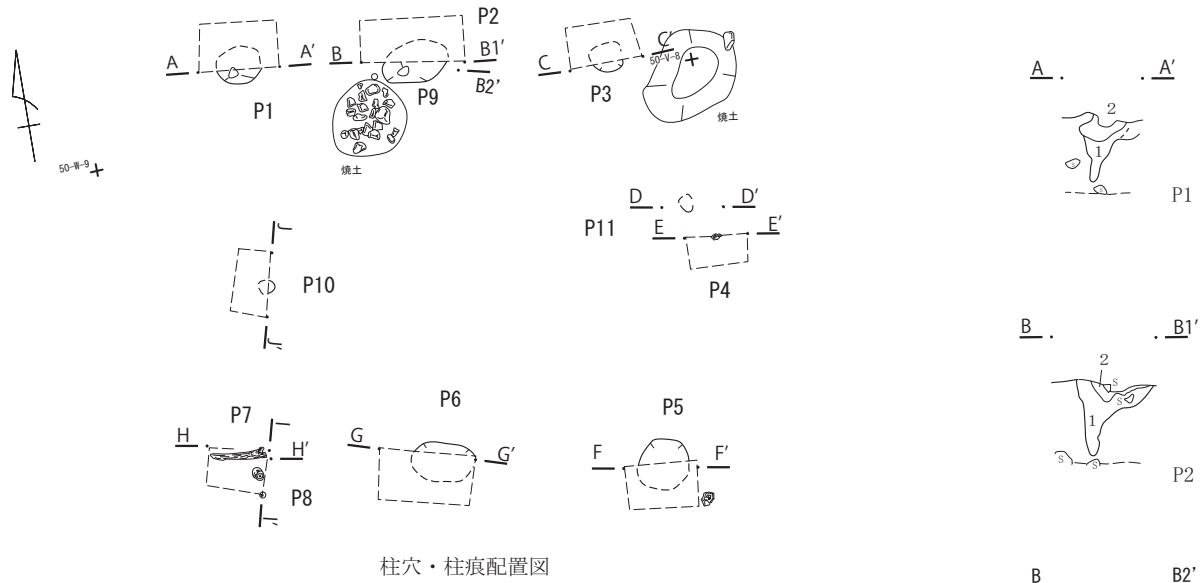
建物内の柱の配置は不規則である。

P6部分からP5上を覆い、東側に向かって倒れていた材は長さ3.1mある丸木材で、組手・差し口等の加工痕跡は見られなかった。木を逆さにして上側を埋めている。P3の上に先端部分を向け、東側に倒れた材は掘り起こされた状態であった。他の材は柱穴内で確認できる杭状の柱であった。P4・P8など細い材は地表部分で破断している。P5・P6のように太めの材は柱穴内で斜めになっていた。柱穴埋没土は不明瞭で、栗石を敷いたり埋め戻し土を突き固めるような痕跡は認められない。P6の柱が高さ3mを超えることを考えると、柱穴は貧弱である。



第18図 1号建物平面確認状況

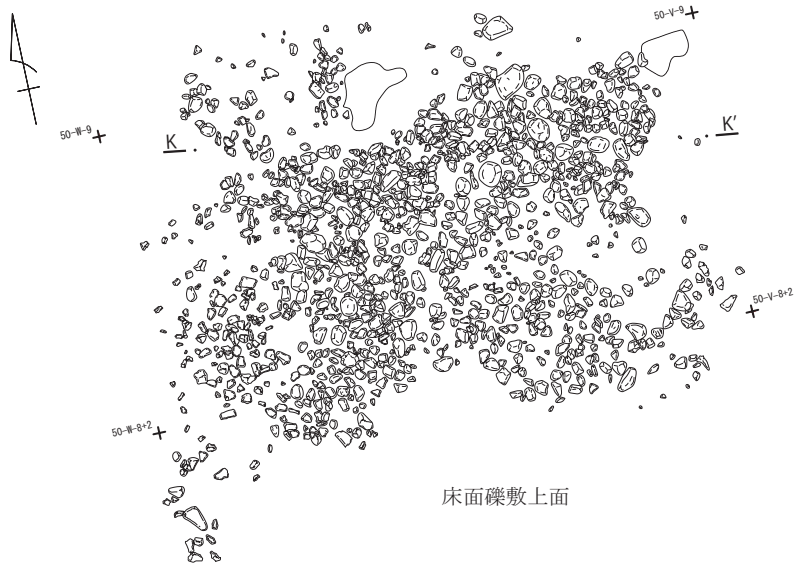
第4章 IV区の調査



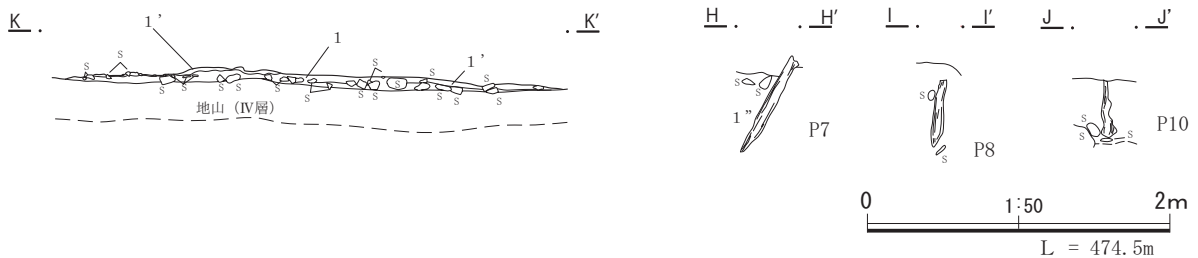
柱穴・柱痕配置図

土層説明

- 1 基本土層IV層の耕作土 ややしまり欠き炭化物粒・細礫等を散見する。1'で踏み固め強く、1"では地山との区別難しい。
- 2 ローム状土、ローム粒等の混入物混じりの弱粘性土。



床面礫敷上面

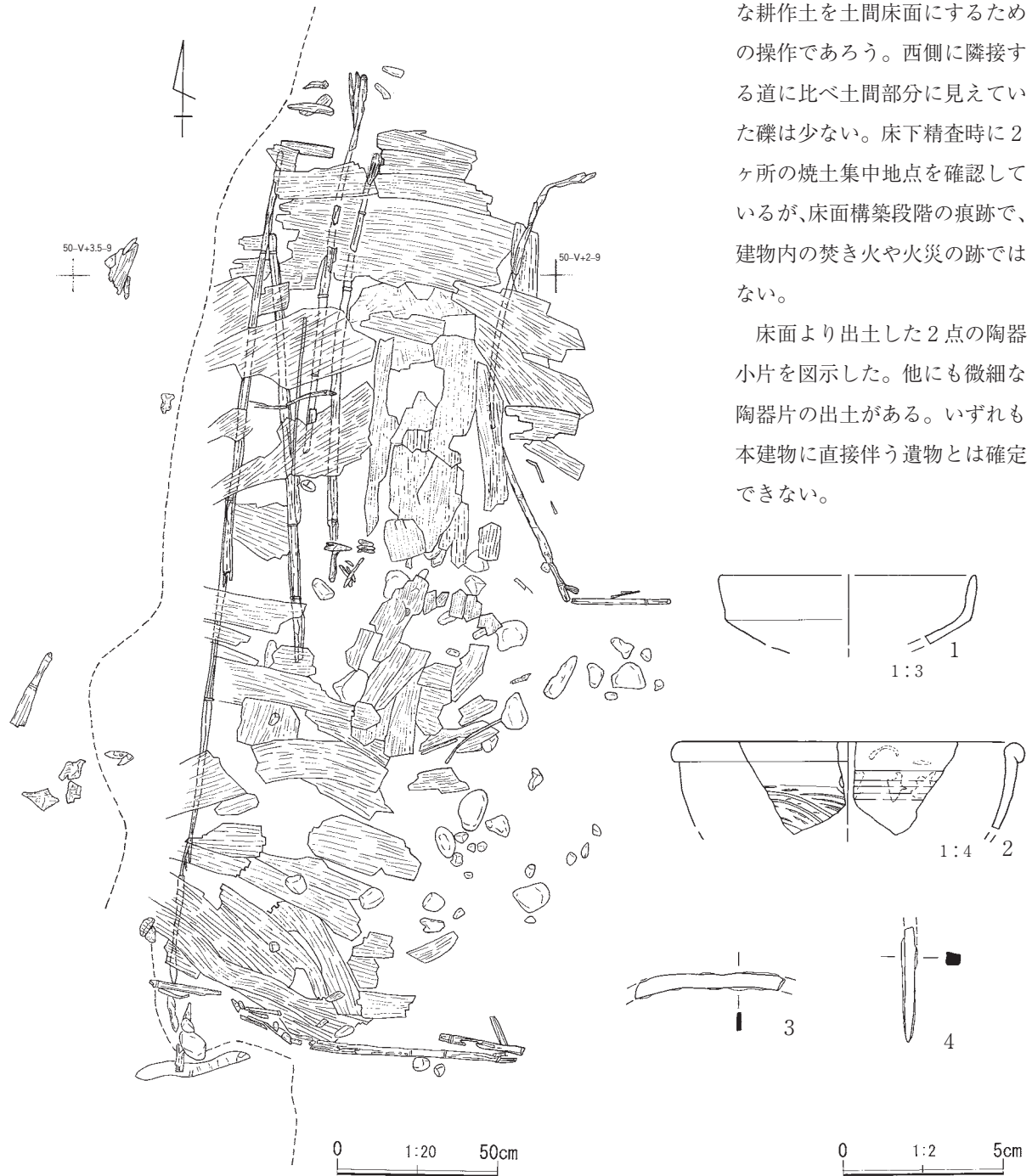


第19図 1号建物平面および柱痕断面

建物西側の道際に壁材が残存していた（第20図）。麻柄ではなく、カヤ・アシのような植物茎を束ねて両側から竹材で押さえている。壁裾西側にはAs-Aが吹き溜るように厚く堆積するが、壁材上にAs-Aは見られなかった。このことから軽石降下時期に立っていた施設が、泥流によって西側から押し倒され、壁の外側を見せていることが分かる。建物内部には

As-Aはほとんど見られず、天井のある建物であったはずである。西側に道を配す立地から西側入り口の建物が想定されるが、西壁際にAs-Aがほぼ均等に厚く堆積し、入り口が想定できる箇所はなかった。建物内部の床面は土間のような凹凸のある踏み固めたものであった。床は拳大の礫を多量に敷いて、埋め戻した土とともに踏み固めてあった。畑の柔らかな耕作土を土間床面にするための操作であろう。西側に隣接する道に比べ土間部分に見えていた礫は少ない。床下精査時に2ヶ所の焼土集中地点を確認しているが、床面構築段階の痕跡で、建物内の焼き火や火災の跡ではない。

床面より出土した2点の陶器小片を図示した。他にも微細な陶器片の出土がある。いずれも本建物に直接伴う遺物とは確定できない。



第20図 1号建物壁材および遺物

## 2 畑と平坦面 (PL-16~22)

### 概要

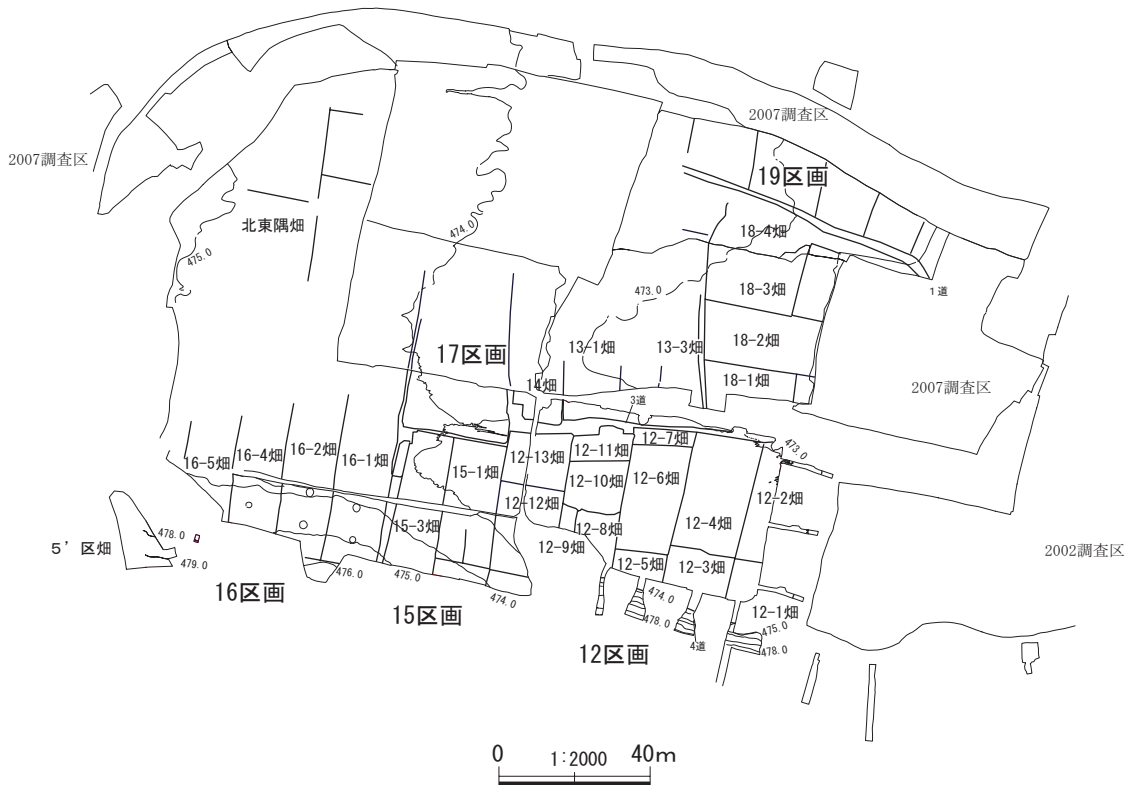
IV区の畑はすべて下位段丘面にあり、全域が泥流に覆われている。調査範囲の南側は上位段丘へ向かって緩やかに傾斜している。この部分では泥流が北西方向から南東へ向かって斜面を駆け上がるように堆積し、畑をパックしたため残存状態が良い。中央から北側は平坦面であるが、泥流は南西方向から北東へ向かって直線的に流れ、泥流内の礫が櫛の目のように遺構表面を削り、残存状態はきわめて悪い。畑の畝サクはほとんど残らず、溝や境木の根など一部が確認できたのみであるが、畑の範囲と区画を復元する上では有効な資料が得られた。

畑の名称は平成17年度調査時に付けられた区画名称を継続して使用した。他の調査区とは連続しないが、境木や道などで区画境が明瞭な本区では有効な

名称設定と考へ、変更を行わなかった。

下図はIV区畑の区画略図である。区画名称については8頁①を参照されたい。畑区画は残存状態の悪い北側で不明瞭だが、基盤の目のように整備された畑地となっている。1号道は区画を斜めに横切る遺跡内でも最大規模な道であるが、畑区画はこの道と斜めに交差し、畑軸方向が守られていることが確認できる。

大区画と呼んだ最大区画の規模は一様ではないが、IV区ではこれを区画と呼んだ。『上郷岡原遺跡(1)』で報告された東側に広がるI区からIII区の畑同様に、本区でも南北に細長い畑が存在し、狭い畑はこの畑を分割して作られている。これらの畑を含めた四周の境界が確認できる最小区画を中区画として号を付けて呼んだ。12大区画の1中区画畑を12区画1号畑というように呼称する。



第21図 IV区畑 区画概念図

12区画

IV区南東側にある広大な区画で、『上郷岡原遺跡1』で報告したⅢ区の水田西隅に至るまで続くと思われる。この場合、東西幅は160m近く、本遺跡では最大規模になる。中区画畑の数も本書で報告する14箇所以外に8箇箇以上の存在が想定される。

12区画1号畑

2005年度調査地域の南東隅部分で確認できた畑である。範囲確認のためのトレンチ調査によって南側・東側の限界が確認されている。全容は17m×17mのおおよそ正方形を呈した畑である。

南側は上位段丘に向かう斜面となり、他の畑とは接していない。トレンチのみにより得られた資料で不確定な部分だが、斜面隅との間に幅2m近い道状の隙間があると思われる。

東側は『上郷岡原遺跡(1)』でⅢ区14号畑として報告された畑と接している。畝サクの方向は14号畑と同じだが、二つの畑の狭い切れ間として畑境界が確認できる。西側・北側は畝サク方向の大きく異なる広い畑へと接しているが、こちらの畝サク間に

切れ間はない。

畝サクは畑輪郭に沿って東西に直線的に延びている。これは等高線におおよそ沿っている。畝頂部の形状は一様でないが、全体には平坦であり明瞭なものではない。

As-Aは畝とサク両方の上で確認できる。粒径は1mm内外で大粒の軽石は見られない。As-A上を直接泥流が覆い、鋤き込まれた痕跡は認められない。層厚はサク内で最大で10mm近くある地点もあるが、畝上では薄い。

確認面積 推定280m<sup>2</sup>

サク間 60cm前後

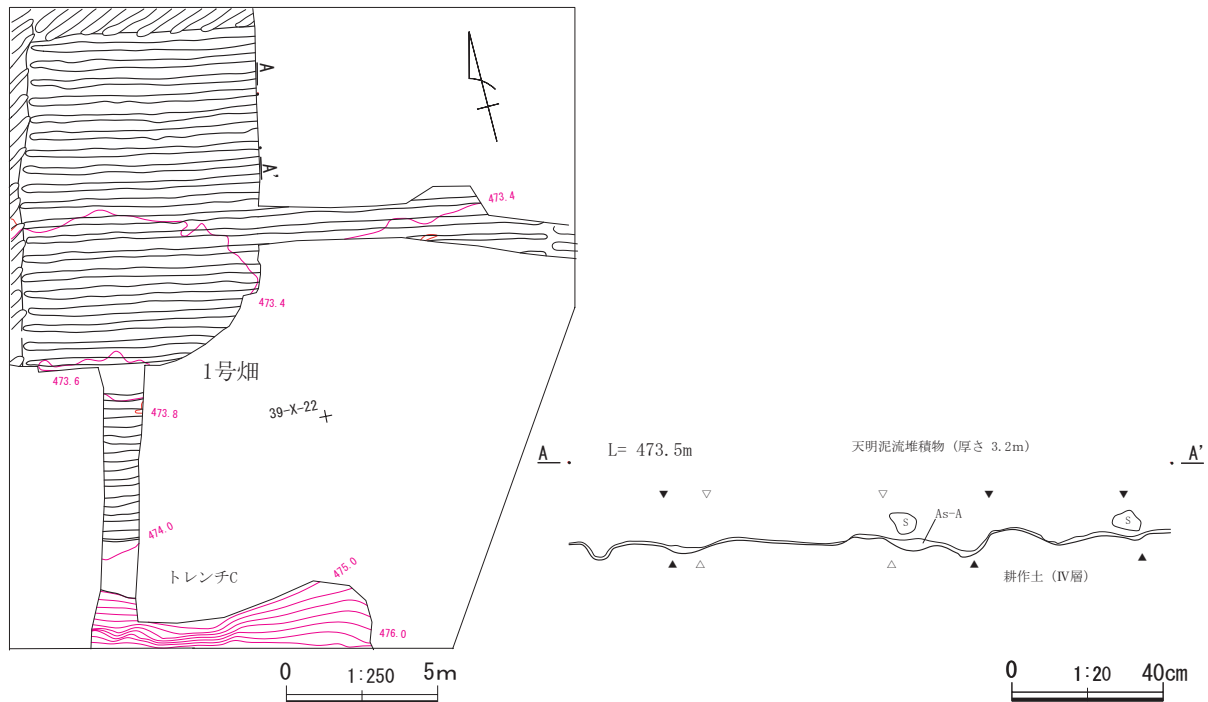
サクの長さ 17.2m

サク方向 N-82° W

畝サクの高さ 2~6cm

地山傾斜 42/1000

その他 簡易土壌酸度計による検査で、本畑土壌はPH7.0というデータを得ている。

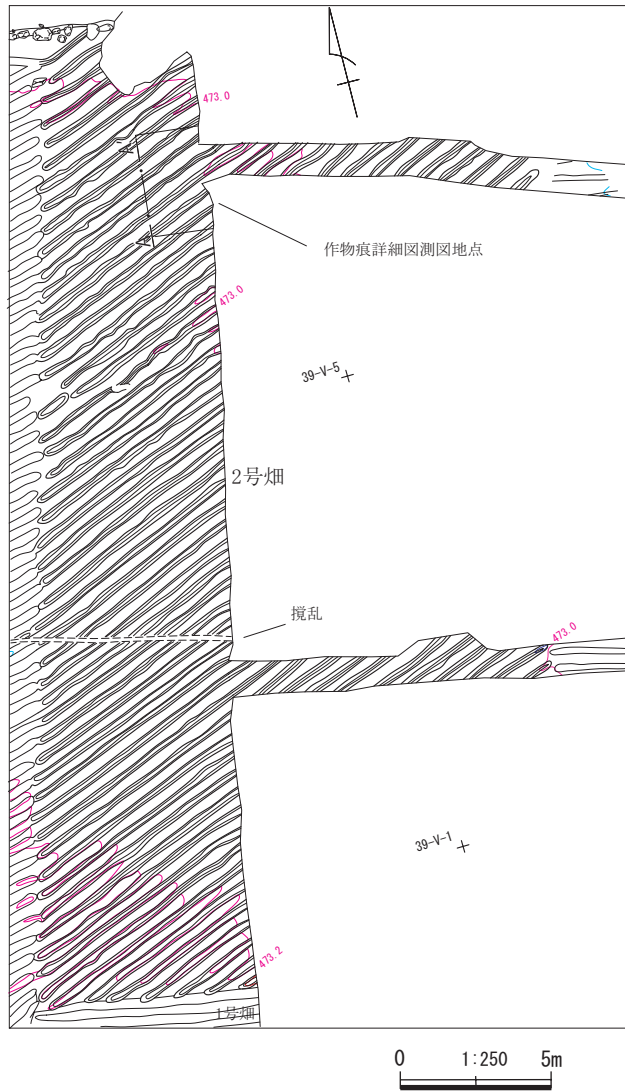


第22図 12区画1号畑



12区画2号畑

12区画1号畑の北側に続く畑だが、比較的平坦な立地にある。サク方向や形状は西側に隣接する12区画3号畑に近く、畑の辺に対し斜めに作られている。3号畑との境は両方向からのサク端部が食い違うことで確認できるが、隙間はほとんどなく、サクが繋がって見える部分も多い。東側は12区画1号畑同様にトレンチ調査によって畑の端部が確認されている。畑の境には部分的に狭い隙間が見られる。本畑は東西幅約17mの規模がある。北側は3号道南脇の溝にほとんど隙間なく接している。畑の南北幅は水平距離で約32mになる。本畑から連続して西側に畝サク方向が斜めの畑が広がっている。



X-5グリッド内にサクの乱れた地点が1ヶ所ある。このような形で平坦面の存在が想定された地点もあるが、ここでは明確にできなかった。

本畑の上には作物痕が明瞭に確認できる。泥流に押し倒された状態で、鉄分とともに凝集しているものが多い。また畝上からは株痕も確認できる。株痕は畝の中央から北寄りにかけて、やや不規則に並んでいる。第24図は作物痕の詳細である。泥流本流から直角に近い屈曲した方向に作物が倒れており、斜面部分では泥流が駆け上がり、谷を埋めて行ったことがわかる。このことは、南側の畝サクが泥流による削平が弱く、残存状態の良いことと符合する。

本畑の中央やや南側に直線的に攪乱溝が走っているが、作物の倒れた方向とこの攪乱方向が一致しない点は疑問であった。

As-Aは鋤き込まれ、畝内に混じっている。サク内には確認できない。

確認面積 推定540m<sup>2</sup>

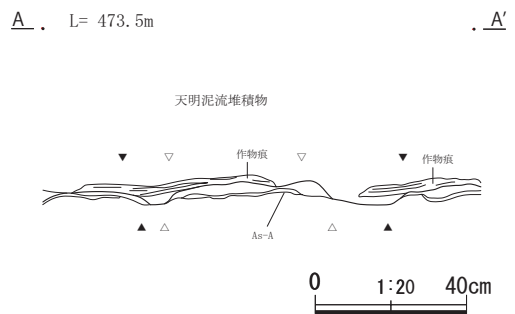
サク間 40~55cm 50cm前後の部分が多い

サクの長さ 推定21m

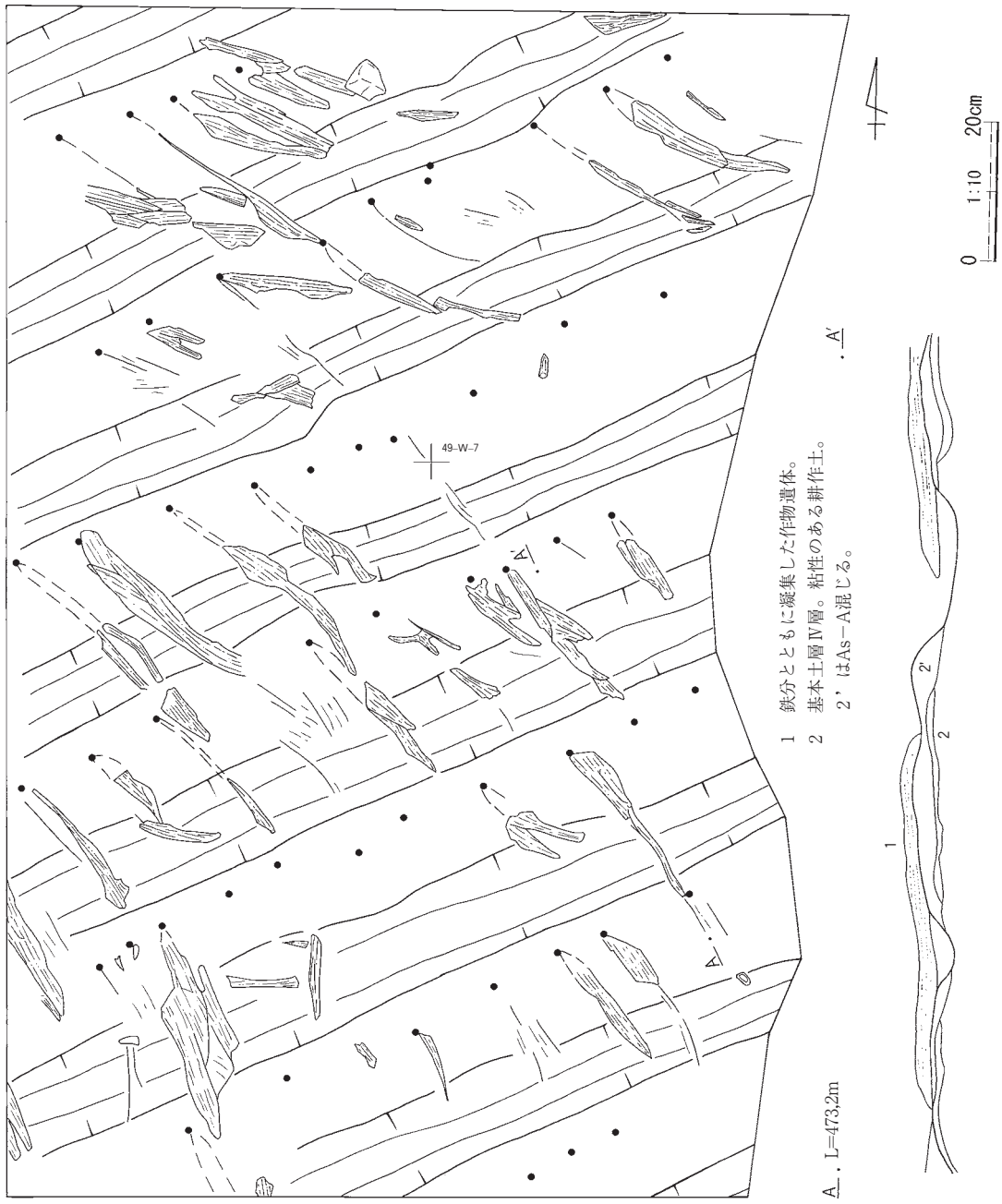
サク方向 N-70° E

畝サクの高さ 3~8cm

地山傾斜 11/1000



第23図 12区画2号畑



上図は作物痕および株痕である。株痕は畝上に不規則だが1列に並んでいる。株痕の系は最大4.5cmある。株間は10~20cmで一様ではない。作物は丈が最大58cm、葉の幅は10mm分確認できる。

0 1:20 50cm

第24図 12区画2号畑内作物痕

12区画3号畑

東西幅約17m、南北幅約16mの畑であり、南側が高い斜面にある。西に向かって狭くなる台形気味の形状になると思われる。東西幅は東側に隣接する12区画1・2号畑に近い。

北側の12区画4号畑とは畝サク方向がやや屈曲していることで区別した。この部分に隙間はないが、東側の12区画1・2号畑の境界から直に延長した位置に畑境が重なっている。南側は上位段丘面にむかう斜面となり、トレンチ調査によってその端部を確認した。斜面直下から畑端部まで80cmほどの隙間がある。東側の12区画1畑・西側の12区画5畑とそれぞれ畝サク方向など形状の異なる畑と接している。各畑との境界部分に隙間はない。

As-Aは畝サク両方の上から確認できるが、サク内のほうがやや厚い。層厚は最大でも5mm程度である。畝上にはAs-A混じりの土が寄せられている部分が多い。

確認面積 推定270m<sup>2</sup>

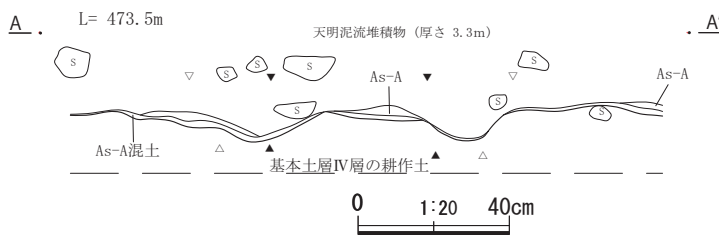
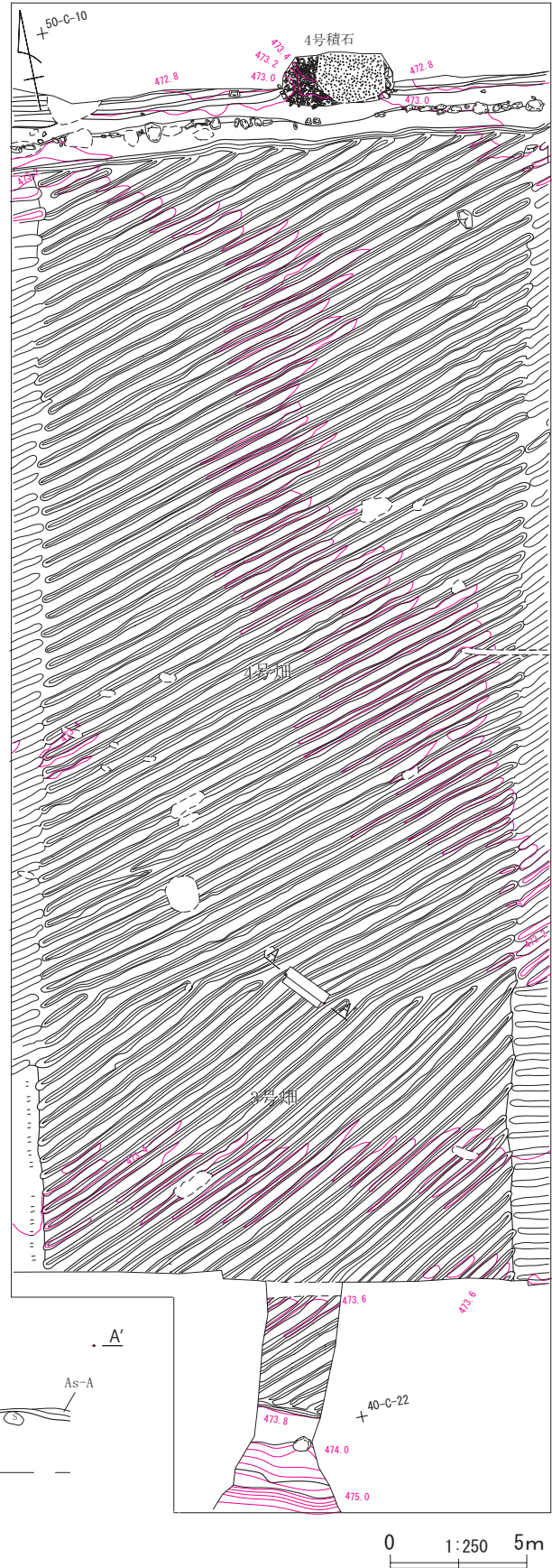
サク間 35~40cm

サクの長さ 畑の対角線上に最大値がくれば、22m前後となる。

サク方向 N-60° E

畝サクの高さ 5~10cm。7cm以上ある地点が多い。

地山傾斜 30/1000



第25図 12区画3・4号畑

12区画4号畑

前述した12区画3号畑の北側に続く畑で、東西幅約17m、南北幅約31mの規模である。

北側は3号道脇の溝にほとんど隙間なく接している。東側に隣接する12区画2号畑・西側に隣接する12区画6号畑は、畝サク方向や形状の近似した畑で、ここも畑間の境界はほとんど隙間なく接し、一部で畝サクが重複する部分もある。

As-Aの確認状況は、前述の12区画3号畑と同じである。

確認面積 17.2m<sup>2</sup>

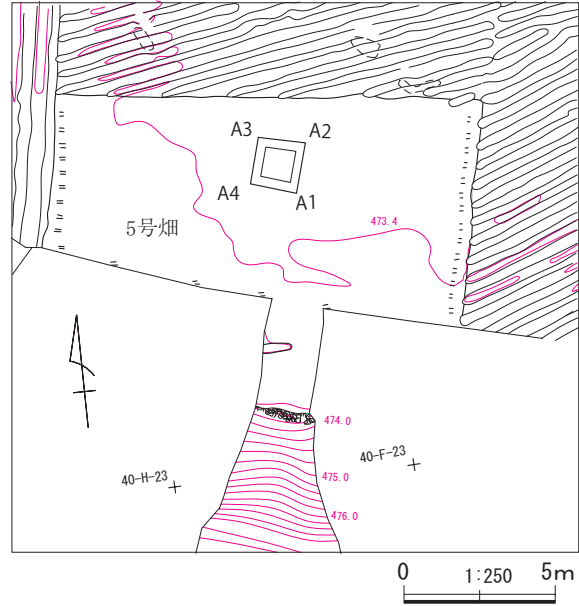
サク間 50~60cm

サクの長さ 20.2m

サク方向 N-80° E

畝サクの高さ 3~9cm 4cm以上の地点が大半

地山傾斜 15/1000



12区画5号畑

東西方向にわずかにサクの痕跡の凹凸が残る。中央部分ではAs-Aが鋤き込まれたサク跡が見えるが、規則的な畝サクが確認できなかった狭い一画である。泥流による被災時には耕作をしておらず、As-A降下以降、収穫を終えた地点と考えている。

畑の規模は東西13.5m、南北10m前後で、西側に向かって狭くなる台形気味の畑である。北側は傾斜面に接し、縁部には礫が多量に投げ捨てられている。一箇所深さ5cmの窪みがあり、道脇の溝になる可能性がある。

As-Aは部分的に堆積していて、東西両端にわずかに残るサク痕の窪みには層厚10mm近い部分もある。鋤き込み土の中には不均等に混入し、転地返しのような痕跡ではない。

確認面積 推定約135m<sup>2</sup>

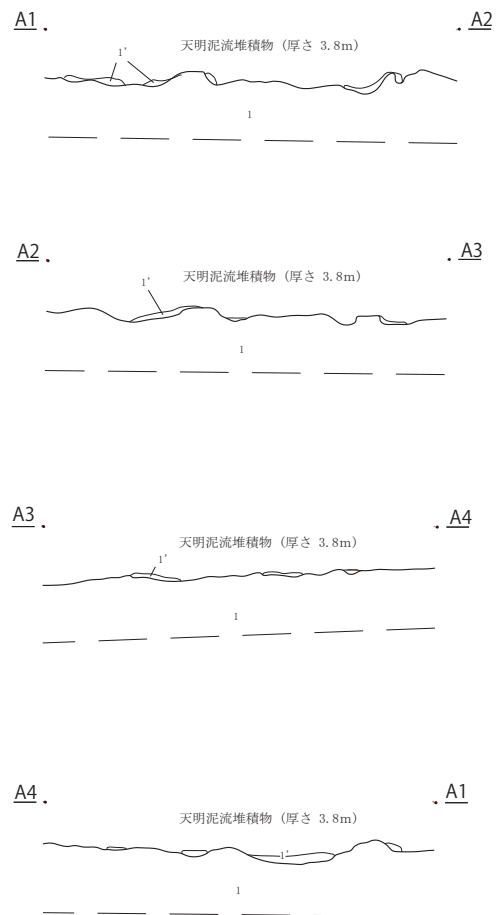
サク間 40~50cm

サクの長さ 8.5m前後になると推定できる。

サク方向 N-75° W前後か

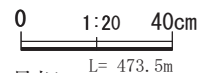
畝サクの高さ 両端残存部分でも2cmほど。

地山傾斜 18/1000



土層説明

- 1 基本土層IV層の弱粘性耕作土
- 1' はAs-Aが混じる



第26図 12区画5号畑

12区画6号畑

12区画5号畑の北側に隣接する畑である。第3号道際は広い畑が接していたが、本畑から西側で規模が不揃いで畝サク方向も入り込むようになる。本畑は東西15m前後、南北29m前後の規模がある。

東に接する12区画4号畑・西に接する12区画10号畑とは畝サク方向が近似する。境界部分に隙間はほとんどない。北側は道との間のわずかな間に12区画7号畑が入り込んでいる。この畑との間に隙間はない。北西隅に接する12区画11号畑との境界では足幅

程度の隙間は確保されている。

平坦面に類似する施設が2ヶ所サクの切れ間から想定される(第28図)。1号平坦面は台形状に見える不明瞭な施設である。2号平坦面は一辺1.7mの方形区画が想定できそうだ。畝サク方向が畑区画に対し斜行する畑では、本遺跡で唯一の例となる。畝は断面かまぼこ状を呈し、サクは幅狭である。

As-Aは畝上で確認でき、一部でAs-A混じりの土が乗せられている。サク内にはほとんど確認できず、サク寄せされた畑であることが分かる。

確認面積 431.7m<sup>2</sup>

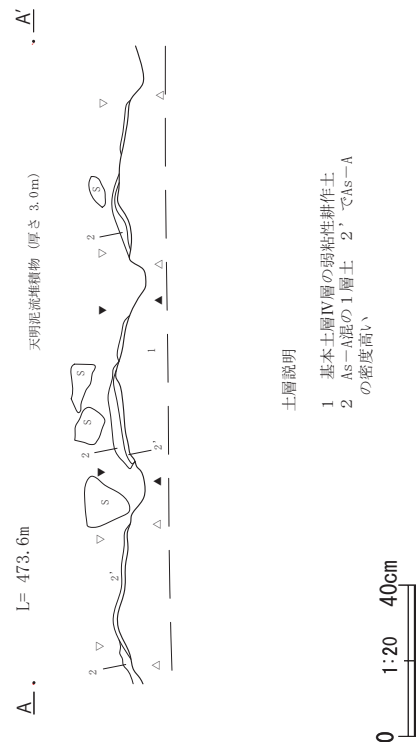
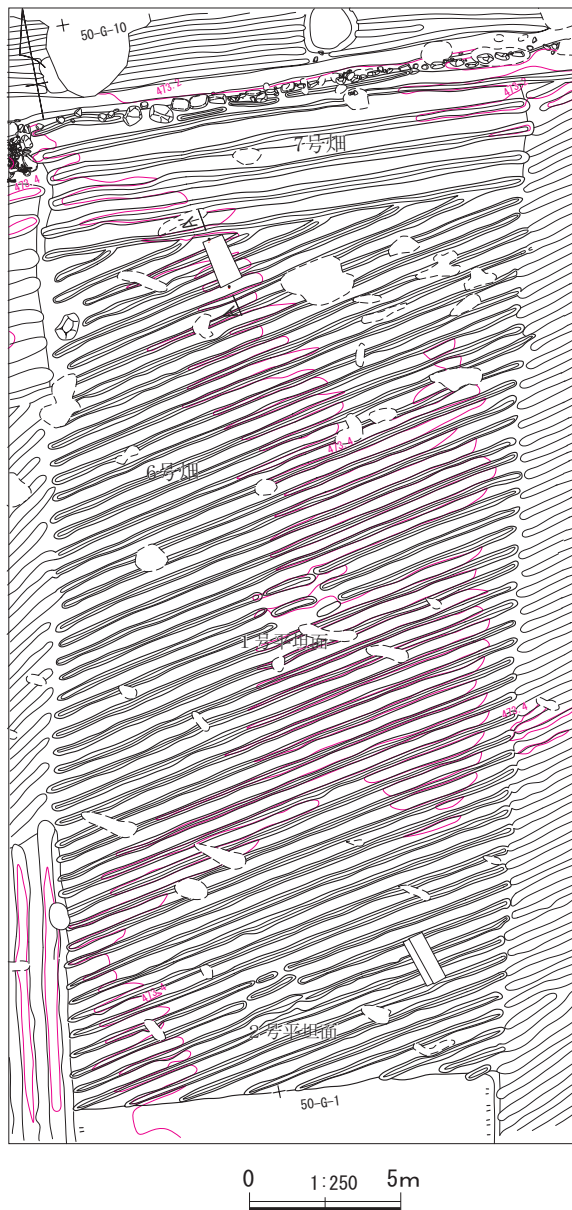
サク間 55cm前後

サクの長さ 16.2m

サク方向 N-77° E

畝サクの高さ 3~6cm

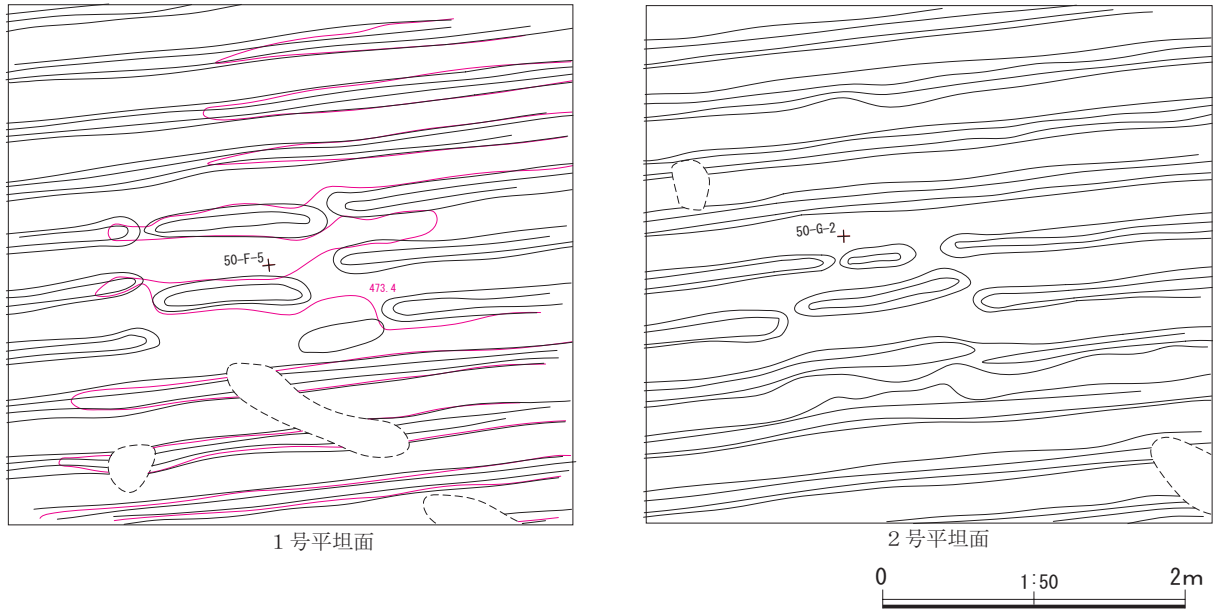
地山傾斜 4/1000(北側が高い)



土層説明

- 1 基本土層IV層の弱粘性耕作土
- 2 As-A混じりの1層土・2'でAs-Aの密度高い

第27図 12区画6・7号畑



第28図 12区画6号畑平坦面

12区画7号畑

4本のサクのみのきわめて小規模な畑である。東西幅16m、南北幅約3mの区画で、南側は第3号道脇の溝に接している。西側に接する12区画11号畑とは畝サクの方向や形状が近似している。この畑との境には足幅程度の隙間がある。畝サク方向の異なる東側の12区画4号畑・南側の12区画6号畑との境界に隙間がない。

As-Aは畝部分に見られ、上方に耕土をかぶり、サク寄せの痕跡が明瞭である。

確認面積 47.6m<sup>2</sup>

サク間 80~90cm

サクの長さ 16.6m

サク方向 N-86° W

畝サクの高さ 4~10cm

地山傾斜 ほぼ平坦

12区画8号畑

本遺跡では、南北方向に畝サク方向のある畑は少ないが、下位段丘南隅にある畑として『上郷岡原遺跡(1)』のⅢ区12号畑が近似した例である。東西の長さでは本畑11.4m：Ⅲ区畑11.2m、畝総数では本畑12条：Ⅲ区畑11条など直接の近似点のほか、次

に記す隣接畑など周辺状況にも類似点が多い。

本畑の南隅は上位段丘へ駆け上がる斜面の裾部にあたる。西側に向かって広がる台形を呈す区画であったと思われる。傾斜面からわずかに隙間があるが、道や溝などの施設は確認できない。東側に隣接する12区画5・6号畑、北側に隣接する12区画10号畑はいずれも境界部分に隙間がなく、一部では重複している。西に隣接する12区画9号畑とは通常の区画を東西半分に分けるように区切られており、Ⅲ区12号畑と酷似している。

サク間が広いのは、南北方向にサクのある畑に共通する特徴である。

As-Aはサク内に見られる。畝頂部は調査時に削平し過ぎたため、詳細な観察を欠く。

確認面積 115.3m<sup>2</sup> (推定150m<sup>2</sup>)

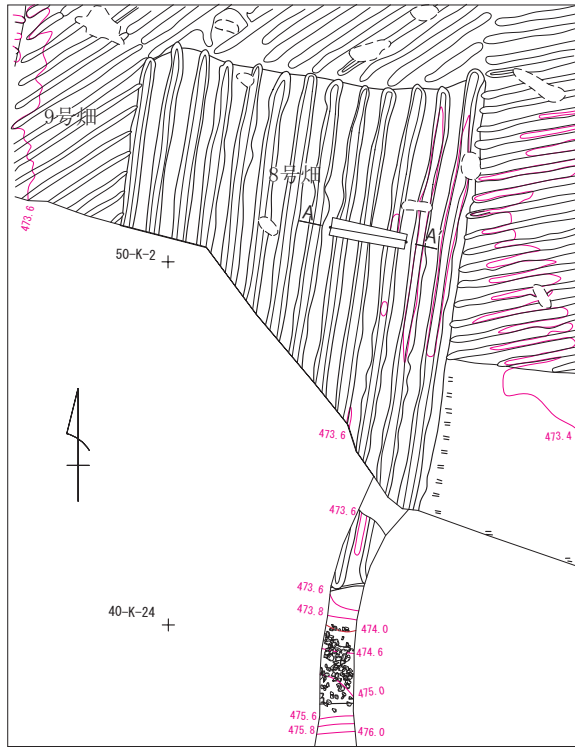
サク間 80~95cm

サクの長さ 15.9m

サク方向 N-9° E

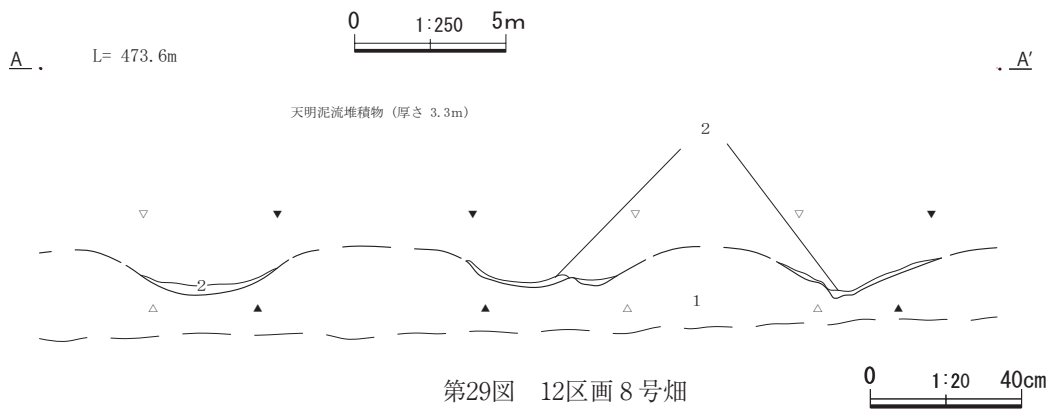
畝サクの高さ 5~14cm 全体に高め

地山傾斜 7/1000



土層説明

- 1 基本土層4層の弱粘性耕作土
- 2 As-Aのほぼ純層



第29図 12区画8号畑

12区画9号畑

斜め方向の畝サクのある短冊状に南北に長い12区画10号畑区画の南隅にあり、東側を南北方向の畝サクを持つ12区画8号畑に大半を取られた残り部分を畑とする特異な区画である。このような区画が80m東側にあり、『上郷岡原遺跡(1)』でⅢ区13号畑として取り上げられている。

東西幅4.4m、南北幅6m以上で長細い区画になると予想される。北側畑とはサクの深さで区別できるが、畝サク方向や間隔は全く同じである。東に隣接する12区画8号畑と部分的に重複するくらい密着しているが、西に隣接する12区画12号畑との境界に

わずかに隙間がある。

畝上は削平されて不明瞭だが、サク内にわずかだがAs-Aの堆積が見られる。

確認面積 25.7m<sup>2</sup>

サク間 55~70cm

サクの長さ 5.1m

サク方向 N-58° E

畝サクの高さ 最大3cm

地山傾斜 18/1000 西側が高い

12区画10号畑

区画は東辺が約14m、西辺が約11mで西側が狭い台形状を呈している。東西幅は16.6mで、斜め方向の畝サクが東側から2・4・6号と続いたが、これらの畑とほぼ同一規模である。そしてこの畑を西の限界として途切れる。

隣接する畑の様相は多様で、北側と南西側では東西方向、南側と北西側に南北方向の畝サクを持つ畑が接している。

サクを切るにあたり、平面形状の台形の対角線上(南西隅と北東隅)に基点を置いた可能性がある。

As-Aは畝内部に見られ、上面にAs-A混土を乗せ、サク寄せされている。サク内に軽石はほとんど見られない。

確認面積 202.6m<sup>2</sup>

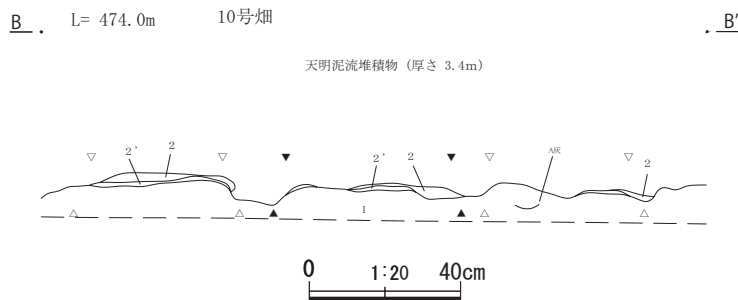
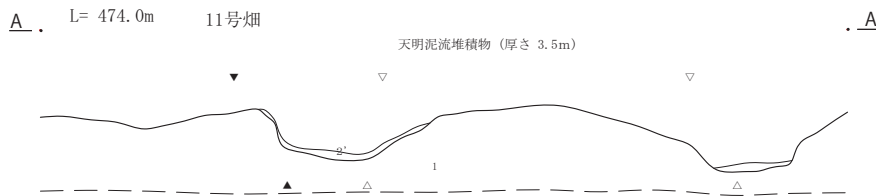
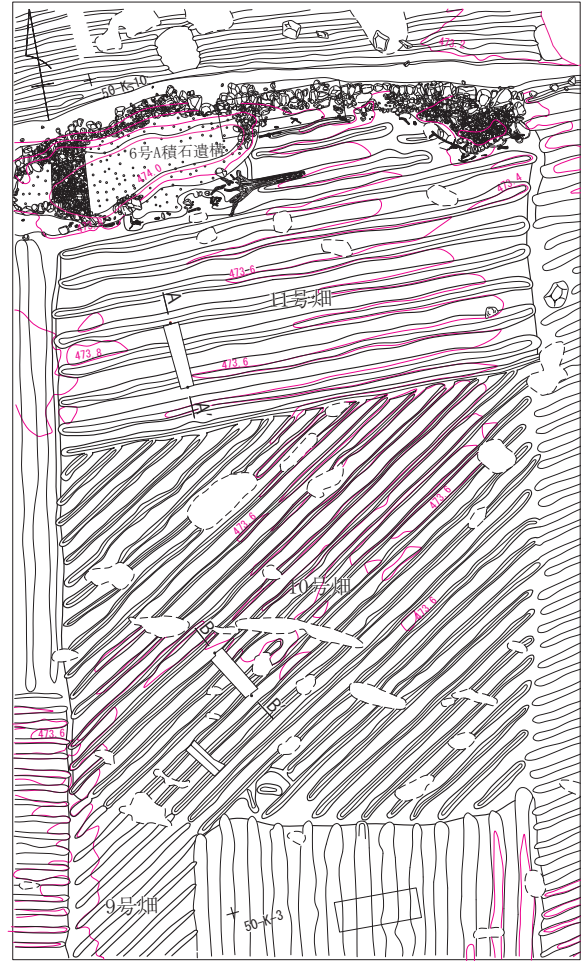
サク間 60cm前後

サクの長さ 最大20.4m

サク方向 N-57° E

畝サクの高さ 2~5cm

地山傾斜 15/1000 (北西側が高い)



第30図 12区画 9~11号畑



12区画11号畑

畝サクが北東側に隣接する12区画7号畑と同方向である。東西幅15.8m、南北幅は12mで、一部19.5mを計る。南東側に接する12区画6号畑との境のみ足幅の収まる隙間がある。北側は石積み遺構の裾部に接しサクは乱れている。断面かまぼこ形の良好な畝が残っている部分がある。東西幅いっぱいには切られたサクは7本あり、南側の12区画10号畑との境には小さな溝が設けられた可能性がある。

As-Aはサク内のにのみ薄く堆積していた。

確認面積 125.5m<sup>2</sup>

サク間 85~110cm

サクの長さ 15.9m

サク方向 N-87° E

畝サクの高さ 10~13cm

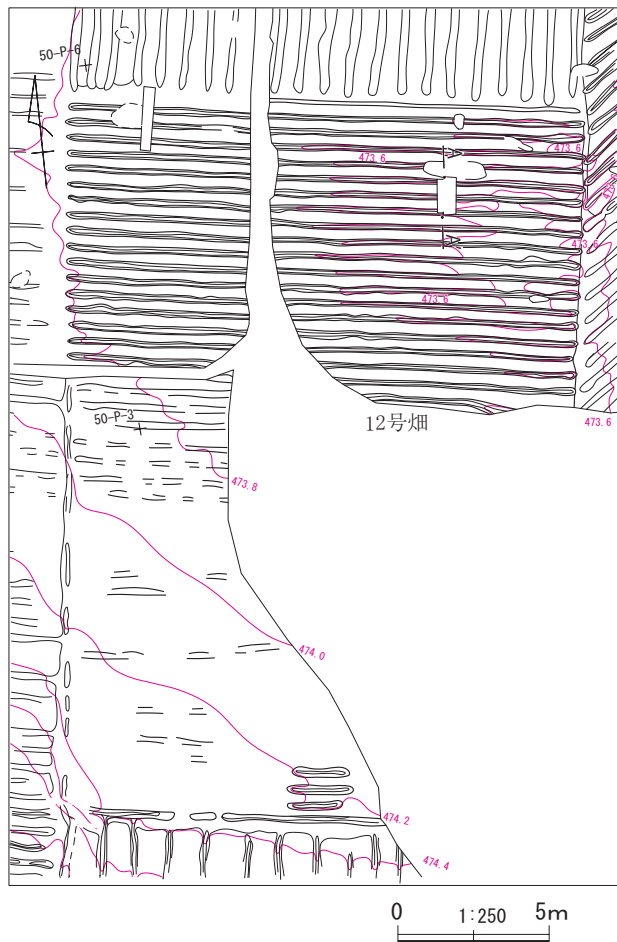
地山傾斜 7/1000

12区画12号畑

狭い畑だが、平成16年からの年度をまたいだ調査となった上、平成17年度にも二つの調査区にかかるため、一部で調査できなかつたり分かりにくくなった箇所が生じてしまった。北半分では畝サクの残存状態が良いが、南側ではサクの痕跡が部分的に確認できるのみである。調査段階では北側から収穫の始まった畑の可能性も検討したが、南側に作物痕跡がない。南北に二枚の畑があると想定すべきであろう。ただし両者の境は明確にできなかった。東西幅は16.4mで、北側に隣接する12区画13号畑へ繋がっている。

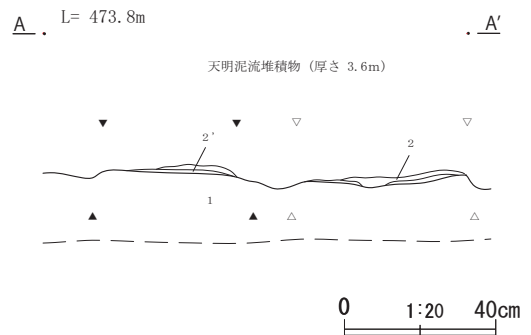
北側畑はサク方向が直線的な整った形状をもっている。西に隣接する15区画1号畑との間に狭いが通路となりえる隙間を持っている。東側・北側との畑との境界にも隙間がある。

不明瞭な南側畑は部分的にAs-Aの混じるサクの痕跡が残るのみである。サク方向は北側畑と同一のようだ。西側に隣接する15区画1号畑との間は、狭い段差状になっていて、道状に窪んだ部分が南北につながり、一部でAs-Aが見られる。南側に隣接する12区画14畑号に接するように3本のサクが径2mほどの範囲で残っている。ここは、東西幅のほぼ中央付近にあたる。平坦面に類する施設となろう。



土層説明

- 1 基本土層IV層の弱粘性耕作土
- 2 As-A混じりの1層土 2' はAs-A多い



第31図 12区画12号畑

As-Aは北側畑の畝内に見られ、その上にAs-A混じりの土で浅く覆われている。南側畑ではAs-Aは鋤き込まれている。

確認面積 395m<sup>2</sup> (推定)

サク間 45~55cm (北側)  
50cm前後か (南側)

サクの長さ 17.1m (北側)  
最大1.6m (南側)

サク方向 N-79° W

畝サクの高さ 3~6cm (北側)

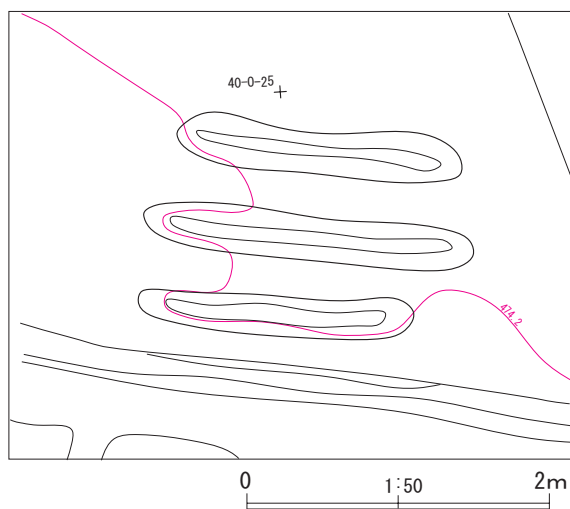
地山傾斜 26/1000 (全体)

平坦面部分のサク間が60cmあり、北側に残っている畑サク間より広がっている。サクの窪みは3cm前後で、畝は明確でない。施設周囲を囲う窪みは確認できない。

形状 ほぼ円形か。南隅にある畑境の溝と重複しないことから、六角形のような変則的区画になる可能性もあろう。

規模 直径2.2m前後か

**平坦面** 南側畑の南隅に3条のサク跡が円形状に残存している。周辺が平坦なのにこの部分のみサク痕が残るので、他の平坦面とは逆の状況である。このような痕跡は西側に隣接する15区画12号畑などにも見られる。畝サク上に設けられた施設部分を残して周辺が耕作されたものと推定し、円形平坦面と同一の施設と考え、平坦面の名称を使用した。17区画などで畑境脇に平坦面が作られやすい傾向とも矛盾しない。



第32図 12区画12号畑平坦面

第4章 IV区の調査

12区画13号畑

12区画12号畑同様、調査年度をまたいだ地点にある遺構のため、一部で不明瞭な部分がある。東西幅は16mで南側から繋がる畑と同規模である。平面形状は西側がやや狭い台形気味を呈しており、東辺は15m、西辺は13mを計る。

北側は積石遺構（ヤックラ）の脇を通る3号道に接している。崩れた礫の多い一画で畑内にも礫が混じっていた。サク端部も不明瞭な部分があった。東側・南側に接する畑との境界に隙間はない。北西側には幅約cmの4号道があり、境木が並んで植えられていた。南西側は4号道の延長部分にあたるが、道の痕跡は不明瞭で、境木も植えられていなかった。南北方向に20条のサクが数えられる。このほかに、東隣の隣の畑との境界に、やや幅狭いサクか溝か区別できないものが1条ある。畝は幅広だが、潰れたように明瞭でないものだった。

畑中央南寄りに人の足跡が集中して見られる地点があり、調査段階で耕作放棄を示す痕跡として検討したが、明確にできなかった。

As-Aはサク内で部分的に観察できる。作土内に軽石の混入はほとんどなく、中耕・サク寄せはされていないようだ。また、積石遺構周辺は吹き溜まったように軽石の堆積が厚かった。

確認面積 222.5m<sup>2</sup>

サク間 70~80cm

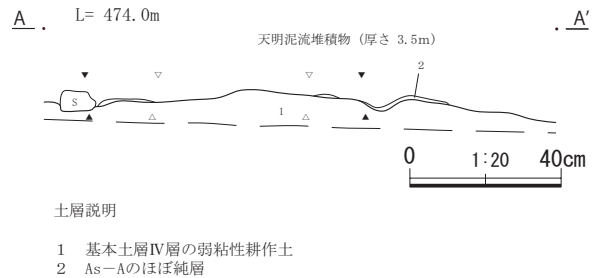
サクの長さ 最大14.8m

サク方向 N-10° E

畝サクの高さ 1~5cm未満の低い部分が大半である。

地山傾斜 10/1000

その他 平成17年度の調査範囲で草葎きの屋根らしい建物部材（22頁参照）が本畑直上で確認されている。



第33図 12区画13号畑

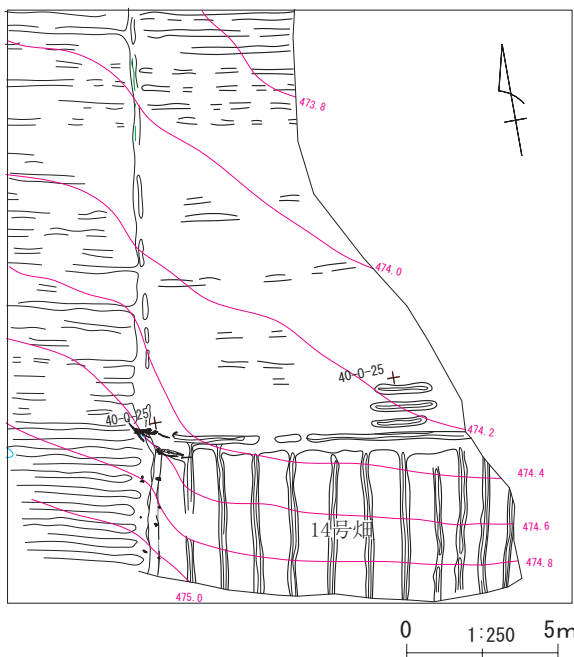
12区画14号畑

12区画12号畑の南側に浅い溝を隔てて隣接する、やや傾斜のきつい位置にある畑である。調査中も南側からの湧水の強い一画であった。

南北方向に畝サクのある畑は、本遺跡では畝間の広くなる傾向があるが、本畑は最も顕著な例であり、サク間110cmは本遺跡で確認できた畑中、最大である。平坦で幅広の畝に比してサクは細く、深かった。サク下端の北側隅は畑境界の窪みに繋がり、畑内に水気を残さないようにしてある。東側では畝の中央に1条加えたようなサクの痕跡もみられた。

西側に隣接する15区画の畑との間に本畑西隅にある段差で傾斜を整え、ねじれの無い斜面を作り出している。サクは等高線に対しほぼ直行する方向にあり、排水を意図した構造であろうか、きつい傾斜・広い畝間とともに特異な畑となっている。作土は比較的柔らかく良質に見えた。

As-Aはサク内にあり、上にAs-A混じりの土がやや厚く覆われていた。



第34図 12区画14号畑

確認面積 51.7m<sup>2</sup>

サク間 110cm前後 東隅で80cm前後に短くなる部分あり

サクの長さ 4.6m以上

サク方向 N-9° E

畝サクの高さ 8cm前後でほぼ均等

地山傾斜 106/1000

15区画畑

12区画畑の西側に位置するやや狭い区画である。北側と西側は道や境木で区切られ、東側も段差や道のある比較的明瞭な区画である。南側の限界は確認できなかったが、上位段丘縁部の急斜面裾部まであまり距離はない。

15区画1号畑

サクの痕跡は部分的に残るが、畝はほとんど確認できない南北に細長い畑である。北側を4号道で区切られている。東に隣接する12区画畑との境は南側へ向かうに従って段差を生じ、本畑側が若干高くなっている。西側の15区画3号畑との境は足幅程度の隙間があるだけである。

本畑南側では中央付近を境に、東西でサクの残存状態に差異が見られた。東側の方がサクの痕跡がやや明瞭で、西側はほとんど分からない。北側ではこの差異は認められないが、本畑が東西に二分される可能性もあろう。全体には不明瞭な部分が多く、調査段階で収穫の終わった畑との印象を持っていた。

As-Aはサク内で部分的に鋤き込まれた状態で確認できる。

確認面積 457.5m<sup>2</sup>

サク間 60cm前後の地点が広い

サクの長さ 最大でも4m前後しか確認できない

サク方向 N-81° W

畝サクの高さ ほとんど無い

地山傾斜 27/1000

#### 第4章 IV区の調査

その他 南端中央の畑境際に一面だけ畝サク3本が明瞭に残る部分がある。サクの深さは3cm前後でAs-Aが薄く堆積していた。東側に隣接する12区画12号畑にも同様の施設があり、規則的に並んでいる。周囲の窪みは確認できないが、平坦面に類似する施設痕跡の可能性がある。サク間が北側で60cm、南側で45cmと一定ではない。

規模は直径1.8m前後の円形もしくは北側が狭い台形の区画となろう。

#### 15区画2号畑

15区画1号畑の南側に続く畑である。南西側が高い、畑としてはきつい斜面にあり、畑北東隅とは1m近い比高差があった。

泥流直下では15区画1号畑同様に不明瞭な畑でサク痕は見えなかった。図ではサク内のAs-Aを除去した後の明瞭なサクの痕跡を示している。泥流直下の他の畑図と時間差を生じている。調査できたサクは8本のみだが、東西の両端が明瞭で規模は捉えやすかった。西側の畑とはサクが規則的に互い違いになっている。東に隣接する12区画14号畑との境界はやや強い段差で、本畑が高位になっていた。

As-Aはサク内に厚く堆積し、攪拌しないまま作土で覆っていた。泥流直下では畝サクの確認はできない状態だが、柔らかな作土の面であった。

確認面積 57.5m<sup>2</sup>

サク間 55cm前後

サクの長さ 14m

サク方向 N-78° W

畝サクの高さ 最大15cm 10cm以上の地点が大半である

地山傾斜 76/1000



第35図 15区画1・2号畑

#### 15区画3号畑

15区画1・2号畑の西側に隣接する。北側は4号道で区切られ、北西隅は1号建物に隣接している。

南北幅35m以上の短冊形の細長い区画であるが、ここを分割する根拠はない。南側の未調査部分へさらに広がっている。傾斜のきつい南隅と平坦な北隅では地山の傾斜も大きく異なっている。全体で

65本のサクを調査したが、ほとんどのサクが両端まで確認できた。

As-Aはサク内を中心に畑面を広く覆っていた。鉄分の凝集もやや多い区画であった。

確認面積 442m<sup>2</sup>

サク間 45から55cm 平坦な北側も同じ幅なので、斜距離を考えると南側の方が幅広である。

サクの長さ 最大13.3m

サク方向 N-79° W

畝サクの高さ 2~7cm 南側が高めである。

地山傾斜 44/1000

15区画4号畑

南側に隣接する15区画5号畑と併せて、広い区画の畑の余剰帯のような極端に細長い区画に作られた、5本のサクのみの変則的な畑である。北側には1号建物が隣接し、北西隅で5号道の石敷き部分が終わっている。西側は5号道の続きだが石敷きは見られない。東側の15区画3号畑との境は足幅を確保するのも難しいような隙間しかない。

周辺は東西方向の畝サクに囲まれているが、本畑のみ南北方向のサクとなっている。

As-Aはサク上を中心に畑全面に見られた。

確認面積 22.3m<sup>2</sup>

サク間 50cm前後

サクの長さ 9.3m

サク方向 N-13° E

畝サクの高さ 3cm前後

地山傾斜 西側がわずかに高いが、ほぼ平坦。

15区画5号畑

15区画4号畑の南側に続く、南北に細長いきわめて狭い畑である。南に向かってさらに狭くなっている。東西両側に隣接する畑が規則的なのに比べ、隙間を埋めたような印象の畑である。北隅4号畑の境がやや広く、ここを通路として5号道がクランク状に曲がっていたと思われる。

本畑の西側に境木が植えられおり、調査時には畑

全体がこの倒木の下に隠れるようになっていた。

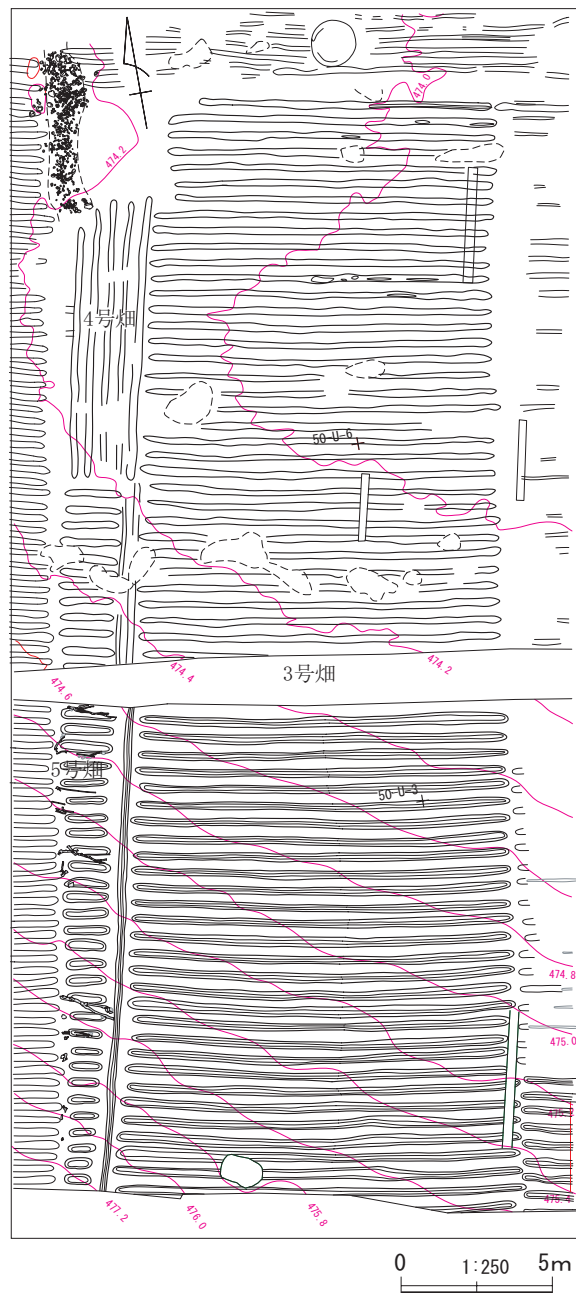
As-Aは畝サク両者上に比較的厚く堆積していた。特に境木根元部分には吹き溜まるように厚い部分があった。

確認面積 61.8m<sup>2</sup>

サク間 55cm前後 サクの長さ 1.8m

サク方向 N-88° W 畝サクの高さ 5~11cm

地山傾斜 78/1000



第36図 15区画3~5号畑

16区画畑

15区画畑の西側に広がる畑である。畝サクの向きが東西方向に集中するのを特徴としている。北側の境界が分からないが、12区画と並ぶ大規模な畑となる可能性がある。畑表面付近には鉄分凝集が多く見られ、植物遺体やAs-Aを固め、畑面の精査は難しい部分もあった。大半は麻畑とおもわれるが、麻が生育すれば中区画の境界は全く見えず、一面の麻原となっていたはずである。平成14年度に調査した上郷岡原遺跡I区からII区へ繋がる畑と同様の景観が広がっていたようである。

16区画1号畑

南北に細長い短冊形の畑である。畝サクの間隔が狭く、長軸方向に並ぶ円形平坦面の列が確認できる。この畑から西側へ類似した形状の畑が、途中で道や境木をはさまずに続いていた。

南側の傾斜面から北側の平坦な面へ向かった地形にある。東側は変則的な15区画4・5号畑に接しており、南半分では境木、北半分では5号道に区切られている。北側の限界は泥流に削られて把握できない。西側は本畑に類似した16区画2号畑があるが、境はサクの端部でかろうじて確認できるもので、足幅を確保する隙間もないほど狭い。作物が生育すれば全く見えなくなる境であろう。南側は16区画3号畑に接している。

収穫前の麻畑であり、倒れた麻の茎が畑直上に確認できる。倒れた麻は南側ほど多かった。

As-Aはサク内に見られたが、部分的に畝頂部付近の窪み内に筋状に堆積している。南側ほど多く堆積していた。畝内にも僅かに観察されたが、鋤き込まれたものか、浸み込んだものか判別できなかった。

確認面積 650㎡以上

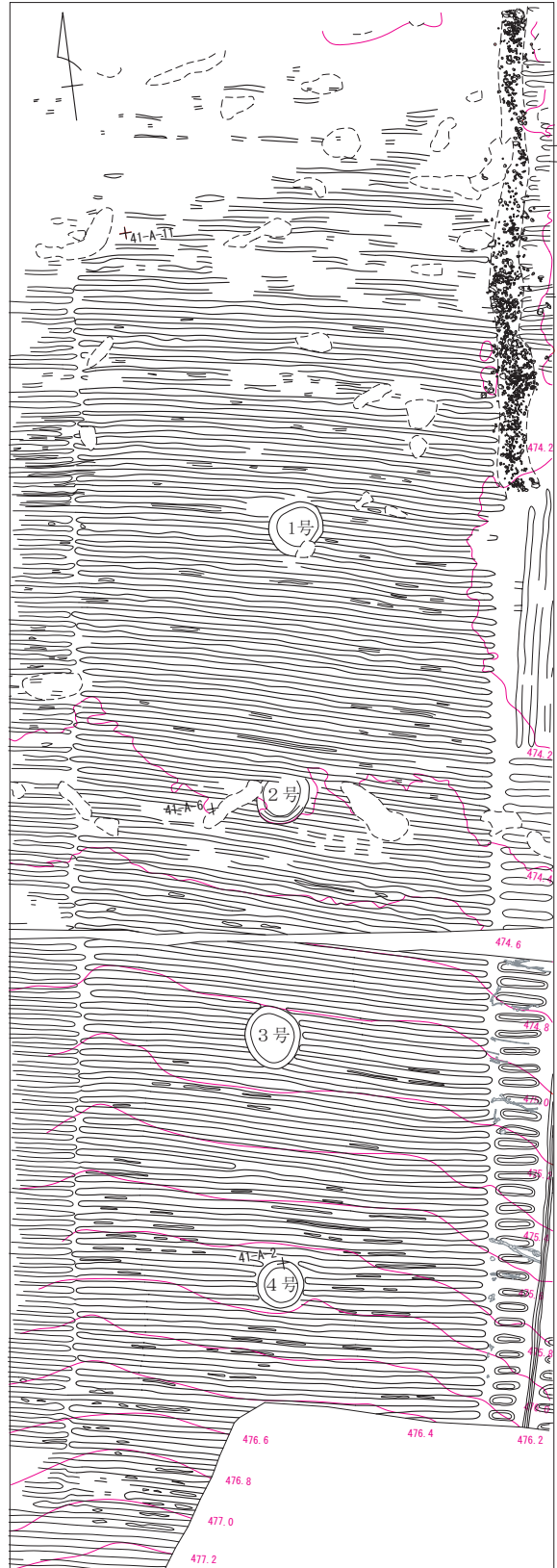
サク間 40cm前後

サクの長さ 13.9m

サク方向 N-73° W

畝サクの高さ 6cm前後 北側ほど浅めである

地山傾斜 110/1000 (南隅) 北側はほぼ平坦



0 1:250 5m

第37図 16区画1号畑

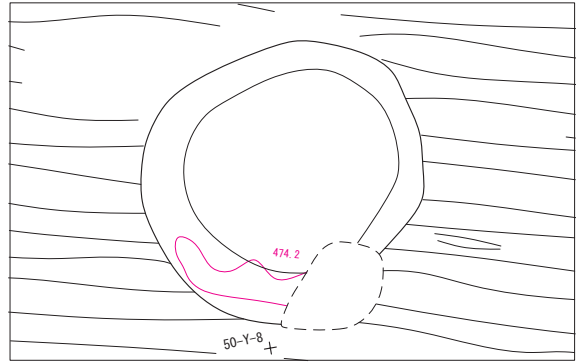
確認できた円形平坦面は4箇所、畑中央軸線上からわずかに西に逸れた位置に並んでいる。規模は一樣ではない。いずれも縁辺の窪みがわずかに確認できた。この平坦面は北側へ続くものと思われるが推定位置は攪乱されており、発見できなかった。

1号円形平坦面

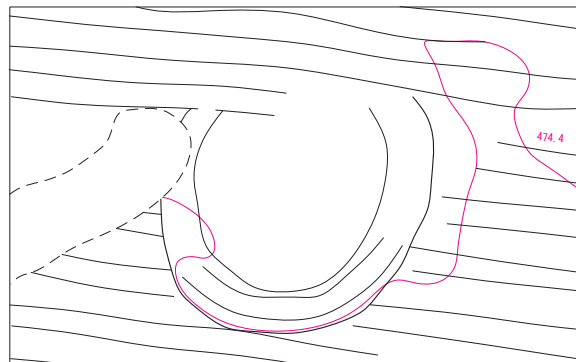
畝サクのあまり明瞭でない地点で確認されたもので、泥流による圧痕も加わり、きわめて不明瞭であった。畝サクと窪みとの新旧関係も明確にできなかった。平坦面直上にAs-Aは見られないが、畝サク部分との差異も明瞭ではなかった。

形状 不整円形 ほぼ平坦である。

規模 長軸1.95m×短軸1.72m 窪み幅33~17cm



1号円形平坦面



2号円形平坦面

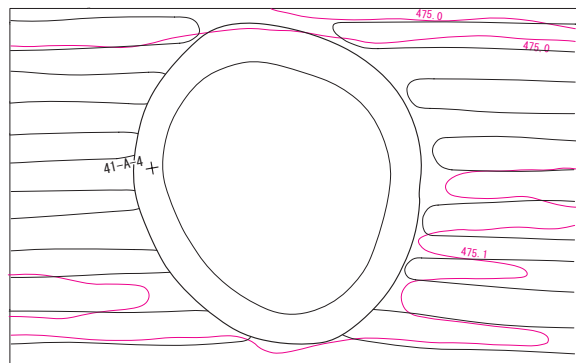
2号円形平坦面

1号平坦面同様に不明瞭な施設である。北隅付近は特に不明瞭だが、全体は平坦面縁辺の窪みがサクを切っているように見えた。

形状 不整円形

規模 長軸推定1.9m×短軸1.7m

窪み幅30cm前後



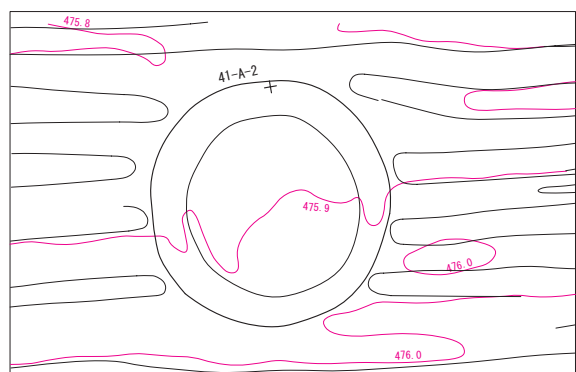
3号円形平坦面

3号円形平坦面

北側2基に比べ明瞭で、サクが平坦面窪みの直前で終わっているのが数地点で確認できた。地山傾斜に沿って北側へ低く10cmほど傾斜している。

形状 不整円形 ほぼ平坦である

規模 長軸2.2m×短軸1.9m 窪み幅18~26cm



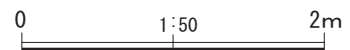
4号円形平坦面

4号円形平坦面

残存状態は4基中最も良く、畑サク端部が平坦面の前で止まるのが全体で確認できた。平坦面を意識して曲がったサクもあり、耕作段階でも平坦面が意識されていたことが分かる。上面にAs-Aあり。地山傾斜に沿って北側へ低く15cmほど傾斜していた。

形状 ほぼ円形

規模 長軸1.65m×短軸1.6m 窪み幅25cm前後



第38図 16区画1号畑円形平坦面



16区画2号畑

南北に細長い短冊状の畑である。形状の類似した東側の16区画1号畑と西側の4号畑に挟まれている。それぞれの畑との境界はサクの切れ間で確認できるが、通路には難しい狭い隙間しかない。

南側の高い緩やかな傾斜面にあり、畝サクは等高線に沿うように作られている。北半はほぼ平坦である。本畑上のE-7グリッド付近で1号壁（本文11頁）が見つかった。泥流でなぎ倒された麻が多量に確認された地点でもあり、収穫前の麻が繁茂していたことが分かる。

As-Aはサク内を中心に比較的良好に残存していた。畝頂部の筋状の窪みも部分的に観察された。耕作土内に見られる僅かなAs-Aは、鋤き込まれたものか浸透したものか判別できなかったのは16区画1号畑と同じである。

確認面積 460m<sup>2</sup>以上

サク間 35~40cm

サクの長さ 13.6m

サク方向 N-77° W

畝サクの高さ 7cm前後 北側ほど浅めである

地山傾斜 115/1000（南隅） 北側はほぼ平坦

16区画3号畑

16区画1・2号畑の南側に接する畑である。両畑との境には隙間がなく、サクの間隔が広めで、南北方向へ続く畑境が見えないことで、別畑であることに気付いた。南側の上位段丘面へ向かう傾斜のきつい斜面にあった。上位段丘裾部分までは間近なはずで、小規模な畑となろう。

As-Aの確認状況は北側に隣接する畑と同様であった。

確認面積 31m<sup>2</sup>

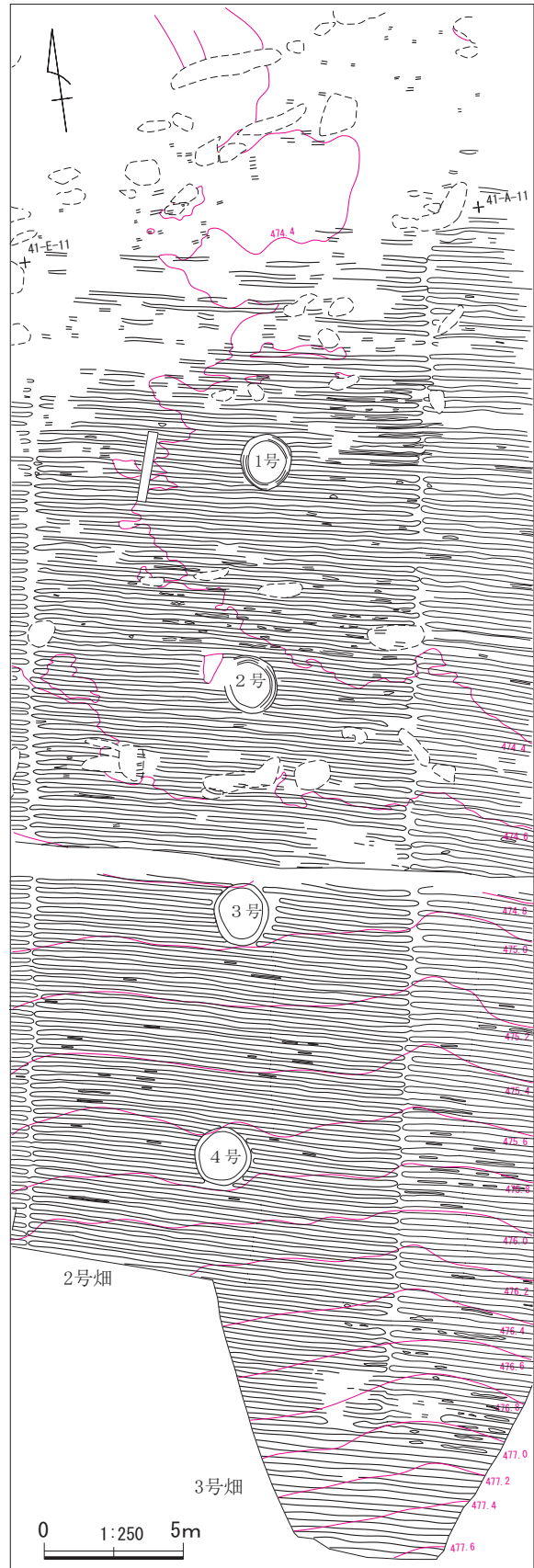
サク間 40~50cm

サクの長さ 最大で8.9m

サク方向 N-78° W

畝サクの高さ 5cm前後

地山傾斜 135/1000



第39図 16区画2・3号畑

第1節 第1面の調査

16区画2号畑で確認できた円形平坦面は4箇所  
で、畑中央軸線上から東に逸れた位置に並んでいる。  
規模はおおよそ一様である。いずれも縁辺の窪みが  
わずかに確認できた。1号平坦面の北側は攪乱され  
ており、この先の平坦面は発見できなかった。

1号円形平坦面

畑のサクの状態はあまり良くなかったが、平坦面  
縁辺は2～3cm窪んでいる箇所があり、窪み部分  
上でAs-Aが見られた。サクとこの窪みの新旧関係  
は確認できなかった。

形状 南北軸がやや長い不整円形

規模 長軸2.05m×短軸1.8m

2号円形平坦面

1号平坦面に同様の状態で確認された、類似した  
施設である。北西隅付近は攪乱の影響により不明瞭  
で、全容は明らかにできなかった。

形状 南北軸がやや長い不整円形

規模 長軸2.15m×短軸1.9m

3号円形平坦面

周辺の畑サクの残存状態がよいため、本施設手前  
でサクが切れているのが確認できた。東側で本施設  
と畑サクとの隙間が広がっているのが、他の施設  
にない特徴である。地山傾斜に沿って北側が20cm  
低く傾斜していた。

形状 南北軸がわずかに長くなる不整楕円形

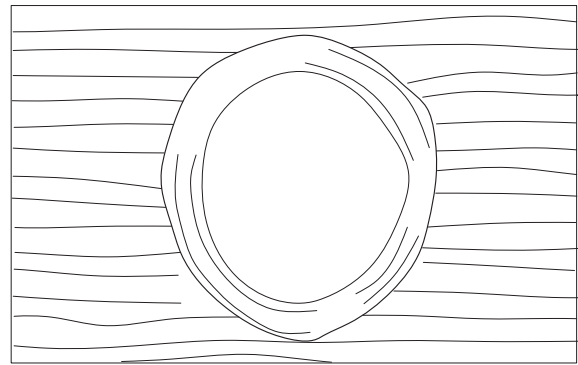
規模 長軸2.25m×短軸1.9m

4号円形平坦面

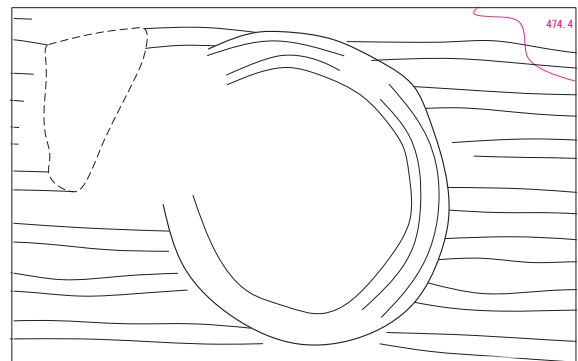
サクの端部が本施設にかなり近接して隙間がほと  
んどない。地山傾斜に沿って北側が20cm低く傾斜  
していた。

形状 ほぼ円形

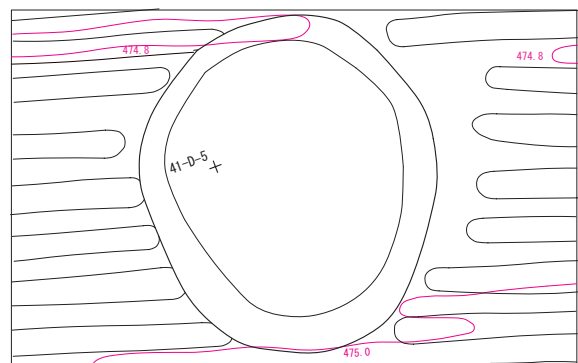
規模 長軸2.05m×短軸1.9m 窪み幅10cm前後。  
傾斜面にあるため平面図は円形に近いが、斜距離が  
あるので、長軸は他の平坦面に近い。



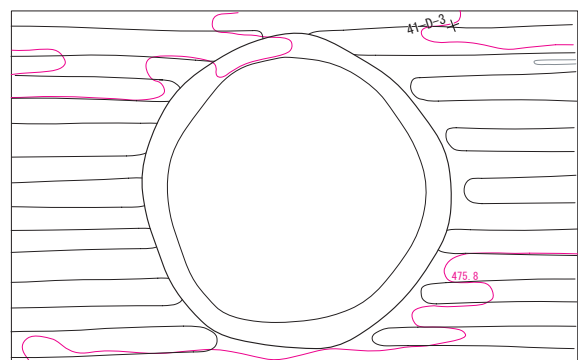
1号円形平坦面



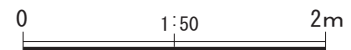
2号円形平坦面



3号円形平坦面



4号円形平坦面



第40図 16区画2号畑円形平坦面

16区画4号畑

16区画2号畑の西側に隣接する南北に長い短冊形の畑である。南側は上位段丘へ向かう緩やかな傾斜面で、北側は平坦だが泥流による攪乱が多く、特に西側16区画5号畑との境界は不明瞭となる。

畝サクの方向が畑長軸から直角方向にならず、16区画3号畑と比べると西隅が北側に向かって若干斜行している。等高線に平行するよう地山の僅かな変化に沿って畝サクが作られたためと思われる。

南側を中心に部分的に泥流によってなぎ倒された麻が確認でき、16区画1～3号畑同様に収穫前の麻畑であったことが分かる。

As-Aの残存状態も、周辺の畑同様でサク内に堆積し、部分的に畝頂部の窪みに畝方向に沿って細長く筋状に堆積している箇所があった。

確認面積 370㎡以上

サク間 35cm前後

サクの長さ 13.2m

サク方向 N-75° W

畝サクの高さ 5cm前後

地山傾斜 72/1000 (北隅) 南側はほぼ平坦

その他 2基の円形平坦面を確認した。周辺の平坦面よりやや小型である。北側へさらに続くはずで、想定される位置付近はサクが確認できる一画であるが、精査にもかかわらず痕跡は確認できなかった。畑中央軸線上から西に逸れた位置に並んでいる。東西両側に同じように並ぶ16区画3号畑および5号畑の平坦面と横並びを意識した配置には見えない。

1号円形平坦面

調査次数の境界部分にあたり、南側半分を調査できなかった。残存状態の良くない畝サク部分にあり痕跡がわずかに見えた程度であった。縁辺部の窪みは深さ1～2cm程度しかない。サクの端部も不明瞭であった。

形状 円形に近い。

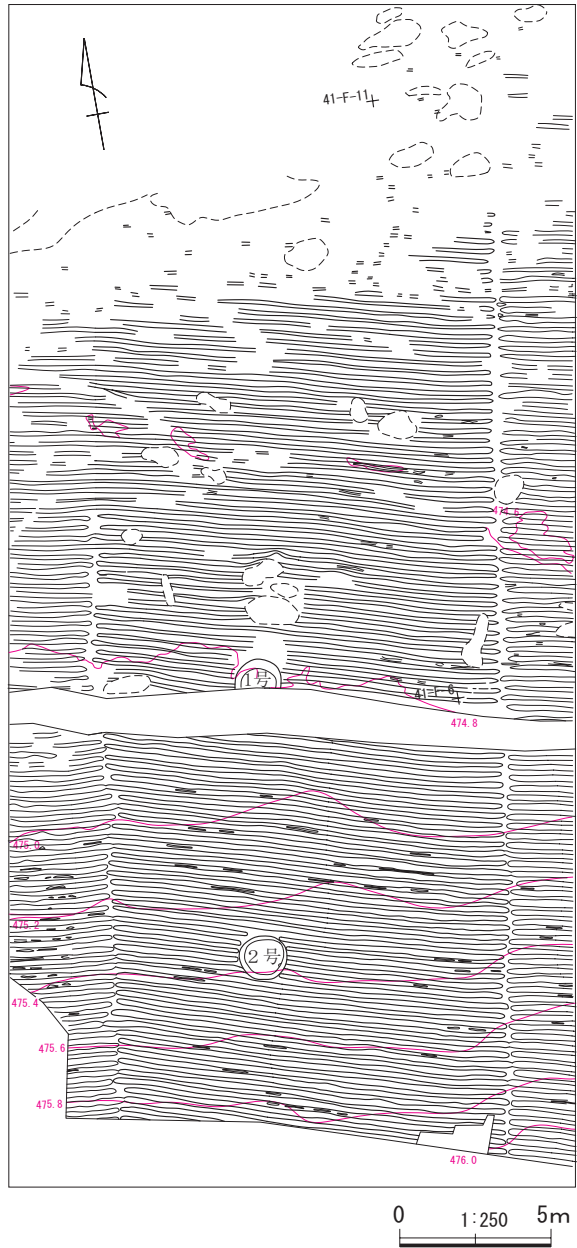
規模 径1.5m、窪み幅17～38cm

2号円形平坦面

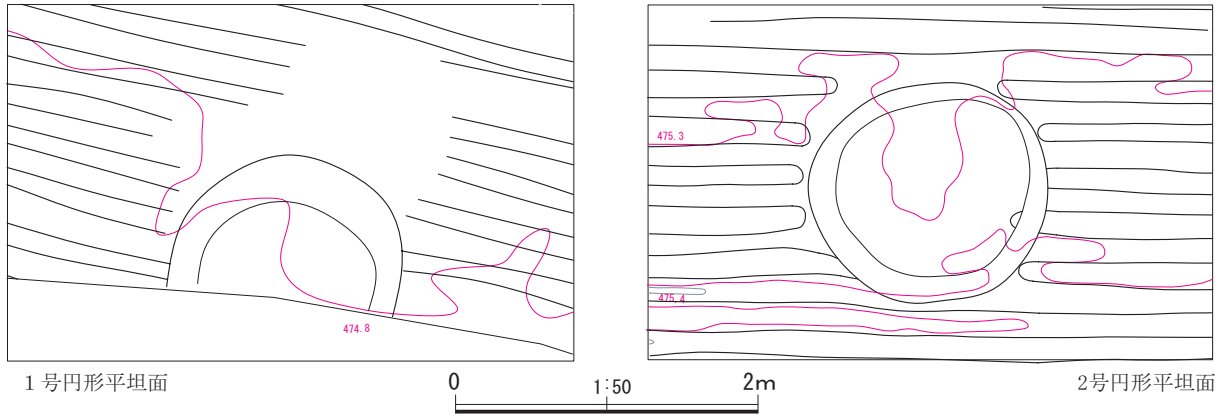
サクの比較的明瞭な緩斜面にあった。地山傾斜に沿って北側が15cmほど低くなっている。また平坦面の中央が僅かに窪むのも特色である。サクは平坦面直前で途切れているが、北側で隙間が広がっている。東側に1ヶ所のみサクが平坦面部分にはみ出した可能性のある窪みが見られる。

形状 ほぼ円形

規模 長軸78cm×短軸72cm



第41図 16区画4号畑



第42図 16区画4号畑円形平坦面

16区画5号畑

16区画4号畑の西側に隣接する畑である。南北に細長い短冊形の区画となることは周辺の畑と同様である。地山がやや北西側に向かって低くなる傾斜地であるが、畝サクは畑区画に沿って作られ歪みはほとんど見られない。東側に隣接の16区画4号畑とは斜面部分で境界が明瞭に分かるが、北側の平坦部分では両畑の境は不明瞭になっていく。周辺の他の畑と比べ、サク端部が入り乱れて揃っていない。西側に隣接する16区画6号畑との境界は、他の畑と逆に北側の平坦な部分でのみ確認できた。

円形平坦面が1ヶ所だけ確認できた。長軸中央のやや西側に配されている。15号畑同様の小型施設である。北側にこの施設は続くはずであるが、サク跡が見えているにも関わらず確認できず、15号畑と同じように確認できなかった。

調査地点南隅から南西側に約7m離れた現道直下の傾斜地に設けたグリッド調査で、畑が続くことを確認した。16区画3号畑に類似する畝間のやや広い畑であると思われる。本畑とは切り離して考えたい。

本畑のAs-Aは比較的厚く堆積しており畝上部でも確認できた。



第43図 16区画5・6号畑

#### 第4章 IV区の調査

確認面積 280m<sup>2</sup>以上

サク間 35~40cm

サクの長さ 12.4m

サク方向 N-82° W

畝サクの高さ 4 cm前後

地山傾斜 72/1000 (北隅)

##### 1号円形平坦面

北東側が低い緩やかな斜面にある。本施設周囲のみサク跡がかなり乱れていて、畑サクと本施設との先後関係も確認できなかった。縁辺の窪みはごく僅かで不明瞭なものであるが、As-Aの堆積が確認できた。

形状 東西方向が長い不整楕円形

規模 長軸1.75m×短軸1.4m

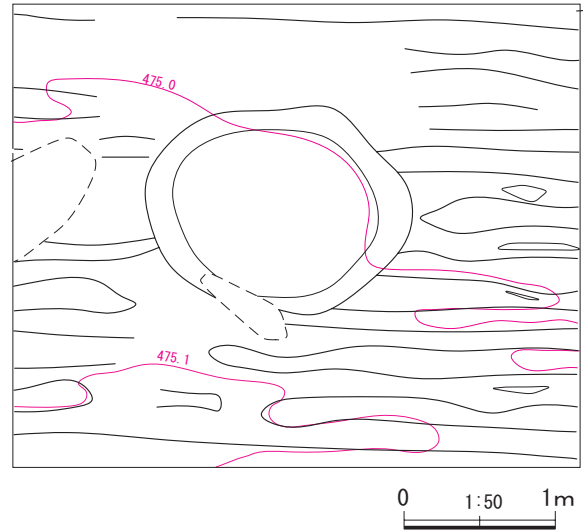
##### 16区画6号畑

16区画5号畑の西側に隣接する畑である。畑境は南側で不明瞭だった。北側はサク端部が確認できた地点が多かったが、5号畑から繋がるように見えた部分もあった。サクの形状は東側から続いた畑と同様である。おおよそ等高線に沿ったサク方向である。

本畑も周辺畑同様の南北に細長い短冊形の畑と考えるのが妥当であろう。本畑西側は調査できなかったが、上位段丘が舌上に張出す斜面に向かっており、本畑と同規模の畑がさらに西側に続くとは考えにくい。16区画の西端を占める畑になると想定した。16区画全体が麻畑だったと思われ、東西幅は80m以上になる。100m以上の東西幅のあるI~II区に次ぐ規模である。

南西側の上位段丘面斜面からの湧水が激しい地点であり、麻と思われるなぎ倒された作物も鉄分とともに凝集していた。地山も鉄分の凝集が進み硬化が著しい地点があった。このため畝サクの確認状態はあまり良くなかった。

円形平坦面の存在が予想される畑だが、調査範囲には確認できなかった。



第44図 16区画5号畑円形平坦面

As-Aの残存状態は周辺の畑同様にサク内中心に見られ、畝上にも部分的に見られた。中耕・サク寄せの痕跡は不明であった。

確認面積 60m<sup>2</sup>以上

サク間 35cm前後

サクの長さ 7.2m

サク方向 N-83° W

畝サクの高さ 4 cm前後

地山傾斜 31/1000

17区画畑

15区画1・3号畑の北側に境木を持つ4号道があり、この道を隔てて北側に広がる畑である。東西両側も道で挟まれていて、境木が植えられている。周辺の大区画が極めて広いのに比べ、当区画は狭いが、境木で囲われた特異な一画となっている。泥流による削平のため北側の限界は分からない。

比較的残存状態の良かった本畑南東側付近からは泥流になぎ倒された麻が確認されている。西隅5号道際のV-13グリッド付近は麻と思われる根がまとまって廃棄されていた(PL23)。付近には麻の葉のみ集中して見られる地点もある。これらの状況から麻を収穫し、葉や根を切った作業の痕跡と推測した。本畑の南西隅に接している1号建物は麻を収納する施設と考えられる。この建物周辺から収穫作業を着手し、作業空間を広げながら収穫作業を継続したと考えるのは作業工程から妥当であろう。周辺の麻畑

の大半には収穫前の麻が残っていたようで、泥流被害は収穫作業開始直後であったと推測する根拠となるものである。

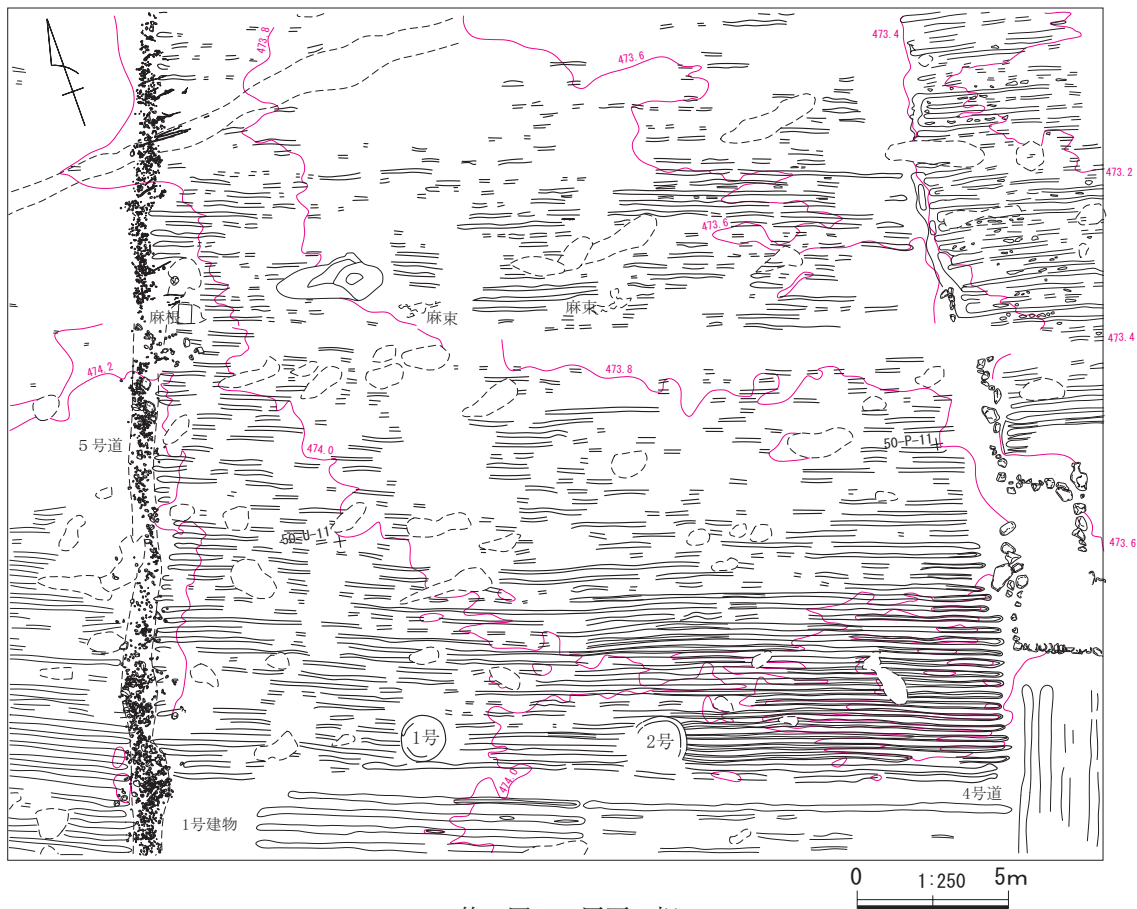
17区画畑全体は北側が狭くなっている。畝サクの痕跡は南東隅付近を除いてあまり明瞭でない。西隅の5号道際は境木に守られたためか、サクの端が残存している。ここで見られるサクの様子の違いから、南西隅から9m付近と17m付近で区画が南北に分けられる可能性がある。

南隅の4号道際に2基の円形平坦面がある。この畑が東西2枚に区切られることを示唆すると思われるが、精査にも係わらず境界の痕跡は確認できなかった。平坦面自体も中央寄りに偏ったもので、全体を二分するには不自然である。

As-Aは全域で不均等に見られた。

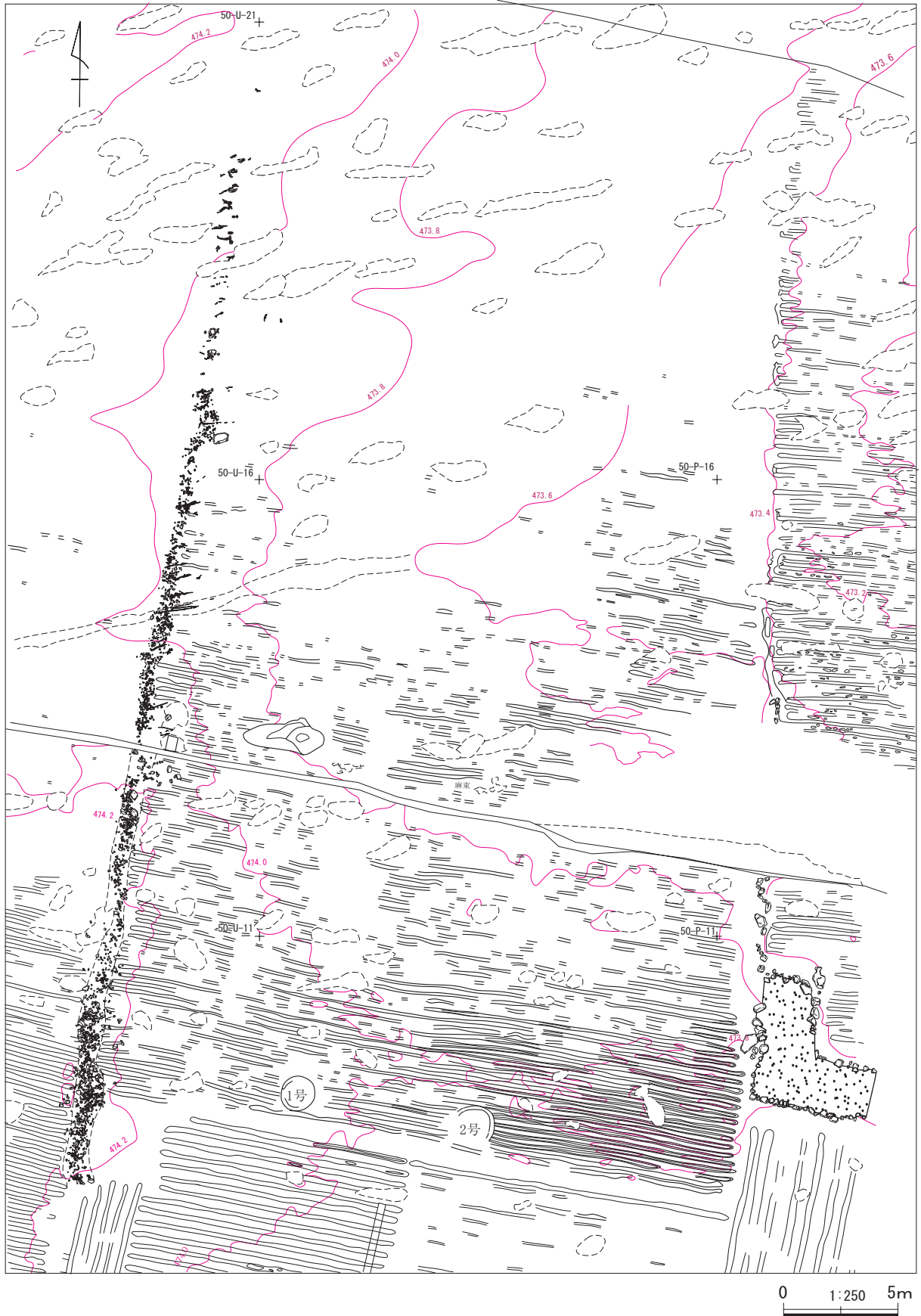
確認面積 1000m<sup>2</sup>以上

サク間 30~40cm



第45図 17区画 畑





第47図 17区画北畑



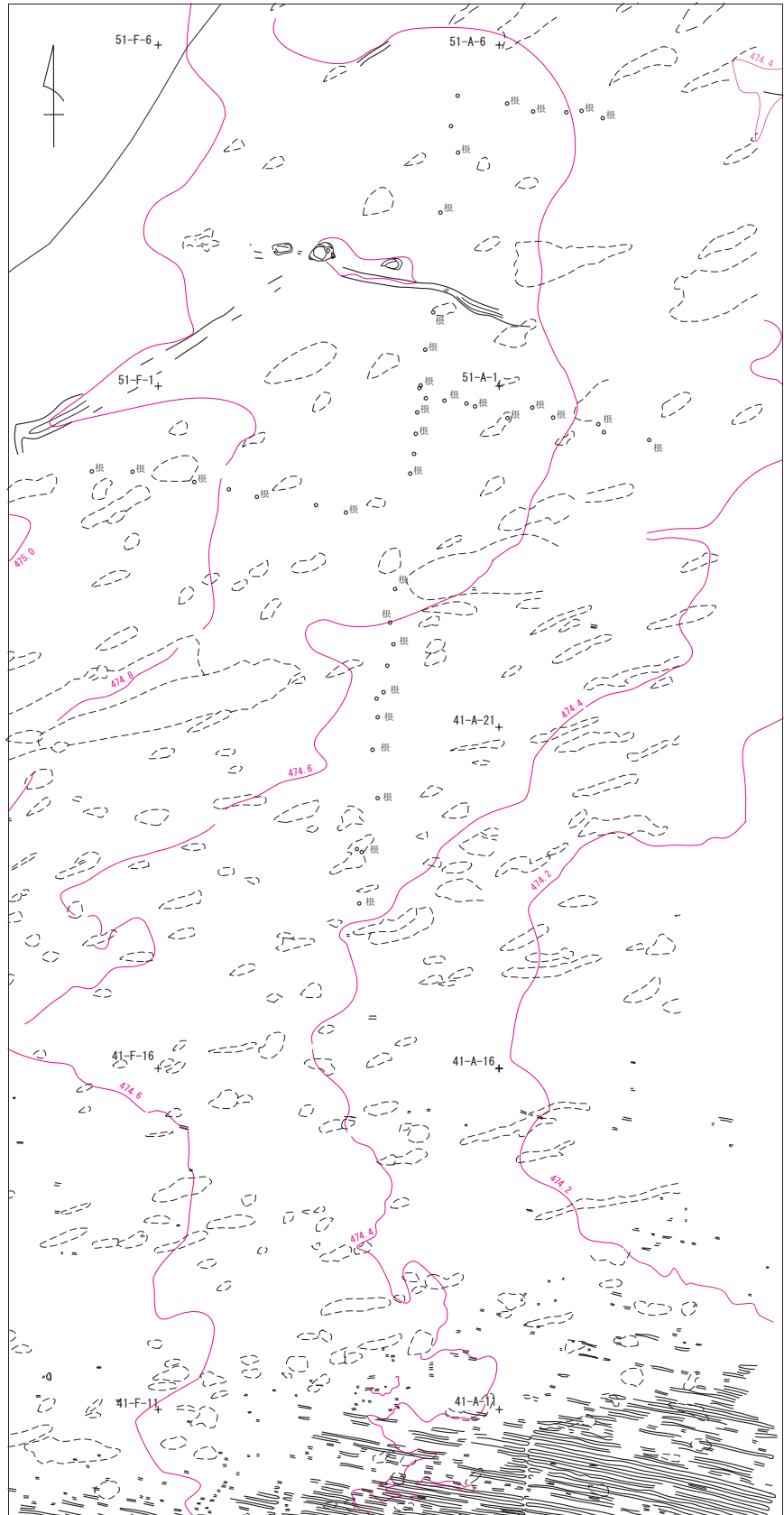
北西隅付近の畑

付近は標高474m台で、西側がやや高い緩やかな傾斜面にあたる。泥流による削平が著しく畝サクはほとんど残存していなかった。わずかに東西方向へ延びるサク跡らしいAs-Aの混じった窪みが見られたが、明瞭なものではない。

空洞状になって根の部分が残った境木の列によって畑区画が想定された。いずれの境木列にも道の両脇に植えられたことを推定させるような2本組みの配置は見られない。

中央に南北に延びる境木列は16区画2号畑と4号畑の境界部分から続くと思われる。長さ23m以上が確認できる。16区画から続く畑であれば115mにおよぶ直線的な区画であったことになる。しかし、16区画畑では境木は見られなかったため、図示した部分は別の大区画と考えられよう。16区画畑との間には東西の区画境が存在したことが想定される。

東西には3本の境木列が想定されるが、あまり明瞭なものではない。南北に延びる境木列から直交方向に派生するように延びている。北側から1列目と2列目の間隔は約9mあるが、西にある3列目は2列の延長線上約3.5mしかない。



第48図 北西隅畑

14区画畑

東側の13区画畑、西側の17区画畑に挟まれた南北に細長い変則的な畑である。4次に渡る継ぎはぎ調査の境界にあり、未調査部分を生じてしまった。西側畑との境界は南隅で6号B積石遺構（ヤックラ）から続く狭い道で区切られ明瞭で、これに沿って畑サクの切れ目が確認できる。東側の境界は不明瞭だが、平成16年度調査地点で積石遺構がクランク状に屈曲する位置から北へ向かう道が確認されているので、区画境は存在すると考えた。ただし、平成17年度調査地点ではこの道は判別できなかった。

この区画が存在するなら、東西幅18.5m、南北幅33m以上の範囲となる。

As-Aは本畑南隅の積み石遺構周辺では、畝サク全面を覆うように厚く堆積していた。北側の不明瞭な地点ではサク内にもみ見られた。

確認面積 500㎡以上

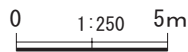
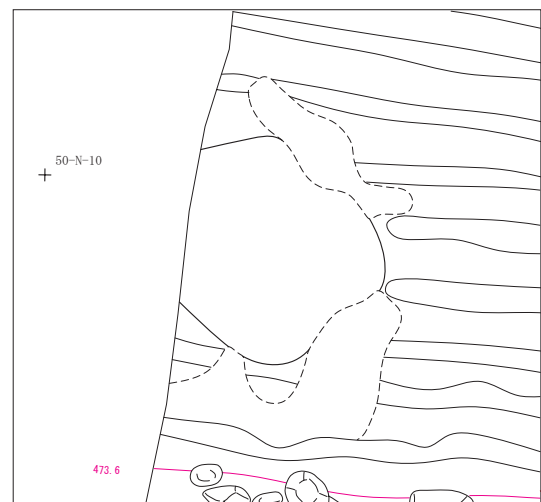
サク間 30~40cm

サクの長さ 確実なのは9m部分のみである。

サク方向 N-84° E 一様ではない

畝サクの高さ 南隅のみ5cm前後 他は2cm以下

地山傾斜 ほぼ平坦で東側へ低く傾斜

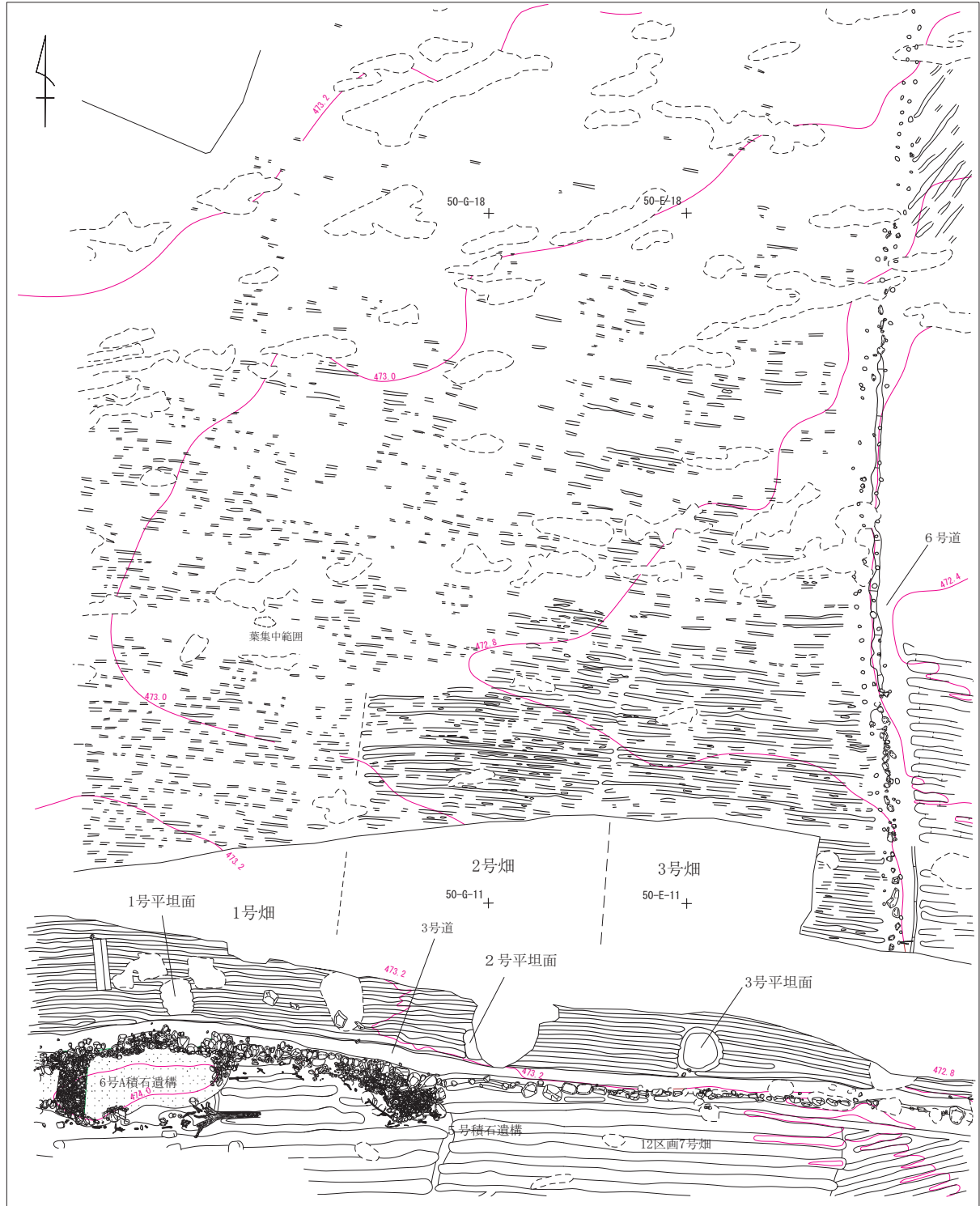


第49図 14区画畑および平坦面

第4章 IV区の調査

**平坦面** 南隅の積石脇の隙間付近に畝サクの切れる径1.5m前後の円形部分があり、平坦面を想定した。円形部分縁辺の窪みは確認できないが、隣接するサクが端部を見せて切れている。

平坦面の位置が畑東西幅のほぼ中間にある。周辺はサク間の狭い麻畑と思われる区画であり、他の平坦面と矛盾しない。



第50図 13区画畑

13区画畑

西から南へ向かってやや低くなるほぼ平坦な立地にある。南側を3号道で、東側を境木のある6号道で区切られた区画である。北側の限界は不明である。西側14区画畑との境界も不明瞭である。

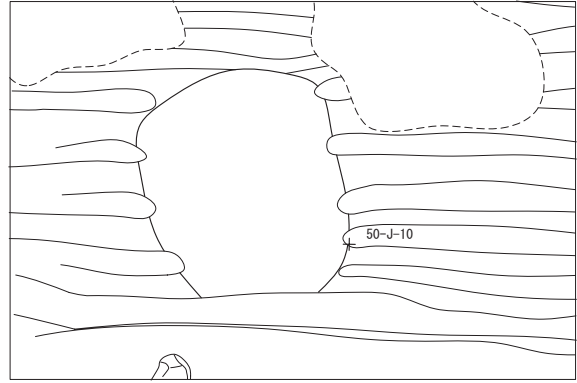
南隅の3号道際に東西に並ぶように3箇所の円形平坦面があり、3つ以上の中区画畑が存在するはずである。西側より1号から3号の畑とした。区画境が明瞭ではなく、北側ではサク端部を目安に50図破線のような境を想定した。畝サクが明瞭な南側で畑境が確認できないので、未調査部分に東西方向に走る境界が存在する可能性もある。

13区画全体では東西幅36mほどの規模となりそうで、サク間の狭い麻畑が想定される畑である。

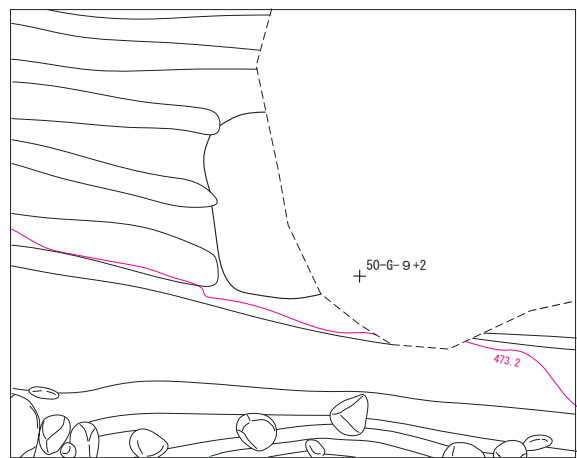
1号円形平坦面

サクの切れ間で存在が確認できたが、きわめて不明瞭な施設である。平坦面の中までサク端部が切り込んでいる。

形状 南北方向に長い不整楕円形  
規模 1.05m×0.78m



1号円形平坦面

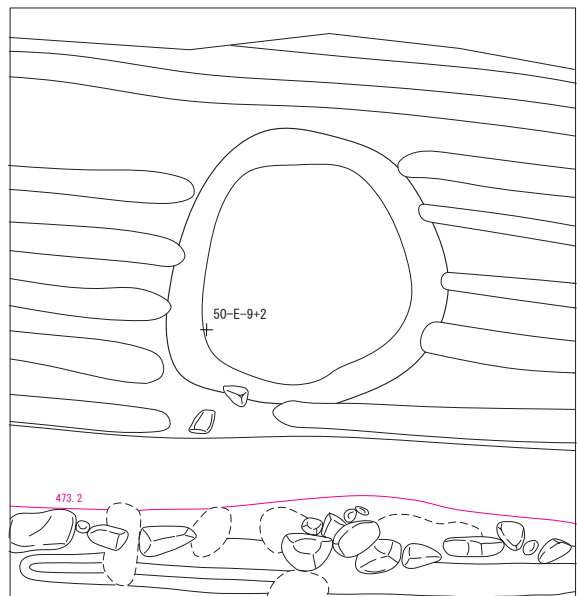


2号円形平坦面

2号円形平坦面

泥流による攪乱のため、大半を失っている。1号円形平坦面とほぼ同規模と思われる。方形に近い形状となる可能性もある。

形状 不明  
規模 径0.8m前後か

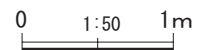


3号円形平坦面

3号円形平坦面

3基中最大規模で、残存状態も良かった。全体がわずかに窪んでいた。この施設を挟んで両側のサクには食い違いが見られる。サク端部もわずかに平坦面内部に切り込んでいる。本施設がサク切りに先行して作られていたことが分かる。

形状 不整円形  
規模 1.8m×1.75m



第51図 13区画畑円形平坦面

18区画畑

13区画の東側の隣接する畑で、平成19年度の調査で東側へ16m離れた位置に次の区画境が確認されている。南側を3号道、北側を1号道、西側を6号道で区切られ、区画境が明瞭になっている。本区画の東側へ続く畑の一部も平成18年度の調査範囲だが、この部分は全容の明らかになった平成19年度の成果と共に報告したい。

18区画1号畑

平成17年度の調査で南隅が確認された畑から北側へ続く、サクが東西に延びる畑である。西側の13区画1号畑とは段差があり、本畑は低い位置にある。

西側の6号道際で残存状態が良く、平坦な畝の間に細かいサクが切られている状態が分かる。6号道際から東へ5mの地点でサクが途切れるような地点があり、ここで畑境となる可能性がある。この地点南側延長部分に4号積石遺構がある。積石遺構を基点とした畑境は他の地点で多数認められており、こ



第52図 18区画 1・2号畑

の傾向と畑境の想定部分とは矛盾しない。

As-Aはサク内にやや厚く堆積していた。

確認面積 推定360m<sup>2</sup>

サク間 50~60cm サクの長さ 23.5m

サク方向 N-80° W

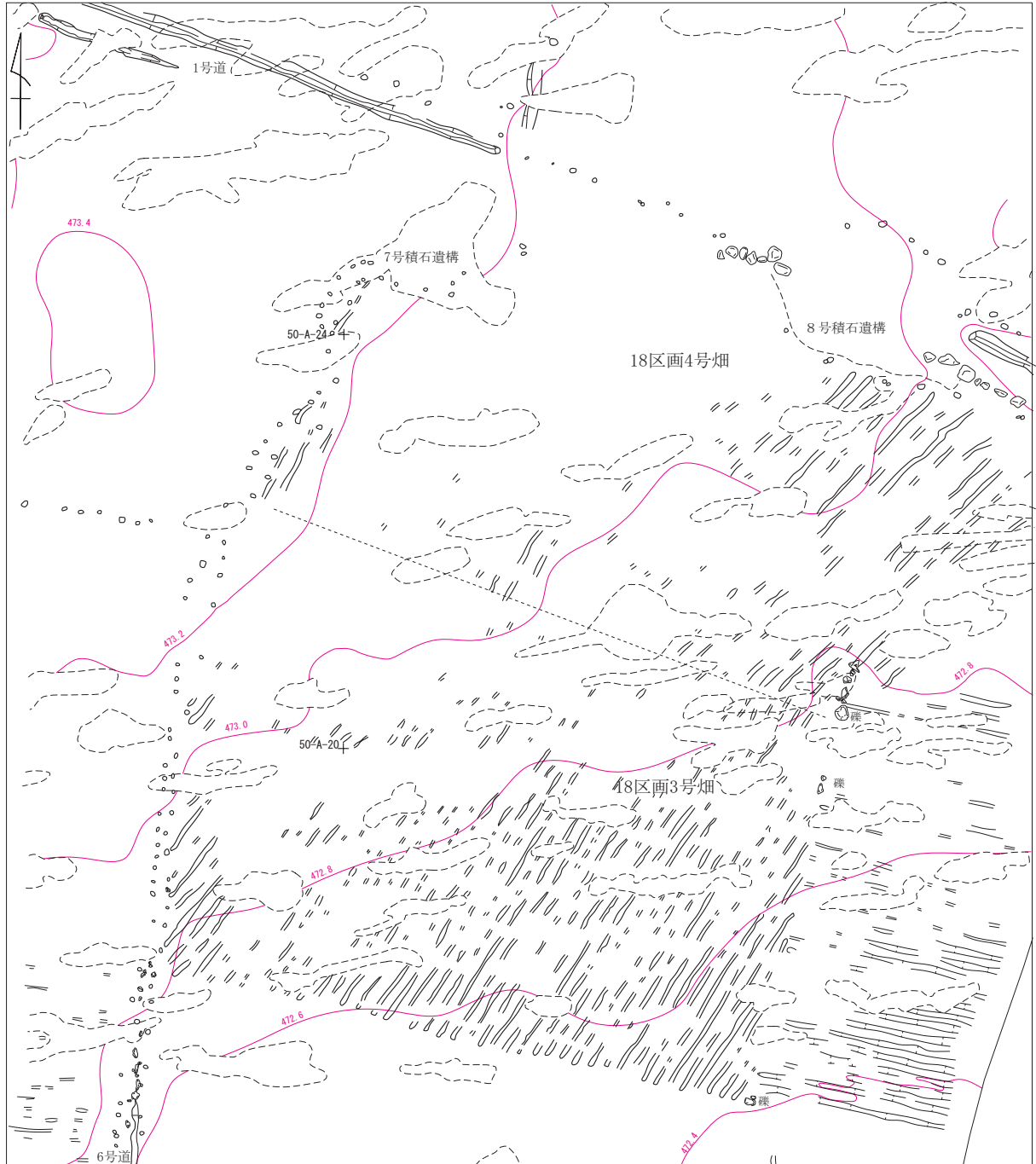
畝サクの高さ 3~7cm

地山傾斜 32/1000

18区画2号畑

1号畑と3号畑に挟まれた耕作痕のほとんど残らない区画である。南北走行のサクの痕跡がAs-Aの混入で部分的に確認できる。As-A降下後に収穫を終えた畑と推測する。

東側にも同様の不明瞭な区画が続くが、南北両側にある畑の境界にそって、この畑を分ける区画があ



第53図 18区画 3・4号畑

#### 第4章 IV区の調査

ると考えたい。この場合の畑東西幅は24m前後、南北幅15.5m前後である。

確認面積 384m<sup>2</sup>

サク間 最小部分で50cm

サクの長さ 最大で1.5m

サク方向 N-8° E

畝サクの高さは認められない

地山傾斜 ほぼ平坦

#### 18区画3・4号畑

18区画2号畑の北側にある。サク幅と走行から第53図に示した破線部分で南の3号畑、北の4号畑に分けられそうである。

3号畑の東側に点在する扁平礫が直線上に並びそうで、畑境の目印に置かれたか、狭い道が存在した可能性がある。3号畑と4号畑の境を区切る施設は確認できない。

4号畑は1号道の際まで続く畑である。3号畑とはサク方向の他に、サク間が広がることでも区別できる。サク内にやや厚く堆積したAs-Aが確認されている。西側は6号道・7号積石遺構があるが、東方に小さく屈曲しており、本畑はこの屈曲に沿ったサク方向になったと思われる。

(3号畑)

確認面積 推定360m<sup>2</sup>

サク間 50cm前後

サクの長さ 最長で4.2m

サク方向 N-32° E

畝サクの高さ 3～7cm

地山傾斜 23/1000 (北西側が高い)

(4号畑)

確認面積 推定380m<sup>2</sup>

サク間 50～65cm

サクの長さ 最長で2.6m

サク方向 N-44° E

畝サクの高さ 3～7cm

地山傾斜 21/1000 (北西側が高い)

#### 上位段丘面の畑

IV区西隅で上位段丘が舌状に北側へ張出していたが、この面の東隅(18-5'区)で確認した畑である。付近の標高は479m前後で、天明三年の泥流は確認できない地点である。付近は段丘縁辺部分で北側へ低く傾斜する斜面であり、サクは等高線にほぼ平行に切られている。サク部分にAs-Aが厚く堆積していて、中耕・サク寄せの痕跡は明確でない。畝部分は後世の耕作によって削平されていたが、一部に畝頂部の窪みに堆積したAs-Aが確認できる地点もあった。耕作土は柔らかい黒色土で、礫の混入も少なく、下位段丘面の畑より恵まれている。西側で一部サク端部が確認できたようだが、後世の耕作によって分からなくなった部分が大半である。

確認面積 推定380m<sup>2</sup>

サク間 50cm前後

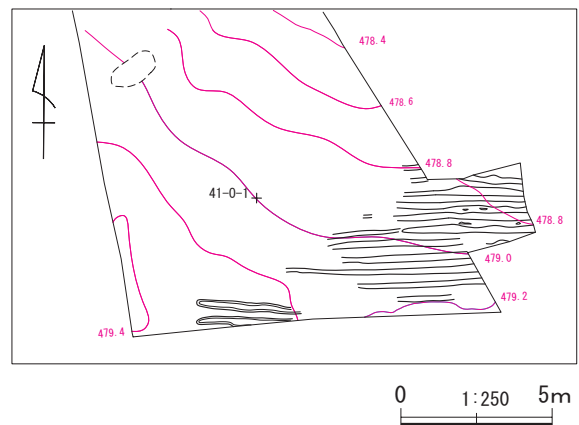
サクの長さ 最長で6.3m

サク方向 N-88° E (東側)

N-87° W (西側の2本)

畝サクの高さ 5cm前後

地山傾斜 78/1000



第54図 IV区上位段丘面畑

19区画の畑

1号道北側の畑大区画を19区画と呼んだ。吾妻川縁部にある本遺跡北端の畑である。この畑の北側延長部分は平成19年度で調査しているの、双方合わせて次回に詳細な報告を行うこととし、ここでは概略を記す。

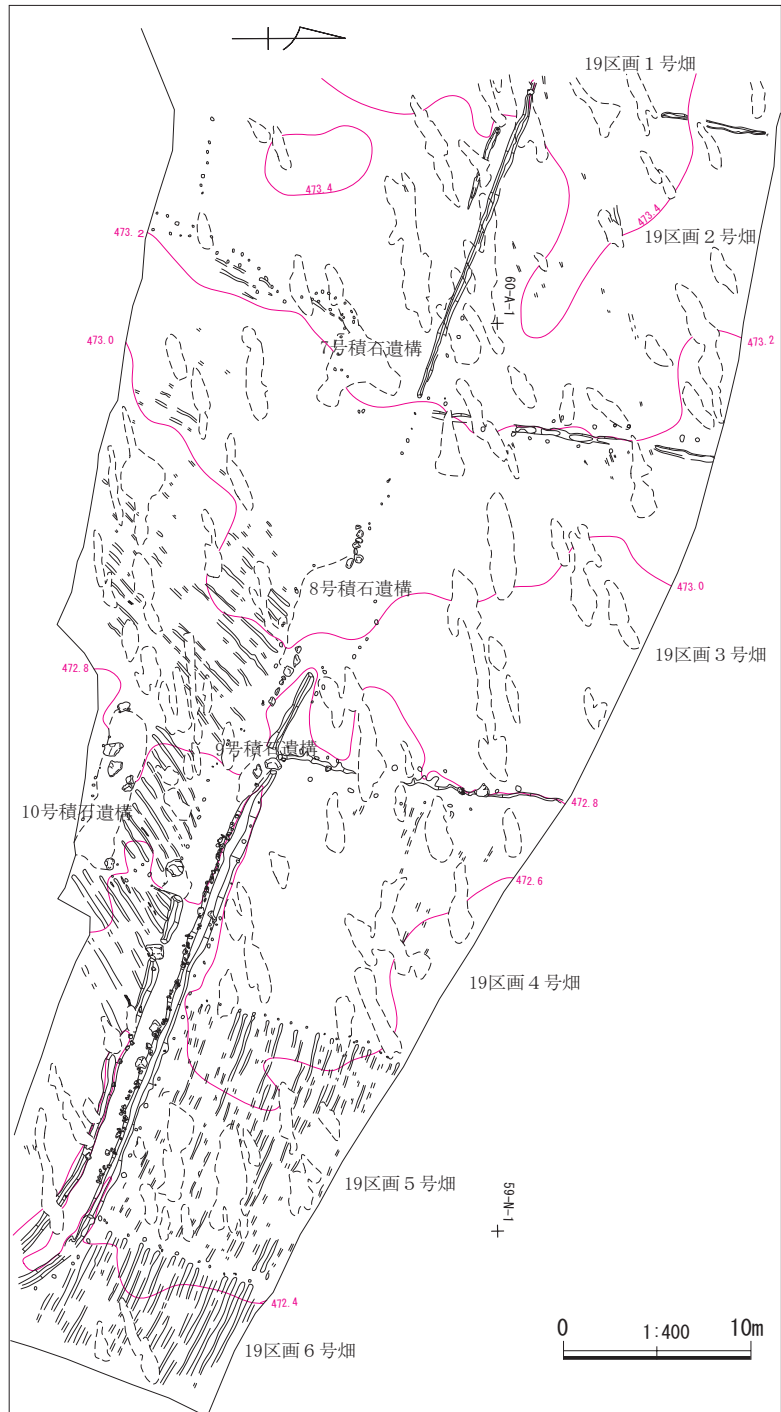
1号道はⅢ区で調査された屋敷の南側から西北西方向に向かって延びる両側溝を備えた遺跡内でも最大規模の道である。調査地点付近は耕作土が薄いうえ、地山の礫の多い地点で積石遺構が点在している。この道の北側から5箇所の畑境を確認し、平成19年度の調査でもこの東側にさらに1箇所の畑境を追加している。これより想定される畑を第55図のように西隅19区画1号畑から順に名前を付けた。ただし、1号畑に関しては畑である確証は得られていない。

2・3号畑は東西幅18m前後だが、4・5号畑は14m前後になり、規模は一樣ではない。4号畑は北側へ向かって台形気味に広がっており、この畑を境にして畑境の走向が多少異なっている。

畑境は13・18区画など南側の畑から続く走向を踏襲しており、1号道とは斜に交差している。確認できる畝サク方向はすべて東西方向であった。

地形は西から東へ向かって下がる緩やかな斜面で、1～4号畑の境には段差がある。境木が目立ち、1～2号畑境以外のす

べての境に見られる。境木のない1～2号畑境には溝状の窪みがあり、排水を考慮した施設の可能性がある。



第55図 19区画の畑



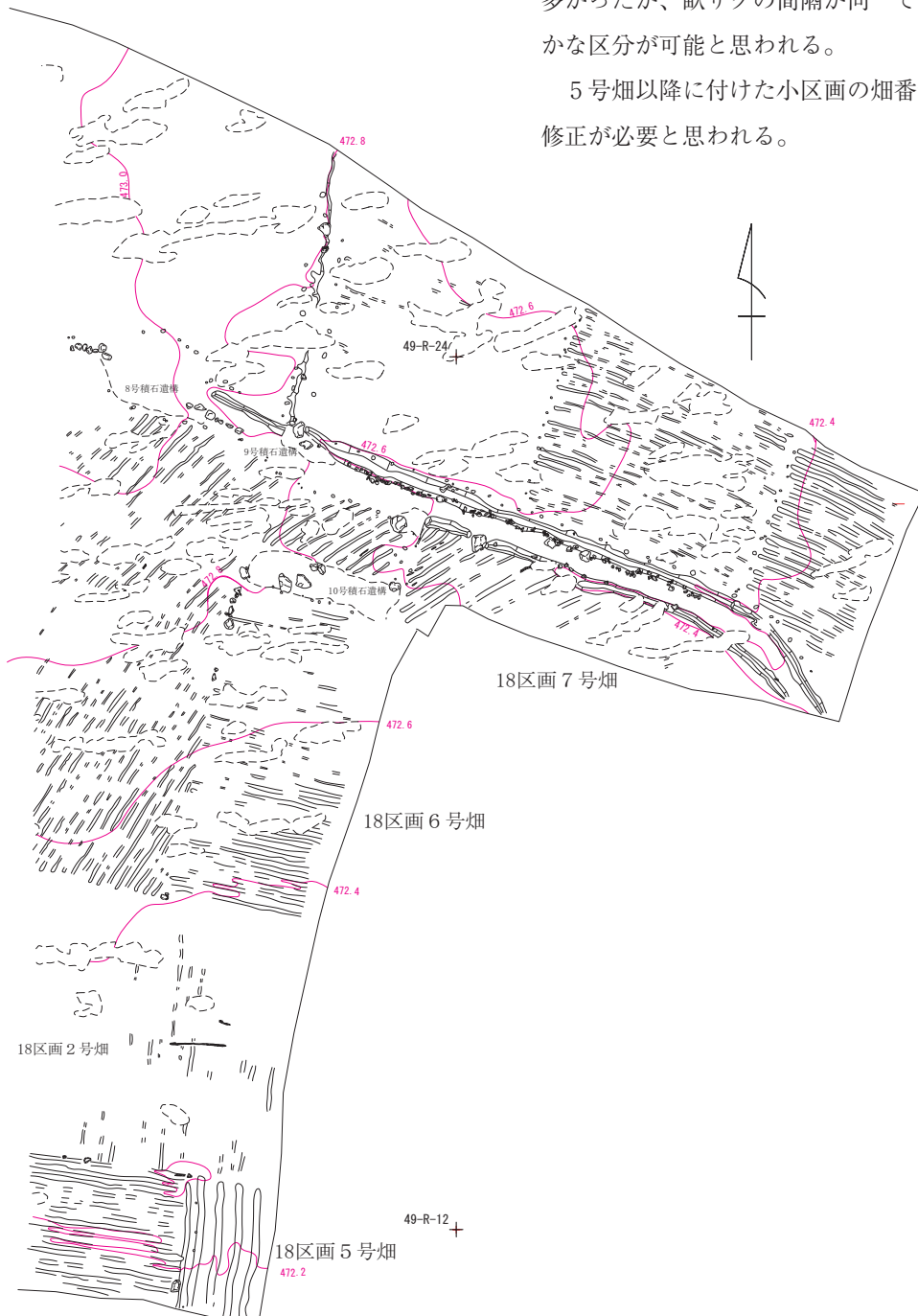
18区画東側の畑

平成19年度の調査では6号道の東側約45mの位置に蛇行する南北走向の道が確認されている。18区画はその道まで続き、西側13区画の畑と近似した規模の畑であることが分かる。19区画同様に、この畑の東側部分は次回に詳細な報告を行うこととし、ここでは概略を記す。

18区画2号畑(56頁)の東側境界は明らかにすることができなかったが、19年度調査でもこれを補足する資料は追加されていない。しかし5号畑から7号畑まで直線的に西側境界が直線的に並んでいるので、2号畑もこの境界に合わせて2分するのが妥当と思われる。

北隣の7号畑は残存状態が悪く、不明瞭な部分が多かったが、畝サクの間隔が同一でない。さらに細かな区分が可能と思われる。

5号畑以降に付けた小区画の畑番号は次回報告で修正が必要と思われる。



第56図 18区画東側の畑

### 3 積石遺構 (ヤックラ)

IV区のみで見られる遺構として、8箇所の積石遺構を確認した。吾妻地域において畑脇の積石はかつて「ヤックラ」と呼ばれており、現在の畑脇にも見ることができる。長野県北部方面に広がりを持つ名称のようだが、どの程度の規模から呼ぶのか、穴に埋めたものまで含めるのか、など不明な点が多い。ここでは天明三年の泥流下で確認され、畑地を一部でも潰し、かつ人為的に積み上げたものを積石遺構(ヤックラ)と定義して扱った。斜面に投げ捨てられた礫群などは含めていない。

なお、発掘調査では泥流上で確認できた3箇所の積石や土坑内の礫にも番号が付けられた。この1～3の積石は欠番としたため、4号積石遺構から番号を始めた。

#### 4～6号積石遺構群

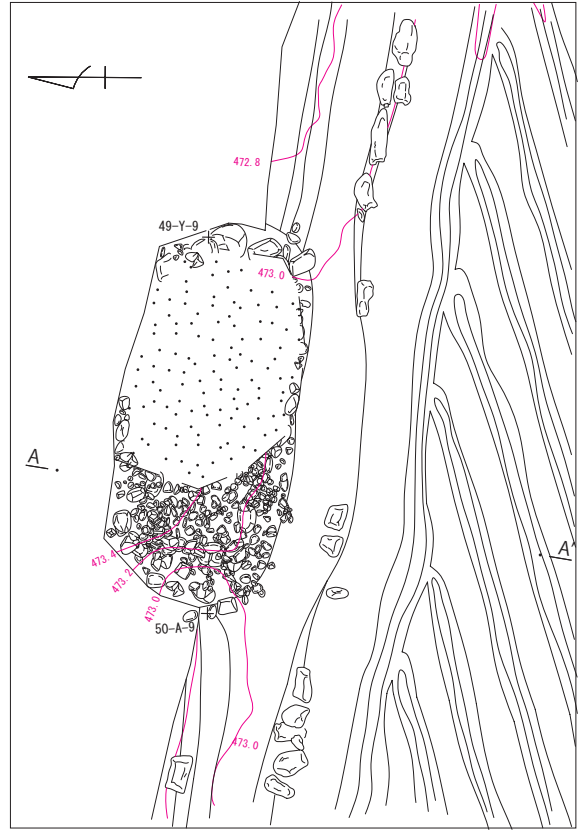
50区の3号道西隅付近を中心に、道に沿って東西に長細く積石が作られた一画がある。道脇に据えられた石列を含むと60m以上の長さがある。本遺跡でも最大規模であり、さらに東側の調査できなかった地点まで広がる可能性がある。

断面観察については第60図に一括して記した。

#### 4号積石遺構

3号道脇の積み石群中、最も小規模な施設である。この遺構のみが3号道の北側に築かれている。泥流層の掘削中に上面を削ってしまい、東側を一部失っている。また、調査地点の隅にあったため、北側の裾部分は不明な点もある。東西長4.1m、南北幅1.9mの比較的整った長方形の平面形状を呈している。確認できた範囲で畑面より約50cmの高さがある。

上面にはAs-Aが降下状態で確認できる。遺構中の石は拳大の小さなものが多く、土砂等の混入の少ない礫純層に近い状態であった。下面には深さ30cmほどの掘り方があり、この中には人頭大サイズの礫が土砂と等量程度の割合で混じっていた。



4号積石遺構



5号積石遺構

第57図 4・5号積石遺構

### 5号積石遺構

4号積石遺構の西側26mの地点に位置し、12区画7号畑と11号畑の境界を東側の限界としている。東西長4.8m、南北幅2.2mの範囲で石の積み上げが確認されるが、西側限界は不明瞭である。西側が尖る変則的な平面形状である。さらに西側にも礫の多い部分があり、2m近く範囲が広がる可能性がある。畑面からの高さは50cmで頂部は平坦である。

3号道南隅には最大で径70cm近い礫が並べられている。また12区11号畑との境部分にも径30cm前後の礫が部分的に並べられている。本遺構はこの列状の礫上に積み上げられている。積石遺構内の礫は拳大サイズが中心だが、人頭大の礫も混じっていた。施設南側の11号畑との境界には木が30~80cmの間隔で植えられていた。

積石内から出土の陶磁片2点を第60図に示した。

### 6号積石遺構

3号道の西隅にある長大な積石区画を、北側畑の13区画と14区画の境界ライン延長線上に見える屈曲部分を境に、東側を6号A積石、西側を6号B積石と呼んだ。4号積み石の西側約4mの地点から始まり、4号道が3号道にT字状に交差して終わる部分まで続く。

### 6号A積石遺構

東西長10.5m、南北最大幅3.2mの長方形に近い平面形状を呈しているが、不整な輪郭である。この施設を挟んで南北の畑耕作面に段差があり、北側の13区画畑は南側の12区画畑より40cm前後低くなっている。西隅付近で3号道は本施設上をクランク状に横切って南側へ付け替えられている。

南隣の12区画11号畑との境には、本積石を囲うように木が植えられているが、東隅には幹下部直径30cmの倒木も見られる。

裾部分には礫を並べた部分があるが、5号積石遺構のように整ってはいない。上面は泥流によって削られた可能性があるが、残存部分の積石の高さは北



第58図 6号A積石遺構

側畑からの高さは80cm前後である。裾部付近は径50cm前後の礫を組むようにして並べている。南側上面や裾部縁辺を中心にAs-Aが堆積していた。積石遺構内の礫は大きさも一様でないが、土砂等の混入物も少なく、鉄分で褐色味が強かった。

6号B積石遺構

東西方向に伸びていた積石が北側へ屈曲し、鍵の手状の平面形を呈す施設である。調査年度境の空白部分を挟んで南側の裾ラインに齟齬があり、西側の裾の広い部分では3号道がほとんど分からなくなっている。鍵の手状に北側へ曲がった部分でも広い幅はそのままだった。ほぼ全域に丁寧な土台部分の積み石が見られ、各辺は直線的で、整った平面形状となっている。6号A積石では南側にのみ見られた木が、ここでは北側にも植えられている。

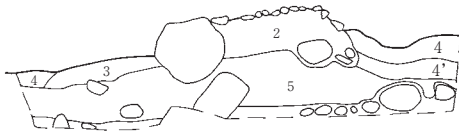
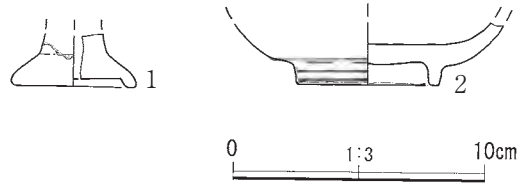
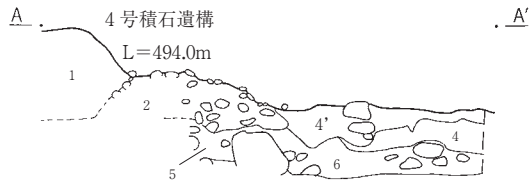
東西長は13.8mを測り本遺跡最大規模である。南北幅は西隅の屈曲部分で5.8m、東側の狭い部分で1.4mである。

As-Aが西側裾部付近に吹き溜まるように厚く堆積していた。積石下は礫の多い地山で、径1mを超えるような巨礫も含まれていた。深さ30cm以上の掘り方があるようだが、地山と明確に区別できない部分が多かった。

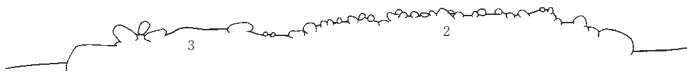
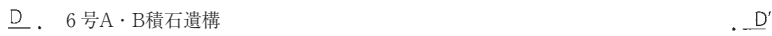
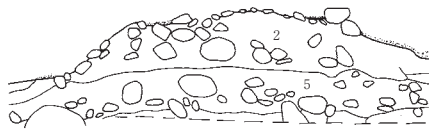


第59図 6号B積石遺構

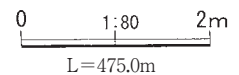
第4章 IV区の調査



上の2点は5号積石遺構の礫に混じって出土した陶器破片である。陶磁器類は他の積石遺構からも少量出土するが、図示に耐える破片は少なかった。出土量や器種なども、畑部分から少量出土する陶磁器類の傾向と変わらない。不要な礫などを廃棄した積石遺構の性格から考えると、出土量はきわめて少ないと言えよう。下肥とともに畑に陶磁片が撒かれる以前から積石遺構が築かれ始めたため、陶磁片の出土が少ないと推測する。



- 1 天明泥流。
- 2 土砂をほとんど含まない積石部分。
- 3 土砂混じりの礫層
- 4 基本土層IV層の耕作土層 礫の混入少ない。  
4' で礫の混入多い。
- 5 地山と区別の難しい礫混じり砂質土層。
- 6 礫混じりの地山黄色土



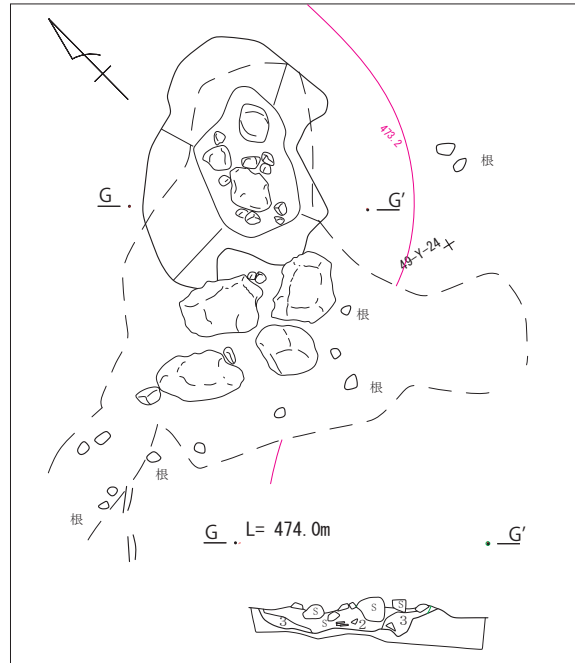
第60図 4～6号B積石遺構断面および遺物

1号道周辺の積石遺構

7～10号積石遺構は1号道周辺に散在する施設である。3号道周辺に見られた4～6号B積石遺構に比べ小規模であるが、泥流により押し流された地点であり、旧状は不明瞭な部分が多い。道から離れた地点に築かれる例も相違点である。

7号積石遺構

1号道の南脇にあり、道に直行するように南西側へ伸びている。本遺跡中、最も小規模な施設である。泥流に強く削られ、積石部分はほとんど残っていないが、平面規模2.7m×1.2m、深さ20cmの窪みと周辺に径最大50cm近い礫が集中して見られた。この付近を回り込むように列状に並ぶ境木の根跡が見られ、積石遺構の存在が推定できた。積石は境木に沿って南西側にもう少し続いていたものと思われる。この境木は6号道脇に植えられたもので、本積石遺構の縁部にも道があったはずだが、確認できなかった。

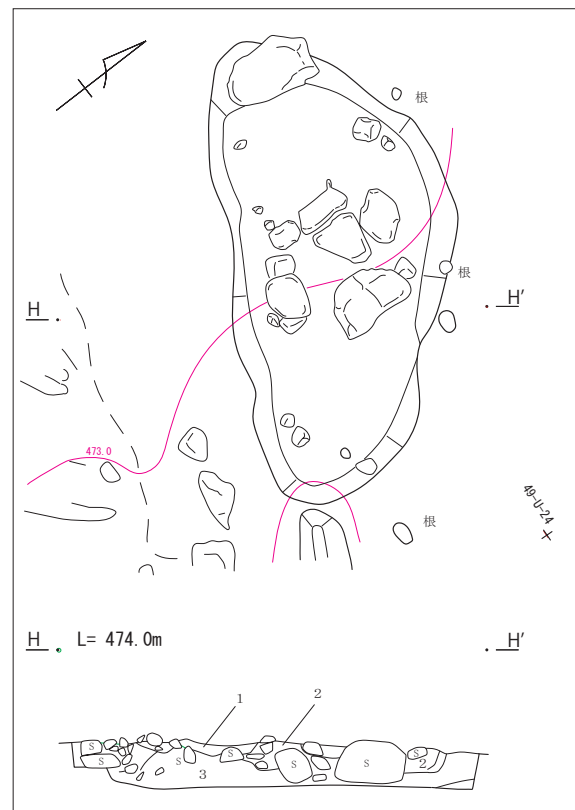


7号積石遺構

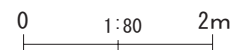
- 1 礫混じりの踏み固め土層。
- 2 土砂をほとんど含まない積石部分。
- 3 地山と区別の難しい礫混じり砂質土層。

8号積石遺構

7号積石遺構の東側10mの地点で、1号道の北脇にある東西に長い施設である。5.2m×2.4m、深さ30cmの窪みに径40cm前後の礫が窪み内に集中していた。1号道北脇の境木痕跡が本施設を囲むように北側を迂回しており、積石遺構であったことが裏付けられる。積みあげられた礫は泥流に押し流されたと思われるが、隣接する1号道には踏みこまれた小礫が多く、積石裾部分は道下にまで広がっていたと思われる。



8号積石遺構



第61図 7・8号積石遺構

9号積石遺構

1号道の下にあった積石部分である。周辺は広い範囲で道下に大きさの異なる礫がみられるうえ、地山礫の多い地点でもあるため、積石遺構として確認できる範囲は明瞭ではない。道側溝がこの施設を避けるように小さく屈曲しており、道の整備に先行して設けられていた施設であることが分かる。道がま

第4章 IV区の調査

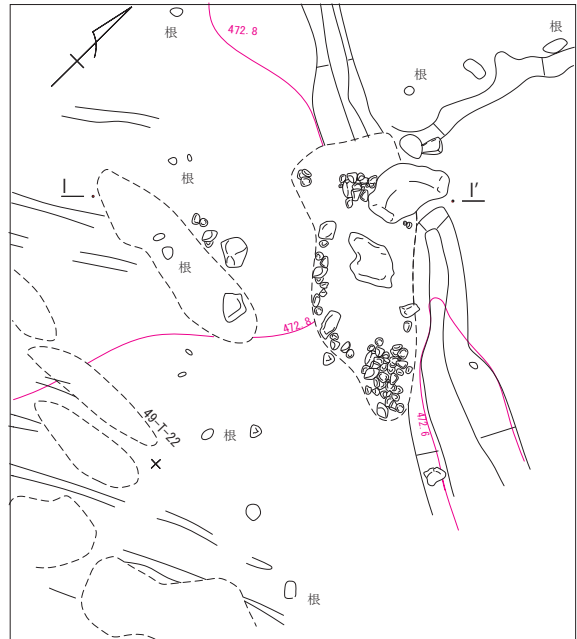
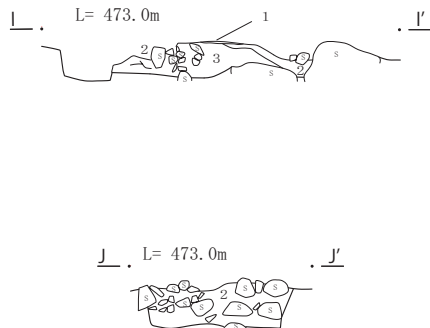
たいでいる点で6号A積石遺構が類似した施設だが、それほど高さはなかったようだ。道部分は畑耕作面より最大で1cmほど高くなっていた。路面には土砂を戻したうえで踏み固められ、礫が露出する部分は路面表面の6割ほどであった。

10号積石遺構

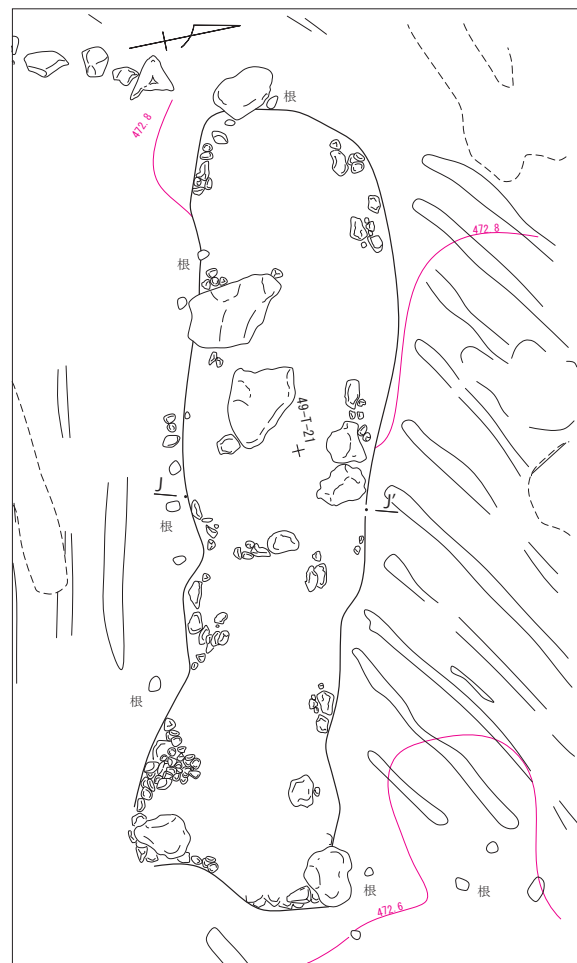
1号道周辺では唯一、道脇から離れて作られた施設である。1号道の南側3.5mの位置に軸方向を道と同じにして並んでいた。規模も周辺では最も大きく、長さ8.3m、幅2.1m以上であった。泥流によって大半が崩されたようで、泥流掘削段階から礫の多い一画であった。1m近い高さのあった可能性がある。深さ50cmほどの掘り方がある。本施設南脇には境木状の木の根列が見られ付近はAs-Aの堆積が顕著だった。

他の積石にある施設脇の道がみられず、畑サクが裾部間近まで切られていた。規模の大きな施設としては特異な外観である。

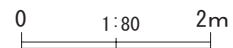
- 1 基本土層Ⅱ層 天明泥流  
・ ドット部分はAs-A層。
- 2 基本土層Ⅳ層の耕作土。2'はAs-A混じり。
- 3 基本土層Ⅴ層に相当すると思われる褐色味をおびる層。
- 4 基本土層Ⅵ層の粘性弱い黒色土層。
- 5 礫の混入多いローム土主体の層。5'で礫の量増す。



9号積石遺構



10号積石遺構



第62図 9・10号積石遺構

## 4 道

本書で道として扱った6条の道は、畑の大区画を区切るもので、部分的にでも境木や溝、あるいは石組みを持つ施設を対象とした。畑境や溝脇に見られる隙間等はこの項から除外し、それぞれの遺構で説明を加えた。

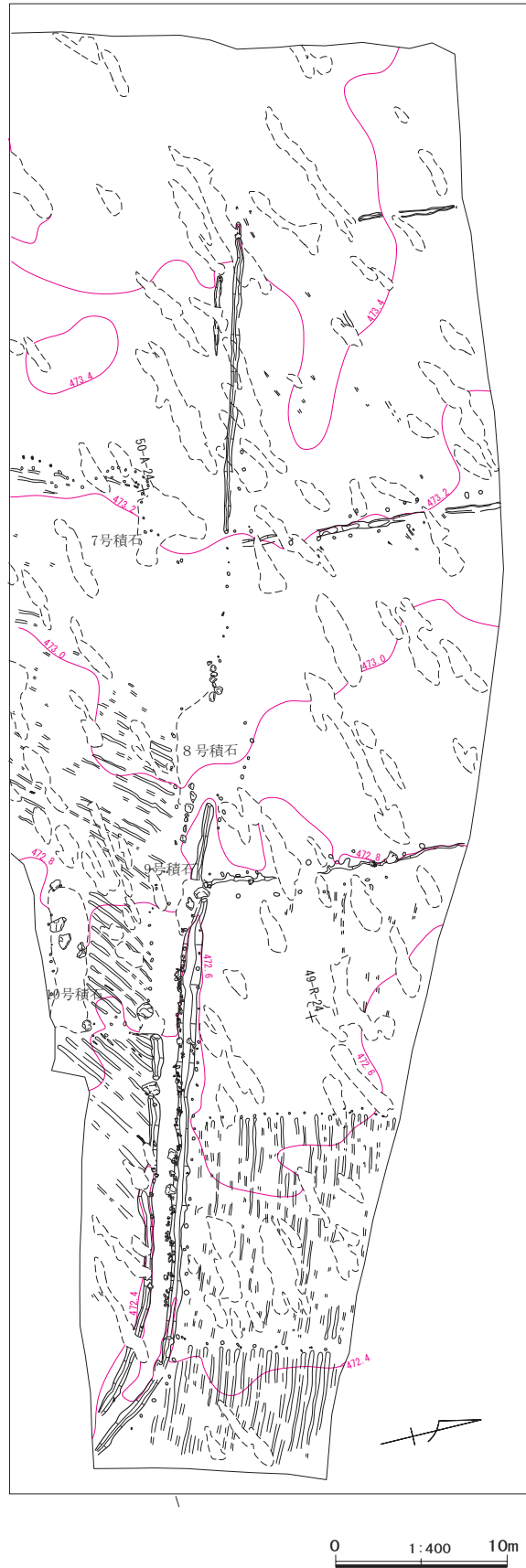
### 1号道

『上郷岡原遺跡(1)』でⅢ区1号道と報告された道の西側延長部分である。Ⅲ区では屋敷区画の南側を畑地と宅地を区切るように走行する部分の確認されていた。側溝内側の道幅もⅢ区・Ⅳ区を通じて60cmから1m近くあり、境木を両側に並べた地点も多い。本遺跡中最大規模の施設である。天明三年遺構面から約3m上位にある現代にもこの道は同じ地点に復原されており、区画としての重要性も看取できる。

今回報告する長さ70m部分はⅢ区道を真直ぐに延長した位置より北側へ10m以上逸れた位置にある。走行方向は同じで、途中で小さく屈曲するのが調査地点東隅で確認されているが、平成19年度の調査で直線に戻り、さらに東でもう1ヶ所屈曲部分があることが想定されている。Ⅲ区1号道の東隅から全体で約150mの長さの道が確認された。

Ⅳ区部分での1号道は確認できたほぼ全域で両側に側溝を設けている。溝内には礫の混入が顕著で、列石状に並べられた部分も多い。全体ではN-70°W前後の走行である。おおよそ吾妻川の崖線にそって築かれたようである。

A-24グリッド周辺を西隅として、東側へ約35mの範囲で礫が多く、積石遺構が点在していた。付近は耕作土直下に地山の礫混じりローム状土層が見られる地点である。道と積石遺構が近接しているのは前述した3号道の西側部分に類似している。3号道では積石脇に道があるが、本道では8号・9号などの積石遺構を踏みつけて道が築かれている部分が長くなっている。



第63図 Ⅳ区1号道



#### 第4章 IV区の調査

確認された1号道の西隅部分(50区南東隅)は泥流による攪乱が激しい地点である。約15mに渡って側溝の確認できない部分があったが、X-25グリッド付近から再び両側溝が現れ、道の痕跡を確認できた(第64図)。側溝の途切れていた部分でも境木の痕跡から道が直線的に続いていたことが復元できる。

西隅部分では側溝内側で約70cmの道幅がある。南側は不明瞭だが埋没土には北側溝にAs-Aが混じり、天明三年時点にも側溝が開口していたことが分かる。地山礫は中央部分に比べると少なくなり、他の地点で見られた溝内の礫はほとんどない。北側溝脇に境木の痕跡が並んでいるが、東寄りを主体に道内側で境木の痕跡が目立っている。南側溝埋没土のAs-Aが不明瞭なことから、泥流直前の道はこの側溝上まで広がっていた可能性もある。

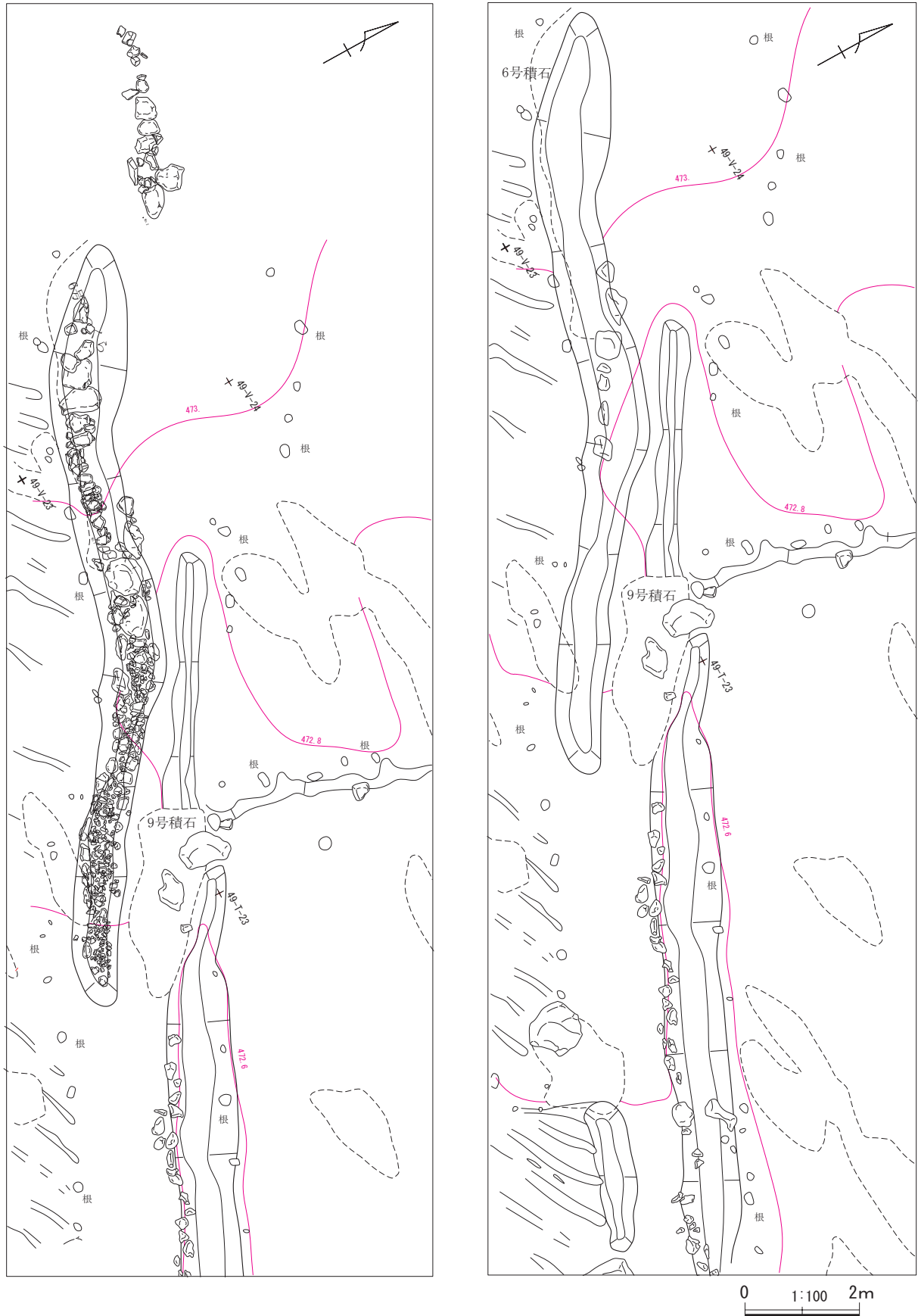
調査した道中央部分は積石状の集石上を道が縦断する箇所である。道確認面、礫検出面、側溝掘り方面の3面の調査となった。第65図は左に礫確認面、右に掘り方面を中心に、図の範囲を若干ずらして示したものである。

南側側溝は掘り下げ作業意中で、溝内に礫が特に丁寧に積み上げられていることに気付いた。石列のように見える部分も多い。長さは13mで、この間、石列状の礫が繋がっている。一部で南側を正面として小口積みのように整然と組まれた部分も見られる。掘り方は深さ最大40cmほどあるが、蛇行気味で道側溝らしくない。地山の礫が多い地点に積石遺構を設け、不明瞭な地点であるが、側溝は積石を除去して掘り直したようだ。

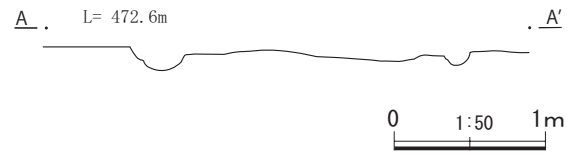
側溝の両外側には境木が並んでいるが、南北両境木列の幅は3m前後になる。15区画15号畑の規模であれば畑が1枚取れる程の幅で、本遺跡内では際立って広い道脇の空間である。



第64図 IV区1号道西隅部分



第65図 IV区1号道中央部分



道東側は両側溝が規則的に設けられ、整って見える一画である（第66図）。東隅付近で南方へ向かって緩やかな屈曲が始まっている。道幅は直線部分の側溝内側で1.1～1.2mと1号道の中でも広がっている。周辺の地山礫は少なくなり、側溝内や道上に散らばる礫も拳大の大きさのものが主体となる。中央部分に多く見られた径50cmを超えるような礫は側溝脇に散見する程度となる。

側溝は北側が幅60cm・深さ10cm前後、南側が幅40cm・深さ10～20cmで規模に差がある。部分的にAs-Aの堆積があり、泥流直前には掘り方規模の半分くらいまで開口していたことが分かる。境木は北側側溝の外脇にのみ見られ、溝に沿って規則的に並んでいる。

### 2号道

平成17年度調査範囲の南隅、上位段丘から下位段丘へ移る急斜面に取り付けられた細い道である。後述する3号道の南側40～50mの地点にある。4本の試掘用トレンチで確認された道であり、部分的な調査であったが4地点から長さ55m分の道が復元できた。確認できた範囲での走行はN-70° W前後、道幅は40～60cmである。周辺に灌木・植林などの痕跡はなく、見通しの良い斜面だったようである。

斜面の通路としては路面は比較的平坦に整えられているが、道下には礫を敷いたり側溝を備えた痕跡は認められない。A～Cトレンチ内では標高476mの高さ付近にあったが、Eトレンチ内では急に斜面下側へ向かって10mの長さで2m近く下っている。さらに西側10mの位置にある次のFトレンチ内では斜面部分に道は確認できなくなっている。12区画

第66図 IV区1号道東部分

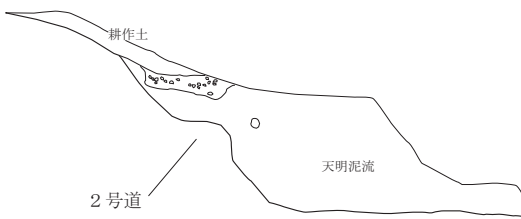
12・15号畑の脇に見られた隙間に続くと推測されが、本道下方にある12区画1・3号畑の脇にも同じような隙間があり、明確ではない。

畑の脇でなく斜面に道を作った理由は明確ではない。上位段丘上の村落から下位段丘面の畑を結ぶ作業道であろうが、麻が繁茂した時には畑脇の道が塞がれてしまうため、畑際から離れた通路が必要だったとも推測される。また、段丘裾部分の畑脇通路では湧水が激しいため、天候によって斜面の通路が多用されたとも想定している。

泥流被災後、本道上の泥流内に礫が多く集められる傾向がある。

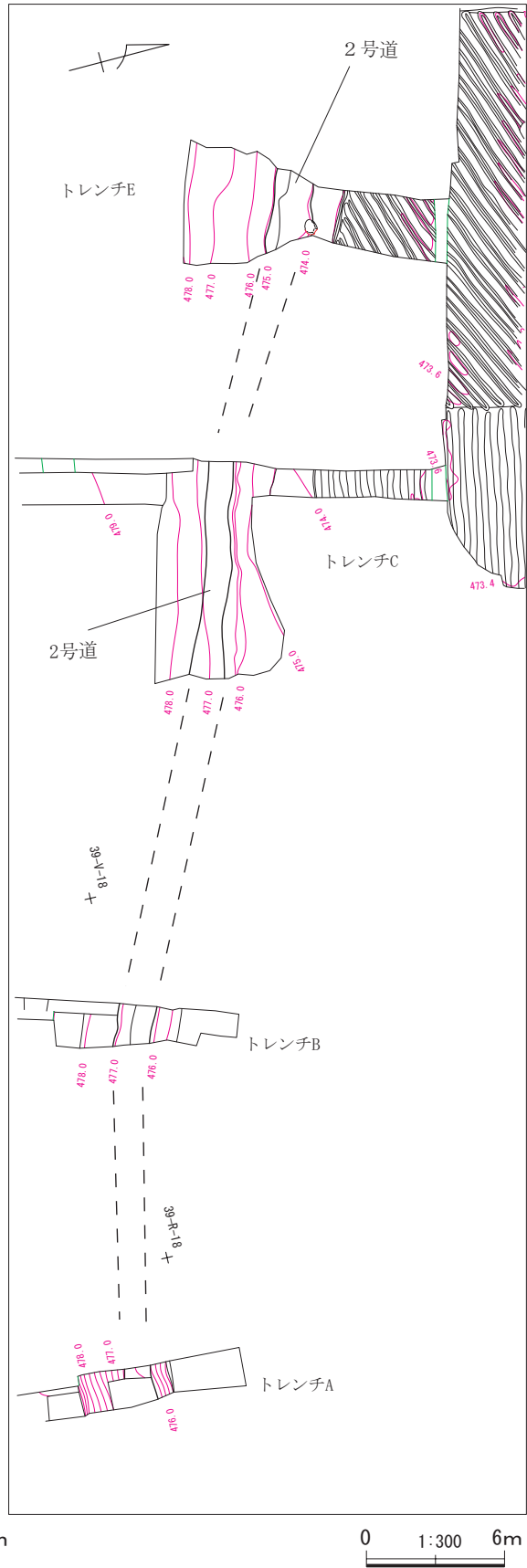
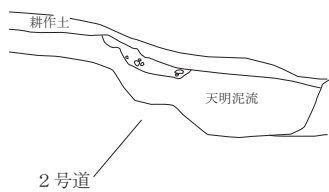
—, L= 483.0m

トレンチC



—, L= 480.0m

トレンチB



第67図 IV区2号道

3号道

南側から北側へ向かって低く緩やかに傾斜する、傾斜面の裾に相当する平坦部分に造られた東西にほぼ直線的に伸びる道である。軸方向はN-85° Eを指す。調査できたのは49区W-8から50区L-9グリッドにかけての長さ50m分で西側の限界は確認できた。東側は「上郷岡原遺跡(1)」で報告されたⅢ区2号溝に続くと思われる、水田区画手前で曲がるまで140m以上の直線道となる。

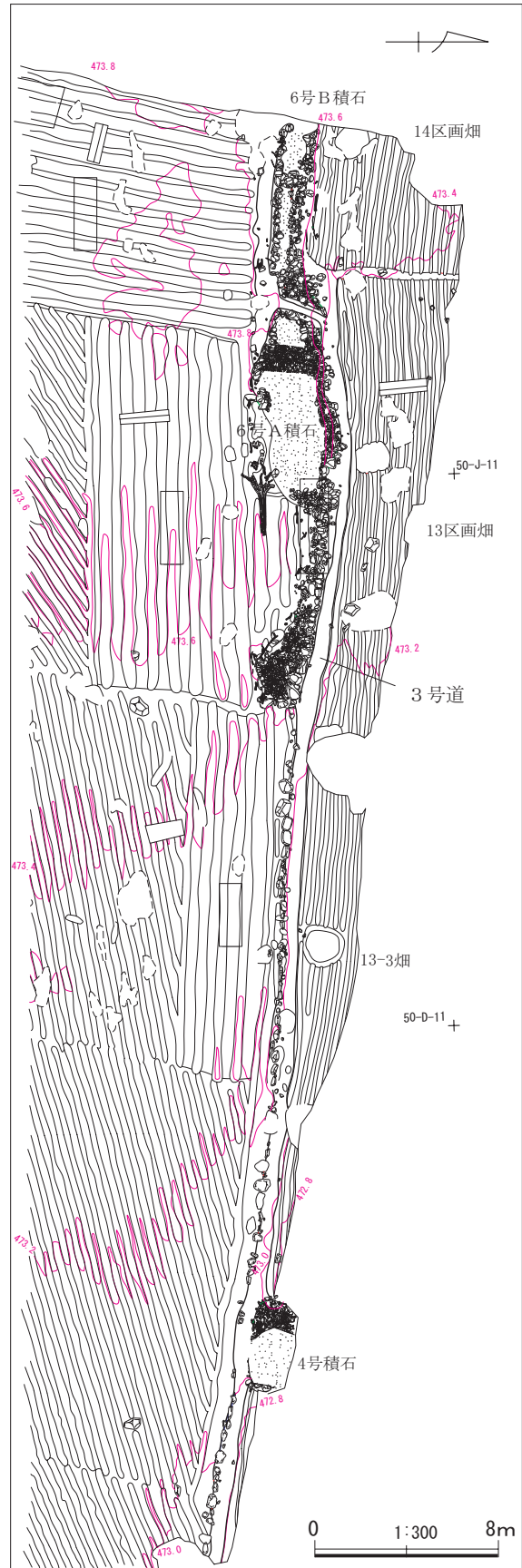
調査範囲では東側にやや低く傾斜しており、東隅と西隅では60cmの比高差がある。

4号から6号の積石遺構に平行するように走行する部分では路面に礫が多い。本道を挟んで南北の畑の形状も異なっている。

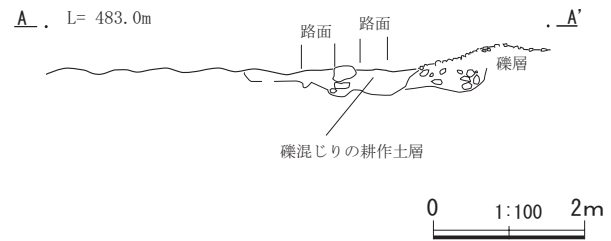
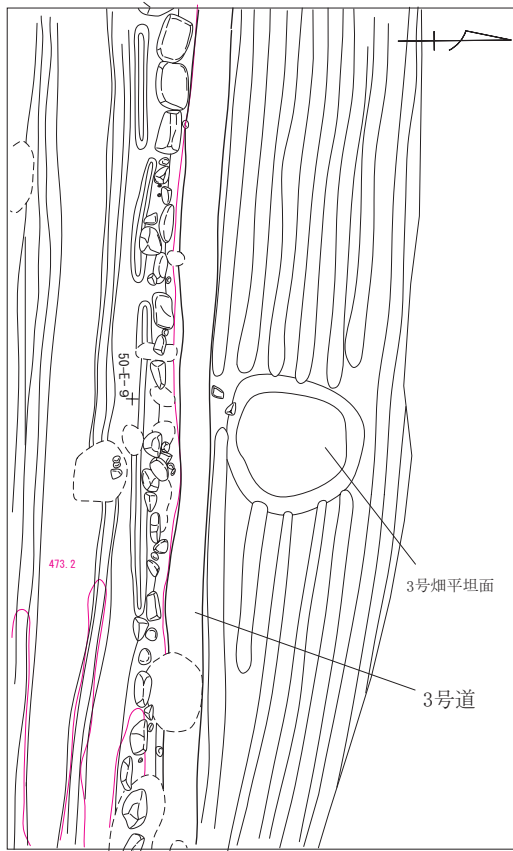
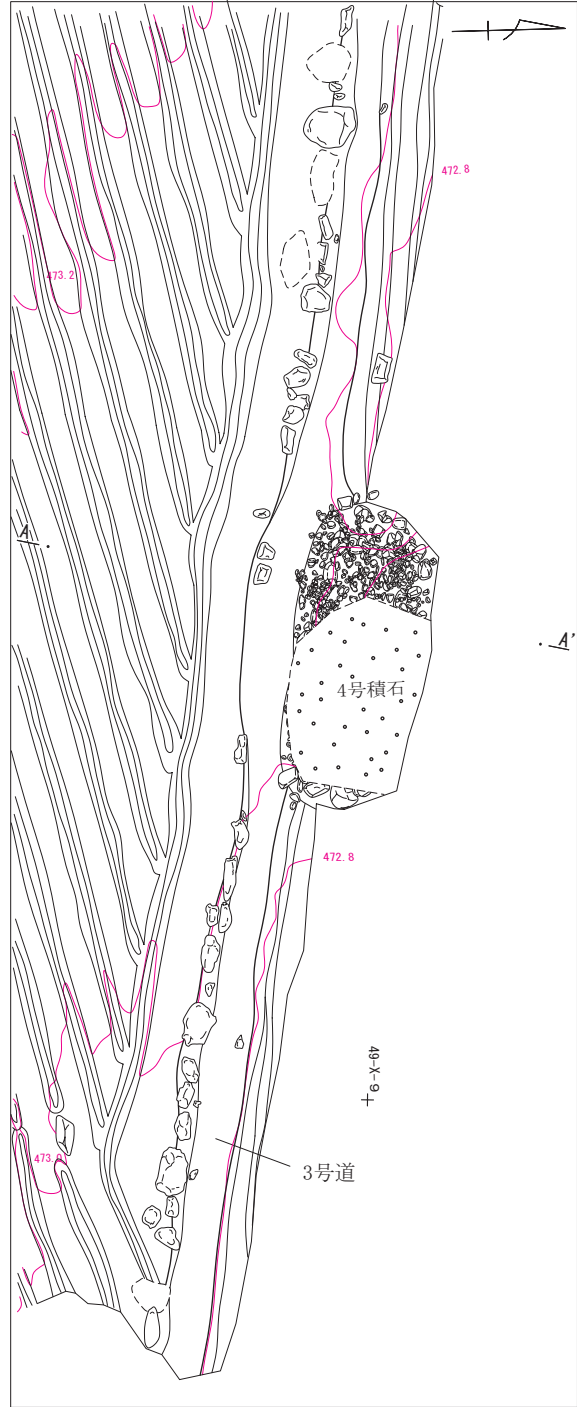
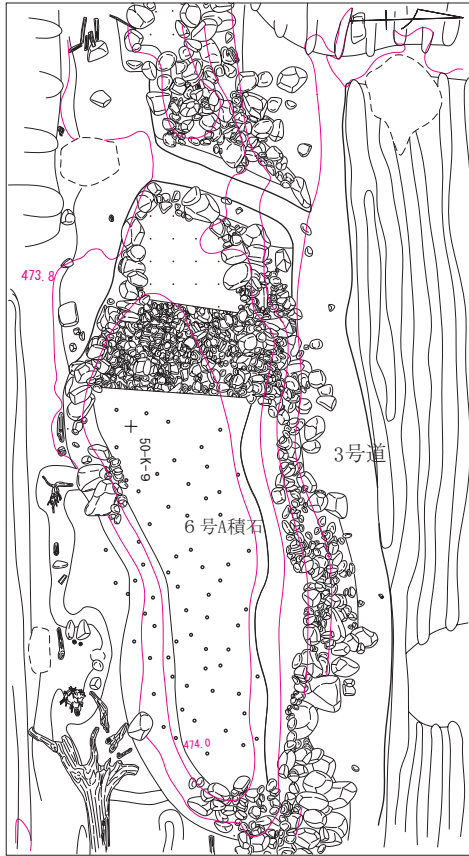
道の南脇には最大で人頭大サイズの礫が一行に並べられている。G-9グリッドにかけて道が南側に広がり、この部分では南側に側溝がある。側溝に接した部分は道幅が2倍に広がっている。この付近では中央に礫が露出していて、道としては異様な景観になっている。断面図示部では礫を挟んだ道の両側がほぼ同じレベルにあるが、他の地点では南側が高くなっている部分が多い。

4号積石遺構付近では、道は積石を避けてわずかに南側へ屈曲している。5号・6号積石遺構付近では、道は北側に避けて緩やかに屈曲している。6号A積石遺構は高さ1m近くに礫が積み上げられた規模の大きな施設であるが、西側にある高さ50cmほどの比較的低い一画で道がクランク状に屈曲してこれをまたいでいる。ここで道は南側に道筋を変えた後、ふたたび西に向かって4号道へ直行するように礫の上に道が続いている。崩れた礫のため4号道直前付近では不明瞭になっているが、元々道幅の狭い部分のようである。畑境には境木が植えられているが、根元が埋まるほど礫が寄せられていた。

道脇に築かれた積石が大きくなると、道がこの積石上に経路を移し、畑地減少を防いだ過程が示されている。



第68図 IV区3号道(1)



第69図 IV区3号道(2)



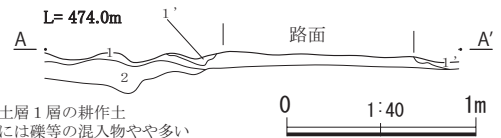
#### 4号道

1号建物北西隅から東側へ向かう道である。東へ25m直線的に延びたあと、12区画13号畑西脇につきあたって北側へやや鋭角的に曲がり、6号A積石遺構の西脇へと向かう。積石の南東隅で東側から3号道がT字状に合流している。

道が東西方向に伸びる部分では南側に小側溝があり、境木が狭い間隔で1列に植えられていた。道の北側には礫が部分的に寄せられていた。この部分の道は平坦である。北へ曲がった後は西側に境木が並んでいた。凹凸があるうえ礫の多い、荒れた道となっていた。道は北側へ続くが不明瞭になっていく。

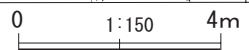
屈曲の内側部分にあたる17区画畑は麻畑であった。調査時点の道幅は80~90cmあり、周辺では最も広がっていたが、密集して植えられた境木の枝があり、麻の繁茂していた時期は通行にも不便な狭い道だったはずである。

1号建物際では道が見えなくなっている。西側にある5号道へ建物の脇をすり抜けるようにして歩いたのであろうか。



- 1: 基本土層1層の耕作土
- 1' : には礫等の混入物やや多い
- 2: 粘性のやや強い、斑鉄混じりの耕作土

第70図 IV区4号道



5号道（北）

1号建物の西脇から北側へほぼ直線的に延びる、16区画と17区画の畑を区切る道である。走向はN-10° E前後になる。北側は泥流に削られ途中で不明になる。

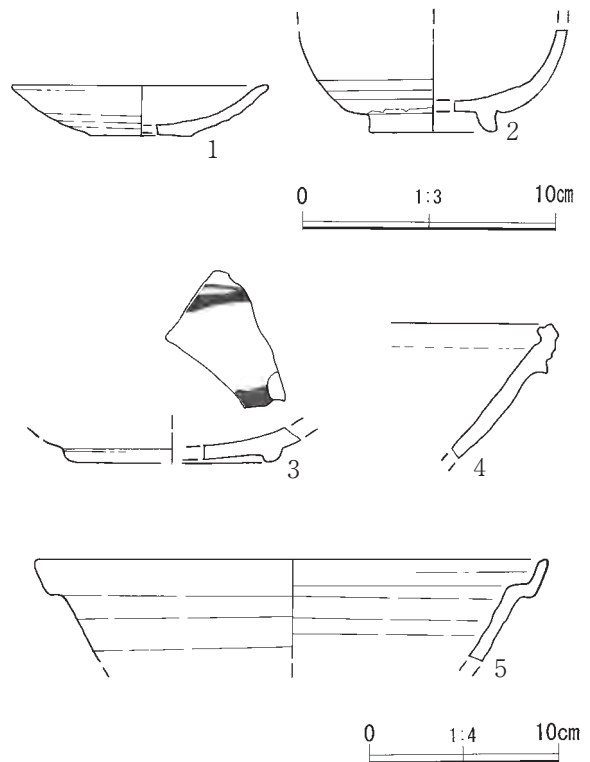
残存状態の良い部分では径5～15cm前後の礫が敷き詰められていることが大きな特徴である。As-Aが路面に踏み込まれており、軽石降下時にも盛んな往来があったことが示されていた。建物床面に敷かれた礫よりは大きめかつ不揃いで、建物と道に同時に礫敷き部分を作ったようには見えない。礫の下には長さ約22m、幅最大60cm、深さ15～20cmほどの溝状の窪みがあり、計画的に礫が敷かれたことが分かる。この窪みが途切れた跡も北側へ約13mまで礫敷き部分は続いていた。

礫敷が見られる部分は、調査時点では湧水のため地盤が軟弱な地点であった。江戸時代にあっても湧水のきつい一画であったと思われ、ぬかるみ部分に礫を埋め、石敷き道としたものであろう。南北に延びる道で積石遺構に隣接していない地点で石敷きが見られるのはこの部分のみである。人頭大に達するような大礫は道上に後から置かれたような状態で、数も少ない。整備された道であったようだ。

道の西脇には境木が植えられていて、根元にAs-Aが吹き溜まるようにやや厚めに堆積する地点もあった。境木は所々で上から礫をかぶせられ、根元を埋められた木もあった。礫敷きが見られなくなる北側にも境木は確認でき、道は全長45m以上の規模で続くことが分かる。

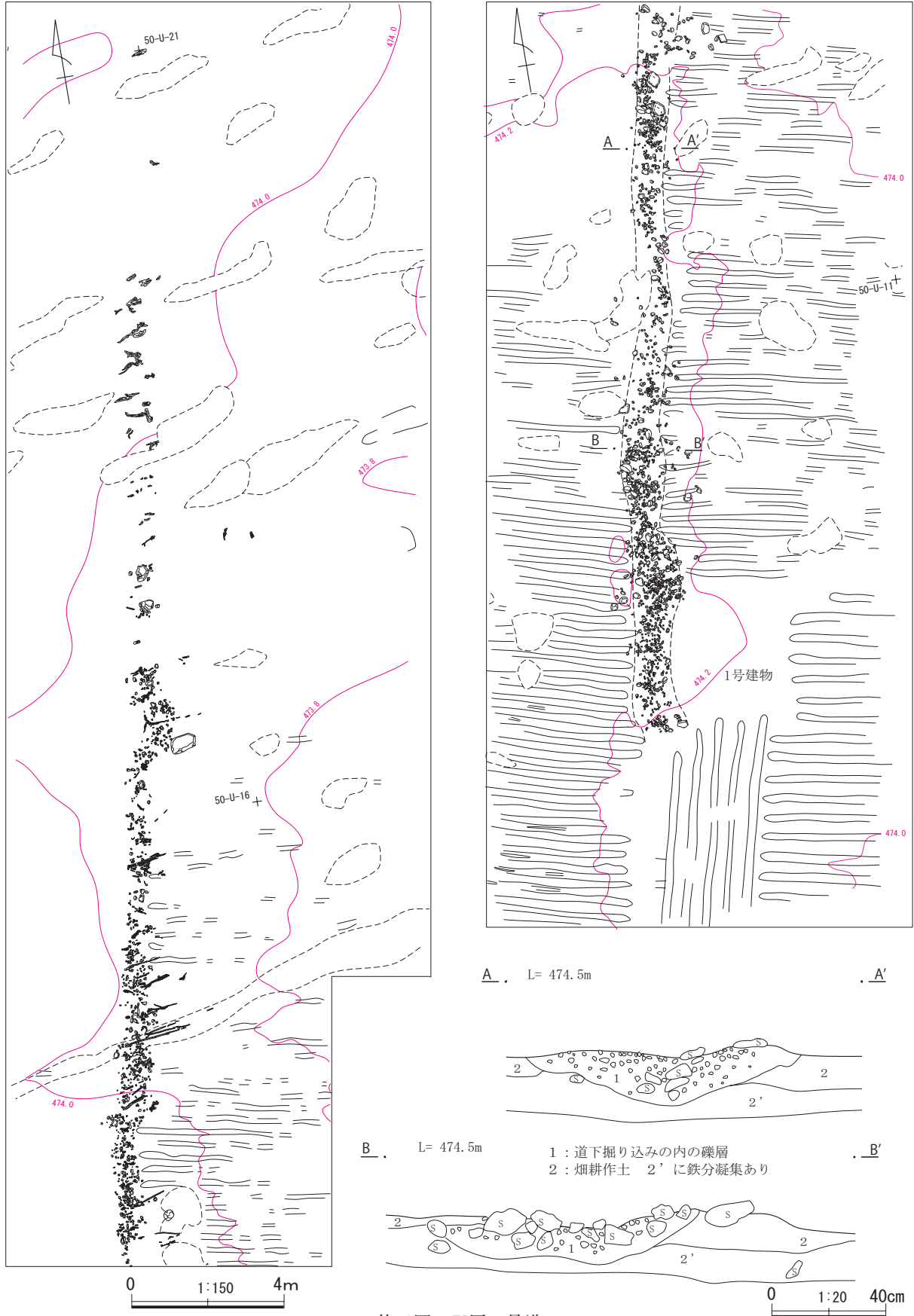
境木が途切れた先、北側40mの位置は1号溝がクランク状に屈曲する部分にあたる。本道が畑大区画を直線的に区切る道であることが類推できる。同時に広さのあること、礫敷き部分があることで、1号建物へ向かう作業用通路としても重要であったことが分かる。

1号建物周辺を中心に遺物の出土があった。これらは道に敷かれた礫の間の路面に、わずかに埋もれていたものが多い。出土量はあまり多くなかったが、比較的大きな破片があり、5点を図示した(第71図)。3～5のように鉢類の出土が目立った。1号建物は遺物のきわめて少ない遺構であり、これらの遺物がこの遺構に関わるかは不明であるが、建物周辺は他の地点に比べて若干遺物量が多いようである。



第71図 IV区道遺物





第72図 IV区5号道

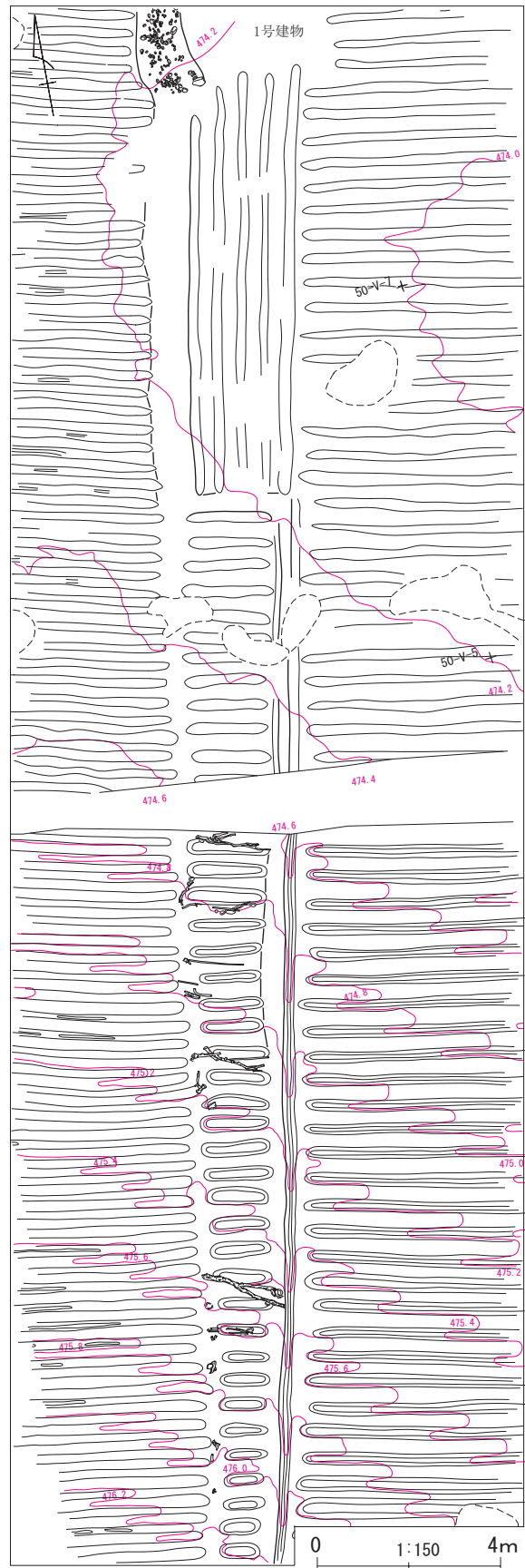
5号道（南）

5号道の南側に続く道だが、わずかに東側へ逸れている。特に形状や環境が大きく異なるため、第73図に別に示した。

1号建物の南側は15区画4・5号畑と名づけたが、15区画と16区画に挟まれた余剰帯のような細長い特殊な区画になっている。1号建物の南西隅付近を起点としたこの道は9mほど南に向かった後、東側に直角に曲がり、すぐにクランク状に南へ向きを戻している。この付近では足幅を確保する程度しか道幅はない。境木は道の西側に植えられているが、道の屈曲とは異なって、直線的に南側へ続いている。道の付替えを行ったため、道と境木が離れたものと推測する。境木は5号道北側部分以上に明瞭に残っている。

5号道から南側へ続く道だが、1号建物の南西角付近から突然に石敷きはなくなり、道幅も狭めるなど様相を大きく変えている。

5号道は麻畑の中を通り抜ける道である。繁茂した麻は幅30cmの満たないような通路では畑境を被いつくしてしまう。5号道北側では境木に加え、道幅が広いいため、麻畑の境と通路の役目を果たせそうである。5号道南側では西側に麻畑があるが、東側は異なっている。このため北側の道では広さを必要としないと想定した。そして道がクランク状に屈曲する地点にある15区画4・5号畑は、東側15区画3号畑以東で麻を生産する時には、境界の隙間として必要な区画と類推した。5号道を単なる通路ではなく、麻畑の所有または作業分担を区切る重要な施設と考えたい。



第73図 IV区5号道（南）

6号道

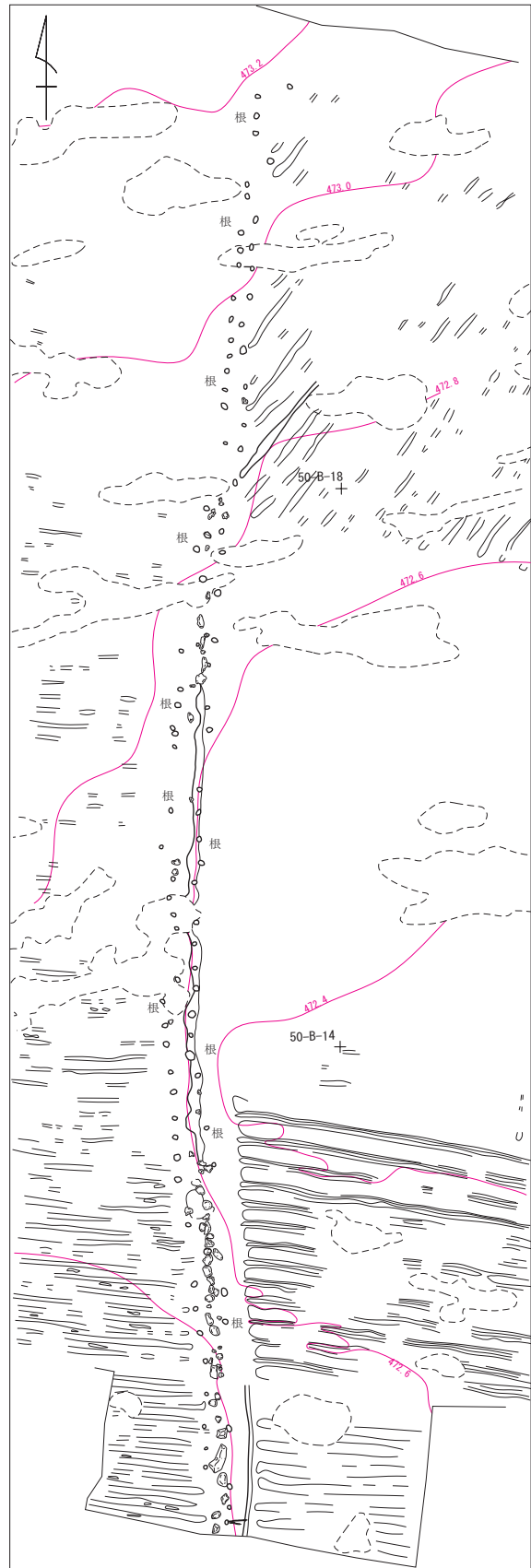
東側18区画畑と西側の麻畑である13区画畑を区切る、南北方向に伸びる道である。西側に膨らむようにわずかに弧状を呈している。走行は南で $N-3^{\circ}W$ 、北側で $N-4^{\circ}E$ になる。南側では畑境に高さ20cmほどの段差部分がある。両側畑の間隔は最大で1.5m近い幅になっている。道脇には境木の根の痕跡が空洞になって認められる。

道の南側12m部分では東側に接する18区画1号畑のサク端部が明瞭で、幅40cm前後の道部分を明確にできる。道道の脇には礫が並ぶように寄せられている。道の西側が高い段差があり、急斜面の上に境木が植えられていた。斜面には礫が多量に寄せられて、一部で組まれたように並べられた部分もある。路面に敷かれた礫は見られない。

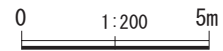
中ほどでは段差の西側50cmの位置まで境木が離れ、段差を挟んで両側に道があるように見える。この部分では東側の畑の痕跡が見えなくなっているのが不明だが、段差下には道がない可能性もある。境木は段差直下にも植えられている。斜面に捨てられた礫は少なくなる。

段差が消えた先の北側15m部分は遺構の残存状態が悪いが、境木の痕跡から道の存在が想定される。境木は道の両側に植えられており、道幅は50cm前後が確保されているが狭く見える。道は北側の先A-22グリッド付近で緩やかに東側へ曲がり、7号積石遺構の脇を通過して1号道に繋がるのが境木の痕跡で確認できる。この付近では $N-30^{\circ}E$ 前後まで走向が変わっている。

本道の南隅は3号道に繋がるはずだが、交差が想定される部分は攪乱のため明らかにできなかった。



第74図 IV区6号道



## 5 溝

この項では、畑地境の小規模な窪みを除いた。また道側溝も道と共に説明を加えたので扱っていない。第1面泥流下では調査区北側の3条の溝が該当した。

溝には埋没土内にAs-Aを厚く堆積させたものがあった。図示した状態は軽石除去後の様子である。このため泥流直下とは若干時間差を生じている。深さのある遺構であり、Ⅳ区北側の畑表層を泥流で削られた部分の区画を復元するため、有効な資料の一つとなりうるものである。

### 1号溝

泥流に強く削られ、畑の痕跡の全く残らない一画にある。1号道もこの周辺へ向かうはずだが、側溝・境木等の痕跡は確認できない。

直角に近い屈曲を重ねる区画溝で、調査段階では付近に屋敷のあることを想定し、精査を繰り返したが、本溝を境とした北側は吾妻川縁まで林となっていたことが判明した。出土遺物もなく、生活の痕跡の希薄な地点である。

吾妻川縁部周辺は地山がやや高くなっているが、本溝は川に向かって底面レベルを下げており、北隅は南隅より83cm低くなっていた。特に北隅付近では幅が広い上に傾斜が強く、この微高地を突き抜けるように川へ向かって下がっており、排水溝としての機能を有していたようだ。埋没土下層にはAs-Aが見られ、西側を中心に部分的に吹き溜まったようにやや厚く堆積していた。明確な水流の痕跡は確認できなかったが、深さの増す北側でAs-Aの堆積が少ないのは流失が原因とも考えられる。

南隅からC断面付近まで、溝の掘り直しの痕跡が見られるが、北隅まで続いている。吾妻川に近い地点では、溝に対する整備補修対象意識の低かったことが窺える。

溝掘削土をどのように処理したかは確認できなかった。後述するV区では溝北側（川寄り）に積んで通路としていたが、本溝周辺に土手状に積んだ可能

性がないのは、溝上端周辺にAs-Aが散見できたことで確認できる。

本溝が南北走向する2地点のうち、西側部分を南へ延長すると5号道へ直線的に繋がっている。東側部分では直線的ではないが、4号道が6号B積石の際で不明瞭になる部分へ繋がりそうである。本溝の屈曲が畑区画と関連するものと想定できる。

4・5号道は側溝を伴わないので、後述のV区溝と異なり、本溝が南側畑からの水を集める排水路ではないことが分かる。

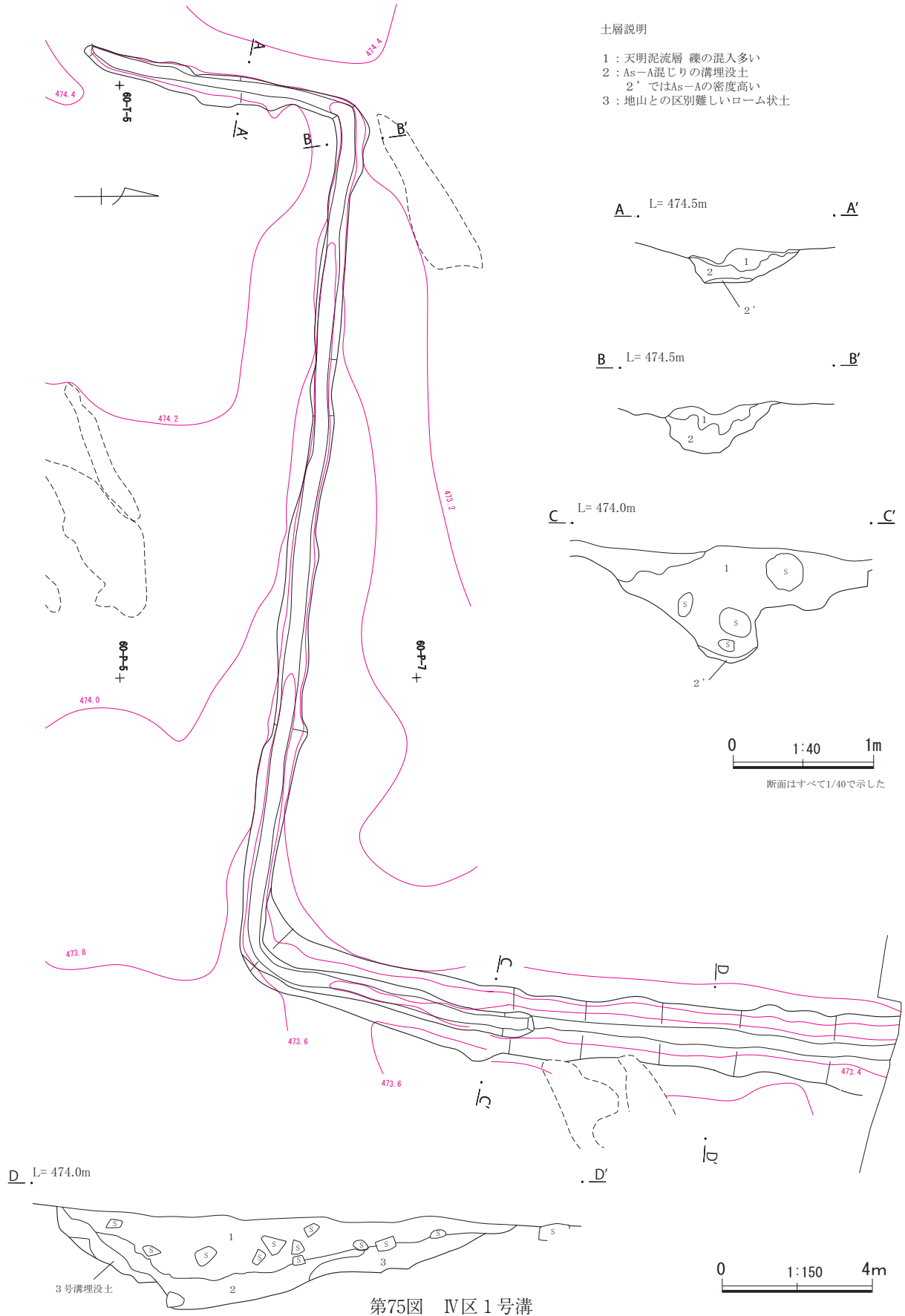
クランク状に屈曲を繰り返すのは、林と畑の境界にあって直線的な畑の畝サクを確保するためと思われる。ただし、本溝が東西に延びる部分の長さは約22mで4区の畑の規模よりやや大きくなっている。他の畑境界の溝と比べ深度が大きいのは、排水目的のみでなく畑地内へ篠竹類の侵入を防ぐ目的があったと考える。掘り直しを吾妻川へりまで行わないのもそのためであろう。

位置 60区T-4からM-10グリッド

軸方向 東西N-83° W 東側N-12° E

規模 全長47.5m、幅30cm（南隅）・250cm（北隅）

第4章 IV区の調査



第75図 IV区1号溝

2号溝

1号溝南隅付近から西側へ向かう、As-Aの混入する小規模な落ち込みとして確認された。泥流による攪乱が最も著しい地点で全容は不明である。南側の畑や北側の倒木等、周辺で見られた他の遺構の痕跡が全く残らない一画であった。

確認できたのが底面付近であるのに走向が直線的にならない点不安だが、1号溝が再度クランク状に屈曲し、西側へ続く部分となる可能性もあろう。1号溝が南隅で途切れているので別遺構として扱っている。走向は1号溝の東西走行部分に比べ若干北側に振れていた。西側へこの溝の延長部分を想定すると、約10西側に北西隅付近の畑（第48図）で見られた東西方向の境木列とほぼ平行に並んでいる。

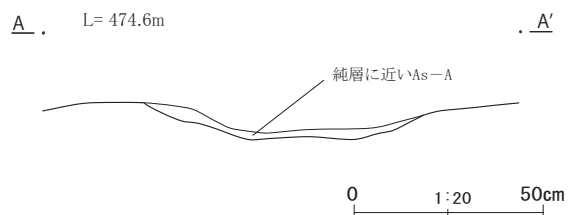
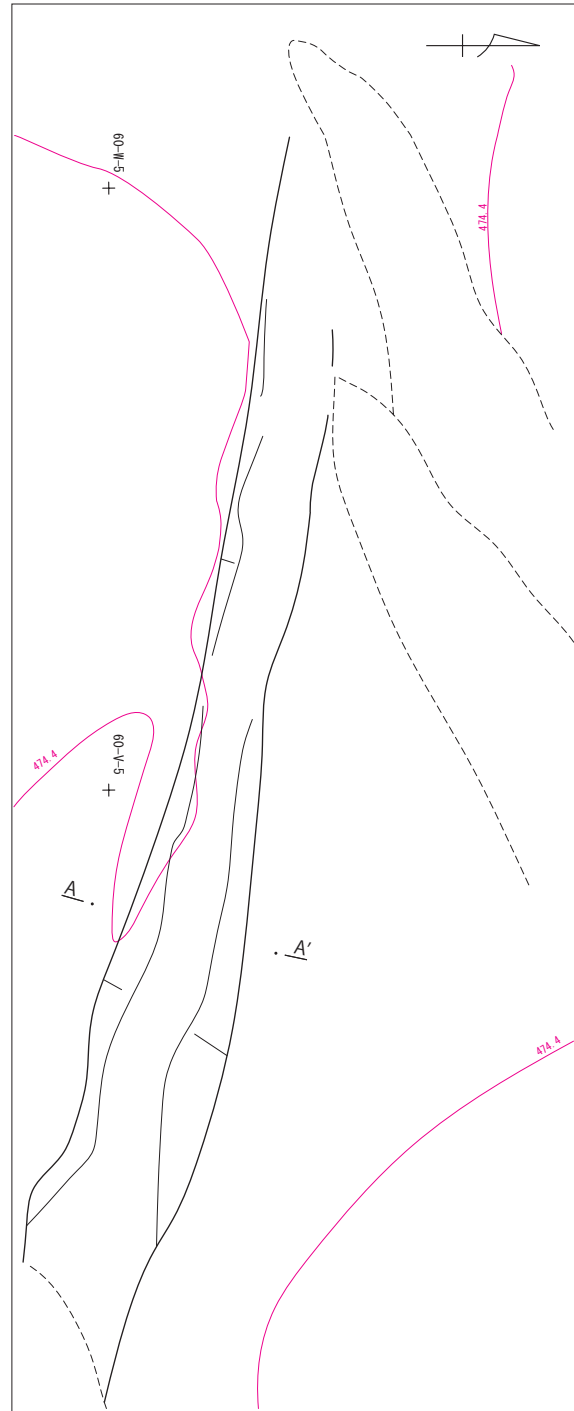
埋没土は薄く不明瞭だがAs-A混じりの黒色土で、流路跡を示唆するものではなかった。底面は緩やかな凹凸があるが比較的平坦で広い。底面レベルは東側へわずかに低く下がっているが、地山傾斜と変わらない。1号溝西隅部分と近似した規模である。

なお、幅や形状が異なり、東側65mの位置で途切れた1号道側溝の続きとはならないと考える。

位置 60区U-4からW-5グリッド

軸方向 N-76° W

規模 長さ7.8m以上、  
幅最大90cmだが60cm前後の部分が多い。  
深さ最大8cm



第76図 IV区2号溝

3号溝

1号溝東側の南北走向部分に軸方向をほぼ同じにして重複する遺構である。大半を1号溝に壊され、南隅部分と北側西壁が残存するのみである。本来、第2面の遺構となる層で確認された施設だが、1号溝の前身と考え本項で扱った。

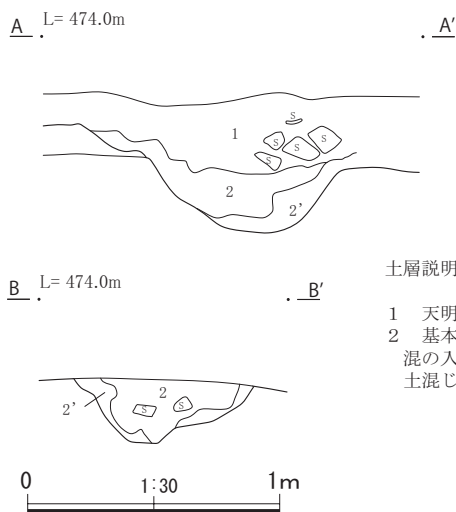
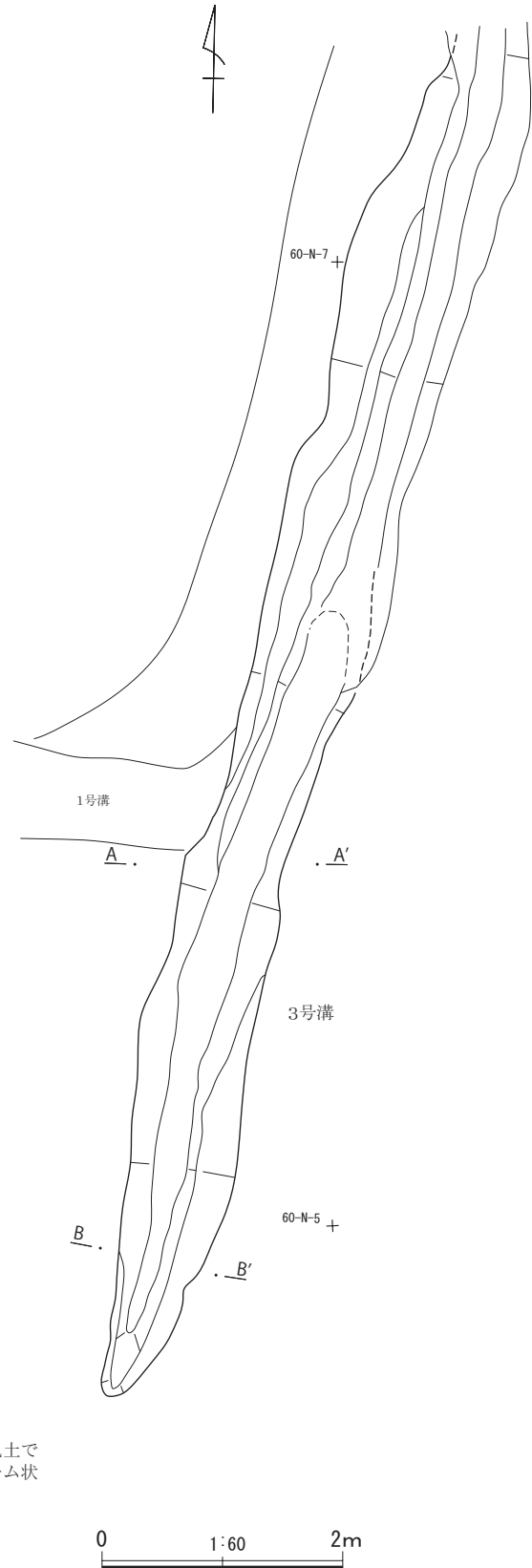
底面レベルは残存部分で判断する限りでは、地山傾斜にそって緩やかに北側へ下がっているが、1号溝ほど急ではない。南隅は開口部から急に落ち込んでおり、溝が南へ続いていたとは思えない。排水溝ではなく、区画溝となりそうである。底面は1・2号溝に比べると狭い。

埋没土内には径30cm近い礫の混入が多く、廃棄された印象を受けるものであった。北側の1号溝との重複部分にも西壁際に礫の混入は続いていた。本溝は畑地の西側限界にあった区画溝であったのを、西側へさらに耕地拡大する際に埋め戻され、1号溝が改めて開鑿されたと推測した。

位置 60区N-4 からM-7グリッド

軸方向 N-14° E

規模 長さ11.5m以上、幅最大90cm、  
深さ最大34cm



土層説明

- 1 天明泥流
- 2 基本土層IV層に近い黒色土で混の入多い。2'にはローム状土混じる。

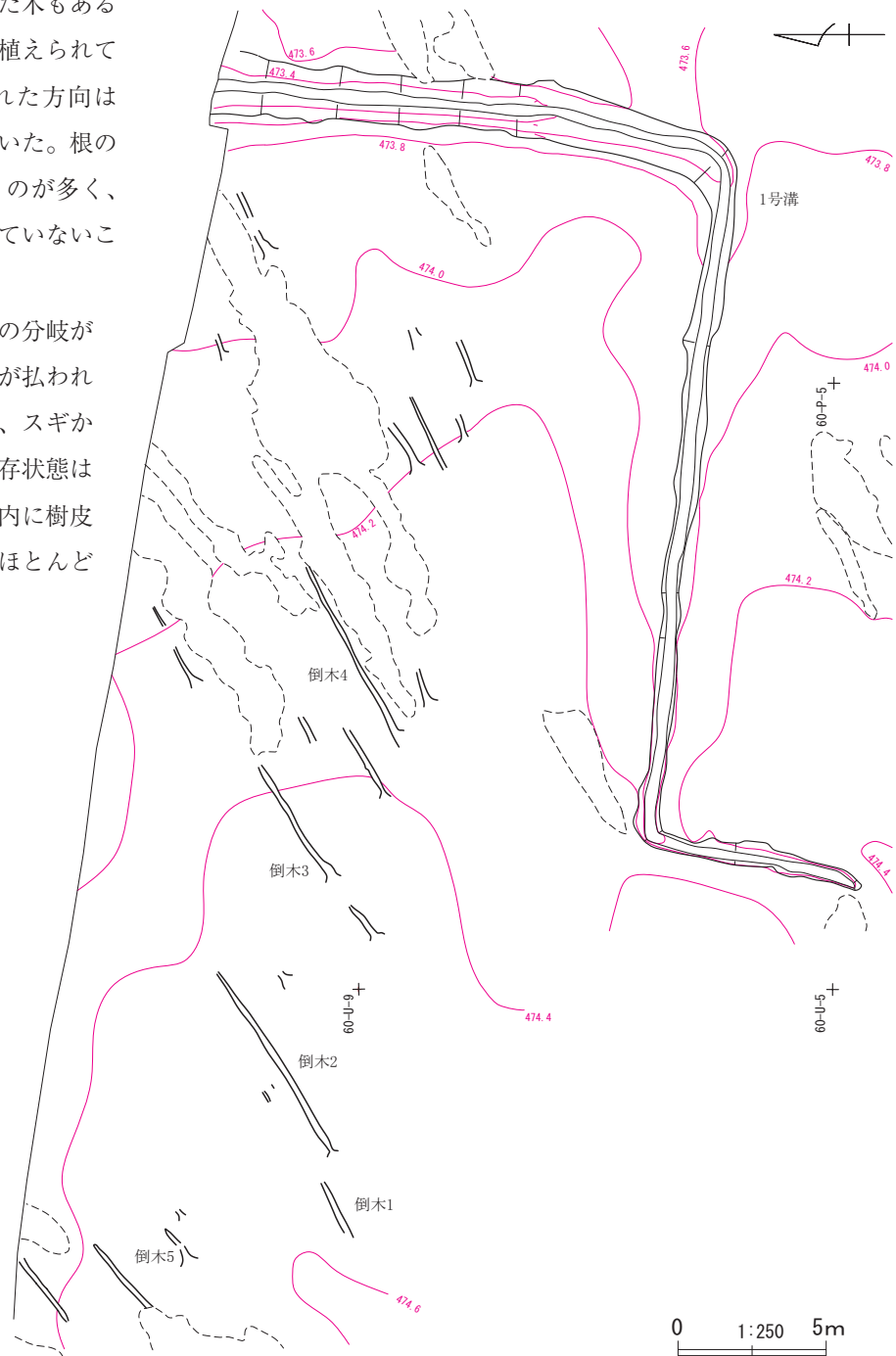
第77図 IV区3号溝

## 6 林跡

1号溝はAs-Aを多量に含む区画溝である。この溝の北側区画内は、泥流によって抉られた一画であるが、60区N-10グリッドから西へ約40mの範囲は泥流によって押し倒された木およびその痕跡が広がっていた。確認できた倒木やその痕跡は19本以上ある。重なって倒れ、地表に痕跡を残さなかった木もあるはずだが、特に密集して植えられていたとは思えない。倒れた方向はN-52° E前後に並んでいた。根の部分が土坑状に窪んだものが多く、その位置で倒れ、流されていないことが確認できる。

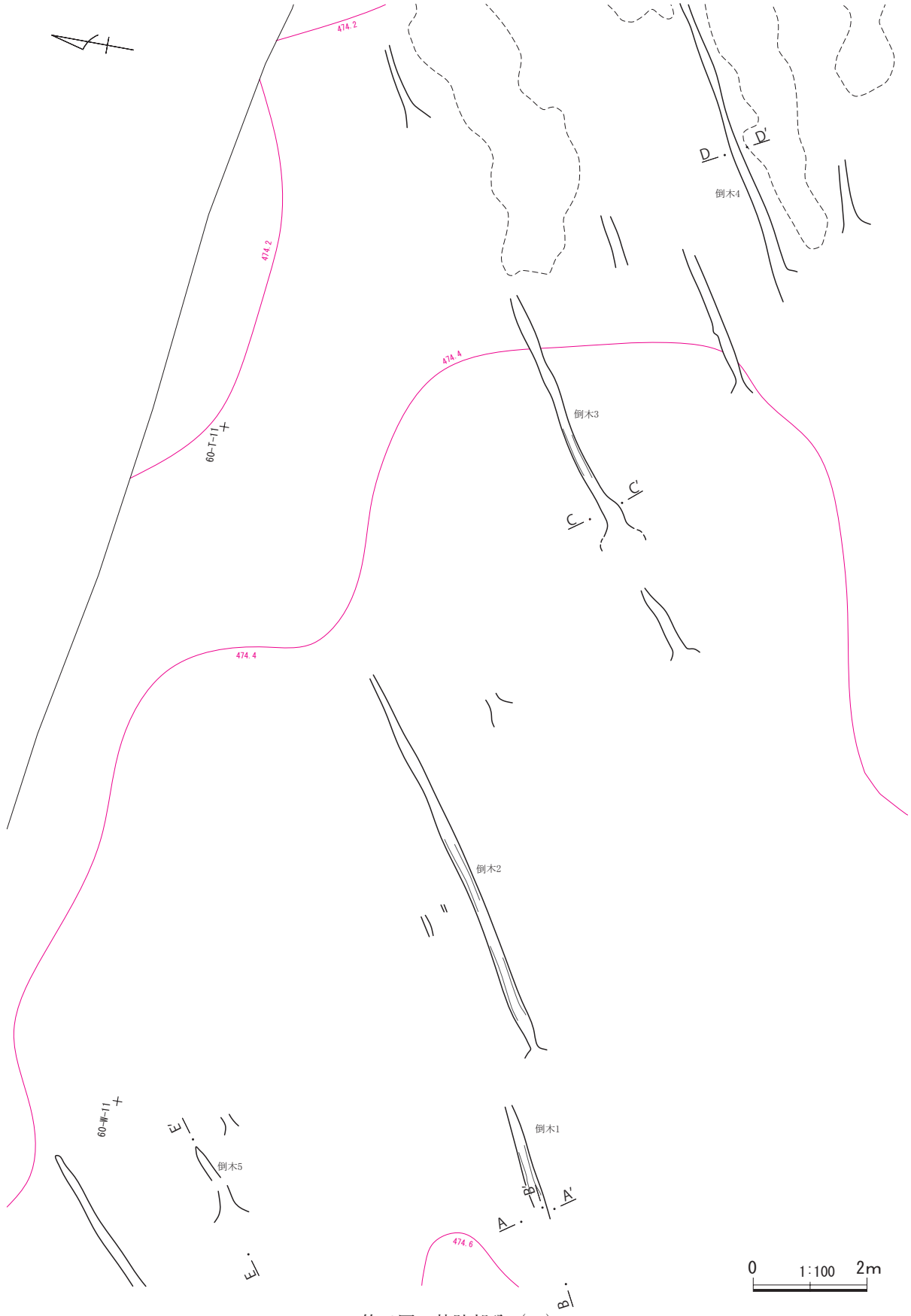
調査範囲の倒木には枝の分岐が一箇所も見られず、下枝が払われたように真っ直ぐな材で、スギかヒノキが想定される。残存状態は悪く、倒木圧痕の窪み内に樹皮が確認できる程度の材がほとんどであった。樹高は最大で7mまで計測できる。幹の太さは直径20cm以内で近似していることから、人口林の一画と推測した。木と木との間隔は根元で1.6mが最も近いもので、2m以上離れている箇所が多かった。

第80図は西側へ30m離れた51区F-10グリッド付近で見つかった倒木の圧痕らしい窪みである。前述のN-10グリッド周辺の倒木痕を確認する前に調査した地点で、当初は畑を想定した。地山は黒色味の強い柔らかな土壌で礫も少なかった。しかし、畑サクのような規則性はなく、窪みの中にAs-Aが見ら



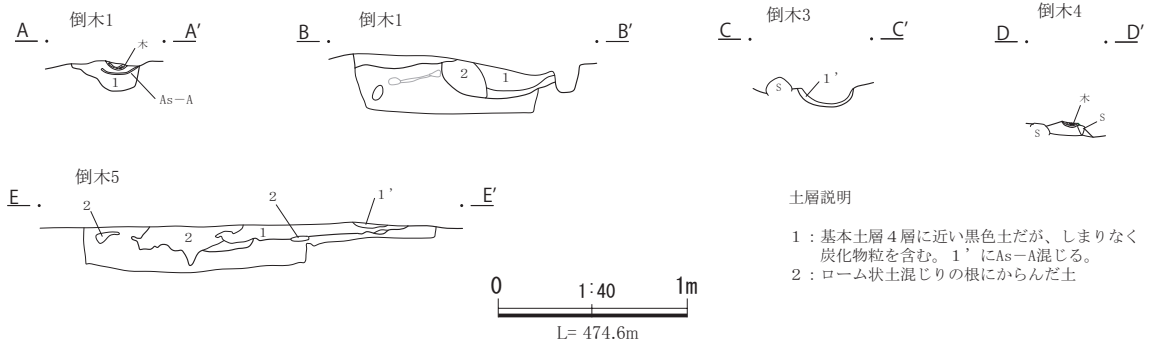
第78図 林跡





第79図 林跡部分 (1)

第1節 第1面の調査

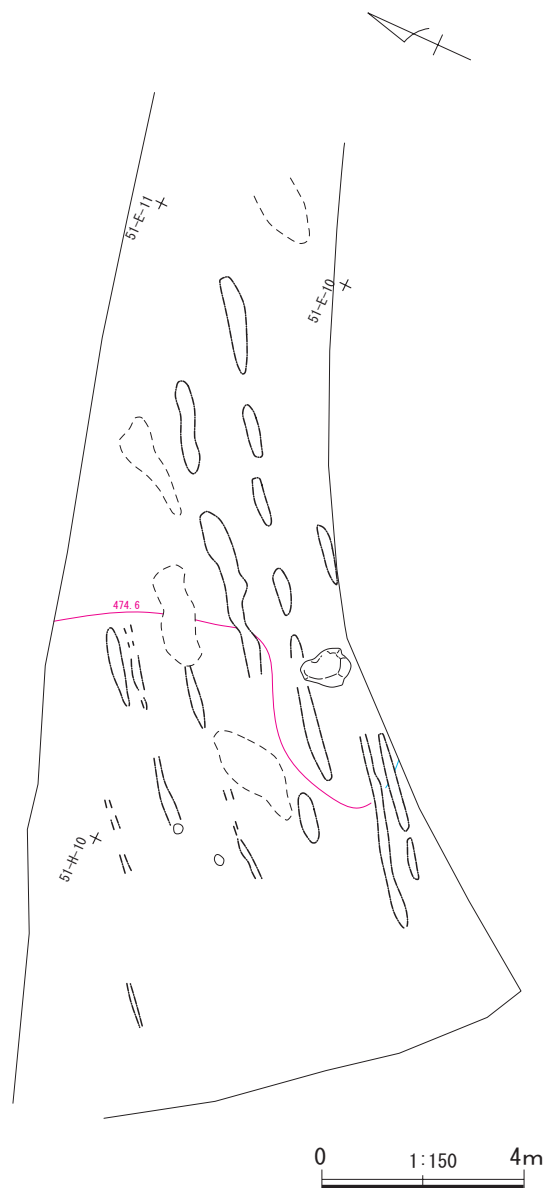


れる部分があるが、畑サク内の軽石と異なりブロック状に混入だった。樹皮や根の窪みは確認されていないが、前述倒木の確認によって、この地点の窪みが同じ走向であることから、これらも倒木痕と訂正した。

1号溝から西側へ70m以上の長さに渡って吾妻川沿いに樹林があったことが想定される。

付近はAs-Aの堆積がほとんど見られない一画で、倒木の圧痕下に見られるテフラは限定的だった。下草や落ち葉の上に降り積もった火山灰は木が倒れる前に泥流に押し流されたものと推定している。

吾妻川が屈曲する縁辺部には、植林されたグリーンベルトのような区画が今回想定された範囲を超えて存在するものと思われる。川と畑地や宅地との境界としていた景観が復元できそうである。



第80図 林跡（東）断面および林跡（西）

## 7 IV区遺構外の遺物

泥流面の調査は大半が畑の面であった。遺物も耕作土上や中からのものが主体であり、これらはIV区遺構外の遺物としてこの項で一括して扱った。

畑耕作土中の遺物は下肥とともに撒かれたものが多いと思われる。下肥が集落内のものか他所から運ばれたものかを推測する根拠は得られていない。

出土遺物数量は陶磁器類が多く43点を図示した(第81・82図)が、完形近くまで復元できた陶磁器は1点もなかった。図示できなかった細片を含め全体には磁器が少ない。

上位段丘縁辺にある堂宇に近接する17年度調査地点(40区北東隅)では陶器灯明皿の出土が目立ったが、仏花器・仏飯器などの法具は少ない。香炉(34~37)・仏飯器(38)は堂宇から離れたIV区中央部分の出土である。この他には1号建物や1号道・3号道周辺で多少出土量が多かったが、顕著なものではない。出土深度は耕作土表層付近や道際など浅い位置に偏っていた。

カワラケのような素焼きの土器は調査区全域を通じてほとんど見られなかった。焙烙・土鍋類も図示していないが、出土破片がなかったため、器種構成には不自然さを感じる。44の羽口は古代の遺物の可能性がある。

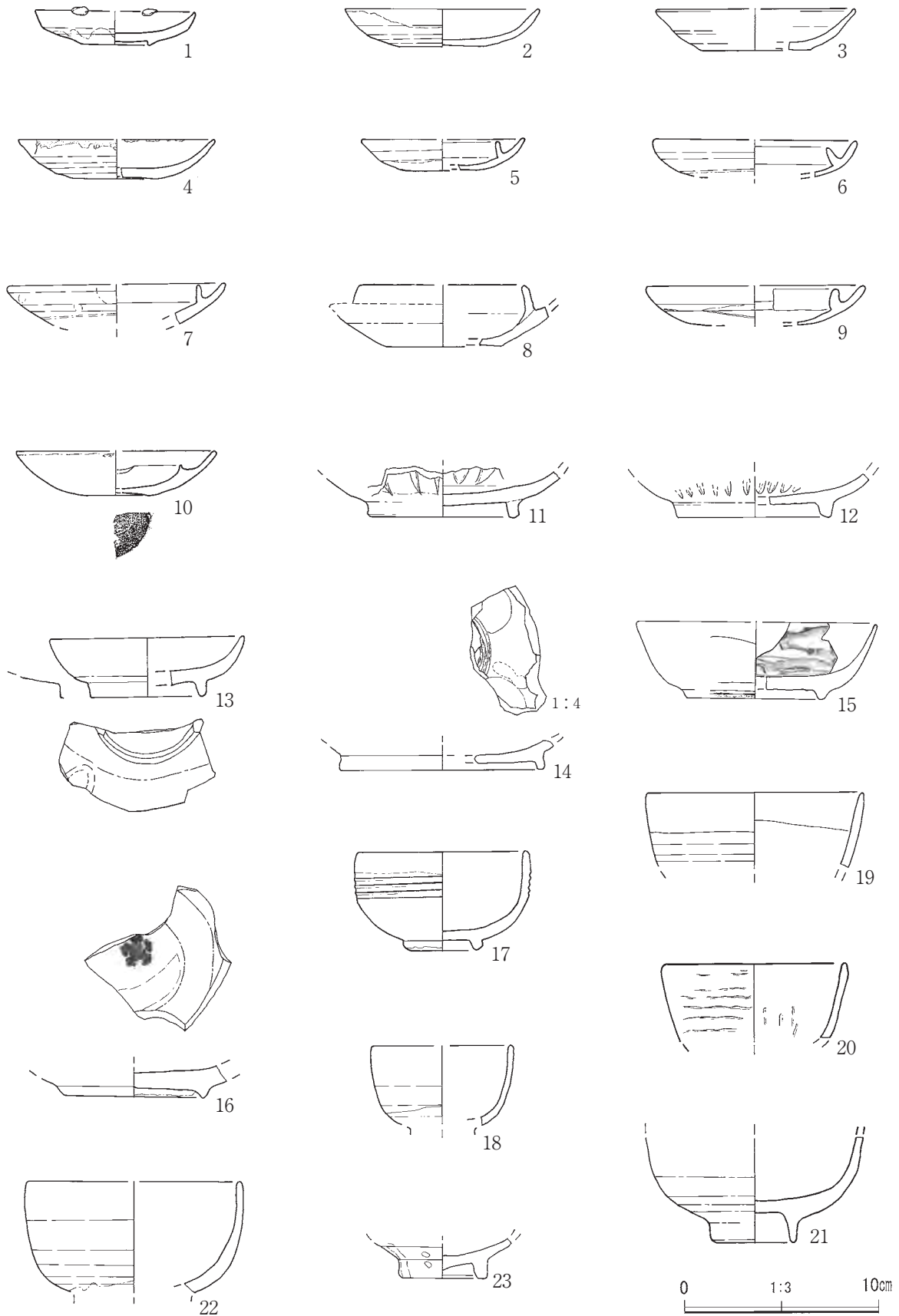
陶磁器類の出土点数は多かったが図示できない微細な遺物が中心であったため、報告では金属製品、特に17点を図示した煙管(第83図)の割合が高くなってしまった。煙管はこの他に劣化のため図示できなかった破片が2点ある。

他の金属製品を(第84図)に集めた。県内の多地域と比べ、鉄砲玉の出土数が多いのは八ツ場ダム関連の遺跡の特色といえそうである。本遺跡でもIV区の2点(31・32)の他にV区からも2点出土している。注目される金属遺物として25の分銅があげられよう。反面、鍬・鎌などの農具の出土はなかった。釘類の出土も少ないといえよう。

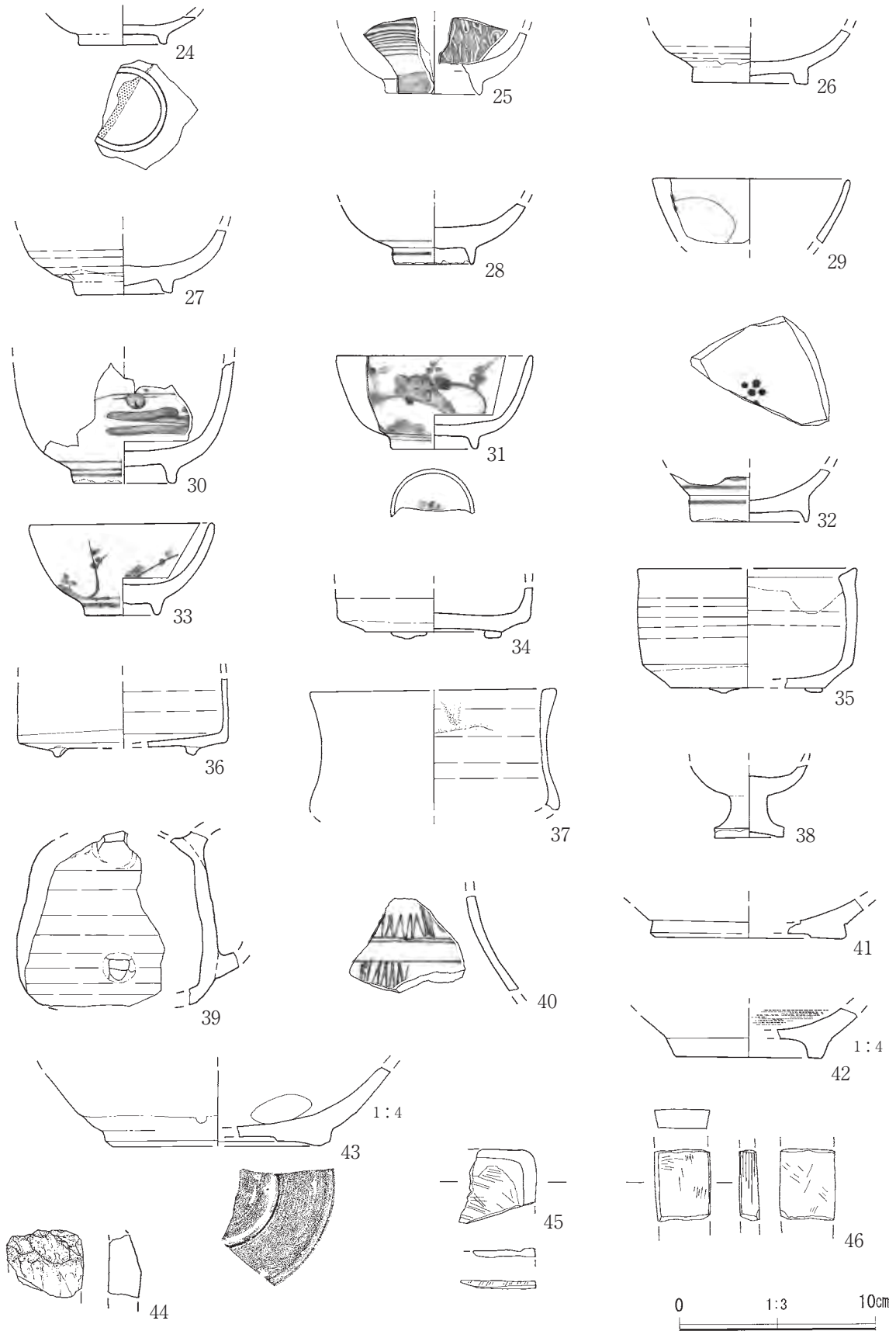
銅銭(33~39)の出土も畑主体の遺跡としては多かった。7点を図示したが、6点が寛永通宝である。

全体に残存状態は良くない。この他に劣化が著しく図示に耐えなかった破片が2点出土している。

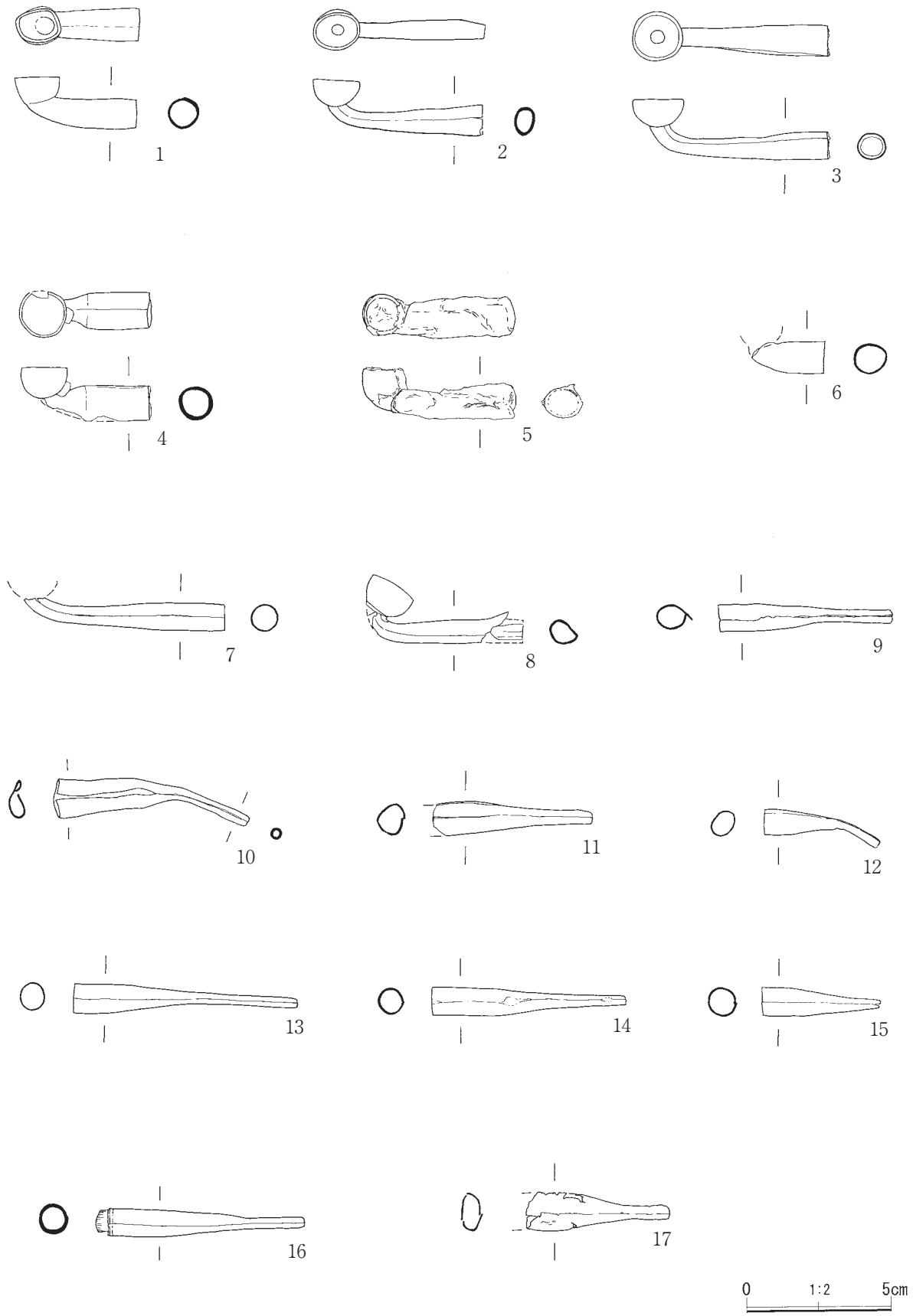
木製品の出土は比較的多かった。小型品(第85図)のうち、1は杓文字の先側破片と思われる。摩滅が進んでいる。2は桶の底板に類似するが、一端部をL字状に切り込んだ不明品である。3は6面に切断痕のある建材木っ端である。4・5は底板だが、4は底部中央の位置に穿孔され貫通していた。側面に木釘の抜けた穴が2箇所見え、曲物底部であったことが推測できる。5は摩滅が進み不明瞭だが、片面の縁部に弧状の圧痕が観察できた。



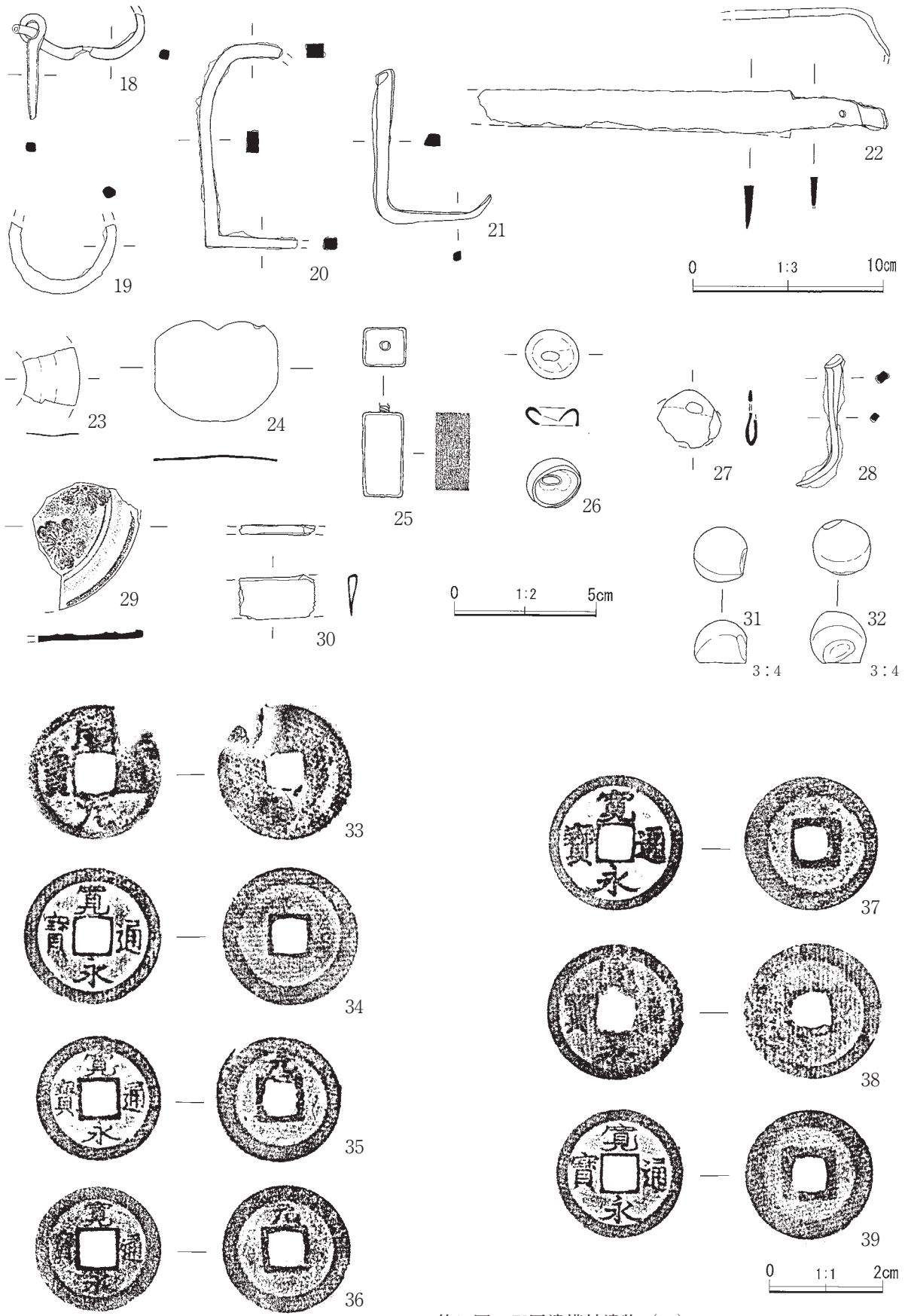
第81図 IV区遺構外遺物 (1)



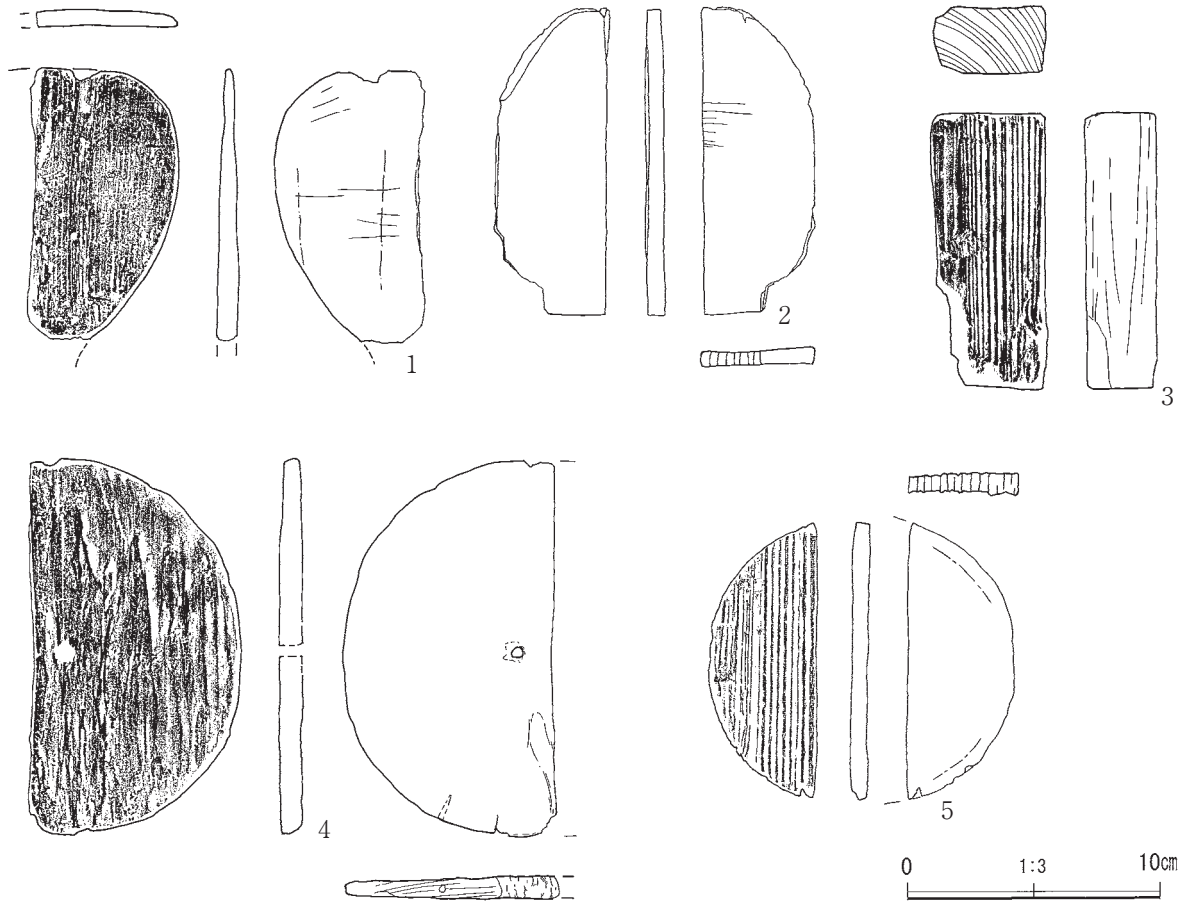
第82図 IV区遺構外遺物(2)



第83図 IV区遺構外遺物 (3)



第84図 IV区遺構外遺物(4)



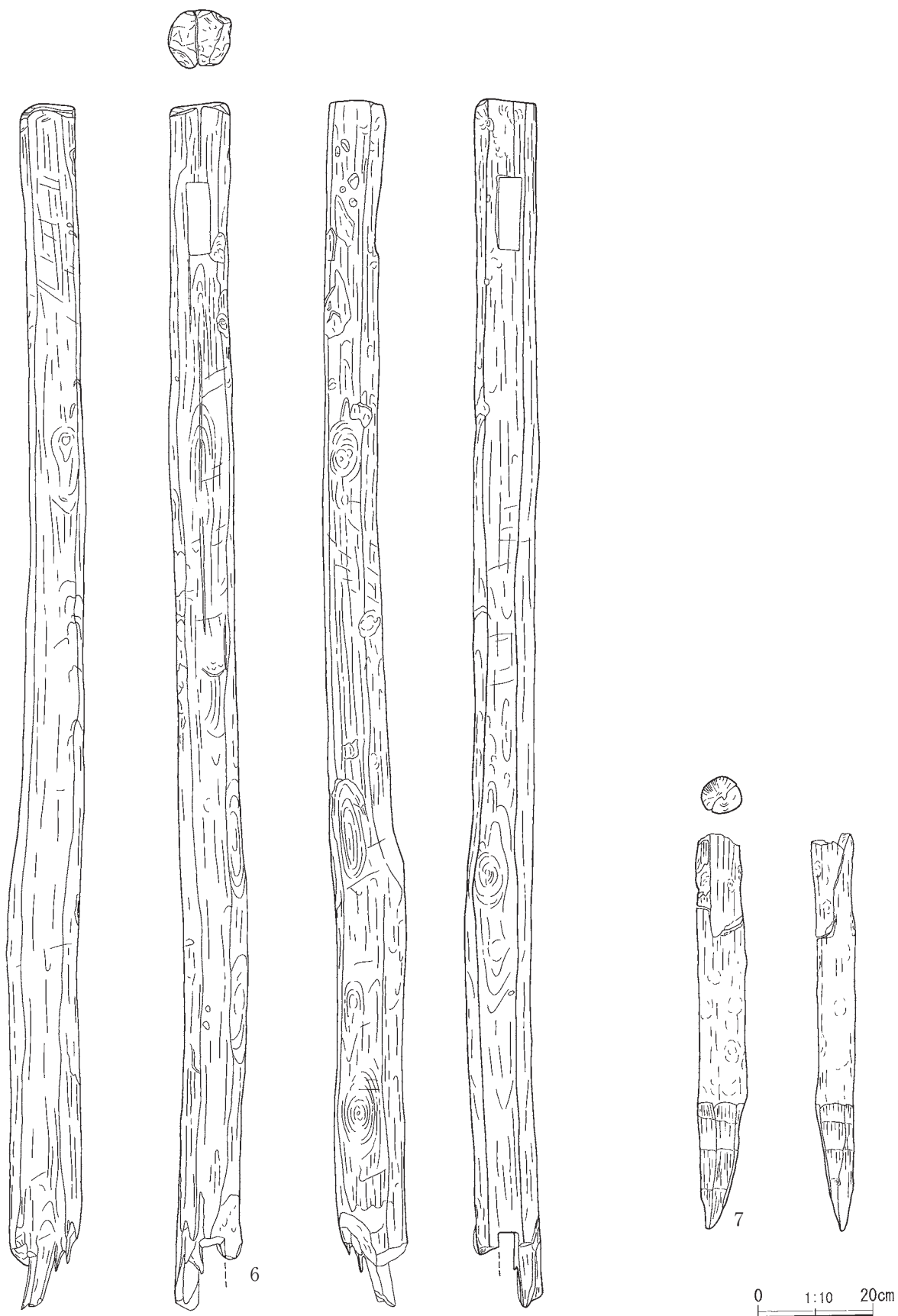
第85図 IV区遺構外遺物（5）

大型品（第86図）のうち、6は建築部材である。泥流で流された長さ2.1m以上の材で、1号壁東側へ100m以上はなれた18区画畑直上で出土した。調査段階では太さが近似することから1号壁に伴う部材と推定したが、ホゾ孔の間隔が中央で測って180cmあり、柱材にも梁・桁材にも符号しない。ホゾ部分で破断しており、建物が引きちぎられたものと推定できる。節の多い材で多少曲がっている。割り材に近いものである。

7は杭の先端部で、ナタで雑に削り出され左右対称にならない。杭材らしい木製品は他にも数点出土しているが、いずれも残存状態は悪い。

その他にも漆椀らしい破片や加工痕を持つ可能性のある端材などの出土があるが、図示に耐えるものではなかった。これらは遺跡全体に散らばるように採取されたもので、集中出土地点のような偏りは見られない。陶磁器片と同じように耕作地に散乱したものであろう。





第86図 IV区遺構外遺物 (6)

## 第2節 第2面の調査

IV区2面の調査は天明泥流下の第1面下をトレンチやグリッドで遺構確認し、そこから拡張して掘り広げた面を呼称した。基本土層V・VI層土を埋没土に持つ遺構であるが、古代の竪穴住居が確認できるさらに上面から確認可能な遺構であった。調査段階では古代から中世にかけては同一面として扱ったが、古代の遺構を第3面とし、中世から天明三年以前の遺構を第2面と整理段階で呼び直した。

V・VI層土は地点によって層厚に差が大きく、50区中央から南側にかけては旧流路上の窪地があり2

m以上の深さがあるが、60区では50cm前後でローム状土に達していた。浅い地点では細かなグリッドを数多く設定し、遺構の漏れに備えた。深い地点では遺構は少なかったが、トレンチを設定し、土層確認とともに包含層の把握にも努めた。



第87図 IV区2面調査概念図

## 8 溝 (2面)

一括してこの項で扱ったが、多様な形状のものが混在した。4号溝、8号溝などは比較的深く短い、溝と土坑の中間的な規模の施設であった。浅く長い区画溝状の施設には、9号溝のような直線的なものと、7号溝のように蛇行するものがある。これらの溝は天明三年以前の区画・土地利用を復元するための資料となり得るものであった。

2面は中世から近世前半までが対象となる。時間幅は長いが、他の遺構同様に時期を明瞭にできる資料に乏しい。また2面の溝には、明らかに流路と分かる施設は確認できなかった。

### 4号溝

12区画12・13畑の西側境界の真下から見つかった、直線的な溝である。底面は平坦で壁も垂直に近い立ち上がりをしている。地山ローム状土を掘り込んでいるが、埋没土中にローム状土の混入は少ない。底面は底さらいされ、土塁状の施設はなかったと断面からも想定できる。区画溝と思われるが、深さがあり、湧水の多い地点にあることから、暗渠的な機能も併せ持った施設かもしれない。北隅の地山ローム状度部分は排水性のよい土層である。断面観察で流水や貯水の痕跡は確認できない。P-3グリッド付近から本溝西側に柱列が表れ、南側へと続いている。

旧流路の窪み地形に直行するように開削された溝である。北側は地山礫の多い斜面にかけあがる地点で、埋没土内にも多量の礫が混入していた。この部分のみ底面はローム状土を掘り込んでいた。

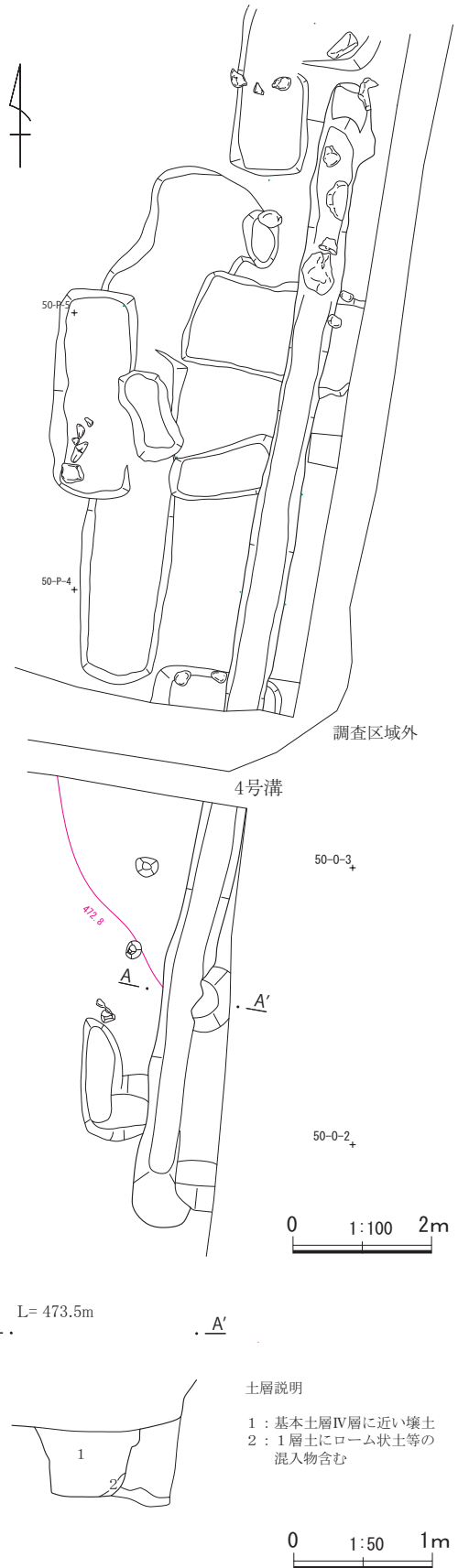
土坑の多い一画にあり、本溝は確認できる範囲ではすべての土坑に後出するが、これら土坑には本溝と軸方向の類似するものが多い。土坑群の時期とは大きな時間差のない遺構と推測している。

位置 50区O-1から5グリッド

軸方向 N-10° E

規模 全長16.7m、幅75cm

備考 1・4・5・172号土坑などに後出している。



第88図 IV区4号溝

5号溝

径1.7mを超える巨礫から南西側に4.9m続く不明瞭な窪みである。当初、泥流に流された巨礫の痕跡と考えたが、この礫が地山礫であることが分かり、埋没土も泥流ではないことから遺構として扱った。土坑に近い施設であろうか。幅は60~90cm、深さは10cm前後で、底面は比較的平坦である。

位置 41区G・H-25グリッド

6号溝

5号溝西隅付近からほぼ直線的に北東方向へ向かう、浅く狭い溝である。ローム状土混じりの不明瞭な埋没土で、流水の痕跡は認められない。礫の混入も少なかった。底面レベルは地山の凹凸に沿って波打つような高低がある。

5号溝の南西端部に本溝の隅部分となる可能性のある突出地点があるが、明確ではない。

地境の溝と思われるが、第1面の区画とは無縁な軸方向を取っている。北東側にある7号溝と対になって道の側溝となる可能性もある。道であれば本溝北東隅で7号溝と並ぶ地点での道幅は1.3m前後となり、1号道に近似した、本遺跡内では最大規模の道となる。

位置 41区H-25から51区G-2グリッド

軸方向 N-34° E

規模 長さ8.9m、幅10cm前後、深さ5~12cm



第89図 IV区5・6号溝

7号溝

弧状に曲がる細く浅い溝である。途中に径1mを超える地山礫が露出する地点があり、そこを迂回せずに平面的に道を繋いでいるので、水路の可能性はない。底面は平坦だが、レベルは波打つように凹凸があった。畑の区画境溝より、道の側溝のような施設が考えられよう。

埋没土にAs-Aは全く見られなかった。天明三年段階では痕跡は残っていなかったと思われるが、泥流による攪乱が最も強い地点で、As-A混じりの上面が大きく削られている可能性がある。礫の混入はほとんどなかった。1号道の延長部分側溝となることも推測できよう。

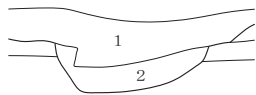
位置 51区C-2からG-2グリッド

軸方向 N-84° E前後。西隅では20度以上南向きに偏っている。

規模 長さ約16m。幅40cm前後。深さ7~18cm

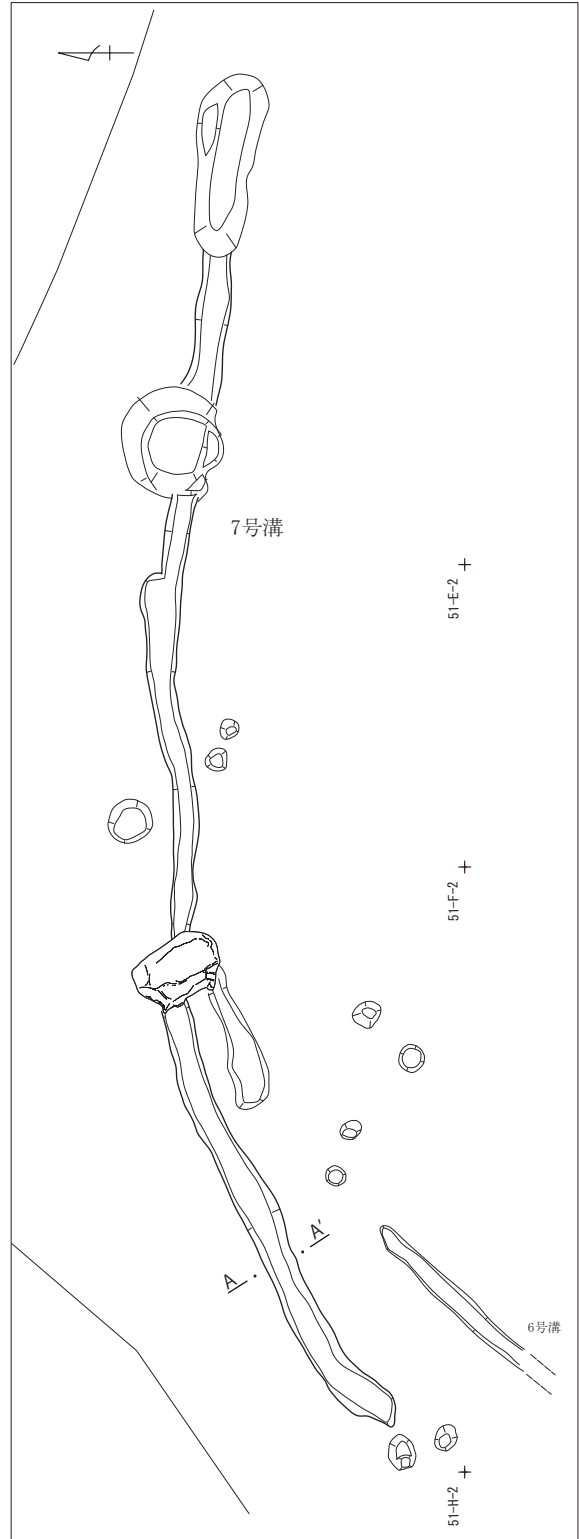
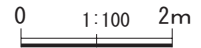
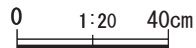
備考 溝上に、中層付近にAs-Aを含む土坑が2基あった。溝南側にもピット状の土坑が散在するが、これらは本溝が道の北側溝であれば道上に位置することになる。

A . L=475.0m . A'



土層説明

- 1 : As-Aを散見する黒色土
- 2 : ローム状土の混入多い弱粘性土でしまり強い



第90図 IV区7号溝

8号溝

地山ローム状土を垂直に深く掘り込んだ明瞭な遺構であった。西半分は直線的だが、東隅で小さく南側へ曲がっている。底面は比較的平坦で、排水性の高いローム状土まで掘り込んでいる。特に西側では礫混じり層まで達している。暗渠的な用途を意図した施設と推測した。形状・規模とも4号溝に近似しているが、軸方向が大きく異なる。

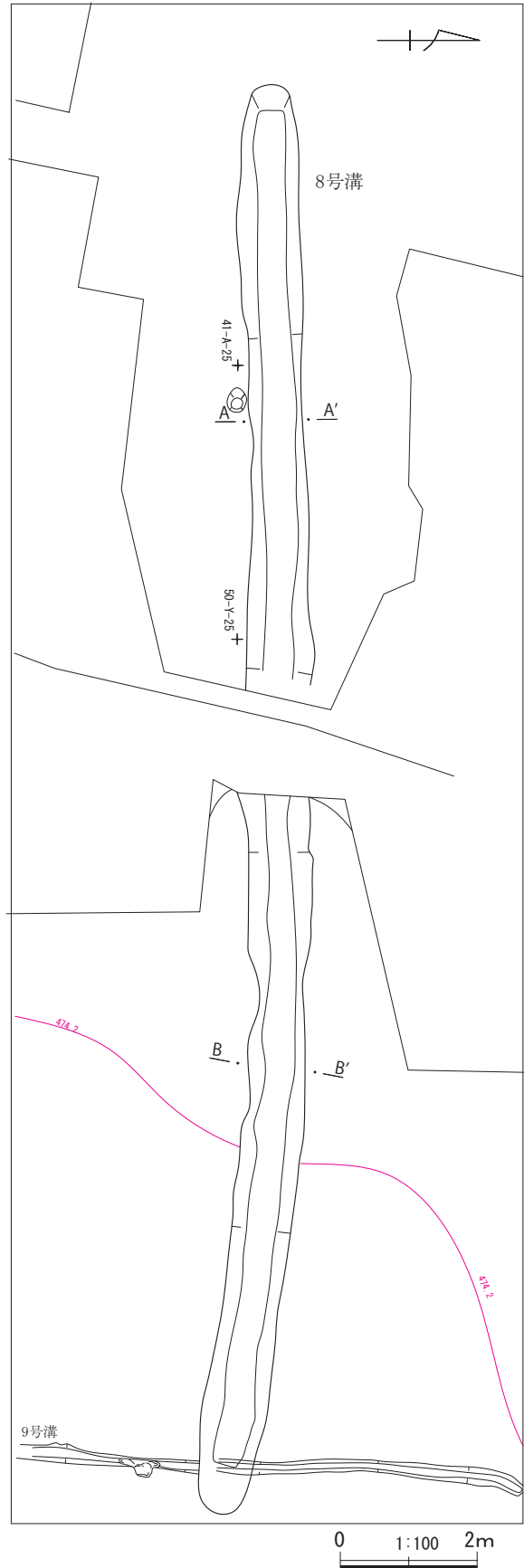
埋没土にローム状土の混入が少なく、掘削時に丁寧に底さらいをしたこと、土塁状の施設のなかったことが推測できる。ただし、礫の混入はやや多く、人為的な埋め戻しの可能性もある。断面観察から掘り直しの痕跡を確認できるが、西側と東側では形状が異なり、別の掘り直しを行った可能性がある。

位置 50区V-25から41区A-25グリッド

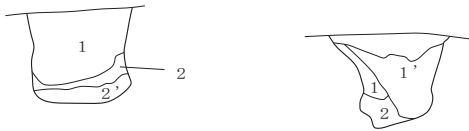
軸方向 全体ではN-89° Eだが、西半分ではやや西側を向いている。

規模 全長21m、幅90cm

備考 底面レベルは東側に7cm下がっているが、地山の傾斜より緩やかである。東隅で重複する9号溝は規模の異なる溝だが、本溝の東隅で直行するように後出している。互いに区画を意識した施設となろう。9号溝と重複し先出していることが、9号溝断面で確認できる。

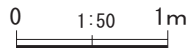


A L=474.5m      A'  
B L=474.0m      B'



土層説明

- 1 : ローム小ブロック、細礫混じりの黒色非粘性土層。1' は土質同じだがしまり欠く掘り直し部分。
- 2 : ややしまり欠く暗褐色弱粘性土層。2' で礫の混入やや多い。



第91図 IV区8号溝

9号溝

遺構の少ない地点にある。細く浅いが、長い溝である。そのためV-1グリッド付近で泥流による土圧で歪んだ部分を生じている。底面のレベルは一律でなく、水路とは考えにくい。埋没土の観察からも、流水・溜水の痕跡は観察できない。泥流面（第1面）畑の南北区画に近似した方向にあり区画溝と考えられるが、道の側溝の可能性もあろう。本溝北隅が東側に曲がるので、区画溝である1面の1号溝西隅に近づくが、南側にある5号道からは西側へ逸れ、軸方向も同一ではない。天明三年直近の畑区画とは考えにくい。

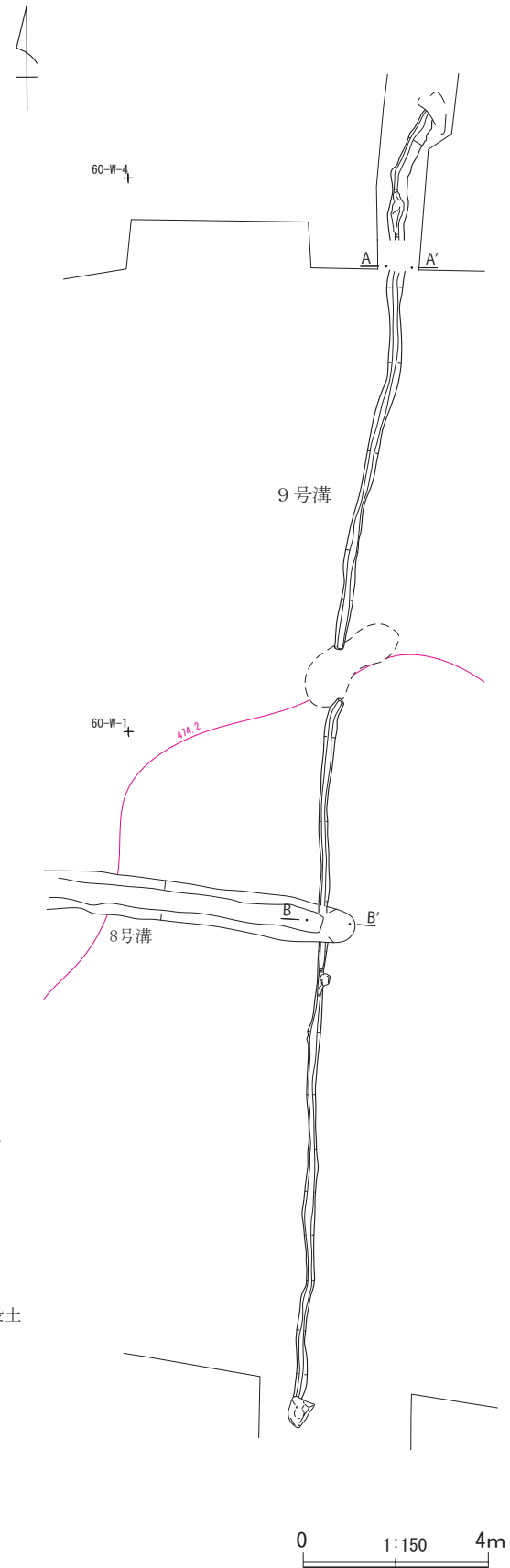
本溝の南端は地山中にある径1.2mの礫にぶつかるようにして止まっている。区画溝がこの礫を起点として開鑿されるのであれば、この礫は目印的な礫であったとも想定されよう。

位置 50区V-22から60区U-4グリッド

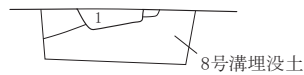
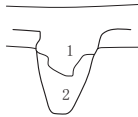
軸方向 N-6° E

規模 全長29m、幅13~40cm

備考 8号溝に後出する。

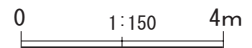
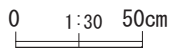


A L=474.6m A'      B L=474.6m B'



土層説明

- 1 : 粘性のある暗褐色土層。しまりあり。混入物少ない
- 2 : ブロック状の黒色土のようなボソボソした土。1層よりしまりは弱い。ローム状土混じる。



第92図 IV区9号溝

10号溝

東西に走行する、細かな蛇行はあるがほぼ直線な溝である。両端で途切れているが、南側80cmに平行して並ぶ11号溝と共に道の両側溝状の様相を呈している。底面は地山の傾斜に沿って西側が高くなっている。

泥流面（第1面）で確認した1号道が約50m東側にあり、この道の旧道部分と考えられる。両溝内側で計測した推定道部分は幅80cmで、東側1号道よりやや狭い。本溝の北側3.5mには同じ泥流面の1号溝東西走行部分が軸方向を同じくして並んでいる。1号溝の南側縁部を1号道の西延長部分と想定したが、本溝に伴う道がそれに先行したことになる。天明三年段階には道を北側に移し、耕地を広げたと推測できる。

位置 60区Q-4 からS-5グリッド

軸方向 N-81° W

規模 長さ10.4m、幅45cm前後、深さ11~18cm。

備考 埋没土にAs-Aは見られない。礫の混入はほとんどない。

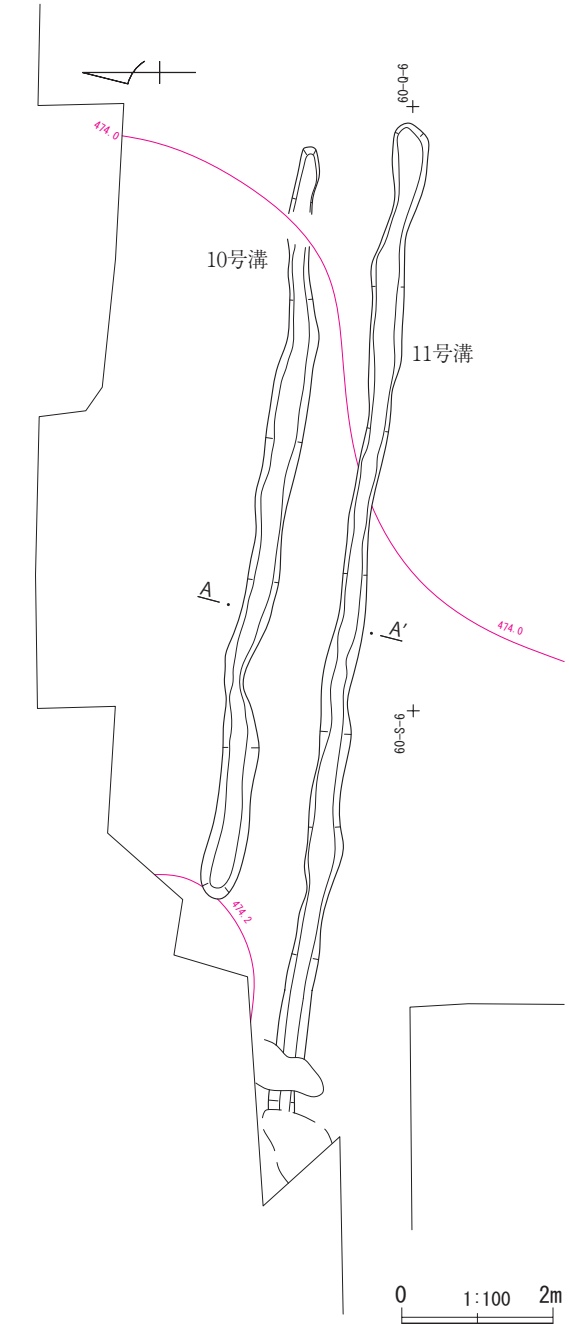
11号溝

形状・底面の傾斜・埋没土等、9号溝にほぼ同一でやや浅めの溝である。西側端部は攪乱で削られ確認できない。

位置 60区Q-4 からT-4グリッド

軸方向 N-81° W

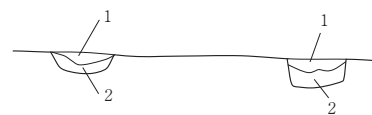
規模 深さ7~13cm



A L= 475.5m

A'

- 1 暗褐10YR3/3 基本土層IVとVの中間的な土層。表面に鉄分凝集あり。細礫混じり。しまり強い。
- 2 1層土に類似。礫の混入少なく、ローム状土の混入増える。



0 1:40 1m

第93図 IV区10・11号溝



12号溝

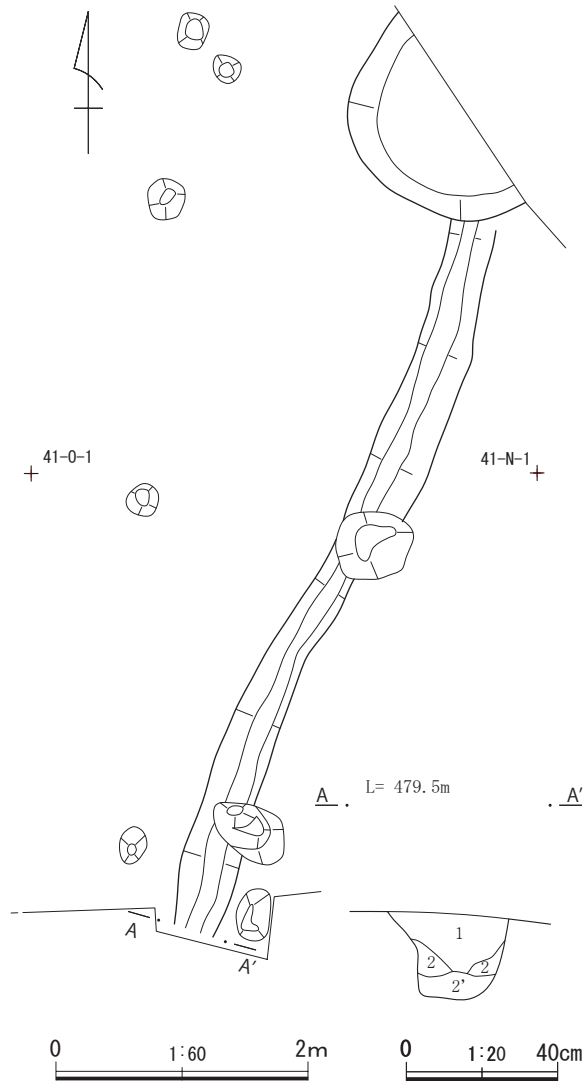
緩やかな斜面の等高線に直行するように、南から北へ小さく蛇行し下降する細い溝である。南側は調査区域外まで延びている。北側は上位段丘から下位段丘の境の急斜面に至ると思われる。

ピット状の遺構の多い一画で、本溝はこれらの施設と重複するが、埋没土は類似している。流水や溜水の痕跡は観察できない。区画溝としてはやや蛇行が大きいようだが、他の用途は考えにくい。

位置 31区N-25から41区N-1グリッド

軸方向 N-23° E

規模 全長6.1m、幅28~44cm



第94図 IV区12号溝

9 土坑と墓坑

最も数の多い遺構であり、IV区だけで235基を調査した。東側のⅢ区(上郷岡原1)やそれに隣接する平成17年度調査地点ではさらに密度の高い分布が確かめられている。

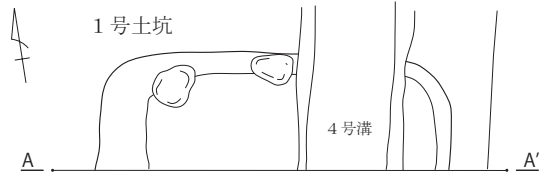
1面で畑が確認された地点下の土坑の多くは長方形で、軸方向が1面畑のサク方向に並ぶか直行しており、種イモ貯蔵穴等の農耕に関わる施設が多いと思われる。これより、1面で遺構が見えなかった地点でも、同様の土坑が確認される場合は上面に畑があったと推測できよう。これらの土坑は麻畑下からも数多く確認できるので、麻生産が盛んになる以前の遺構と考えたい。

長方形の土坑には中に多量の礫を廃棄したものである。8・64・97・109・146・214号土坑等、調査区全域に分布している。貯蔵用の土坑を転用したか、耕作の邪魔な礫を埋める目的で掘り込まれたのかは判別できなかった。

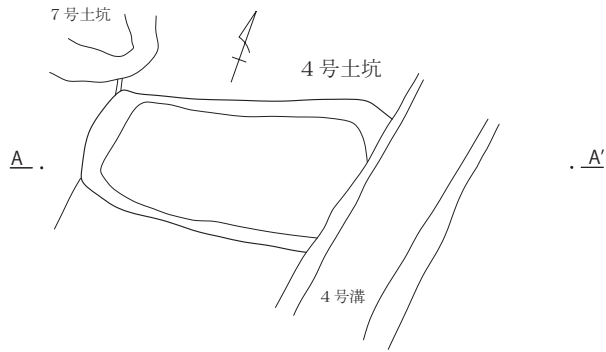
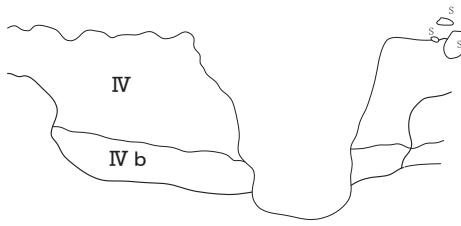
居住域周辺で円形や柱穴状の土坑を中心に、形態の異なる遺構の調査数が多くなっている。

土坑の概略や埋没土の記載については10頁に記した。また出土遺物については131頁に、個別土坑の内容については131頁以降の一覧表で一括して説明を加えた。

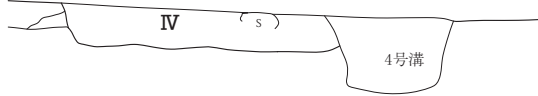
- 1 暗褐色10YR3/3 基本土層Ⅳに近い。細礫等を少量含み、ややしまり強い。
- 2 黒褐色10YR3/2 ボソボソした非粘性土層。1層よりしまり欠く。2'にはローム状土の混入増える。



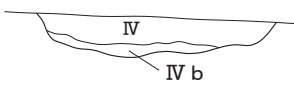
A . L= 473.8m1 号土坑 . A'



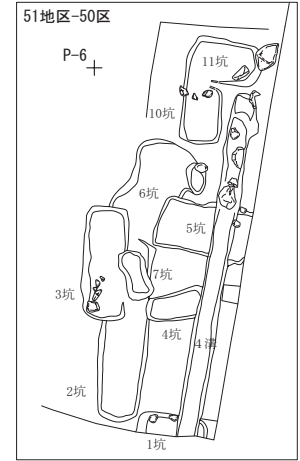
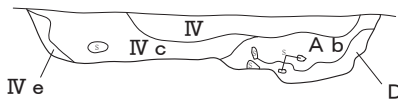
A . 4号土坑 . A'



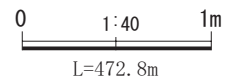
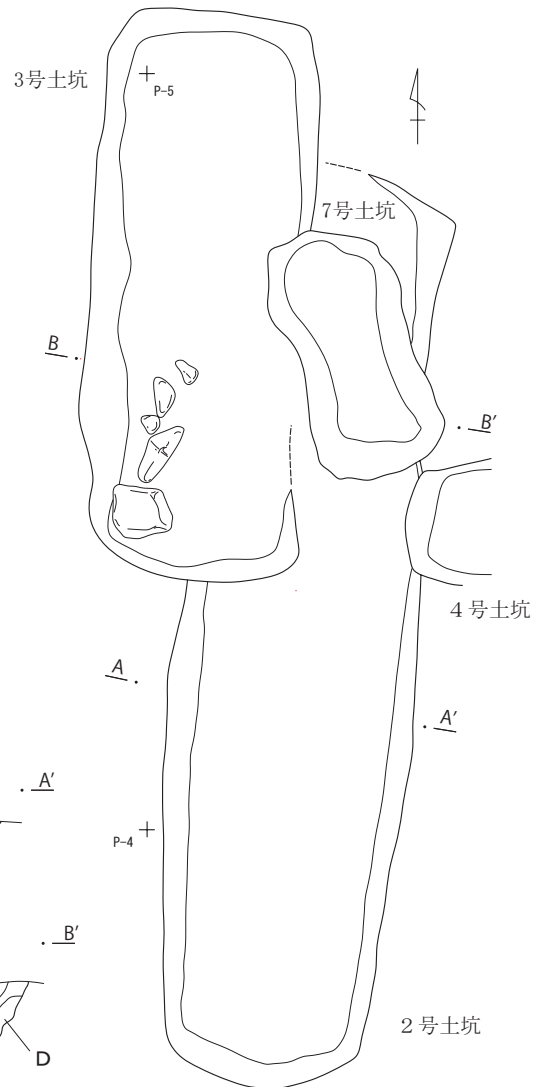
A . 2号土坑 . A'



B . 3・7号土坑 . B'

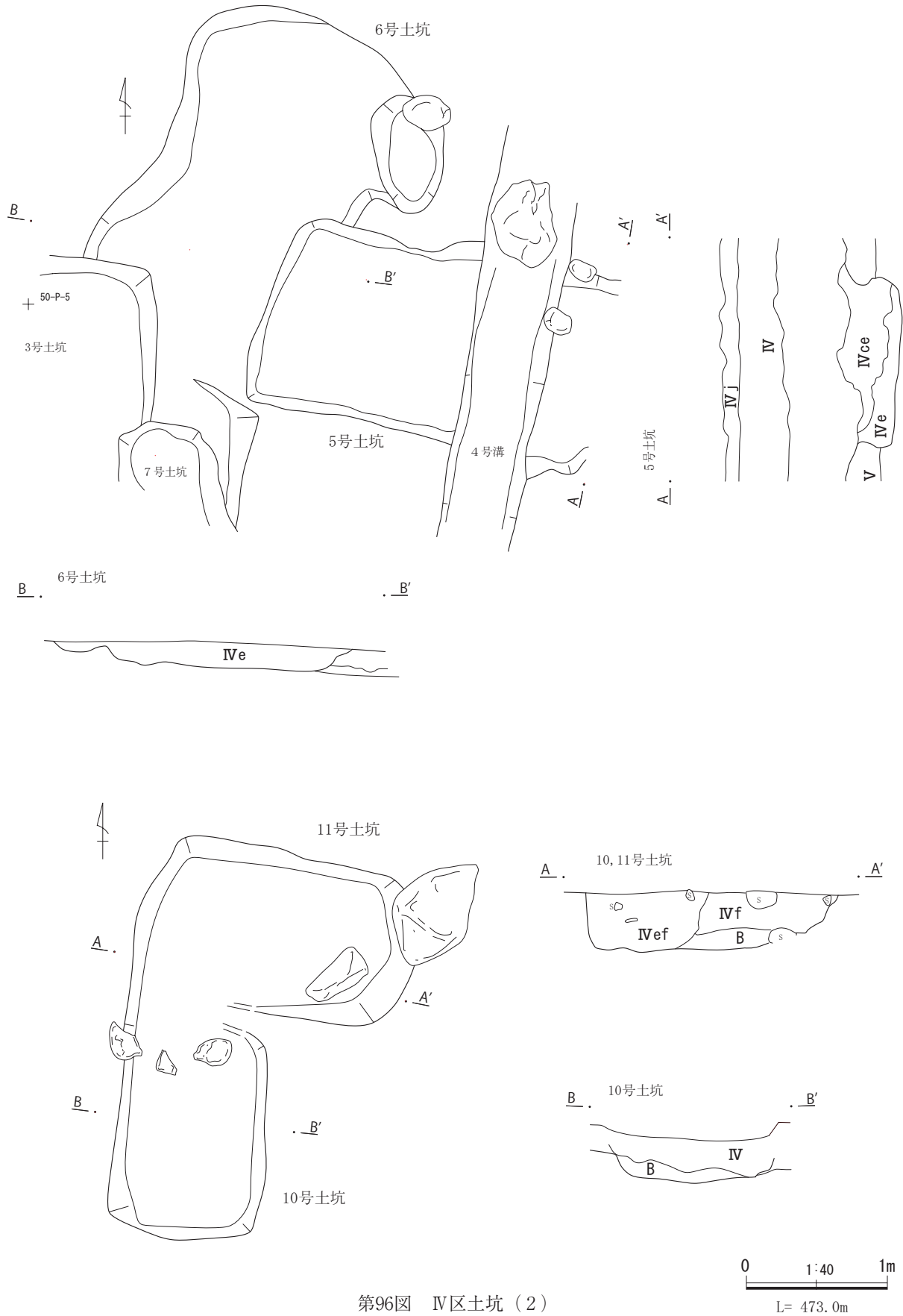


1:200

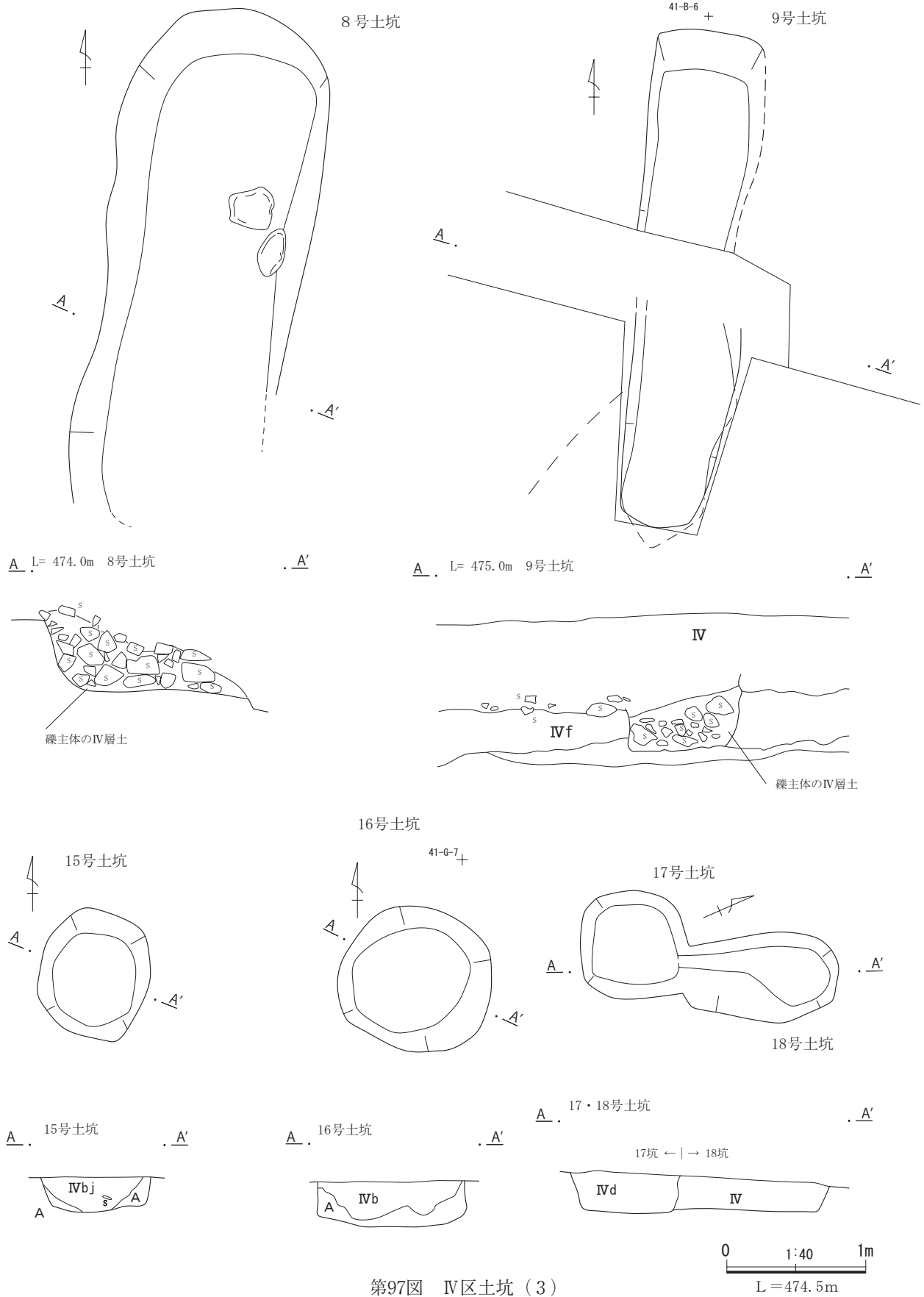


第95図 IV区土坑 (1)

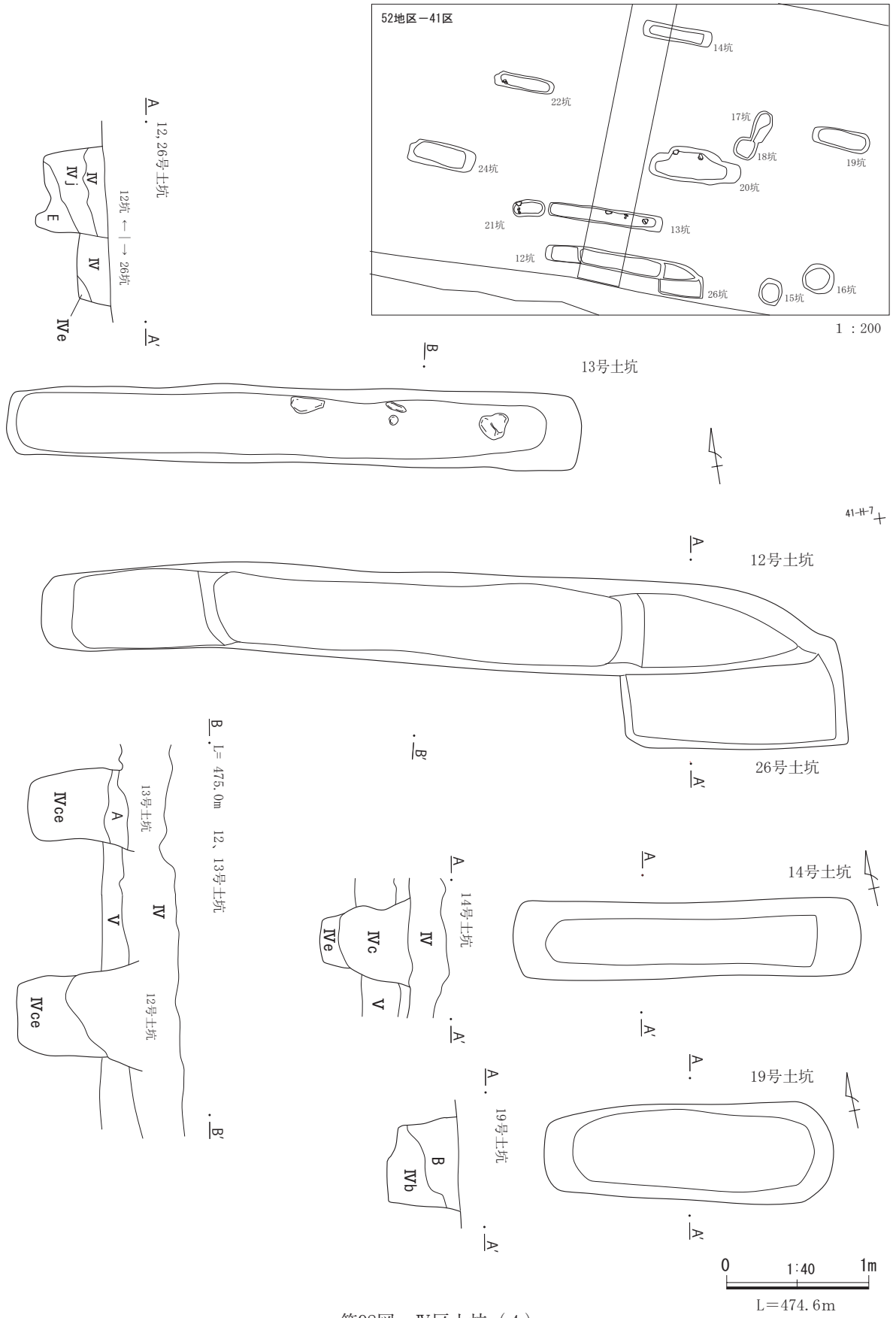
第4章 IV区の調査



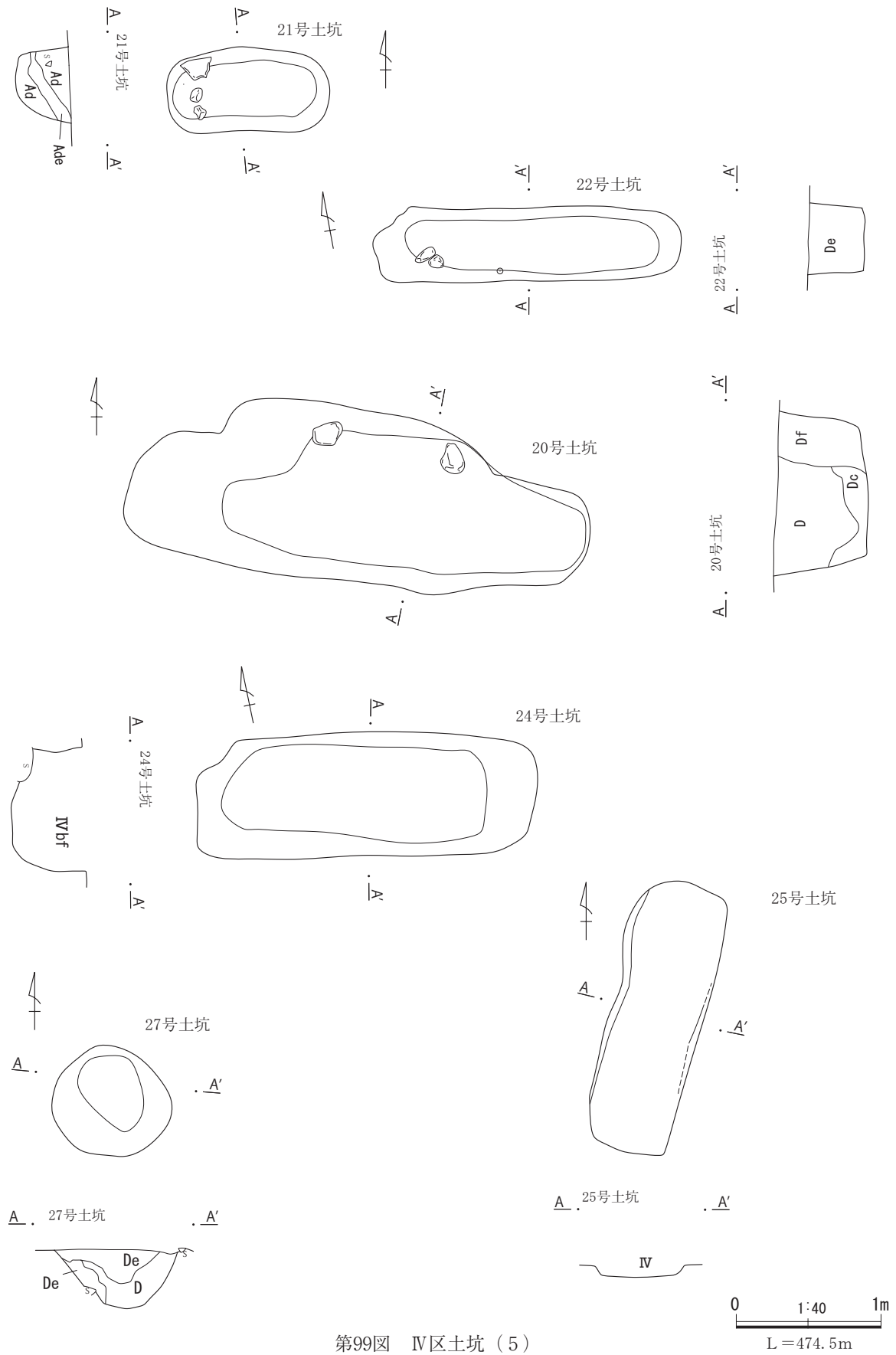
第96図 IV区土坑 (2)



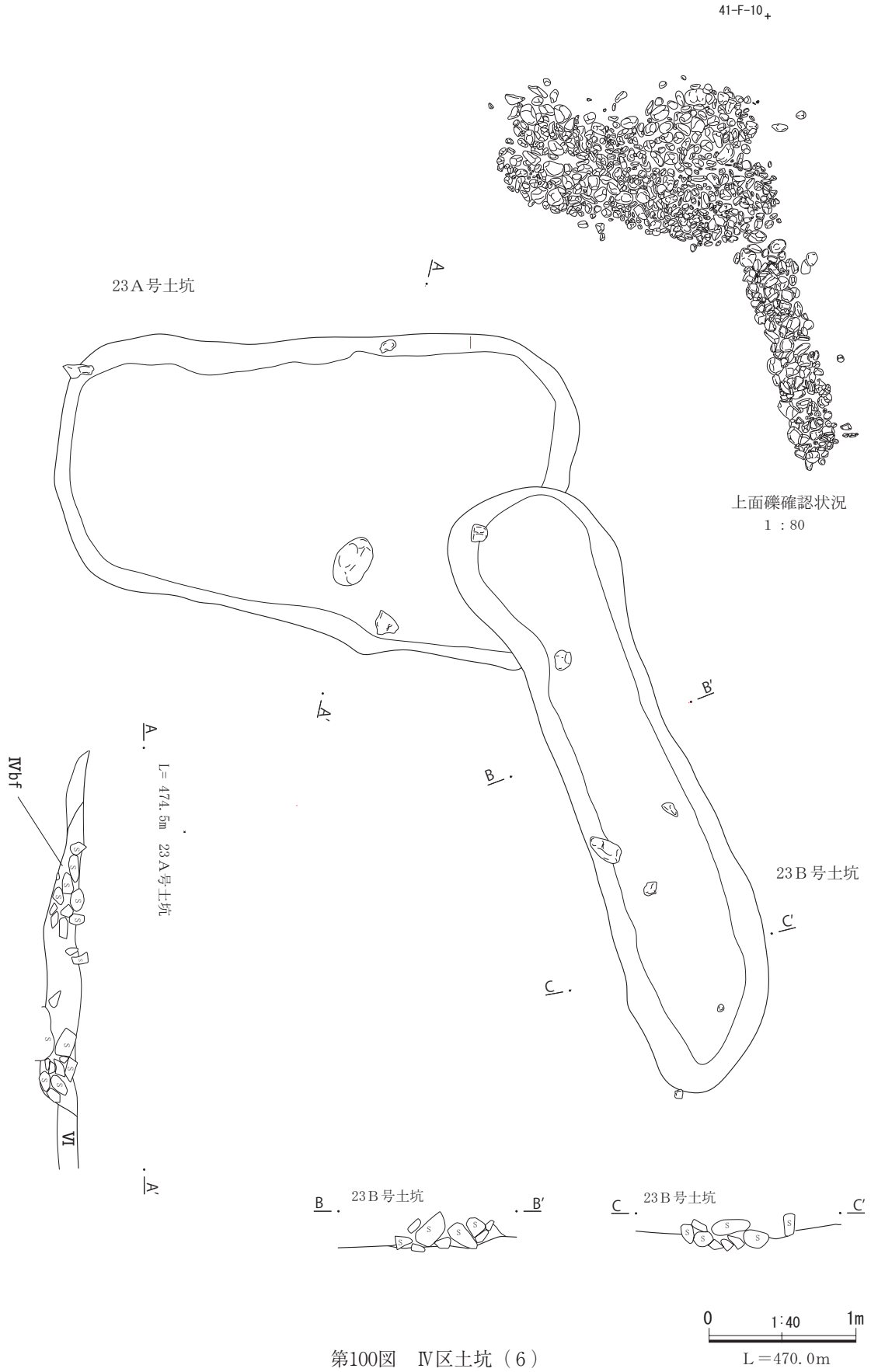
第97図 IV区土坑 (3)



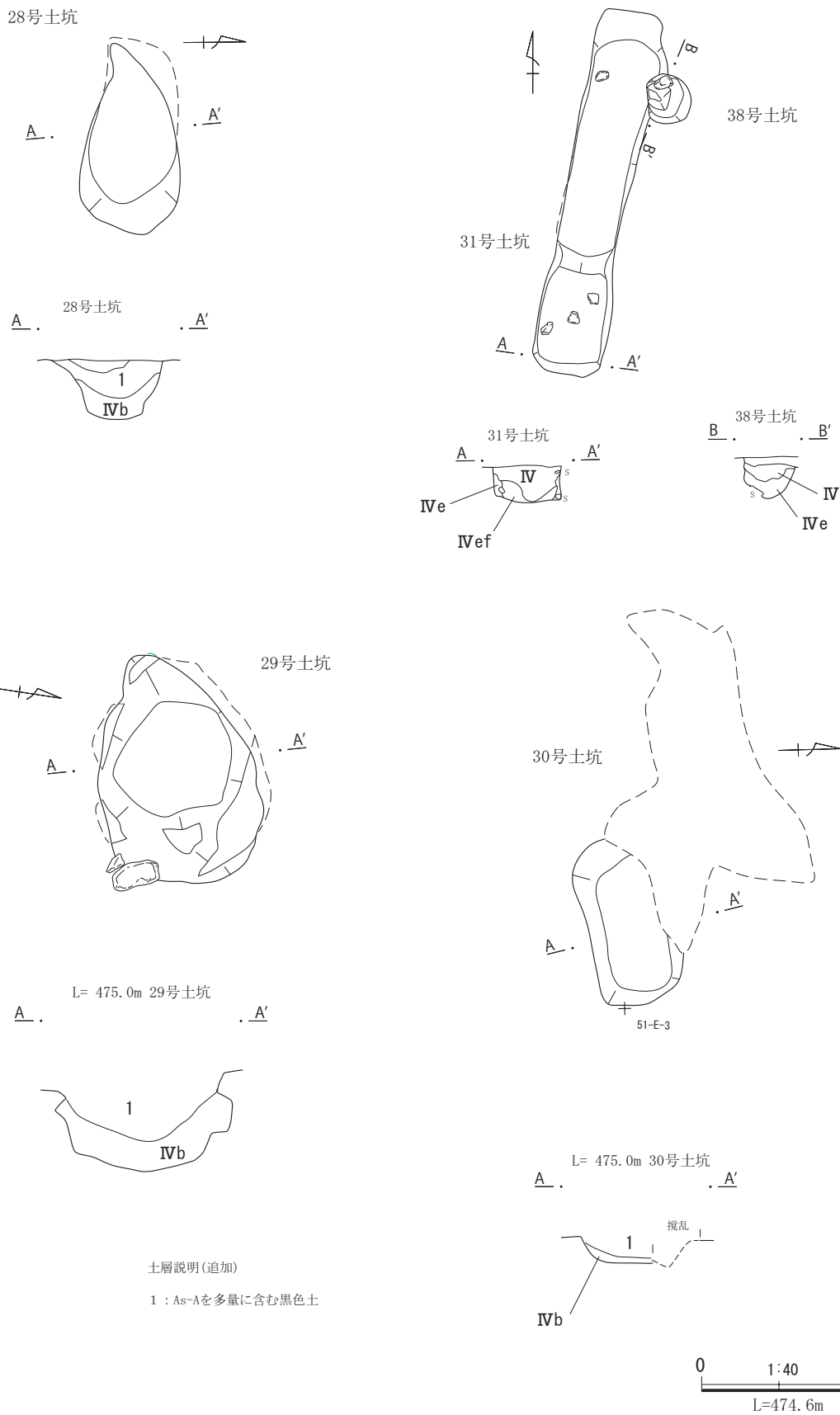
第98図 IV区土坑 (4)



第99図 IV区土坑 (5)

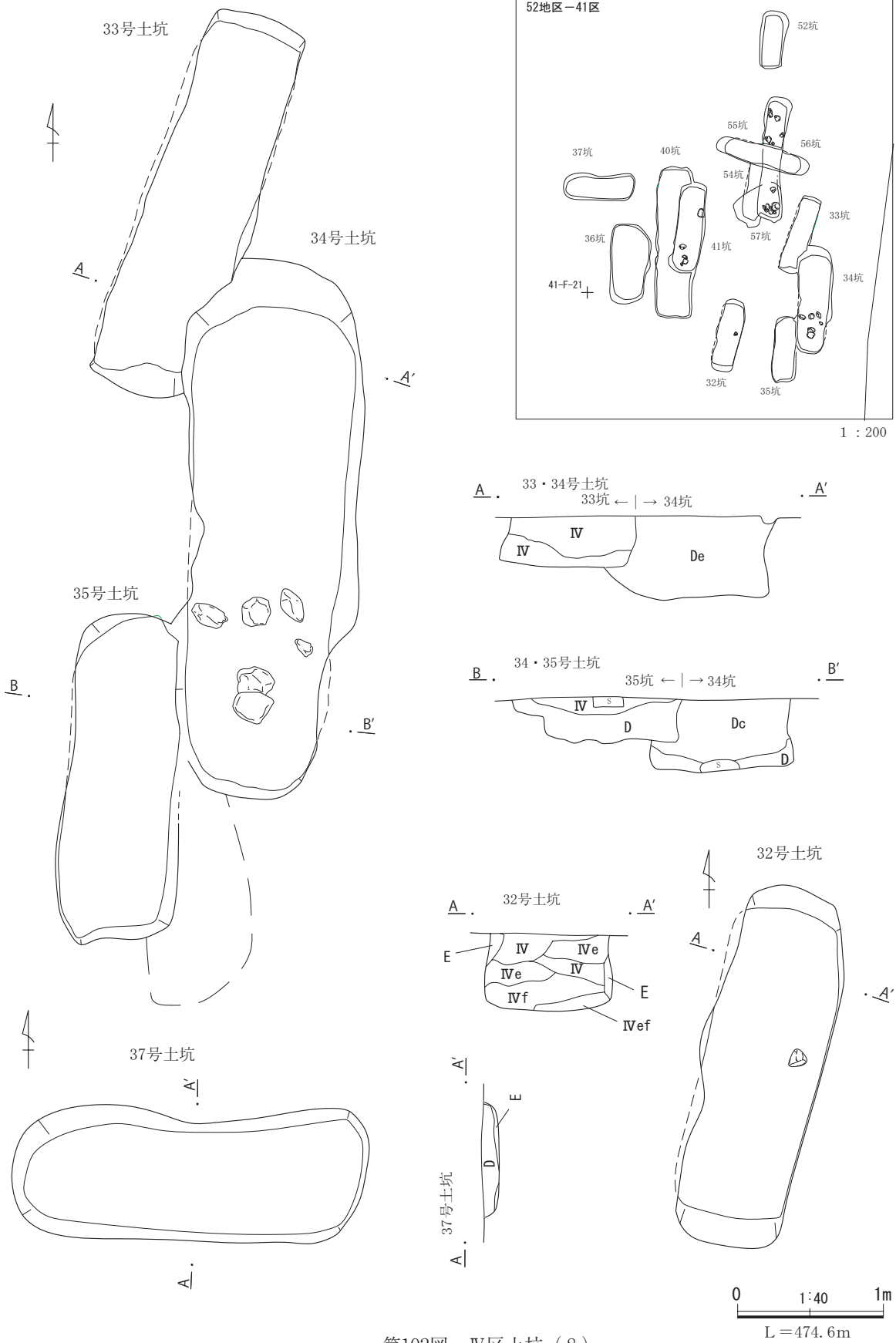


第100図 IV区土坑 (6)

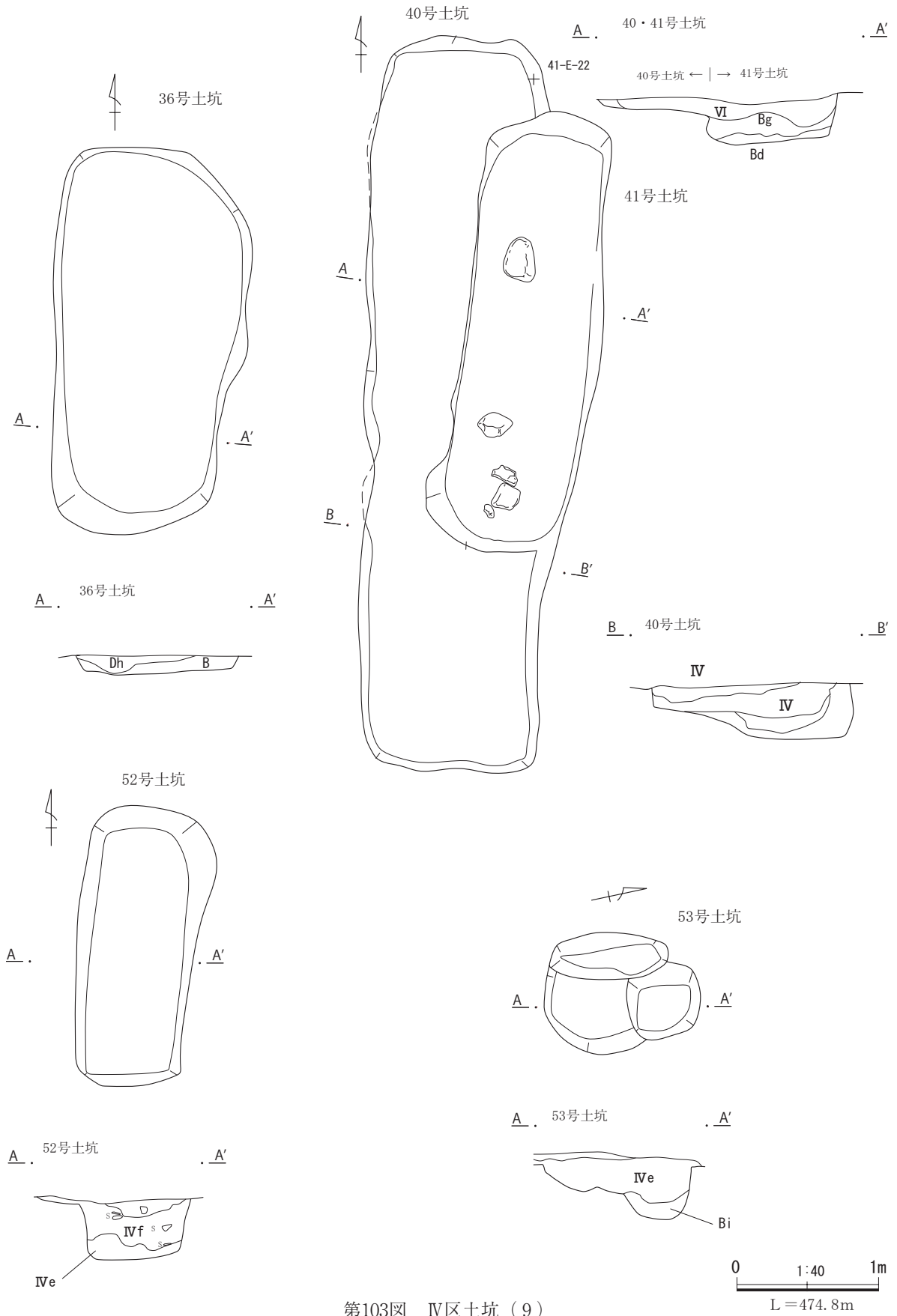


第101図 IV区土坑(7)





第102図 IV区土坑（8）

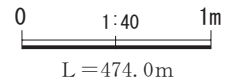
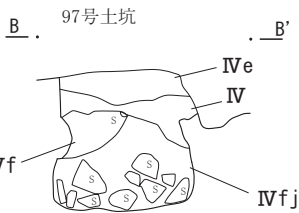
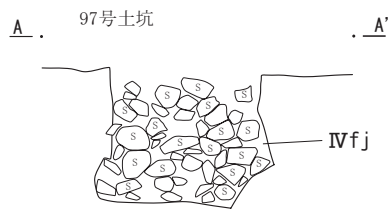
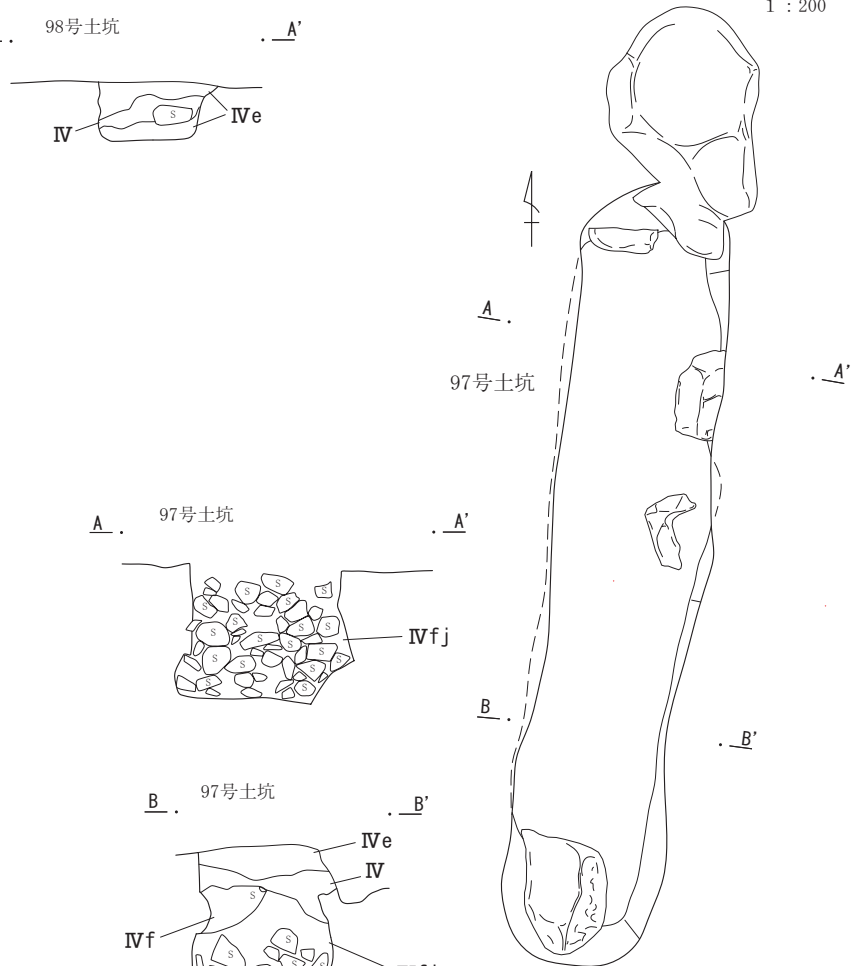
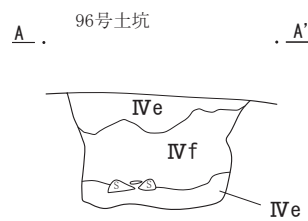
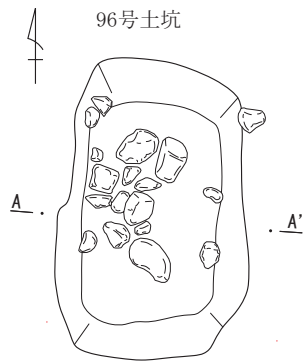
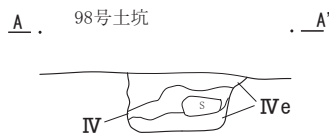
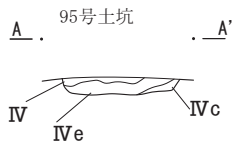
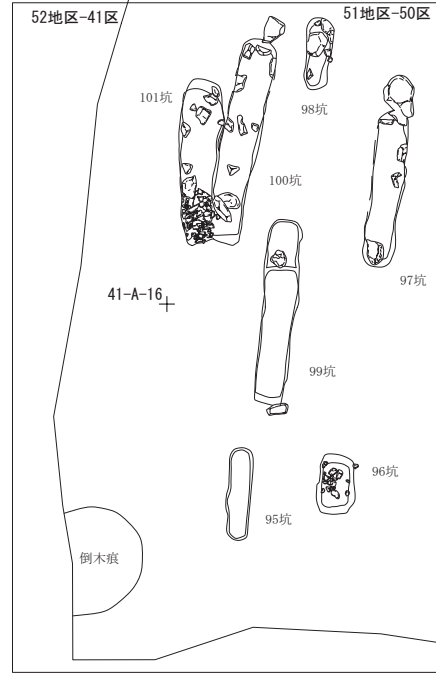
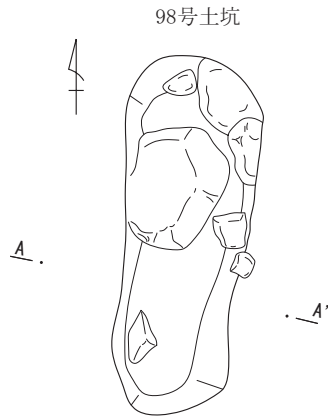
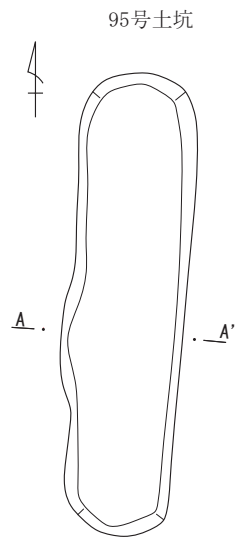


第103図 IV区土坑(9)



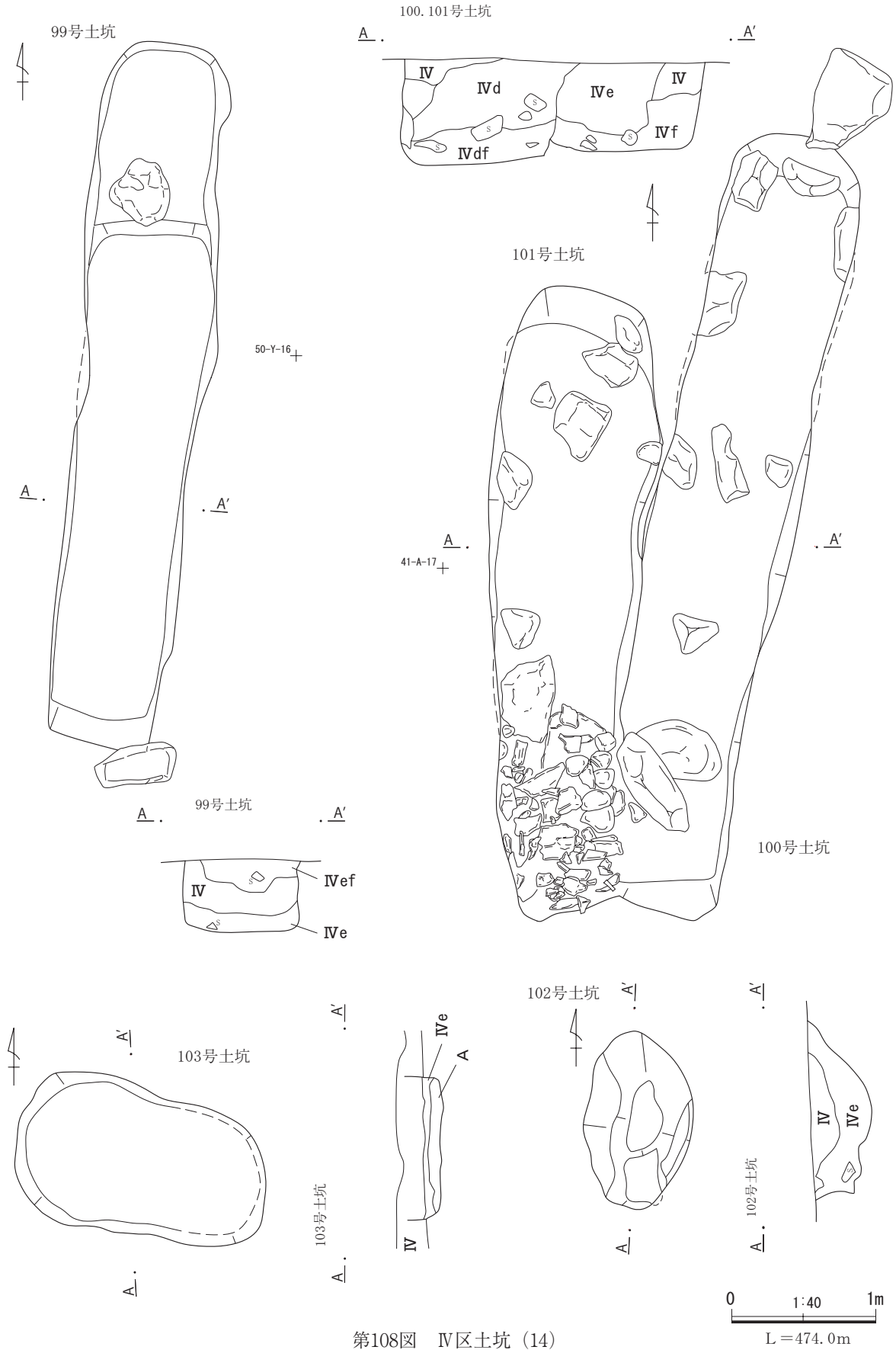




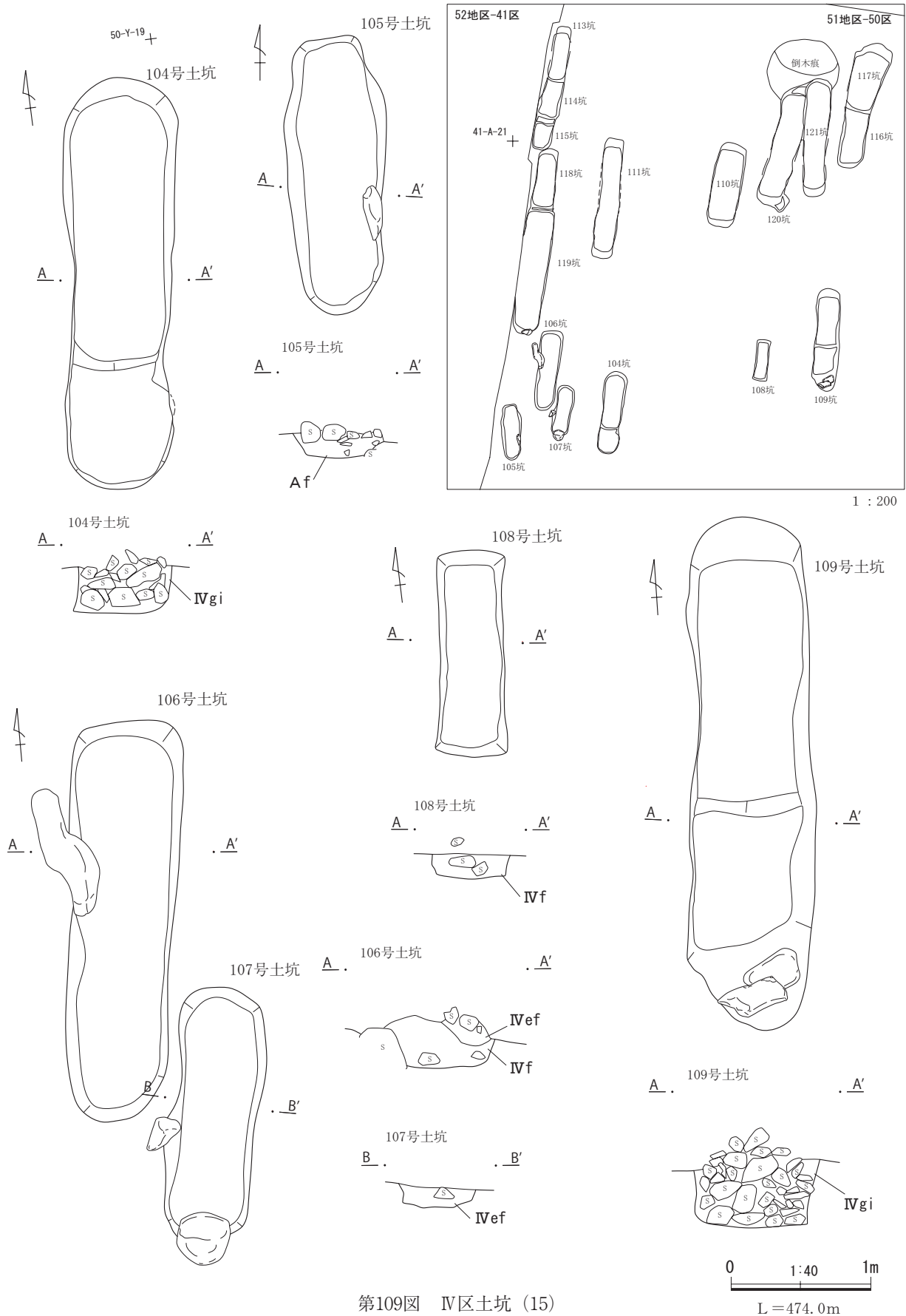


第107図 IV区土坑 (13)

第4章 IV区の調査



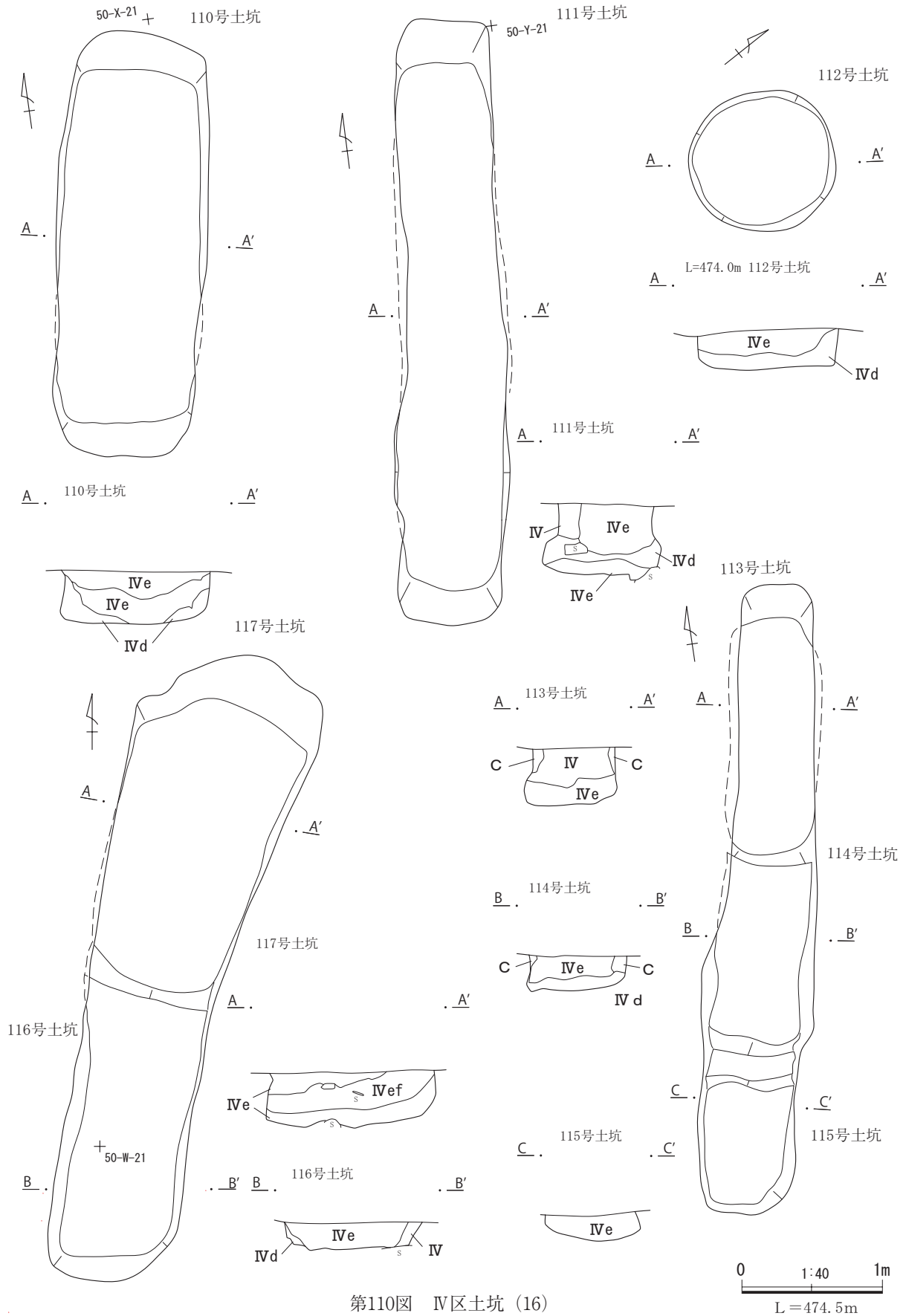
第108図 IV区土坑 (14)



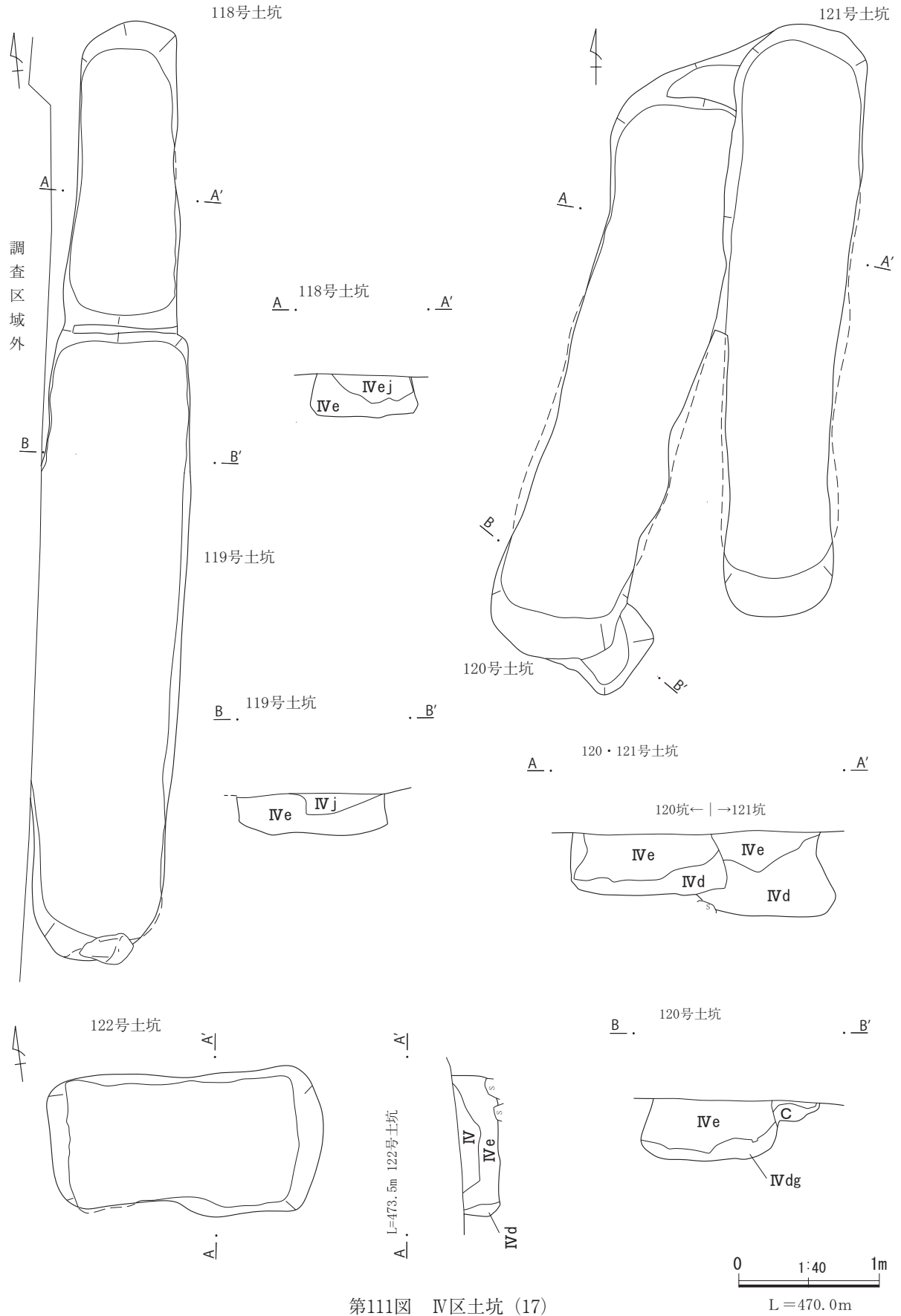
第109図 IV区土坑 (15)



第4章 IV区の調査

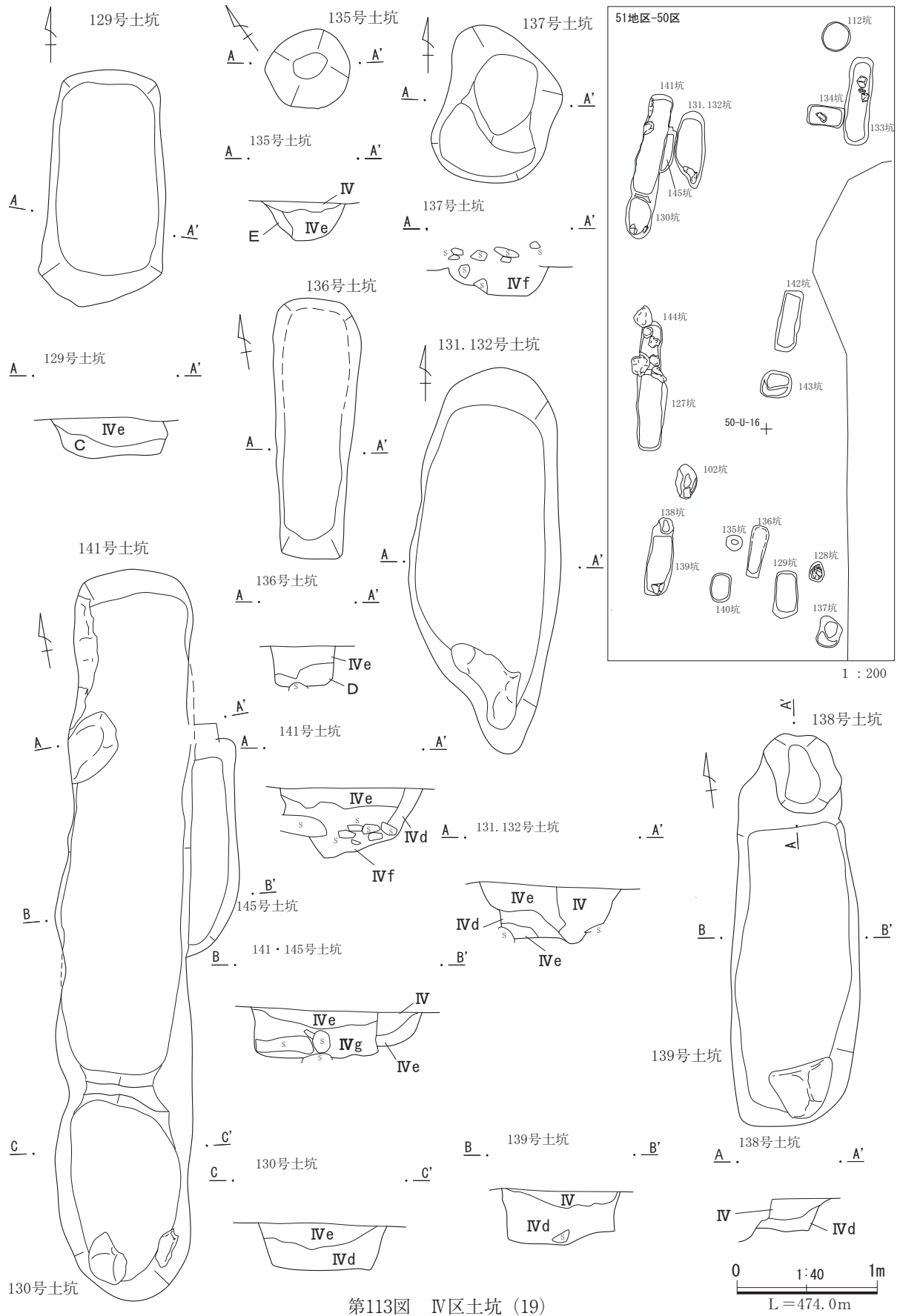


第110図 IV区土坑 (16)

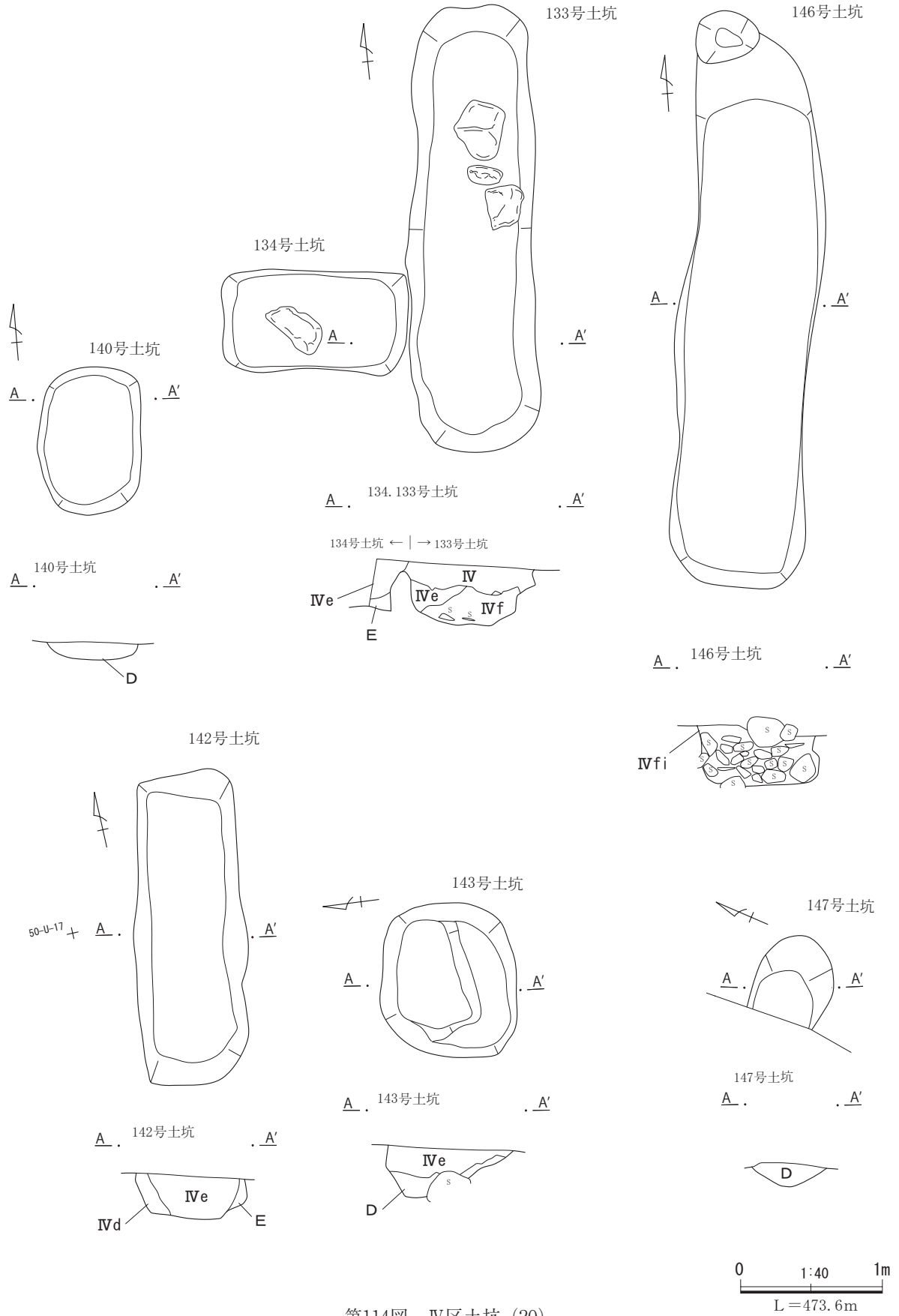


第111図 IV区土坑 (17)



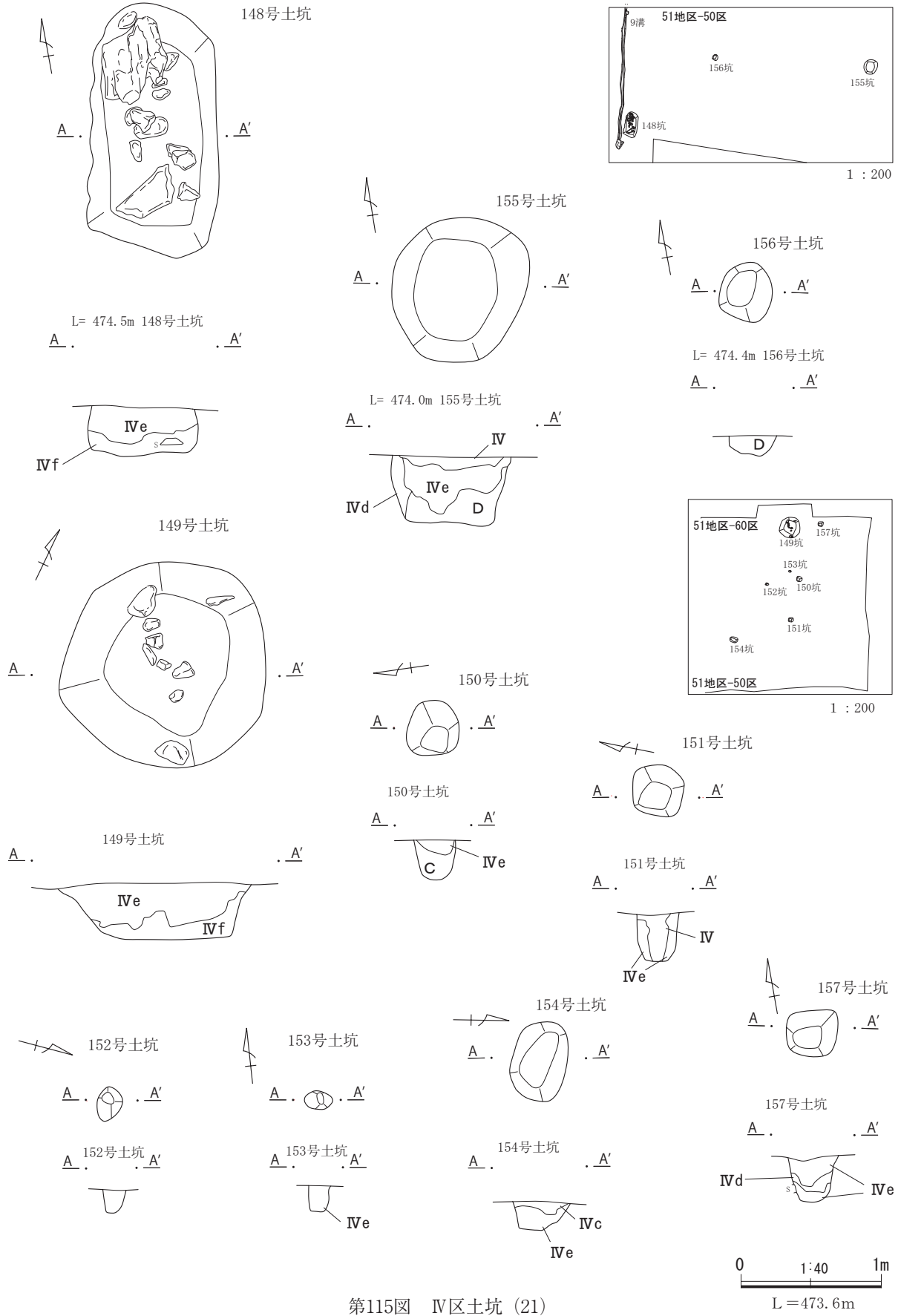


第113図 IV区土坑 (19)



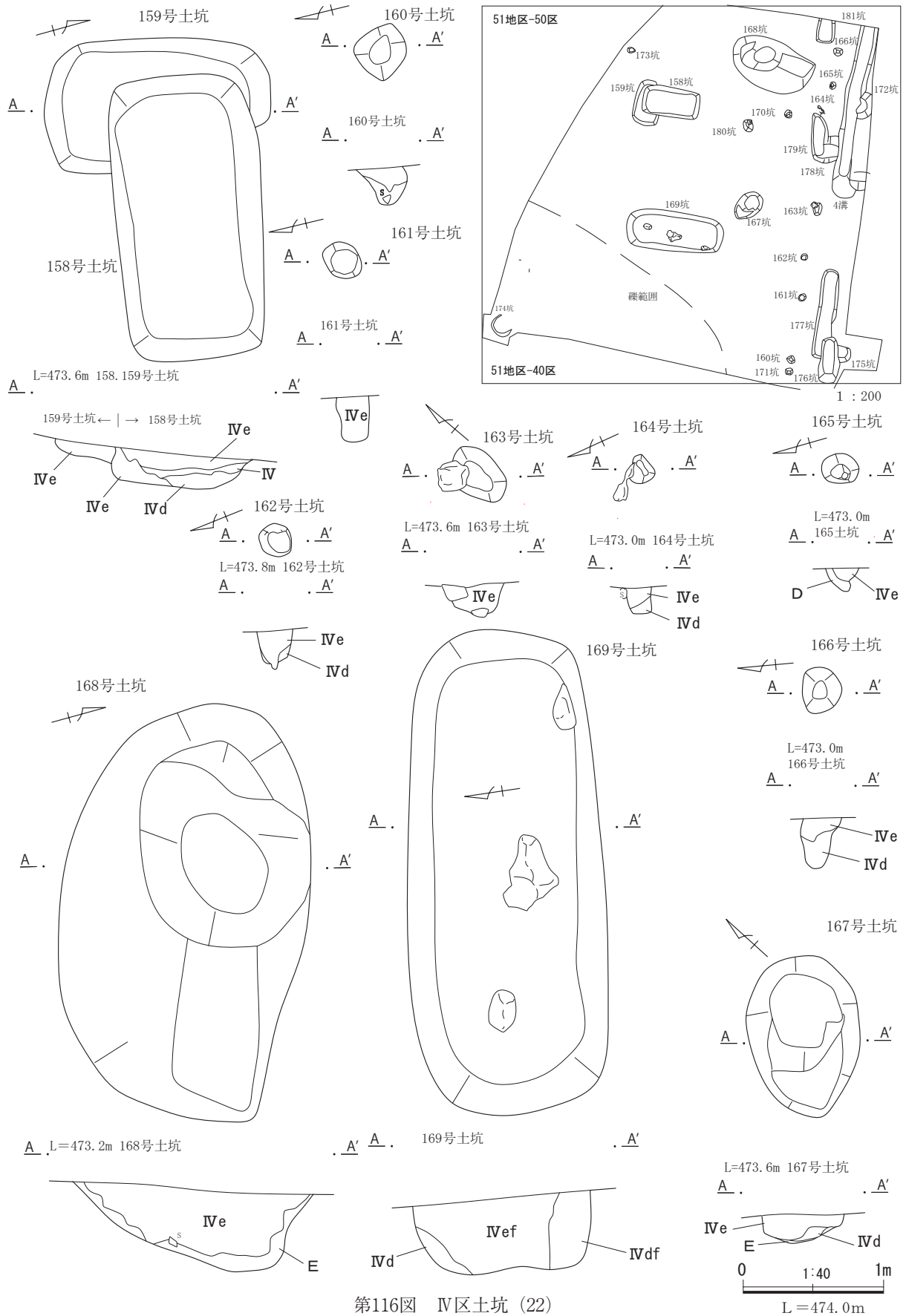
第114図 IV区土坑 (20)

第2節 第2面の調査



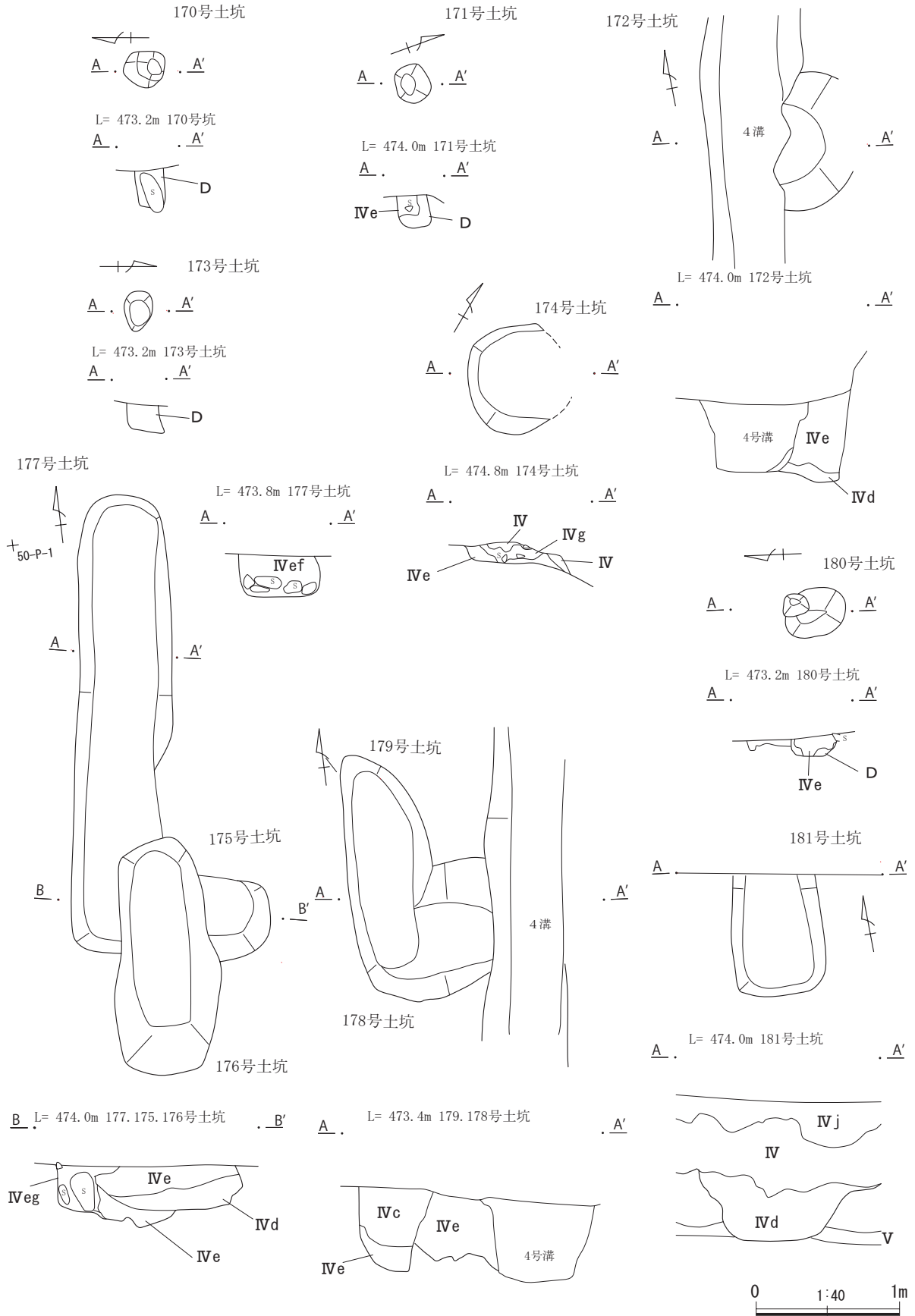
第115図 IV区土坑 (21)

第4章 IV区の調査



第116図 IV区土坑 (22)

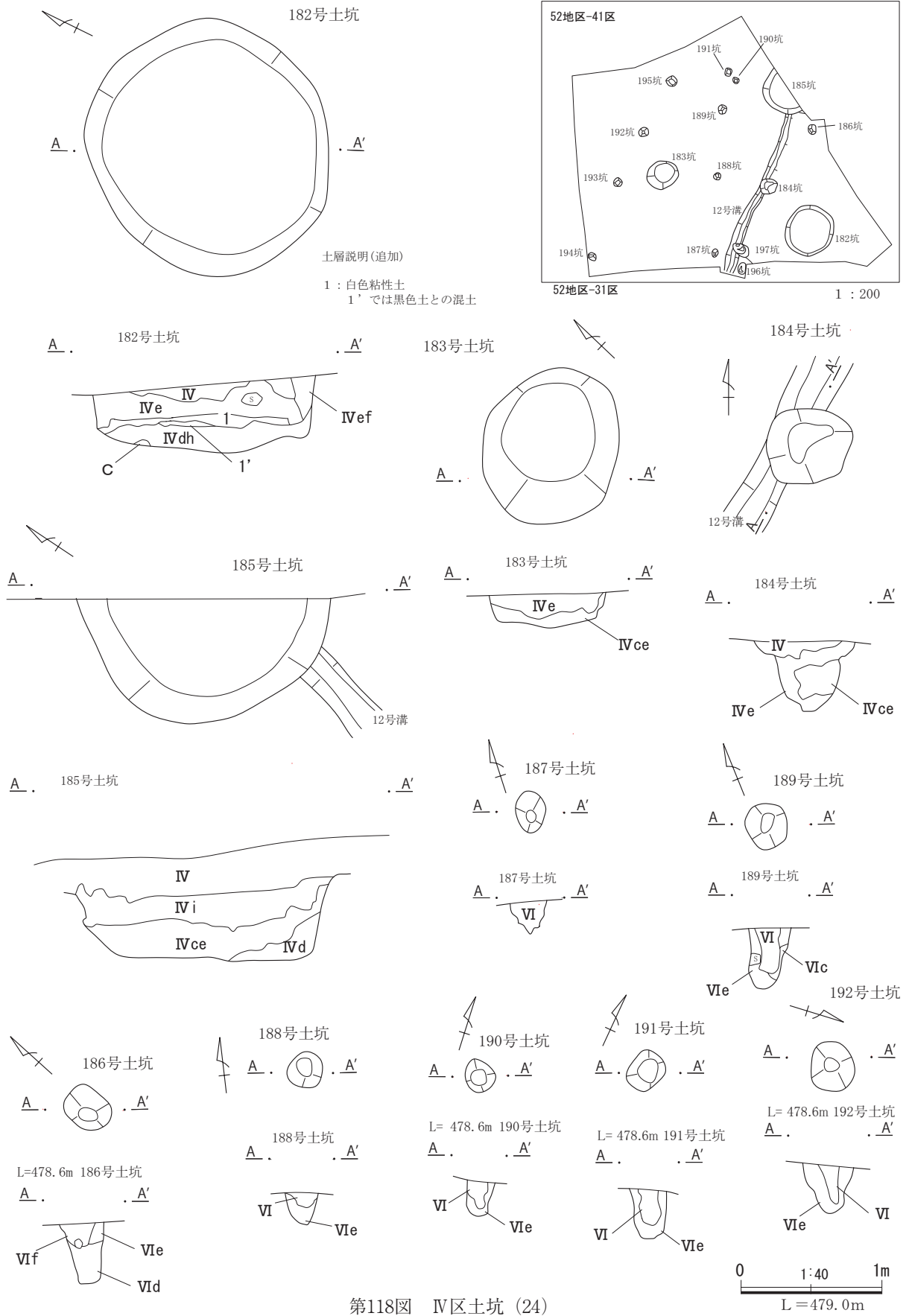
第2節 第2面の調査



第117図 IV区土坑 (23)



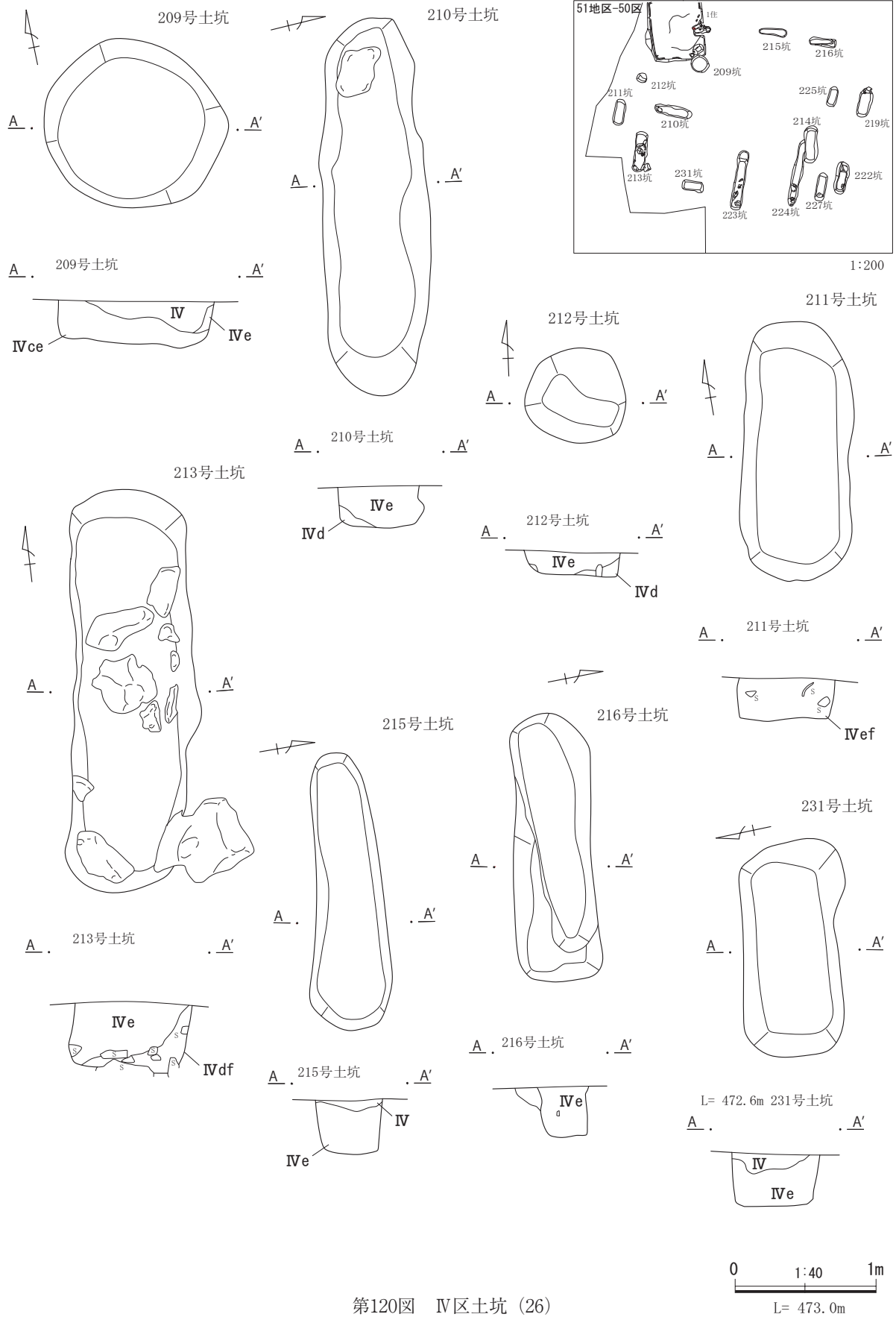
第4章 IV区の調査



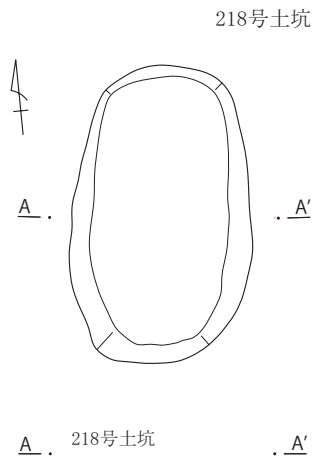
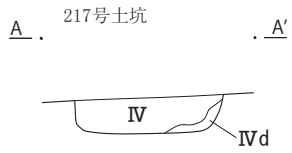
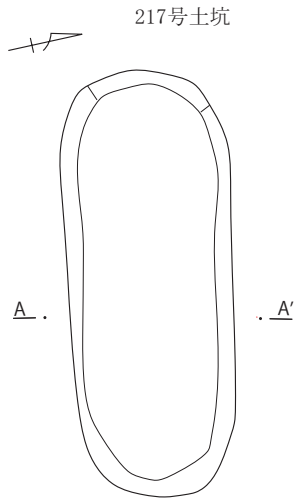
第118図 IV区土坑 (24)



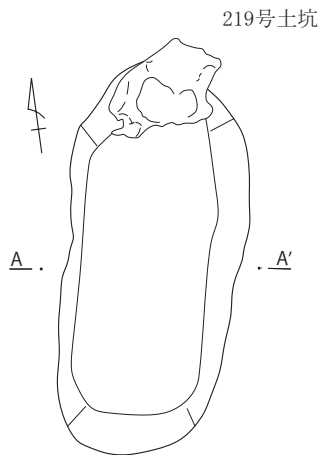
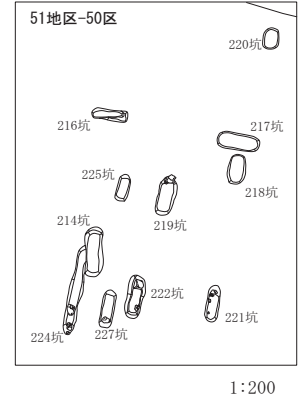
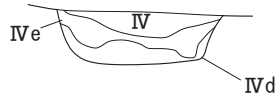
第4章 IV区の調査



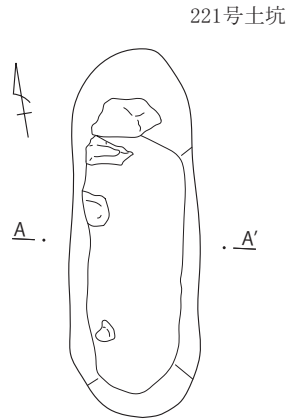
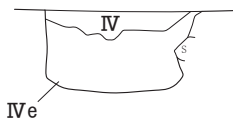
第120図 IV区土坑 (26)



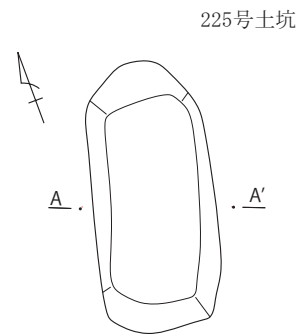
A . 218号土坑 . A'



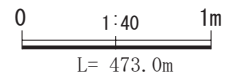
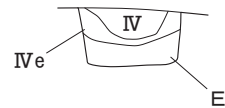
A . 219号土坑 . A'



A L= 472.4m 221号土坑 A'



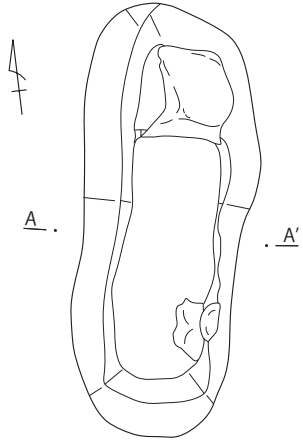
A . 225号土坑 . A'



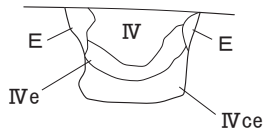
第121図 IV区土坑 (27)

第4章 IV区の調査

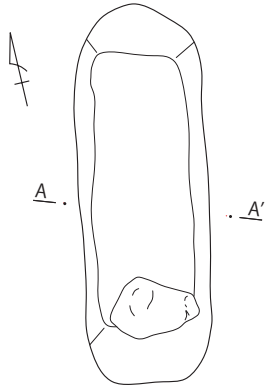
222号土坑



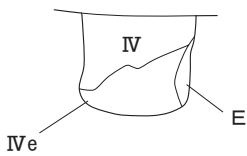
A . 222号土坑 . A'



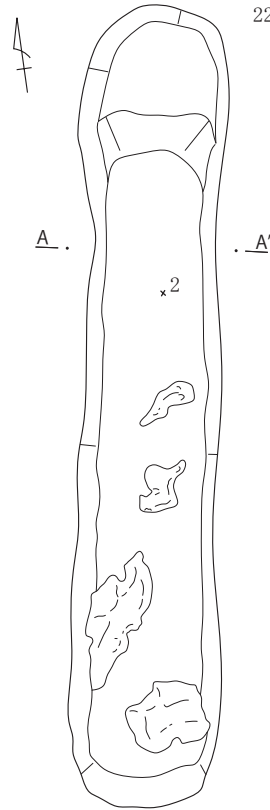
227号土坑



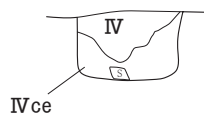
A . 227号土坑 . A'



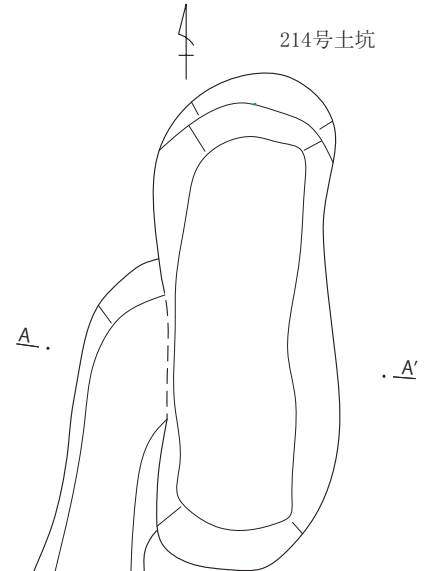
223号土坑



A . 223号土坑 . A'

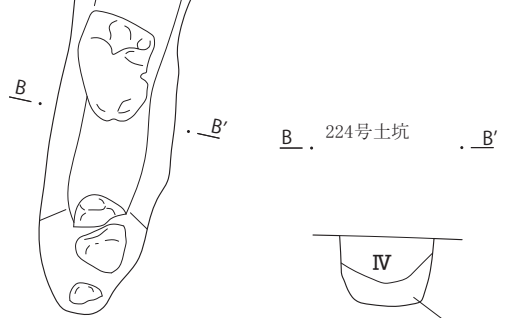


214号土坑

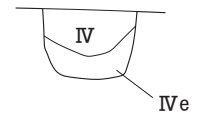


A . 214号土坑 . A'

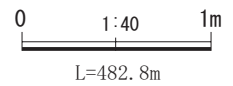
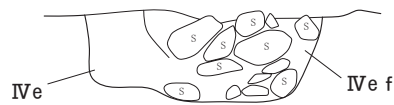
224号土坑



B . 224号土坑 . B'



A . 214号土坑 . A'



第122図 IV区土坑 (28)

第2節 第2面の調査



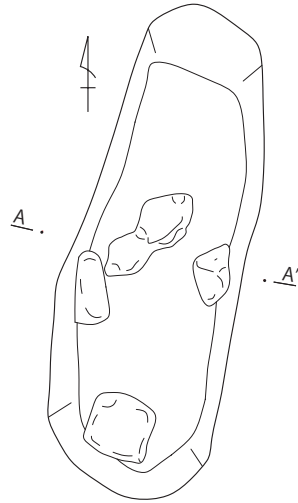
A . . . A'

A . . . A'



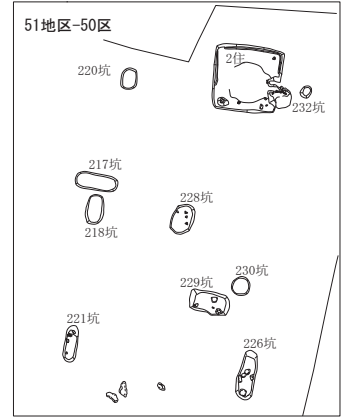
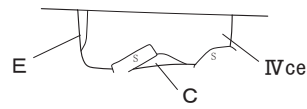
220号土坑

226号土坑



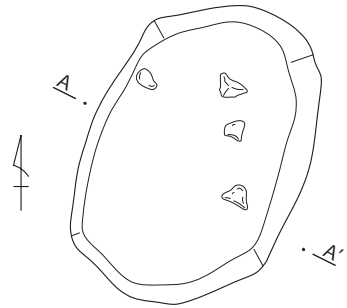
A . . . A'

A . . . A' L= 472.5m 226号土坑



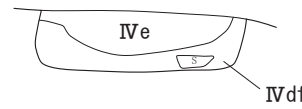
1:200

228号土坑

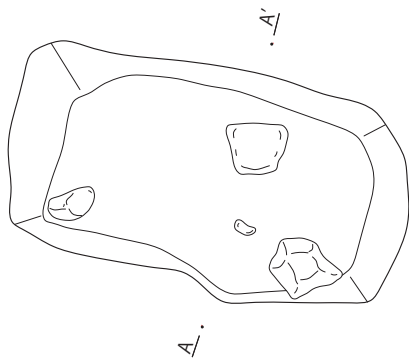


A . . . A'

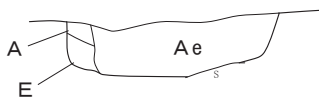
A . . . A'



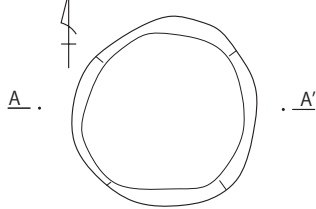
229号土坑



A . . . A' L= 472.5m 229号土坑

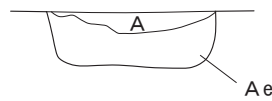


230号土坑

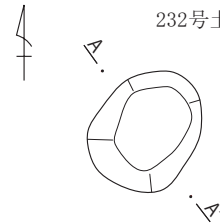


A . . . A'

A . . . A' L= 472.5m 230号土坑

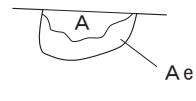


232号土坑



A . . . A'

A . . . A'

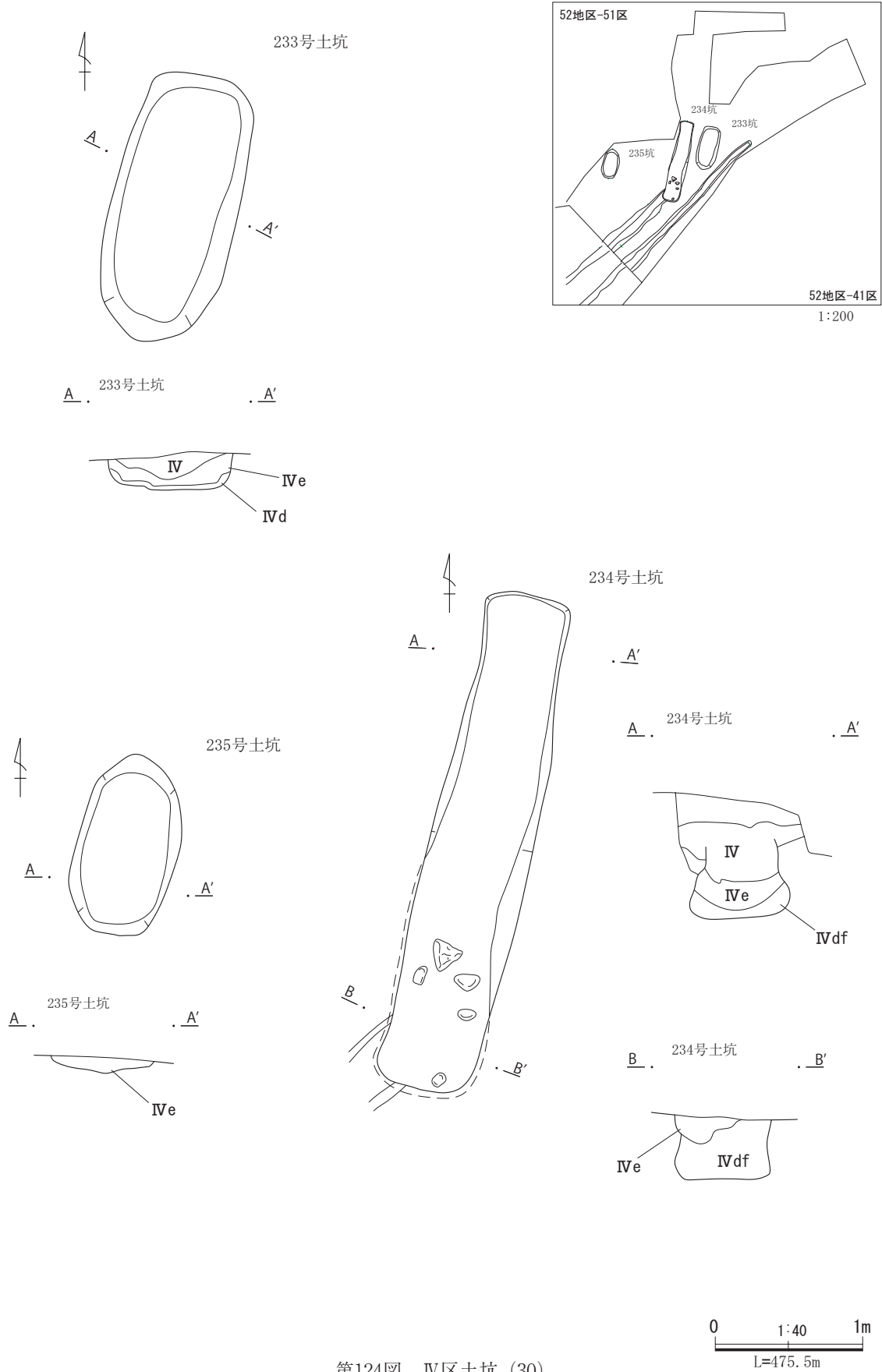


0 1:40 1m

L=473.0m

第123図 IV区土坑 (29)

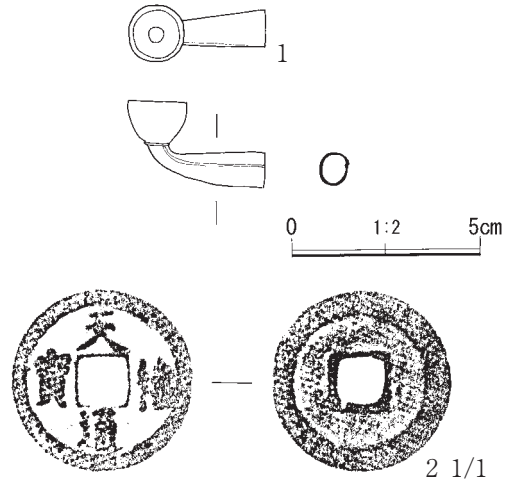
第4章 IV区の調査



第124図 IV区土坑 (30)

土坑出土の遺物

本遺跡の土坑は出土遺物が少なかったが、図示に耐える遺物はほとんどなかった。1の煙管雁首は円形の185号土坑出土である。2の宋銭は礫の多い細長い223号土坑の出土で、墓坑となることを想定して精査したが、他の遺物は確認できなかった。時期決定の根拠のない土坑からの貴重な遺物であるが、礫と共に投げ込まれたような出土状態である。



第125図 IV区土坑出土遺物

IV区土坑一覧

No	位置	規模(長×短×深) cm	遺物と埋没土	備考
	形状			
1	50区O-3 隅丸長方形か			4号溝に先出。南半は完掘できず。
2	50区O・P-4 長方形	447 × 128 × 17 N-4° E		北隅は不明瞭。3・7号土坑に先出。
3	50区O・P-4 長方形	302 × 116 × 24 N-2° E	土師器小片1片 礫の混入やや多い	2号土坑、6号土坑に先出か。
4	50区O-4 不整長方形	[146] × 78 × 23 N-78° E		4号溝に先出。2号土坑に後出。
5	50区O-4・5 長方形か	[243] × 142 × 21 N-80° W	鉄釘か(劣化著しく実測不可)	4号溝・6号土坑に先出。西隅は未調査。
6	50区O-4・5 不整形	[210] × 152 × 14 N-30° E前後か		5号土坑に後出。南側は不明瞭。西側壁の立ち上がりも不整で遺構か否か不明確。
7	50区O-4 不整長方形	135 × 71 × 40 N-18° W	礫の混入多い	3号土坑に先出か。底面はローム土中にある。
8	50区Q-5 隅丸長方形か	[380] × 147 × 63 N-8° E	礫は不揃い。大きな礫は少ない。	集石土坑。南隅は不明瞭。
9	41区A・B-5 長方形	358 × 77 × 41 N-7° E		集石土坑であるが、礫は周辺にも広く廃棄されている。底面は北側に低く傾斜。南隅はオーバーハング気味にえぐられる。
10	50区O-5 長方形か	283(南側153) × 105 × 38 N-0°前後か		2基の土坑の可能性。北側は11号土坑に後出。
11	50区O-5・6 隅丸長方形	197 × 114 × 56 N-79° W		
12	41区H・I-6 長方形か	547 × 66 × 72(東側41) N-79° W		26号土坑に後出。東西両側にテラス状の段あり。掘り直しの可能性。東隅不整。
13	41区H・I-7 長方形	403 × 54 × 58 N-81° W		12号土坑と平行して並ぶ。
14	41区H-8 長方形	245 × 55 × 36 N-80° W	近世陶器細片4片 やや大きめの礫の混入多い。	
15	41区G-6 不整楕円形	89 × 80 × 28 -		
16	41区G-6 不整楕円形	110 × 102 × 37 -	人為的に埋め戻される。	
17	41区G-7 隅丸長方形	78 × 76 × 27 N-21° E		18号土坑に後出。
18	41区G-8 不整形	[110] × 52 × 20		17号土坑に先出。
19	41区F-7・8 隅丸長方形	203 × 108 × 54 N-79° W	土師器・須恵器小片21片	
20	41区G・H-7 長方形2基	316 × 118(新土坑64) × 71 N-82° W	北側の旧掘り方部分に礫の混入多い。	軸方向や底面の高さが近似した重複する2基の土坑で、南側が後出。底面は同じ高さ。
21	41区I-7 隅丸長方形	62 × 57 × 31 N-88° E	人為的に埋め戻される。	
22	41区I-8 不整隅丸長方形	208 × 49 × 48 N-77° W		
23 A	41区F・9 台形	347 × 221 × 12 N-82° W	礫は径20cm前後のものが多い。	集石下の土坑。地山に礫のない一画にある。23Bと連続する遺構か。底面は比較的平坦。
23 B	41区G・8 不整長方形	423 × 85 × 8 N-13° W	礫のサイズは23Aに同じ。	集石下の土坑。掘り込みは不明瞭。
24	41区J-7 隅丸長方形	234 × 86 × 46 N-77° W		
25	50区U-6 不整長方形	139 × 62 × 11 N-15° E	人為的に埋め戻される。	



第4章 IV区の調査

No	位置 形状	規模(長×短×深) cm		遺物と埋没土	備考
		軸方向			
26	41区H-6 長方形	157 × (76) × 23	N-88° W前後か		12号土坑に先出。
27	41区F-14 不整楕円形	78 × 74 × 55	N-48° W		底面は黄色砂質土(礫混じり)中にある。
28	41区C-2 不整長方形	113 × 65 × 35	N-82° E		28~30土坑は上層付近にAs-Aが堆積する。降灰時には埋もれかけていた遺構として2面で扱う。旧2区1土坑
29	41区D-2 不整形	152 × (-) × 59	N-52° E		放置され壁崩落が始まったものか。 旧2区2土坑
30	41区E-2 長方形	109 × 55 × 18	N-73° E		泥流に削られ不明瞭。 旧2区3土坑
31	41区J-16 長方形	473 × 82 × 80 (南側37)	N-12° E	人為的に埋め戻される。 小礫の混入多い。	底面は南側にテラス状の高まりあり。38号土坑と重複、先出か。 旧2区4土坑
32	41区D-20 長方形	250 × 81 × 52	N-14° E	人為的に埋め戻される。 泥流直下の遺構。	泥流直下の遺構。西壁がややオーバークック気味にえぐれる。一部で壁のくずれあり、本来は直線的で整ったプラン。旧2区5土坑
33	41区D-21 長方形	272 × 73 × 33	N-21° E		34号土坑に後出。東西両壁はややオーバークック気味にえぐれる。旧2区6土坑
34	41区D-21・22 長方形	369 × 118 × 54	N-3° E		33・34号土坑に先出。 旧2区7土坑
35	41区D-22 長方形	223 × 83 × 32	N-4° E		34土坑に後出。底面不整。 旧2区8土坑
36	41区E-21 不整長方形	272 × 138 × 14	N-2° E		底面は黄色砂質土中にある。 旧2区9土坑
37	41区E-21・22 不整隅丸長方形	242 × 85 × 11	N-89° W		底面は黄色砂質土中にある。 旧2区10土坑
38	41区J-16 不整形	62 × 54 × 49	-		31号土坑に先出か。地山礫の上面で掘削を止めている。 旧2区11土坑
39	41区I-22 不整隅丸長方形	98 × 82 × 15	N-84° E		底面は硬いローム状土(砂質)中にある。 旧2区12土坑
40	41区E-21 長方形	516 × 152 × 13	N-0°		41号土坑に後出。 旧2区13土坑
41	41区E-21 長方形	315 × 96 × 31	N-9° E	微細な近世の陶磁片 28片	40号土坑に先出。 旧2区14土坑
42	41区I-23 不整楕円形・柱穴状	32 × 27 × 34	-		42-48号土坑までは弧状に一列に並ぶ。 旧2区15土坑
43	41区I-23 不整楕円形・柱穴状	44 × 37 × 38 (南側24)	N-12° W		二段底状で南側にテラス状の高まりあり。 旧2区16土坑
44	41区I-23 不整台形・柱穴状	33 × 29 × 24	N-68° E		旧2区17土坑
45	41区I-22 楕円形か	35 × 32 × 21	-		46号土坑に重複。先出か。 旧2区18土坑
46	41区I・J-22 楕円形か	44 × 28 × 29	N-82° E		旧2区19土坑
47	41区J-22 不整楕円形	34 × 29 × 40 (北側27)	N-25° W		二段底状で北側にテラス状の高まりあり。北側の壁はオーバークック気味にえぐれる。旧2区20土坑
48	41区J-22 円形	37 × 34 × 14	-		旧2区21土坑
49	41区I-22 楕円形か	45前後か × 38前後か × 9	N-76° 前後か		50号土坑に後出。 旧2区22土坑
50	41区I-22 楕円形か	48前後か × 37 × 12	N-38° W		49号土坑に先出。 旧2区23土坑
51	41区J・22 不整円形・柱穴状	34 × 32 × 38	-		柱穴的。 旧2区24土坑
52	41区D-23 隅丸長方形	198 × 86 × 41	N-8° E		旧2区25土坑
53	41区C-23 不整形	全体 120 × 86 × 40 (北側16)	-		数基の土坑の重複もしくは掘り直しか。北隅が古い。 旧2区26土坑
54	41区D-21・22 長方形	(215) × (45) × 33	N-9° E 前後か		旧2区27土坑
55	41区D-22 長方形	325 × 69 × 37	N-74° W		54・56号土坑に後出。 旧2区28土坑
56	41区D-21・22 長方形	421 × 73 × 38	N-7° E		54号土坑と同一遺構として掘削したが、2基の土坑となり、東側の本遺構を29号とした。新旧不明。旧2区29土坑
57	41区D-21 長方形か	170前後 × 80前後 × 30前後	N-60° E 前後		54・56号土坑の南隅にさらに1基の土坑があり57号土坑とした。新旧不明旧2区30土坑
58	41区K-22 不整楕円形	84 × 68 × 18	N-66° E		旧2区31土坑
59	41区L-22 不整楕円形	54 × 46 × 15	-	土師器甕胴部小片 1片	旧2区32土坑
60	41区C-24 楕円形	96 × 77 ×	-		礫の多い地山を掘り込む。 旧2区33土坑
61	60区Y-4 不整台形	118 × 105 × 18	-		旧2区34土坑
62	41区A-24 不整楕円形・柱穴状	32 × 27 × 17	N-60° W		旧2区35土坑
63	50区Y-24・25 不整楕円形・柱穴状	35 × 27 × 26	N-84° E		8号溝の南へりに接するように1基のみ存在。 旧2区36土坑
64	41区I-24 不整楕円形	87 × 45 × 18 (円形部分50)	N-61° E	円形部分は小礫の混入多い	西側の円形と不整台形の2基の土坑の重複か。円形部分が先出することはない。旧2区37土坑
65	41区I-24・25 不整楕円形	85 × 77 × 26	N-19° W		旧2区38土坑
66	41区G-25 楕円形	36 × 24 × 21	N-72° E		旧2区39土坑
67	41区G-25 楕円形	50 × 35 × 20	N-53° W		旧2区40土坑
68	51区F-2 円形	35 × 34 × 21	-		旧2区41土坑

第2節 第2面の調査

No	位置	規模 (長×短×深) cm	遺物と埋没土	備考
	形状			
69	51区F-2 楕円形	30×22×20 N-38°W		旧2区42土坑
70	51区G-2 円形	26×25×18 -		旧2区43土坑
71	51区G-1 楕円形	32×28×29 -		旧2区44土坑
72	51区G-1 楕円形	40×32×24 N-61°W		旧2区45土坑
73	41区G-25 不整楕円形	43×28×24 N-66°W		旧2区46土坑
74	51区F-2 不整楕円形	36×31×25		旧2区47土坑
75	51区G-1 不整楕円形	42×41×29 -		南西側の巨礫に隠れる。直立する柱穴にはなりえない。 旧2区48土坑
76	51区G-1 楕円形	27×22×24 N-29°W		77号土坑と重複。 旧2区49土坑
77	51区G-1 楕円形	45×33×19 N-74°W		76号土坑と重複。底面不整。 旧2区50土坑
78	41区I-24 不整楕円形	55×48×23 N-15°E		旧2区51土坑
79	51区H-1 楕円形	53×36×28 N-20°W		地山礫の途中まで掘りくぼめる。掘削途中で放棄したものか。 旧2区52土坑
80	51区I-1 長方形	(180)×86×48		北側は未調査。東西両壁はややオーバーハング気味。 旧2区53土坑
81	51区H-1 楕円形	73×68×27 N-0°		旧2区54土坑
82	51区G-2 楕円形	36×28×26 N-56°W		旧2区55土坑
83	51区G-2 楕円形・柱穴状	46×35×26 N-77°E		西側に柱状の弱いくぼみあり。 旧2区56土坑
84	41区H-25 楕円形	22×17×30 N-39°W		旧2区57土坑
85	41区H-24 長方形	154×53×33 N-13°E		西壁はオーバーハング状にえぐれる。 旧2区58土坑
86	41区G-25 楕円形	20×17×27 N-60°E		旧2区59土坑
87	41区F-25 円形	37×34×18		旧2区60土坑
88	41区H-24 不整楕円形	72×68×31 N-3°E		旧2区61土坑
89	51区H-1 不整楕円形	78×44×25 N-63°W		旧2区62土坑
90	51区A-21 不整形	44×25×22 N-63°W		底部不整。 旧2区63土坑
91	51区E-3 円形	北西 31×29×27 南東 [44]×39×5		2基の土坑の重複。北西側の柱穴状土坑が先出。 旧2区64土坑
92	51区E-3 楕円形	61×56×14 -		旧2区65土坑
93	51区E-2 不整楕円形	33×28×16 -		1号道と想定される部分にある。 旧2区66土坑
94	51区E-2 不整楕円形	27×26×19 -		93号土坑の東10に近接。 旧2区67土坑
95	50区Y-14 隅丸長方形	244×60×10 N-5°E		旧3区2土坑
96	50区X-14 長方形	158×97×58 N-2°E		集石土坑。 旧3区3土坑
97	50区X-16・17 隅丸長方形	413×81×67 N-°	拳大の礫	集石土坑。中央付近は隙間のないほど多量の礫。北隅は大型礫の縁まで掘られている。土坑縁辺を示す目印の可能性。旧3区4土坑
98	50区X・Y-17 不整長方形	192×65×39 N-7°E		旧3区5土坑
99	50区Y-15・16 隅丸長方形	491×83×47 (北側35) N-6°E		底面は北側にテラス状の高まりあり。断面観察はできなかったが、掘り直しの可能性あり。旧3区6土坑
100	50区Y-16・17 長方形	547×93×63 N-11°E	人頭大の礫	101号土坑に先出。底面は地山礫面まで掘り込む。北隅は大型礫の縁まで掘られている。土坑縁辺を示す目印の可能性。旧3区7土坑
101	50区Y-16・17 不整長方形	435×113×78 N-0°	人頭大の礫	集石土坑で大型の礫の混入多い。100号土坑に後出。底面は地山礫面まで掘り込む。旧3区8土坑
102	50区U-16 不整楕円形	124×77×44 N-2°W		底面・壁面とも凹凸が大きく、不整である。 旧3区9土坑
103	50区M・N-18 不整楕円形	179×106×7 N-75°W		旧3区10土坑
104	50区Y-18 隅丸長方形	297×82×34 (南側15) N-9°E		底面は南隅にテラス状の高まりあり。礫の混入極めて多く、隙間ないほど詰まられている。旧3区11土坑。
105	50区Y-18・41区A-18 隅丸長方形	198×70×14 N-2°W		旧3区12土坑
106	50区Y-18・19 隅丸長方形	285×73×29 N-8°E		西壁は地山礫でとまる。 旧3区13土坑
107	50区Y-18 不整隅丸長方形	(180)×62×14 N-10°E		南隅は地山礫でとまる。 旧3区14土坑
108	50区W-18・19 長方形	148×46×18 N-10°E		旧3区15土坑
109	50区W-18・19 隅丸長方形	362×90×48 (北側42) N-4°E	礫は極めて多く、隙間ないほど詰まっている。	底面は南側に低く傾斜しており、さらに南隅は二段底状に低くなっている。 旧3区16土坑
110	50区W・X-20 長方形	297×158×38 N-13°E		旧3区17土坑
111	50区Y-20 長方形	428×81×53 N-6°E		東西両壁は一部でオーバーハング状にえぐれる。 旧3区18土坑

第4章 IV区の調査

No	位置	規模(長×短×深) cm 軸方向	遺物と埋没土	備考
	形状			
112	50区T-19 円形	105 × 101 × 27 -		旧3区19土坑
113	50区Y-21 長方形	202 × 53 × 37 N-9° E		113～115号土坑は直線的につながる重複土坑群。東西両壁はオーバーハング状にえぐれる。旧3区20土坑
114	50区Y-21 長方形か	(184) × 81 × 22 N-12° E		旧3区21土坑
115	50区Y-21 長方形か	98 × 78 × 19 N-10° E		旧3区22土坑
116	50区V-20・21 長方形か	(203) × 87 × 27 N-10° E		116～117号土坑は断面形状や軸方向の相違点より2基の土坑と判断したが、新旧不明で同一土坑の掘りなおしの可能性がある。旧3区23土坑
117	50区V-21 不整形	(254) × 123 × 42 N-14°		116号土坑の北側に重複。 旧3区24土坑
118	50区Y-20 長方形	216 × 82 × 30 N-8° E		118・119号土坑は直線的につながる重複土坑。 旧3区25土坑
119	50区Y-19・20 長方形	443 × (98) × 32 N-9° E		西側は未調査部分あり。 旧3区26土坑
120	50区W-20・21 長方形	413 × 94 × 47 N-16° E		121号土坑に後出する。南側に別の落ち込みあり。遺構であれば、本土坑に先出する。旧3区27土坑
121	50区W-20・21 長方形	422 × 92 × 64 N-2° E		120号土坑に先出する。 旧3区28土坑
122	50区L・M-19 長方形	194 × 100 × 45 N-83° W		旧3区29土坑
123	50区P-18・19 長方形	228 × 70 × 44 N-13° E		底面は南側へ低く傾斜している。 旧3区30土坑
124	50区Q-18 不整形	49 × 45 × 24 -		旧3区31土坑
125	50区S-18・19 長方形	425 × 77 × 40 N-5° E		旧3区32土坑
126	50区N・O-18 不整形長方形	× × N-		底面は中央で窪む。 旧3区33土坑
127	50区U・V-15・16 隅丸長方形	288 × 152 × 37 N-1° E		144号土坑と重複する。新旧不明。 旧3区34土坑
128	50区T-14 不整形円形	71 × 54 × 43 N-12° E		地山礫面上まで掘り込む。 旧3区35土坑
129	50区T-14 長方形	166 × 83 × 25 N-3° E		旧3区36土坑
130	50区V-17・18 不整形円形	(156) × 93 × 28 N-6° E		141号土坑と重複。新旧不明。北隅は141号土坑との重複部分で不明瞭。 旧3区37土坑
131 ・132	50区U-18 不整形円形	全体 220 × 73 × 31 N-5° E		断面より2基の土坑であることが判明。東側の細長い部分が後出し、これを131号土坑とした。旧3区38.39土坑
133	50区T-18・19 隅丸長方形	315 × 86 × 36 N-6° E	人頭大の礫が底面付近にあり	134号土坑に先出か。 旧3区40土坑
134	50区T-18 長方形	128 × 73 × 31 N-84° W		133号土坑に後出か。 旧3区41土坑
135	50区U-15 不整形	60 × 57 × 45 -		旧3区42土坑
136	50区U-14・15 長方形	185 × 62 × 25 N-11° E		旧3区43土坑
137	50区T-14 不整形	106 × 72 × 22 (南側10) N-18° E		二段底状で、北側が深くなっている。 旧3区44土坑
138	50区U-15 不整形	59 × 53 × 25 -		138・139号土坑は掘削途中で2基の土坑と判明。138号土坑が先出か。 旧3区45土坑
139	50区U・V-14 隅丸長方形	(215) × 93 × 50 N-10° E		138号土坑との重複で北隅は不明瞭だが、下端は全容が確認できる。 旧3区46土坑
140	50区U-14・15 隅丸長方形	105 × 73 × 15 N-6° E		旧3区47土坑
141	50区U-18・19 隅丸長方形	359 × 86 × 42 N-16° E		145号土坑に後出。 旧3区48土坑
142	50区T-16・17 長方形	222 × 76 × 32 N-11° E		掘り直しの可能性。 旧3区49土坑
143	50区T-16 円形	108 × 96 × 33 (南側18) N-		二段底状で、北側が深くなっている。 旧3区50土坑
144	50区U・V-16 長方形か	(172) × 76 × 38 N-8° E		南側は重複する127号土坑と地山の大型礫のため不明瞭。 旧3区51土坑
145	50区U-18 隅丸長方形か	154 × (31) × 31 N-14° E前後か		141号土坑に先出。 旧3区52土坑
146	50区N-14 長方形	390 × 93 × 46 N-7° E	拳から人頭大の礫	集石土坑。礫は隙間ないほど詰められている。 旧3区53土坑
147	50区G-14 楕円形か	(60) × 55 × 24 -		西側は未調査。 旧3区54土坑
148	50区U-22 不整形長方形	169 × 88 × 38 N-9° E		集石土坑。確認段階より川原石多い。9号溝と軸方向を揃えるように並んでいる。旧4区1土坑
149	60区J-2 不整形	152 × 146 × 39 -	川原石の混入やや多い。	地山礫の多い地点にあり。 旧4区2土坑
150	60区J-1 不整形楕円形	42 × 38 × 29 -		150～154・157号土坑は柱穴状の遺構。 旧4区3土坑
151	50区J-25 不整形楕円形	37 × 29 × 36 -		4区の柱穴状の土坑の中で、唯一断面に柱痕が確認できる。 旧4区4土坑
152	60区J-1 楕円形	24 × 17 × 21 N-79° W		旧4区5土坑
153	60区J-1 楕円形	21 × 13 × 25 N-80° W		152号土坑と形状近似する。 旧4区6土坑
154	50区K-25 楕円形	57 × 40 × 23 N-63° W		旧4区7土坑
155	50区Q-23 楕円形	103 × 94 × 49 N-10° E		旧4区8土坑

第2節 第2面の調査

No	位置 形状	規模(長×短×深) cm		遺物と埋没土	備考
		軸方向			
156	50区 T-23 不整楕円形	42 × 36 × 12	-	川原石の混入多い。	旧4区9土坑
157	60区 I-2 不整台形	55 × 33 × 27	N-82° W		旧4区10土坑
158	50区 Q-2 長方形	203 × 104 × 27	N-80° W		159号土坑に後出。 旧5区1土坑
159	50区 Q-2 長方形	162 × 95 × 20	N-12° E		158号土坑に先出。 旧5区2土坑
160	40区 P-25 不整楕円形	31 × 27 × 25	-		160～166および171号土坑は柱穴状の遺構で、4号溝の西側に柱列上に並ぶ。旧5区3号土坑
161	40区 P-25 楕円形	30 × 25 × 35	N-48° E		旧5区4土坑
162	50区 P-1 円形	24 × 23 × 29	-		旧5区5土坑
163	50区 O-1 楕円形	42 × 33 × 25	N-6° W		旧5区6土坑
164	50区 O-2 不整楕円形	20 × 17 × 27	-		旧5区7土坑
165	50区 O-2 楕円形	26 × 22 × 18	-		旧5区8土坑
166	50区-2・3 不整楕円形	34 × 28 × 41	-		形状は柱穴状だが断面に柱痕見えない。 旧5区9土坑
167	50区 P-1 楕円形	115 × 80 × 24 (南側15)	N-41° E		二段底で北西側が深い。 旧5区10土坑
168	50区 P-2・3 不整楕円形	292 × 177 × 61	N-61° W		底面不整で二段底状。西側が深い。 旧5区11土坑
169	50区 P-1・2 隅丸長方形	344 × 142 × 51	N-83° W		底面は東側へ低くやや傾斜。掘り直しの可能性あり。 旧5区12土坑
170	50区 P-2 不整楕円形	28 × 27 × 41	-		柱穴状。 旧5区13土坑
171	40区 P-25 不整楕円形	27 × 23 × 24	-		旧5区14土坑
172	50区 O-2 円形か	97 × 43 × 56	-		4号溝に先出。東側未調査。 旧5区15土坑
173	50区 Q-2 楕円形	29 × 20 × 19	N-82° W		旧5区16土坑
174	40区 R-25 円形か	76 × (60) × 12	-		焼土土坑。北東側不明瞭。 旧5区17土坑
175	40区 O-25 隅丸長方形か	104 × 57 × 33	N-82° E		176号土坑に後出。 旧5区18土坑
176	40区 O-25 隅丸長方形	164 × 72 × 52	N-3° E		175号土坑に先出。 旧5区19土坑
177	40区 O-25 長方形	319 × 64 × 31	N-8° E	須恵器・灰釉陶器小片各1片 下層に拳大の礫	集石土坑。175・176号土坑に先出か。4号溝の南側2.6mに軸方向をほぼ等しくつながっている。旧5区20土坑
178	50区 O-2 長方形か	[95] × 93 × 64	N-86° E		4号溝・179号土坑に先出。 旧5区21土坑
179	50区 O-2 不整長方形	[152] × 60 × 45	N-1° W		178号土坑に後出。 旧5区22土坑
180	50区 P-2 楕円形	44 × 35 × 20	N-27° W		重複する2基の土坑の可能性。北側が新しい。計測値は全体より。 旧5区23土坑
181	50区 O-3 長方形か	[85] × 65 × 7	N-5° E		旧5区24土坑
182	31区 M・N-25 不整円形	186 × 171 × 27 (縁辺45)	-		底のない桶状の器具を埋設してあったと思われる。縁辺は20cm前後低くなる。中央に粘土質土をやや多量に見る。旧5区1土坑
183	31区 O-25 楕円形	112 × 97 × 30	N-47° E		旧5区2土坑
184	31区 N-25 不整円形	61 × 60 × 40	-		12号溝に先出。 旧5区3土坑
185	41区 N-1 円形か	151 × [97] × 61	-	キセル雁首(1) 小礫の混入多い	12号溝に後出か。北東側半分は未調査。 旧5区4土坑
186	41区 M-1 不整楕円形	34 × 27 × 45	N-3° E		柱穴状。 旧5区5土坑
187	31区 N-25 楕円形	29 × 22 × 36	-		柱穴状で底面狭い。 旧5区6土坑
188	31区 N-25 不整円形	26 × 25 × 26	-		旧5区7土坑
189	41区 N-1 不整楕円形	32 × 30 × 46	-		柱穴状。断面に柱痕が観察できる。 旧5区8土坑
190	41区 N-1 不整楕円形	23 × 21 × 25	-		柱穴的。 旧5区9土坑
191	41区 N-1 隅丸長方形	29 × 23 × 38	N-14° E		柱穴状。断面に柱痕が観察できる。 旧5区10土坑
192	41区 O-1 円形	37 × 33 × 35	-		192・193・195号土坑は2m間隔で一列に並ぶ柱穴状の土坑。 旧5区11土坑
193	31区 O-25 不整円形	31 × 31 × 32	-		旧5区12土坑
194	31区 O-25 不整楕円形	32 × 25 × 22	-		旧5区13土坑
195	41区 O-1 不整円形	35 × 34 × 23	-		旧5区14土坑
196	31区 N-25 楕円形	41 × 28 × 38	N-15° E		杭の痕跡か。 旧5区15土坑
197	31区 N-25 不整楕円形	65 × 41 × 42 (東側35)	N-55° W		12号溝と重複、先出か。底面は東側にテラス状の段あり。 旧5区16土坑
198	60区 A-1 不整円形	100 × 103 × 50	N-49° W		旧7区1土坑

第4章 IV区の調査

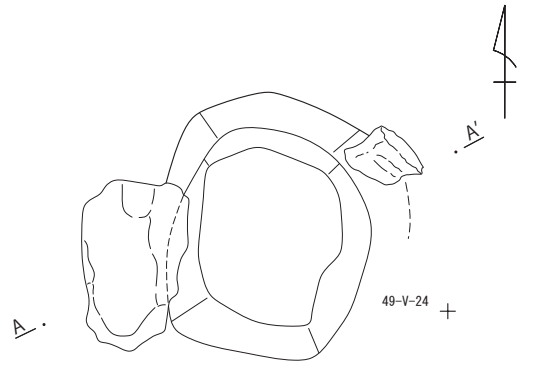
No	位置	規模(長×短×深) cm 軸方向	遺物と埋没土	備考
	形状			
199	60区A-1・2 楕円形	117×97×19 N-58°E		旧7区2土坑
200	60区C-1 不整長方形	86×70×16 N-86°W		旧7区3土坑
201	60区D-2 円形	24×20×18 N-39°W	土層断面に柱痕は見えない。	柱穴状。中央が窪み柱痕に見える。 旧7区4土坑
202	60区C-2 楕円形	27×20×20 N-7°E		柱穴状 旧7区6土坑
203	59区Y-2 楕円形	83×63×14 N-72°W		旧7区8土坑
204	59区Y-2 円形	80×78×20 N-42°W		旧7区9土坑
205	59区Y-2・3 不整形	105×96×17 N-16°W		旧7区10土坑
206	59区Y-2 不整形	52×43×22 N-16°E		旧7区12土坑
207	59区Y-2 楕円形	57×47×30 N-22°W		旧7区13土坑
208	50区B-24 不整円形	56×50×14 N-56°E		旧7区14土坑
209	50区G-19 円形	125×118×31 -	土師器微細片2片	1号住居に後出。 旧8区1土坑
210	50区H-18 楕円形	267×77×38 N-77°W	土師器細片(杯か)1片	旧8区2土坑
211	50区I-18 隅丸長方形	183×72×34 N-10°E	土師器甕細片1片	旧8区3土坑
212	50区H-19 不整円形	72×69×18 -		旧8区4土坑
213	50区H-17・18 隅丸長方形	285×83×50 N-7°E	須恵器甕口縁1片、須恵器椀2片、土師器細片1片	旧8区5土坑
214	50区E-17・18 楕円形	263×92×43 N-3°E		224号土坑に後出。旧8区6土坑
215	50区F-19・20 不整楕円形	198×54×39 N-85°W	土師器甕細片1片	旧8区7土坑
216	50区E-19 不整隅丸長方形	191×56×30(東隅17) N-83°W	須恵器(墨書)1点 遺構外遺物-7	旧8区8号土坑
217	50区C-19 隅丸長方形	225×89×21 N-80°W	須恵器椀1片、土師器細片2片	旧8区9土坑
218	50区C-18・19 楕円形	158×93×27 N-13°E		旧8区10土坑
219	50区D-18 隅丸長方形	195×91×48 N-14°E	須恵器椀1片	旧8区11土坑
220	50区C-20 楕円形	118×85×16 N-11°E	須恵器椀底部大破片1片、須恵器甕胴部片1片	旧8区12土坑
221	50区D-17 楕円形	195×68×47 N-13°E		底面は地山礫面にある。 旧8区13土坑
222	50区E-17 不整隅丸長方形	226×88×41 N-11°E		北壁は地山の大型礫にあたる。 旧8区14土坑
223	50区F・G-17・18 隅丸長方形	426×73×46(北側26) N-10°E	古銭(2) 近世陶器片2片、須恵器片1片	北隅にテラス状の高まりあり。底面は地山礫上面にあり。 旧8区15土坑
224	50区E・F-17 隅丸長方形	483×75×42 N-12°E		214号土坑に先出。 旧8区16土坑
225	50区E-18 隅丸長方形	144×65×34 N-18°E		旧8区17土坑
226	50区A-16・17 不整楕円形	262×96×44 N-11°E	須恵器片2片、土師器甕胴部片1片	底面は地山礫面にある。 旧8区18土坑
227	50区E-17 隅丸長方形	202×65×68 N-13°E	須恵器甕3片、土師器細片4片	南壁は地山の大型礫にあたる。 旧8区19土坑
228	50区B-18・19 楕円形	167×113×29 N-27°E		旧8区20土坑
229	50区B-17・18 長方形	217×119×44 N-74°W		旧8区21土坑
230	50区A・B-18 円形	102×97×33 -	須恵器椀口縁大破片1片	旧8区22土坑
231	50区G-17 隅丸長方形	156×69×38 N-81°W		旧8区23土坑
232	50区A-20 楕円形	68×53×20 N-38°E		旧8区24土坑
233	41区N-25 隅丸長方形	186×85×24 N-15°E		旧10区1土坑
234	41区O-25 長方形	344×69×42 N-15°E		南側はオーバーハング状にえぐれる部分あり。旧10区2土坑
235	41区O-25 楕円形	123×68×10 N-10°E		旧10区3土坑

墓坑

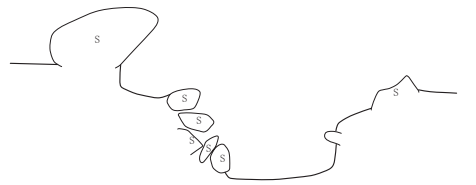
1号道下から北側隣接部分にかけて築かれた8号積石遺構の解体調査中、礫の多い地山を掘り込んだ円形の落ち込みが見つかった。積石上面からは確認できなかった遺構である。道の北脇部分で8号積石遺構掘り方の西隅付近に位置している。

積石遺構の掘り方を想定して調査する中で、礫がやや疎で、他の部分に比べて組み合っていない部分があった。土坑状の施設のあることを想定したが、脆い石組部分のため断面の記録を取れなかった。50cmほど掘り下げた段階で副葬銭を伴う人骨が出土し、墓であることが判明した。底面直上に木片があり、副葬銭にはこれに付着するようにつかかったものもある。座棺を想定して調査したが桶や樽らしい木質は検出できていない。

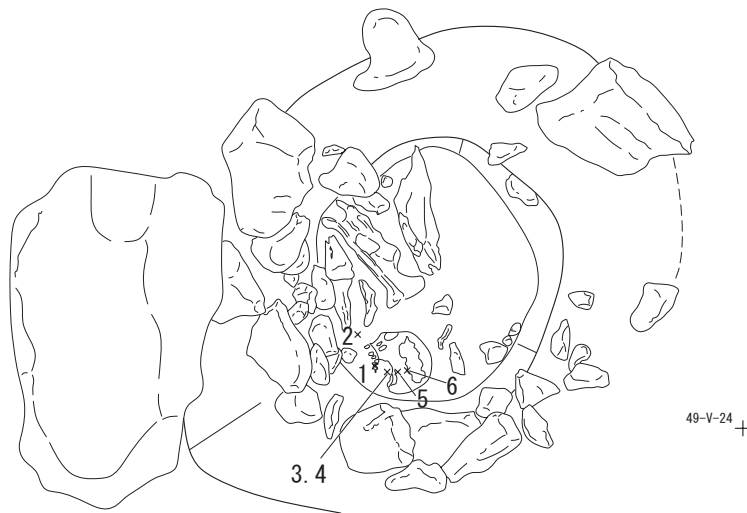
地山には礫の極めて多い一画にあり、積石遺構の性格を探る上で貴重な資料となるものである。石が畑脇に積み上げられる以前の遺構か、積み上げ途中の遺構であるか判断できなかったが、底面まで60cmと浅めであることから、石積みの途中で掘削された墓坑と推測している。西側に長辺1mの巨礫があるが、この礫の東脇部分を掘り込んだものと推測した。



A L= 473.5m A'



0 1:40 1m



0 1:20 40cm

第126図 1号墓坑

第4章 IV区の調査

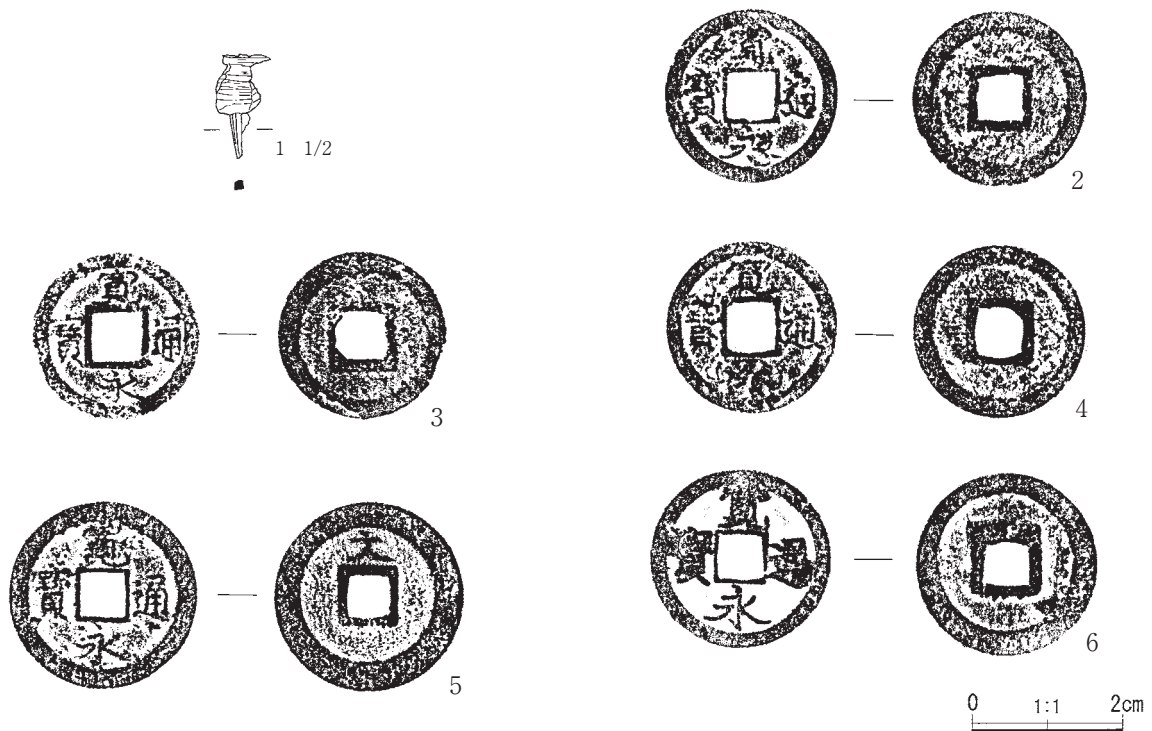
礫混じりの地山の中にあり、明確な規模は把握できなかったが、長軸120cm、短軸60cmほどの南北に長い不整隅丸方形のプランが想定される。平面円形の桶樽類を埋めたとは考えにくい。埋没土は最大人頭大サイズの礫の混じる黒色土で、周辺に比べ、著しくしまりはなかった。

出土した副葬銭は寛永通宝で人骨周辺に散らばっていた。紐で綴じたり袋状の容器にまとめて束ねたものではなさそうであるが、1組（2枚）錆で固まり貼り合わせるような状態のものがあった（3・4）。検出できたのは総計5枚のみであった。地山礫の間に流れ込んだことも想定して、掘り方下まで最後の1枚の検出に努めたが、成果は得られなかつ

た。

その他に鉄釘（1）が1点下層から出土している。長さ24mmの短い釘だが、厚さ15mmの板材状の木質碎片が錆で固まるようにして残存していた。

人骨は成人男性と思われる1個体で、詳細は215頁に記した。



第127図 1号墓坑遺物

## 第3節 第3面の調査

### 10 竪穴住居

平成18年度に2軒の平安時代竪穴住居を調査した。平成13・15年度に調査された5軒の住居と併せ、東西約150mの範囲に7軒の住居が確認された。この他平成19年度にも2軒の住居が調査されている。V区1軒を除いて東カマドの住居である。住居間の重複例はなく、接近して立てられたものもない。9世紀後半を中心とする比較的短い時期の所産であるが、広い範囲に散在する小集落といえよう。

41区南東隅部分を除いて周辺の包含層調査でも該期の遺物はあまり採取されていない。

IV区の2軒は基本土層VI層の面で、同じ層土の落ち込みとして確認されたもので、カマド焼土が見えるまで遺構は把握できなかった。

#### IV区1号住居

49区を中心として広がる平安時代の集落で、最も西側に位置する住居である。

カマドを確認した段階では地山と埋没土の区別はつかず、数回におよぶ鋤簾による遺構確認とサブトレンチによって遺構範囲を確認した。

**位置** 50区G・H-19・20グリッド

**規模形状** 西辺が4.3mで最も長く、東辺は4.1mである。南東隅付近がやや歪んでいるが、各辺は直線的で、比較的整った横長方形を呈している。

**埋没土** 基本土層VI層土を埋没土としている。炭化物粒や焼土粒の混じる住居埋没土らしい土である。

**方位** N-86° E

**面積** 17.8m<sup>2</sup>

**壁** 垂直に近い立ち上がりの壁で、南東隅付近では30cm、他の位置では40~50cm前後の壁高がある。床面からの深さが4cmほどの不明瞭な壁溝が廻るが、カマド周辺にはなく、その他の部分でもところどころで途切れている。埋没土は比較的硬く、住居廃絶時に開口していた印象は受けなかった。

**床面** ほぼ水平だが中央付近が若干低くなる床で

ある。カマド前面から住居中央にかけて踏み固めが確認できる。明瞭なものではないが、中央部分が僅かに低く、住居粗掘り時の窪みを埋め戻す程度の掘り方がある。

**柱穴** 確認できない。掘り方調査でも痕跡は認められなかった。

**カマド** 東壁の中央やや南寄りにある。石組みのカマドと思われるが残存状態は良くない。カマド内の礫はあまり多くないが、住居内に散っている礫を併せれば、石組カマドの構築に十分な量が確保できそうである。燃烧部は住居内にあり、確認できる煙道の壁外への張り出しは50cmに満たない。火床の深さは住居床面より5cm程度で浅い施設である。カマド掘り方は径1m以上あり、袖部がそっくり入る規模である。袖部はローム状の粘性土を固めたもので、粘土は見られない。

**その他** 南西隅付近に床面からの深さ20cmの平面楕円形の落ち込みがある。貯蔵穴の位置に相当するが、不明瞭な施設である。

**遺物** 杯類を中心に出土遺物は多い。出土位置はカマド周辺から住居南側に偏っていた。13点の土器を図示した。

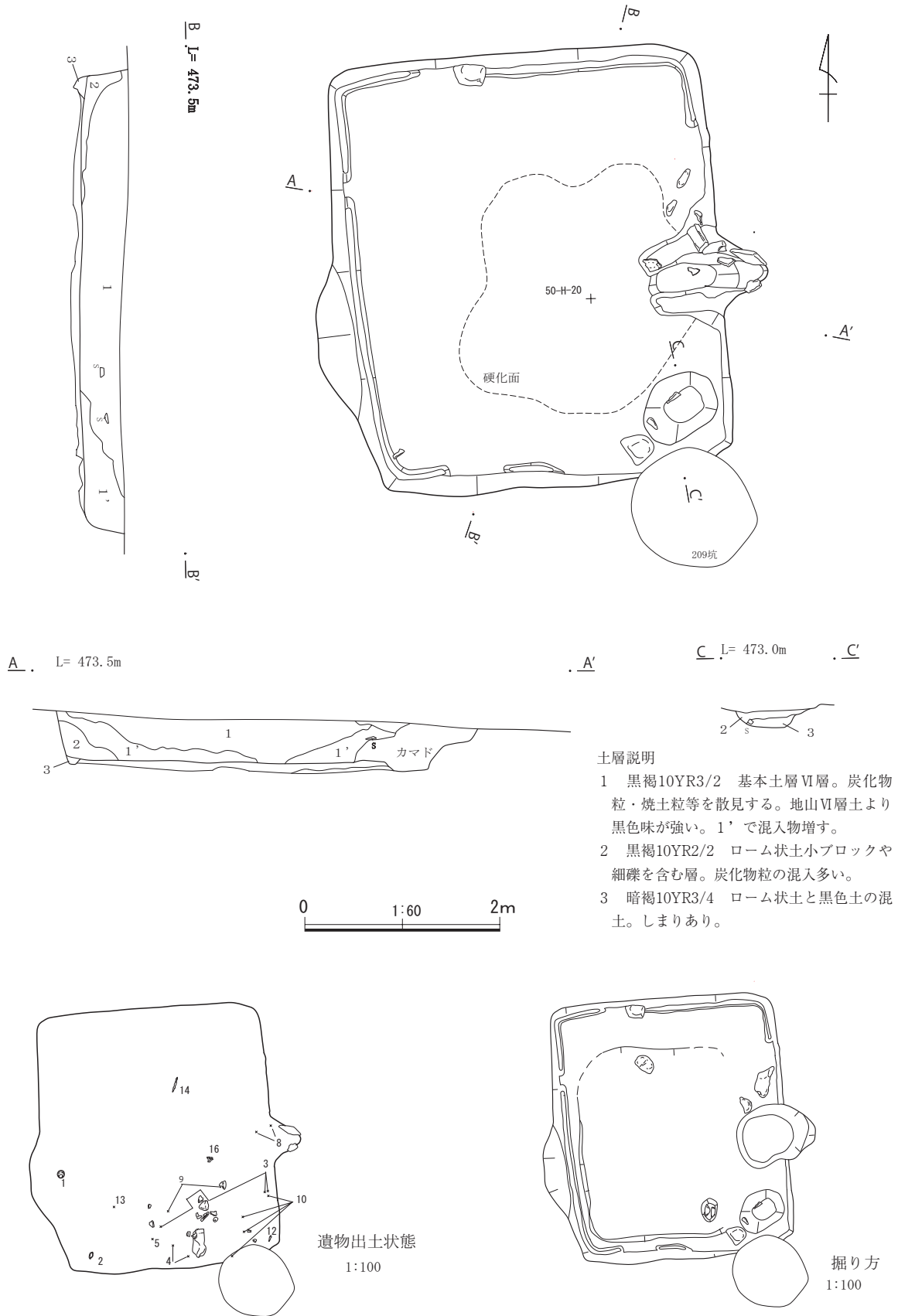
杯類は住居壁際に散乱していた。1は西壁際、2は南西隅付近、4・5は南壁際の出土である。11の須恵器壺はカマド内からカマド前北西側に比較的まとまっていたが、高さはまちまちであった。

14~16は鉄製品である。14は紡錘車軸部と思われる、15と接続する可能性がある。16はスラグである。図示した以外にもスラグ小片の出土が1点ある。

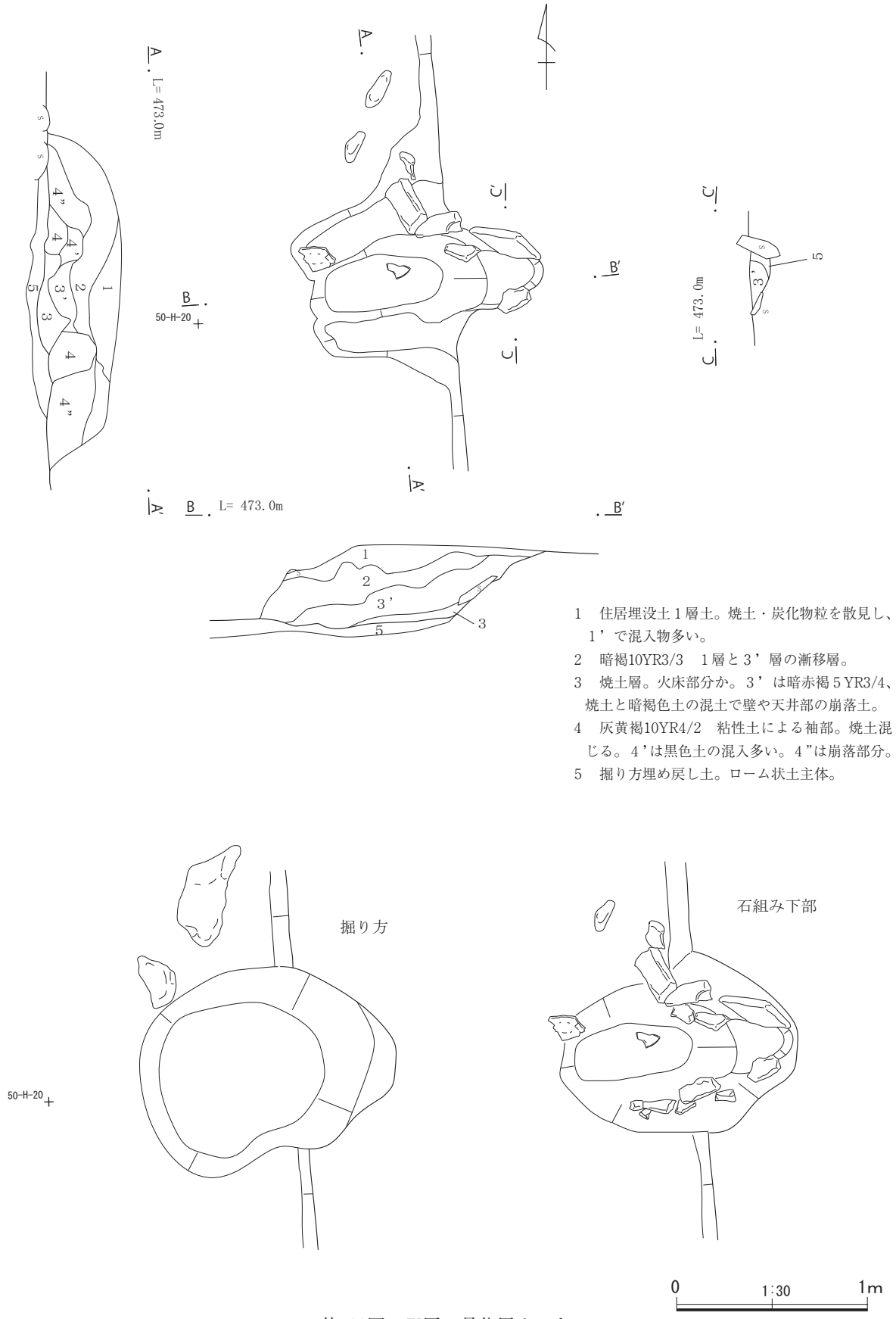
住居全域にやや大きめの礫の混入が多かった。大半はカマド構築材が散乱したものと思われる。



第4章 IV区の調査



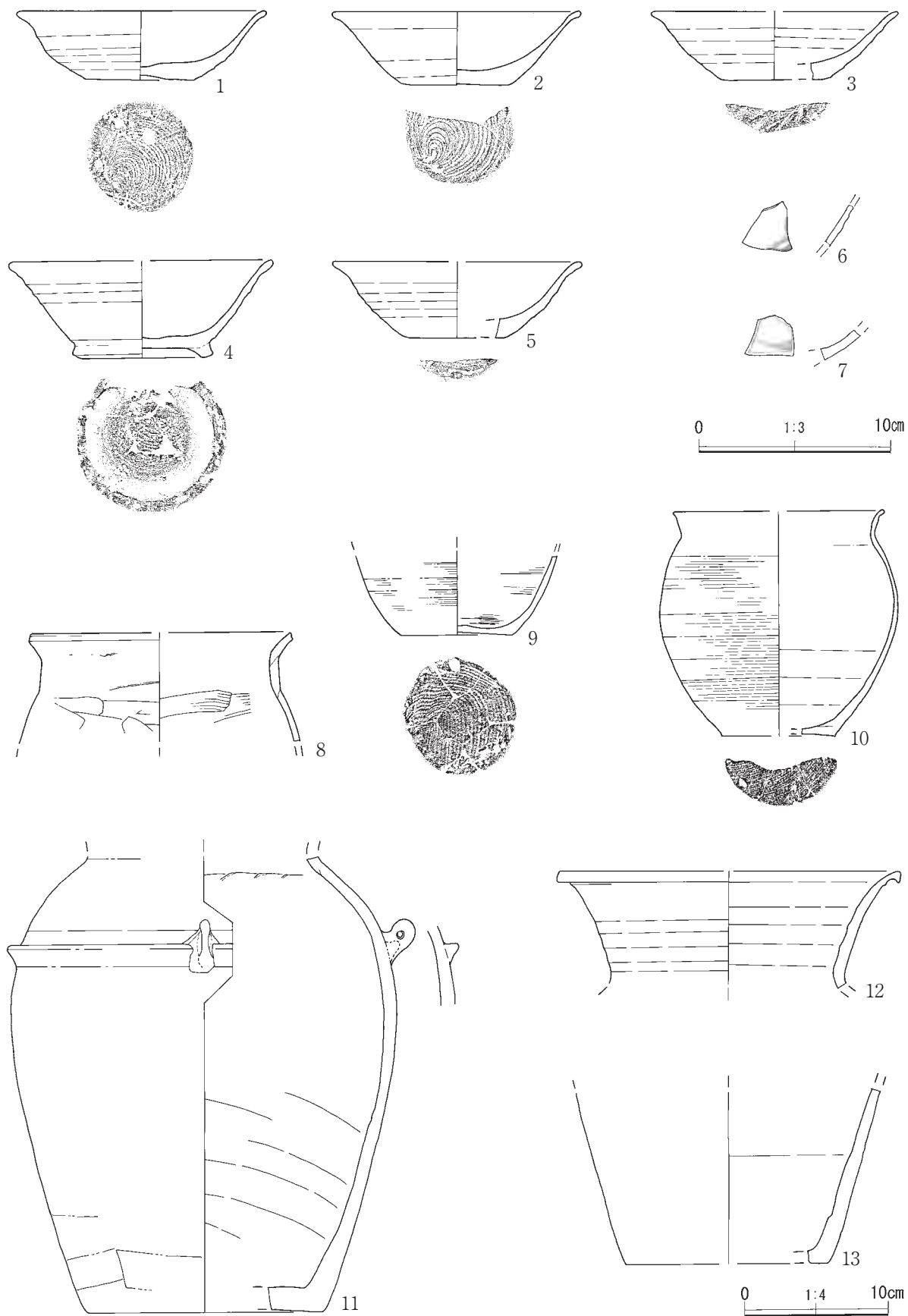
第128図 IV区1号住居



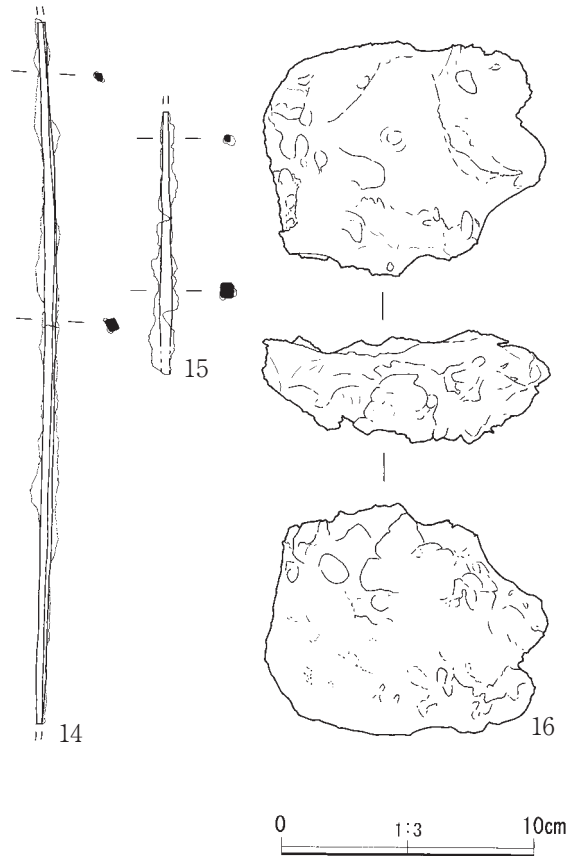
- 1 住居埋没土1層土。焼土・炭化物粒を散見し、1'で混入物多い。
- 2 暗褐10YR3/3 1層と3'層の漸移層。
- 3 焼土層。火床部分か。3'は暗赤褐5YR3/4、焼土と暗褐色土の混土で壁や天井部の崩落土。
- 4 灰黄褐10YR4/2 粘性土による袖部。焼土混じる。4'は黒色土の混入多い。4''は崩落部分。
- 5 掘り方埋め戻し土。ローム状土主体。

第129図 IV区1号住居カマド

第4章 IV区の調査



第130図 IV区1号住居出土遺物(1)



第131図 IV区1号住居出土遺物(2)

#### IV区2号住居

天明泥流下畑から30cmほどの深さでカマド焼土を確認した。1号住居同様、カマドが確認できる高さでは住居全体のプランは見えなかった。

位置 50区A・B-21・22グリッド。1号住居から東に22m離れた位置にある。

規模形状 北辺3.6mに対し他の辺は3.1~3.2mで、台形状に歪んだ方形を呈している。

埋没土 1号住居に近似していた。炭化物粒の混入やや多く、上面からプラン確認が可能だった。

方位 N-96° E

面積 17.8m<sup>2</sup>

壁 床面からの高さが25~30cmの、ほぼ垂直な壁であった。住居北側に深さ6cm前後の壁溝が確認できる。北西隅では途切れるが、他の部分でも深さ3~5cmの比較的明瞭な施設であった。

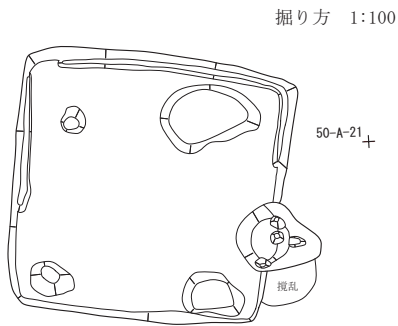
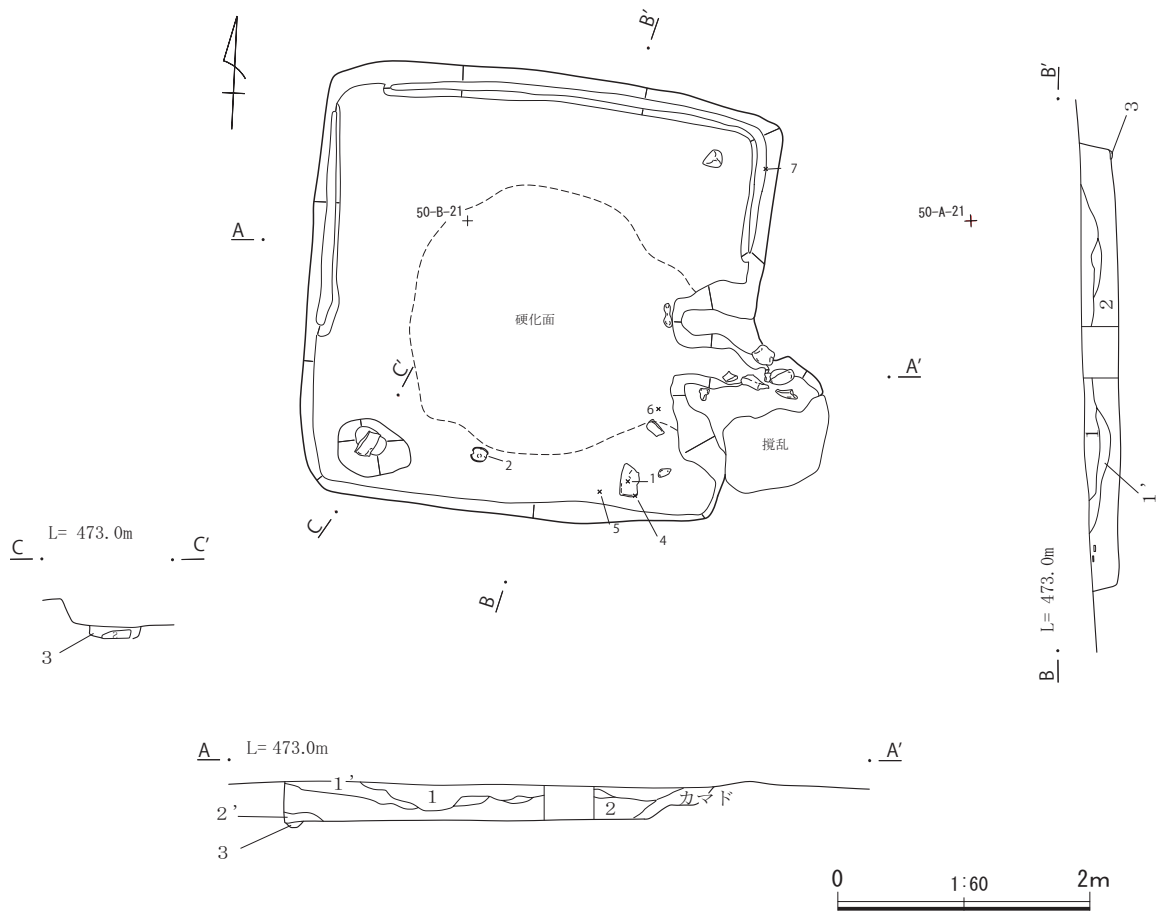
床面 カマド前面から住居中央にかけて踏み固められた、あまり顕著ではない硬化面があった。焼土・灰等の散布面があり、床面は容易に検出できた。地山傾斜に沿って北側が若干高く、南隅付近と8cmの比高さを生じていた。

柱穴 床面精査時には確認できなかったが、掘り方調査時に不明瞭なピット状の落ち込みが3箇所を確認されている。北東の窪みは深さ10cmで、形状もやや柱穴的であった。他は深さ4cm前後しかなく、形状も不整であった。3箇所とも上面が踏み固められていたようで柱穴になるとは考え難い。

カマド 東壁中央やや南寄りにある。南側を上面の攪乱で壊され、全容は明らかに出来ていない。燃焼部は住居内にあり、煙道は壁外へ60cm張出している。掘り方内には焼土・灰等の混入が見られる。

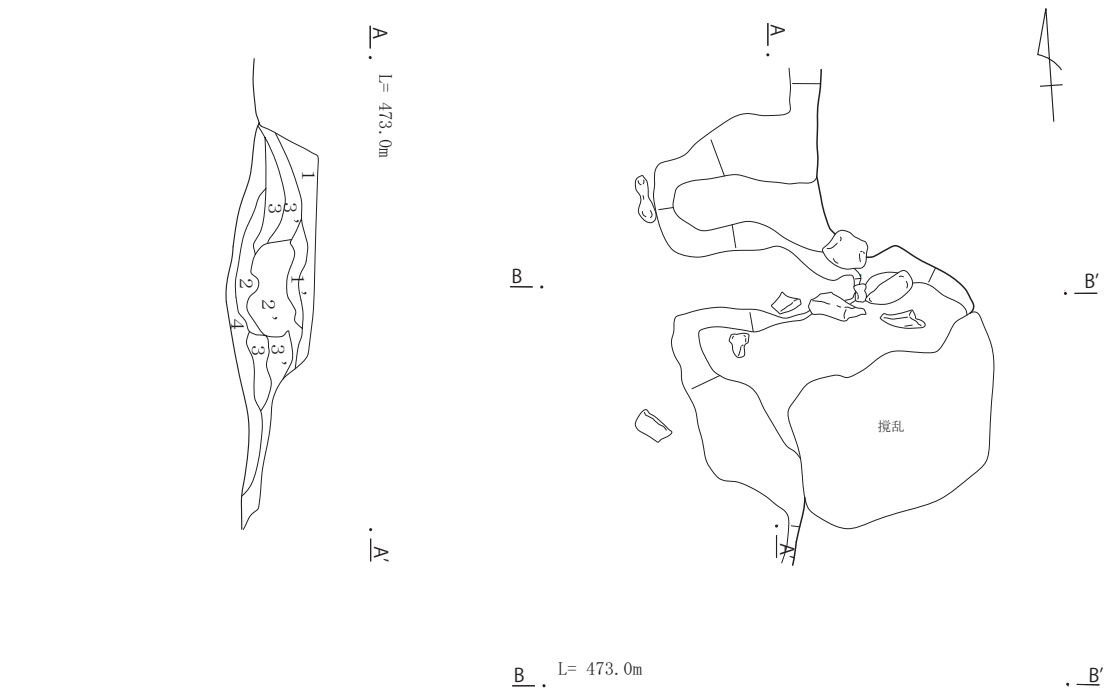
石組カマドと思われ、板状に割れた被熱した礫がカマド内に多数見られる。掘り方内に石を埋めた窪みがあるが、破損のため不明瞭である。カマド内から遺物の出土はなかった。

その他 南東隅付近に楕円形を呈した床面からの深さ116cmの窪みがあった。上面に踏み固めはなく、住居廃絶時に開口していたと思われる。浅いうえ底部も狭く、貯蔵穴とは考えにくい。

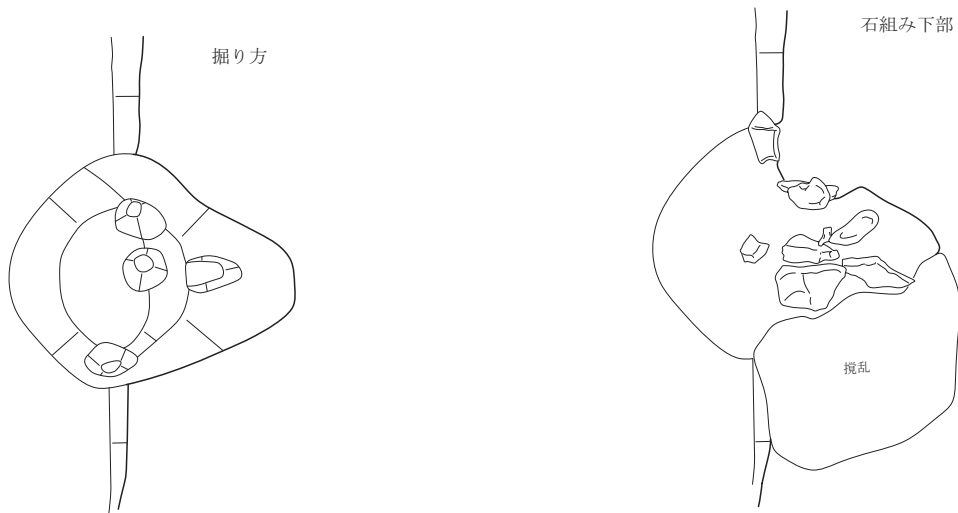
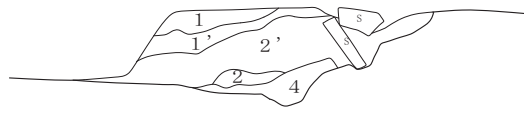


- 1 黒褐10YR3/2 基本土層VI層。炭化物粒・細礫等を散見する。1号住の1層土に近似する。1'で混入物増す。
- 2 暗褐10YR3/3基本土 炭化物粒の混入やや多く、ローム状土ブロックもやや多くなる。しまりやや欠く。2'でローム状土増す。
- 3 ローム状土と黒色土の混土。しまりあり。

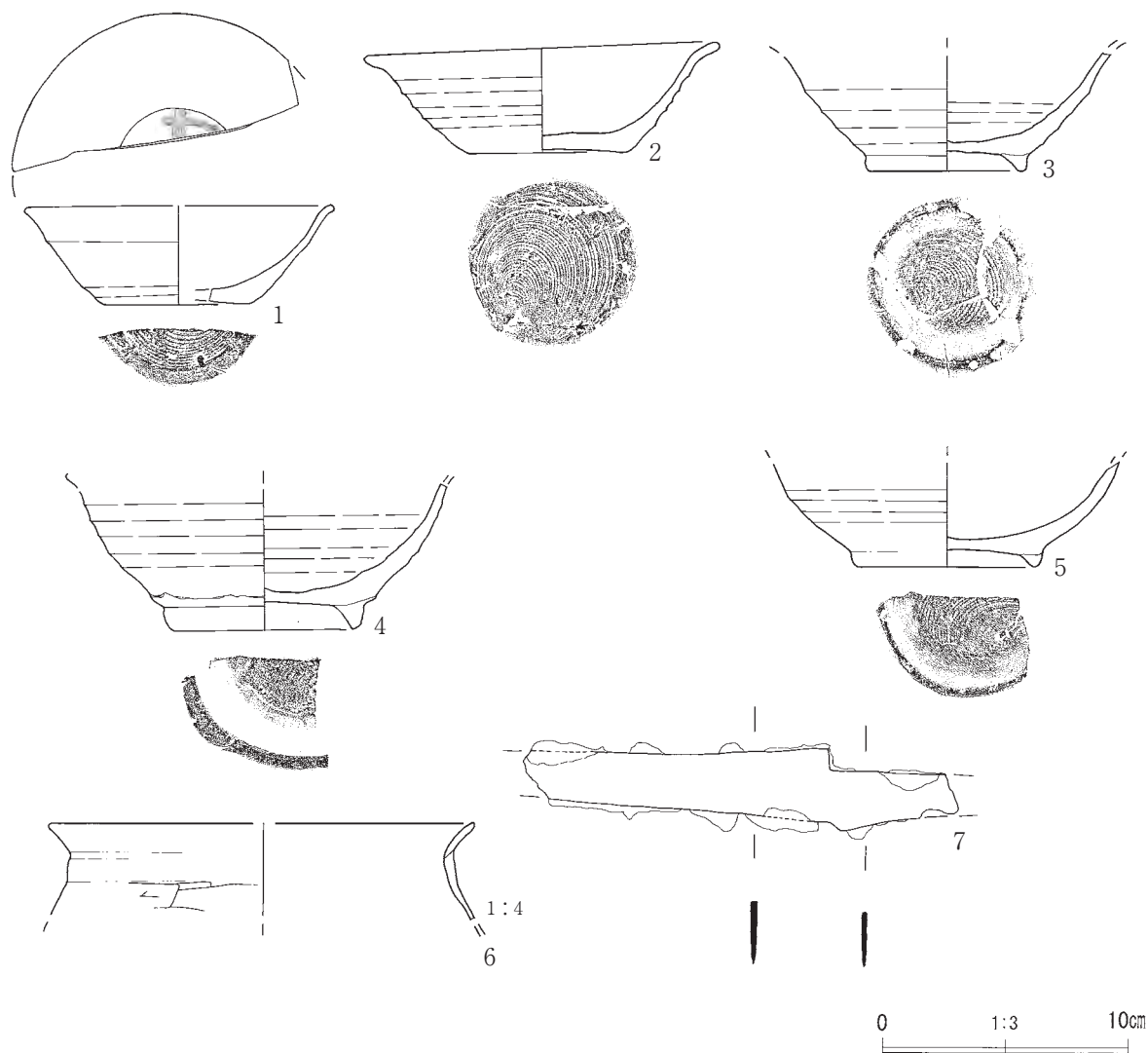
第132図 IV区2号住居



- 1 住居埋没土1層土。焼土粒を散見し、1'で混入物多い。
- 2 焼土層。灰混じりの火床部分。3'は焼土と暗褐色土の混土で壁や天井部の崩落土。
- 3 灰黄褐10YR4/2 粘性土による不明瞭な袖部。焼土混じる。4'は黒色土の混入多い崩落部分。
- 4 掘り方埋め戻し土。焼土・灰混じる。しまりやや欠く。

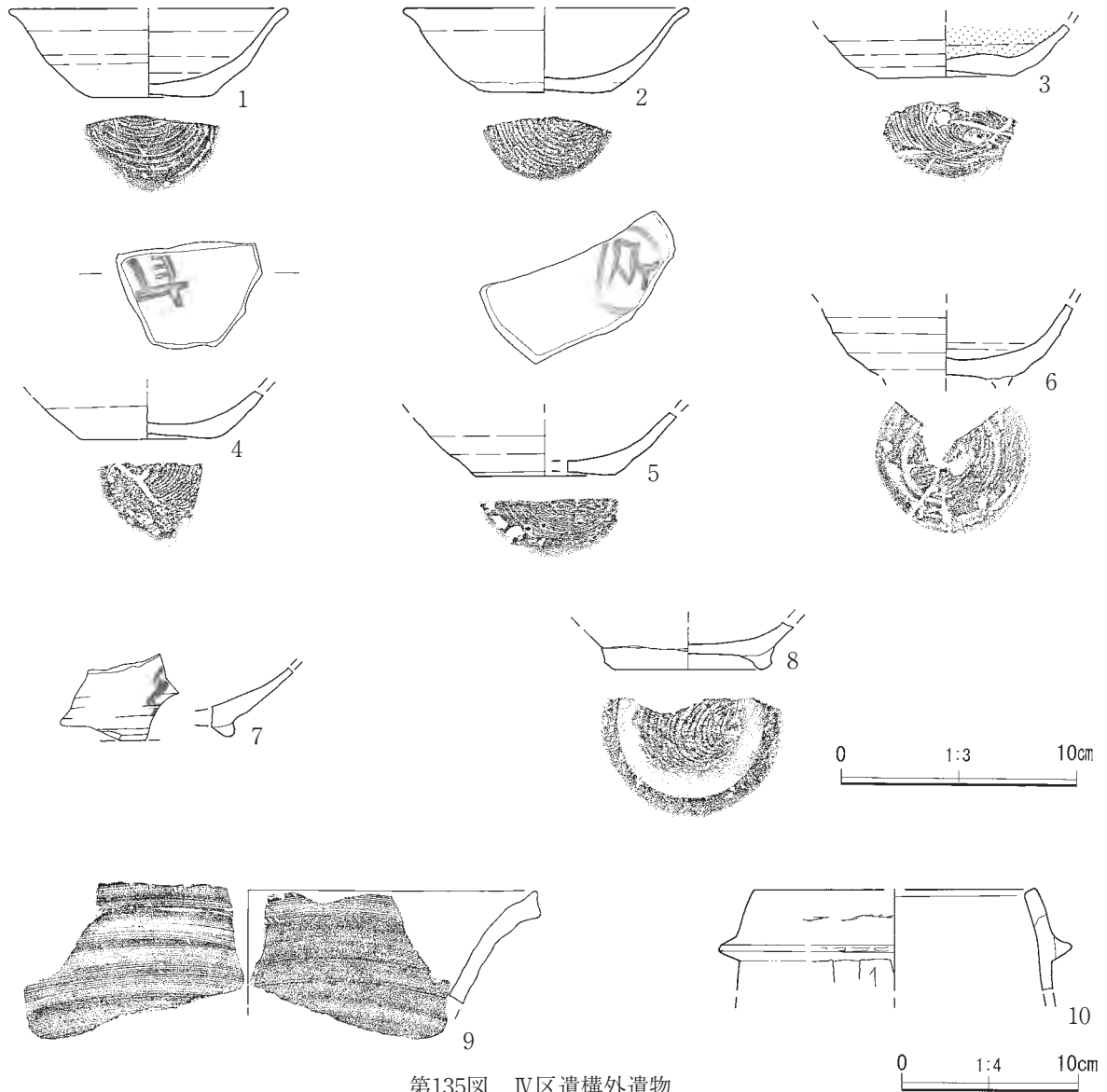


第133図 IV区2号住居カマド



第134図 IV区2号住居出土遺物

遺物 出土遺物は少なかったが6点の土器を図示した。須恵器杯類が主体でいずれも住居南半から出土したものである。特に南東隅付近に偏っており、1・4・5が集中して出土している。1は内底部に墨書がある。完形まで復元できたのは南壁下やや西寄りから離れて出土した2の無台杯のみである。6の甕はカマド前から出土しているが、同一個体の可能性のある他の甕破片の出土は少ない。7は北東隅付近の壁際から出土した刀子で切先・茎の両端を欠いている。



第135図 IV区遺構外遺物

### 11 IV区遺構外の遺物

上図は遺構外の平安時代遺物である。10点を図示したが、墨書・顕著な付着物を持つ遺物をすべて扱ったため、杯類中心となった。

1・2・4・5は2軒の竪穴住居周辺の遺物である。出土量は多くなかったが、比較的残存状態の良い遺物が含まれていた。5は内底部に墨書があるが、占を丸もしくは国構えて囲う本遺跡で特徴的に見られる文字として注目される。

3・8～10は平安時代の遺物が比較的多く採取された5区西側の出土である。周辺は土師器甕類の出土もあったが、胴部片主体で図示に耐える遺物がなかった。3は内面に朱墨らしい赤色付着物が見られた。10は本遺跡では珍しい羽釜である。

7は216号土坑の出土であるが、混入遺物としてここで扱った。



## 第5章 V区の調査

### 第1節 第1面の調査

#### 1 畑と平坦面

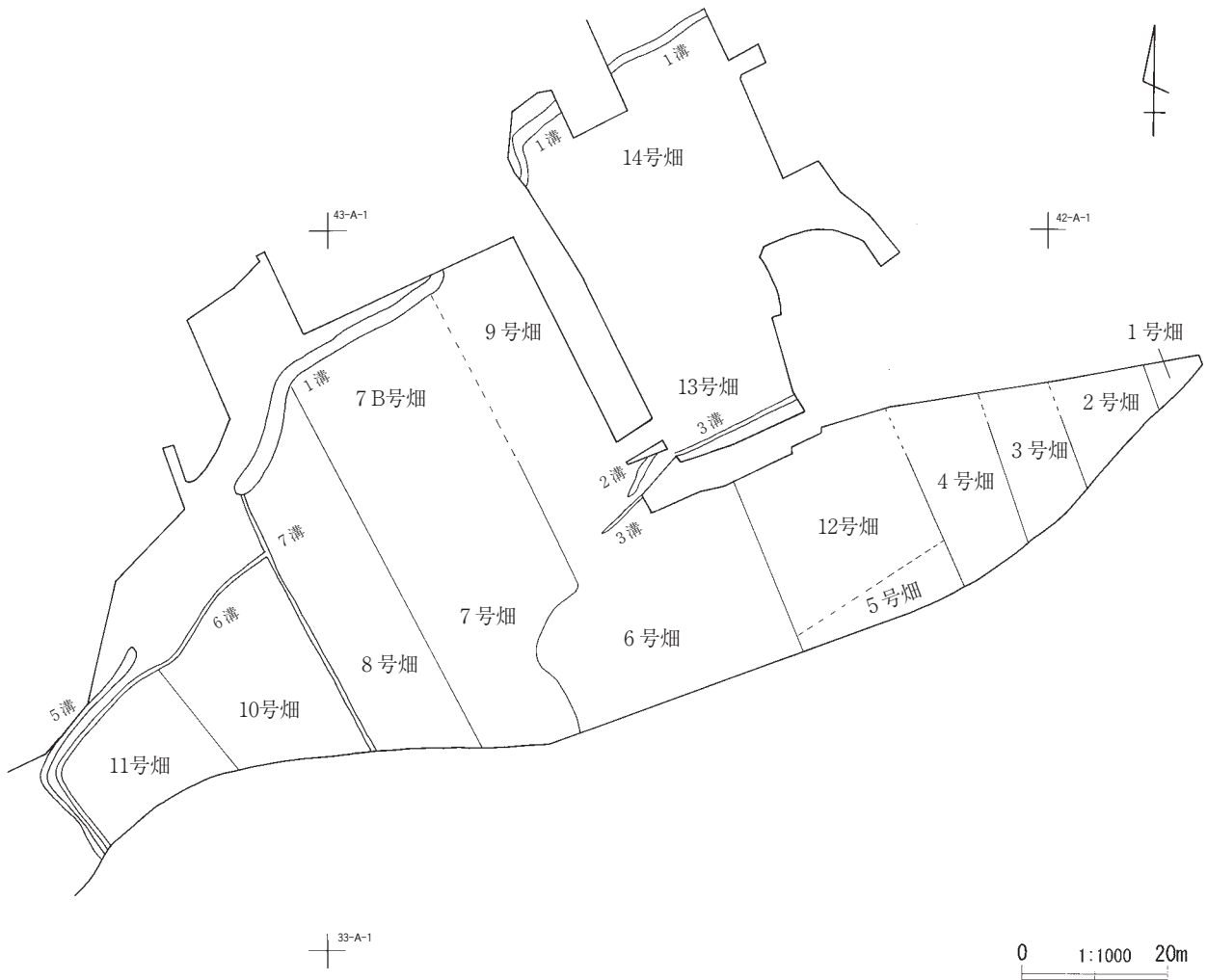
V区の畑は上位段丘の縁辺から下位段丘面に向かう北北西側へ低くなる傾斜面から、下位段丘上の平坦面で確認された畑である。V区は上位段丘面に向かう傾斜面も広く調査しているが、全面に天明三年の泥流を被っている。また、本遺跡では最初の泥流下畑の調査部分であり、調査にあたってのAs-A処理基準作成以前の調査区が含まれている。そのため軽石除去後に図示した畑が多く、厳密にはIV区までの遺構面と若干の時間差が生じている部分がある。

上位段丘面と下位段丘面を画す斜面が調査範囲を

斜めに横切っており、この斜面を境に畑大区画境が存在するはずである。その他にも境木列などで区画境が想定される箇所もあるが、あまり明瞭ではない。

IV区までに見られた等高線に対し垂直方向や斜め方向に畝サクが設けられた畑がV区では1ヶ所もない。規則的な積石遺構（ヤックラ）も見られなかったが、畑の作られなかった斜面に石が乱雑に捨てられた地点が存在した。円形平坦面もIV区までの畑に比べると少ない。

北側は1号溝によって画されているが、この溝の北側では畑の痕跡は全く確認されていない。残存状態のきわめて悪い地点であるが、溝南側では部分的にサクの痕跡が認められており、溝北側は当初から畑地ではなかったと推測している。



第136図 V区1面畑概念図

1号畑

V区調査範囲の東隅にあたり、9条のサクと、西側の限界のみ確認である。畝は上半を削り取られているが、サクの残存状態は比較的良好。確認範囲は南北5m、東西7.5mで、他の方向へはまだつながっている。西側の2号畑とは畝サク方向を違い、平面では「ハ」の字状に見える。両畑の境界には幅20~60cmの隙間があり、作業通路となりえる空間が確保されている。

As-Aの除去後に作図したため、断面図の軽石堆積状態はあまり良くないが、As-Aはサク内底面部分に堆積しており、「サク寄せ」直後の状態ではないことが確認できる。

確認面積 31.2m<sup>2</sup>

サク間 55~65cm サクの長さ 7.3m以上

サク方向 N-61° E

畝サクの高さ 5cm前後。部分的に10cmを超える地点あり。

地山傾斜 59/1000

2号畑

東西幅約14m、南北幅8m以上の区画である。次に説明する3号畑とともに、畝サク方向が畑の軸方向からずれているのは、地山の傾斜に平行な畝サクとしたためである。

東側に1号畑、西側に3号畑が隣接する。1号畑との境は残存状態が若干良く、直線的にはならないやや乱れたサクの端部が確認できる。3号畑との間には部分的に浅い溝があり、畑の境としているようだが、両畑の畝サク方向やサク間に差がなく、2号畑側から見ると畑の境は不明瞭である。北側は不明瞭で、斜面へ流れ落ちてしまったと思われる。

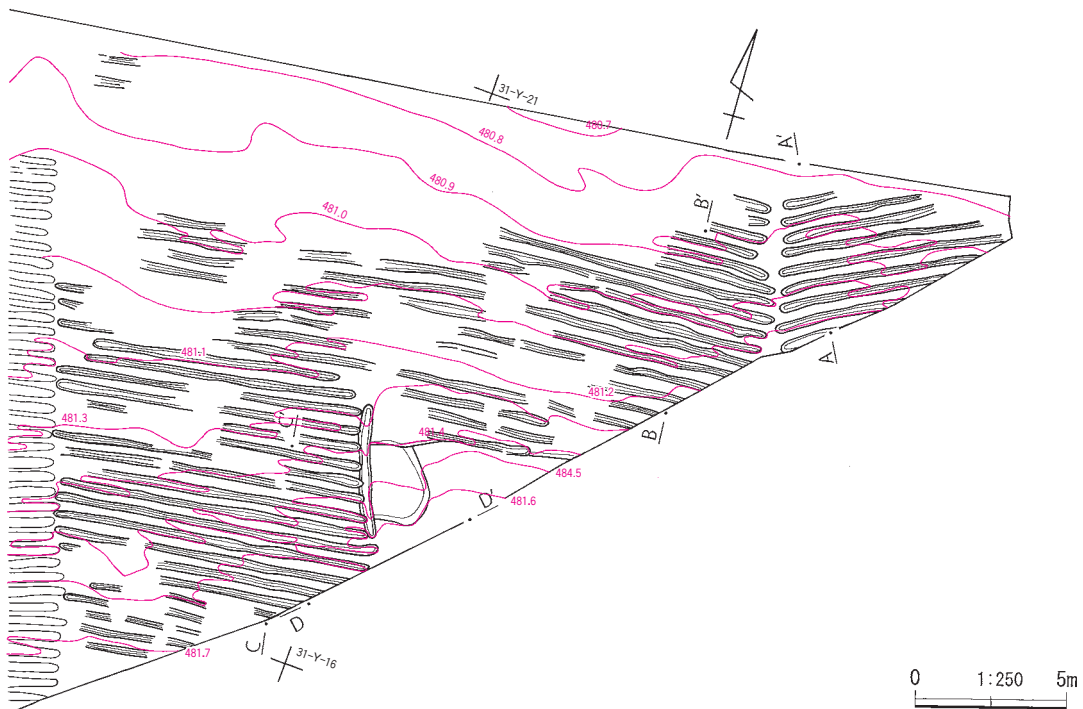
As-Aは畝頂部や畝南側肩部分に見られ、畝内に鋤き込まれている箇所も確認できる。南側から（高い方から）北側へ向かって「サク寄せ」が行われた痕跡と思われる。

確認面積 154.8m<sup>2</sup>

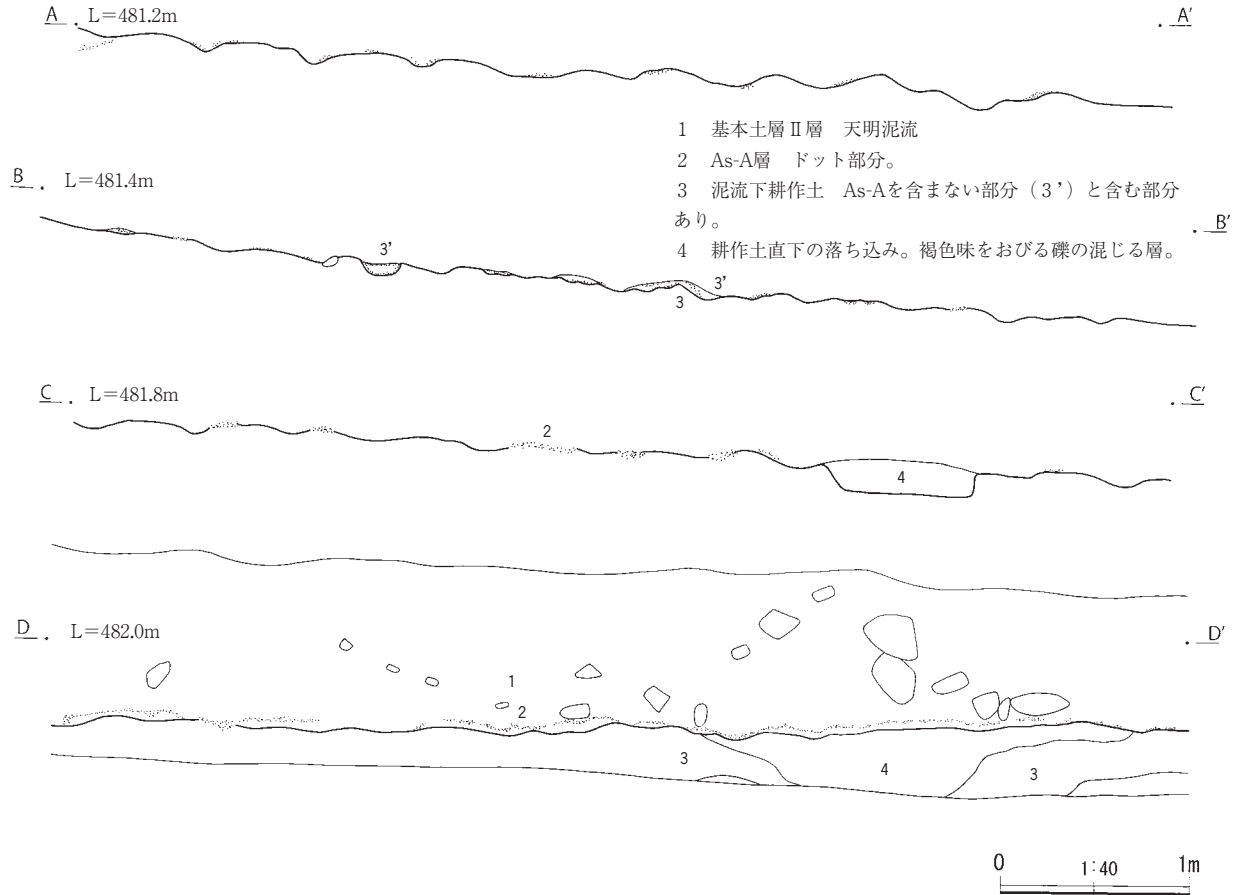
サク間 50~60cm サクの長さ 11.7m

サク方向 N-82° E

畝サクの高さ 3~8cm 地山傾斜 52/1000



第137図 V区1~3号畑



第138図 V区1～3号畑断面

3号畑

東西幅10.2m、南北幅14.6m以上が確認できる。北側の残存状態が悪いが、北側4mの地点に離れて見える2条のサク痕が本畑に伴うのであれば、南北幅は20m以上となる。

2号畑の境については前述のとおりだが、南寄りの部分ではサクの端部が明瞭にわかる。東のサク端部が西のサク端部より明瞭なのは2号畑・3号畑に共通する特色となっている。西側に隣接する4号畑との境にはサクが一部で互い違い状になる部分も認められる。両畑の境にはほとんど間隔がない。畝サクの方向も東西に隣接する畑に近似している。

As-Aは畝上や畝南肩付近に部分的に見られ、2号畑と同様に「サク寄せ」されている。

北隅で確認された2条のサク痕を含んだ計測値は( )で表記した。

確認面積 192m<sup>2</sup> (243m<sup>2</sup>)

サク間 50～65cm 60cm前後の部分が中心

サクの長さ 10.2m (0.7m)

サク方向 N-80° E

畝サクの高さ 3～7cm (2cm)

地山傾斜 53/1000

4号畑

東西幅は11m前後で、北側に向かって多少広がる傾向がある。南北幅は20.6m部分までは確実に、北隅の不明瞭な部分を加えると26m以上となる。

東西両側に隣接する畑にくらべ、サク残存状態の良い畑である。サク端部は東西両隅で明瞭に確認できるが、北隅では不明瞭になる。北側は畝間がやや広くなり、別の畑となる可能性もあろう。西側の5号畑との境には深さ最大5cmの溝があり、サク端部がこの溝を切り込んでいる。両畑の境界部分の間隙も3号畑までの例より広く、作業通路となりえる幅

30~50cmの隙間が確保されている。

断面図はサク内の埋没土除去以前に作成した。As-Aの純層がサク内でのみ観察できたが、層圧は最大でも3mm程度である。粒粒も小さく、1号畑と同様である。畝内にAs-Aは見られず「サク寄せ」の痕跡は確認できない。

確認面積 276m<sup>2</sup>

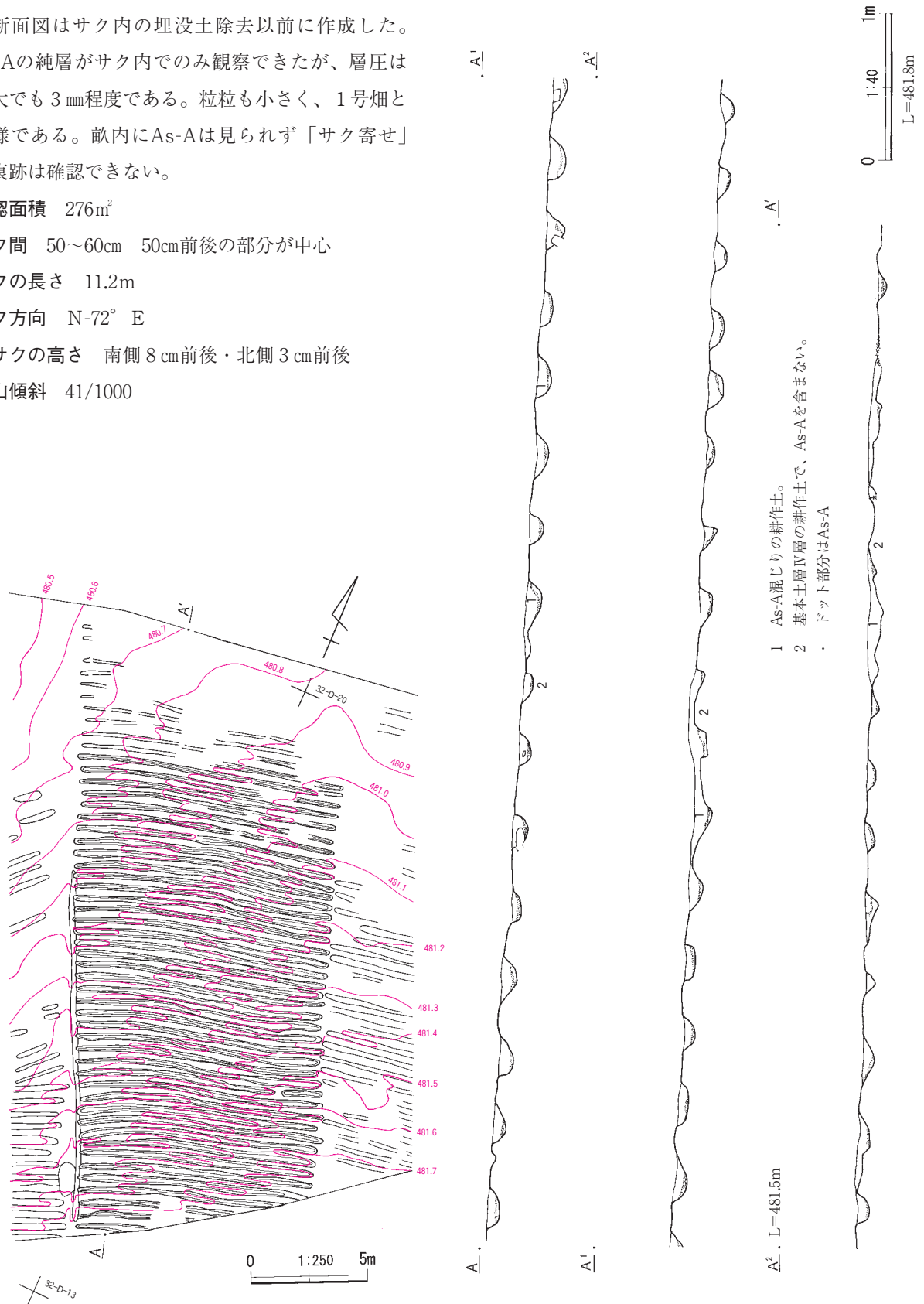
サク間 50~60cm 50cm前後の部分が中心

サクの長さ 11.2m

サク方向 N-72° E

畝サクの高さ 南側8cm前後・北側3cm前後

地山傾斜 41/1000



第139図 V区4号畑

5号畑・12号畑

年度をまたいだ調査地点にあり、その境で掘りすぎのため畝サクを失った部分がある。

東西幅28mのきわめて広い区画である。東側は4号畑まで東西幅の狭い畑が続いたが、ここから西側に幅の広い畑が表れる。畝サクの重複が見られ、南側の5号畑・北側の12号畑に別けた。

5号畑は畝サクが比較的明瞭で、残存状態の悪い12号畑に後出している。収穫の終わった12号畑の上を5号畑がサクを新たに切り直したように見える。畝サクの方向は5号畑が東西両側に隣接する畑に近似するのに対し、12号畑は、やや北側に触れている。南北幅は5号畑が6.8m以上、12号畑は22m以上となる。

5号畑では降下As-Aの上にAs-A混土で畝を作っている。混土の厚さは最大10cm程度である。12号

畑はサク底部付近にAs-Aが僅かに見られるのみである。

確認面積 642.3m<sup>2</sup>

サク間 5号畑50cm前後

12号畑60cm前後

サクの長さ 5号畑24.1m

サク方向 5号畑N-59° E

12号畑N-47° E

畝サクの高さ 5号畑5~12cm

12号畑2cm前後

地山傾斜 65/1000



第140図 V区5・12号畑

6号畑

二列の円形平坦面らしい区画が認められ、本来2枚の畑となるものであろう。ただし残存状態は比較的良かったにもかかわらず、畝サクの切れ間や溝などによる境界は確認できなかった。東西幅は31mでV区最大の規模になっているが、二分すれば15.5mで平均的な畑となる。

東西両側に隣接する畑とは段差をもって区切られている。特に西側7号畑との境は高さ最大で2.7mの比高差がある。この地形より、1～6号畑は上位段丘と下位段丘との境界斜面にあると考えたい。

7号畑境の急斜面には礫が多いが、地山に含まれる以外に耕作に邪魔な礫を廃棄したものであろう。表面には径30cmほどの持ち運び易い大きさの礫が目立つ。北側の9号畑とは3号溝で区切られている。

As-Aは畝内に鋤き込まれていた。軽石の状況から複数回のすき込みが行われているようだ。泥流直下の畝サク上には堆積した軽石は見られず、泥流に近い時期の耕作が想定される。

確認面積 728.8m<sup>2</sup>

サク間 60cm前後

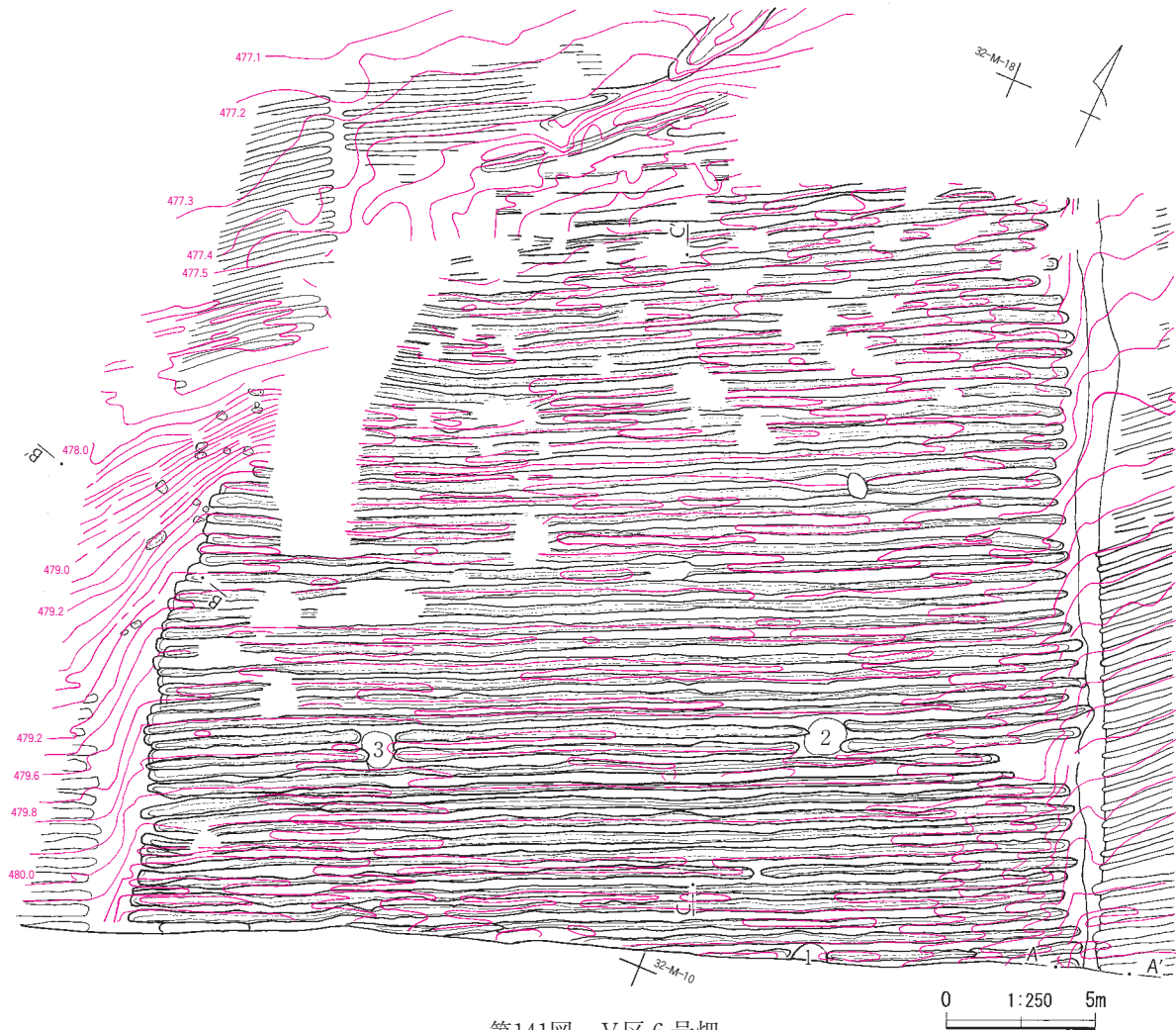
サクの長さ 30.3m

サク方向 N-66° E

畝サクの高さ 広い範囲で10cm前後確認できる。

地山傾斜 95/1000

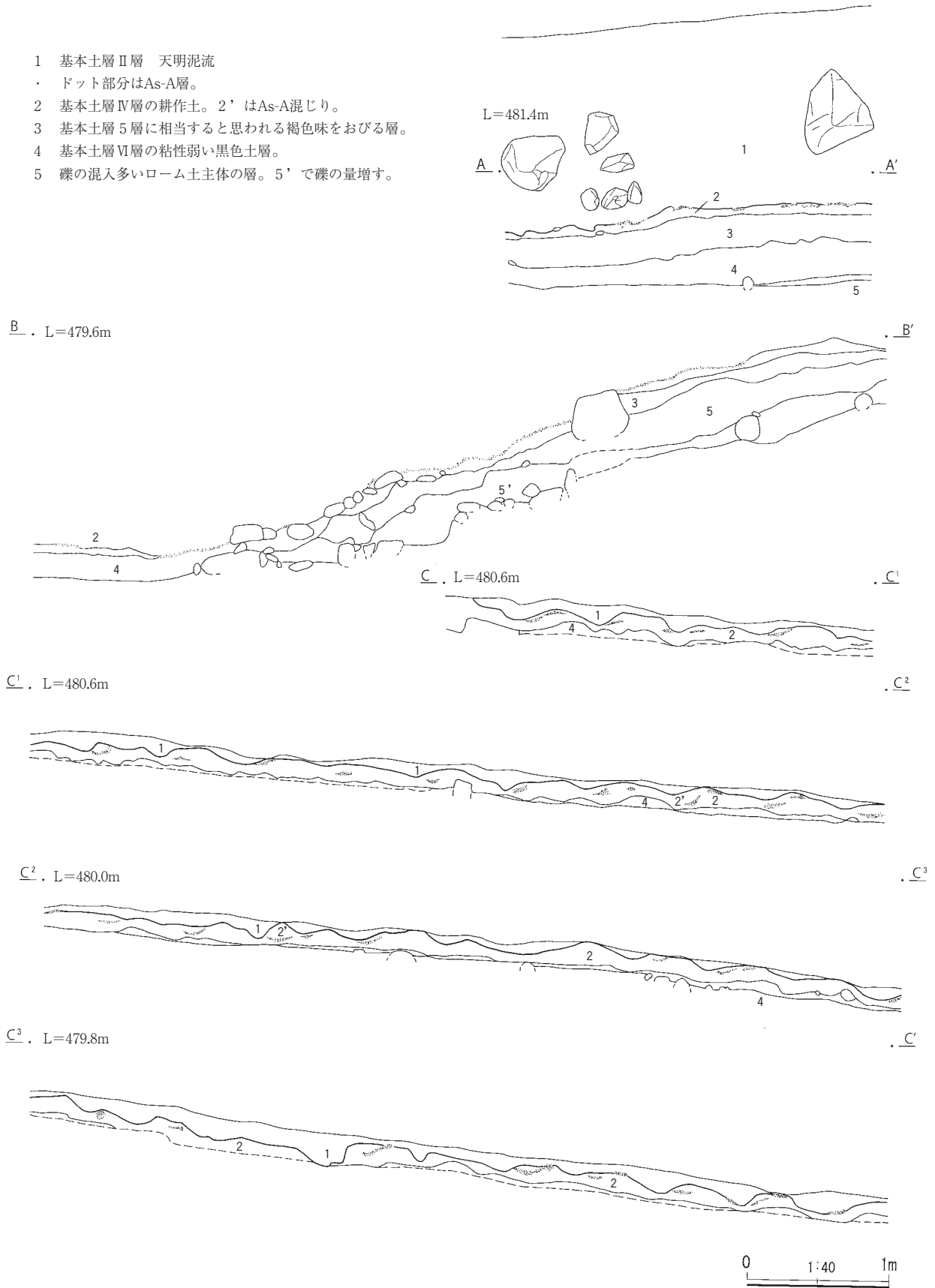
平坦面 畝サクの切れ間として、3ヶ所の不明瞭な空白部分が確認された。この空白部分を切り込んでサク切り畝立てが行われている。空白部分には周溝状の窪みや桶状の圧痕など、施設を想定できるものはないが、平坦面があったと推定できよう。



第141図 V区6号畑

第5章 V区の調査

- 1 基本土層Ⅱ層 天明泥流
- ・ ドット部分はAs-A層。
- 2 基本土層Ⅳ層の耕作土。2' はAs-A混じり。
- 3 基本土層Ⅴ層に相当すると思われる褐色味をおびる層。
- 4 基本土層Ⅵ層の粘性弱い黒色土層。
- 5 礫の混入多いローム土主体の層。5' で礫の量増す。



第142図 V区6号畑断面

1号円形平坦面

半分のみの確認で全容は不明である。

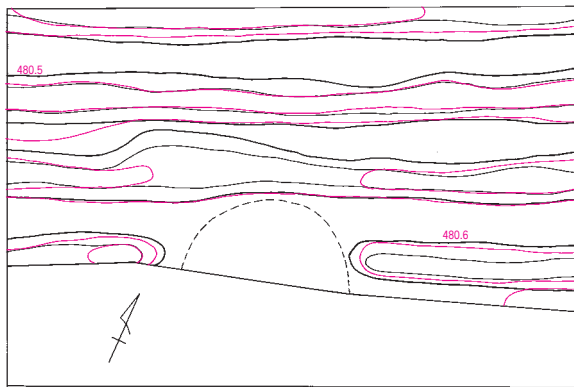
形状 円形を想定したが、方形となる可能性もある。

規模 直径1.1m前後と推定される。

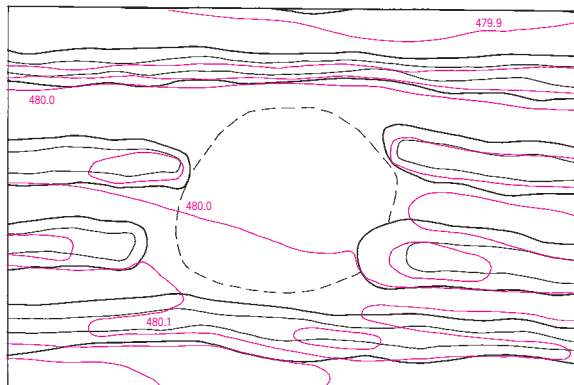
2号円形平坦面

1号平坦面の北側12.5mの位置にある。畝3条・サク2条分の幅である。

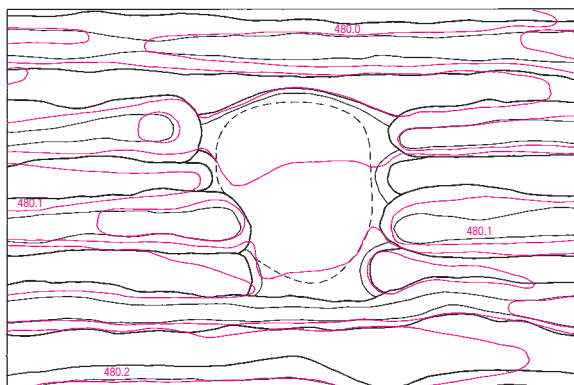
形状 ほぼ南北に長い歪んだ円形を想定した。



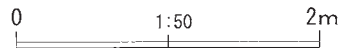
1号円形平坦面



2号円形平坦面



3号円形平坦面



第143図 V区6号畑円形平坦面

規模 南北1.5m、東西1.2m前後を想定した。

3号円形平坦面

2号平坦面の西側約14mの位置にあり、同一の畝サク延長線上に並んでいる。明らかにこの施設上に畝サクを設けており、旧状はとどめていない。2号同様、畝3条・サク2条分の幅である。北隅がわずかに窪んでいた。

形状 南北に長い楕円形。旧状は円形か。

規模 南北1.2m、東西0.9m

7号畑

上位段丘の北隅から下位段丘にかけての緩斜面に位置している。東側の6号畑との境には高い段差があり、両畑を隔てている。地形の制約による大区画の境界となろう。

畝サクは全体にあまり明瞭ではないが、端部は確実に把握できる。小さく蛇行する部分もある。下位段丘にあたる北側では泥流に引きずられた巨礫の圧痕が目立つ。畑の東西幅は南側で13mある。北側では22m以上あり、長いサクとなっている。南北幅は水平距離でも47m以上あり、畑区画北側限界の1号溝縁部にある7B号畑（第152図）まで本畑が続くなら、さらに14m以上長い本遺跡最大の60mを超える区画となる。

斜面側の南側は地山礫混じり層まで20cmの深さしかなく、浅い耕土中にも多量の礫が含まれていた。6号畑境の段差部分にはこの礫を投げ捨てたように、拳大の礫が集中していた。

北側では畝サクは不明瞭になり隣接する畑との境界は確認できないが、北側にある7B号畑は畝サクの規模・方向から、本畑に連続する畑の可能性もある。東側の6号畑との境の段差部分には斜面が張り出し、本畑には制約が多くなっている。段差下の本畑北側は下位段丘の平坦な面にあっている。西側の8号畑との境には溝があり、本畑側に50~80cmの隙間がある。大区画境となる可能性があるが、両側畑の畝サク方向は近似している。

本畑南側では畝サク上に、小穴状の窪みが数基、



第5章 V区の調査

畝サクと直行するように一列に並んでいる部分がある。畑境のようにも見えるのだが、畝サクに切れ目は見られず、北側に続く気配はない。

As-Aはサク内に見られるが、全体に薄く層圧は

最大でも10mmを越えない。南側を中心に一部で畝上でも確認できる。耕作土内にも僅かにAs-Aが見られるが、鋤き込まれるような中耕・サク寄せの痕跡は断面観察できた範囲では見られなかった。



第144図 V区7号畑

確認面積 858.0m<sup>2</sup>

A. L=482.0m

. A'

サク間 50~60cm 北側がやや狭くなる傾向あり。

サクの長さ 22.2m

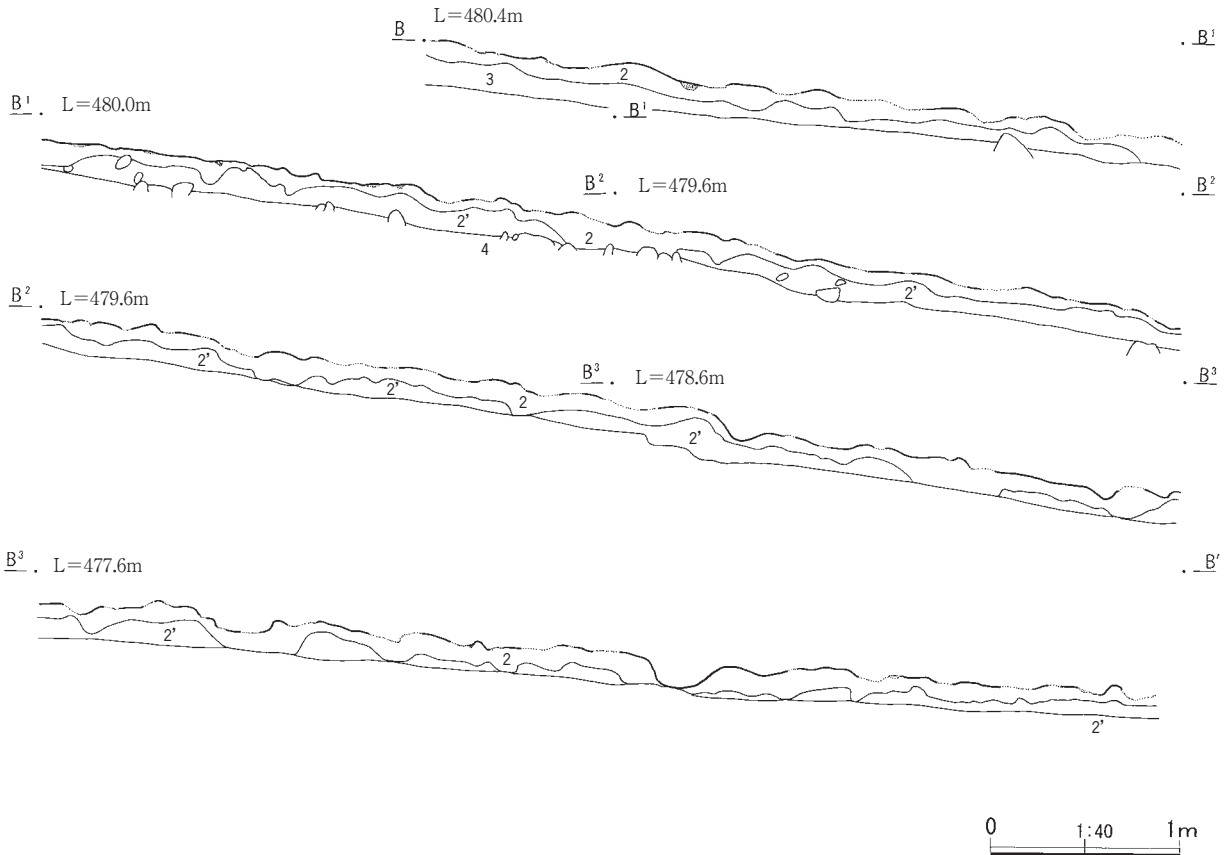
サク方向 N-60° E サクはおおよそ等高線に沿って  
 できられている。

畝サクの高さ 5 cm前後

地山傾斜 39/1000



- 1 基本土層Ⅱ層 天明泥流  
 ・ ドット部分はAs-A層。
- 2 基本土層Ⅳ層の耕作土。As-Aをほとんど含まない。2'に鉄分凝集が見られる部分あり。
- 3 基本土層Ⅵ層に相当すると思われる非粘性土層。
- 4 礫混じりのローム状土主体の層。



第145図 V区7号畑断面

8号畑

東西幅12.4mの幅狭な短冊形区画内の畑である。この区画は北隅の1号溝まで連続していると思われる。南側では残存状態は比較的良好だが、調査年度をまたいだ地点にあり一部で不明瞭になっている。中央付近ではきわめて不明瞭となる。泥流の影響の強い地点であるが、東西両隣の畑に比べても著しく畝サクの残存状態が悪いので、当初から不明瞭な地点であったと考えている。南側緩やかな斜面部分を8A畑・中央の平坦部分を8B畑と呼ぶことにする。また北隅の溝周辺の平坦部分では畝間のやや広い別の畑となるようである。サク8条分のわずかな範囲であるが、ここを8C畑と呼ぶ。



第146図 V区8・10号畑

各畑の境界は明確にできない。8号畑全体の南北幅は53m以上でAは17m以上、Bは約25m以上、Cは6.5m以上となる。

3枚の区画中最も残存状態は良い8A畑でも、サクの窪みがかろうじて把握できる程度である。As-Aはサク内にもみ部分的に薄く堆積していた。8B畑は僅かなサクの痕跡だけでAs-Aも見られない。東西に隣接する畑が畝サクを残していることと比べれば、泥流被災時には休耕に近い状況であったと考えたい。8Cは1号溝と7B号畑境界で囲われた平面三角形の地点でのみ確認できる畑である。耕作土には7号畑同様に礫が混じっていた。

東側に接する7号畑とは弱い窪みや隙間で画されている。西側の10号畑との境界にも7号溝が直線的に区切っている(第162図)。

確認面積 全体430.8m<sup>2</sup>

サク間 8A→45~55cm

南隅7m部分は35cm

8B→50cm

8C→70cm

サクの長さ 8A→5.3m以上

8C→3.1m以上

サク方向 N-58° E

畝サクの高さ 8Aで3cm前後

地山傾斜 /1000



10号畑

畑の東西幅は北側に向かって扇形に広がっており、南側で17m、北側で21mある。南北幅は28m以上ある。東に隣接する8号畑とは境木のある7号溝で直線的に区切られている。西に接する11号畑との境界には隙間があり、ここでは隙間中央に境木が50cmほどの狭い間隔に植えられていたようで、通路は確保できない。北側は6号溝で畝サク方向とは斜めに画されている。溝の際に通路になりそうな規則的な隙間は確認できない。反面、畝サクと溝の間に2m前後の間隔を生じた部分もあり、隙間なく耕地を作ろうとした意図も感じられない。

畝サクは比較的明瞭である。平面図上では南側で間隔が狭く見えるが、傾斜の強い部分での傾向で、斜距離では全体がほぼ等間隔となっている。畝サクの方向は東西両隣の畑と同方向である。As-Aはほとんど見られない。耕作土中に礫が多いのは、この付近の畑通有である。

確認面積 466.8m<sup>2</sup>

サク間 50cm前後

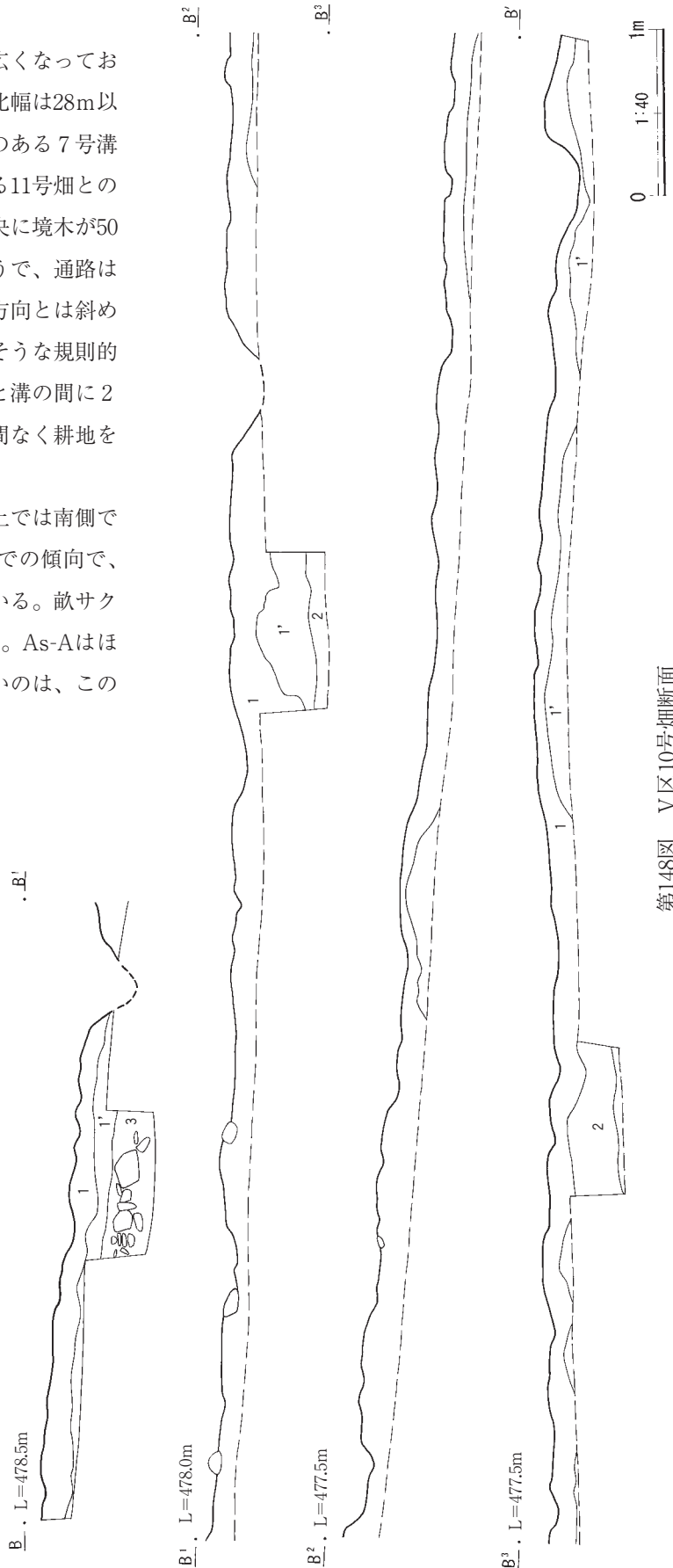
サクの長さ 18.6m

サク方向 N-56° E

畝サクの高さ 5cm前後

地山傾斜 35/1000

- 1 黒褐10YR3/2 基本土層V層。As-Aは掘き込まれていない。1'は黄色味おび、2層に近くなる。
- 2 基本土層V層に近い軽石や細礫混じりの層。
- 3 礫混じりのローム状土層。



第148図 V区10号畑断面

9号畑

泥流による攪乱の激しい地点にあるが、比較的明瞭なサクを確認できた。サクは南側中心に把握できるが、畝の高まりは不明瞭であった。6号畑北側の3号溝を隔てた位置にある。ここは東に向かって段差を生じる起点になる位置でもある。6号畑とサクの方向をほぼ同じだが、サク間は狭くなっている。東西幅12.6m以上、南北幅15m以上が確認できる。西側に隣接する7号畑との境には僅かな隙間がある。東側は調査年度の境界で調査できなかった部分に接する。As-Aはサク内でわずかに見られる部分が散見される程度である。

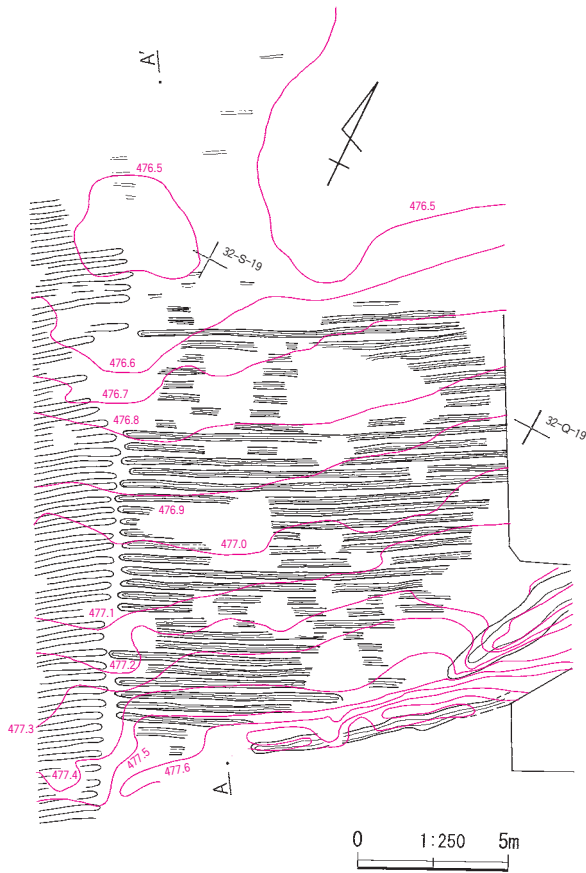
確認面積 198.4m<sup>2</sup>

サク間 50cm前後

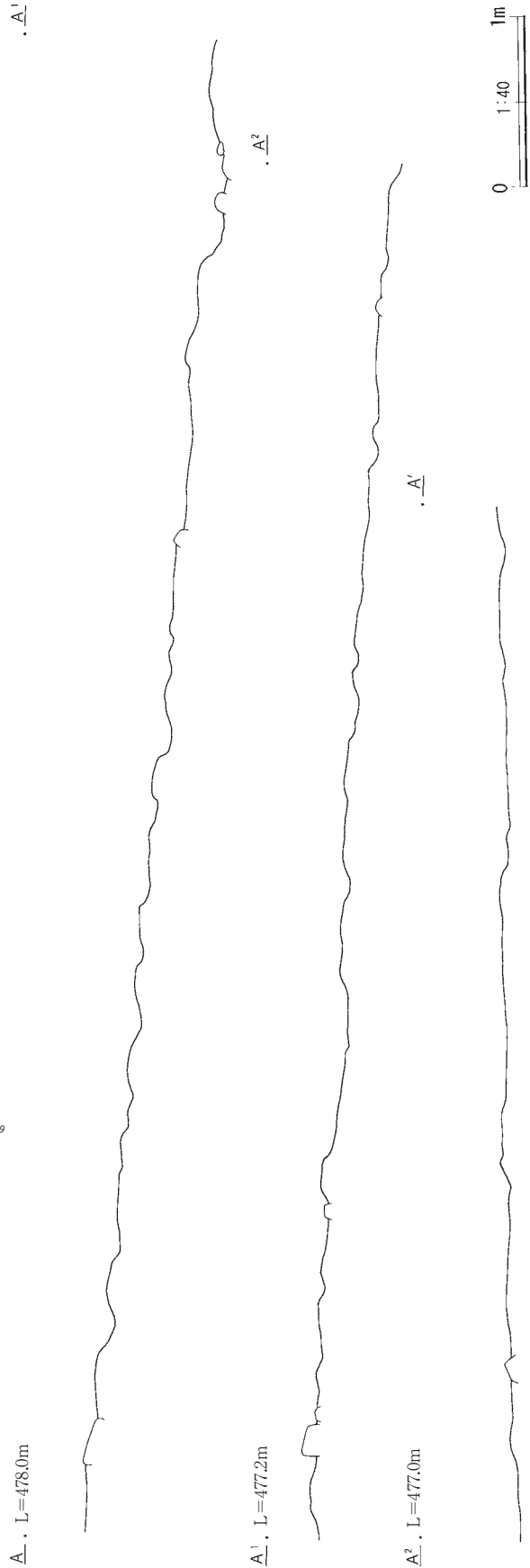
南隅に40cmほどの狭い部分あり

サクの長さ 12.6m サク方向 N-63° E

畝サクの高さ 8 cm前後 地山傾斜 66/1000



第149図 V区9号畑



11号畑

調査された西隅の畑である。この畑西側は吾妻溪谷の出口部分にあたり、上位・下位とも段丘のなくなる地点である。湧水は多く日当たりは悪い。遺跡全体の西隅畑と考えられる。

1基だけある円形平坦面が西側に偏った地点で確認されており、東西に分割できる畑である。東側の畑も、サクの残存状態に南北で著しく差があり、二分できるものと思われる。南東側を11A号畑、北東側を11B号畑、西側を11C号畑と呼ぶ。全体での東西幅は19.5m、南北幅は畝サクの確認できる11A号畑の範囲で11m、区画全域で17mになる。

畝サクの残存状態が良いのは11A号畑で、東隣の10号畑と類似した畑が続いている。11B号畑と11C号畑ではサク痕跡がわずかに確認できただけである。11C号畑はサク間が広いが北側はサク痕が見えなかった。この部分では耕作土もやや浅めになって

いた。恒常的に畑作が行われていた地点か判断できなかった。円形平坦面南東に接していたサクは、この1本のみ深さ5cmほどの窪みとなっており、サク以外の施設であった可能性もあろう。

As-Aはサク内わずかに確認できる程度で、ほとんど見られなかった。礫混じりの耕作土であったが、周辺の畑に比べると量はやや少ないようだ。

南側は調査区域外となる。北側と西側は道の側溝状の5・6号溝で鍵の手状に画されている。そしてこの区画の外には畑の痕跡は見られず、地山も西に向かって高くなり平坦さを欠いている。地表面の径1mを超えるような大きな礫もあり、畑地であった地点とは考えにくい。

確認面積 163.2m<sup>2</sup>

サク間 11A・B→45cm前後

11C→60cm



第150図 V区11号畑

サクの長さ 11A→10.8m  
 11C→6.8m  
 サク方向 11A→N-56° E  
 畝サクの高さ 11A→8 cm前後  
 地山傾斜 12/1000

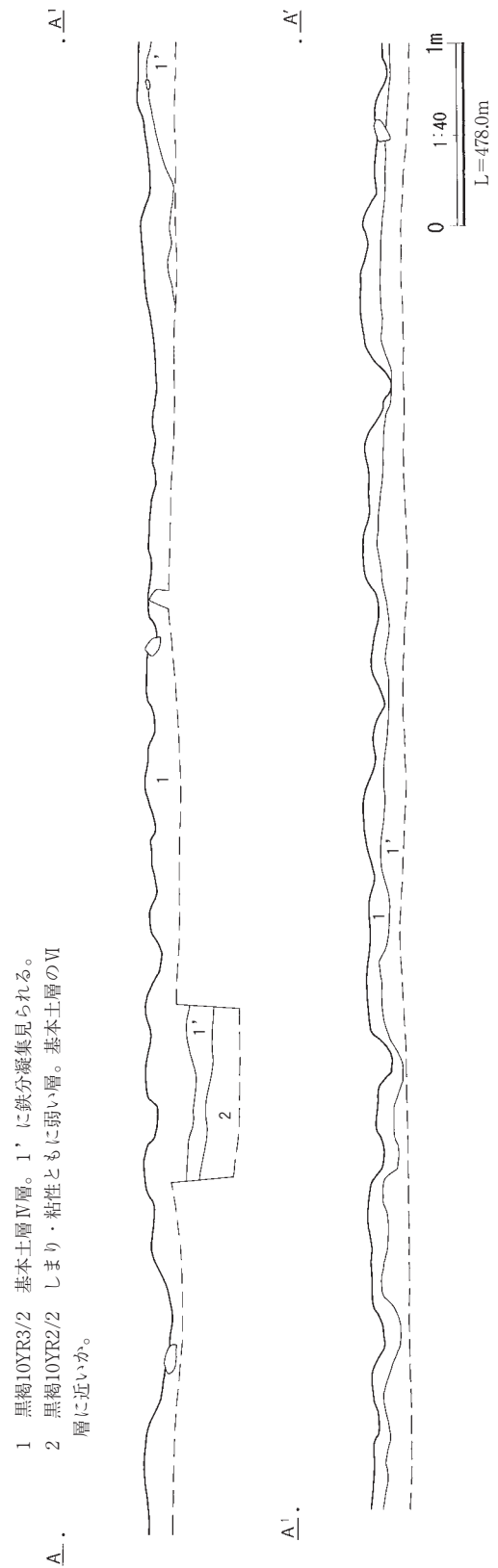
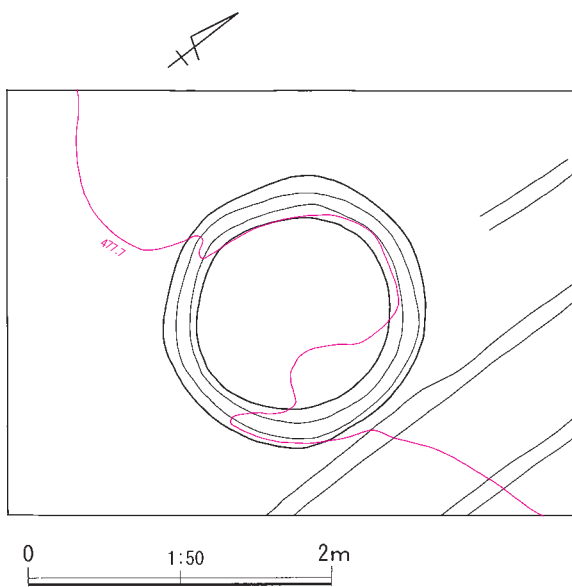
円形平坦面 残存状態の悪い11C号畑のサク痕北隅で1ヶ所のみ確認した。環状の溝が回るタイプである。もともと畑の痕跡の希薄な地点であるので、本施設周辺の畝サクのあり方については不明であるが、溝内側は周辺にくらべ凹凸が少ない。

畝サクが残らない畑内にあって、溝が残存する円形平坦面は、本遺跡では他に例のない施設である。

形状 円形

規模 東西2.15m×南北2.3m

窪み幅 25cm 深さ 2 cm



第151図 V区11号畑断面および平坦面



7B号畑

比較的残存状態の良かった7号畑が一旦不明瞭となり、北西隅の1号溝際で南北8mほどの範囲で再び畝サクが確認できた。7号畑に比べサク間がやや広く、別畑の可能性があったのでこの地点を7B号畑とした。

西側に隣接する8C畑とはサクの切れ間が確認でき、ここに境木が植えられていた。通路になるような隙間は確保できないであろう。北側は溝で画され、畝サクはこの溝の走行に沿って作られている。東側のサク痕跡はこの先再び希薄になるが、軸方向の近似したサク痕跡は20m近い範囲で散見できる。

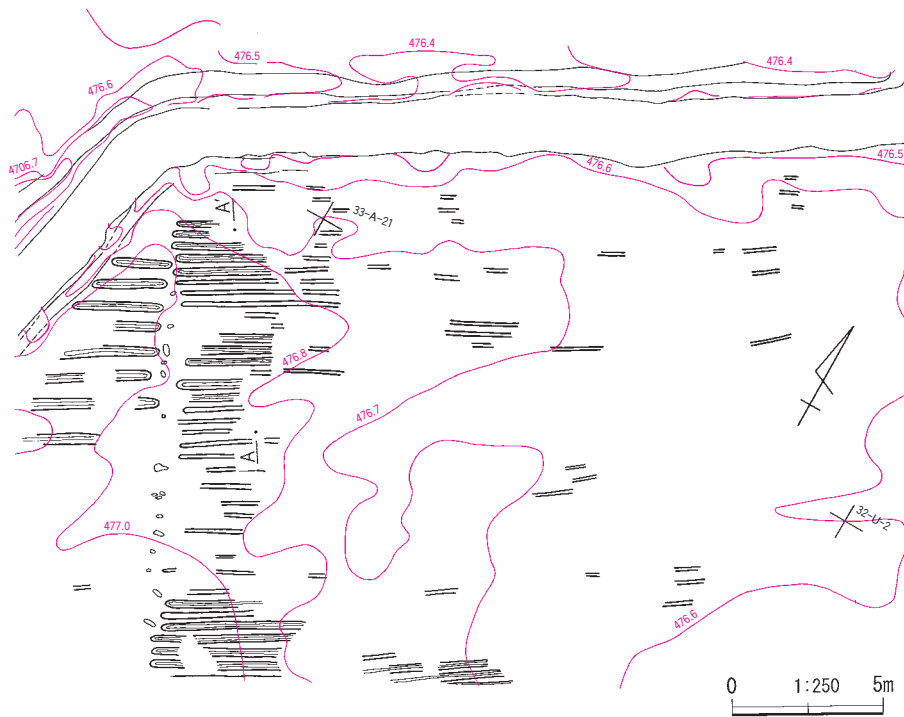
確認面積 494m<sup>2</sup> (全域)

サク間 45cm前後

サクの長さ 5.3m

サク方向 N-58° E

畝サクの高さ 最大2cm

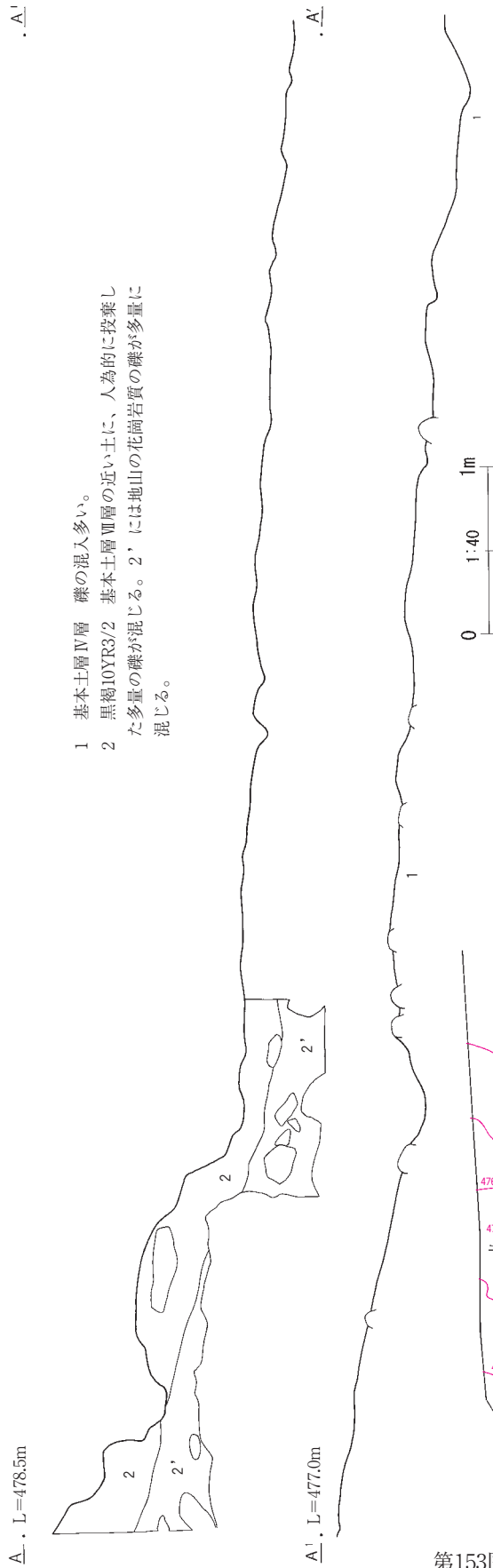


A., L=478.8m

- 1 基本土層IV層 やや灰色味をおびる。表層部分にAs-Aが乗る。1'に鉄分凝集あり。
- 2 礫の混じる黒褐色土層。基本土層Ⅵ層に近い。
- 3 ビット状の窪みを埋めた天明泥流層。



第152図 V区7B号畑



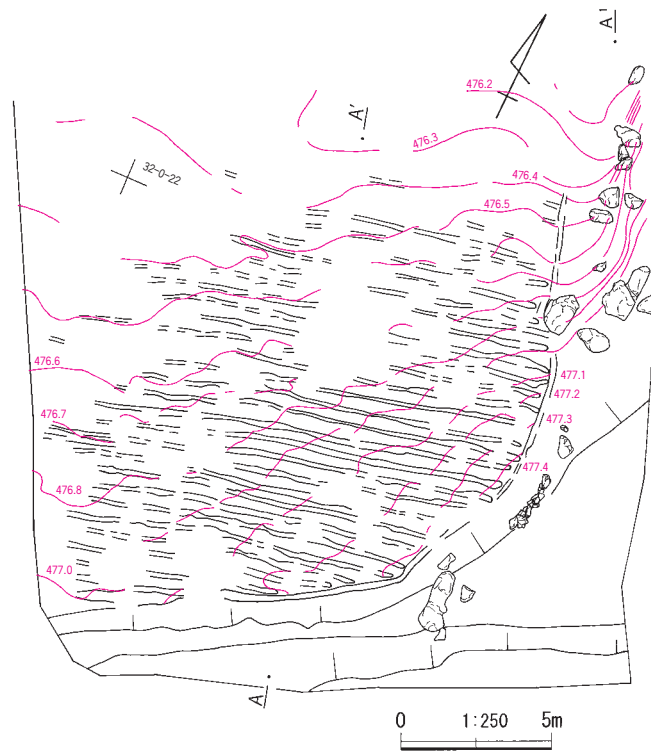
- 1 基本土層Ⅳ層 礫の混入多い。
- 2 黒縄10YR3/2 基本土層Ⅳ層の近い土に、人為的に投棄した多量の礫が混じる。2'には地山の花崗岩質の礫が多量に混じる。

13号畑

12号畑の北側で、上位段丘と下位段丘とを隔てる斜面を挟んだ地点にある。東側も礫の多い斜面に接している。耕作土は浅いうえ、礫混じり層までの深度は少なく、畑としての立地は悪い。

南北14m、東西16mの範囲で確認されたAs-Aの混入するサク痕跡のみの不明瞭な畑である。サクは小さく蛇行し、直線的でない。As-A降下後に中耕された畑が、このような痕跡を残すと推定している。本畑の北側にも畑が広がっていたはずだが、泥流に削平されて全く残存していない。南東側の斜面に泥流がぶつかり堆積が早く、本畑周辺は削平が少なかつたため残存した畑跡と考えられる。地山傾斜は北西側に向かって下がっているが、サクは周辺の畑に合わせるように、等高線に斜行するように切られている。

確認面積 182.5m<sup>2</sup>  
 サク間 50cm前後  
 サクの長さ 13.5m  
 サク方向 N-78° E



第153図 V区13号畑

14号畑

トレンチ状の調査区からAs-A混じりのサクの跡のみ確認できた畑である。僅かな痕跡のみの畑だが、1号溝の南側全面に畑が作られたことを示す資料である。13号畑同様に、As-A降下後に中耕された畑の痕跡と推定できる。湧水が激しい上、泥流による削平も強く、残存状態はきわめて悪かった。

Ⅳ区に見られた南北に長い短冊上の区画があるなら、本畑は13号畑から20m近く離れているが、連続する区画内の畑となる。しかしサクの方向が13号畑とは異なり、同一畑とは考えにくい。また、13号畑と14号畑の間に境木であった可能性のある倒木列があり、2つの畑の間に境があったと想定している。

約15m離れた2地点でサク跡が見られた。サクの方向は1号溝に沿っているが、東側の地点ではサク方向が異なる部分があり、二枚の畑の可能性があり。

北側は1号溝で画されている。7～10号畑など1号溝縁辺で部分的に畝サクが明瞭に残る畑が西側で見られたが、本畑では認められない。また1号溝北側にも畑の痕跡は見られない。

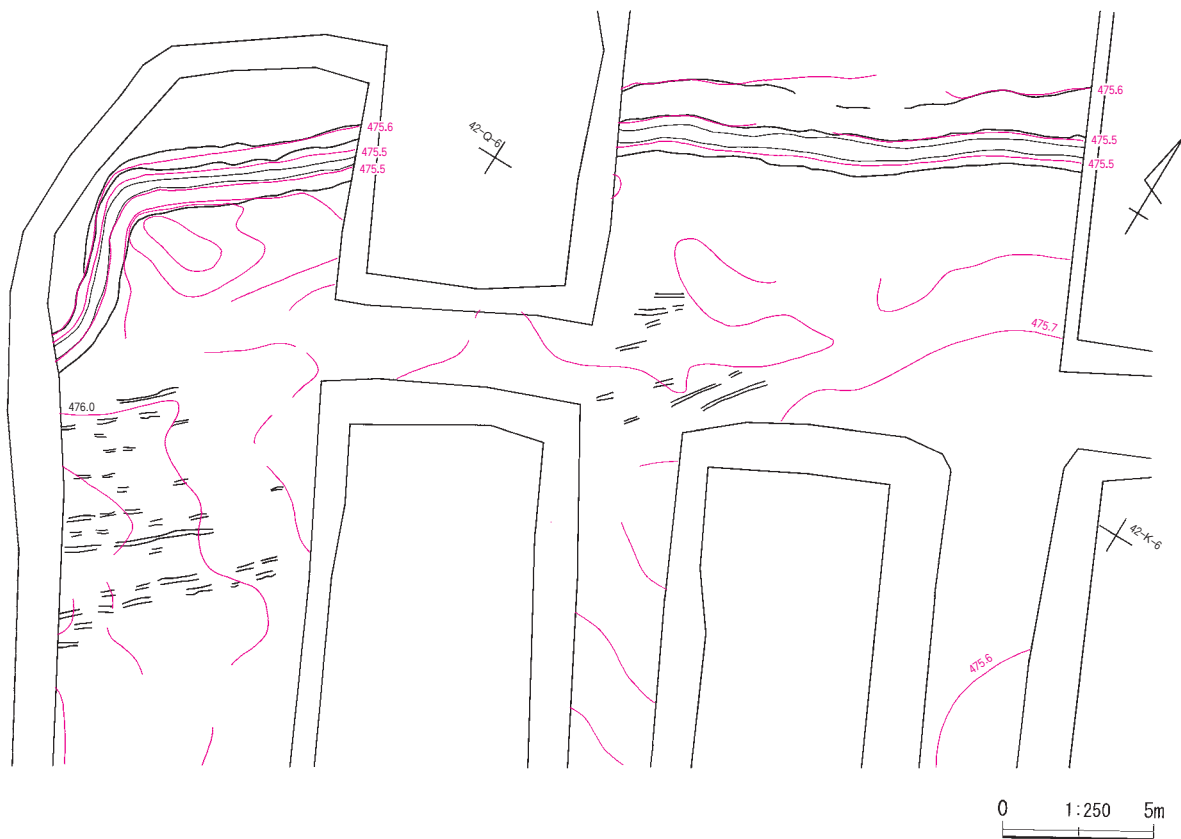
確認面積 西側約45m<sup>2</sup> 東側約20m<sup>2</sup>

サク間 西側50cm前後

サクの長さ 西側3.1m 東側2.2m

サク方向 西側N-51° E

東側はこれにN-33° Eが加わる



第154図 V区14号畑

## 2 溝と道

V区1面では7条の溝を扱った。IV区に比べ狭い範囲に数が多いのが特徴である。IV区同様畑脇に見られるわずかな窪み等は含めていない。

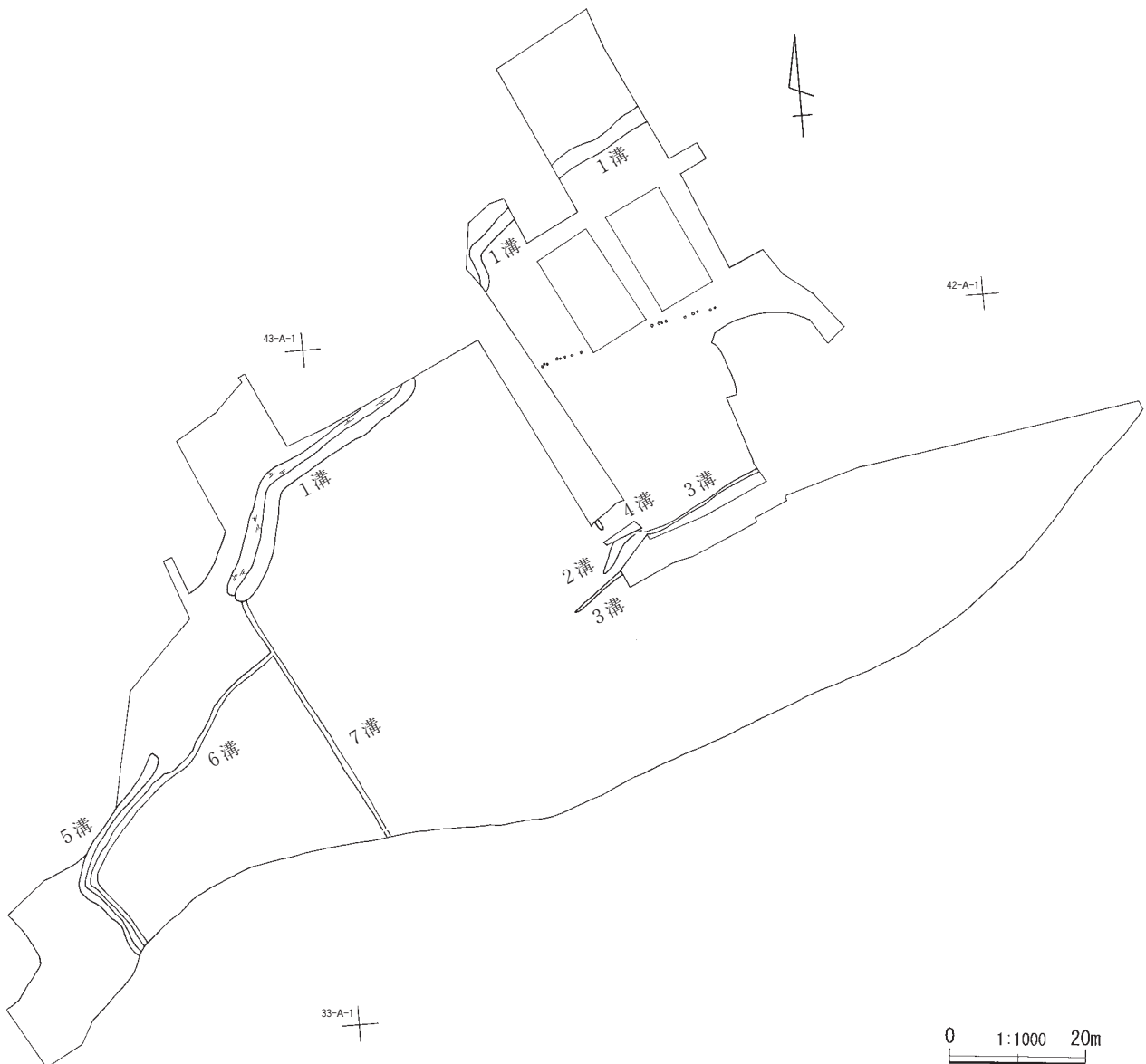
明らかに道と分かる施設は確認できていない。1号溝北西脇の高まりや、5・6号溝の周辺にある高まりは、IV区1号道から繋がる道の可能性がある。

各遺構は年度をまたいだ異なる調査区にあたるものが多く、継ぎはぎの図面となったものもある。

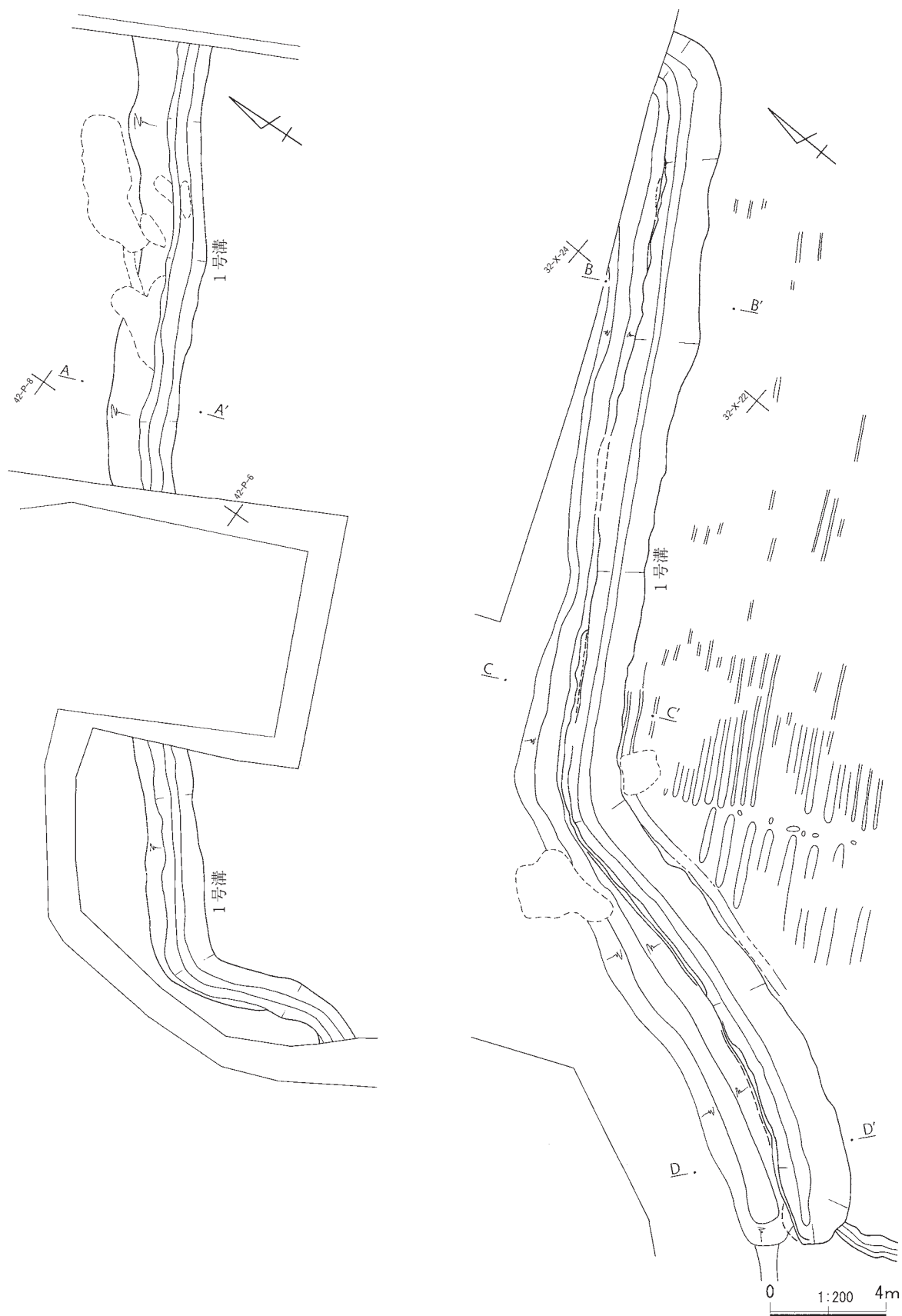
### 1号溝

未調査部分を挟んで確認できていない部分を含むが、32区から33区にかけて繋がる、IV区で最も長い溝である。2007年度の調査ではさらに北東側へ延びることが確認されている。途中で屈曲を繰り返すのは、IV区1号溝に類似している。全体では吾妻川に沿うように北西方向へ開鑿されている。

33区西隅から32区W-24グリッド周辺にかけては長さ40mにわたって溝北側に道状の高まりが確認されている。残存状態の悪い地点にあるが、この溝を挟んで南側では畑が確認されているが、道北側では



第155図 V区溝配置図



第156図 V区1号溝

遺構は見つかっていない。

IV区で見られたように、畑地と吾妻川縁の林を区切る溝となりそうである。屈曲は長方形の畑区画を作りやすくするために、根が畑地に延びるのを防ぐため深さを伴うものであろう。溝底は西側へ向かうほどレベルを上げており、排水機能も有していた。また7号溝が本溝へ繋がり、途中の排水を集める役目も有した多機能の施設であることがわかる。ただし埋没土最下層にはAs-Aが含まれた地点もあり、多量の水が常時流れていたものではない。

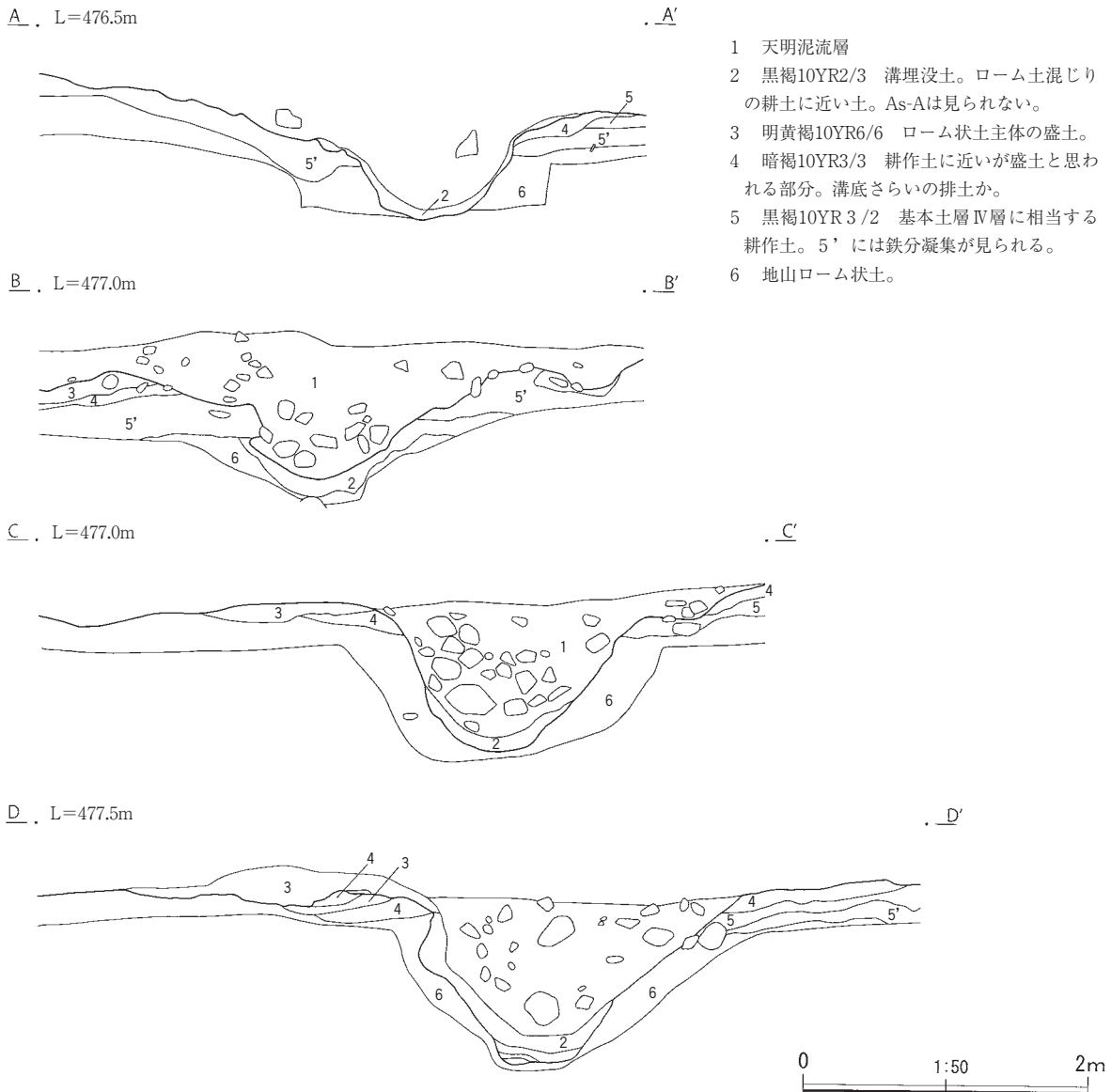
本溝南西側延長部分には5号溝・6号溝があるが、規模は小さくなっている。

軸方向 N-58° E (X-23グリッド付近)

全長 95m以上

幅 西側2m前後 東側1.2m前後

深さ 70~110cm



第157図 V区1号溝断面

2号溝

2004年度調査範囲の東隅で一部が見つかり、北東側へ若干拡張して調査したが全容は不明である。上位段丘の裾部分を廻るように北東側へ向かって延びると思われるが、先につながる遺構は見つかっていない。この地点周辺にのみ見られる掘り込みか、本溝南側にある3号溝に含まれる施設かもしれない。溝北西側には倒れた木の列があり、境木があったと思われる。周辺には他に境木は見られない。調査範

囲では底面レベルはほぼ水平になっていた。また、As-Aが底面付近にやや厚く堆積していた。

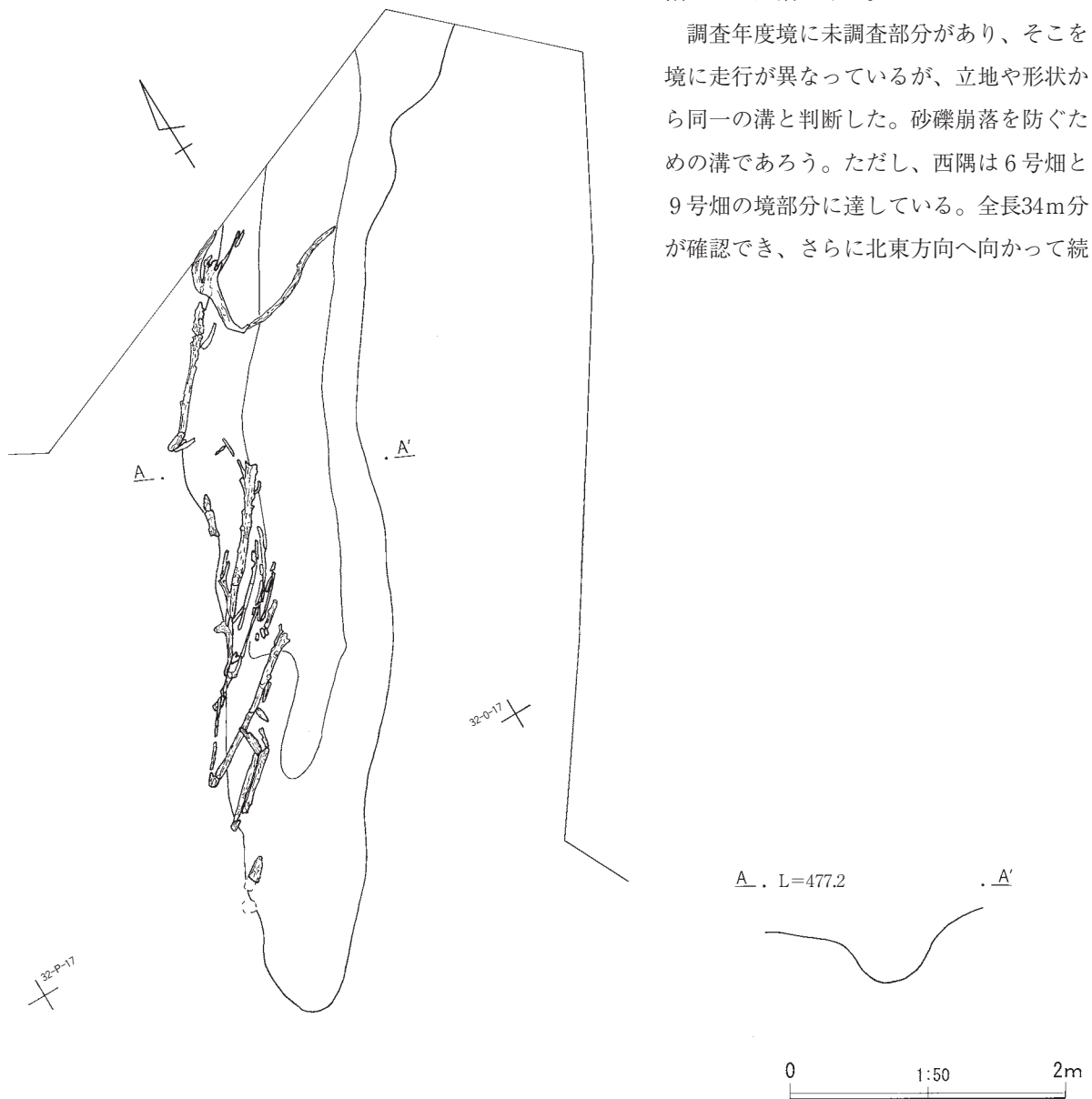
位置 32区O-17グリッド

全長 6.8m 幅 1.3m前後 深さ 45cm

3号溝

上位段丘が舌状に北側へ向かって張り出すIV区とV区の境にある。段差の基点となるE-16グリッド付近から北東方向に向かって、段丘裾部直上付近の礫の多い斜面に掘られた空堀である。

調査年度境に未調査部分があり、そこを境に走行が異なっているが、立地や形状から同一の溝と判断した。砂礫崩落を防ぐための溝であろう。ただし、西隅は6号畑と9号畑の境部分に達している。全長34m分が確認でき、さらに北東方向へ向かって続



第158図 V区2号溝

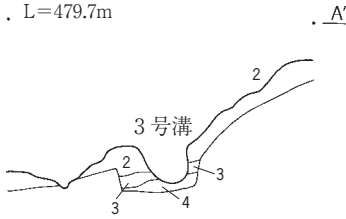
いているが、2006年度の調査地点（18-6区）ではこの溝の続きは確認できていない。

軸方向 N-51° E

全長 34m

幅 明瞭な部分は80cmほどだが、緩やかな傾斜部分  
は1.5m以上ある。

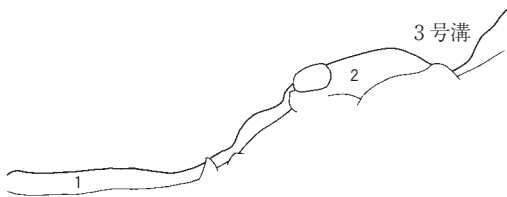
A . L=479.7m



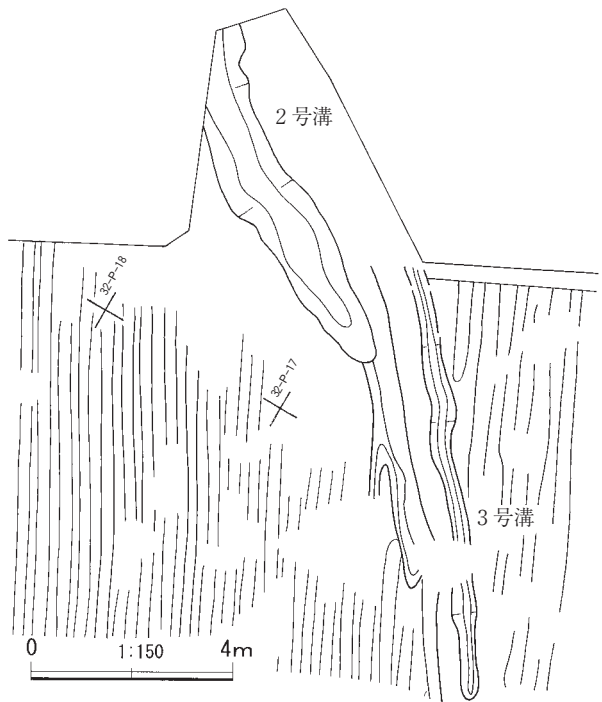
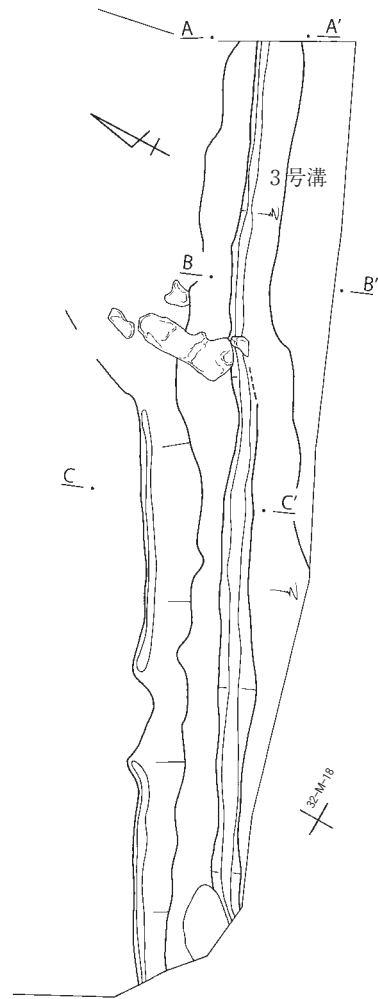
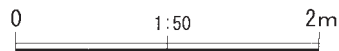
B . L=479.5m



C . L=478.7m



- 1 基本土層Ⅳ層に相当する耕作土。やや灰色味をおびる。
- 2 細礫混じりの黒褐色土。基本土層Ⅶ層に近い土か。
- 3 ローム土への漸移層。礫の混入多い。
- 4 ローム状土。



第159図 V区3号溝



4号溝

調査年度境界の未調査部分に向かうようにして掘り込みが始まり、南隅長さ1.6m部分のみ確認できた遺構である。

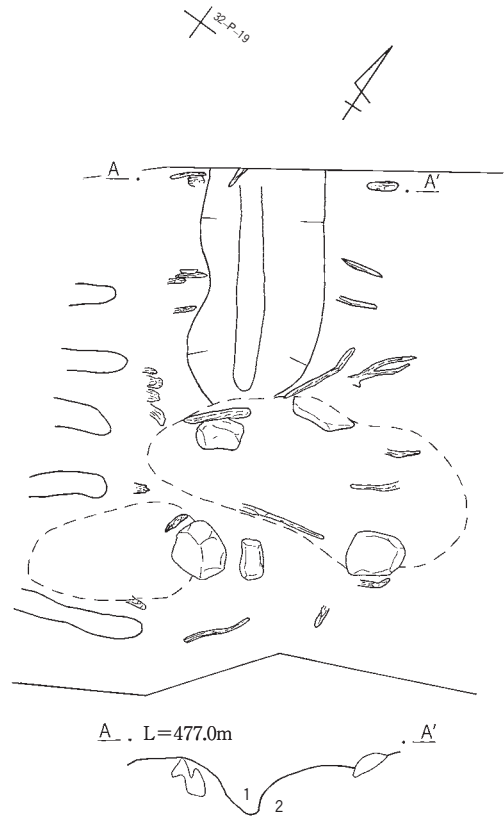
後述する7号溝の東側25mの位置に平行するように並び、9号畑の東端を画す溝と思われる。境木が脇に植えられている点も7号溝と共通するが、深さは本溝ははるかに深く、形状は異なっている。畑大区画を区切る溝であれば、IV区では道が中心で脇に細い溝が並んでいたが、V区では溝が優先している点が相違する。下位段丘の狭いV区では湧水が顕著で、畑内に排水溝が多く作られたと考えている。本溝はこのまま北西方向で1号溝屈曲部分に繋がり、水をここへ落とししたと想定される

位置 32区O-18グリッド

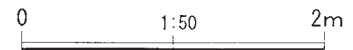
全長 1.6m

幅 80cm

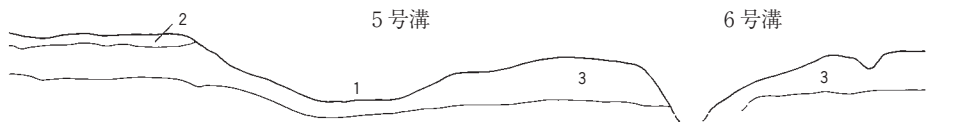
深さ 35cm



- 1 天明泥流層
- 2 基本土層IV層の黒褐色耕作土層。灰色味をおびる。



B . L=478.0m



- 1 天明泥流層
- 2 黒褐10YR3/2 基本土層IV層。踏み固められたようにしまり強い。ローム粒混じる。
- 3 土質は2に近いが、鉄分凝集あり。しまり強い。



第160図 V区4・5・6号溝

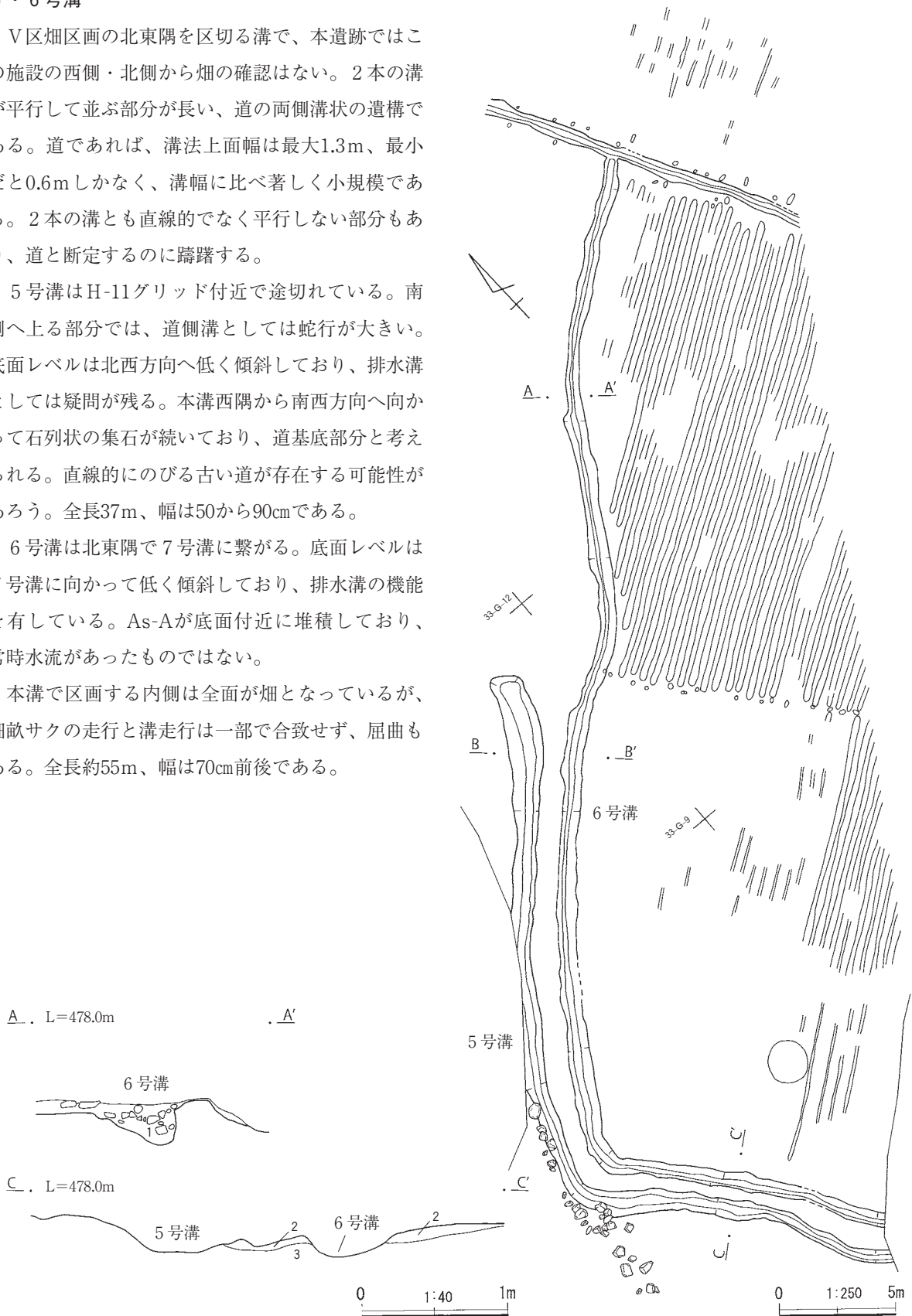
5・6号溝

V区畑区画の北東隅を区切る溝で、本遺跡ではこの施設の西側・北側から畑の確認はない。2本の溝が平行して並ぶ部分が多い、道の両側溝状の遺構である。道であれば、溝法上面幅は最大1.3m、最小だと0.6mしかなく、溝幅に比べ著しく小規模である。2本の溝とも直線的でなく平行しない部分もあり、道と断定するのに躊躇する。

5号溝はH-11グリッド付近で途切れている。南側へ上る部分では、道側溝としては蛇行が大きい。底面レベルは北西方向へ低く傾斜しており、排水溝としては疑問が残る。本溝西隅から南西方向へ向かって石列状の集石が続いており、道基底部分と考えられる。直線的にのびる古い道が存在する可能性がある。全長37m、幅は50から90cmである。

6号溝は北東隅で7号溝に繋がる。底面レベルは7号溝に向かって低く傾斜しており、排水溝の機能を有している。As-Aが底面付近に堆積しており、常時水流があったものではない。

本溝で区画する内側は全面が畑となっているが、畑畝サクの走行と溝走行は一部で合致せず、屈曲もある。全長約55m、幅は70cm前後である。

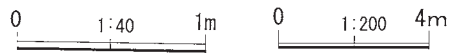
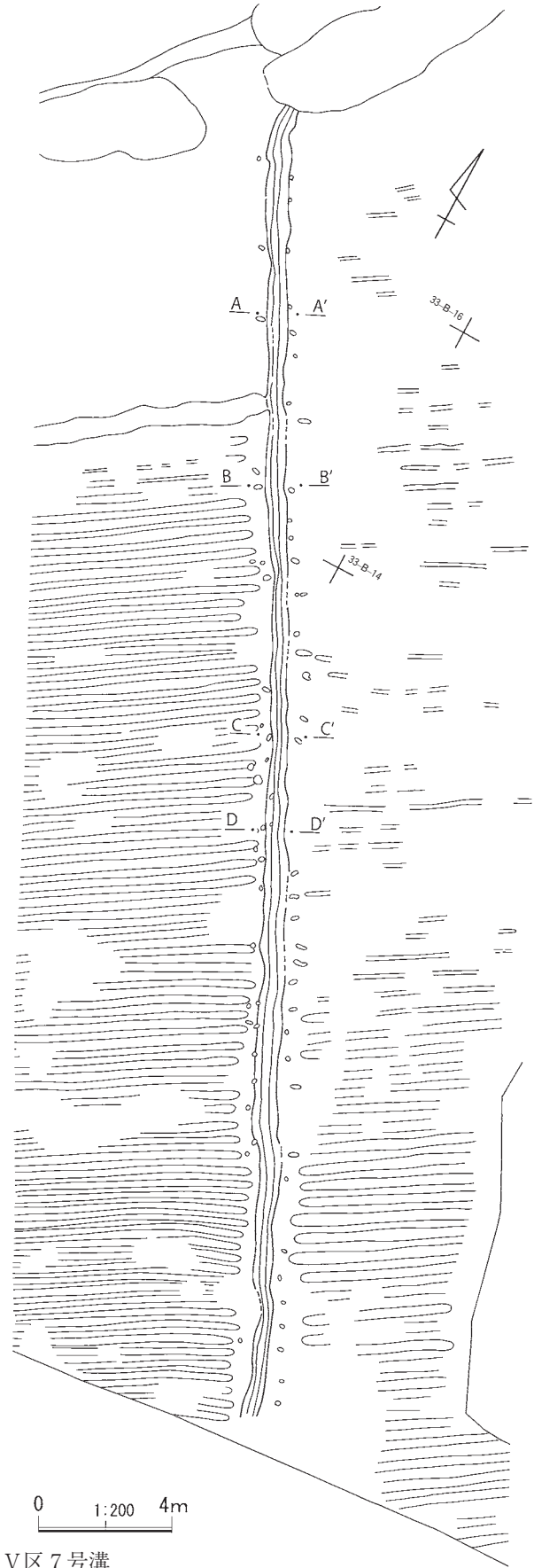
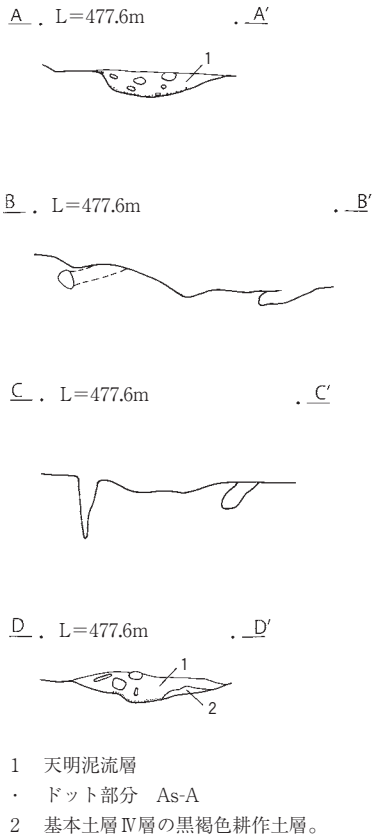


第161図 V区5・6号溝

7号溝

8号畑と10号畑の間に掘り込まれた直線的な区画溝である。畑畝サクとほぼ直行する走行である。溝の両側に短い間隔で境木を設けており、畑畝サクとの隙間もごく狭い。溝上を歩かないと通路部分がないが、境木の枝を徹底的に払わない限り、これも難しそうである。北西隅で1号溝に合流させるため小さく北側へ屈曲しており、排水のための改良が見られる。

本溝の深さは10~20cmほどしかなく、通路と排水路を兼ねた施設を想定したが、前述のように隙間が狭いこと、溝部分に敷石がないことから溝機能を優先する施設と考えたい。走行方向N-29° W、全長39m、幅は60cm前後である。



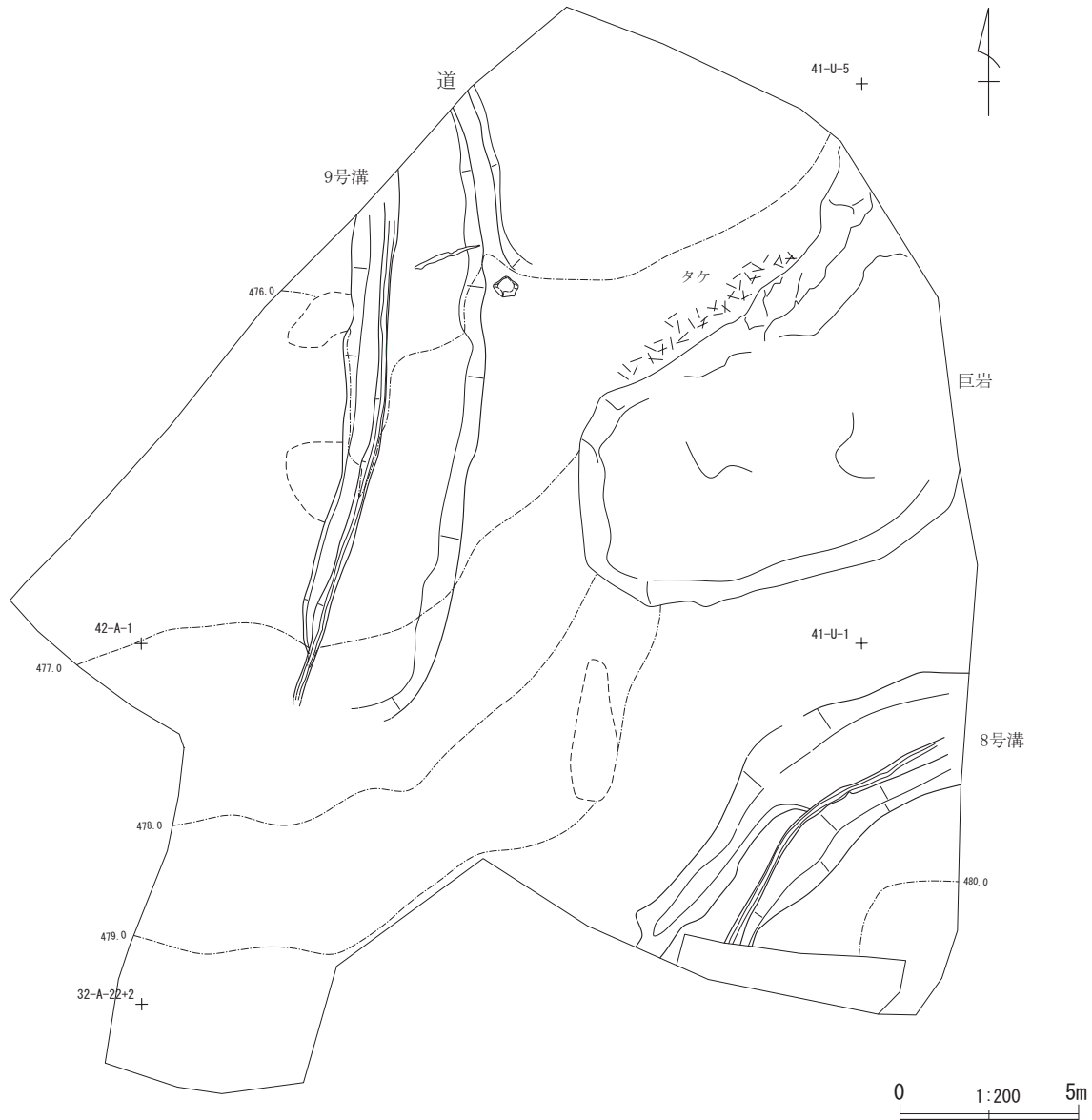
第162図 V区7号溝

8・9号溝と道

V区の東隅、18年度調査地点の6区と呼んだ部分は上位段丘が北側へ舌状に張り出した部分の西側にあたり、急傾斜で下位段丘へ下る地点である。

上位段丘部分には傾斜変換点付近に、深い溝が切っており、As-Aが堆積していた。8号溝と名付けたが、底面レベルは波打つように凹凸があり、水路とは考えられない。根切りの目的と思われ、上面には畑地が広がるのが想定されよう。下位段丘へ3m近く下る急斜面は拳大サイズの礫が多く、上面から投げ捨てられたような状態であった。

下位段丘部分は湧水の激しい地点である。泥流で押し流された樹木の他、路頭の巨岩下には押し流された細かなタケが多量に見られた。倒木痕はなく、付近は藪のような状態だったと思われる。等高線に直交するように溝が切れ、東側に溝を掘った際の土砂を盛ったような通路部分が確認されている。9号溝と名付けたが、この続きは平成19年度の調査で確認されており、次回刊行分で詳細な報告をしたい。



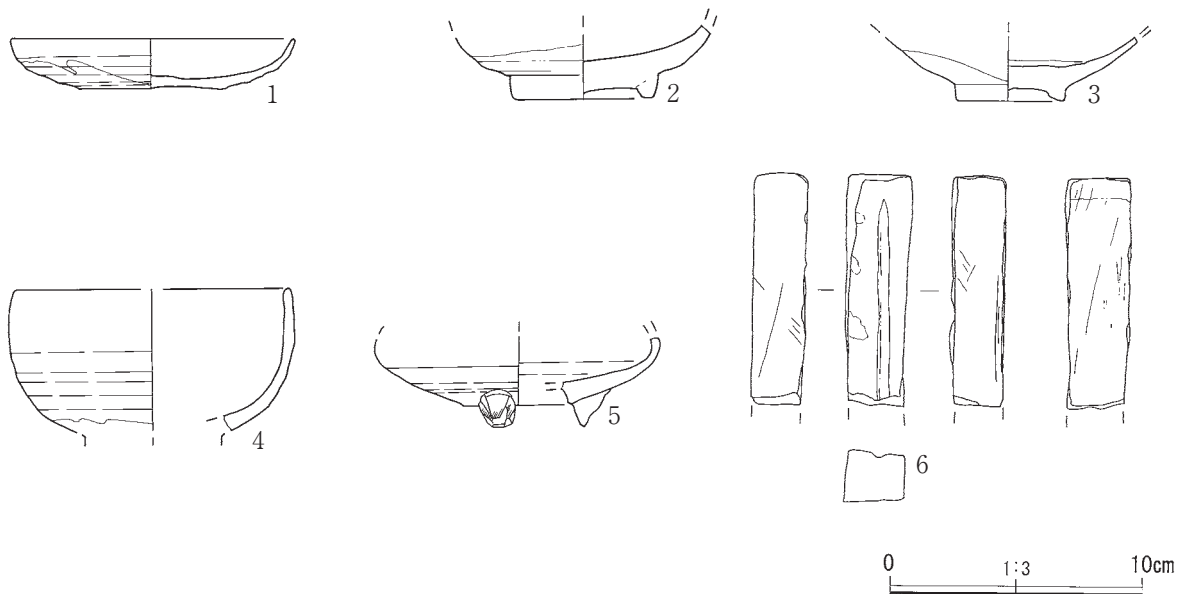
第163図 V区8・9号溝

### 3 V区遺構外の遺物

V区はIV区に比べ半分以下の調査面積であるが、第1面の出土遺物はそれ以上に少なかった。陶磁器類は5点を図示したが、小破片中心であった。かわらけや焙烙など素焼きの製品がほとんどないのはIV区と同じ傾向である。砥石(6)は1面に溝状の窪みがあり、玉砥石としても使用した可能性がある。

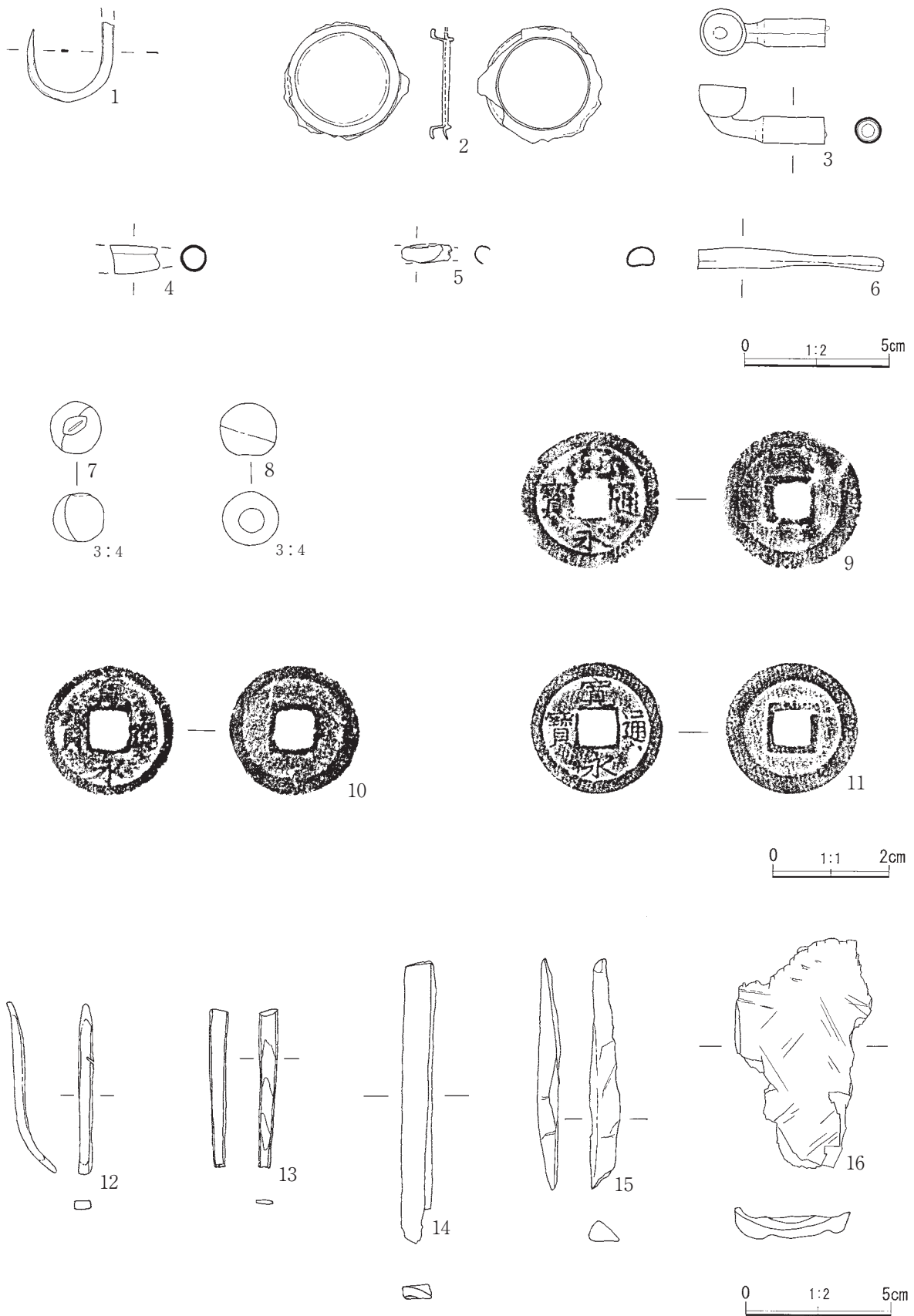
特徴的な遺物として金属製品を11点図示した。煙管(165図3～6)が4点ある。金属製品の中で煙管が多いのは、これもIV区と同じ傾向であるが、残存状態は悪かった。3点の古銭(9～11)はいずれも寛永通宝であり、遺跡全体の出土傾向と変わっていない。鉄砲玉(7・8)が2点出土しており、遺跡全体の半数を占めていた。2点とも発砲痕が顕著である。

遺物出土傾向はこの付近が居住域から離れていた状況を示すものと考えているが、2の襖引き手金具のように例外的な出土遺物がある。



第164図 V区遺構外遺物(1)

第1節 第1面の調査



第165図 V区遺構外遺物(2)

## 第2節 第2・3面の調査

### 4 掘立柱建物

32区を中心に42区にかけて6棟の掘立柱建物を調査した。このうち5棟が32区にあり、4棟は重複こそなかったが集中して見つかった。周辺は馬の背状の小さな高まりで、東側に向かって低く緩やかに傾斜している。付近には建物に結びつかなかった小ピットが数基、確認されている。

ここではⅢ区で見つかったような大型建物がなく、井戸・厠などの関連施設も見つかっていない。また、焼土・灰などの集中地点や遺物出土もない。これらの建物が居住用の施設かは不明である。天明三年の泥流直下には居住域ではなくなっている。反面、平安時代の竪穴住居が見つかった地点には近接しており、居住環境の備った位置であることは推測できる。

建物および柱穴状の施設については、天明泥流面には全く痕跡がなく、畑工作土を除去した第2面の調査時に確認できた遺構である。

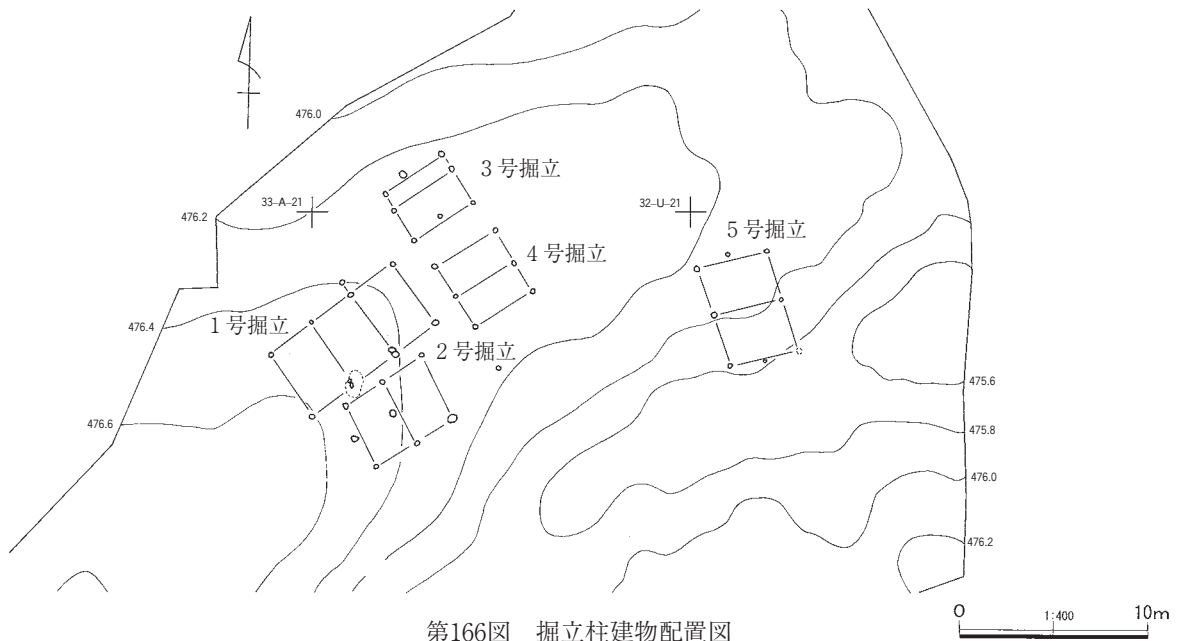
出土遺物から時期決定を行う資料は得られていない。層位的には、天明三年畑の耕作土下、八ツ場ダム関連の発掘調査担当者が通常中世面（第2面）と呼んでいる土層から確認されている。この面は近世

まで含まれるもので、中世に限定することはできない。調査した地点では古代の層位が不明確な地点であり、2号掘立柱建物からは平安時代土師器片が出土しているが、建物の構造から古代の遺構とは考えにくい。他方で近世の遺物が少なく、居住に関連する遺構がないことから、本遺跡の建物群に対し、中世を中心とした時期を想定したのは妥当と考える。

#### 1号掘立柱建物

4棟の建物が集中して見つかった地点にあり、4棟中最大の規模がある。P1～P8の8本の柱穴から1間×3間の南東側を向いた細長い建物を想定した。柱間が南北・東西の両方向とも規則的である。

地山は東側へ低く緩やかに傾斜していたが、P5・P7・P8の地山の高い位置にある北西側3本の柱穴が浅く不明瞭である。最も深さのあるP6が、建物配置から最も逸れている。断面を記録した柱穴のなかに、明らかな柱痕や抜柱の痕跡もなかった。掘立柱建物としては不明瞭な部分も多い。P9・P10の2基が建替えとも考えられる北西にずれた位置にあるが、他の柱穴にはそのような痕跡はない。P9はP2に先行すると思われる。P11はP7の50cm北西側で庇とも考えられる位置にあるが、関連するような他の柱穴は見つかっていない。本建物に伴う



第166図 掘立柱建物配置図

施設であるか判断できなかった。

位置 32区Y-19グリッド

規模 梁行3.85m 桁行8.1m。柱間は南東側芯芯距離で2.7m。

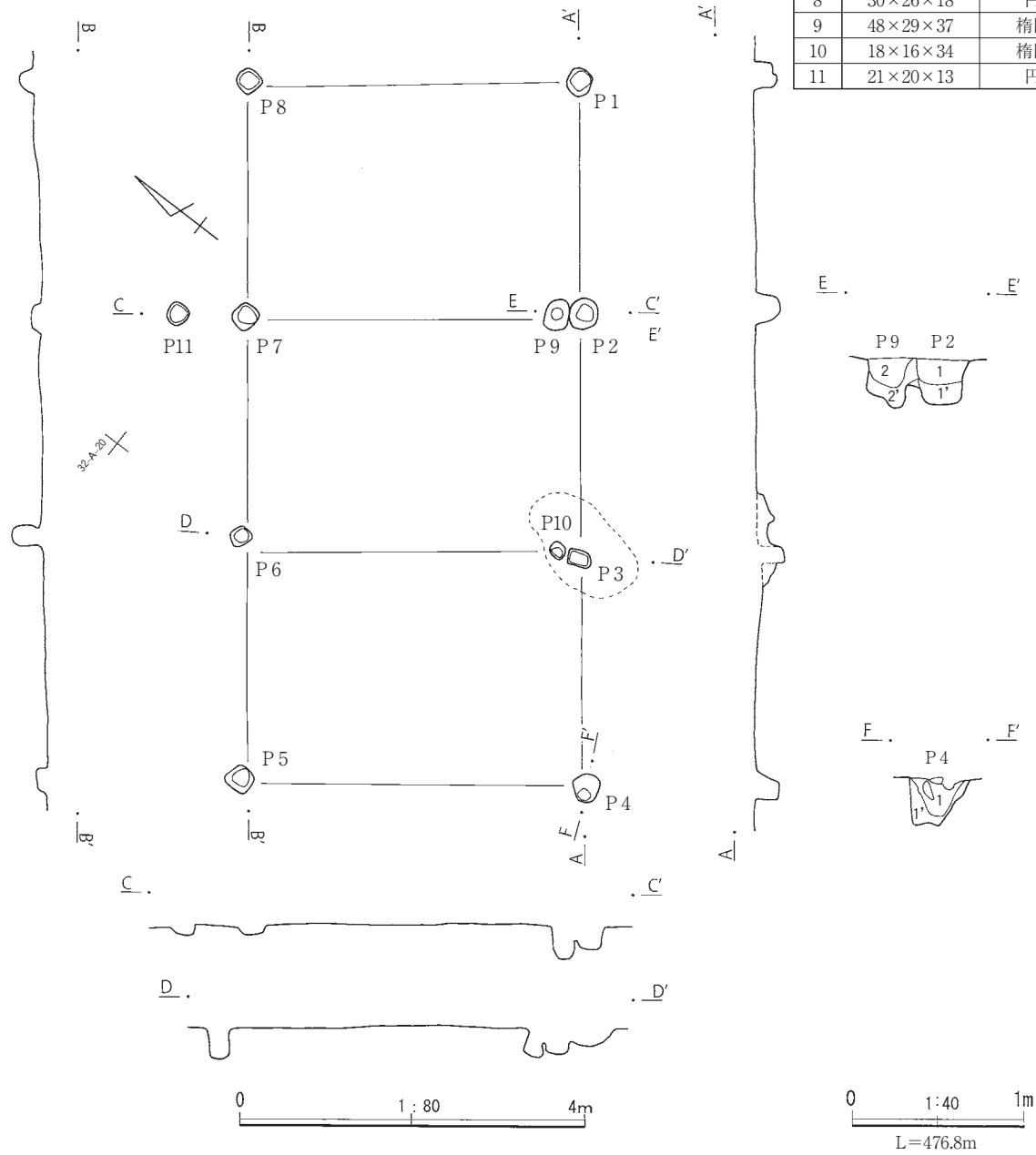
軸方向 N-35° W (南東に面する場合の梁方向)

柱穴 建物を構築する8本の柱穴は、平面形はほぼ円形状で、径30cm前後、深さはP6以外は30cm未満で小規模である。他に3本のピットが隣接しているが、形状も近似している。

- 1 黒褐 10YR3/2 ローム状土混じりのしまりある層。炭化物粒散見。基本土層IV層に近い。1'は炭化物粒少なく、ローム状土多い。
- 2 1層に土質似るが、混入物少ない。2'では混入物さらに少ないが、黄色味増す。

1号掘立柱建物 柱穴計測表

No	長×短×深(cm)	形状
1	30×28×26	円形
2	38×18×31	円形
3	27×18×(13)	長方形
4	33×24×24	円形
5	32×29×14	台形
6	23×20×36	円形
7	30×32×12	円形
8	30×26×18	円形
9	48×29×37	楕円形
10	18×16×34	楕円形
11	21×20×13	円形



第167図 1号掘立柱建物



2号掘立柱建物

1号掘立柱建物の南東側柱列から40cmに隣接する1間×2間の建物を想定した。1号掘立柱建物に比べ、やや南側を向いている。柱間は北東側が広く、平面台形状を呈した不明瞭な建物である。P7とP8は比較的しっかりしたピットであるが配置から揃って南西側へ逸れた位置にあり、本建物に伴うものか判別できなかった。土層断面観察から柱痕を確認できた柱穴はないが、P1は底面中央がやや窪み、柱痕状にも見える。

地山は東側へ低く緩やかに傾斜していたが、柱穴は地山の高い北西側の方が浅く、1号掘立柱建物と同様であった。

位置 32区Y-18グリッド

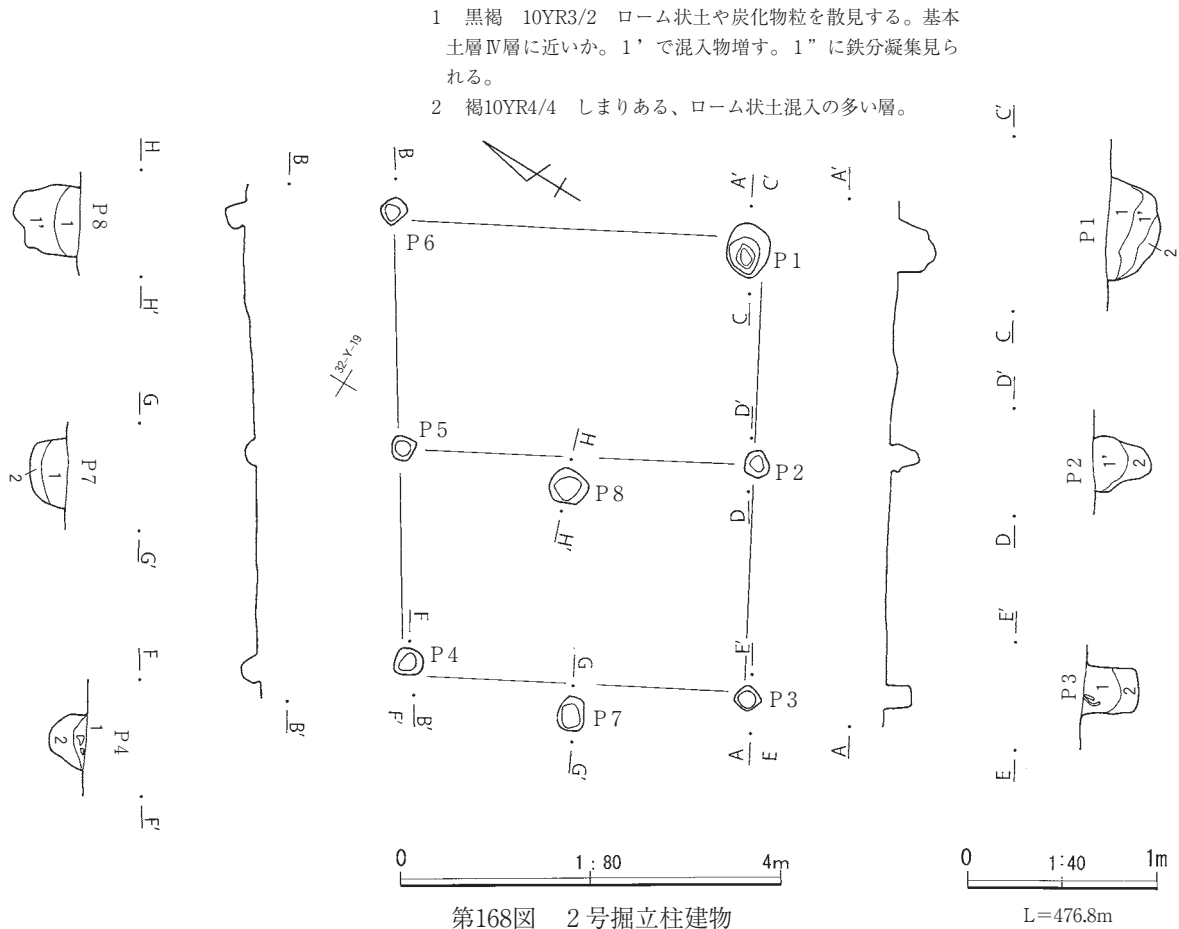
軸方向 N-30° W (南東に面する場合の梁方向)

規模 梁行3.6m (南西側)・3.9m (北東側)、桁行4.8m。桁方向柱間芯距離で2.2~2.4m。

柱穴 建物区画を構成する6本の柱穴のうち、P2・P6など柱穴的な断面形状を持つものがあるが、他は平底気味で土坑のような施設だった。P3上面から土師器の出土があった。

2号掘立柱建物 柱穴計測表

No	長×短×深 (cm)	形状	備考
1	54 × 42 × 36	円形	底面中央わずかに窪む。
2	29 × 26 × 31	円形	
3	25 × 23 × 30	円形	
4	30 × 30 × 19	楕円形	
5	28 × 23 × 11	円形	浅く不明瞭。
6	27 × 24 × 20	円形	
7	38 × 28 × 39	楕円形	
8	40 × 36 × 23	円形	



3号掘立柱建物

密集する4軒の建物のうち、最も北に位置している。北西側に庇をもつような平面形状の建物を想定した。柱間は規則的である。庇に相当する部分のP5・P6が他の柱穴より深くなっている。庇のある1間×1間の建物としたが、変則的な2間の建物かもしれない。周辺には庇を持つ建物も1間×1間の建物も確認できていない。桁方向をどちらにとるか、根拠がもてなかった。

埋没土の観察から柱痕を確認できるものはなかった。P1は底面に柱痕の可能性のある窪みがわずかに観察できた。P7は建物区画内、P8は庇側に接するような位置にあるが、配置から本建物と直接関連する遺構とは考えにくい。

位置 32区X-21グリッド

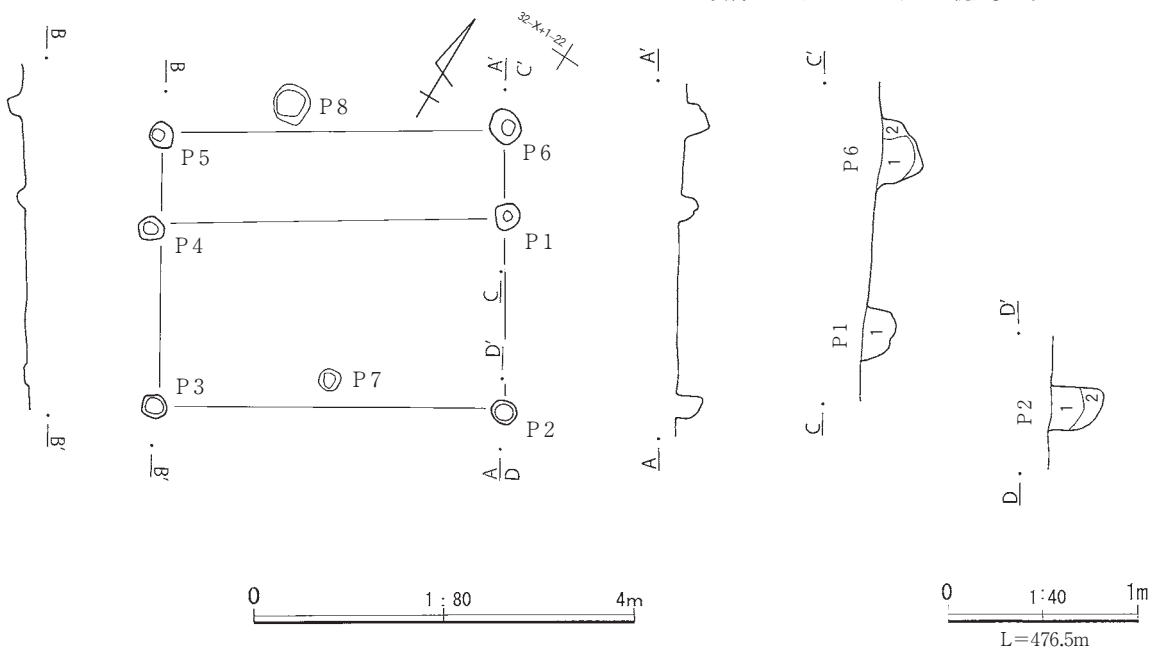
軸方向 N-33° W

規模 梁行3.6m、桁行2.0m（庇含まず）・2.95m（庇含む）。P1-P6柱間芯芯距離で95cm。

柱穴 平面形状は近似している。最も地山の高い位置にあるP3が深さ4cmしかない不明瞭な施設で、確実に本施設に伴うか判断できなかった。全体に地山の高い西側の柱穴のほうが浅くなっていて、1・2号掘立柱建物と同じ傾向にある。

3号掘立柱建物 柱穴計測表

No	長×短×深 (cm)	形状	備考
1	29 × 22 × 17	円形	底面二段底で柱痕的。
2	38 × 31 × 19	円形	
3	29 × 26 × 26	円形	浅く不明瞭。
4	26 × 23 × 27	円形	
5	26 × 22 × 4	円形	
6	26 × 22 × 10	楕円形	
7	23 × 22 × 15	円形	
8	42 × 38 × 10	円形	



- 1 黒褐 10YR3/2 しまりあり。ローム状土混じりで炭化物粒散見する。
- 2 にぶい黄褐10YR5/4 ローム状土の混入多い。

第169図 3号掘立柱建物

4号掘立柱建物

3号掘立柱建物の南東側柱列から約2mの位置に、柱を延長するようにして並んでいる小規模な建物である。3号掘立柱建物とは柱間や柱穴の規模も近似した値となり、1棟の建物となることも検討したが、その場合、全体が縦長になりすぎて考えにくかった。P1～P6の6本の柱穴から1間×2間の建物を想定した。南西側に面した施設であろうか。P2がやや南東方向に、P6がやや西方向に逸れているが、柱間の間隔はほぼ均等である

埋没土の観察から柱痕の認められるものはなかった。抜柱痕も認められない。P2の底面がわずかに二段底状で、柱痕の可能性もあろう。

位置 32区W-20グリッド。

軸方向 N-32° W

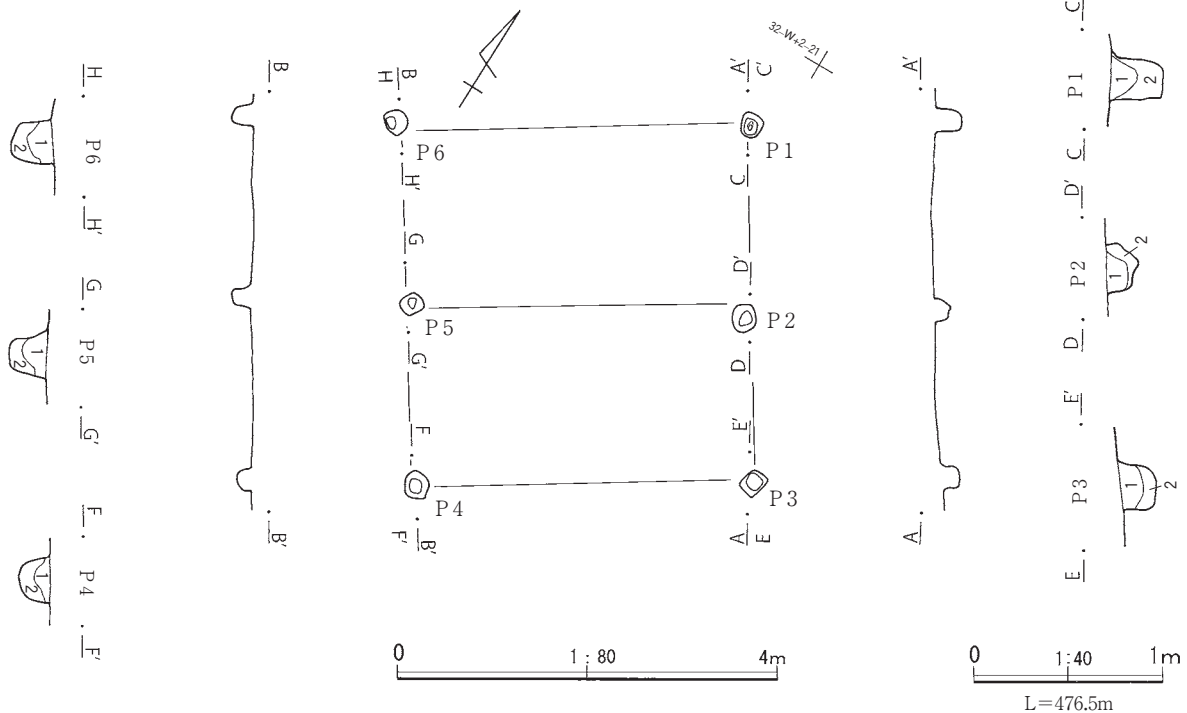
規模 梁行3.6m、桁行3.8m。柱間芯芯距離で1.9m、P1-P2間2.0m、P2-P3間1.7m。

柱穴 平面形状は6本とも近似している。P1は円筒上に掘り窪めた、やや深い柱穴らしい施設である。他の柱穴も本地区の建物にあつては深めで、底面が平坦なものが多い。

4号掘立柱建物 柱穴計測表

No	長×短×深 (cm)	形状	備考
1	26 × 19 × 30	円形	底面中央窪む。柱痕の可能性。
2	28 × 24 × 16	円形	
3	26 × 20 × 17	長方形	
4	29 × 26 × 17	円形	
5	24 × 20 × 21	長方形	
6	26 × 21 × 24	円形	

- 1 黒褐 10YR3/1 しまりあるローム状土混じり層。炭化物粒散見する。
- 2 1に近いが炭化物粒をほとんど含まない。



第170図 4号掘立柱建物

5号掘立柱建物

密集して確認された4棟の建物の東隅にある4号掘立柱建物よりさらに8m東に位置する遺構である。南側へ低い緩やかな傾斜面に位置している。

地山の最も低い南東隅の柱穴を明確にできなかったが、この隅部分を除いたP1～P5の5本の柱穴から1間×2間の南北に長い建物を想定した。全体の配置は平行四辺形状に歪んでいる。P6・P7は南北両梁のわずか外側にあるが、本建物に関連する施設か判断できなかった。

位置 32区T-19グリッド

軸方向 N-18° E。(桁方向)

規模 梁行3.8m、桁行5.4m(西側)。桁方向柱間芯距離で2.7m。

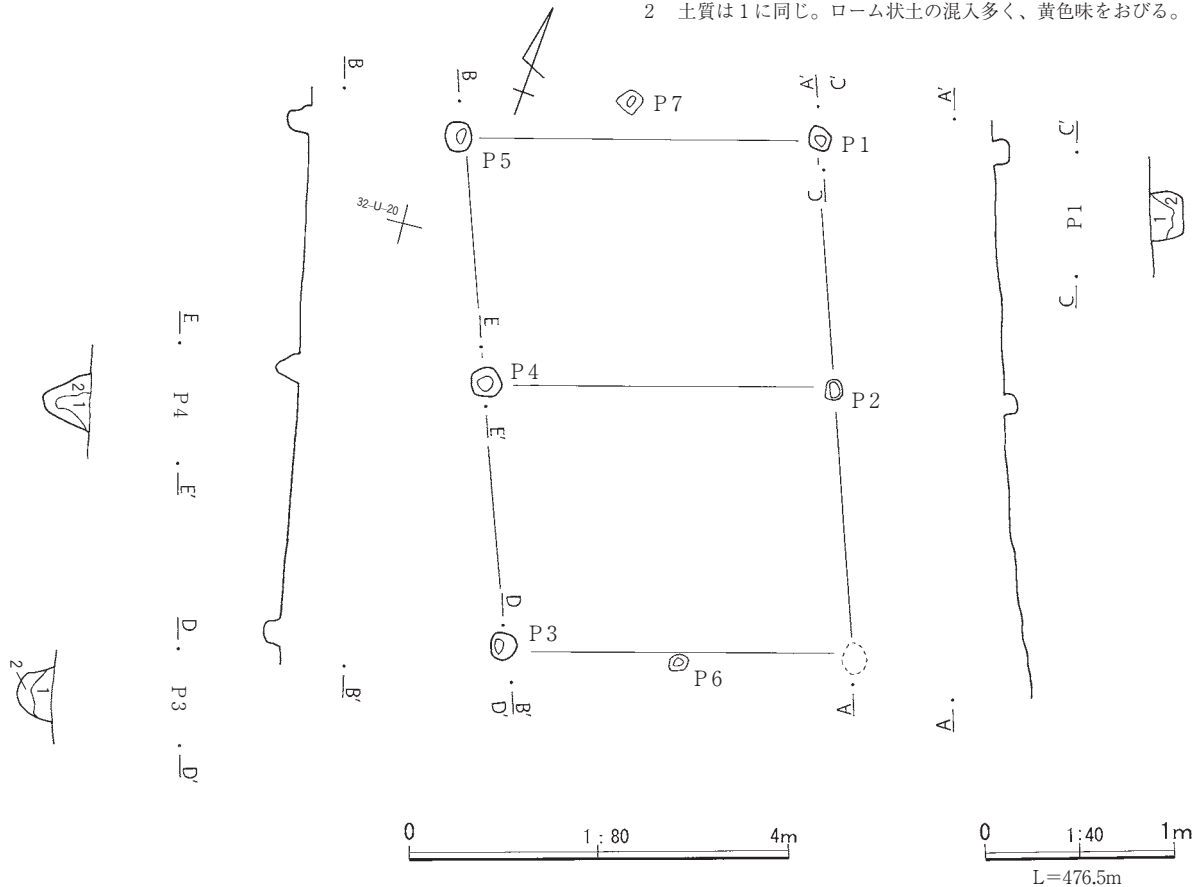
柱穴 5本とも小規模である。P4の断面に柱痕とも捉えられる分層が可能だったが、土質から柱痕を確認できたものではない。

備考 南東隅の破線で示した柱穴位置には遺構確認段階では柱穴の可能性のある土色の違いの部分で想定されたが、掘り下げた結果、遺構でないと判断した地点である。地山が強くだがっている地点でもあり、柱穴が残らなかったが、土色に影響を与えた可能性もあろう。

5号掘立柱建物 柱穴計測表

No	長×短×深(cm)	形状
1	26×21×24	円形
2	22×16×12	円形
3	29×28×19	円形
4	31×29×26	円形
5	32×28×25	楕円形
6	23×21×25	楕円形
7	20×16×19	円形

- 1 黒褐 10YR3/1 基本土層IV層に近い。ブロック状のローム状土混じる。
- 2 土質は1に同じ。ローム状土の混入多く、黄色味をおびる。



第171図 5号掘立柱建物

6号掘立柱建物

5号掘立柱建物から北北東方向へ約50m離れた地点に1棟だけ孤立して確認された。1号溝北側にある唯一の遺構でもある。付近は南側へ向かってわずかに低くなる、ごく緩やかな傾斜面にある。8本の柱穴から1間×3間の建物を想定した。1号掘立柱建物と同様の配置を持つが、軸方向が大きく異なる。柱間のほぼ等しい規則的な配置である。

P2・P3・P6には断面観察から柱痕の可能性も認められる。P9は北辺梁の外側にあり、本建物には伴なう施設か判断できなかったが、5号掘立柱建物も近似した配置となっている。

位置 42区P-9グリッド

軸方向 N-20° W (桁方向)

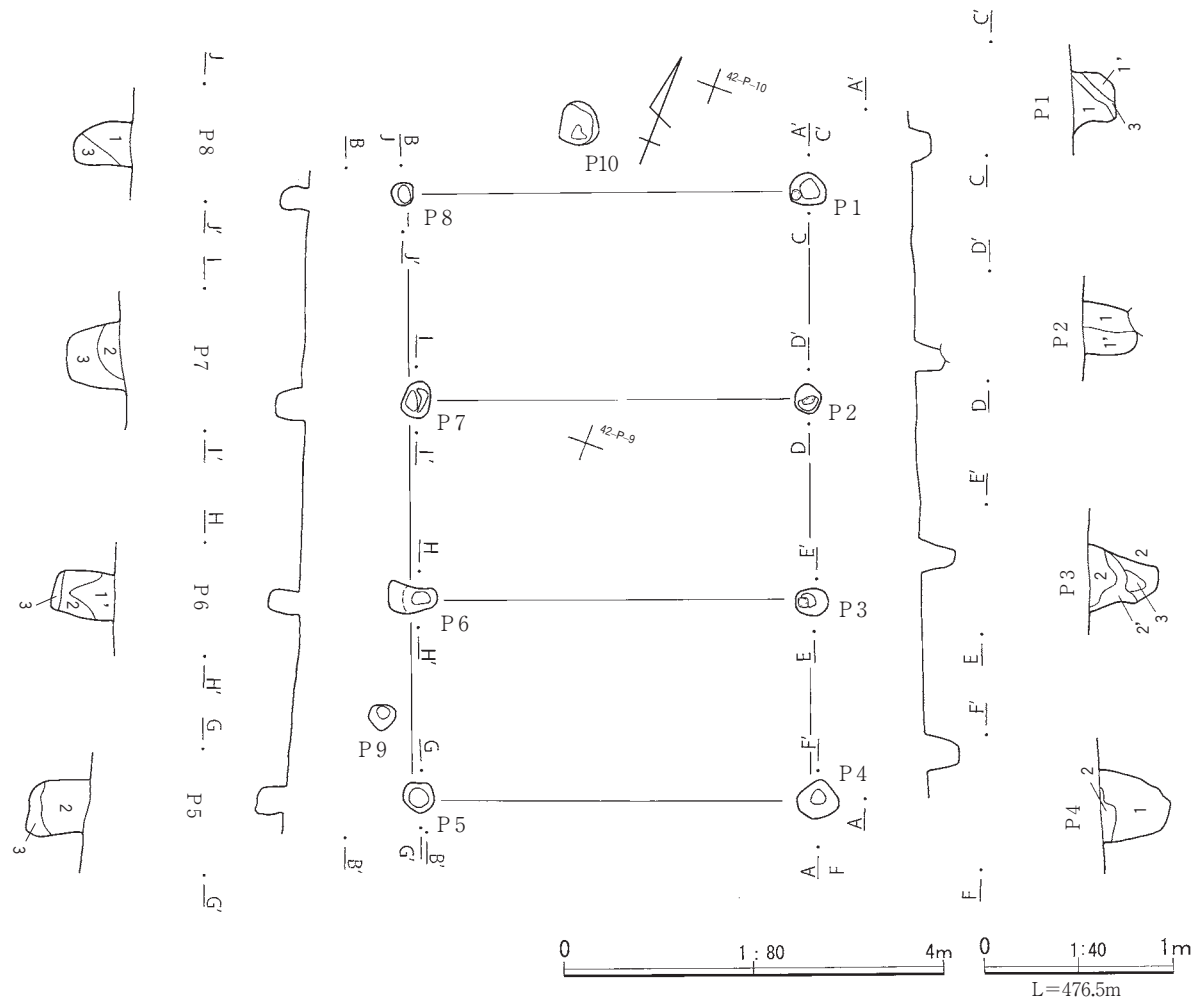
規模 梁行4.3m、桁行6.4m。桁方向柱間芯芯距離で2.1m、北側のみ2.2m。

柱穴 平面形状は比較的近似している。P1以外は30cm以上の深さがあり、他の建物と比べて柱穴らしい形状である。

6号掘立柱建物 柱穴計測表

No	長×短×深 (cm)	形状	備考
1	38×36×21	円形	
2	28×28×36	円形	底面は地山礫にあたる。
3	36×26×37	楕円形	
4	39×36×36	円形	
5	36×32×35	円形	
6	52×32×35	楕円形	
7	38×31×32	楕円形	
8	24×26×33	円形	
9	28×25×20	楕円形	
10	46×38×40	不整形円形	底面不整。

- 1 黒褐10YR2/2 基本土層IV層に近い。ややしまり欠く。1'にローム状土混じる。
- 2 色調・土質は1に同じ。しまりある。2'にローム粒混じる。
- 3 褐10YR4/4 ローム状土・ローム粒主体の層で、ややしまり欠く。



第172図 6号掘立柱建物

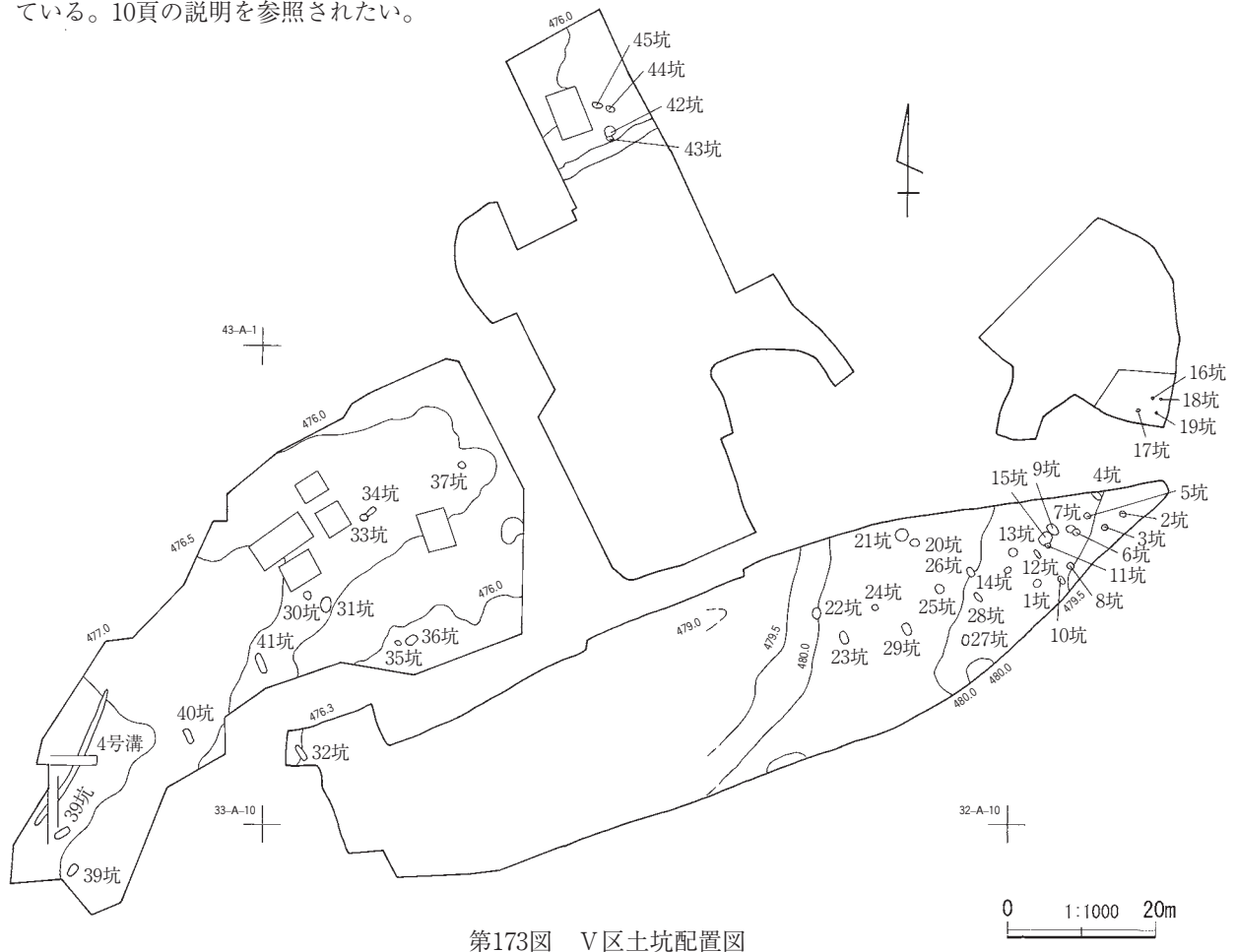
## 5 土坑

V区では46基の土坑を調査した。遺構番号は調査時に100m方眼の区毎に付けられたものを、V区全体の通し番号に直した。明らかな縄文時代の遺構についてはここから除外し、今後、他の縄文時代以降と共に報告予定である。磁器を明確にできなかった遺構についてはここで扱った。変更のあった土坑は195頁以降の一覧表に旧番号を記した。

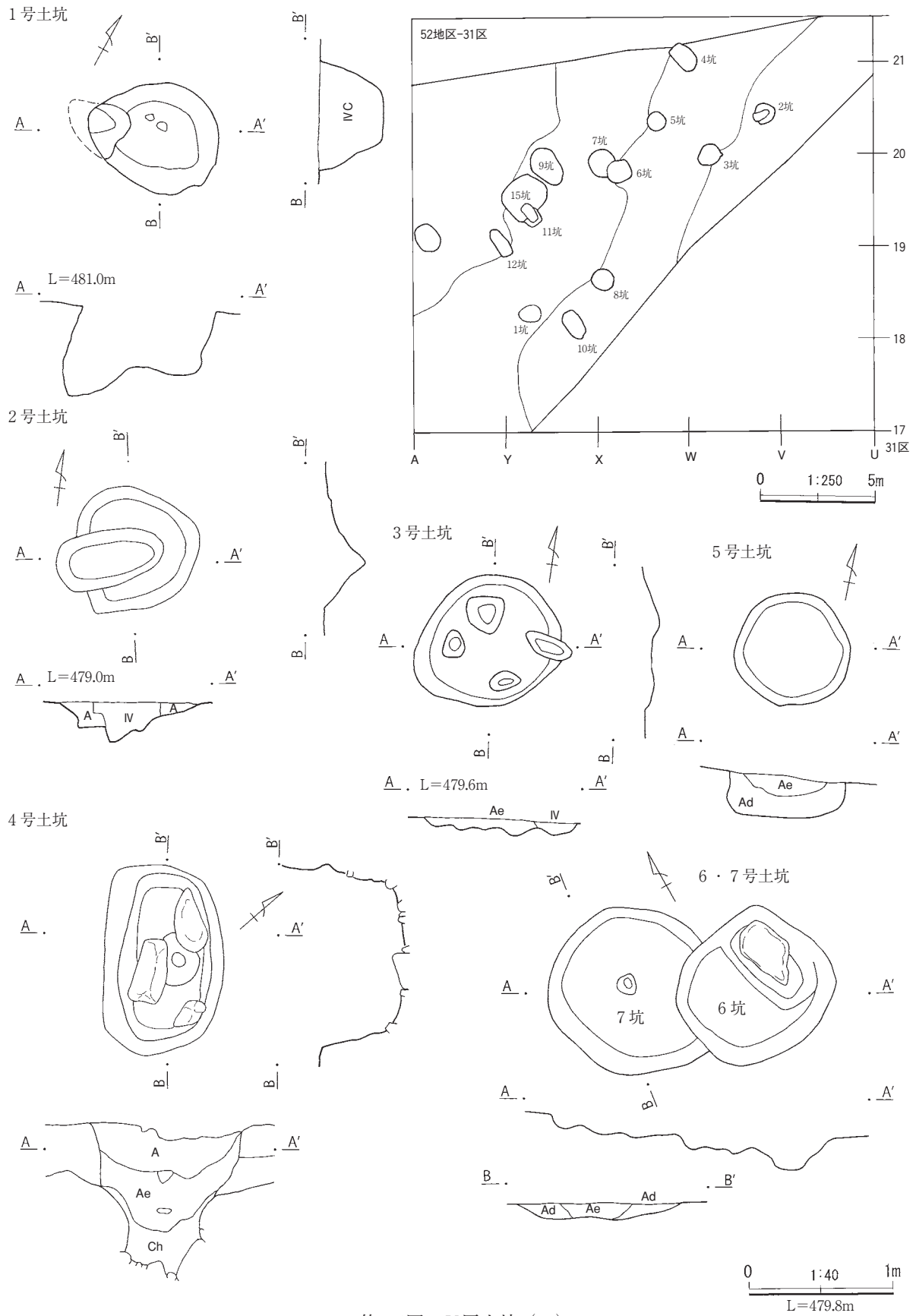
V区にはIV区の土坑で見られなかった陥穴状の遺構が調査されている。この中には上面にAs-Kk（浅間粕川テフラ：1128年）が観察されるものもあり、平安時代以前まで年代が遡るものが含まれている。IV区で多かった細長い種芋貯蔵用と思われる土坑はきわめて少なかった。出土遺物はなく、他の遺構では年代を特定する根拠を持つものはない。

土層説明については本書全体の共通略語を使用している。10頁の説明を参照されたい。

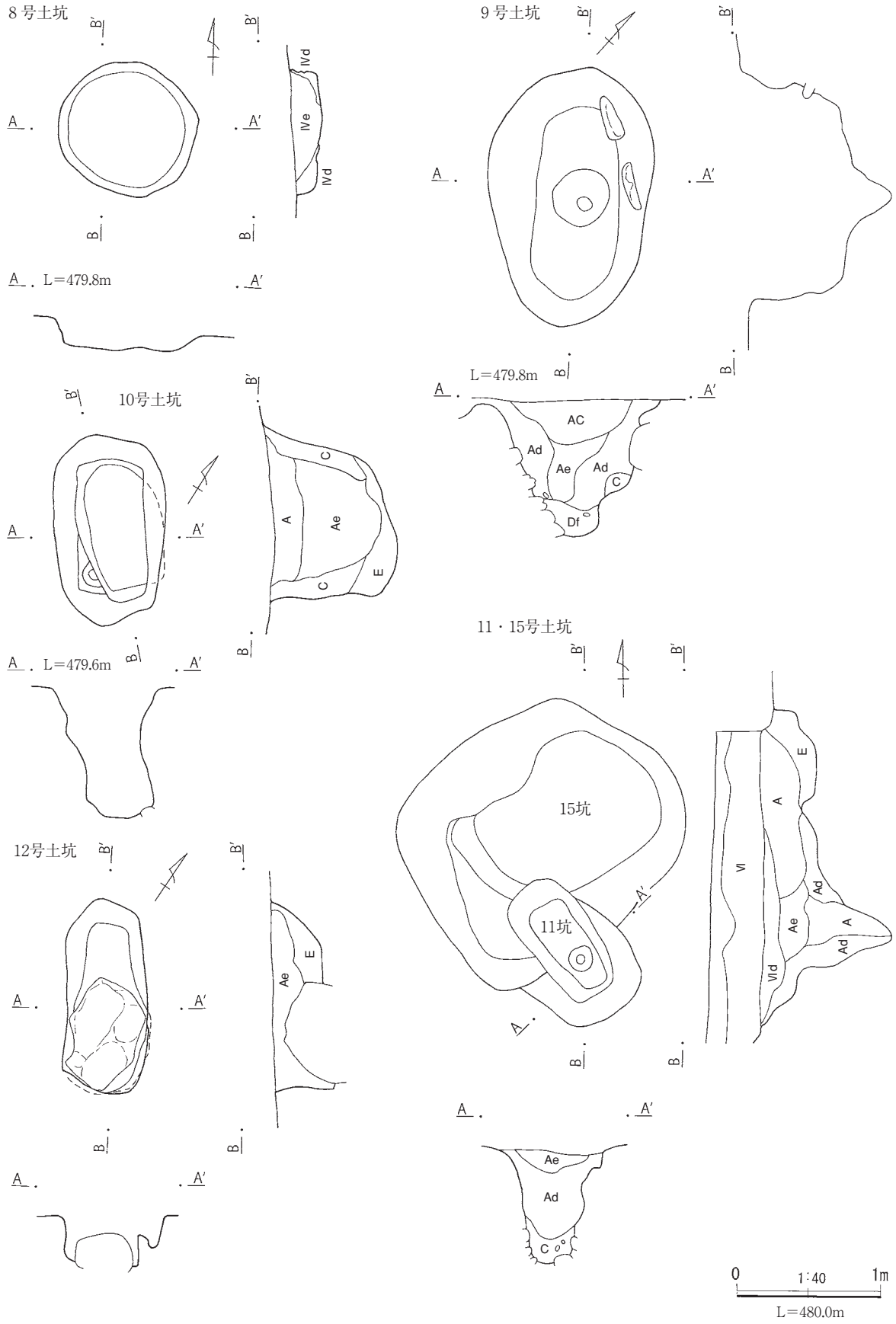
下図はV区土坑の略図である。46号土坑は図南西隅からさらに南西側へ30m離れた地点での確認で、ここに収録しきれなかった。



第173図 V区土坑配置図



第174図 V区土坑(1)

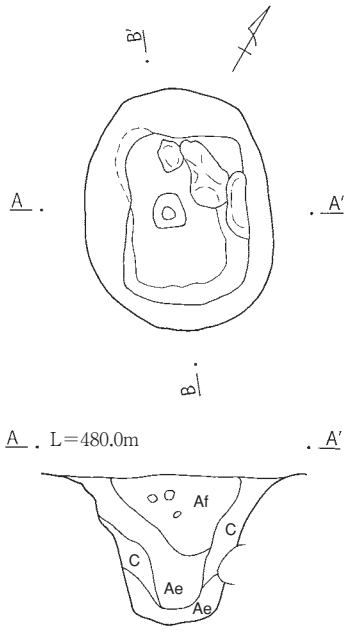


第175図 V区土坑 (2)

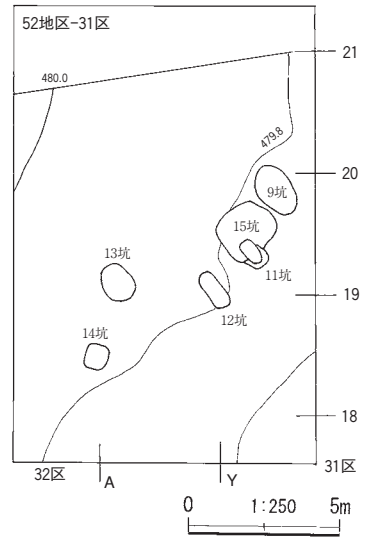
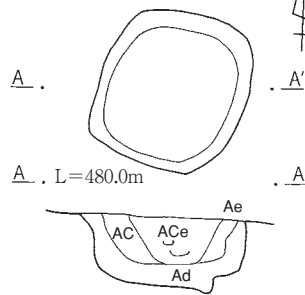


第5章 V区の調査

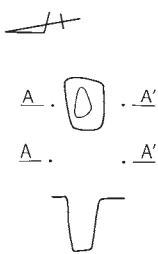
13号土坑



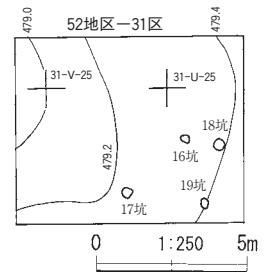
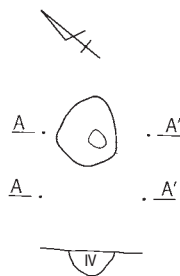
14号土坑



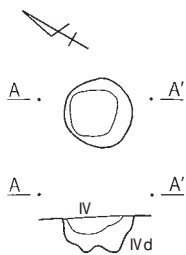
16号土坑



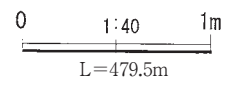
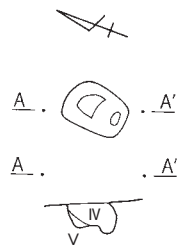
17号土坑



18号土坑

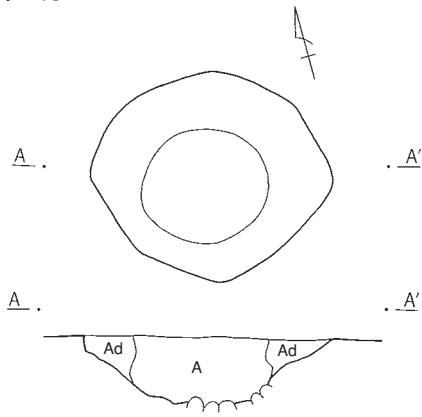


19号土坑

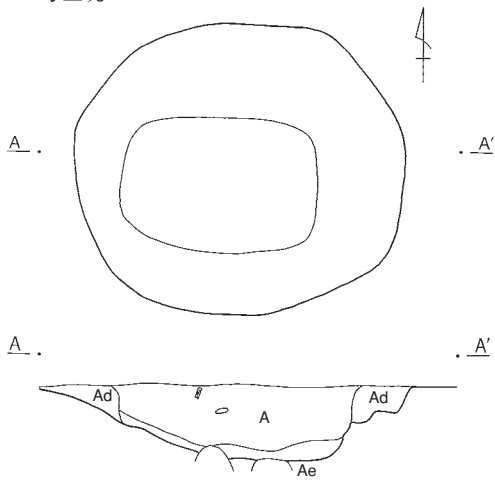


第176図 V区土坑 (3)

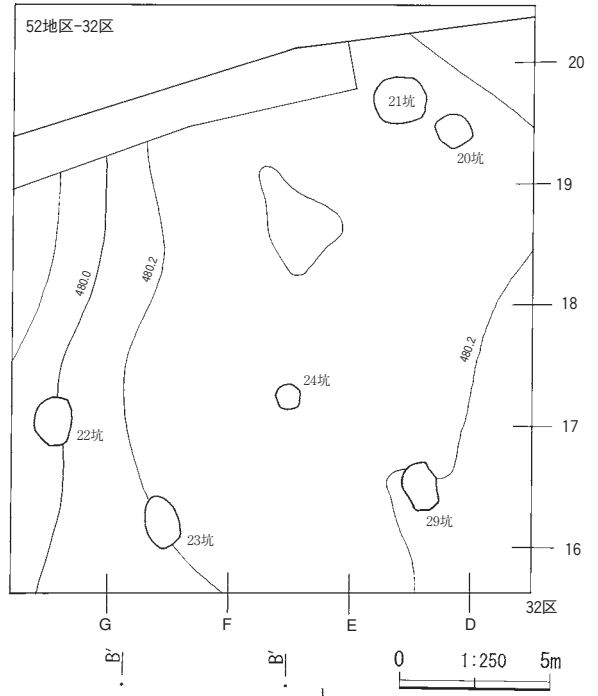
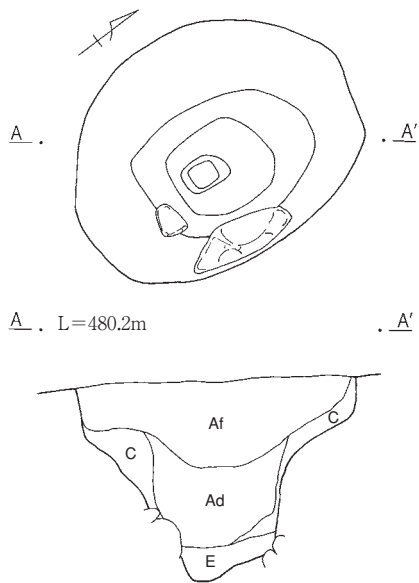
20号土坑



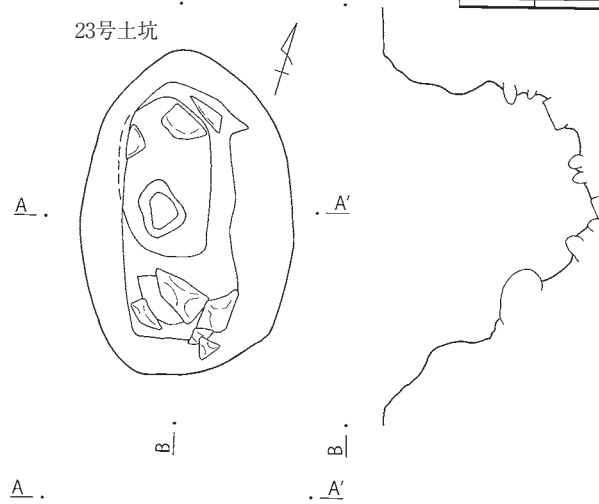
21号土坑



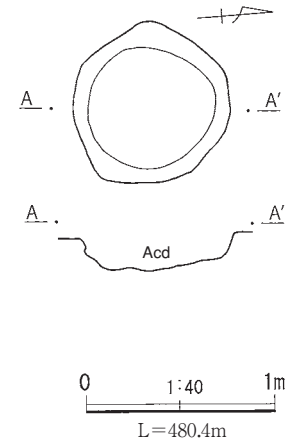
22号土坑



23号土坑

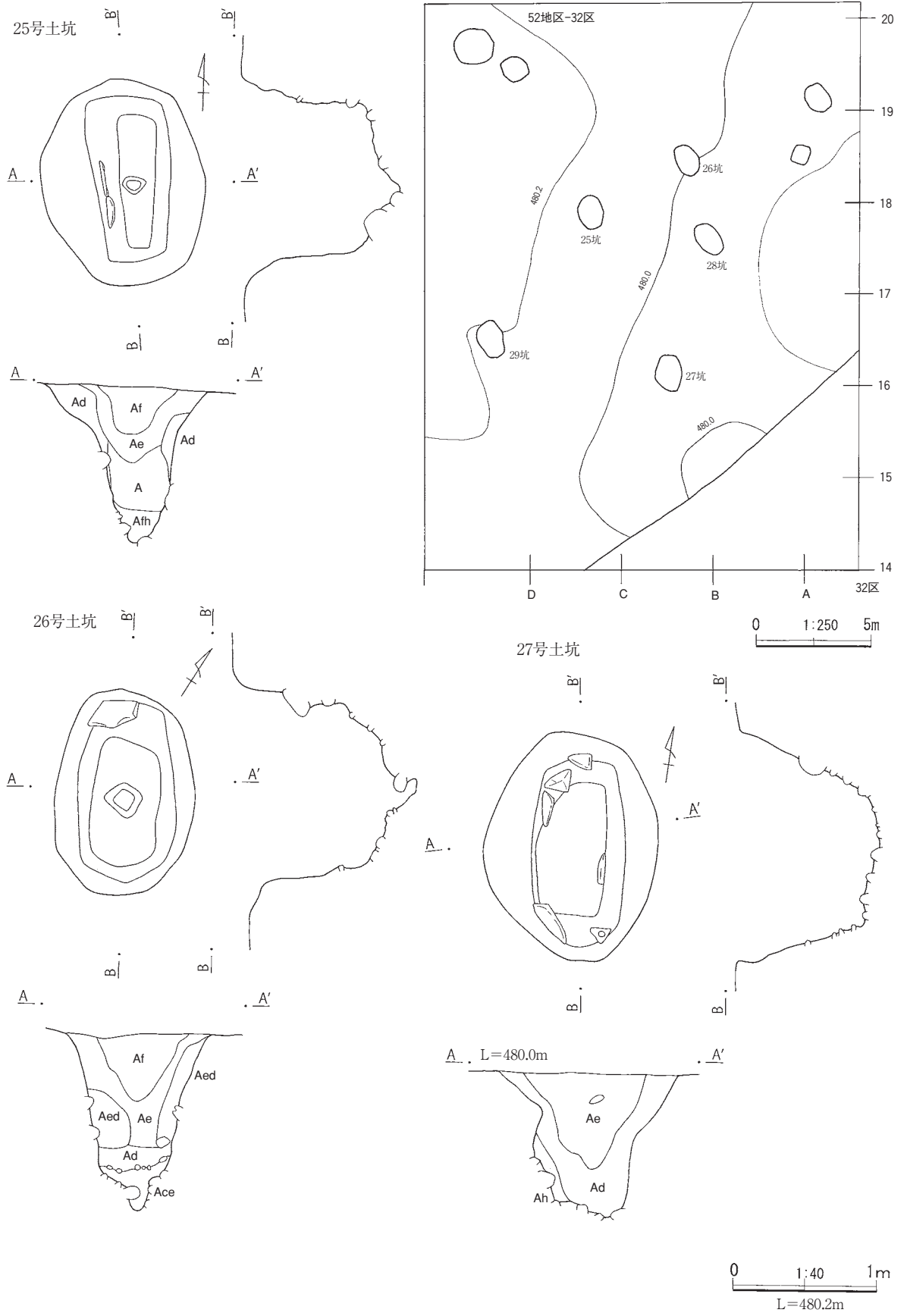


24号土坑

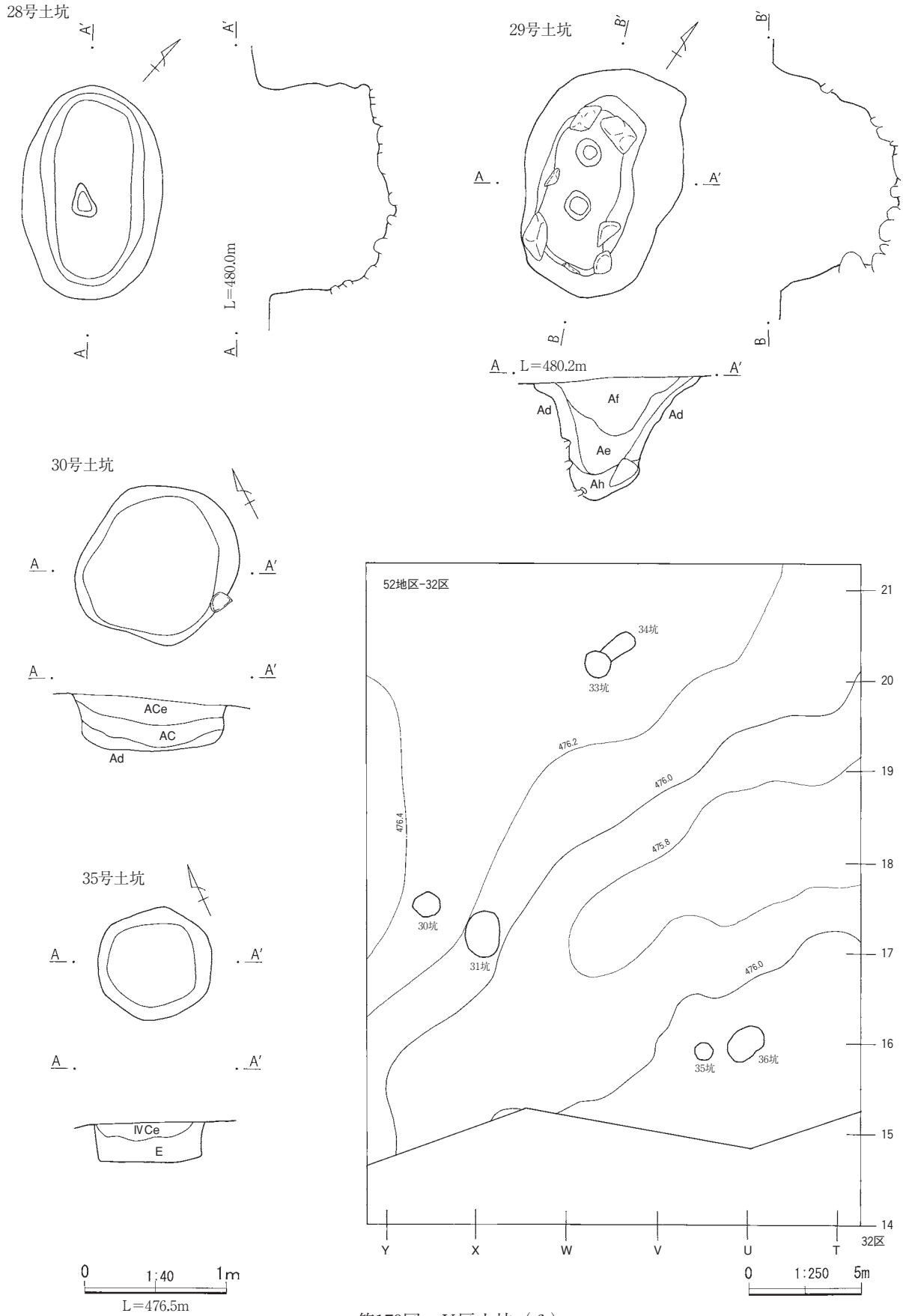


第177図 V区土坑(4)

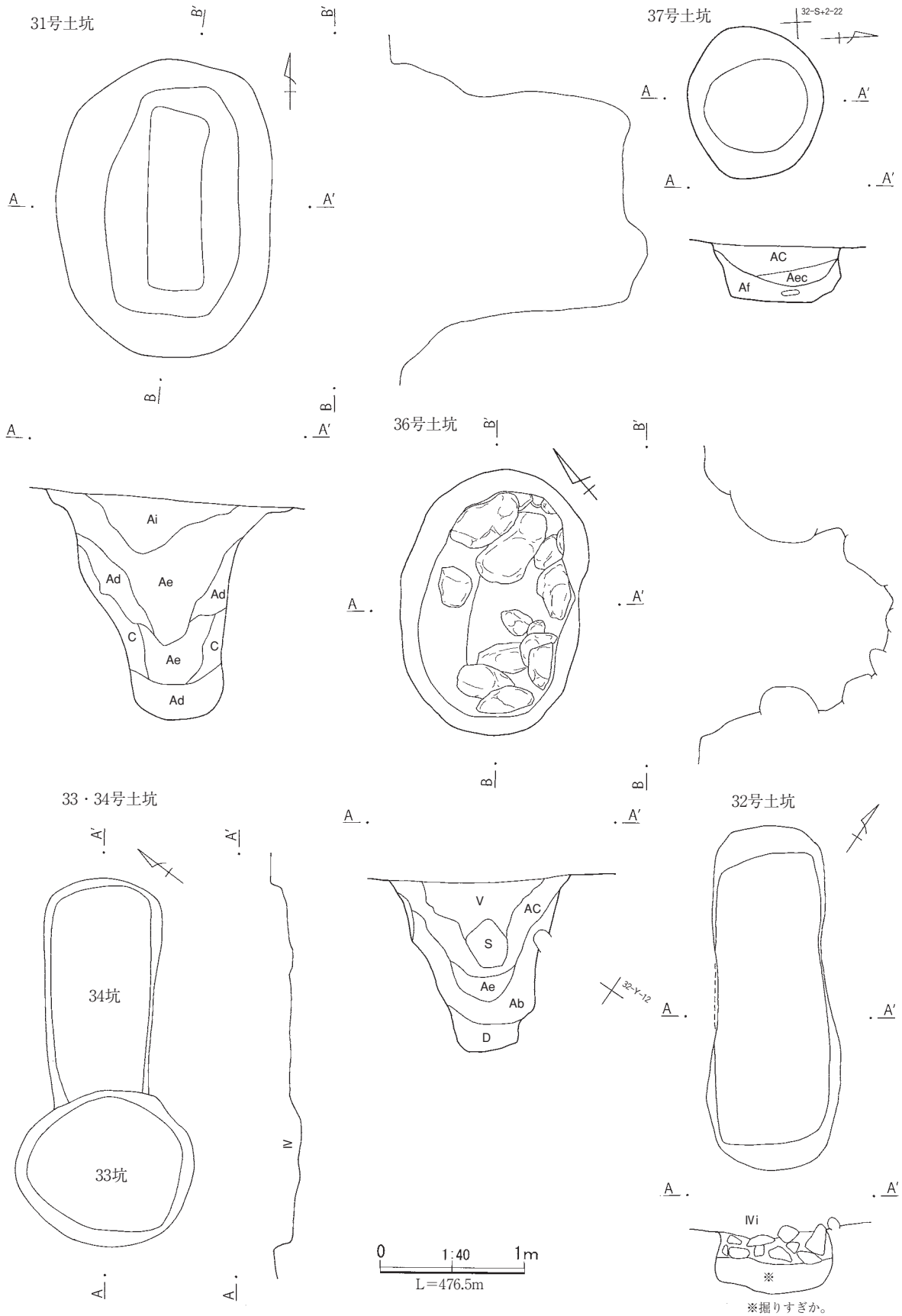
第5章 V区の調査



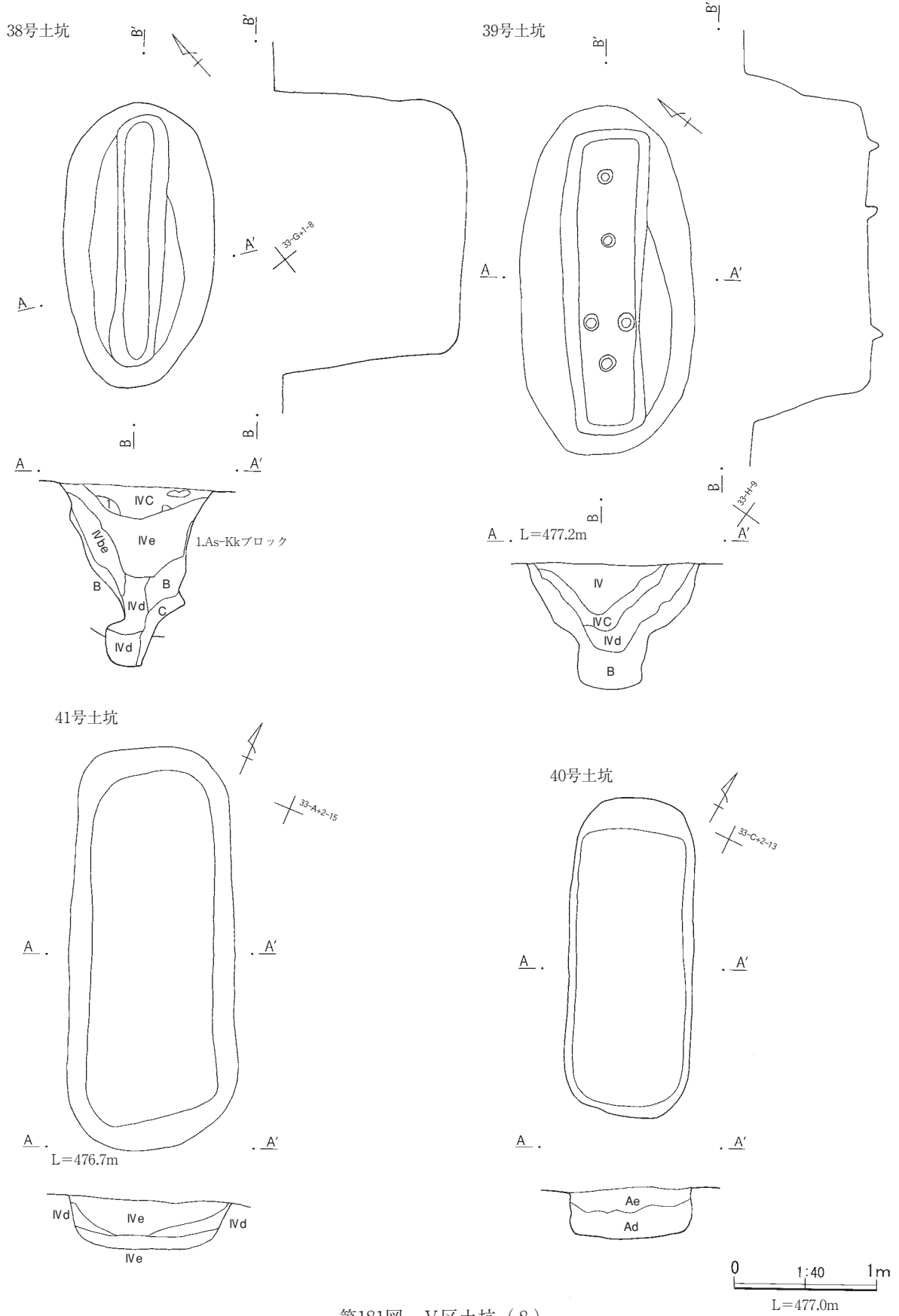
第178図 V区土坑 (5)



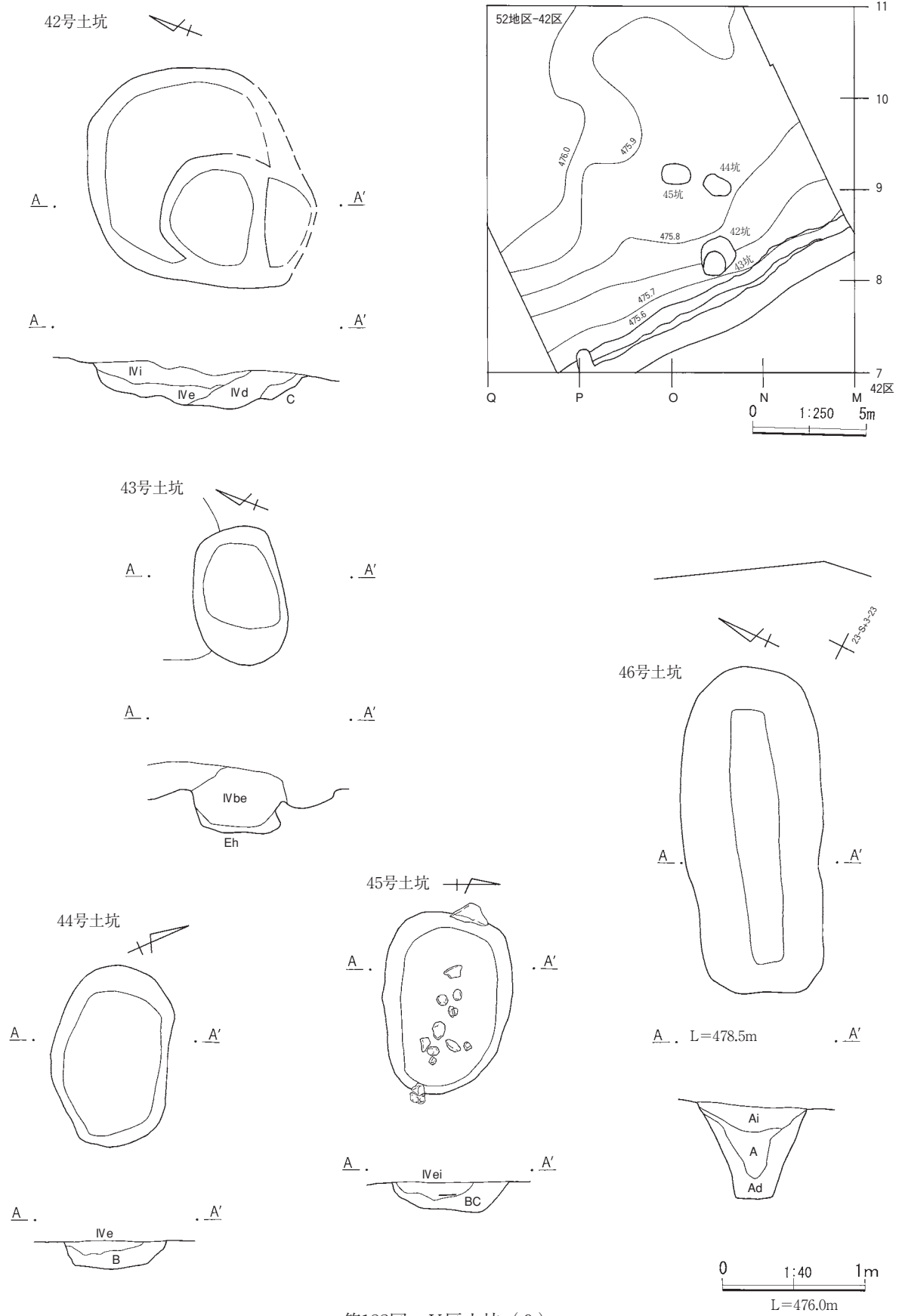
第179図 V区土坑 (6)



第180図 V区土坑 (7)



第181図 V区土坑(8)



第182図 V区土坑(9)

## V区 土坑一覧

No	位置 形状	規模(長×短×深) cm 軸方向	遺物と埋没土	備考
1	31区X-18 不整形	94×80×60(45) N-61°E	縄文土器細片を含むが、埋没土は平安以降と思われる。	重複する複数の土坑の可能性。底面やや不整。
2	31区V-20 円形+長円形	A 75×39×20 N-66°E B 88×88×18		重複する2基の土坑の可能性。
3	31区V-19・20 不整形円形	105×88×8 N-45°E	土師器小片1片 礫の混入やや多い	底面不整。ピット上の窪みは攪乱の可能性。
4	31区V・W-20・21 隅丸長方形	133×83×80 N-43°W		礫混じり層を掘り込む。
5	31区W-20 円形	81×79×33 N-48°W		
6	31区W-19 不整形隅丸長方形	111×108×21 N-34°E		7号土坑と重複するが新旧不明。底面不整。
7	31区W・X-19・20 楕円形か	125×114×21 N-26°W		底面不整。
8	31区W-18 円形	97×89×24 N-57°W		
9	31区X-19 隅丸長方形	179×114×106 N-31°W		礫混じり層を掘り込む。底面中央にピット状の窪みがあるが、逆茂木ではなさそうである。
10	31区X-18 隅丸長方形	133×77×93 N-36°W		底面不整で重複する2基の土坑の可能性。
11	31区X-19 長方形	×76×61 N-39°W		15号土坑に先出か。底面は礫混じり層を掘り込む。
12	31区X・Y-18・19 長方形	134×55×38 N-37°W		地山の礫のため、掘り下げを諦めた土坑か。
13	31区Y-18・19 長方形	127×98×93 N-35°W	上面に小礫混じる。	底面は礫混じり層を掘り込む。やや凹凸多い。
14	31・32区A・Y-18 長方形	84×77×37 N-17°E	近世陶器細片4片 やや大きめの礫の混入多い。	
15	31区X-19 台形	193×165×32 N-53°E		
16	31区T-24 隅丸不整形長方形	27×21×28 N-82°E		柱穴状。 旧6区1号土坑。
17	31区U-24 不整形円形	37×31×15 -		旧6区2号土坑。
18	31区T-24 不整形円形	37×35×36 -		旧6区3号土坑。
19	31区T-24 不整形楕円形	33×24×20(北隅は16) N°E		底面不整。 旧6区4号土坑。
20	32区D-19 不整形楕円形	123×112×34 N-75°W		底面は礫混じり層上まで掘り下げる。 旧32区1土坑
21	32区D-19 不整形楕円形	174×154×42 N-87°W		底面は礫混じり層上まで掘り下げる。 旧32区2土坑
22	32区G-16・17 楕円形	163×125×123 N-2°W	上面に小礫の混入やや多い。	旧32区3土坑
23	32区F-16 長方形	172×113×116 N-19°W		底面は礫混じり層を掘り込む。中央の窪みは深さ8pで不明瞭。 旧32区4土坑
24	32区E-17 楕円形	86×81×20 N-48°W		底面は礫混じり層を掘り込む。 旧32区5土坑
25	32区C-17・18 長方形	146×113×112 N-10°W		底面中央の窪みは深さ12p。 旧32区6土坑
26	32区B-18 長方形	143×98×120 N-32°W		底面中央の窪みは深さ15pでやや不明瞭。 旧32区7土坑
27	32区B-15・16 長方形	156×121×96 N-7°W		旧32区8土坑
28	32区A・B-17 長方形	151×99×93 N-41°W		17号土坑に先出。旧32区9土坑
29	32区D-16 長方形	163×113×85 N-22°W		底面にある2ヶ所の窪みは礫の抜けた痕跡の可能性。深さ3pと10p。 旧32区10土坑
30	32区X-17 不整形円形	120×112×33 N-85°W		底面は平坦で地山礫混じり層上にある。 旧32区11号土坑。
31	32区W・X-16・17 隅丸長方形	207×149×162 N-2°E		旧32区12土坑
32	32区X-11・12 長方形	238×91×50 N-36°W	集石土坑。人頭大サイズの円礫が多い。	底面は掘りすぎか。旧32区13土坑
33	32区V-20 不整形円形	124×108×21 N-38°W	人為的な埋め戻しか。	34号土坑に後出。旧32区14土坑
34	32区V-20 長方形	×72×15 N-52°E		33号土坑に先出。旧32区15土坑
35	32区U-15 長方形	80×79×31 N-69°W		底面平坦。 旧32区16土坑
36	32区T・U-15・16 長方形	183×123×133 N-41°E		34号土坑に後出。旧32区17土坑
37	32区S-21・22 円形	183×123×133 N-41°E		旧32区18土坑
38	33区G-8 長楕円形	198×106×139 N-37°E		底面は狭い。旧33区1土坑
39	33区- 長楕円形	243×121×33 N-88°W		平坦な底面は長方形。逆茂木状の窪みあり。深さは10p以内で不明瞭。根痕も混じるか。旧33区2土坑
40	33区C-12 長方形	223×87×41 N-23°W		底面平坦。旧33区3土坑
41	33区A・32区Y-14・15 長方形	230×117×41 N-27°W		旧33区4土坑
42	42区N-8 長方形	156×152×33 N-21°W		数基の土坑重複の可能性。43号土坑に後出。 旧42区1土坑



## 第5章 V区の調査

No	位置 形状	規模(長×短×深) cm 軸方向	遺物と埋没土	備考
43	42区N-7・8 不整形	98×64×43 N-62°E		42号土坑に先出。 旧42区2土坑
44	42区N-8・9 不整楕円形	127×81×23 N-67°W		旧42区3土坑
45	42区N・O-9 不整長方形	N×89×21 N-86°W	遺構中央付近に偏って小礫の混入が多い。	旧42区4土坑
46	23区S・T-22・23 隅丸長方形	227×100×39 N-62°E		埋没土は縄文時代の土に似るが、しまりなく、古代以降の施設と判断する。 底面は弱い凹凸あり。旧23区1土坑

## 6 2面畑

V区南東隅の北側に向かって低くなる、上位段丘北隅の緩やかな斜面にある。第2面遺構確認時に、第1面1・2号畑下から30本以上まとまって見つかった畑サク痕跡である。東西約130m、南北約80mの範囲にのみ確認できた。

第1面畑の畝サクが等高線に平行に設けられたのに対し、本畑は垂直に近い方向にサク痕跡が残っている。サク部分の土は天明三年面の耕土である基本土層IV層と区別できなかったが、第1面下約50cm以上の深度での確認遺構である。さらにサク方向が大きく異なることから、第1面畑とは別時期の畑跡と判断した。年代を決める根拠を持たないが、天明三年に近接する時期の畑とは考えにくいことから、古代面に痕跡を残す中世畑の中耕痕と想定している。

サク方向や形状は一定でなく、さらに2時期以上に分けられそうであるが、新旧は不明である。

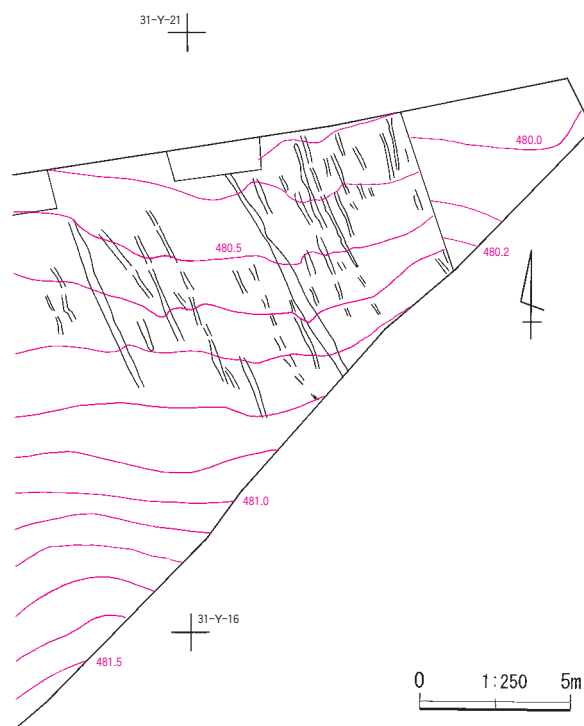
確認面積 110.2m<sup>2</sup>

サク間 50cm前後と70cm前後の2種か

サクの長さ 最大7.7m

サク方向 N-23°WおよびN-36°W

地山傾斜 57/1000



第183図 V区2面畑

## 7 2面溝

### 10号溝

V区西隅の第1面5号溝の北隅部分とは東側8m部分と重複し、5号溝を延長するように北へ向かって確認された遺構である。5号溝と6号溝の間に想定した道部分の下にあたっている。配置より5号溝に先出した同一の溝と考えられるが、このように、傾斜の高い方へ向かって掘り直された例に、IV区で1号溝に先出した3号溝がある。

溝の走行は西側に向かって僅かに反るように蛇行している。上面の5号溝がほぼ平行していた6号溝に対しては、西側へ向かって離れていく。

底面の形状は一定でない。地山傾斜に沿って北側へ向かって低くなり、南隅とは30cmの比高差がある。北隅は壁がほとんど残存しておらず、溝は北へ向かって延びていたと思われる。埋没土の観察からは水路であった確証は得られない。

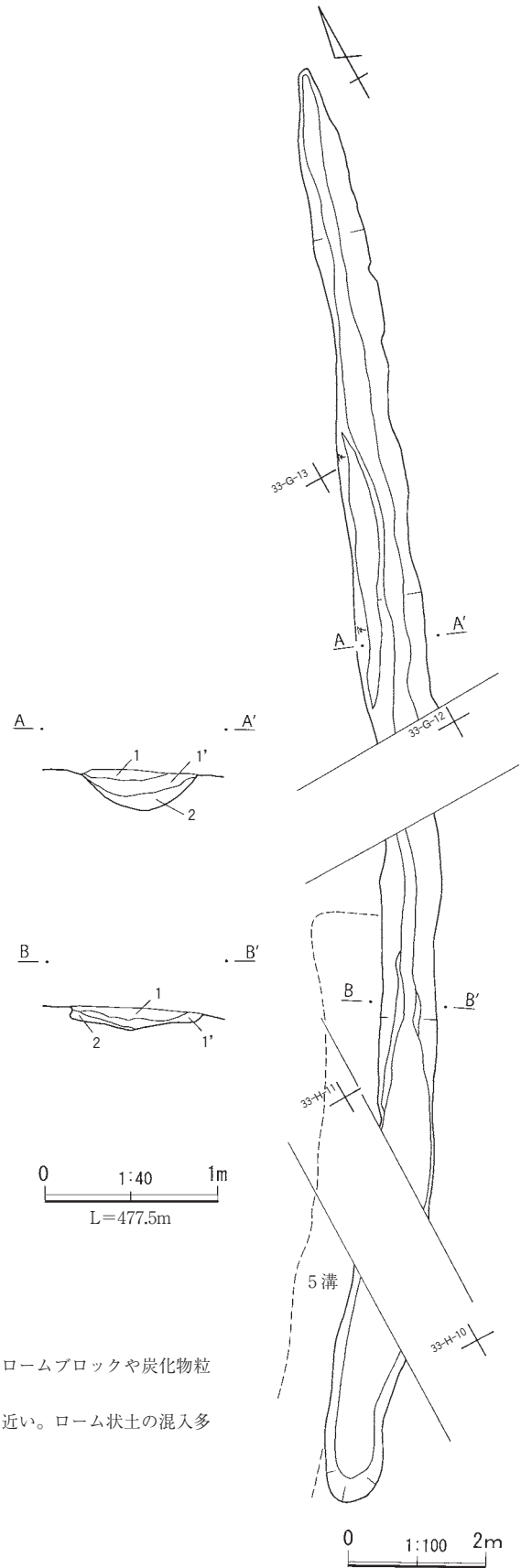
埋没土は近世耕作土の第IV層土と思われる。ローム状土の混入が多く、人為的に埋め戻された可能性もある。5号溝とあまり時間差のない、5・6号の2本の溝が並んで開鑿される直前の遺構と考えたい。

全長 21.0m

幅 90cm前後

深さ 15~30cm 北隅では2~3cm

走行方向 南側N-30° E 北側N-22° E



- 1 暗褐10YR3/3 基本土層IV層か。ロームブロックや炭化物粒混じる。1' は混入物多い。
- 2 にぶい黄褐10YR4/3 土質は1に近い。ローム状土の混入多い。

第184図 V区10溝

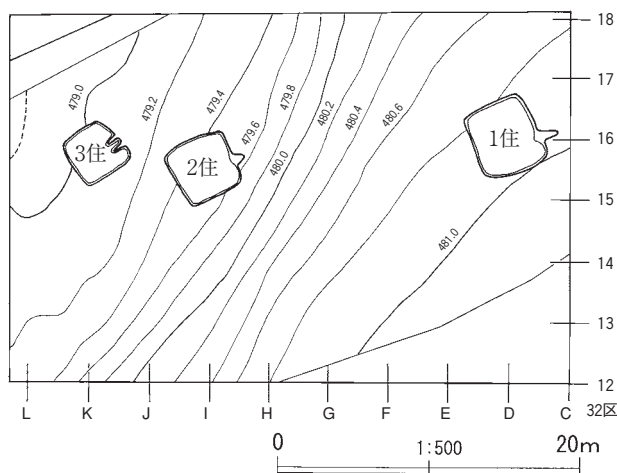
## 8 竪穴住居

V区からは5軒の竪穴住居が見つかった。5軒とも上位段丘上の北隅に位置し、一部が下位段丘へ向かう傾斜面にあっている。いずれも平安時代の遺構で、住居間の重複は一例もない。

V区の集落は、Ⅲ区・Ⅳ区の下位段丘にある集落の西隅竪穴住居から200m以上西側に離れた位置にある。平安時代の遺物はこの集落から50mほど離れたⅣ区南西隅付近で上位段丘直下から滑り落ちたような状態で多量に出土している。上位段丘面に広がる集落があり、北隅部分が今回の調査範囲にあつたものと考えている。V区の集落はⅢ・Ⅳ区の集落とは連続しないものと考えられるが、二つの集落には、共通する墨書土器の出土が見られる。

### 32区（2001年度調査）の竪穴住居

下図に示した3軒の住居を調査した。東隅から1→3と番号を付けた。3軒の住居は軸方向やカマドの位置をほぼ同じくして、東西方向に斜めに並んでいる。1号住居が上位段丘末端の比較的平坦な地点に位置するのに対し、2・3号住居は下位段丘面に向かって北西側へ低く傾斜する途中に位置している。



第185図 V区住居配置図

### V区1号住居

V区の竪穴住居中では東隅にあり、近接する住居はない。黒色土内よりカマドが確認されたが、東壁以外は不明瞭で、グリッド線に沿ってサブトレンチを設定して壁の立ち上がりを把握した。

**位置** 32区D-16地点をほぼ中心としている。

**規模形状** カマドのある東辺が4.6mで最も長く、北辺は4.0mでやや短く、他辺は4.1mである。各隅はあまり丸みを持たずに比較的整っており、台形気味の長方形を呈している。

**埋没土** 不明瞭だが、自然堆積土と思われる。上層から中層付近に礫の流れ込み混入が目立つ。

**方位** N-68° E

**面積** 17.38m<sup>2</sup>

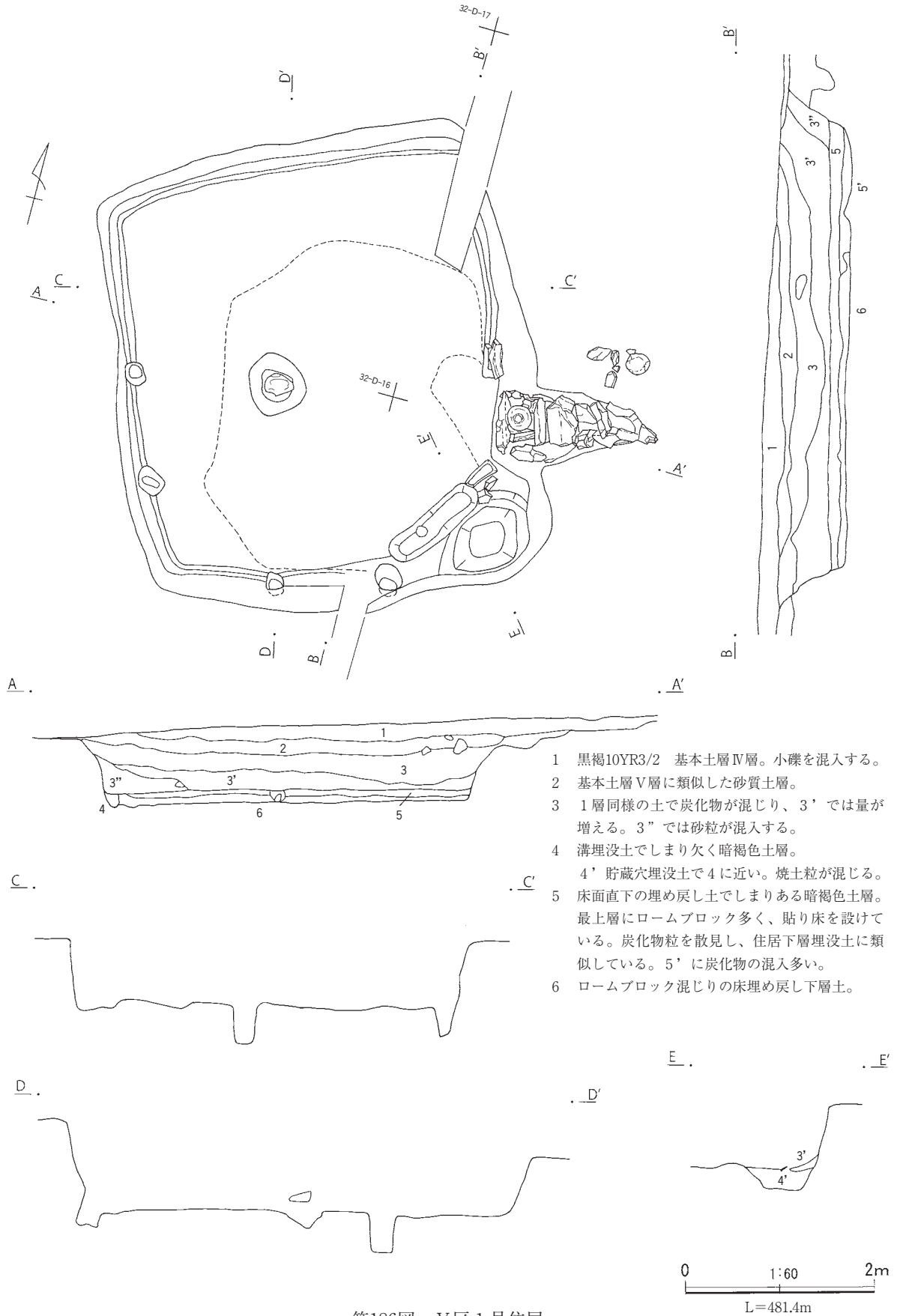
**壁** 最も低い西隅付近で45cm、他では60cm前後の高さがある。黒色土部分にあたる壁上半では崩落がすすんだようで、外側へ大きく開き気味になっている。壁溝がカマド下と南東隅付近を除いて廻っている。

**床面** 黒色土上の床面だが、炭化物粒や焼土が見られ、踏み固めも強く、比較的明瞭であった。ほぼ平坦な床で、地山の傾斜に沿ってわずかに北側が低くなっていた。

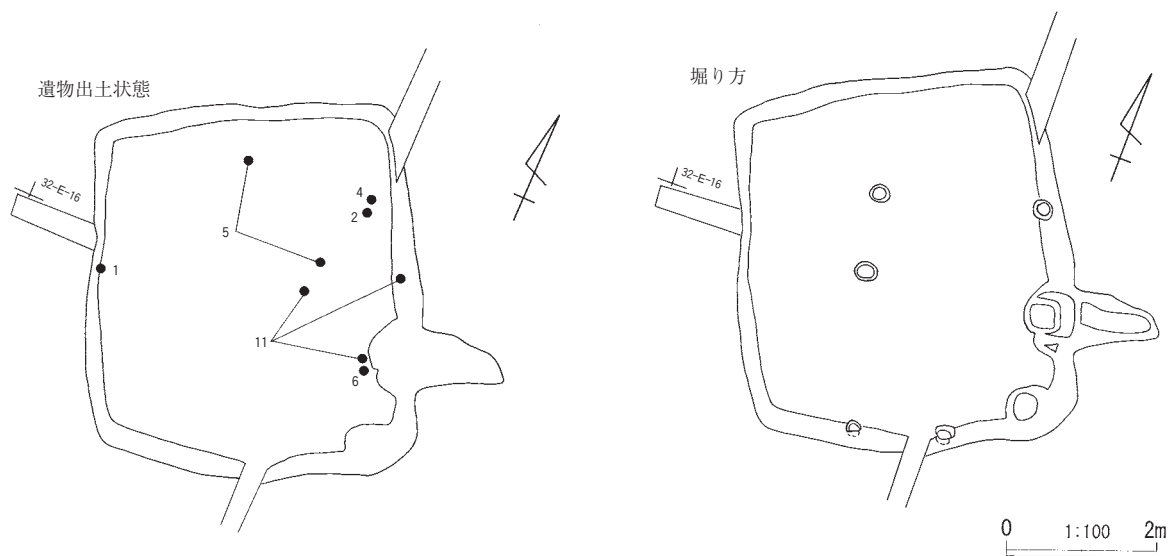
**柱穴** 主柱穴となりうる規則的な配置の柱穴はない。東壁と南壁の直下に、壁溝に重複して小ピットが2本ずつ見ついている。南壁下の2本は住居外側に向かうように傾いて掘られており、壁柱穴とは考えにくい。西側の2本も不明瞭である。

**掘り方調査時**に住居中央付近で2基のピット状の窪みを確認した。深さ10cmほどの不明瞭なもので、配置からも主柱穴とはなりえない。

**カマド** 東壁南寄りにある、粗粒安山岩割石を使った石組みカマドである。火床は住居外壁ライン上にあり、住居床面よりわずかに低くなっている。煙道は壁外へ130cm張出しており、割石で天井部分を覆っている。掛け口部・石製支脚上に須恵器壺が置かれている。この須恵器は口縁部をほとんど欠くが他は完存する土器であり、土師器に代えて、煮炊きに



第186図 V区1号住居



第187図 V区1号住居掘り方

使われたのであろうか。袖部は明確にできなかったが、石組みのカマドであり、壁際直近まで床の踏み固めが見られることから、住居内にはほとんど広がらない構造だったと考える。

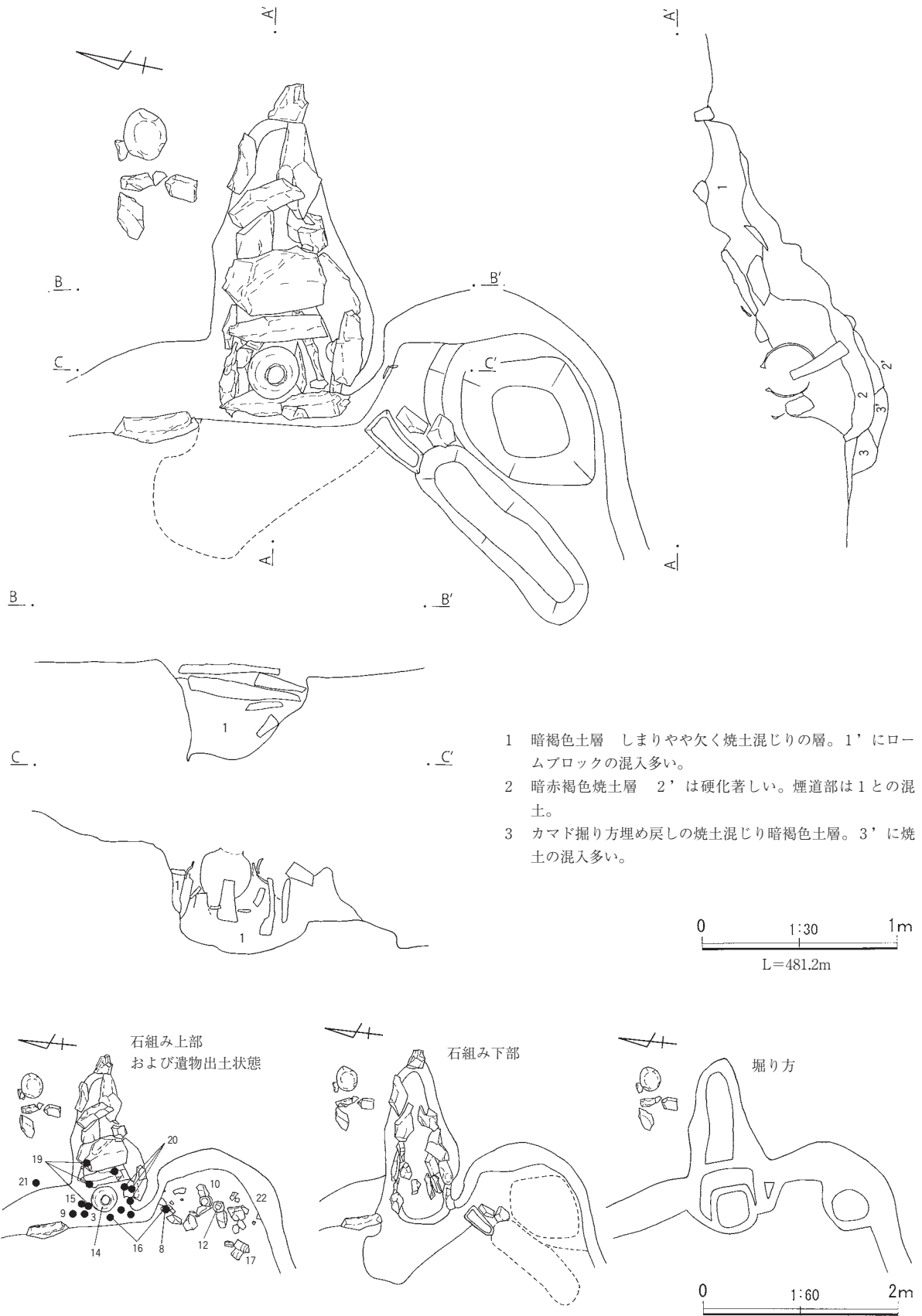
その他 カマド南脇南東隅付近に貯蔵穴の可能性のある浅い窪みがある。床面からの深さは最大30cmほどである。平面形状は不規則で、底面も平坦さを欠き不整である。不明瞭な施設だが遺物が底面付近にまで見られ、住居廃絶時には開口していたと思われる。住居側に向かって地山を掘り残した帯状のわずかな高まりが確認されている。

遺物 多数の土器を出土しているが、住居の東側に著しく偏っている。特にカマド内とその周辺から多数の土器を出土している。V区5軒の住居出土遺物の半数にあたる22個体の土器を図示した。椀類・甕類とも完形近くまで復元できた個体の多さが際立っている。

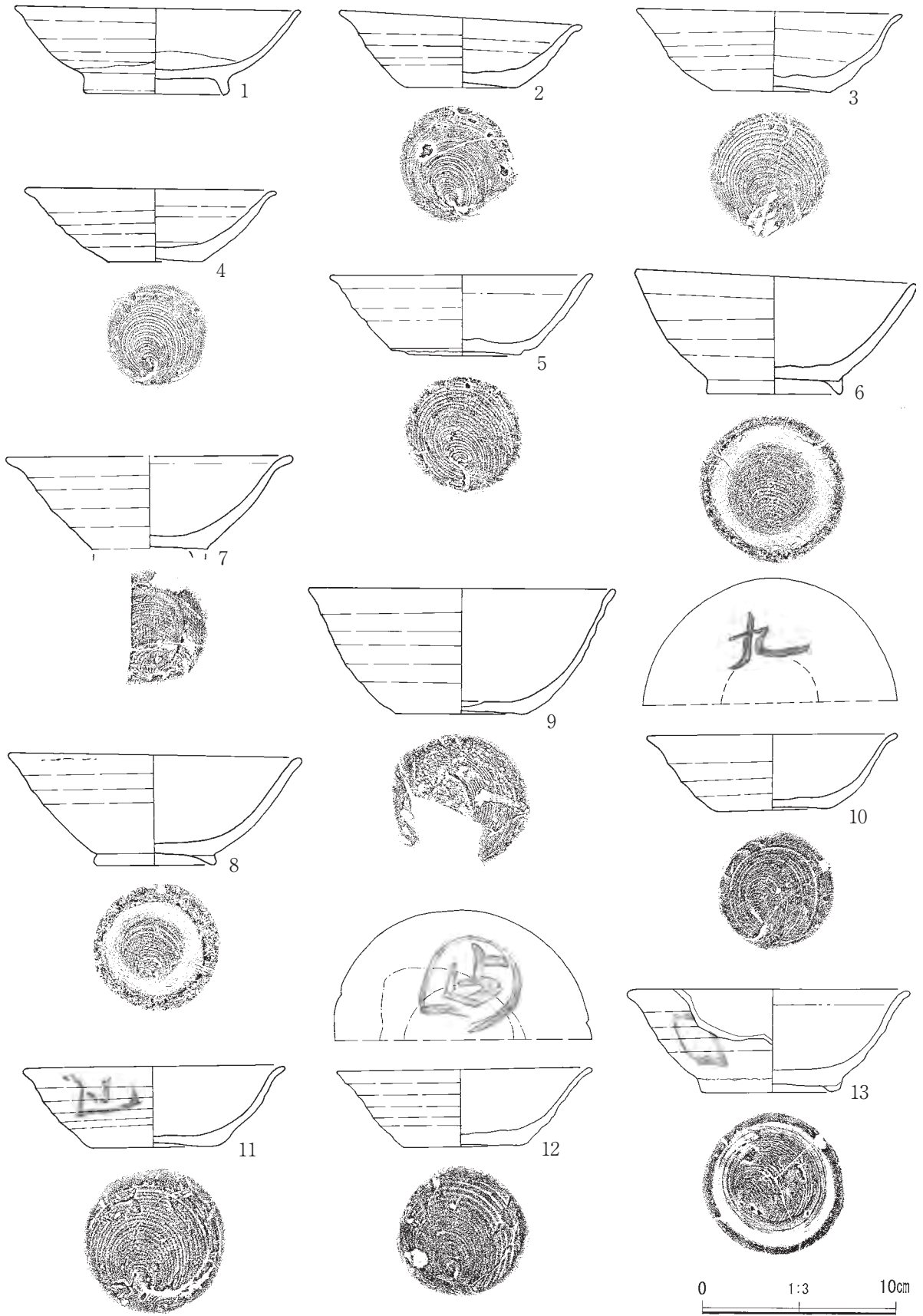
灰釉陶器は1の椀のみで、西壁際で他の遺物と離れていたが、床直上の出土で本住居に確実に伴う遺物である。杯類はカマド周辺に散在しており、2・4は住居北東側、10は南東側の隅付近床直上出土遺物である。8・9のようにカマド上焚き口脇からの出土例もある。墨書土器は須恵器椀に4点見られた

(10~13)。カマド周辺から出土した土師器ロクロ甕が2点ある(15・16)。16は接合しなかったが同一個体と考えられる上半部分と下半部分を合わせて図示した。掛け口に据えられた状態で出土したのが14の須恵器壺で、土師器の甕を多量に出土した遺構としては異様な感がある。その他にも19・20の土師器甕がカマド上から焚き口付近にかけて出土している。

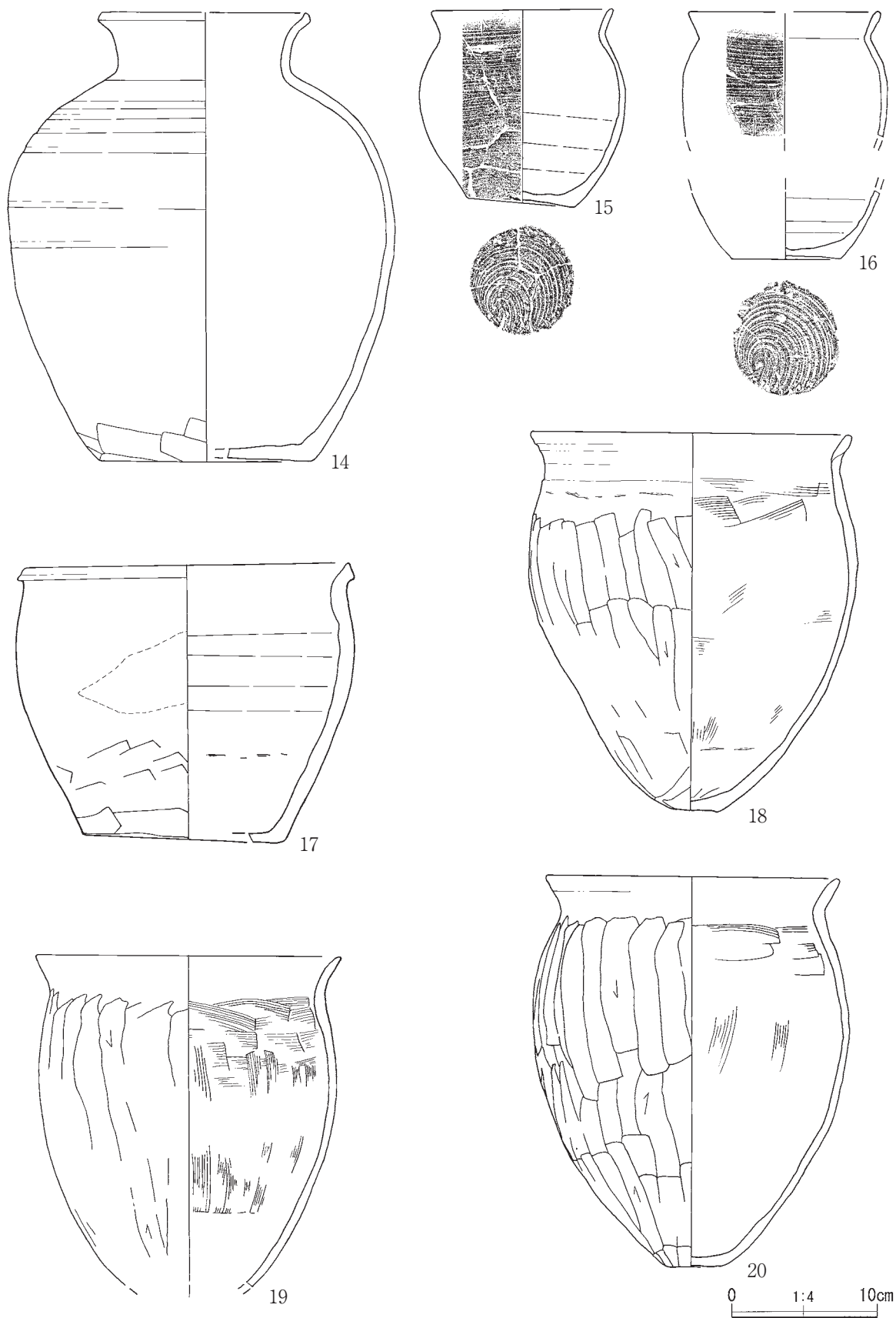
図示した以外にも杯類の破片は多かったが、土師器杯の出土はなかった。甕類にも他に3個体以上と思われる破片がある。



第188図 V区1号住居カマド

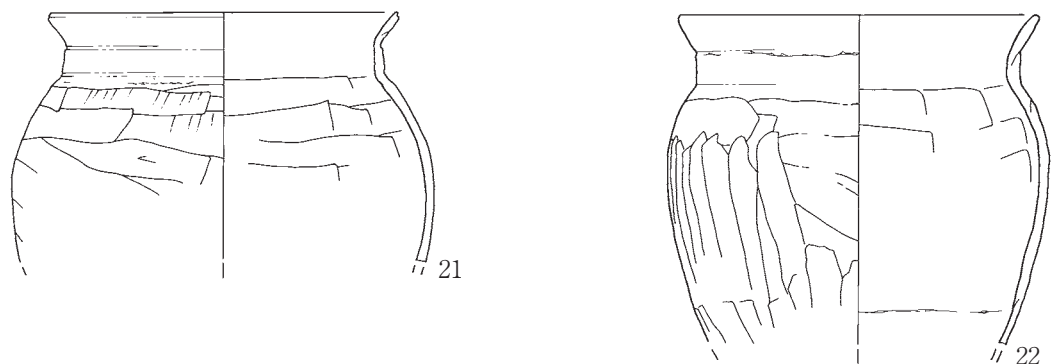


第189図 V区1号住居出土遺物(1)



第190図 V区1号住居出土遺物(2)





0 1:4 10cm

第191図 V区1号住居出土遺物(3)

### V区2号住居

1号住居から約16m西側に離れた位置にある。さらに西側約2mの位置に3号住居が近接している。

黒色土中での確認で、カマド焼土で住居の存在が想定されたが、埋没土から住居のプランを確定することの難しい遺構であった。

**位置** 32区H-15グリッド内に遺構の大半が収まる。ローム地山が西側に向かって低くなる傾斜変換点上にあたる。

**規模形状** 北辺が4.2mで最も長く、カマドのある東辺で3.4m、他辺で3.6mを測る。北辺が弓なりに強く歪んでいるが、南側の2辺は比較的整っている。このため平面は五角形に見えるような長方形を呈している。

**埋没土** 浅く不明瞭だが、炭化物の混入がやや多く、これをもとに地山との区別を行った。人頭大の川原石が床直上から数点出土しているが、廃絶前から本住居に伴っていたものか、埋没過程の当初段階に流れ込んだものか区別できなかった。

**方位** N-65° E

**面積** 14.4m<sup>2</sup>

**壁** 比較的状態の良い南壁で10cm前後、他辺は5cm前後の壁高しかない。

**床面** 地山土質が一様ではなかった。ローム状土が地山であったカマド前面と南壁下では踏み固めのある比較的明瞭な床であったが、他の場所では黒色

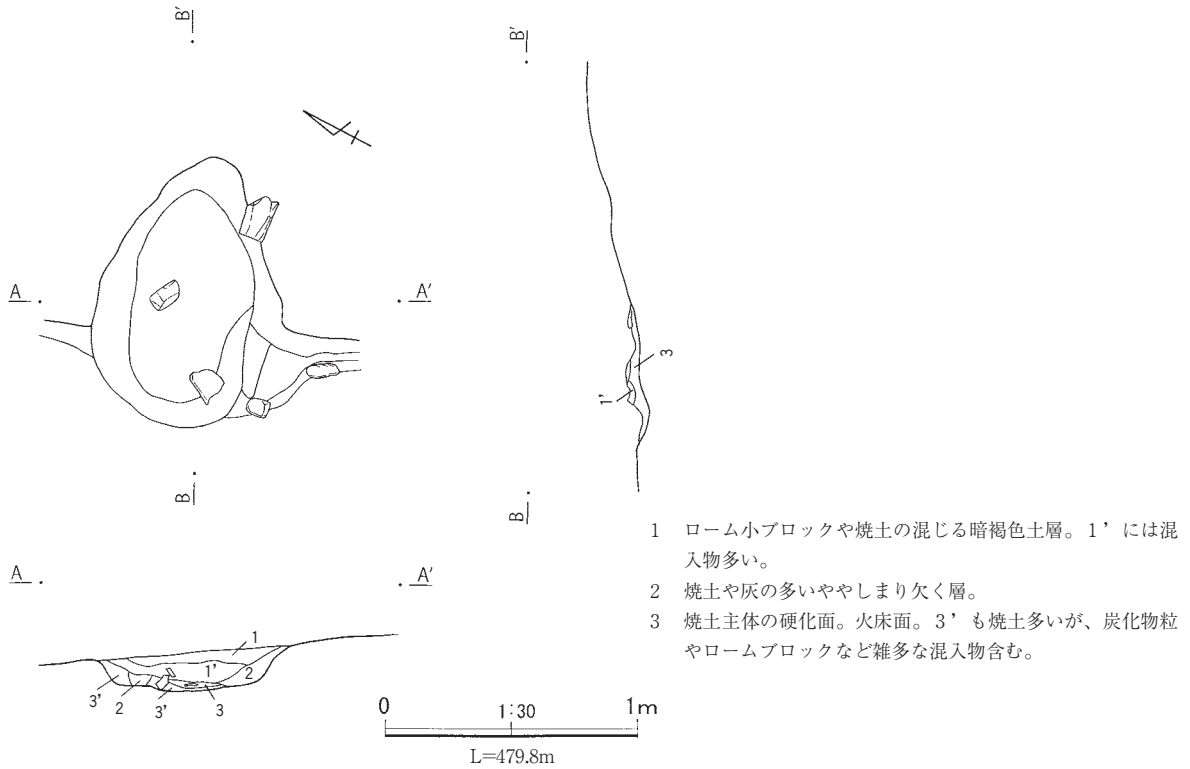
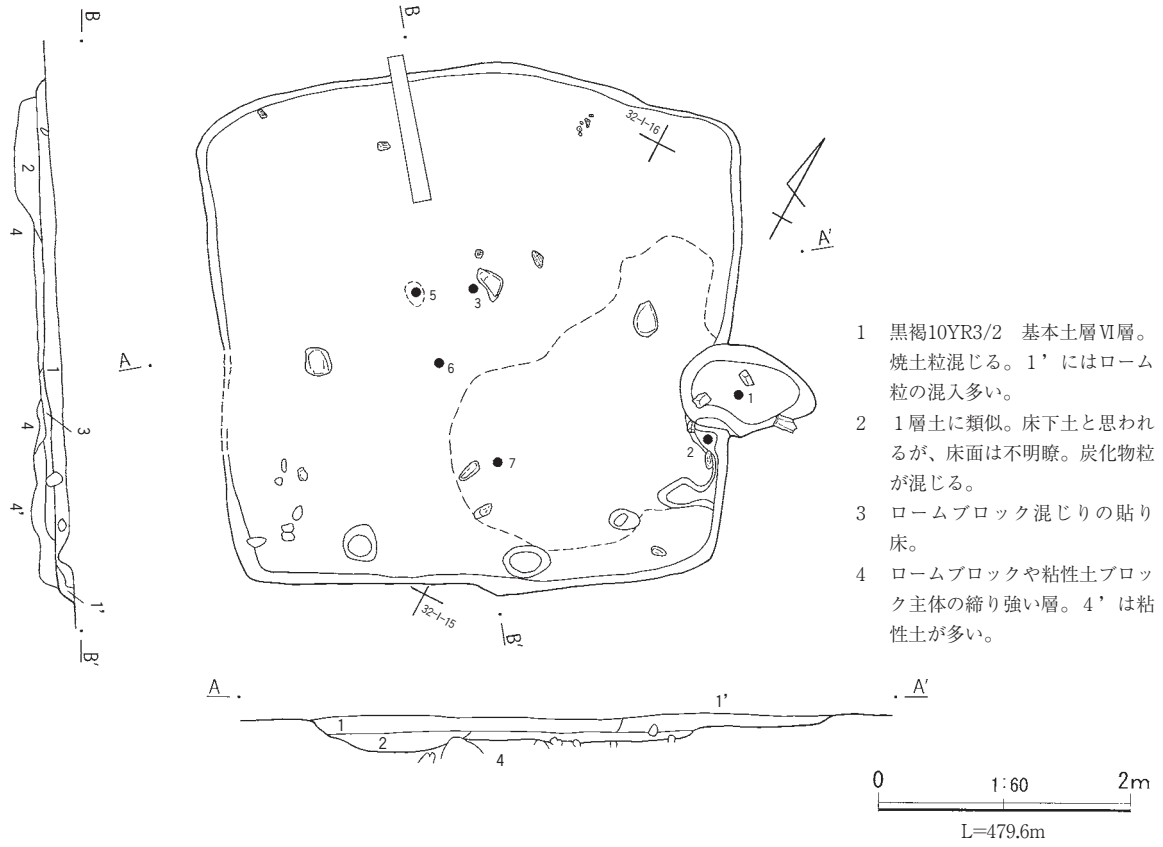
土内に床面があり、踏み固めが弱く、きわめて不明瞭であった。地山礫混じり層直上まで掘り下げ、10cmほどの厚さで埋め戻して貼り床を築いたと思われるが、地山土との区別が難しく明瞭なものではない。壁溝は確認できない。

**柱穴** 規則的配置の主柱穴はない。南壁直下に2基の不明ピットを確認している。床面からの深さはP1→21cm、P2→13cmで、柱穴的ではない。

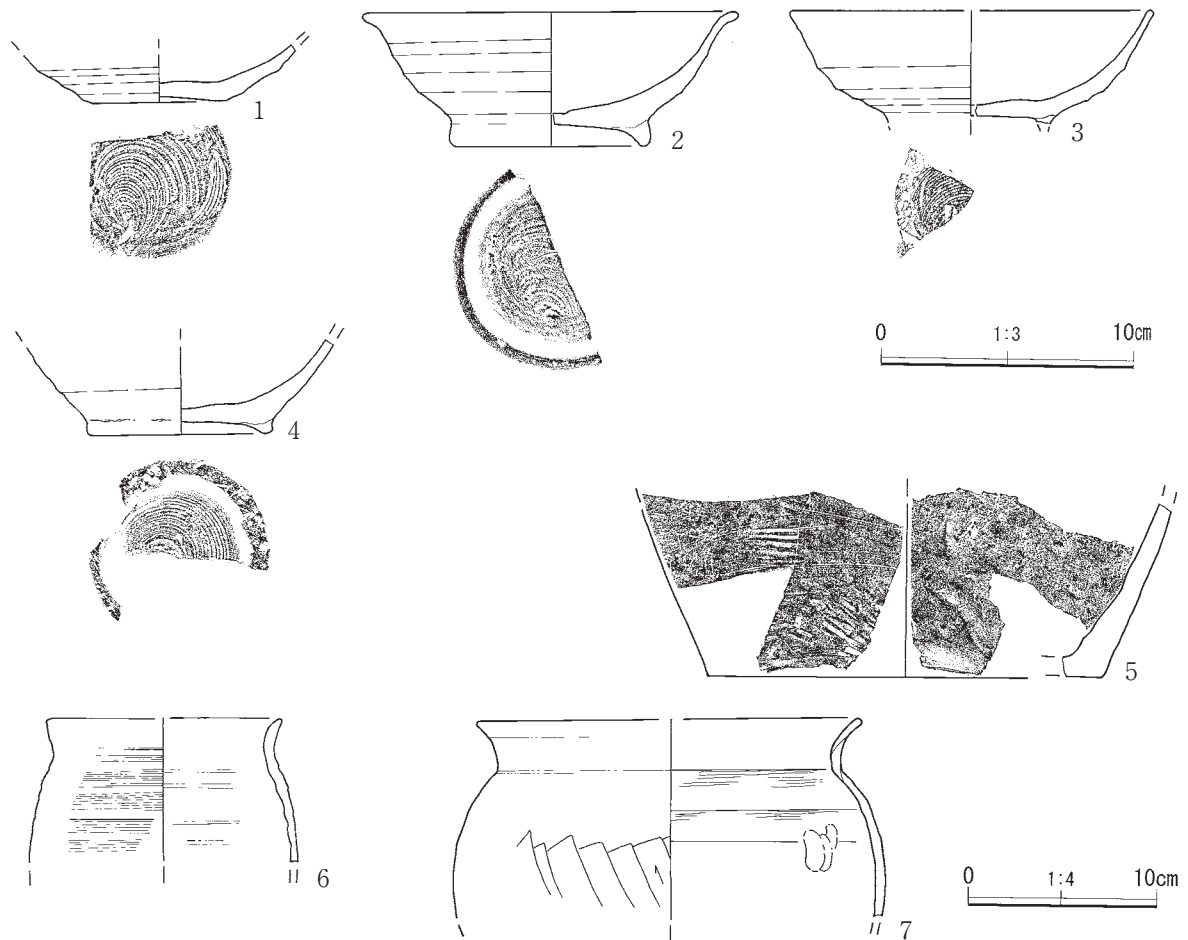
**カマド** 東壁の南寄りにある。ローム土や粘土を使った構築材は残存していなかったが、火床の一部が残存していたと思われ、焼土ブロックは比較的多かった。若干礫の出土があったが、石組みのカマドであったとは考えにくい。

燃焼部は住居壁外にあり、煙道は壁外へ70cm張出している。床面踏み固めが壁直下まで見られ、袖部は南側に僅かに痕跡を残すだけである。

**その他** 南東隅に最大深度8cmほどの不明瞭な窪みがある。北側には帯状わずかな高まりも見られ、1号住居と類似した施設となる可能性があるが、貯蔵穴とは考えにくい。



第192図 V区2号住居



第193図 V区2号住居出土遺物

**遺物** 出土遺物は少なく、土器のみであった。杯類を中心に7点を図示したが、完形品はない。

住居中央付近を中心にして周辺へ飛び散ったような出土状態である。カマド内から1、南脇から2が出土している。どちらも須恵器碗で、カマド周辺から煮沸具の出土はなかった。3～5は住居中央付近の埋没土内で出土した。7の甕は南寄りの床ほぼ直上からの出土である。甕類の出土は図示できなかった破片にも少ない。6の小型甕のみ住居中央付近の掘り方内の出土である。

**V区3号住居**

2号住居同様に、黒色土内でのカマド焼土の確認から、住居の存在を想定できた遺構である。東側隅付近は床が一段せりあがっている。断面の記録の残せなかった部分であるが、平面形状から推測して、壁を掘りすぎた可能性もあろう。西隅も明確にすることはできなかった。

**位置** 32区I～J-15グリッド

**規模形状** 南辺が3.3m、カマドのある東辺が3.2mでやや長い。一番短い北辺は2.8m前後と推定される。西隅付近が不明瞭だが、東辺以外は整った、台形気味のプランと思われる。

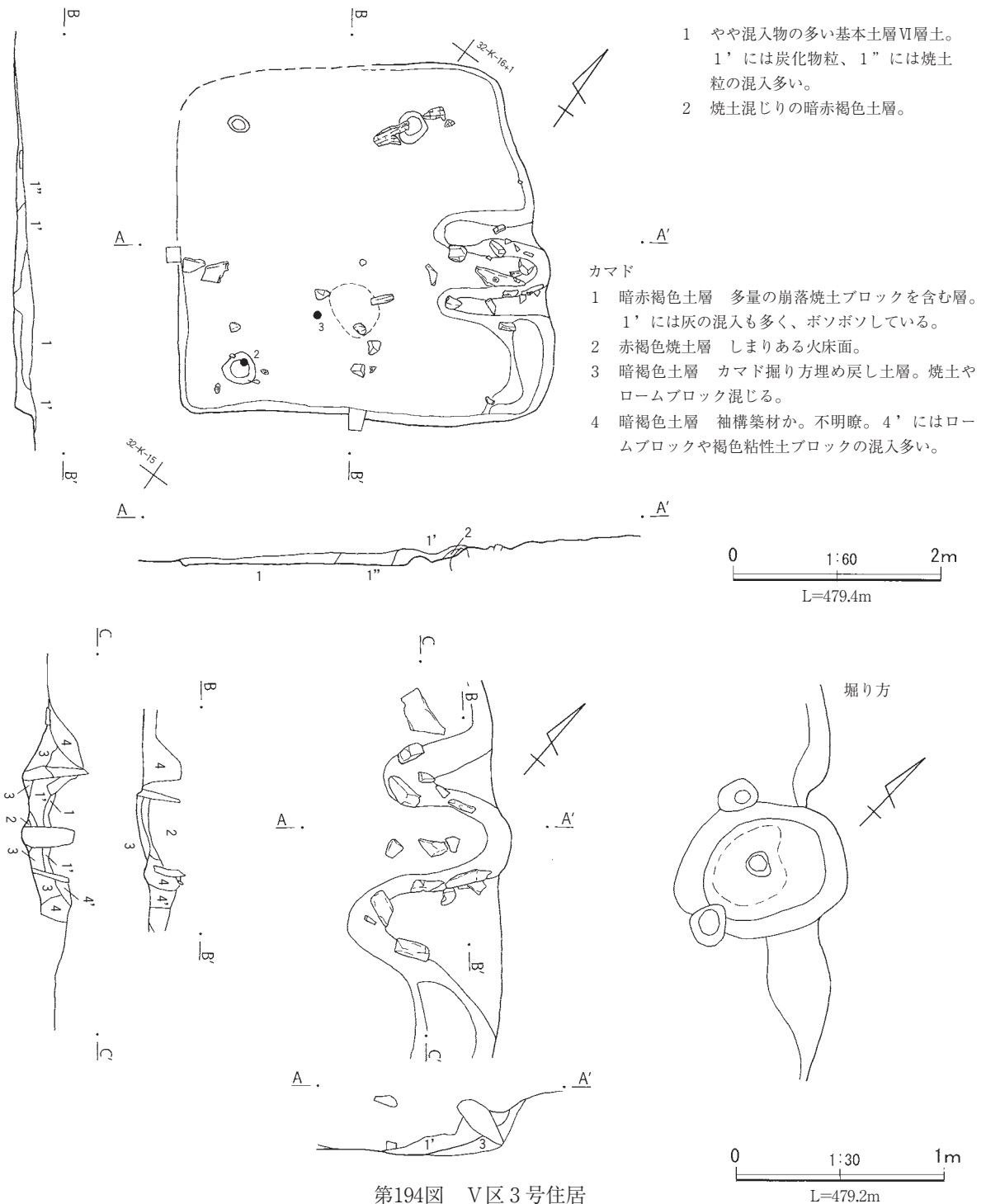
埋没土 浅いうえ、不明瞭な埋没土であった。炭化物や焼土の混入がなければ、地山との区別は難しかった。地山礫混じり層に直上に床面のある住居南側に礫の混入が多かった。

方位 N-57° E

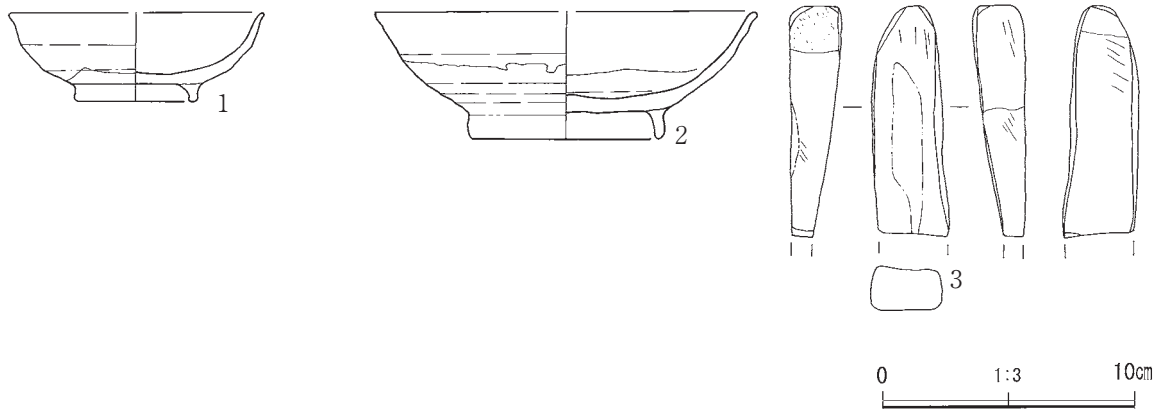
面積 9.48m<sup>2</sup> (東隅部分を含む)

壁 南東壁で10cmを超える高さのある部分があったが、他は6cm前後の部分がほとんどで、立上がり部付近がかりうじて確認できたのみである。壁溝は確認できない。

床面 カマド前から南壁際にかけて踏み固めが確認できたが、他の箇所では不明瞭であった。炭化物



第194図 V区3号住居



第195図 V区3号住居出土遺物

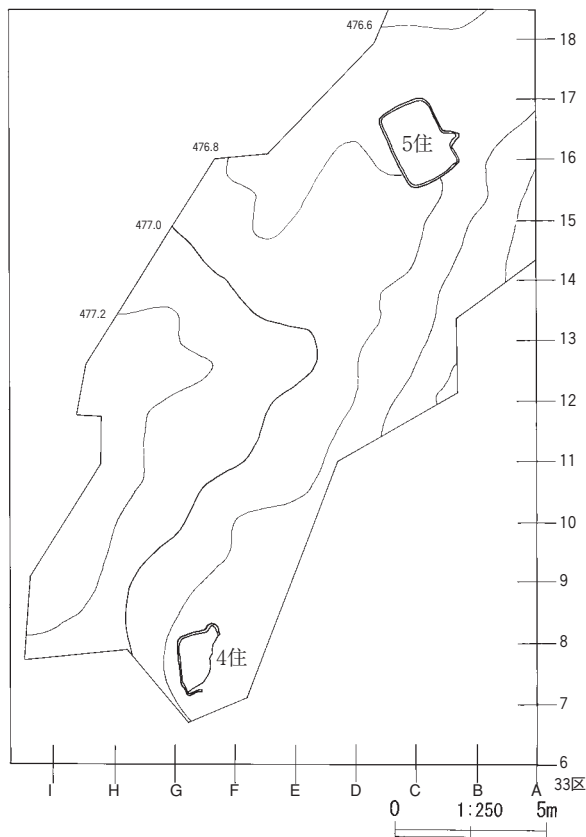
は床直上で見られるものが多かった。住居中央がやや低く、東側が高くなる傾向があった。

**柱 穴** 床面では規則的配置となる支柱穴は確認されない。小規模な柱穴状の窪みが3箇所、床下調査時に確認されている。おおよそ住居隅付近に配置するが不明瞭である。径に比して浅く、各窪みの住居床面からの深度は北側が8cm、西側が5cm、南側が8cmであった。

**カマド** 北東辺のやや南寄りにある。石組みのカマドであったと思われる、燃焼部を囲むように扁平な礫が多量に見られる。東隅付近が掘り過ぎであった場合、火床は外壁延長線付近にあたる。高さ25cmの礫利用支脚が火床中央に据えられていた。煙道部の掘り込みはほとんど見られない。掘り方調査時に燃焼部前側面付近に小規模な窪みを確認している。焚口に礫を据えた痕跡となる可能性がある。

**遺 物** 出土遺物はきわめて少なく、土器は小破片のみであった。多量の礫の散乱するカマド内にも土器の出土はほとんどなかった。

図示できた遺物は3点のみであるが、そのうち土器2点は灰釉陶器碗であった。いずれも南寄りの住居床面に散らばるようにして出土している。3の砥石は住居南寄りの床直上遺物である。



第196図 V区住居配置図

33区（2003年度調査）の住居跡

平安時代の2軒の住居が調査できたのみである。限られた調査範囲で残存状態も悪い地点である。付近は上位段丘と下位段丘の境が不明瞭で、北側に向かって緩やかに低くなる、やや不規則な傾斜面に位置している。近接する遺構は少なく、平安時代の遺物の出土も少ない。東側の平坦地に予想される集落の中心地から外れた、集落北西縁辺部分にあたるものと思われる。

V区4号住居

全竪穴住居中、北辺にカマド設けた本遺跡唯一の例である。残存状態はきわめて悪く、試掘トレンチで失った部分も含め、東半分は不明瞭である。

位置 33区F-7・8グリッド

規模形状 西辺は3.6m分確認できる。ほぼこの規模と思われる。北辺で確認できるのは3.0m分で、どの程度東側に延びるか推定する根拠を持たない。

埋没土 炭化物混じりで地山と区別できた。

方位 N-8° W

面積 [6.45] m<sup>2</sup>

壁 確認できる壁高は20~27cmである。西壁下と北壁下西側に壁溝らしい窪みがあるが、最大3cmほどの深さで不明瞭なものである、西側壁溝内には4箇所の窪みがある。径5~10cmの不整なプランで、深さは8~15cmある。根による攪乱の可能性もあり、本住居に確実に伴う施設か不明である。

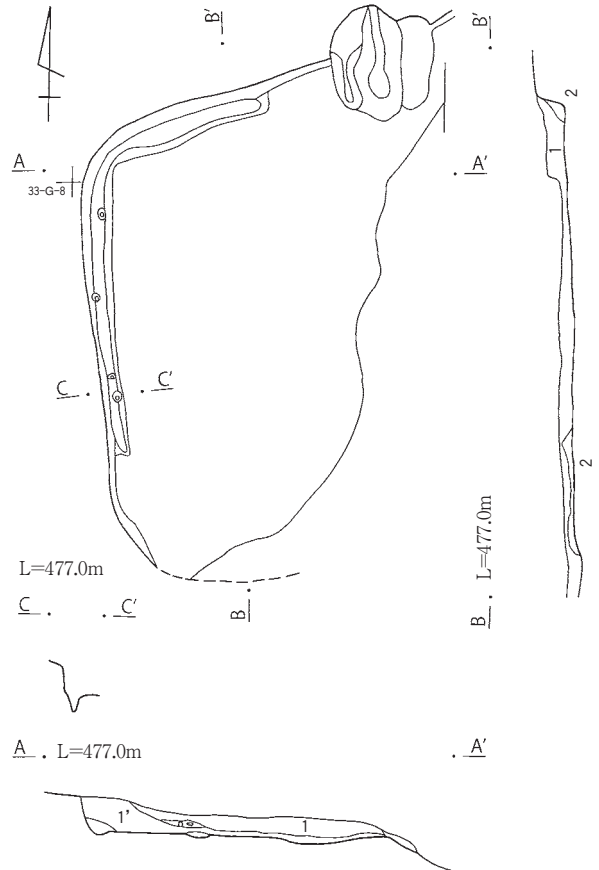
床面 部分的に弱い踏み固めがある程度で、わかりにくい床面だった。炭化材が床直上で出土しており、これを根拠に面を確定して広げていった。住居中央付近がやや高く、壁際に向かって5cm近く低くなっている。

柱穴 掘り方まで確認したが、柱穴の可能性のある落ち込みは見つからなかった。

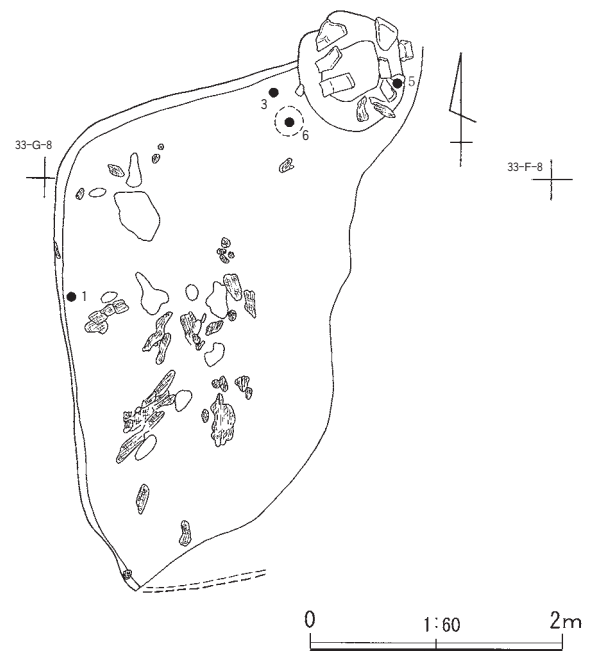
カマド 石組みのカマドだったと思われる。燃焼部を囲うように割石が配されているが、礫の上側を外方へ開くように散って火床より浮いた状態であった。東側の礫に地山まで埋め込まれたものがある。袖部分は不明である。

その他 炭化材の出土が多かった。住居西側を中心に最大50cmほどの長さで確認できる材もある。

遺物 出土遺物は少なかったが土器6点を図示できた。住居全域に散在するように出土している。1の完形耳皿が特筆される遺物で、西壁際の側溝上で住居床より3cm浮いた状態で出土した。本住居に伴う遺物と見なせよう。6の甕がカマド西脇の床直上につぶれるようにして出土し、完形近くまで復元できた。

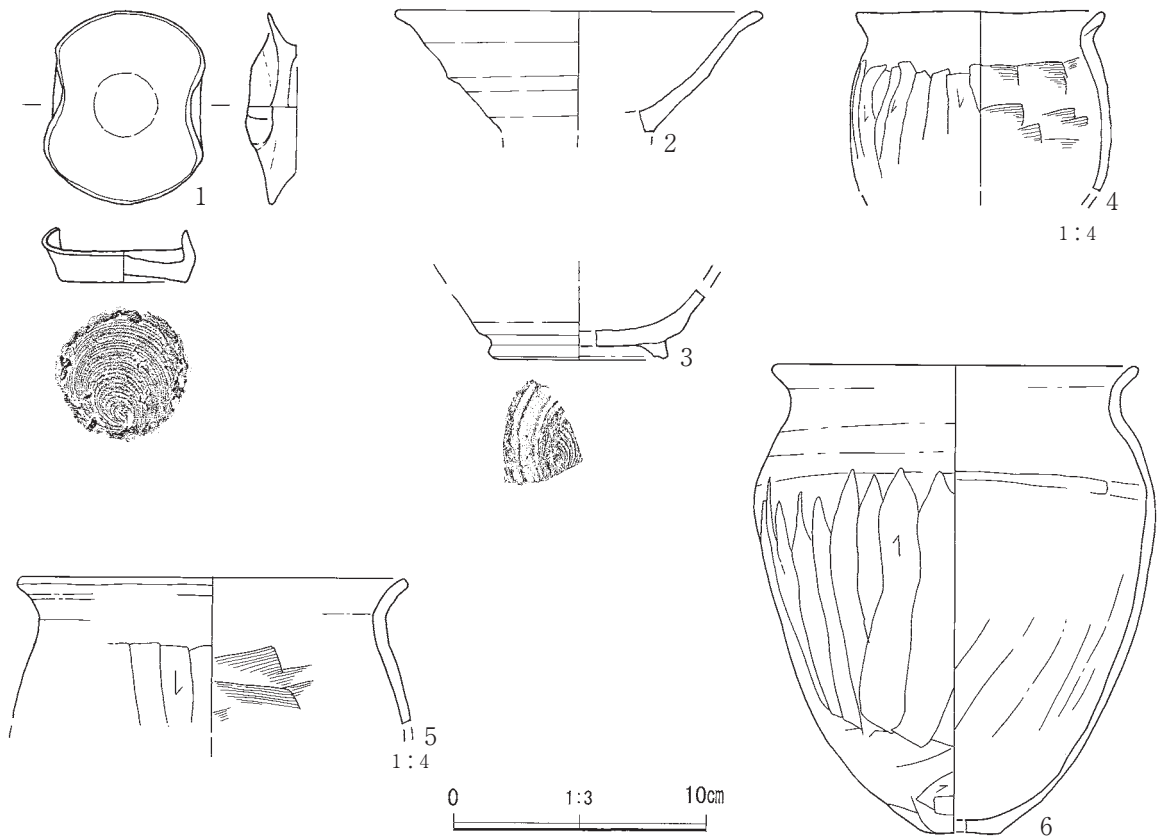
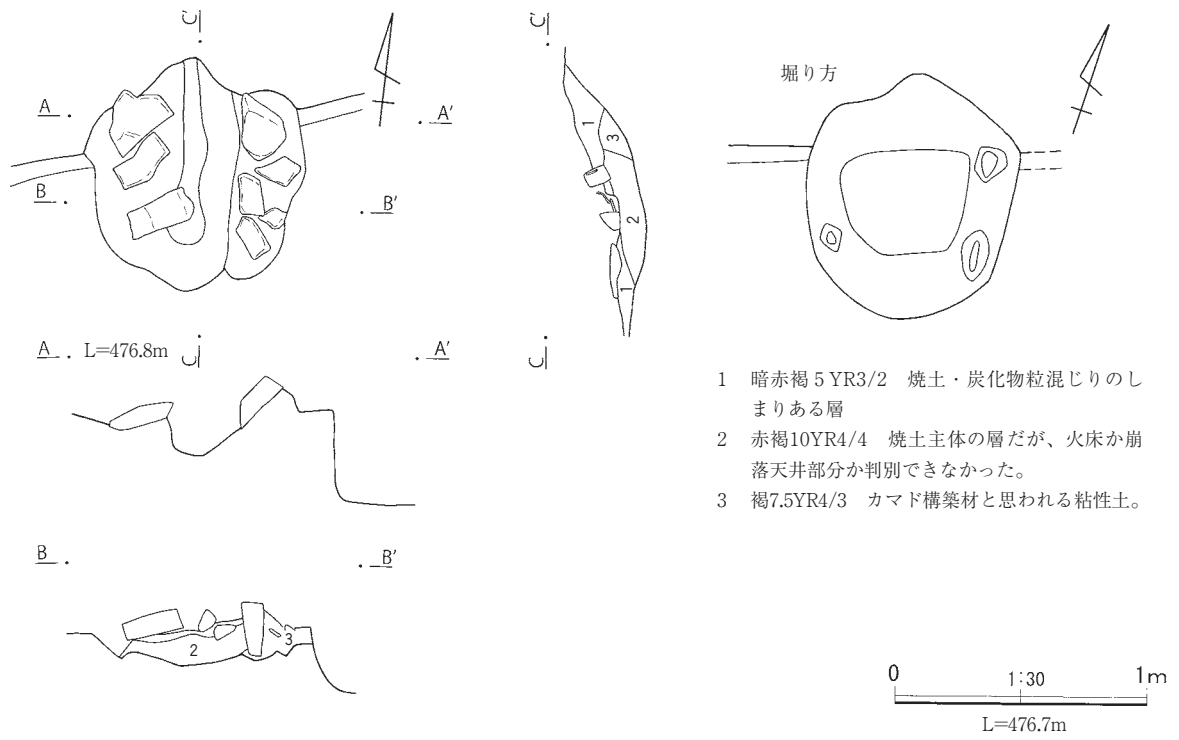


- 1 暗褐7.5YR3/3 炭化物混入し、1'で量増え焼土も混入。
- 2 黒褐10YR3/2 混入物少ない非粘性土層。



第197図 V区4号住居

第5章 V区の調査



第198図 V区4号住居カマドおよび出土遺物

## V区5号住居

4号住居から北東へ16m離れた位置にある住居である。ここは斜面の傾斜が緩くなり、わずかだが馬の背状に平坦になった地点を選んで建てた住居と思われる。

**位置** 33区B・C-15・16グリッド

**規模形状** カマドが長辺側に付く横長長方形を呈しているが、各辺の長さは一様でない。カマドのある東辺が4.9m、対向する西辺は5.2mある。南辺3.5mに対し北辺は3.2mとなる。各隅が整っており、プラン全体は整った長方形に見える。

**埋没土** 焼土・炭化物粒を含むがローム状土の混入多く、黄色味をおびた住居埋没土らしくない土であった。カマド前面には大型の割れ石の混入が多かった。カマド天井部に使われた礫が流れ込んだものと思われる。

**方位** N-65° E

**面積** 17.8m<sup>2</sup>

**壁** 南側で40cm前後、北側で25cm前後の壁高がある。一部上半で屈曲するように開いているが、直線的に開いている部分が多い。

**壁溝** 東隅、南壁下やカマド南側などで途切れる変則的な壁溝である。床面からの深さは東辺と北辺では2cm前後で不明瞭だが、西辺は5～7cmあり明瞭になっている。

**床面** 床面レベルは住居中央がやや高く、四隅に向かってやや低くなる傾向がある。北側に向かって低くなる地山傾斜の影響は受けていない。住居粗掘り時の掘り過ぎ部分を埋め戻す程度の、浅い掘り方が確認できる。

**柱穴** 主柱穴配置を作るような施設はない。床面レベルで3基のピットを調査している。床面からの深さはP1→38cm、P2→33cm、P3→21cmで形状は柱穴のだが、断面に柱痕は表れない。各ピットの埋没土は住居埋没土に近似しており、住居廃絶時に開口していた施設と考えたい。特にP3には炭化物の混入が顕著で、床面同様の様相であった。

これとは別に掘り方調査時に規則的な配置となる

4箇所の窪みと中央に1箇所の窪みが見つかった。広い平面形状に対し深さは乏しく、柱穴とは考えにくい。しまり強い埋没土は掘り方埋め戻し土とも異なっていた。

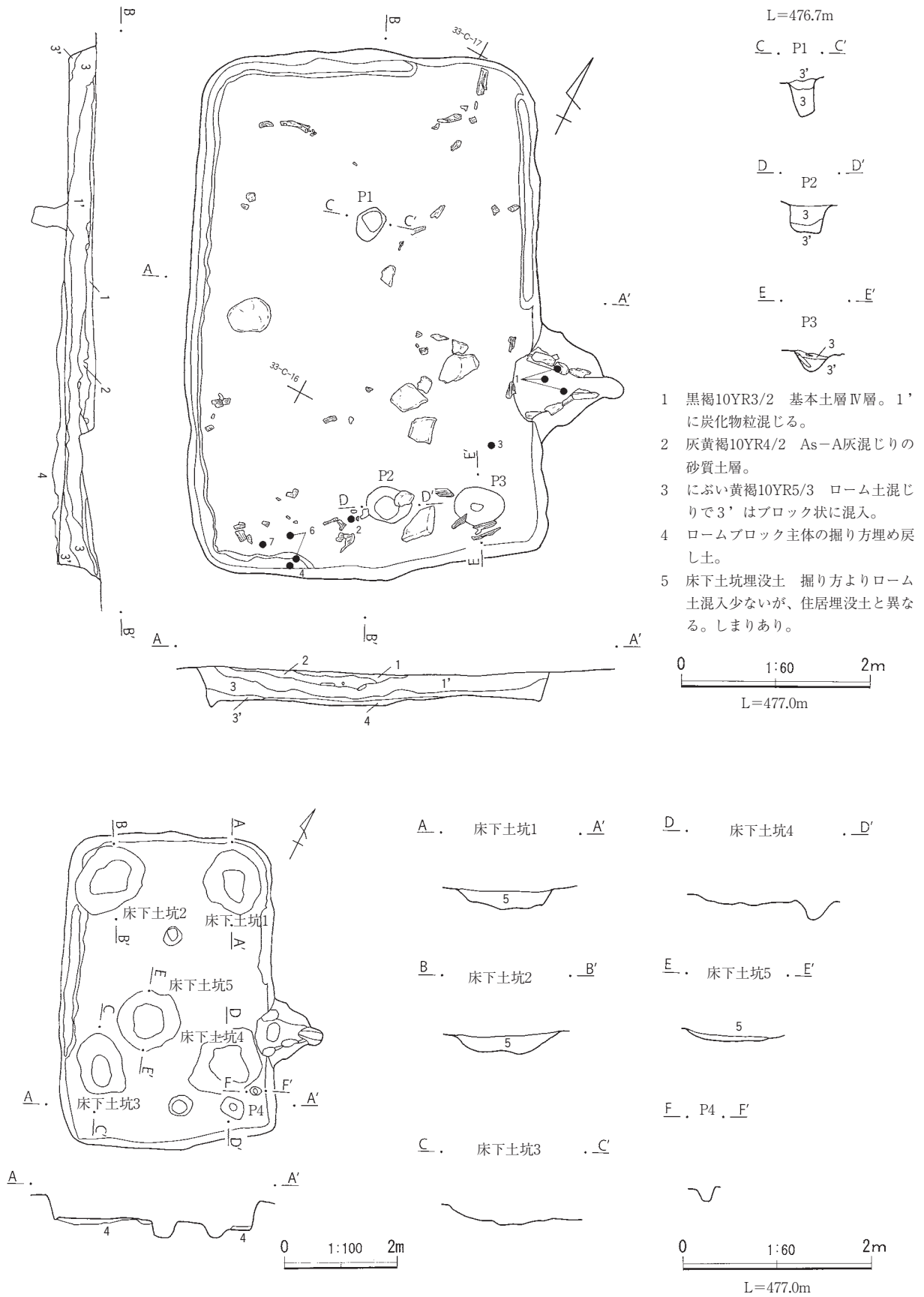
**カマド** 東壁の南寄りにある。石組みのカマドで、板状の割石で燃焼部を囲っている。割石には他の石組みカマドに比べ、際立って薄い材を使用している。燃焼部は壁外にあり、火床は住居床面より6cm低くなっていた。煙道の張出しは壁外90cmまで測れる。袖部分は残存していなかった。構築材らしい粘性土の存在も断面観察からは明瞭にできていない。カマド掘り方には割石を据えた時の窪みが残っている。特に南壁には細い割石を据えた側溝状の窪みが観察できる。

**その他** 炭化材・焼土の出土がきわめて多かった。大きな材はなかったが、床面の直上で確認できるもので、住居のほぼ全域に広がっていた。

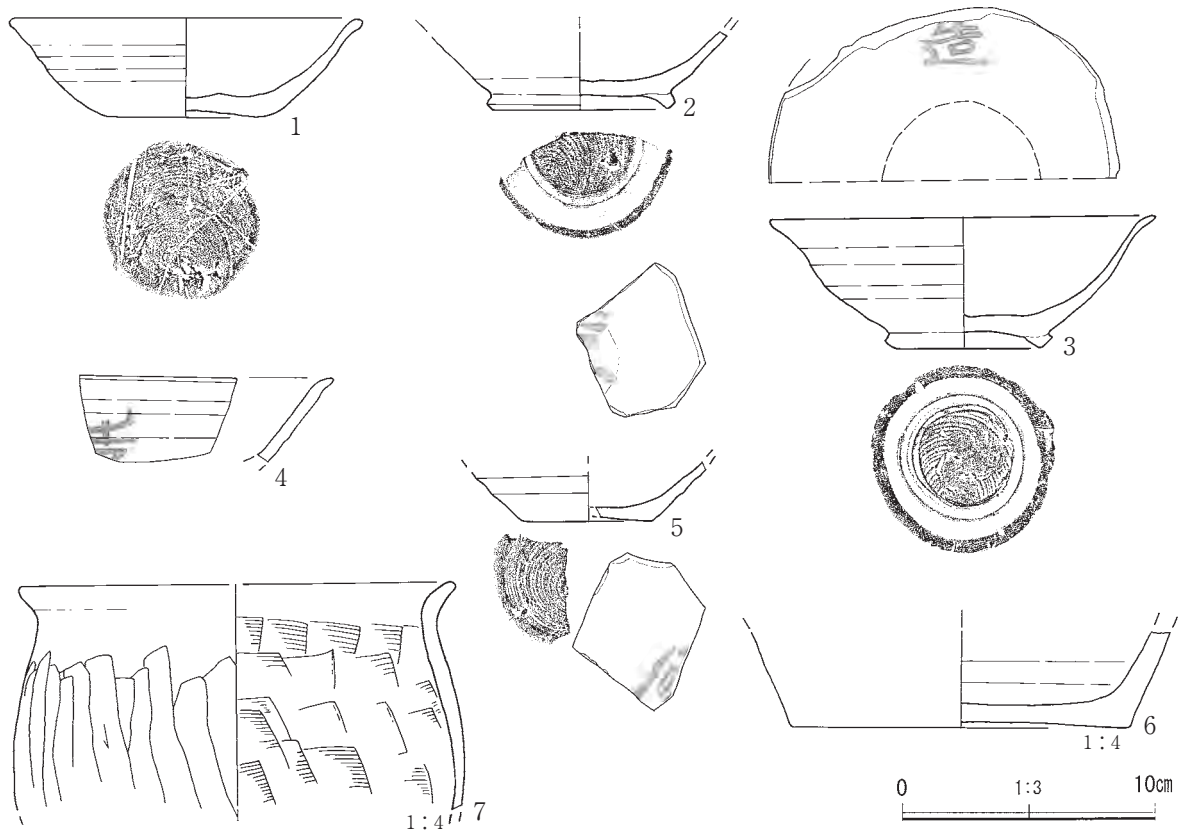
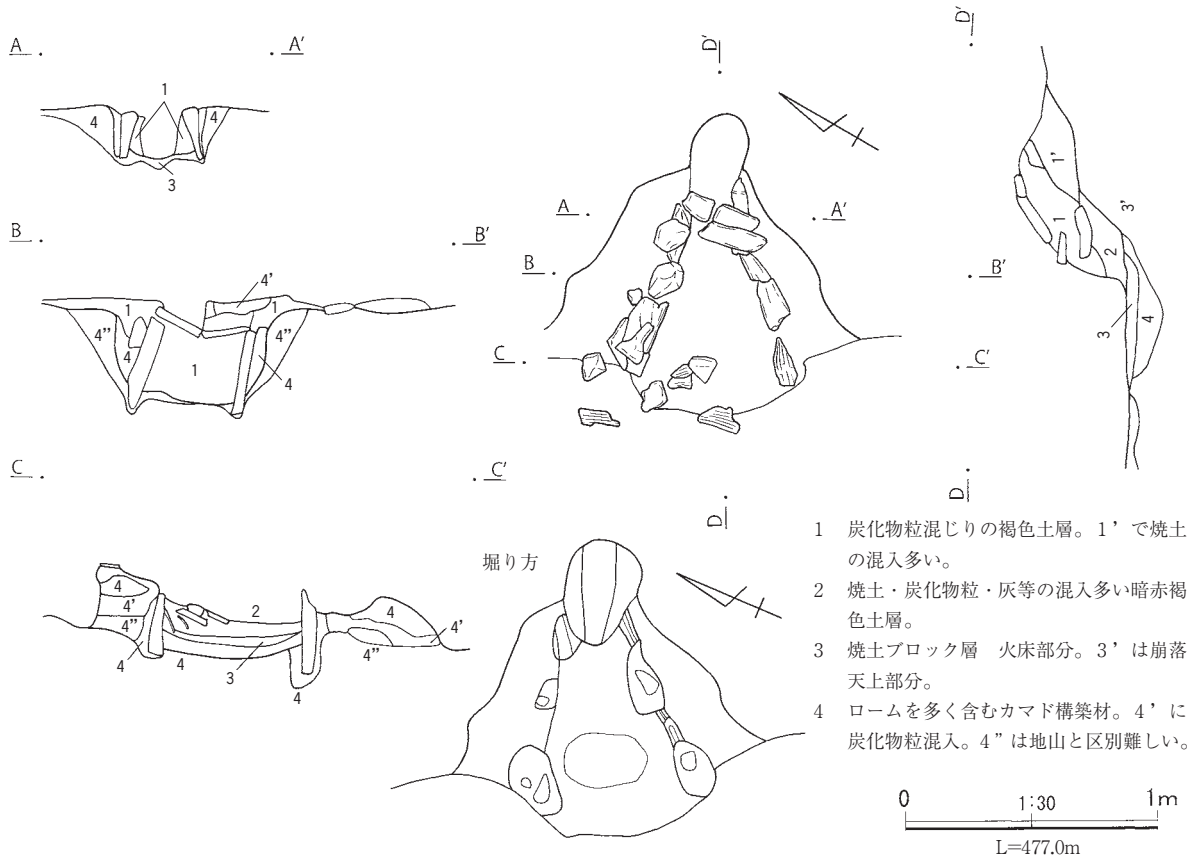
**遺物** 7点の土器を図示した。遺物総量は少なかったが墨書土器の出土が多いのが特徴で、4点すべてを図示した。

出土位置は住居の南半に偏っている。2・6・7が南壁直下の出土であるが、住居床面から10cm以上浮いた状態だった。3の須恵器椀はカマド前の出土で、やはり床上10cm以上浮いていた。カマド内や周辺から煮沸土器の出土はなく、本住居に確実に伴う資料として示せるのはカマド内から1の須恵器椀のみである。





第199図 V区5号住居



第200図 V区5号住居カマドおよび出土遺物



第201図 V区2・3面遺構外遺物

## 9 V区遺構外の遺物

V区は遺物の少ない一画であったが、2・3面の遺物は特に少なかった。

図示した2点の土師器甕は2号掘立柱建物柱穴内の遺物だが、混入品と考え、本項で扱った。同一個体の可能性がある。2号掘立柱建物は5号住居の位置に近い。この住居から混入した可能性が強いが、図示した遺物は住居の時期よりやや古いようにも見える。別の住居が存在したことも考えられよう。

## 第6章 付編

### 1 出土人骨分析

榑崎 修一郎

はじめに

上郷岡原遺跡は、群馬県吾妻郡東吾妻町三島に所在する。八ッ場ダム建設に伴う発掘調査が、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団により、2006(平成18)年4月～同年12月まで実施された。

本遺跡のⅣ区2面の1号墓坑より、近世の人骨が1体出土したので以下に報告する。なお、下顎骨の計測方法はマルティン [Martin] の方法(馬場, 1991)に従い、歯の計測方法は藤田の方法(1949)に従った。また、下顎骨の計測値の比較は、江戸時代人は鈴木(1967)を中世人は鈴木他(1956)を引用し、歯の計測値の比較は、MATSUMURA [松村](1995)を引用した。

上郷岡原遺跡第2次調査では、Ⅲ区2面より中世人骨が13体出土しておりすでに本報告者により報告されているので参照されたい(榑崎, 2007)。

#### 1. 人骨の出土状況

人骨は、直径約70cm・深さ約50cmの円形土坑から出土している。

#### 2. 人骨の出土部位

人骨の残存状態は、あまり良くないが、出土部位は全身にわたる。

#### 3. 副葬品

副葬品は、銭貨の寛永通宝が5点出土している。



写真1. 上郷岡原遺跡Ⅳ区2面1号墓坑出土人骨出土状況

#### 4. 被葬者の頭位及び埋葬状態

人骨の出土状況から、被葬者の頭位は北側で座葬で埋葬されたと推定される。

#### 5. 被葬者の個体数

出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

#### 6. 被葬者の性別

被葬者の性別推定に有用な寛骨は残存状態が悪く、性別推定はできなかった。しかしながら、歯冠計測値は大きく、また一部残存している上腕骨及び大腿骨の骨幹部は頑丈で大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

#### 7. 被葬者の死亡年齢

歯の咬耗度を観察すると、象牙質が線状あるいは点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。また、頭蓋骨の主要縫合である矢状縫合・ラムダ(人字)縫合の癒合度を観察すると内板はほぼ癒合した状態であるのに対し、外板はまだ癒合していない状態である。したがって、総合的に被葬者の死亡年齢は、約30歳代～40歳代であると推定される。

#### 8. 被葬者の古病理

##### (1) 歯石

歯石は、主に舌側面にわずかな付着が認められた。

##### (2) 齲蝕(虫歯)

齲蝕は、認められなかった。

##### (3) 歯の生前脱落

歯の生前脱落は、上顎では主に左右大臼歯部が、また下顎では右第2及び第3大臼歯・左第1小臼歯～第3大臼歯が生前脱落していたと推定される。

まとめ

上郷岡原遺跡(2)のⅣ区2面1号墓坑より、近世の人骨が1体出土した。被葬者は、約30歳代～40歳代の男性1体が座葬で埋葬されたと推定された。

謝辞

本遺跡出土人骨を報告する機会を与えていただき、本遺跡に関する考古学的情報をいただいた、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の飯田陽一氏に感謝いたします。

引用文献 [著者名のABC順]

馬場悠男 1991 『人類学講座別巻1 人体計測法：II 人骨計測法』, 雄山閣出版  
 藤田恒太郎 1949 歯の計測規準について, 「人類学雑誌」, 61: 1-6  
 権田和良 1959 歯の大きさの性差について, 「人類学雑誌」, 67: 151-163  
 MATSUMURA, Hirofumi 1995 *A microevolutional history of the Japanese as viewed from dental morphology*, National Science Museum Monographs No.9,

National Science Museum

榑崎修一郎 2007 9. 出土人骨分析, 『上郷岡原遺跡(1)』, 第4分冊自然科学分析, (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団, p.67-77.  
 鈴木 尚 1967 「V. 頭骨」, 『増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体』, 東京大学出版会, p.121-274.  
 鈴木 尚・林 都志夫・田邊義一・佐倉 朔 1956 「XI. 頭骨の形質」, 『鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨』, 岩波書店

表1. 上郷岡原遺跡(2) 出土人骨下顎骨計測値及び比較表

Martin's No.	計測項目	上郷岡原遺跡	江戸時代人*		中世人**		現代人***	
			♂	♀	♂	♀	♂	♀
下顎骨								
67	前下顎幅	50 mm	47.8 mm	44.7 mm	48.4 mm	45.9 mm	-	-
69	頤高	41 mm	34.5 mm	32.5 mm	32.7 mm	28.7 mm	36.1 mm	33.2 mm
69 (1)	下顎体高	34 mm[右]	33.0 mm	30.2 mm	30.9 mm	27.0 mm	-	-
		(30) mm[左]						
69 (2)	下顎体高	(27) mm[右]	28.5 mm	24.9 mm	27.1 mm	23.9 mm	-	-
		(26) mm[左]						
69 (3)	下顎体厚	12 mm	13.2 mm	11.8 mm	13.9 mm	12.9 mm	-	-

註1. 計測値が( )で囲まれているものは、歯の生前脱落により計測値が影響を受けていることを示す。  
 註2. 「\*」鈴木(1967)から引用  
 註3. 「\*\*」鈴木他(1956)から引用  
 註4. 「\*\*\*」森田から引用

表2. 上郷岡原遺跡(2) 出土人骨出土永久歯歯冠計測値及び比較表

歯種	計測項目	上郷岡原遺跡		江戸時代人*		中世時代人*		現代人**	
		右	左	♂	♀	♂	♀	♂	♀
上顎 I2	MD	7.7	7.16	6.97	6.98	6.85	7.13	7.05	
	BL	7.2	6.74	6.33	6.55	6.26	6.62	6.51	
下顎 I1	MD	5.6	5.45	5.32	5.42	5.22	5.48	5.47	
	BL	6.0	5.78	5.65	5.78	5.61	5.88	5.77	
下顎 I2	MD	6.7	6.09	5.97	6.04	5.78	6.20	6.11	
	BL	6.6	6.29	6.11	6.22	5.98	6.43	6.30	
下顎 C	MD	7.6	7.06	6.69	6.88	6.55	7.07	6.68	
	BL	8.0	8.04	7.39	7.82	7.33	8.14	7.50	
下顎 P1	MD	7.9	7.32	7.05	7.07	6.96	7.31	7.19	
	BL	9.2	8.34	7.89	8.10	7.72	8.06	7.77	
下顎 P2	MD	8.4	7.45	7.12	7.12	7.00	7.42	7.29	
	BL	9.0	8.68	8.30	8.49	8.06	8.53	8.26	
下顎 M1	MD	12.1	11.72	11.14	11.56	11.06	11.72	11.32	
	BL	12.2	11.15	10.62	11.00	10.49	10.89	10.55	
下顎 M2	MD	生前	11.39	10.78	11.06	10.65	11.30	10.89	
	BL	脱落	10.75	10.21	10.55	9.97	10.53	10.20	
下顎 M3	MD	生前	-	-	-	-	10.96	10.65	
	BL	脱落	-	-	-	-	10.28	10.02	

註1. 計測値の単位は、すべて、「mm」である。  
 註2. 歯種は、I1(第1切歯)・I2(第2切歯)・C(犬歯)・P1(第1小臼歯)・P2(第2小臼歯)・M1(第1大臼歯)・M2(第2大臼歯)・M3(第3大臼歯)を意味する。  
 註3. 計測項目は、MD(歯冠近遠心径)・BL(歯冠唇舌径)を意味する。  
 註4. 「生前脱落」は、生前に脱落して歯槽が閉鎖していることを意味する。  
 註5. 「死後脱落」は、死後に脱落して歯槽が開放していることを意味する。  
 註6. 「\*」は、MATSUMURA(1995)より引用。なお、MATSUMURA(1995)にはM3(第3大臼歯)のデータは無い。  
 註7. 「\*\*」は、権田(1959)より引用。



写真2. 上郷岡原遺跡(2) 出土人骨  
 [上: 上顎骨咬合面観、下: 下顎骨咬合面観]

## 2 成果と問題点

### 1 天明三年泥流下

#### ◎ 麻畑について

天明三(1783)年の泥流が発生したのは新暦で8月5日にあたる。麻の収穫(麻コギ)は農事暦から7月下旬から8月上旬と考えられているが、これまでの上郷調査で麻コギの痕跡は確認できずにいた。浅間山の噴火に伴う麻の生育不良で収穫が大幅に遅れたことを想定したが、2006年度の調査でⅣ区17区画畑で「根きり」作業の痕跡が確認できた。天明三年8月5日に麻の収穫が既に着手されていたことが確認できた。その他に「葉キリ」の痕跡の可能性を示す地点も見つかっている。なぎ倒された麻が多量に残る麻畑はすべて畝間が狭いことが本遺跡で確認されている。畝が明瞭でないが30cmほどの狭い畝間が推定される畑は収穫が終わって踏み荒らされた麻畑の可能性はある。

度重なる噴火による降灰の中で、麻に関しては収穫までたどり着いたことが確認された。それでも収穫の遅れは否定できない。泥流被害は麻生産に壊滅的な被害をもたらしたであろうという推測にも変更の余地はない。

#### ◎ 水田と畑

本遺跡ではⅢ区の調査『上郷岡原遺跡(1)』で狭隘な谷地水田が確認されている。この谷はⅡ区へ続いているが、Ⅲ区水田面より標高が1m以上低いⅡ区部分では畑になっている。本報告で扱った範囲にも湧水の多い地点は数多く含まれているが、水田の痕跡は全く認められない。北斜面で日照に恵まれていないということや湧水の低温などの原因もあろうが、水田志向に傾かないこの地域の特色(麻の特産地)が見られると推測したい。

上郷岡原遺跡1面畑は、畝・サク方向により下記のような4分類が可能である。摘要について箇条書きを加えた。

#### ①縦(南北)方向

・南北に延びる短冊形畑区画の長軸に沿う。等高線に対しほぼ垂直。

・水はけに有利。種や幼苗は流れ、根は洗われるおそれがある。

・畝サクの間隔が広い。

・少ない。この類同士が隣り合わせで確認できるのは1地点(18区画2・5号畑)のみ。

→ イモ栽培が想定されるか。

#### ②横(東西)方向

・南北に延びる短冊形畑区画の短軸に沿う。等高線に対しほぼ平行する。

・水はけ悪い。土は流れにくい。根腐れのおそれ

・畝サクの間隔は普通または狭い。

・隣り合わせに存在し広大な区画(14区画・17区画・Ⅴ区など)を作る場合も多い。

・最も多く、全体の過半を占める。

・不明瞭な畝サクとなるのは、この類がほとんど。

・平坦面もこの類に付帯するのがほとんど。

・麻畑は確認できる範囲でこの方向にある。

#### ③斜(鋭角)方向

・南北に延びる短冊形畑区画に斜交。南東側→北西側を向く。

・水はけ・流失の恐れは①②の中間。

・類同士で隣接して存在する傾向(12区画・18区画)がある。“横方向”ほど広がりはない。

・畝サク間隔は普通または狭い。

・②に次いで多い。

#### ④やや斜方向

・基本は“横”で分類の妥当性は疑問。

・道沿いなど外的制約による可能性も。

・畝サク幅はやや広い。

・局所的で規模も小さい。

#### ◎ 円形平坦面と畑境

16区画畑は麻を生産した畝サクの間隔の最も狭い畑である。短冊形の南北に長い畑が繋がり、畝サク方向はすべて前述の横方向である。これはⅠ区から

Ⅱ区にかけて確認できた畑『上郷岡原遺跡(1)』と同じで、円形平坦面が確認されている点も共通している。

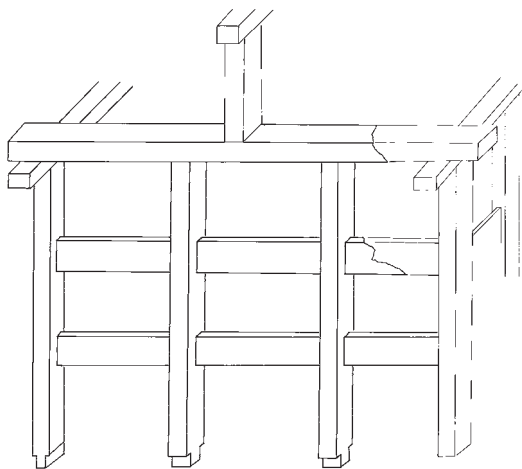
畑区画に並ぶよう南北の長軸線に沿った円形平坦面が並んで確認できるのだが、東西に隣接する畑の平坦面とは並んでいない。

大区画は広大な畑であるが、隣接する小区画畑の境界はわずかな隙間程度である。ここに3mを超える麻が繁茂した際には全く姿の見えなくなる境と思われる。収穫の際には境界を意識せずに共同作業を行ったと思われるのだが、耕作・種まき・間引き初期の草刈などの作業では厳密に作業地域が区切られていたことが推測されよう。円形平坦面から単位畑の考え方が提唱されているが、施肥段階での分業から収穫時の共同作業という切り替が行われているはずである。麻生産に係わる村落内での作業手順が復元できる資料である。

#### ◎ 壁

1号壁の出土材(13頁)から下図のような建物構造を復元することができる。2号壁(19頁)も同一建物の壁である可能性が高いと考える。

民俗例では収穫した麻の高さを6尺(約180cm)



第202図 壁復元図

に切り揃えるが、乾燥用施設(麻屋)の梁桁までの高さで一致している。また柱や梁・桁に不要なホゾ穴が見られないことから廃材を使っていないことがわかった。集落から離れた建物であるが、規格どおりに丁寧に作られたことが伺える。

## 2 中世から近世前葉(2面)

### ◎土坑

古代と天明三年の間を埋める遺構の中で最も顕著なのが282基の土坑である。形状が多く一概にはいえないが、本遺跡で多く見られた長方形を呈した土坑の大半がイモ類を主体とする貯蔵穴と考えられる。

これらの中には多量の礫を埋めたものがあり、耕作時の邪魔な礫を、当初は不要となったこれらの穴に投棄し、やがて上面に積み上げて「ヤックラ」と地元で呼ぶ積石遺構を作っていた過程が窺われる。

年代根拠を持たないが、陶片は礫と同じようにこれらの土坑に捨てられやすい遺物と考えられるのに、この集石土坑から陶磁器類の出土はほとんどない。人糞尿が肥料として使われるようになり、同時に畑に陶片が撒かれた江戸時代中期以前のものと考えたい。反面、これら長方形の土坑は1面畑の畝サクに平行もしくは垂直方向に築かれることが多い。天明三年まで続く畑区画が形成されて以降の所産と考えたい。麻畑下からも多数確認でき、この地域で麻生産が盛んになる以前の遺構と推測できる。

### ◎掘立柱建物

V区では6棟の掘立柱建物を調査した。付近には平安時代の住居群があったが、天明三年には居住域を示すような痕跡の全くない、遺物の少ない一画である。掘立柱建物が礎石建物群の下から確認された上郷岡原遺跡Ⅲ区との相違点である。庇等の施設を伴わない点も異なっている。住居と推定する根拠もないが、まとめて確認されており、納屋等の施設とも考えにくい。

年代を示す根拠を持たないが、古代の建物ほど規格が整っていないようである。天明三年時点で居住

痕跡の全くない地点であることより、近世より中世に近い遺構と考えたい。

### 3 平安時代

◎ 上郷岡原遺跡では総計14軒の平安時代竪穴住居を調査し、本書ではこのうち7軒の報告をした。

この中で遺跡内に共通する墨書土器の出土が注目される。「占」の字を丸もしくは国構えで囲う意匠である。これまでにⅢ区H1号住居(2箇所)、V区1号住居、Ⅳ区遺構外の3点が確認されており、19年度の調査では「帖」の文字が確認されているという。

吾妻地域の古代郡郷名に占の文字を使った地名は思い当たらない。これらの須恵器は長野県北部で焼成されたものと推測されるが、上田市で開催された長野県内出土墨書を集成した展示にもこの文字は見られなかった(文献5)。「占部」のような人名を想定することも可能と思われるが、複数の出土があり、集落共通の意匠と捉えられよう。八ツ場ダム関連の調査では他の遺跡での報告例は現在まで認められない。今後、集落の規模や交流の範囲を探るうえで貴重な資料となりえよう。

### 4 文献一覧

- 1 『上郷岡原遺跡(1)』 2007 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第410集
- 2 『久々戸(2)遺跡・中棚Ⅱ遺跡(2)・西ノ上遺跡上郷A遺跡』 2004 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第349集
- 3 『上郷B遺跡・廣石A遺跡・二反沢遺跡』 2006 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第379集
- 4 『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』 2003 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第319集
- 5 『古代信濃の文字』 2007 上田市立国分寺資料館
- 6 黒崎 直 「生活のなかの構造物」『季刊考古学

47』 1994 雄山閣出版

・その他に、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団八ツ場ダム調査事務所で作成しているパンフレット『遺跡は今 第15号』 2007で平成18年度調査経過を扱っている。



# 遺物観察表

## IV区出土遺物観察表

### 1 1号建物出土遺物 (本分25頁)

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 陶器 浅鉢	口 (12.0) 高 [4.3]	P7上。 図示部の1/8。	小片からの復元で径不安。薄手。鉄釉 でやや光沢あり。	①やや緻密。黒色鉄物を散見。気泡あり。 ②やや硬調。③断面灰白5Y8/1。 ④瀬戸・美濃系か。
2 陶器 鉢	口 (21.6) 高 [5.2]	襷敷き部直上。 図示部の1/8	内外面に刷毛目・白土掛け。	①緻密。②やや硬調。③赤色味の濃い断面。 ④唐津系。
3 不明	長 [4.7] 重 1.7 g	床直上。 両端欠く。	断面長方形。欠損は旧時。	①鉄製品。錆化著しい。
4 釘	長 [3.6] 重 1.2 g	床直上。 頂部欠く。	断面方形。欠損は旧時。木質残存せず。	①鉄製。釘としては良質な鉄。

### 2 積石遺構出土遺物 (本分64頁)

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 磁器 仏飯器	台 (5.0) 高 [2.1]	5号積石内 図示部の1/2。	磁器釉はやや厚く、脚柱部の途中まで。 それ以下は無釉。貫入なし。	①素地緻密。微細な灰雑物やや多い。 ②還元焰、やや硬調。③断面白色。 ④肥前系。
2 陶器 碗	台 (5.6) 高 [2.4]	5号積石内。 図示部の1/4	陶胎染付。畳付き部鉄化粧。残存部文 様は圏線のみ。釉やや厚めで細貫入多 い。	①素地やや砂質。混入物は少ない。②普通。 ③断面灰5Y5/1。呉須はくすんだ発色。 ④唐津系。

### 3 道出土遺物 (本分75頁)

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 陶器 灯明皿	口 8.2 底 (4.0) 高 3.6	5号道2片 1/3個体。	鋭い擦痕の残るロクロ痕。内底に重ね 焼き痕の剥がれ顕著。外面口縁中位付 近まで細かな削り。	①素地緻密。混入物も少ない。気泡混じる。 ②普通。③断面灰白10Y7/1。 ④残存部に灯明皿としての使用痕なし。
2 陶器 碗	台 (5.0) 高 [4.1]	4号道 図示部の1/3。	成形時に補修したような器面の荒れ顕 著。外底・高台は露胎。	①素地普通。黄白色の岩屑・気泡やや多い。②普通。③断面灰白2.5 Y7/1。釉は光沢ある濃緑色。 ④瀬戸・美濃系。残存部にスス残らない。
3 陶器 大鉢	底 (11.0) 高 [1.1]	5号道 底部小片。	高台端部は内側に小さく潰れる。鉄絵。 内底に胎土目。外面全面にも薄く施釉。	①粒子細かく緻密な素地。白色岩屑散見②普通。 ③断面灰白5Y7/2。
4 陶器 播鉢	高 [6.8]	5号道 口縁部小片。	卸目は金属のような鋭い工具によるも ので、1単位10本以上。	①素地やや緻密で白色岩屑・砂粒雑多な等灰雑物やや多い。② 還元焰、普通。 ③断面レンガ色。④産地不詳。使用痕見られない。
5 陶器 播鉢	口 (27.0) 高 [5.5]	5号道 口縁部小片。	卸目部分は残存しない。鉄釉はのびが 悪く、ガサガサしている。	①モグサ土に近い。②普通。③断面灰白10Y7/1。光沢のない 鉄釉。④美濃か。卸した痕跡はないが、口縁内端のみ強く摩滅。

### 4 遺構外の陶磁器 (本分87・88頁)

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 陶器 小皿	口 (8.2) 底 3.6 高 1.7	39区トレンチA 口縁1/2、底部3/4。	削り高台。口縁部に1ヶ所、指頭で押し 潰すようにして粘土粒付ける。内底 に重ね焼き痕残る。釉は浸掛けで外底 付近は露胎。	①モグサ土。微細な白色岩屑を散見。 ②普通③断面灰黄2.5Y7/2で断面まで一様。灰釉は灰緑色に 発色。口縁部付近で厚い。 ④瀬戸・美濃系。
2 陶器 灯明皿	口 (9.8) 底 4.5 高 2.0	41区H-17グリッド 口縁1/3、底部2/3	外面口縁部中位まで回転ヘラ削り。外 面に受け部らしい重焼き痕残る。外底 付近露胎。	①緻密。黄白色の岩屑散見。 ②還元焰、やや硬調。③断面灰白5Y7/1。鉄釉は薄い。④志戸呂。 残存部にスス残らない。
3 陶器 灯明皿	口 (10.8) 底 (8.4) 高 2.1	旧H17区 図示部の1/6。	口縁端部は内側に僅かに折れる。小破 片からの復元で径・傾きとも不安。	①緻密だが細砂の混入あり。②還元焰。普通。 ③断面灰N6/0。鉄釉。④残存部にスス残らない。
4 陶器 灯明皿	口 (9.8) 底 (4.3) 高 2.0	39区トレンチB 口縁1/6、底部1/3。	内底に重焼き痕明瞭。外底周辺の削り 範囲は狭い。外面の釉は薄い。	①やや緻密で砂粒等散見。②還元焰、普通。 ③断面灰白5Y7/1。鉄釉は光沢あり。④志戸呂。口縁端部に 内外面ともスス付着。
5 陶器 灯明皿	口 (8.6) 底 (3.4) 高 1.6	39区トレンチB 図示部の1/6。	受け部上端が全面剥がれ、外面にも重 焼き痕が顕著。灯明皿としては釉は厚 い。	①微細砂含み白色岩屑散見。②還元焰、普通。③断面灰白10 Y7/1。鉄釉の上に降灰釉のような灰緑の斑がある。④志戸呂か。
6 陶器 灯明皿	口 (10.4) 高 [1.8]	49区G-22グリッド 図示部の1/4。	ロクロ痕は外面で細かい。受け部上端 が一部剥がれ、外面に受け部の重焼き 痕顕著。	①緻密だが細砂の混入あり。②還元焰。普通。 ③断面灰7.5Y6/1。光沢の弱い鉄釉。 ④志戸呂。
7 陶器 灯明皿	口 (11.2) 高 [2.0]	49区I-2グリッドの 3片。 図示部の1/3。	受け部上端が一部剥がれ、外面に受け 部の重焼き痕顕著。	①緻密。黄白色の岩屑散見。②還元焰、普通。③灰白10Y 7/1。鉄釉は黒色味を帯びやや光沢あり。 ④志戸呂か。
8 陶器 灯明皿	受 (8.6) 底 (5.8) 高 3.1	15区画畑 図示部の1/6。	受け部が高い。外面釉薄く、ほとんど 露胎。	①緻密だが細砂の混入あり。②還元不充分か。 ③にぶい橙7.5YR6/3。鉄釉は光沢欠く。 ④志戸呂。内面部分的にスス付着。二次被熱。

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
9 陶器 灯明皿	口 (11.0) 高 2.0	49区G-22グリッド 図示部の1/4。	受け部に垂直に切り込み燈芯受けを作る。外面に受け部重焼き痕顕著。外面に刷毛塗り痕。	①緻密だが細砂の混入あり。②還元焰、やや硬調。③断面灰N6/0。④志戸呂。
10 陶器 灯明皿	口 (10.2) 底高 (3.4) 高 2.3	39区トレンチB 図示部の1/4。	外底に糸切痕。受け部を弧状に切り落とす。付近に灯芯痕残る。外面はほとんど露胎。	①モグサ土。②還元焰、普通。③断面灰白5Y8/1。貫入の多い長石釉。④瀬戸・美濃系。
11 陶器 菊皿	台 (7.8) 高 2.5	49区J-16グリッド 図示部の1/4。	内面一部に布状圧痕。外面口縁下端以内は露胎。	①モグサ土。②還元焰、普通。③断面灰白5Y7/2。灰釉は緑色味を帯びた発色。④瀬戸・美濃系。
12 陶器 菊皿	台 (8.0) 高 [1.9]	18区画畑の2片。 図示部の1/3。	内面に布状圧痕やや明瞭。畳み付き分まで釉があり、剥落顕著。高台内側は露胎。	①②還元焰、普通。③断面灰10Y7/1。灰釉は灰色味の強い発色。④瀬戸。
13 陶器 刺身皿か	口 (.) 底高	図示部の1/5。	平面楕円形を呈すと思われる。外面は口縁中位以内で露胎。	①やや緻密。黒色の微細な岩屑を少量含む。②還元焰、普通。③断面灰白7.5YR7/1。灰釉はやや緑色を帯びた発色。
14 陶器 大鉢	台 (14.0) 高 [1.9]	41区 図示部の1/8。	大きさに比して薄手。内底に釉剥ぎ。畳み付き部に釉が残り、剥落目立つ。釉は二彩状。	①モグサ土に近い。②還元焰、普通。③断面灰白5Y7/1。④瀬戸・美濃系。
15 磁器 染付皿	口 (12.4) 台 (7.0) 高 3.9	19区画畑の2片。 図示部の1/8。	畳み付き部釉剥ぎで少量砂付着。染付は植物意匠、見込み中央にコンニャク判か。	①緻密。②還元焰、普通。③断面白色。呉須は薄い発色だが一部で濃い。④波佐見。
16 磁器 染付皿	台 (7.2) 高 [1.6]	トレンチB 図示部の1/5。	厚手。内底蛇の目状釉剥ぎは歪になる。コンニャク判。外面に圏線は見られない。	①緻密。②還元焰、普通。③断面白色。呉須はややくすむ。④波佐見。
17 陶器 腰箆碗	口 (8.6) 台高 3.8 高 5.1	トレンチBの2片 口縁1/3。底部完存。	畳み付き部釉剥ぎ。施釉は雑で濃淡あり、一部で露胎。透明釉は粗い貫入多い。	①モグサ土。黒色の微細な夾雑物あり。②還元焰、普通。③断面灰白10Y7/1。④瀬戸・美濃系。口縁内面の剥離目立つ。
18 陶器 小碗	口 (7.2) 高 [4.1]	60区の4片。 図示部の1/3。	外面の削り痕強い。釉はやや薄く、外面口縁下端以下は露胎。	①やや砂質でザックリした素地。黄白色の微細な岩屑散見。②還元焰。普通。③断面灰10Y6/1。④瀬戸・美濃系。
19 陶器 碗	口 (11.0) 高 [3.8]	60区H-2グリッドの2片。 図示部の1/3。	やや薄手。釉も薄い。	①やや砂質でザックリした素地。黄白色の岩屑やや目立つ。気泡あり。②還元焰。普通。釉は黄色味を帯びる。③断面灰白N7/1。④瀬戸・美濃系か。
20 陶器 碗	口 (10.0) 高 [3.9]	16区画畑 図示部の1/6。	外面弱い波状意匠の象嵌白土掛け。内面は不明瞭。	①素地やや砂質。混入物は少ない。②還元焰。普通。③断面灰5Y4/1。釉は光沢あり。④唐津。
21 陶器 碗	台 4.8 高 [5.5]	50区南隅の2片。 図示部ほぼ完存。	底部やや厚手。外面口縁痕細かい。釉は薄く、貫入細かい。畳み付き部釉剥ぎ。	①モグサ土に近い。黄白色の微細な岩屑散見。②還元焰。普通。③断面灰白5Y7/2。④呉器手。瀬戸・美濃系。
22 陶器 碗	口 (10.8) 高 [5.6]	49区N-21グリッドの5片。 図示部の1/3。	外面で口縁痕顕著。器面はやや荒れる。釉はやや薄い。外面立上がり部以付近で露胎。	①モグサ土。夾雑物やや多い。②還元焰。普通。③断面灰白5Y7/1。鉛釉。④瀬戸・美濃系。
23 陶器 碗	台 4.6 高 [2.1]	16区画畑。 図示部完存。	高台厚手で焼成時の剥がれあり。外底露胎。貫入少ない。	①素地やや緻密。微細な岩屑散見。②還元焰。普通。③断面灰白7.5Y7/1。鉄釉。④瀬戸・美濃系。
24 陶器 碗か	台 (4.5) 高 [1.4]	19区画畑。 図示部の2/3	碗としてはきわめて薄手。高台低く、畳み付きは平坦。鉄釉と透明釉の掛け分け。貫入やや粗い。	①モグサ土。混入物少ない。②還元焰。普通。③断面灰白5Y7/1。④瀬戸・美濃系。
25 陶器 碗	台 (4.8) 高 [3.9]	49区O-25グリッド 図示部小片。	小片からの復元で、径不安。釉は薄い。高台は外端のみ薄く釉剥ぎ具剥ぎ。白土掛け。	①素地緻密で混入物少ない。②還元焰。普通。③断面灰N5/0。釉は光沢あり。④唐津。
26 陶器 碗	台 (6.0) 高 2.6	15区画3号畑 図示部の1/3	高台低い。焼成時の剥がれあり。外底露胎。	①モグサ土。岩屑少量混入。気泡多い。②還元焰。普通。③断面灰白5Y7/1。鉛釉で光沢は少ない。④瀬戸・美濃系。二次被熱。
27 陶器 碗	台 (4.8) 高 3.2	17区画畑。 図示部の1/2。	やや厚手。釉はやや薄い貫入粗い。外底露胎。	①素地やや砂質。微細な黒色岩屑散見。②還元焰。普通。③断面灰7.5YR6/1。釉は光沢あり。④瀬戸・美濃系。
28 陶器 碗	台 3.9 高 [3.0]	トレンチB。 図示部の2/3	陶胎染付。外面の圏線以外、文様見えない。底部やや厚手。釉はちぢれ目立つ。	①砂質で緻密さ欠く。②還元焰。普通。③断面灰5Y6/1。外面一部赤色味をおびる。④唐津系。
29 磁器 碗	口 (10.0) 高 [3.3]	59区V-1グリッド。 図示部の1/6。	やや薄手。小片からの復元で口径不安。雪の輪梅花文(裏側)。	①素地緻密。微細な黒色岩屑散見。②還元焰。普通。③白色。呉須は濁って褐色味をおびる発色。④波佐見。
30 陶器 碗	台 (5.2) 高 [6.1]	13区画畑の5片。 体部1/6 底部1/2	やや厚手。畳み付き部釉剥ぎで砂粒付着。外底・高台内側に虫食いあり。陶胎染付。	①砂質。混入物は少ない。②還元焰。普通。③断面灰10Y6/1。呉須は淡い発色。④唐津。
31 磁器 染付碗	口 (10.0) 台 4.2 高 4.8	49区H-23グリッド。 図示部の2/5。	厚手ではないがポツリしている。畳み付きに砂粒付着。雪の輪梅花文。外底は窯印か。	①緻密で混入物すくない。②普通。③断面白色。山呉須。④波佐見。
32 磁器 広東碗	台 6.0 高 [2.7]	トレンチB。 図示部の1/2。	高台は小さめで端部尖る。見込み文様は梅の花。	①素地やや砂質。微細な岩屑散見。②還元焰。普通。③断面淡い灰白色。呉須はやや明るい発色。④波佐見。

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
33 磁器 染付碗	口 9.5 台 3.7 高 4.7	トレンチA。 口縁 2/3 底部完存。	分厚い底部のくらわんか手。雪の輪梅 花文（裏側）。	①やや座ラッとした素地。混入物は少ない。 ②還元焰。普通。③断面淡い灰白色。山呉須。釉はややくすむ。 ④波佐見。
34 陶器 香炉	底 (7.0) 高 [2.5]	49区O-11グリッド。 図示部の2/5。	内底平坦。足は小さく、取付けやや雑。 残存範囲では釉は口縁外面のみで薄 い。	①モグサ土に近い。やや緻密。②普通。 ③断面灰白 7.5 Y 8/1。褐釉は光沢弱い。 ④瀬戸・美濃系か。
35 陶器 香炉	口 (11.2) 底 (7.8) 高 6.3	49区I-18グリッド の2片。 口縁 1/5、底部 1/3。	内底平坦。足は小さい。釉やや厚く、 一部で垂れる。	①モグサ土。気泡やや多い。②還元焰。普通。 ③断面灰白 5 Y 7/1。褐釉は乳濁。 ④瀬戸・美濃系。口縁が外端の剥離目立つ。
36 陶器 香炉	底 (7.4) 高 [3.8]	18区画畑の3片。 図示部の1/3。	きわめて薄手。足は小さい。外底から 体部下端まで露胎。	①素地緻密。細砂少量混入。 ②還元焰。やや軟調か。③断面灰 5 Y 6/1。褐釉は弱い光沢あり。 ④瀬戸・美濃系か。
37 磁器 香炉	口 (12.6) 高 [5.4]	17区画畑の2片。 図示部の1/5。	薄手だが口縁のみ肥厚。ロクロ痕弱い。 釉はやや薄く、貫入はほとんどない。 虫食いあり。	①素地緻密。混入物少ない。②還元焰。普通。 ③断面白色。青磁釉は淡い発色。④肥前。
38 磁器 仏飯器	台 3.4 高 [3.6]	50区A-23グリッド の2片。 底部 1/2、台部完存。	底部厚く重量。高台削り出し。白磁釉 はやや薄く、貫入・虫食いは見られな い。	①素地緻密。微細な夾雑物散見。 ②還元焰。普通。 ③断面白色。釉はやや濁った発色。④波佐見か。
39 陶器 急須か	高 [8.7]	49区T-20グリッド の2片。 図示部の1/6。	取手部分欠失。底部は高台直前で欠け たか。取っ手上付近に青緑つ釉。内面 にも淡く施釉。	①素地やや砂質。②還元焰。普通。 ③断面灰白 5 Y 7/1。④瀬戸・美濃系か。
40 磁器 徳利か	高 [4.8]	49区P-10グリッド。 図示部の1/4。	染付。袋物と思われるが内面にも丁寧 な施釉。	①素地やや緻密。微細な混入物散見。②還元焰。普通。③断面 淡い灰白色。釉は乳濁顕著。呉須も濁った発色。④波佐見。
41 陶器 鉢	台 (9.6) 高 2.0	トレンチC。 図示部の1/10。	小破片からの復元で径不安。底部薄手。 高台厚く低い。釉は薄い。外底露胎。	①素地やや砂質。混入物少ない。②還元焰。普通。③灰白 2.5 Y 7/1。透明釉は弱い光沢。 ④瀬戸・美濃系か。
42 陶器 大鉢	台 (10.2) 高 [2.7]	トレンチE。 図示部の1/8。	底部のみ薄手。高台厚い。内底圏線上 の白土掛けが不明瞭。外底は型肌状 に不整。	①素地やや緻密。岩屑等の夾雑物やや多い。 ②還元焰。硬調。③断面灰白 5 Y 5/1。一部で赤色味強い。釉 は光沢ない。④唐津。
43 陶器 大鉢	台 (15.2) 高 [5.3]	51区 図示部の1/6。	厚手で重量。削り出し高台は低いがき わめて幅広。釉は薄い。	①素地やや砂質。粟粒大の黒色夾雑物散見。 ②普通。③断面灰白 5 Y 7/1。釉は乳濁著しい。 ④瀬戸・美濃系。
44 羽口	長 [3.1]	49区N-13グリッド 小片	端部破片。小片で剥落もすすみ、径不 明。鉄用羽口と思われる。	①軽量な素地。細礫の混入目立つ。スサ等の混入物は顕著では ない。③内面赤褐色。外面ガラス化。 ④古代の遺物の可能性。
45 硯	縦横 [3.8] [3.6]	18区画畑。 表面の小片。	割れ口の1箇所を砥石に転用。表面に も墨によるとは思えない粗い擦痕多 い。	①石製。比較的良質な硯。 ③暗灰色。
46 砥石	長幅厚 [3.6] [2.8] 1.0	41区。 小片。	断面長方形の手持ち砥。両端を旧時に 欠く。両側面に鋸目。表裏2面を平坦 に使用。	①変質流紋岩（砥沢石）。夾雑物あり、あまり良質ではない。

#### IV区遺構外の金属器（本文 89・90頁）

No. 器種	計測値 (cm)	出土・復元状態	備 考
1 煙管 (雁首)	長 4.2 幅 1.0 重 6.7 g	16区画畑 完形	銅製。地はわずかに赤色味をおびる。やや厚手で頑丈。火皿小さめで、平面長方形 に歪む。
2 煙管 (雁首)	長 5.9 幅 1.1 重 6.4 g	16区画 4号畑 完形	銅製。地は赤色味強い。やや厚手。端部が潰れ、中に羅宇が残存。
3 煙管 (雁首)	長 6.8 幅 1.0 重 8.5 g	18-3区 完形	銅製。地はわずかに赤色味をおび、一部で金銅色。やや厚手。火皿大きい。羅宇わ ずかに残存する。
4 煙管 (雁首)	長 3.8 幅 1.2 重 7.1 g	18-9区泥流直下 ほぼ完存	銅製。やや厚手。錆化すすみ脆弱。
5 煙管 (雁首)	長 5.3 幅 1.1 重 9.0 g	41区 ほぼ完存	銅製。火皿小さめ。錆化著しい。
6 煙管 (雁首)	長 (2.5) 幅 1.1 重 2.3 g	17区画畑 火皿欠くが、他は残存	銅製。短い。
7 煙管 (雁首)	長 (6.8) 幅 0.9 重 7.1 g	50区I-19グリッド 火皿欠くが、他は残存	銅製。地は一部で金銅色。
8 煙管 (雁首)	長 (5.4) 幅 0.9 重 6.4 g	16区画畑耕土内 ほぼ完存	銅製。首で大きく曲がる。羅宇残存する。錆化し剥落すすむ。
9 煙管 (吸口)	長 5.9 幅 0.9 重 3.1 g	50区A-23グリッド 完形	銅製。地は一部で金銅色。やや薄手。中央部分で潰れ、継ぎ目で剥がれる。
10 煙管 (吸口)	長 6.8 幅 1.3 重 6.6 g	18-1区泥流内 完形	銅製。地は一部で金銅色。やや厚手。屈曲するように強く潰れ、継ぎ目で剥がれる。

11 煙管 (吸口)	長 (5.5) 幅 1.1 重 3.2 g	49 区 Y - 24 グリッド ほぼ完存	銅製。やや薄手。錆化し表面の剥落すすむ。
12 煙管 (吸口)	長 4.0 幅 0.9 重 1.6 g	49 区 T - 22 グリッド 完形	銅製。薄手。羅字側は断面楕円形に潰れる。
13 煙管 (吸口)	長 7.6 幅 1.0 重 4.8 g	16 区画畑耕土内 完形	銅製。地は一部で金銅色。羅字側は断面楕円形に小さく潰れ、継ぎ目で剥がれる。
14 煙管 (吸口)	長 6.6 幅 0.9 重 5.3	49 区 完形	銅製。やや厚手。外側端部付近のみ僅かに窪む
15 煙管 (吸口)	長 4.0 幅 1.0 重 2.4 g	17 - 1 区 完形	銅製。地はやや赤色味をおびる。
16 煙管 (吸口)	長 6.8 幅 0.9 重 6.3 g ラオ含む	18 - 3 区 完形	銅製。地はやや赤色味をおびる。やや厚手。中央付近に鋭い圧痕残る。羅字残存する。
17 煙管 (吸口)	長 (4.9) 幅 (1.3) 重 2.3 g	39 区 ほぼ完存	銅製。薄手。錆化著しく、剥落すすむ。
18 不明	重 16.1 g	18 - 3 区泥流直下	鉄製。振れが加わり旧時の形状不明。鉄はあまり良質ではない。馬具か。
19 不明	径 5.5 重 7.2 g	18 - 5 区	鉄製。良質な鉄ではない。錆化すすむ。
20 不明	長 10.6 幅 (5.1) 重 43.3 g	18 - 8 区泥流直下	鉄製。地は黒色だが、やや軽量で良質な鉄ではない。上側は曲げ、下側は継いでいる。
21 釘	復元長 9.3	15 区画 1 号畑耕土内 完形	鉄製。良質。折頭釘。2ヶ所で折れ曲がる。木質残存せず。
22 刀子	長 (21.6) 幅 (2.3) 厚 (0.5 - 0.4) 重 46 g	切っ先部分欠く 16 区画畑耕土内	鉄製。刀子類としてはあまり良質な鉄ではない。峰 4.5mm で薄いが刃渡り 16cm 以上。大小柄の可能性。刃こぼれ多い。研ぎ減りは少ない。釘穴 1ヶ所あり。茎に木質は残存しない。
23 不明	厚 0.5mm 重 1.6 g	16 区画 - 6 号畑	銅製。地は赤色味をおびる。屈曲部分から折れたようで、円形の製品か。襖の引き手金具が想定される。
24 不明	厚 0.5mm 重 5.9 g	16 区画 - 4 号畑 完形か	銅板を鑿で切り落としたような破片。地は赤色味をおびる。
25 分銅	高 (3.4) 幅 1.5 重 45.1 g	15 区画畑 ほぼ完存	銅製。地は赤色味強い。摘み部分欠失。一面に刻印の可能性のある僅かな窪みあるが不明瞭。
26 不明	長 1.7 幅 1.9 重 3.8 g	5 号道 ほぼ完存	銅製。地は黒色味をおびる。やや厚手。地は黒色味をおびる。中央は上方から潰れ、楕円形状に欠失。釘の目隠し金具か。
27 不明	長 (1.9) 幅 (2.2) 重 3.1 g	59 区 X - 1 グリッド	銅製。潰れているが、鈴のような丸いものと推定される。錆化著しい。
28 釘か	長 4.9 重 3.0 g	トレンチ B ほぼ完存か	鉄製。質の悪い鉄。折頭式。錆化著しい。
29 鏡	厚 0.2 重 10.1 g	59 区耕作土内	銅製。青銅か。推定直径 78mm。わずかに凸面になる。裏面文様は二重圏線内に植物意匠か。
30 不明	長 (2.7) 幅 1.5 重 2.7 g	5 号道 両端欠く	鉄製。ごく薄い鉄板で木質を包みこむ。断面は三角形になり峰を意識か。
31 鉄砲玉	径 1.25 ~ (1.0) 重 8.9 g	18 - 4 区 完形	白色の錆があり、鉛の含有率が高そうである。一方が大きく潰れる。
32 鉄砲玉	径 1.25 ~ (1.1) 重 10.3	59 区 V - 2 グリッド 完形	白色の錆があり、鉛の含有率が高そうである。一方が大きく潰れる。
33 古銭	径 2.4 孔 0.6 重 2.7 g	18 - 1 区畑耕土内	赤い錆で鉄銭の可能性 (磁石に無反応)。開元通寶。初鑄 621 年。
34 古銭	径 2.4 孔 0.6 重 2.6 g	18 - 3 区 完形	銅製。地は赤色味をおびる。寛永通寶。
35 古銭	径 2.2 孔 0.6 重 2.5 g	トレンチ B 完形	鉄銭で磁石にわずかに反応。寛永通寶。背「元」
36 古銭	径 2.25 孔 0.6 重 2.7 g	東拡張部 (20 畑) 完形	銅製。地は赤色味をおびる。寛永通寶。背「元」
37 古銭	径 2.4 孔 0.6 重 3.2 g	49 区 完形	銅製。寛永通寶
38 古銭	径 2.4 孔 0.6 重 2.1 g	17 - 1 区泥流面 完形	銅製。やや薄い。寛永通寶。二次被熱で表面に荒れと歪み。
39 古銭	径 2.3 ~ 2.25 孔 0.6 重 2.2 g	17 - 3 畑 完形	銅製。寛永通寶

## IV区遺構外の木製品 (本文 92 頁)

No. 器種	計測値 (cm)	出土・復元状態	備考
1 杓文字か	長 [10.6] 幅 [6.0] 厚 0.9	50 区 A - 23 グリッド	縁部は面取りしたように薄い。柄を欠いた杓文字の可能性。
2 不明	長 12.1 幅 4.4 厚 0.7	17 - 1 区 ほぼ完存か	曲物底板のような形状で両側面や弧部分はいきている。1面に細かな擦痕。
3 端材	長 10.9 幅 4.7 厚 3.9	14 区画畑 ほぼ完存か	鋸で切り落とした木端。
4 底板	長 14.8 幅 [6.0] 厚 1.0	50 区 C - 22 グリッド 半欠品	中央に径 4.5mm の穿孔。側面に木釘孔が 1 箇所あり曲物底板と思われる。
5 底板	長 [10.8] 幅 [4.2] 厚 0.9	17 - 1 区 半欠品	径に比して厚みあり、桶の底板と思われる。1面に弧状の擦痕あり。
6 建築材	長 [197] 厚 12.0	18 - 1 区 一端を欠く	節の多い割り材。4 寸角材に相当。4 寸材を受ける通しホゾ穴 (12 × 4 cm) が上下 2ヶ所あり。
7 杭	長 [68] 径 8.0	15 区畑 (1 号建物付近) 半欠品	芯持ち材。先端をナタで雑に切り落としたような木製品で、左右対称にならない。

## 5 IV区土坑出土遺物 (本文 131 頁)

No. 器種	計測値 (cm)	出土・復元状態	備考
1 煙管 (雁首)	長 3.6 幅 0.9 重 4.8 g	185 号土坑 完形	銅製。厚手で丈夫。特に火皿部は厚い。
2 古銭	径 2.4 孔 0.6 重 2.1	223 号土坑 完形	銅銭。天禧通宝か (初鑄 1018 年)。錆化ややすむ。

## 6 1号墓坑出土遺物 (本文 138 頁)

No. 器種	計測値 (cm)	出土・復元状態	備考
1 釘	長 2.7	底面付近 完形	鉄製。錆化やすむ。厚さ 15mm 以上の板材片に打ち込んだ状態で検出。断面方形。
2 古銭	径 2.3 孔 0.6 重 1.8 g	底面付近 完形	銅製。寛永通宝。
3 古銭	径 2.25 孔 0.6 重 1.9 g	底面付近 4 に付着 完形	銅製。寛永通宝。
4 古銭	径 2.3 孔 0.65 重 2.0 g	底面付近 完形	銅製。寛永通宝。
5 古銭	径 2.5 孔 0.55 重 4.0 g	底面付近 完形	銅製。寛永通宝。背「文」か。
6 古銭	径 2.4 孔 0.6 重 3.8 g	底面付近 完形	銅製。寛永通宝。

## 7 IV区 住居出土遺物

## 1号住居 (本文 142 頁)

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 須恵器 椀	口 13.3 底 5.6 高 3.6	西壁直下の床直上 口縁一部欠くがほぼ完 存。	右回転ロクロ→回転糸切無調整。ロク ロ痕やや弱く、内面は平滑。	①粒子の細かなダスト状の素地で軽量。泥粒や輝石のような微 細な混入物を含む。 ②還元焰。胎土に比して締まる。 ③灰黄 2.5 Y 7/2。内底に重焼き時の黒斑。
2 須恵器 椀	口 12.8 底 5.8 高 3.9	南東隅の床上 16cm 1/2 個体	底部のみ厚手。右回転ロクロ→回転糸 切無調整。ロクロ痕やや弱く、内面平 滑。	①素地ややダスト状で軽量。1 mm 大の岩屑を散見。②還元や や不十分で軟調。 ③灰黄褐 10YR6/2。内外面とも黒斑広い。
3 須恵器 椀	口 (12.8) 底 (5.8) 高 3.6	南壁下からカマド南周 辺の床上 10cm 図示部の 1/3	2 にはほぼ同巧。口縁内面でロクロ痕や や強い。	① 2 に類似している。②還元焰、普通。 ③灰白 2.5 Y 7/1 で断面まではほぼ同様。
4 須恵器 有台椀	口 (13.8) 台 7.7 高 5.1	南壁下中央の床上 5cm 端部若干、下半はほぼ完 存。	器面全体に摩滅し整形痕不明瞭。特に 高台部剥落進む。口縁端部の外反弱い。 右回転ロクロ成形で内底は同心円状の ロクロ痕。	①素地普通、微細砂の混入やや多い。 ②還元焰、やや軟調。③灰白 5 Y 7/1。外面に灰色味の強いム ラあり。④破損後に二次被熱の可能性。
5 須恵器 椀	口 (13.0) 底 5.2 高 4.0	南壁下中央付近の床上 13cm 図示部の 1/3	底部のみやや厚手。右回転ロクロ→回 転糸切無調整。ロクロ痕外面で細かく、 内面平滑。	①素地ややダスト状。②還元焰、普通。 ③灰黄 7.5YR7/2。内外面に黒斑広い。
6 須恵器 椀		北西側埋没土 図示部小片	右回転ロクロか。外面にロクロ痕比較 的顕著。内面平滑。	①素地普通。細砂混入。②還元焰、普通。③灰白 5 Y 7/1。 ④外面に墨痕やや薄い墨書。小破片のため積文不明。

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
7 須恵器 椀		北西側埋没土 図示部小片	右回転ロクロか。内面平滑。外面にも ロクロ痕はほとんど見えない。	①素地やや砂質。②還元焰普通。③灰白5 Y 7/1。 ④内底付近に比較的墨痕鮮明な墨書あり。小破片のため積文不明。
8 土師器 甕	口 (19.0) 高 [7.6]	カマド内 図示部の1/3	コの字状口縁。外面横位の削りは強い。 内面は丁寧なナデ。	①素地普通。赤褐色鉱物等細かな混入物やや多い。②酸化焰、普通。③灰褐7.5YR4/3。赤色味・黒色味を帯びるムラあり一様でない。
9 土師器 小型甕	底 7.7 高 [5.6]	カマド前床上9cm 胴下半1/4。底部完存。	薄手。右回転ロクロ。糸切の途中で回 転は停止している。外面はカキ目状。	①素地普通。最大2mm大の微細な岩屑が混じる。②酸化焰、普通。③浅黄2.5YR7/3。外面赤色味を帯びるムラあり。
10 土師器 小型甕	口 (14.6) 底 (7.8) 胴 (16.4) 高 [15.7]	カマド南から南東隅付 近床上10cm前後。	均等に薄手。右回転ロクロ→回転糸切 無調整。ロクロ痕やや強く外面一部で カキ目状。	①素地普通。微細な岩屑が少量混じる。 ②酸化焰、やや硬調。③にぶい黄橙10YR7/3。黒色味・赤色味 を帯びるムラあり一様でない。 ④破損後に二次被熱か。
11 須恵器 四耳壺	底 (16.4) 高 [31.5]	カマド周辺床上15cm 前後。	ロクロ痕不明瞭だが、鐙の取付けには 回転利用。耳の取付けは雑。内面下半 にはナデあげたような斜位の指頭痕あり 1/4	①砂質でザックリした素地。3mm大の混入物やや多い。②還 元焰。普通。 ③灰白2.5 Y 7/1 ではぼ一様。 ④耳穴には使用痕認められず。
12 須恵器 壺	口 (23.6) 高 [8.1]	南東隅床上25cm 図示部の1/10	小破片からの復元で径不安。右回転ロ クロか。ロクロ痕細かい。	①素地やや砂質でガラガラしている。黒色の微細な混入物多い。 ②還元焰、硬調。 ③青灰5 PB6/1 で内外面一様。
13 須恵器 壺	底 (14.0) 高 [11.9]	中央付近からカマド前 床上10cm 図示部の2/3。	12とは別個体。右回転ロクロ利用か。 ロクロ痕らしい擦痕は弱く、内面は平 滑さ欠き、ロクロ成形とは考えにくい。	①黄白色の細砂を少量含み以外混入物の少なく、大型品として は緻密。②硬調、充分に焼締まる。 ③灰N 4/0 で一部に光沢。断面セピア色。黄色味を帯びる降灰 釉がかかる。
14 紡軸か	長 [27.8] 厚 0.3 ~ 0.5 重 25 g	中央北寄りの床上7cm ほぼ完形	断面長方形。両端は欠損か。若干歪む。 長さより紡錘車軸部分と考えたい。	①鉄製品。錆化進むが素材は比較的良質。
15 不明	長 [10.2] 厚 0.4 重 10.7g	南西側埋没土 両端欠損。	断面長方形。長さに対して厚みがなく 両側が細くなりそうで釘とは考えにくい。 茎か。	①鉄製品。 ④14と同一個体の可能性。
16 スラグ	11.8 × 9.1 × 4.2 重 342 g	カマド前	比重高い。	

## 2号住居 (本文 146 頁)

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 須恵器 椀	口 (12.6) 底 (6.0) 高 [4.0]	南壁下床上12cm 図示部の1/3	底部厚手。右回転ロクロ→回転糸切無 調整。ロクロ痕弱く、内面平滑。	①素地やや緻密。混入物少ない。②還元焰、やや硬調。③灰白2.5 Y 7/1。外面上半は黒色味を帯びる。④内底に墨書。積文不明。
2 須恵器 椀	口 14.5 底 6.5 高 4.4	南壁下床上13cm 口縁1/3、底部完存。	底部厚手。右回転ロクロ→回転糸切無 調整。外面ロクロ痕細かく、内面平滑。	①ややダスト質な素地。輝石・バミス等雑多な混入物散見。② 酸化焰、普通。③にぶい黄橙10YR6/3。底面内外に重焼き時の 広い黒斑。
3 須恵器 有台椀	台 (6.6) 高 [4.7]	南壁下床上18cm 口縁端部と高台1/3を 欠く。	右回転ロクロ→回転糸切→回転利用高 台取付。高台は断面三角形。ロクロ痕 細かく、内面平滑。	①素地ややダスト状。不揃いな泥粒混じる。②還元焰、普通。 ③灰白2.5 Y 7/1。内面に淡い黒斑あり。
4 須恵器 有台椀	台 (7.4) 高 [5.7]	図示部の1/3	やや厚手。右回転ロクロ→回転糸切→ 回転利用高台取付。外面ロクロ痕やや 強く細かい。	①素地やや緻密、粗砂等細かな混入物を少量含む。②還元やや 不十分、普通。③にぶい黄橙10YR6/3。黒色味を帯びる狭いム ラあり。
5 須恵器 有台椀	台 (7.4) 高 [4.3]	南壁直下の床上17cm 図示部の1/3	右回転ロクロ→回転糸切→回転利用高 台取付。高台は断面三角形。ロクロ痕 弱い。	①素地普通。乳白色の岩屑散見。 ②還元やや不十分でやや軟調。③灰黄2.5 Y 6/2。内外面に黒斑 広い。断面中央も黒色。
6 土師器 甕	口 (22.8) 高 [5.3]	カマド前面の床直上 図示部の1/8	小破片からの復元で径・傾きとも不安。 薄手。コの字状口縁。外面削りは丁寧 で、内面も平滑。	①素地普通。混入物少ない。甕類としては緻密。 ②酸化焰、普通。 ③にぶい褐7.5YR5/4。黒色味を帯びるムラあり。
7 刀子	長 [11.7] 重 22.6 g	北東壁上	大きさに比して峰幅は薄い。	①鉄製品。 ④刃部やや研ぎ減りする。

## 8 遺構外の遺物 (本文 147 頁)

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 須恵器 椀	口 (11.8) 底 (5.4) 高 3.8	50区D・E-18グリッ ドの2片 口縁1/6、底部1/3	右回転ロクロ→回転糸切無調整。ロク ロ痕弱く全体に平滑。内面数箇所に墨 痕の可能性のあるシミがあるが不明瞭。	①素地普通。やや大粒の混入物散見。 ②還元焰、やや軟調。 ③灰白10YR7/1で断面までほぼ一様。 ④器面の摩滅すすむ。
2 須恵器 椀	口 (12.0) 底 (5.6) 高 3.6	50区C-20グリッド 口縁1/5、底部2/5。	右回転ロクロ→回転糸切無調整。ロク ロ痕弱く全体に平滑。	①素地普通。岩屑等、微細な混入物やや多い。 ②還元焰、やや軟調。③灰黄2.5 Y 7/2。黒斑あり。④器面の摩 滅すすむ。
3 須恵器 椀	底 (6.0) 高 [2.2]	1号建物周辺 図示部の1/3	右回転ロクロ→回転糸切無調整。内底 縁部窪む。	①素地やや砂質。不揃いの暗褐色岩屑混じる。 ②還元焰、普通。③灰白2.5 Y 8/1。淡い黒斑あり。④内底に朱 墨の可能性のある赤色付着物あり。
4 須恵器 椀	底 (5.6) 高 [2.0]	50区I-16グリッド 図示部の1/3	右回転ロクロ→回転糸切無調整。ロク ロ痕弱い。	①②③④に類似する。 ④内底に墨痕薄い墨書あり。積文不明。凍てハゼのような剥落 すすむ。

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
5 須恵器 椀	底高 (6.0) [2.6]	50区I-16グリッドの2片。図示部の1/3。	右回転ロクロ→回転糸切無調整。ロクロ痕内面で弱い。内底に重ね焼き痕。	①素地普通。混入物散見。②還元焰、普通。③灰白5Y7/1。明度の低いムラあり。外底に黒斑広い。④内底暗い部分を避けて縁に達筆な墨書。「占」を丸で囲う。
6 須恵器 有台椀	高 [3.2]	41区南東隅包含層底部3/4、口縁下半1/4、高台欠く。	右回転ロクロ→回転糸切→回転利用高台取付け(剥落)。ロクロ痕弱く内面平滑。	①素地普通。岩屑等、微細な混入物混入。②還元焰、やや軟調。③灰黄2.5Y7/2。内外面に黒斑あり。④内底に黒色付着物あり。
7 須恵器 有台椀	高 [2.8]	216号土坑小片。	右回転ロクロ→回転糸切→回転利高台取付け。内面でロクロ痕弱い。	①素地やや砂質。不揃いの岩屑散見。②還元焰、普通。③灰白7.5Y7/1。内面に淡い黒斑あり。④外面に薄い墨書あり。積文不明。
8 須恵器 有台椀	台高 6.8 [1.9]	50区 図示部の1/2	右回転ロクロ→回転糸切→雑な高台取付け。内底平坦ロクロ痕弱い。	①素地砂質。石英・長石等雑多な混入物多い。②還元不充分。③灰黄褐10YR5/2。ムラ多く一様でない。
9 須恵器 広口甕	口高 (32.6) [6.4]	41区南東隅包含層 図示部の1/10。	右回転ロクロ。ロクロ痕やや強い。	①素地やや砂質。黒色鉱物(鉄分か)やや多い。②還元焰、硬調で焼き締まる。③灰N1/6で断面まで一様。
10 須恵器 羽釜	台高 (16.0) [5.8]	41区南東隅包含層 図示部の1/10。	ロクロ使用か。口縁外面に接合痕明瞭。口縁上端は平坦。鈔直下に縦位の削り痕残る。	①砂質。長石混じりの混入物多い。②酸化焰気味。やや硬調。③灰黄2.5Y2/6。黒色味をおびるムラ多く、一様でない。

## V区出土遺物観察表

### 9 遺構外の陶磁器 (本分176頁)

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 陶器 小皿	口底高 (11.2) (5.4) 2.0	32区耕作土内1/3個体。	外面でロクロ痕細かい。内底に重ね焼き痕。	①やや砂質。微細な黒斑あり。②還元焰、普通。③断面灰N6/0。褐釉は弱い光沢。④瀬戸・美濃系か。
2 陶器 碗	台高 5.5 [2.5]	33区の2片 口縁下半1/4、底部完存。	底部厚く重量。外底は広く露胎。釉は細貫入多い。	①モグサ土。乳白色の岩屑混じる。②普通。③断面灰白5Y7/1。鉛釉は光沢あり。④瀬戸・美濃系。
3 陶器 碗	台高 4.3 [2.5]	5号畑 図示部完存。	内底蛇の目状釉ハギ。青緑釉は細貫入あり。外底は露胎。	①素地やや砂質。混入物少ない。②やや硬調。③断面灰白10YR8/1。外面灰釉か、乳白色で一部で緑色に発色。
4 陶器 碗	口高 (11.2) [5.6]	32区畑の2片。口縁1/6、底部1/3。	外面下半でロクロ痕やや強い。釉は厚さにムラ。貫入少ない。	①モグサ土。微細な岩屑を少量混入。②普通。③断面灰白5Y7/1。鉛釉は弱い光沢。④瀬戸・美濃系。
5 陶器 香炉	口高 (11.2) [3.6]	32区 図示部の1/5。	外底削り出しで底部きわめて薄い。丁寧な足の取付け。指紋が残る。内面露胎。	①やや砂質。混入物含まない。②普通。③断面灰白5Y7/2。黒釉は光沢なく、やや赤色味をおびる。
6 砥石	長幅厚 [9.1] 2.6 2.1	33区B-22グリッド1端を欠く。	断面長方形の4面使用。最も荒れた1面に幅4mmの溝状の窪みあり。玉砥石に使用か。	①変質流紋岩(砥沢石)。夾雑物あり、あまり良質ではない。③全面に鉄錆のような付着物。

### 遺構外の金属器 (本文177頁)

No. 器種	計測値 (cm)	出土・復元状態	備考
1 不明	厚 0.4mm	32区畑 一端を欠く	銅製。一端は針先のように尖る。薄く弱い実用でない。装飾品か。錆化すすむ。
2 引き手金具	径 4.2~3.8	32区畑 ほぼ完存	鉄製。磁石に反応。ごく薄い鉄板の2枚重ねで襖の引き手であろう。錆化すすむ。軽量。内径3.1cm。
3 煙管 (雁首)	長重 4.2 幅1.0 6.7 g	32区V-17グリッド 完形	銅製か。鉄錆のような赤い錆が付くが、磁石には無反応。やや厚手で頑丈。羅字残存。
4 煙管 (吸口か)	長重 5.9 幅0.9 3.1 g	6号畑耕土 両端欠く	銅製。錆化すすみ、地は観察できない。雁首の可能性も。
5 煙管 (吸口)	長重 6.8 幅1.3 6.6 g	6号畑耕土 両端欠く	銅製。錆化著しく、詳細不明。
6 煙管 (吸口)	長重 (5.5) 幅1.1 3.2 g	42区 完形	銅製。地は黒色味をおびる。羅字側断面楕円形に潰れる。
7 鉄砲玉	径重 1.25~(1.0) 8.9 g	32区G-12グリッド 完形	白色の錆があり、鉛の含有率が高そうである。断面V字状の窪みが1ヶ所あり。
8 鉄砲玉	径重 1.25~(1.1) 10.3	32区畑耕土 完形	白色の錆があり、鉛の含有率が高そうである。平坦な弱い潰れ面1ヶ所あり。
9 古銭	径重 2.4 孔0.6 2.7 g	泥流内 完形	銅製。寛永通寶。歪みあり。
10 古銭	径重 2.4 孔0.6 2.6 g	32区 完形	銅製。寛永通寶

No. 器種	計測値 (cm)	出土・復元状態	備考
11 古銭	径 2.4 孔 0.6 重 3.2 g	32区 完形	銅製。地は赤色味強い。寛永通寶
12 不明	長 6.0 幅 0.5	7号畑耕作土 完形	木製品。柔らかな広葉樹か。両端を削り丸みを付けている。楊枝のような用途か。屈曲は旧時のものか不明。
13 不明	長 5.5 幅 0.6 厚 0.15	5号畑耕作土 完形か	木製品。柔らかな広葉樹か。一端は斜めに鋭く切り落とす。もう一端は丸みを付けるように削っている。
14 不明	長 9.7 幅 1.2 厚 1.0	32区畑耕作土 一端を欠く	木製品。割り箸のような細い棒状品。端部は面取りしたように滑らか。
15 木片	長 11.8 幅 1.5 厚 1.1	32区V-14グリッド	木製品。やや硬い樹種。断面三角形で各辺に刀子で削ったような加工痕が残る破片。
16 木片	長 (11.8) 幅 (7.0) 厚 1.2	32 Y-10 グリッド	木製品。板状品の破片か。側面の一部がいきているか。全域に強い削り痕と方向不定の細かな擦痕がある。

## 10 V区住居出土遺物

### 1号住居 (本文 202～204頁)

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 灰釉陶器 椀	口 (14.6) 台 7.4 高 4.4	西壁中央際、床直上。 口縁 1/3 底部完存	薄手。右回転ロクロ。回転利用高台取付。内底は平滑。口縁端部は外方へ小さく外販。高台は外側より面取りし下端は尖る。釉は浸け掛け。	①緻密。黄色味をおびた微細な岩屑以外に混入物は少ない。②還元焰、良好。③黄灰 2.5 Y 6/1 で一様。釉は淡い緑灰色。④高台は外側に稜を残すが、大原 2 の範疇か。
2 須恵器 椀	口 12.7～12.1 底 5.8 高 [3.9]	東壁寄り北側床直上。 完形	底部やや厚手。右回転ロクロ→回転糸切無調整。外面のみロクロ痕強い。口縁に 1 箇所、上方から指頭で押し付けような歪みあり。	①素地普通だが、5mm 大の岩屑混じる。②還元焰、普通。③褐灰 10YR6/1。黄色味・黒色味おびるムラあり一様でない。黒斑内外面に広い。④焼成段階で生じたクラックがあり、底部を貫通している。
3 須恵器 椀	口 (13.3) 底 6.0 高 [4.1]	カマド上⇄カマド内の 4片。 口縁 1/5、底部完存。	底部周辺厚手。右回転ロクロ→回転糸切無調整。外面のみロクロ痕やや強い。内面は布状の擦痕残る。	①微細砂の混入多い素地。夾雑物は少ない。②還元焰、やや軟調。③黄灰 2.5 Y 7/2。内外面に重ね焼き由来の黒斑広い。
4 須恵器 椀	口 12.9 底 5.1 高 3.8	2の北隣床直上に並ぶ ようにして出土。 完形。	底部厚手で小さい。右回転ロクロ→回転糸切無調整。外面のみロクロ痕強く、内面は布目状擦痕強い。外面に輪積み痕のようなヒビあり。	①微細砂の混入やや多い素地。パミス等散見する以外、夾雑物は少ない。②還元焰、やや軟調。③灰白 2.5 Y 7/1。外底に赤色味をおびるムラあり。内外面に黒斑広い。
5 須恵器 椀	口 13.6 底 6.0 高 4.2	カマド前～北壁際の床 上 30cm 以上に散在す る 6片。 口縁 4/5、底部完存。	やや重量。右回転ロクロ→回転糸切無調整。ロクロ痕弱い。口縁に 1ヶ所、外側から指頭で押し付けたような歪みあり。	①素地普通。黒色夾雑物やや目立つ。他にも岩屑等混じる。②還元焰で比較的硬調。③灰 N 6/1。一様でない。重ね焼き痕が色ムラになって内外面に残る。
6 須恵器 有台椀	口 14.4 台 6.8 高 6.3	カマド前の床直上。 口縁 1/3、底部完存。	ポツリした作り。右回転ロクロ→回転糸切→回転利用高台取付。ロクロ痕弱い。	①夾雑物の多いややボソボソした胎土。②還元焰やや不十分だが、締まり普通。③灰白 5 Y 7/1 でほぼ一様。④内面と口縁端部の摩滅ややすすむ。
7 須恵器 有台椀	口 (14.8) 高 [4.8]	埋没土の 3片。 口縁 1/8、底部 2/3	全体に摩滅し、整形痕は不明瞭。右回転ロクロ→回転糸切。高台は剥落。ロクロ痕やや弱い。	①微細砂多い素地。夾雑物は少ない。②還元焰。不十分で締まり欠く。③灰白 7.5 Y 8/1 でほぼ一様。断面中央一部で黒色味をおびる。
8 須恵器 有台椀	口 15.3 台 6.4 高 [5.8]	カマド前床上 20cm 2 片⇄埋没土 8片。 ほぼ完形。	右回転ロクロ→回転糸切→回転利用高台取付。高台の断面形状が一様でない。ロクロ痕はごく弱く、内面では不明瞭。	①素地は軽量でボソボソしている。2mm 台の岩片の夾雑多い。②酸化焰気味。ややしまり欠く。③浅黄 2.5 Y 7/3。一様でなく、内面は黒色味強い。④胎土・焼成とも土師器的である。
9 須恵器 椀	口 (16.0) 底 6.8 高 6.5	カマド北袖上 3片⇄埋 没土 4片。 口縁 1/2、底部 3/4	外面下半剥落多く、整形痕不明瞭。右回転ロクロ→回転糸切無調整。外面ロクロ痕は細かく整っている。	①微細砂混じりの素地。他の夾雑物少ない。②還元焰、やや軟調。③黄灰 2.5 Y 7/2。黄色味・灰色味おびるムラあり。内面に重ね焼き痕の黒斑。
10 須恵器 椀	口 13.4～12.8 底 5.8 高 4.0	貯蔵穴北隅、底面・ほ ぼ直上。 完形	右回転ロクロ→回転糸切無調整。ロウ円 1ヶ所に上方から指頭の押し付けたような強い歪みあり。	①②③に近い。③ 10YR7/1。外底付近は赤色味をおびる。内面に黒斑広い。④内面立ち上がり部に黒斑を避けて墨書「九」。
11 須恵器 椀	口 13.4 底 6.6 高 4.1	東壁に密着するような 位置の床上 14 cm。 口縁一部欠くほぼ完形。	右回転ロクロ→回転糸切無調整。外面ロクロ痕細かく強い。内底中央がへら先で穿つような窪みになる。	①素地普通。微細砂混じる。②還元焰、やや軟調。③灰白 5 Y 7/2。灰色味をおびるムラあり。④口縁外面に比較的墨痕明瞭な墨書「山」。
12 須恵器 椀	口 13.3 底 6.3 高 3.9	カマド前面の床直上。 完形	底部やや厚手。右回転ロクロ→回転糸切無調整。ロクロ痕外面で細かく強い。	①②④に類似している。③灰黄 2.5 Y 7/2。外底付近に赤色味を帯びたムラあり。内外面底面付近に黒斑。④内面立ち上がり部に、黒斑にかまわず墨書 (国がまえ、または丸に「占」)
13 須恵器 有台椀	口 14.3 台 7.2 高 5.3	カマド前面床直上。 口縁 4/5、底部完存。	底部厚く重量。右回転ロクロ→回転利用やや雑な高台取付で、接合痕が残る。ロクロ痕弱く、特に内面は平滑。	①砂質。1mm 大の黄白灰夾雑物やや多い。②還元焰か。不十分で締まり欠く。③にぶい黄橙 10YR6/3。内底中心に黒色味強いムラ広い。④口縁外面に墨書。墨痕薄く釈文不明。



No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
14 須恵器 壺	口 (15.0) 胴 28.4 底 14.7 高 [30.6]	カマド掛け口内。 口縁1/8、他は底部中央を除いてほぼ完存。	右回転ロクロ→回転糸切無調整。内面頸部に顕著な接合痕残らない。ロクロ痕弱く不明瞭。胴部下端の削りも雑で不明瞭。	①やや砂質。1～2mm大の岩屑混じりが大型品としては緻密。 ②還元やや不十分だが、適度に締まる。③灰黄2.5Y6/2。灰色味強いムラあり。 ④二次被熱の痕跡は顕著ではない。
15 土師器 小型甕	口 12.5 底 7.2 高 13.6	カマド掛け口北脇24片。 上半2/3、底部完存。	薄手。右回転ロクロ→回転糸切無調整。外面全面にカキ目状の擦痕。内面は下半にロクロ痕明瞭。	①ボソボソした素地に砂粒等細かな夾雑物含む。 ②酸化焰、やや硬調。③にぶい黄橙10YR7/4。赤色味・灰色味おびるムラ多く一様でない。
16 土師器 小型甕	口 (13.2) 底 7.5 高 [8.5]	カマド掛口西の底部、カマド内の上半9片。 上半1/3、下半1/5で底部のみ完存。	同一個体と思われる上下の破片を1個体に扱った。薄手。成形は15に近いが、内面のロクロ痕は不明瞭。	①15に近似するが、素地は緻密で、夾雑物が多い。②酸化焰、やや硬調。③にぶい黄橙7.5YR6/4。赤色味・黒色味おびるムラ多く一様でない。 ④破損後に二次被熱。
17 須恵器 鉢	口 22.5 底 13.8 高 19.3	貯蔵穴内に散乱するように出土した24片。 底部中央以外ほぼ完存。	やや厚手で重量。右回転ロクロか。外底は丁寧な削り切離し痕不明。糸切ではないか。	①素地普通。5mm近い岩屑を散見。②還元不十分でやや軟調。③にぶい黄橙10YR6/4。赤色味、黒色味おびるムラ多い。④外面にスス附着。
18 土師器 甕	口 22.2 底 3.9 胴 22.6 高 25.8	カマド燃焼部南隅、および周辺の約50片。 4/5個体。	口縁コの字の痕跡を僅かに留め、やや厚手。口縁外端に太い窪み廻る。外面削りは縦位で弱い。内面に粗い擦痕の残るナデ。	①素地普通。パミス・チャート等細かな雑多な夾雑物多い。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙10YR6/4。赤色味・黒色味の強いムラ多く一様でない。 ④破損後に二次被熱。
19 土師器 甕	口 20.8 胴 20.4 高 [22.5]	カマド掛口東側に散らばる33片。 図示部の2/3。	口縁コの字の痕跡はほとんど残らない。やや厚手。外面削りは乾燥が進んだ状態で行う。内面は刷毛目状の擦痕が縦横に顕著。	①素地やや緻密。パミス等の夾雑物を少量含む。甕としては良好。②酸化焰、普通。③にぶい褐7.5YR5/3。黒色味、黄色味おびるムラあり一様でない。④破損後に二次被熱。
20 土師器 甕	口 20.4 底 3.9 高 26.3	カマド掛口東側に広く散らばる約50片。 ほぼ完形。	19に類似している。内面の刷毛目状擦痕はあまり顕著ではない。	①②19に類似している。 ③19に近い。内面は黄色味をおび、ほぼ一様。 ④外面上半に多少ススが附着する。
21 土師器 甕	口 19.3 高 [13.0]	カマド上面に広く散らばる21片。 図示部ほぼ完存。	口縁コの字の形態を留める。口縁外端沈線廻る。外面肩部付近横位の鋭いヘラ削り。内面は斜位～横位のナデで一部に粗い刷毛目状の擦痕。	①②18に類似している。 ③にぶい橙7.5YR6/4。黒色味おびるムラ広い。 ④外面一部に弱くスス附着。
22 土師器 甕	口 (20.2) 胴 (21.2) 高 [17.5]	貯蔵穴上と周辺の床直上～床土20cmの18片。 図示部の1/2。	口縁コの字の形態を僅かに留め、やや厚手。外面削りは肩部付近に1列のみ横位があり他は縦位で弱め。内面ナデは削りのように強い。	①素地やや緻密。微細雲母粒を含む細砂混入。 ②酸化焰、甕としては硬調。 ③にぶい褐7.5YR5/3。黄色味おびるムラあり。 ④外面一部にススやカマド粘土附着。

## 2号住居 (本文206頁)

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 須恵器 椀	底 5.5 高 [2.3]	カマド内火床直上。 体部下半1/3、底部3/4	右回転ロクロ→回転糸切無調整。内面は平滑。	①素地普通。粗砂等少量混入。②比較的硬調だが還元不十分。 ③灰黄褐10YR6/2。内底は重ね焼き痕状に黒斑。
2 須恵器 有台椀	口 14.7 台 8.0 高 5.3	カマド南脇床直上。 1/2個体。	右回転ロクロ→回転糸切→回転利用高台取付。外面のみロクロ痕強い。口縁は大きく外反。	①ダスト質。1～3mm大の雑多な細礫混じる。 ②良好だが還元不十分。 ③灰黄2.5Y7/2。下半はやや赤色味をおびる。
3 須恵器 有台椀	口 (14.4) 高 [4.3]	住居中央床直上⇄埋没土1片。 図示部の1/8。	右回転ロクロ→回転糸切→回転利用高台取付。ロクロ痕やや強い。夾雑物の影響で器面平滑さ欠く。	①素地は良好。最大5mmの岩屑を夾雑。 ②還元焰。普通。③黄灰2.5YR6/1。黒色味をおびるムラあり。断面は黄色味をおびる。
4 須恵器か 有台椀	台 7.0 高 [3.2]	埋没土内の3片。 図示部の1/2。	右回転ロクロ→回転糸切→回転利用雑な高台取付で歪み生じる。器面平滑。	①やや緻密な素地で混入物も少ない。 ②還元焰か。比較的硬調。 ③にぶい橙7.5YR。断面黄色み強く、一部で黒色。
5 須恵器 壺	底 22.0 高 [8.7]	住居中央床土7cm。 図示部の1/8。	大きさに比してやや薄手。外面ナデのしたに平行叩きが一部で見られる。内面には強いナデ。	①素地緻密。黄灰色の粘土粒や5mm大の岩屑等夾雑物多い。 ②還元焰、普通。③灰N5/1で内外面ほぼ一様。断面は赤色味をおびる。
6 土師器 小型甕	口 (12.4) 高 [7.5]	住居中央掘り方内床下7cm。 図示部の1/6	口縁の外反弱い。やや薄手。右回転ロクロだが、整形のみの使用か。外面横位擦痕はカキ目状。	①粗砂の混入やや多く、ガラガラしている。 ②酸化焰、普通。③にぶい褐7.5YR5/3。黒色味おびるムラあり一様でない。④二次被熱。
7 土師器 甕	口 (20.2) 胴 (22.8) 高 [10.5]	住居南寄りの床土4cm。 図示部の1/3。	口縁コの字の形態を僅かに留める。やや薄手で歪みあり。外面肩部には削りなく、粘土紐状の段差残る。	①素地やや砂質。1mm未満の夾雑物やや多い。②酸化焰、やや硬調。③橙7.5YR6/6。黄色味・灰色味おびるムラあり一様でない。④外面一部スス附着。

## 3号住居 (本文208頁)

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 灰釉陶器 小椀	口 (10.0) 台 4.8 高 [3.5]	住居中央南寄り床直上。 口縁2/5、底部完存。	右回転ロクロ→回転糸切→回転利用高台取付。高台は断面三日月状の痕跡残す。釉は漬け掛け。	①僅かに砂質。夾雑物は少ない。②還元焰、硬調。③灰白2.5Y7/1でほぼ一様。釉は内面で灰緑色・外面で灰白色。④大原2号窯式の古手か。
2 灰釉陶器 椀	口 (15.0) 台 7.7 高 5.0	住居南隅の床直上。 口縁1/4、底部1/2	やや厚手。右回転ロクロ→回転糸切→回転利用高台取付。高台は高く直線的。釉は漬け掛け	①きわめて緻密。白色の微細な岩屑を僅かに含む。②還元焰、硬調。③灰白5Y7/1で一様。釉は内面で灰緑色・外面で灰白色。 ④虎渓山1

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
3 砥石	長 [9.1] 幅 3.1 厚 2.1 重 72.6g	住居中央やや南寄り、 床直上。 一端を欠く。	鉄錆状付着物顕著で使用痕不明瞭。表面中央がやや窪み。側面は丸みのある4面使用の手持ち砥。	①夾雑物あり、仕上げ砥としては質が落ちる。④変質流紋岩（砥沢石）。

#### 4号住居（210頁）

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 須恵器か 耳皿	口 7.5 底 5.2 高 2.1	西壁直下、床上 16cm。 完形。	右回転ロクロ→回転糸切→指頭による 折り曲げ耳部作成。杯部が狭く、当初 より耳皿を意図した成形。	①微細砂を含む緻密な素地。②還元不充分だが、硬調に締まる。 ③にぶい黄橙 10YR6/3。外底に黒斑。他はムラ少ない
2 須恵器 有台椀	口 (14.4) 高 [4.7]	カマド内の3片。 図示部の1/8。	右回転ロクロ。高台剥落か。ロクロ痕 外面のみやや強く、内面平滑。	①やや砂質。混入物少なく良好。②還元焰、普通。③灰白 2.5 Y 7/1。黄色味をおびるムラがあるが、ほぼ一様。
3 須恵器 有台椀	台 7.2 高 [2.5]	カマド西脇床直上。 図示部の1/4。	右回転ロクロ→回転糸切→回転利用丁 寧な高台取付。高台は幅広くで下端中央 が窪む。内底に重ね焼き痕。	①ややボソボソした素地で、1mm未満の夾雑物やや多い。② 還元焰、普通。③灰白 2.5 Y 7/1。ほぼ一様。
4 土師器 小型甕	口 (13.2) 胴 (13.8) 高 [9.6]	カマド内3片⇔埋没土 3片。 図示部の1/2。	やや厚手。口縁部のナデ、外面の削り 共に強い。舞面のナデには一部に刷毛 目状の擦痕。	①素地やや緻密。乳白色・赤褐色の細かな岩屑を少量夾雑して いる。②酸化焰、やや硬調。 ③にぶい黄橙 10YR6/4 でほぼ一様。
5 土師器 甕	口 (20.4) 高 [7.6]	カマド内東寄り。 図示部の1/8。	やや厚手。小破片からの復元で怪不安。 外面の削りは細かく弱い。内面のナデ は細かな刷毛目状の擦痕。	①甕類としては素地緻密。黄白色や黒色の微細岩屑を少量含む。 ②酸化焰、硬調。③にぶい黄橙 10YR7/4 でほぼ一様。④外面に カマド粘土少量付着。
6 土師器 甕	口 19.5 底 (3.8) 高 24.8	カマド西脇床直上の約 60片。	肩部は明瞭な横位擦痕が内外面に見ら れる。外面削りは乾燥が進んだ状態で 行い、幅広く息長い、肩部付近まで 及ばない。	①ややザックリした素地で1mm大の混入物も多い。②酸化焰、 普通。③にぶい黄橙 10YR6/4。黒色味、赤色味をおびるムラあり一様 でない。

#### 5号住居（本文 213頁）

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 須恵器 椀	口 (13.8) 底 6.1 高 3.9	カマド内火床上 11～ 27cmの9片。 口縁1/2、底部完存。	右回転ロクロ→回転糸切無調整。ロク ロ痕やや弱い。	①ダスト質。最大2mmほどの不揃いな岩屑混じる。②還元焰、 やや軟調。③灰白 2.5 Y 8/1。内外底に黒斑あり。④器面やや摩 滅する。
2 須恵器 有台椀	口 (15.8) 台 (7.4) 高 [2.8]	南壁寄り床上 17cm。 図示部の1/2	右回転ロクロ→回転糸切→回転利用高 台取付。残存部分ではロクロ痕弱い。 高台は断面三角形。	①素地普通。微細砂含み、2mm大の白色岩屑散見。②還元焰、 普通。③灰白 5 Y 7/1。内外面とも黒斑広い。 ④灰白 5 Y 7/1。
3 須恵器 有台椀	口 (15.8) 台 7.3 高 5.2	カマド前面床上 14cm。 口縁 2/3 欠く。	底部厚手。右回転ロクロ→回転糸切→ 回転利用雑は高台取付。ロクロ痕は外 面のみ強い。	①細砂混じりの比較的緻密な素地。②還元不充分だがやや硬調。 ③灰黄褐 10YR6/2。外面中心に黒色おびるムラあり。④口縁内 面下半に墨書「造」
4 須恵器 椀	高 [3.3]	南壁下西隅床上 15cm。 図示部 1/8。	右回転ロクロ。ロクロ痕細かくやや弱 い。	①砂粒混入多く、ザラザラした触感。他の混入物少ない。②還元 焰、普通。③灰白 2.5 Y 7/1。 ④口縁外面に墨書。墨痕薄く釈文不明。
5 須恵器 椀	底 6.0 高 [1.9]	上層埋没土 図示部 1/4	右回転ロクロ→回転糸切無調整。残存 部分ではロクロ痕弱い。	①細砂やや多いが他の混入物少ない。②還元焰、普通。③④内 底と口縁外面に墨書。内定は釈文不明。外面は(国がまえ「占」) の可能性。
6 須恵器 甕	底 18.0 高 [4.9]	南壁直下西寄り床上 16 ～24cmの3片。 図示部の1/2。	やや厚手。右回転のナデの痕跡があるが、 外底にロクロ使用の痕跡なく細かな凹 凸が広がる。	①大型品としては素地緻密。黒色鉱物等不揃いな夾雑物を少量 含む。②還元焰、やや硬調。 ③灰 7.5 Y 5/1。内外面ほぼ一様。
7 土師器 甕	口 (22.8) 高 [12.8]	南隅付近の壁直下床上 10cmの5片 図示部の1/3。	口縁コの字の痕跡は残らない。内面の ナデは抉るように強く、刷毛目状の擦 痕を残す。	①素地緻密で微細砂混じる。1mm未満の岩屑少量混じる。② 酸化焰、硬調。③にぶい黄橙 10YR6/3。内面彩度低く、内外面 それぞれにほぼ一様。

#### 11 V区 遺構外遺物（本文 214頁）

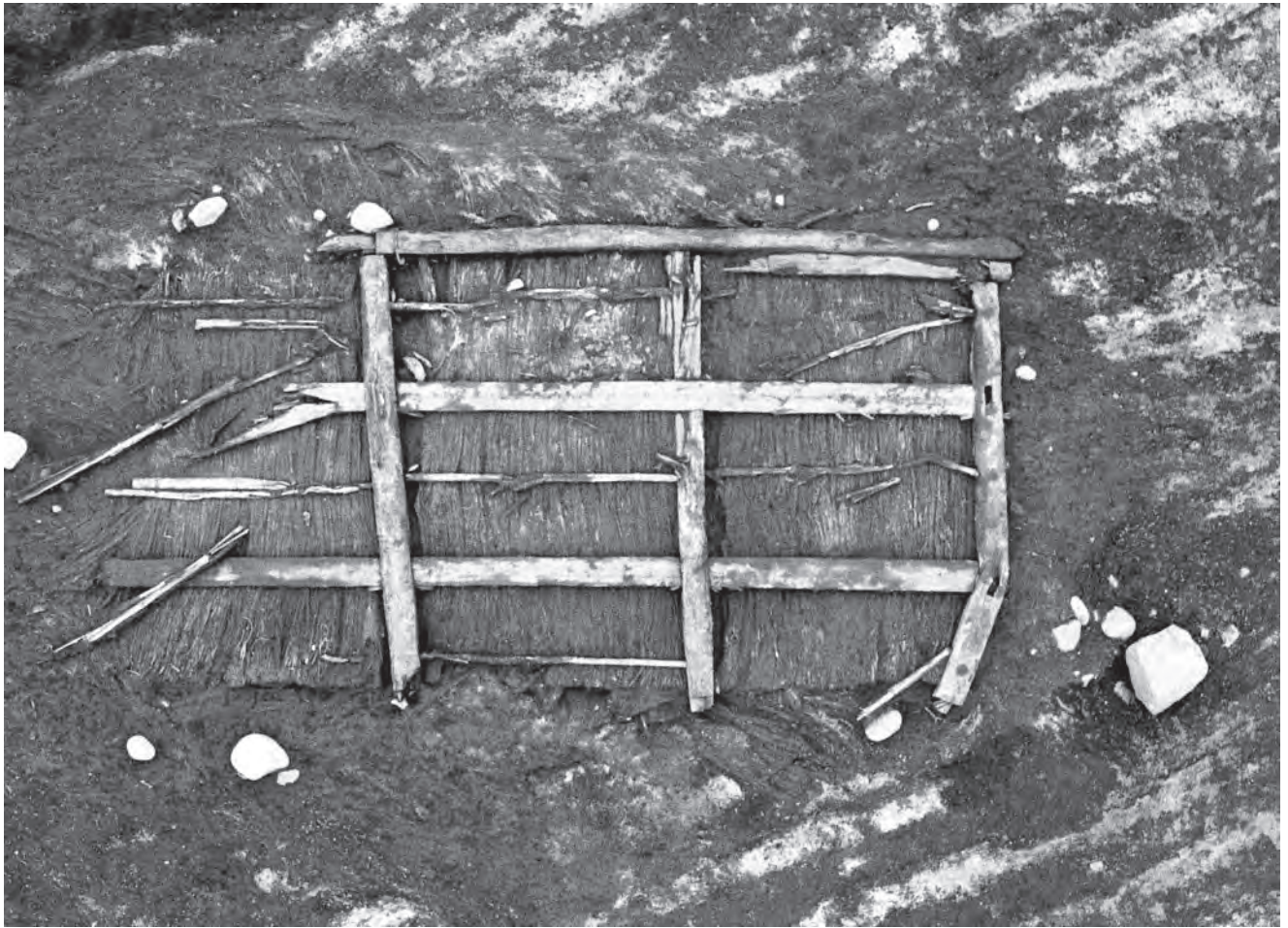
No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 土師器 甕	口 (18.0) 高 [12.1]	2号掘立柱建物ビット 内の14片 図示部の1/4	やや薄手。コの字状口縁。口縁外端部 沈線上に窪む。外面削りは丁寧で、内 面も平滑。	①素地普通。混入物少ない。甕類としては緻密。 ②酸化焰、普通。 ③にぶい黄橙 10YR7/4。口縁部に黒斑あり。
2 土師器 甕	底 (4.0) 高 [3.2]	2号掘立柱建物ビット 4内 図示部の1/3	厚手。底部周辺としては外面削りは丁 寧。内面は調整の及ばない部分が残る。	①素地普通。混入物少ない。甕類としては緻密。 ②酸化焰、普通。③褐 7.5YR4/3。一様でない。断面は黒色味強い。

## 上郷岡原遺跡（2）

# 写真図版



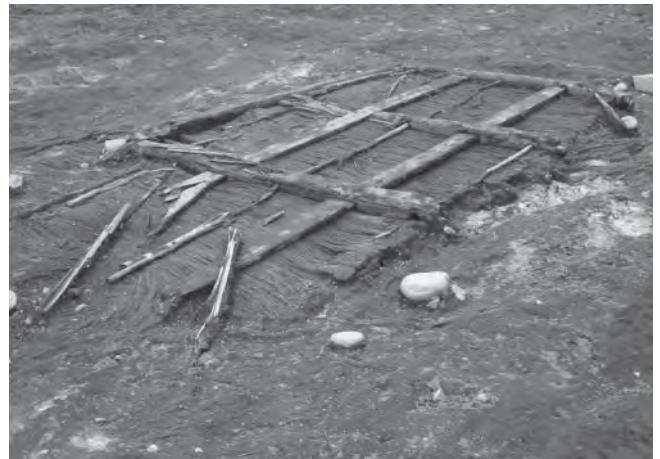
吾妻川対岸より見た上郷岡原遺跡（東から）



全景（上方が南）



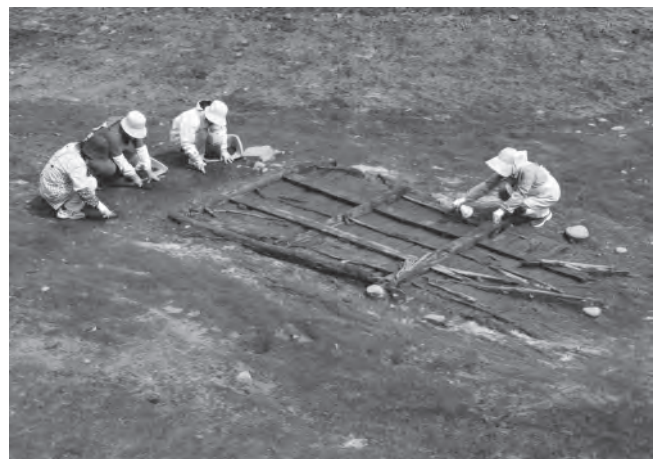
南からの俯瞰



北東からの近接



北西からの近接



調査風景



① 材3 下側ホゾ穴



② 材3 上側ホゾ穴



③ 材2・3 屈曲状況



④ 材4 通柄差し口



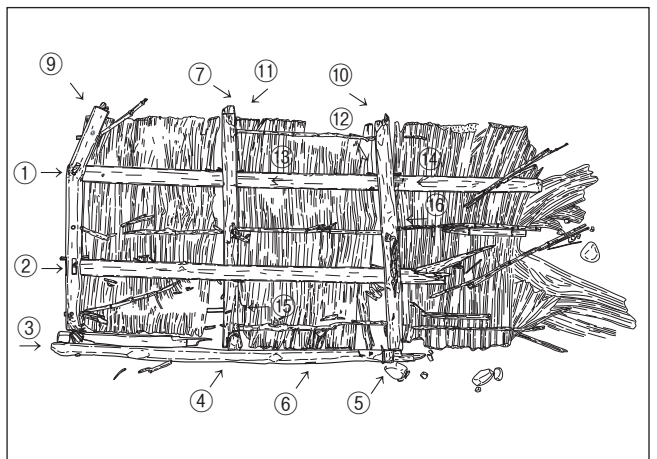
⑤ 材5 ホゾ穴破断状況



⑥ 材1 扱首東ホゾ穴



⑦ 材4 目地ホゾ



1号壁材 撮影方向略図

PL-4 1号壁3



⑨ 材3 目地ホゾ



⑩ 材5 ホゾ破断状況



⑪ 材4 目地ホゾ タケ材差し口



⑫ 材5 横板と楔



⑬ 材4 貫通し



⑭ 材5 貫通し



⑮ 材4 破断状況



⑯ 材5 タケ材差し口

PL-5 1号壁材1



1:12

PL-6 1号壁 材3

梁方向外側



桁方向外側



梁方向内側



桁方向内側





建物内側



西側面



建物外側



東側面



PL-8 1号壁 材5

東側面



建物内側



西側面



建物外側





2号壁全景 (上方が東)



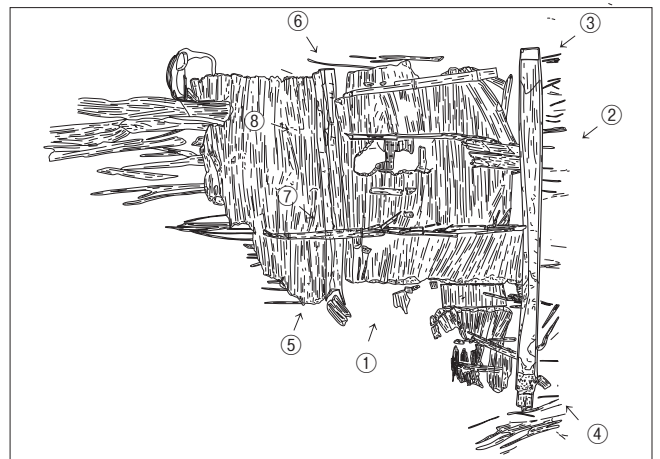
東からの近接



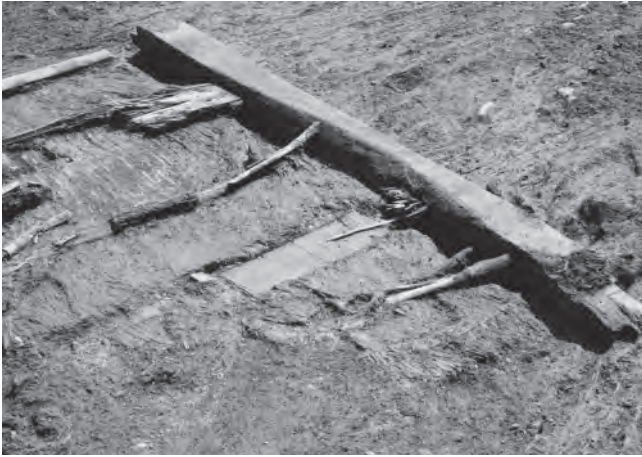
北からの近接



北東からの近接



2号壁材 撮影方向略図



① 内側から見た材1



② 外側から見た材1



③ 材1 ホゾ (東側)



④ 材1 ホゾ (西側)



⑤ 材2 (西から)



⑥ 材2 (東から)



⑦ 材2上のタケ材



⑧ 材2 東隅部分

建物外側



出入口口面



建物内側



壁面側



PL-12 2号壁材2

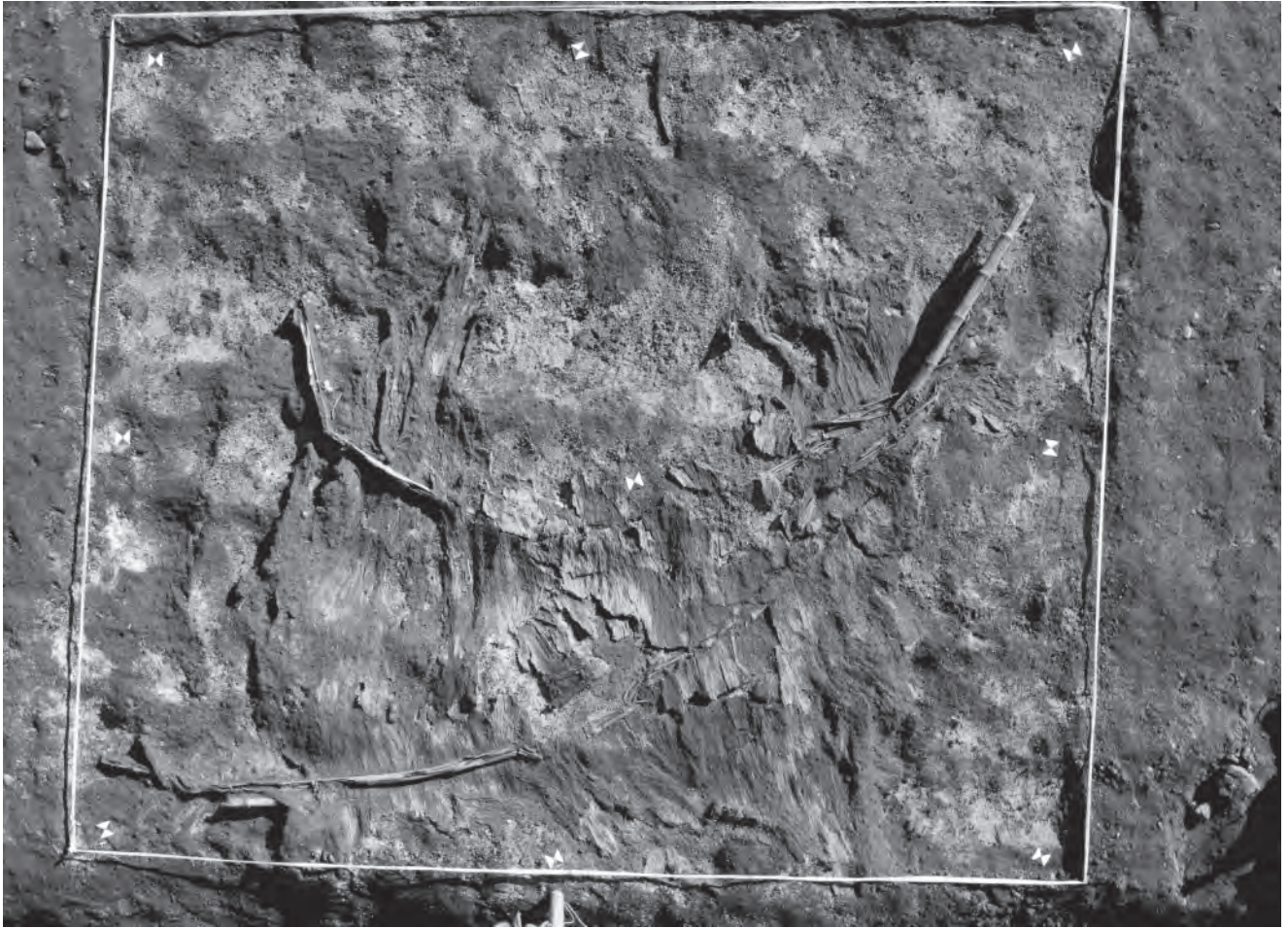


建物外側

南側面

建物内側

北側面



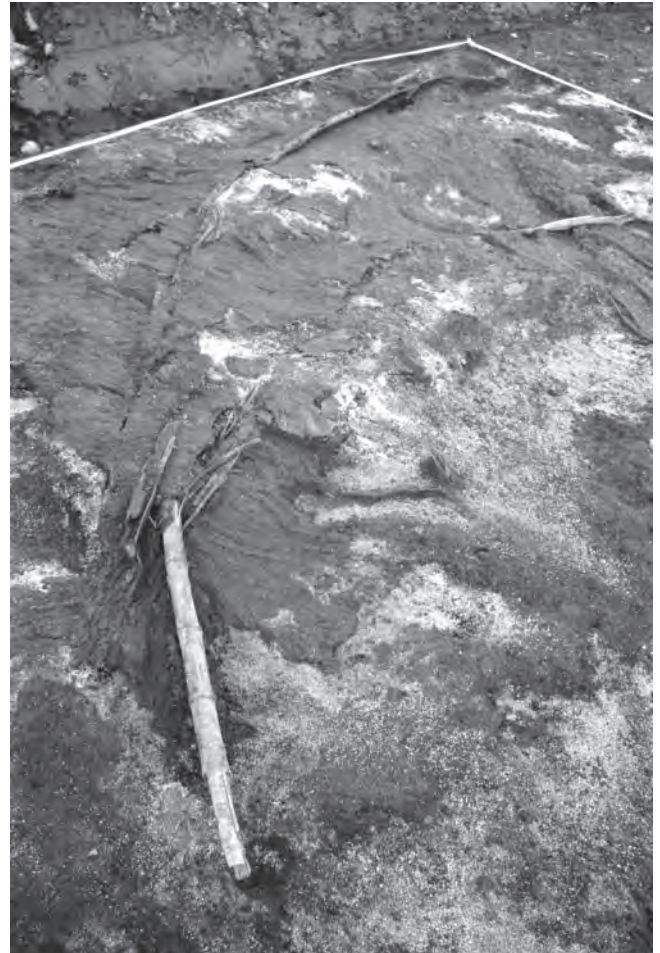
屋根材全景 (上方が東)



北東側 タケ材



南側 近景



全景 (南東側から)

PL-14 1号建物 1



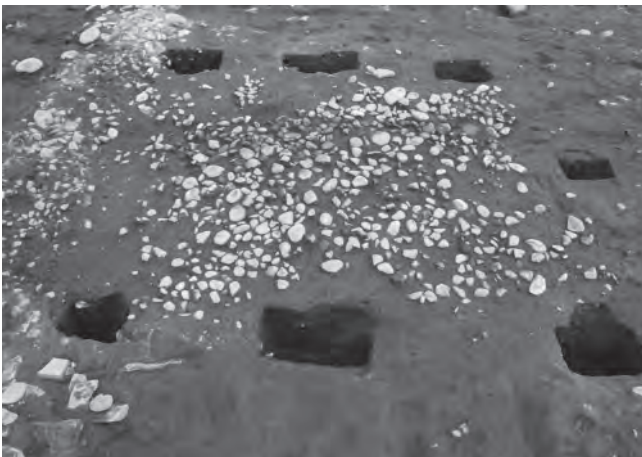
1号建物全景（柱・壁材残存状況 西から）



壁材残存状況（北から）



壁材残存状況（北西から）



床下礫確認状況（南から）

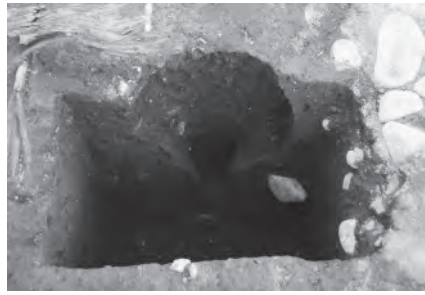


掘り方下確認状況（西から）

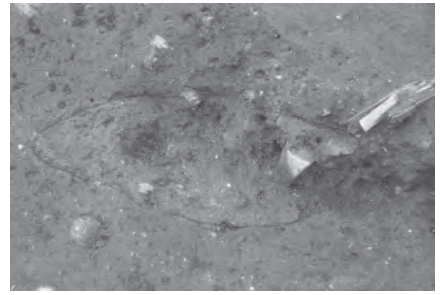




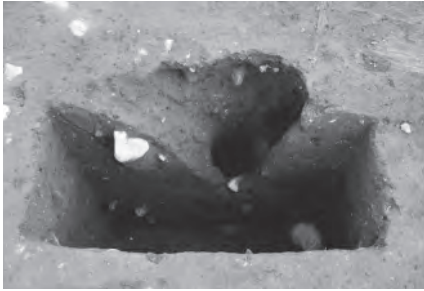
P1 確認状態



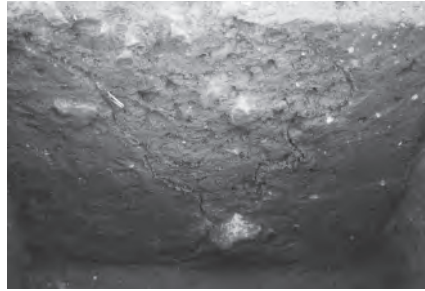
P1 断面 (北から)



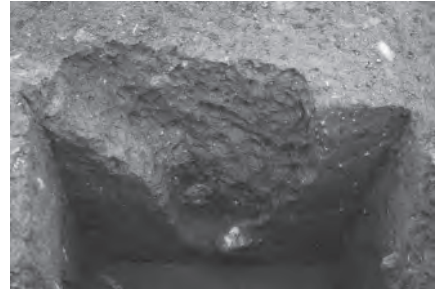
P2 確認状態



P2 掘り方 (北から)



P3 断面 (北から)



P4 掘り方 (北から)



P5 柱痕 (南から)



P5 柱痕 (南から)



P6 柱痕 (南から)



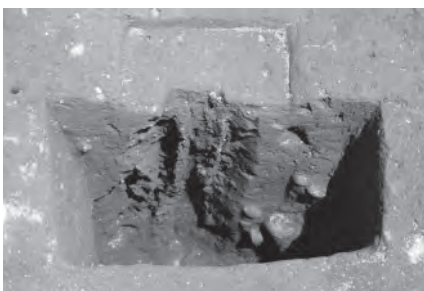
P6 掘り方 (南から)



P7 柱痕 (南から)



P7 掘り方 (南から)



P4 掘り方 (南から)



P8 掘り方



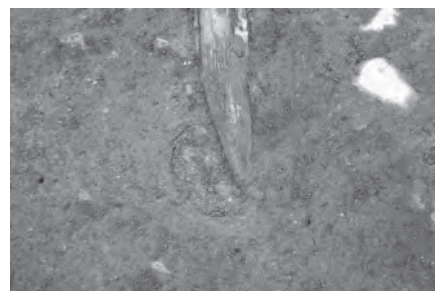
P10 柱痕 (西から)



P10 掘り方 (西から)



P10 下層断面 (西から)



P3 確認状態

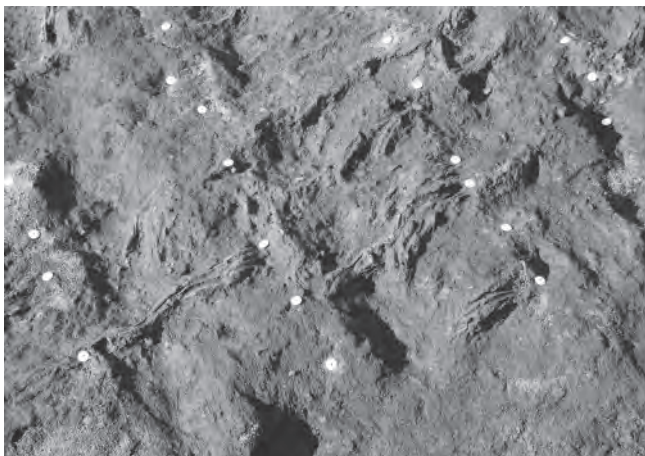
PL-16 IV区畑 1



12区画畑（2005年度調査区）全景



12区画2号畑と1号トレンチ



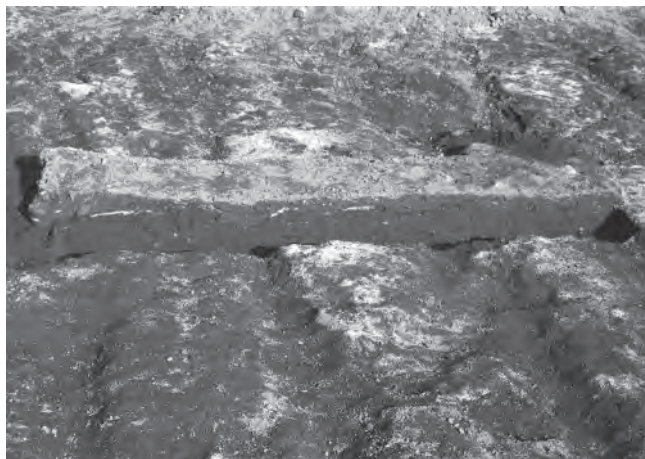
12区画2号畑作物痕跡



12区画5・6・8号畑境（西から）



12区画8号畑断面（北から）



12区画10号畑断面（南西から）



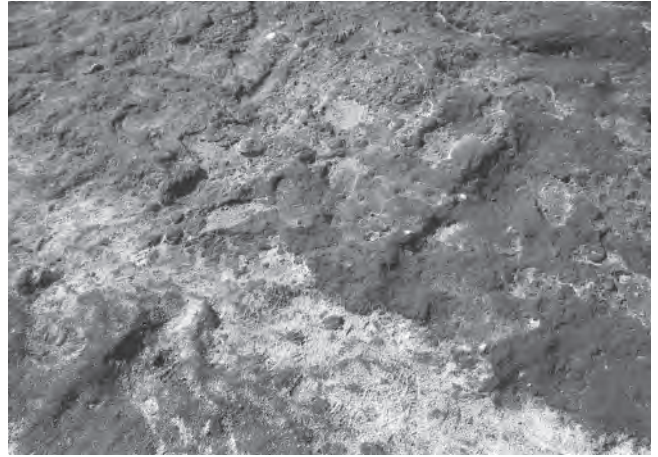
12区画11号畑（西から）



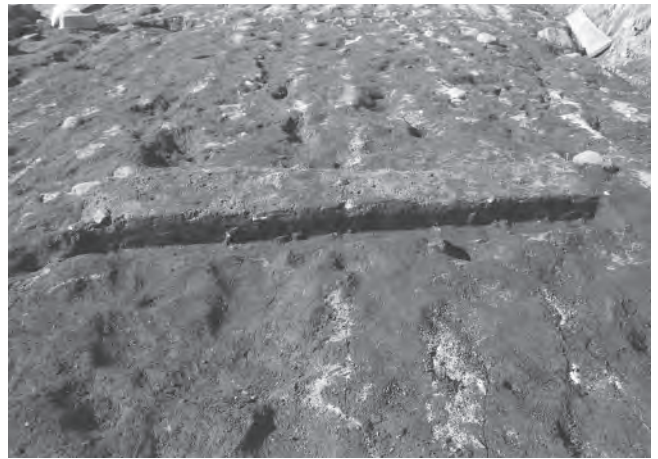
12区画12号畑（西から）



12区画13号畑 (南から)



12区画13号畑畝上の足跡

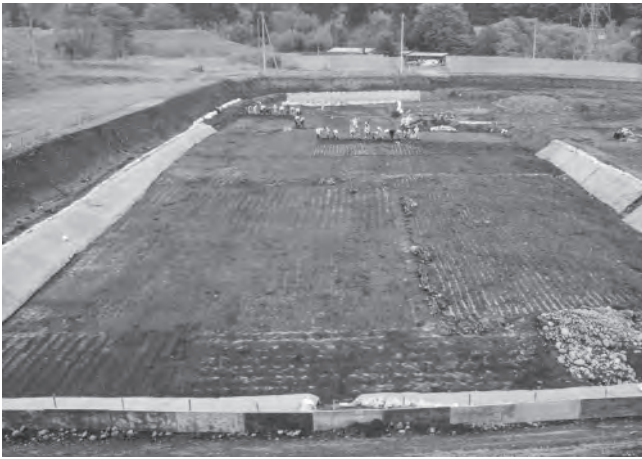


13区画1号畑断面 (東から)

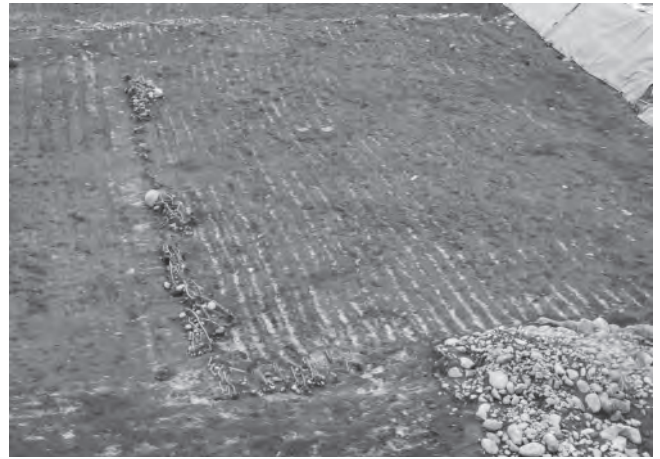


15・16・17区画畑全景 (上方が北)

PL-18 IV区畑3



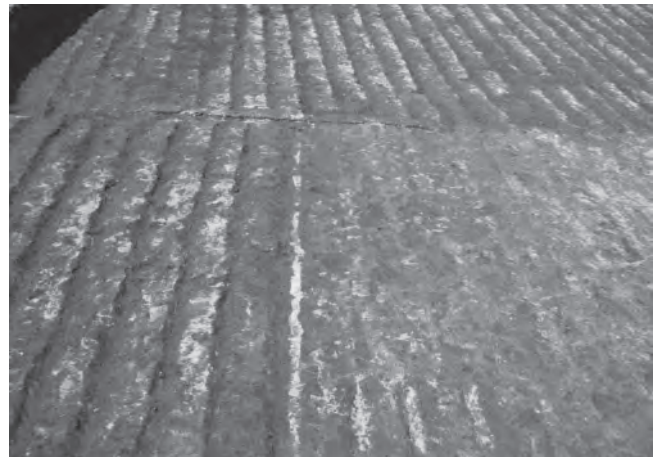
15・16区画畑 遠景（東から）



4号道と15・17区画畑（南から）



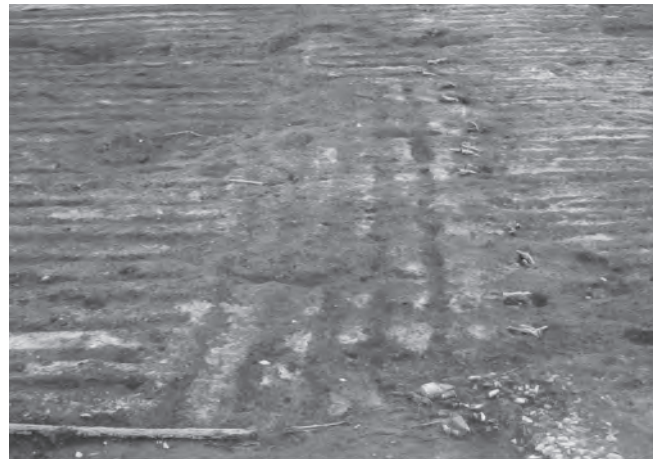
15区画南東隅付近（西から）



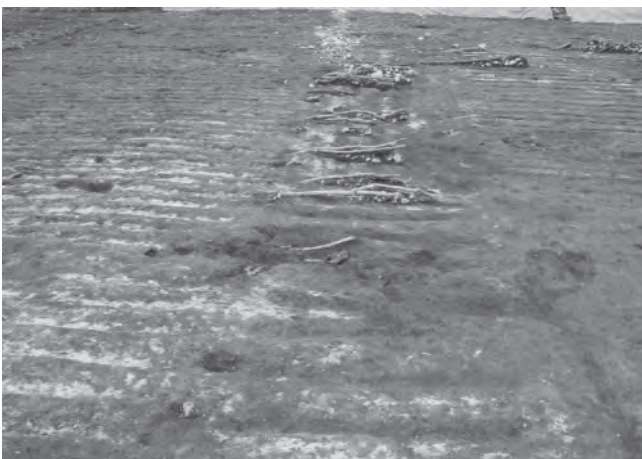
15区画1・2号畑（東から）



4号道と15区画・17区画境（東から）



1号建物と15区画4号畑（北から）



12区画4号畑（南から）



15区画5号畑（北から）



16区画畑（西から）



15・16区画畑（東から）



16区画3号畑（西から）



15区画3・5号畑境の窪み（西から）

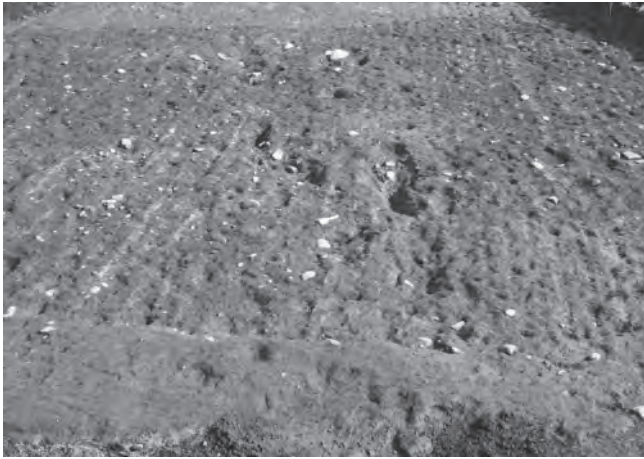


15区画2号畑北隅の境木（北東から）



17区画畑北側（東から）

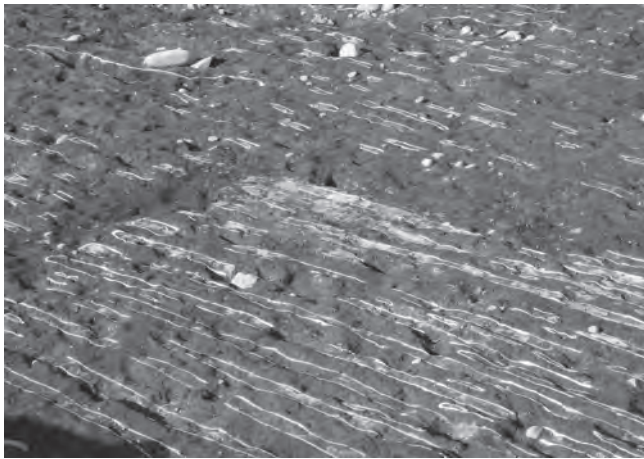
PL-20 IV区畑 5



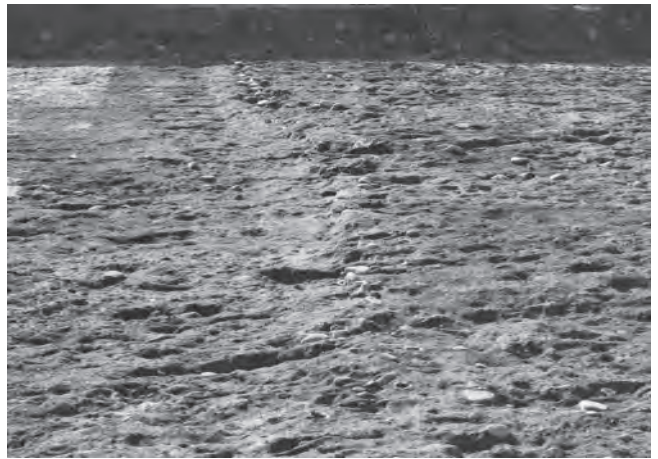
13区画畑 (西から)



13区画畑 (南東から)



13区画1・2 (手前) 号畑境 (南東から)



18 (左)・13 (右) 区画畑と6号道 (北から)



18 (手前)・13区画畑境 (東から)



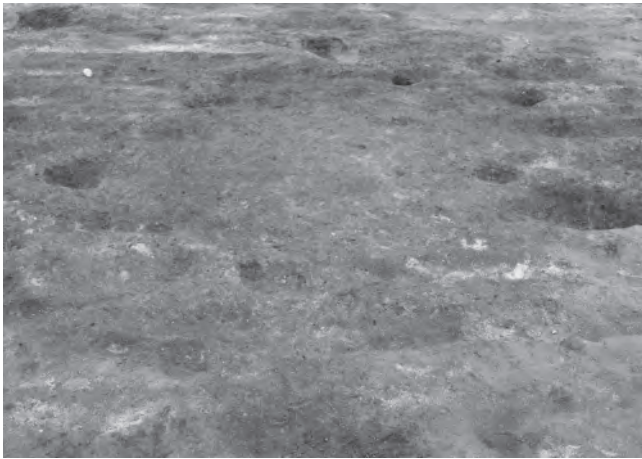
18区画畑 (南から)



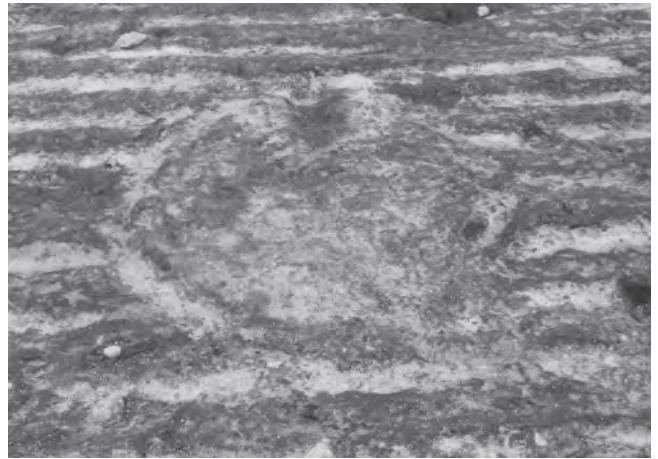
19区画畑 (東から)



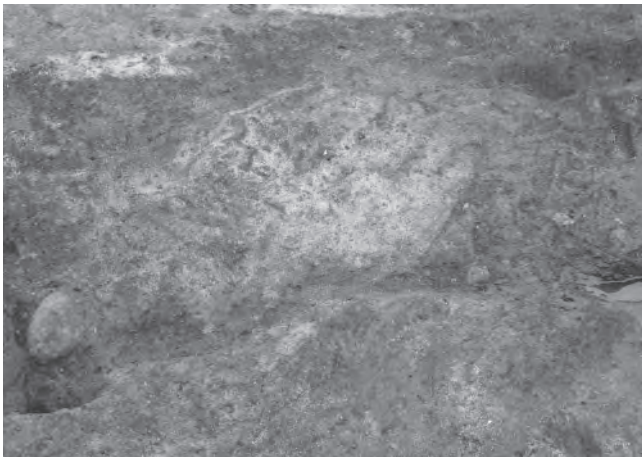
上位段丘面の畑 (南から)



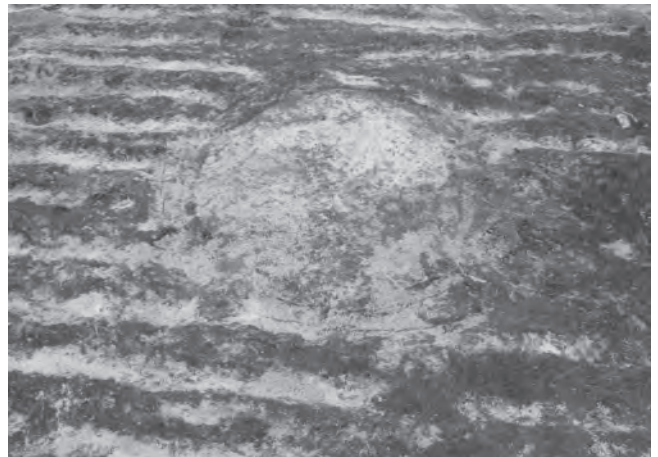
16 区画 1 号畑 1 号円形平坦面 (北から)



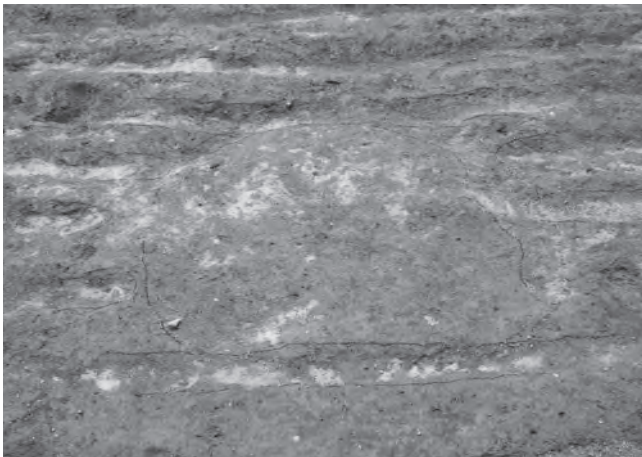
16 区画 2 号畑 1 号円形平坦面 (北から)



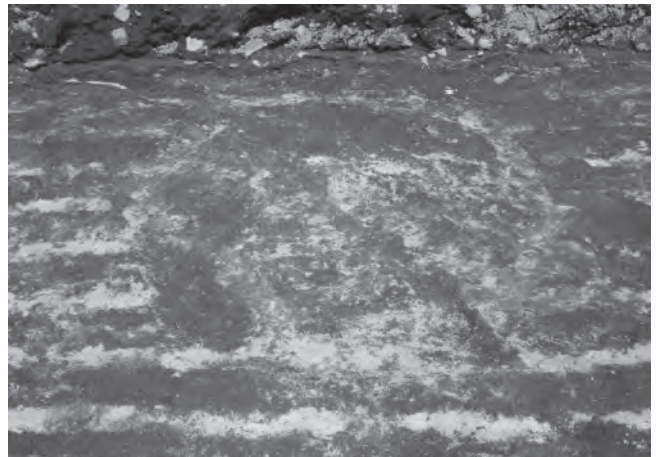
16 区画 1 号畑 2 号円形平坦面 (北から)



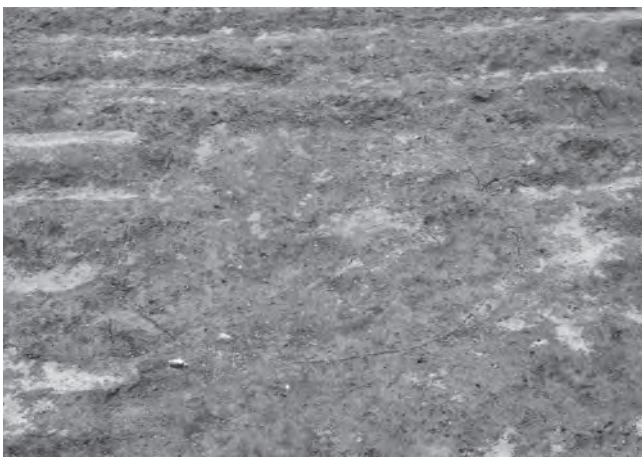
16 区画 2 号畑 2 号円形平坦面 (北から)



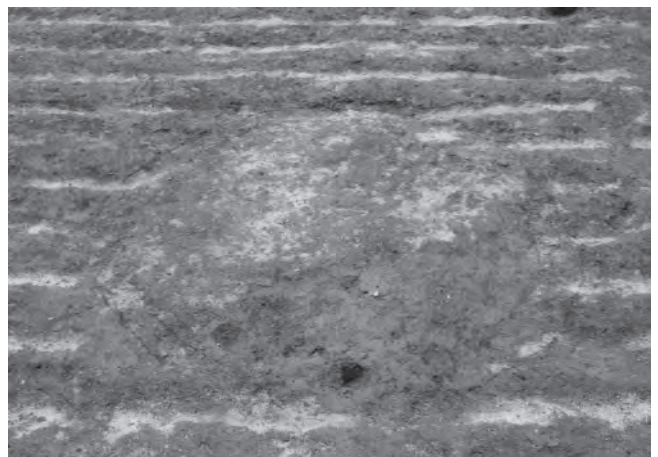
16 区画 1 号畑 3 号円形平坦面 (北から)



16 区画 2 号畑 3 号円形平坦面 (南から)

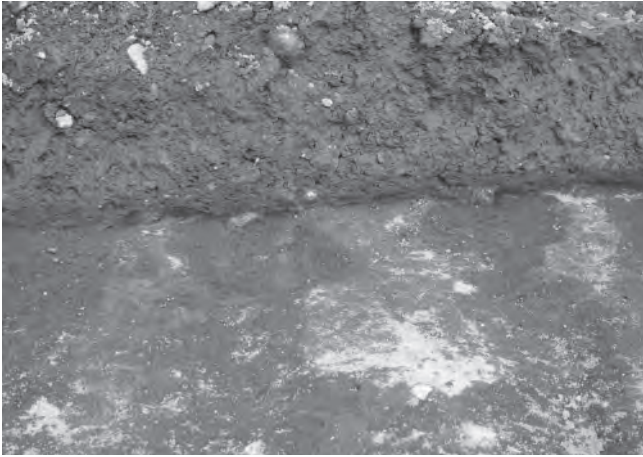


16 区画 1 号畑 4 号円形平坦面 (北から)

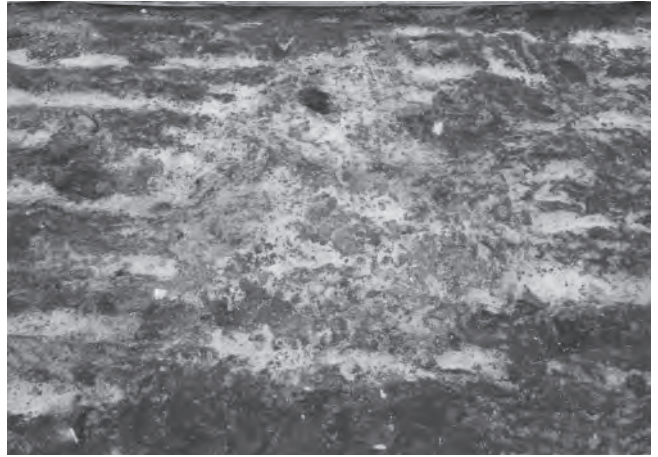


16 区画 2 号畑 4 号円形平坦面 (北から)

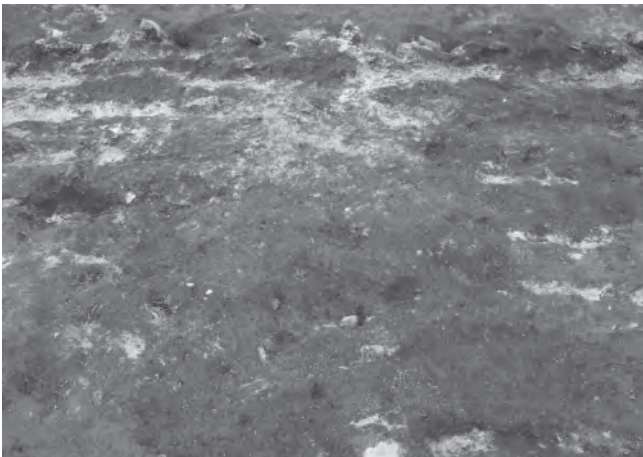
PL-22 円形平坦面 2



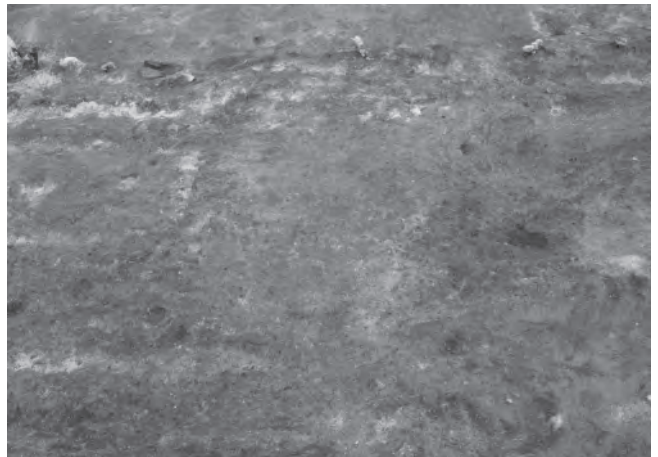
16区画4号畑1号円形平坦面（北から）



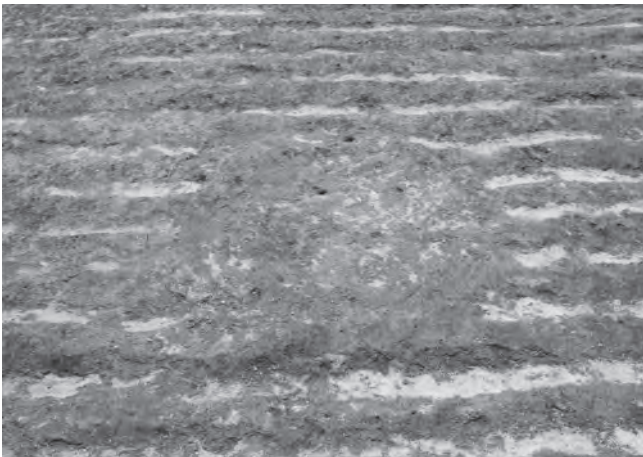
16区画4号畑2号円形平坦面（北から）



17区画畑1号円形平坦面（北から）



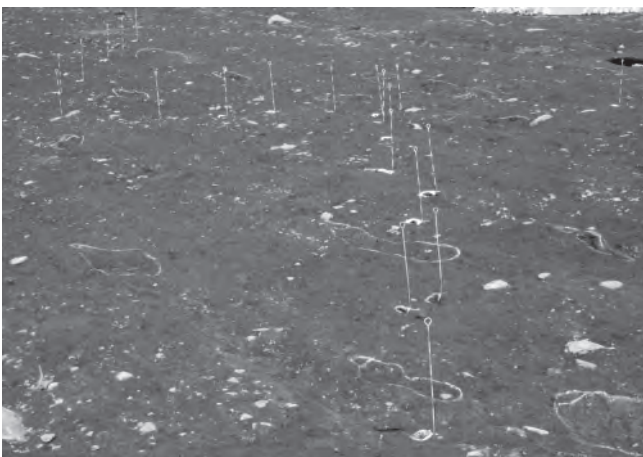
17区画畑2号円形平坦面（北から）



16区画5号畑1号円形平坦面（北から）



南西隅の境木痕（南から）

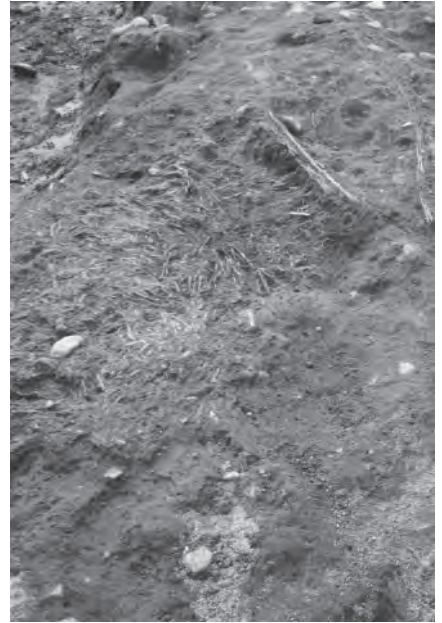


南西隅の境木痕（東から）





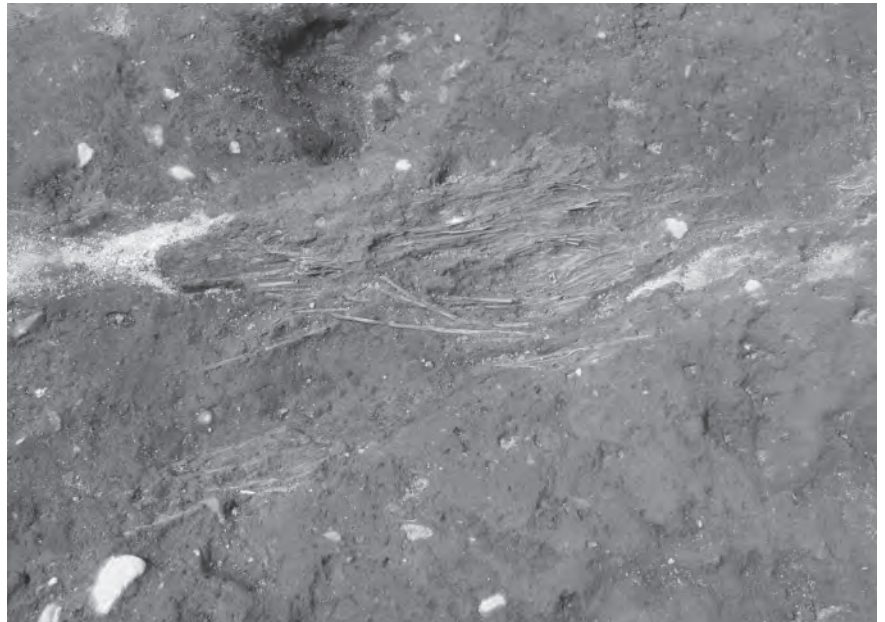
麻根確認状況（南から）



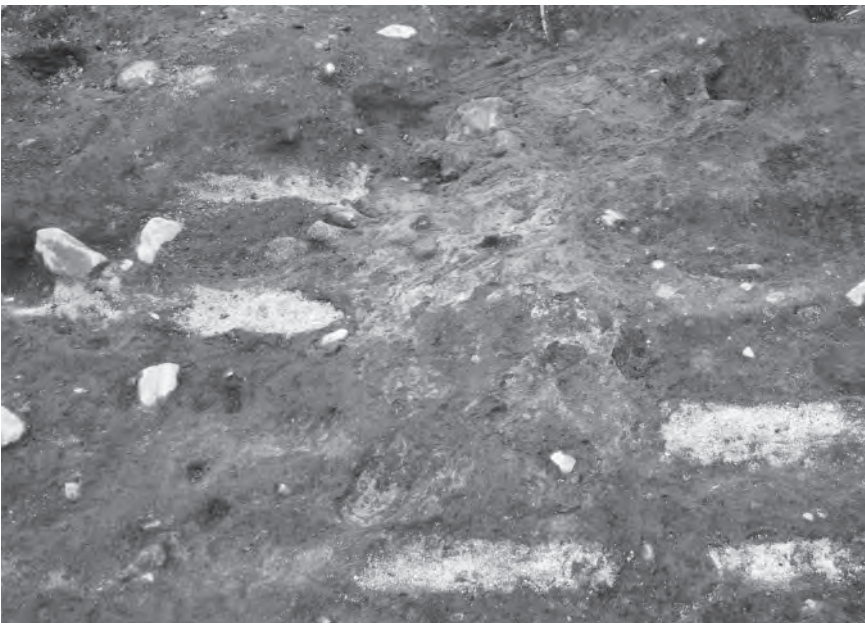
同左（東から）



麻茎集中出土状況



麻茎集中出土状況



麻葉確認状態（北から）



同左（南東から）

PL-24 3号道周辺の積石遺構 1



6号A積石遺構と12区画畑（西から）



6号B積石遺構全景（北から）



6号B積石遺構全景（東から）



6号B積石遺構断面（南から）



6号B積石遺構掘り方（北から）



6号B積石遺構北側へ続く掘り方（北から）



9号積石遺構 (東から)



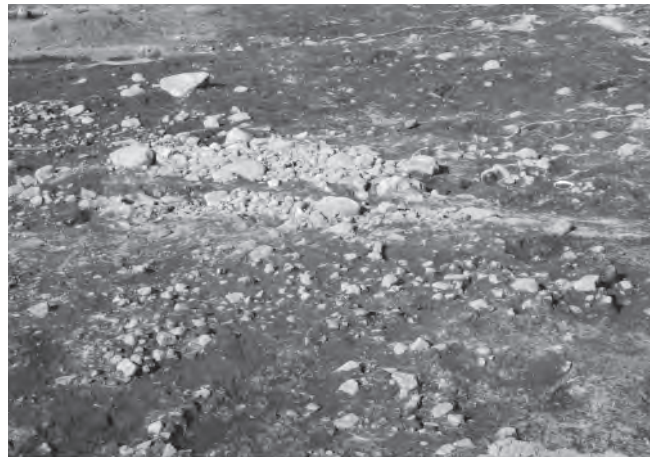
8号積石遺構 (西から)



1号道下の8号積石遺構基底部分 (東から)



8号積石遺構断面 (東から)



8号積石遺構と1号道 (南から)



10号積石遺構 (東から)



10号積石遺構断面 (東から)

PL-26 IV区1号道



1号道東側（東から）



1号道東側全景（西から）



1号道中央全景（東から）



1号道側溝（礫除去後 西から）



8号積石遺構上の1号道（東から）



8号積石遺構上の1号道（北から）



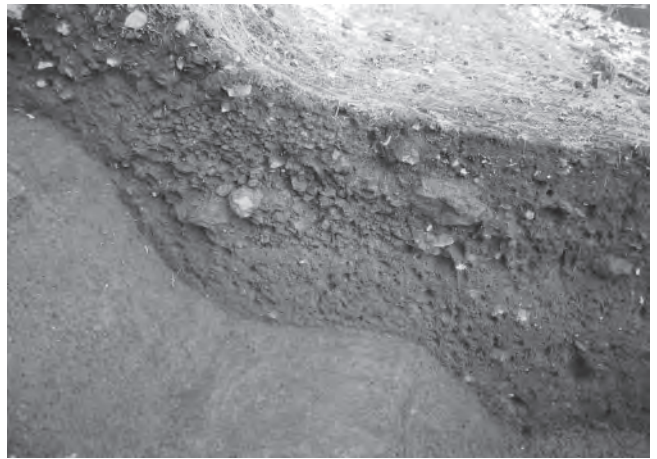
1号道 断面



1号道脇の礫



1号道 溝内の礫



Bトレンチ内の2号溝断面 (東から)



Bトレンチ全景 (北から)



Cトレンチ内の2号溝 (東から)



3号道脇の石垣 (北から)

PL-28 IV区4・5号道



境木除去後の4号道（西から）



4号道と境木（東から）



5号道中央付近（南から）



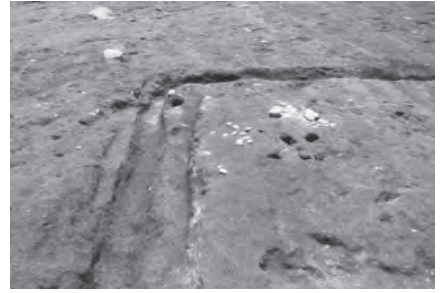
5号道石敷き（北から）



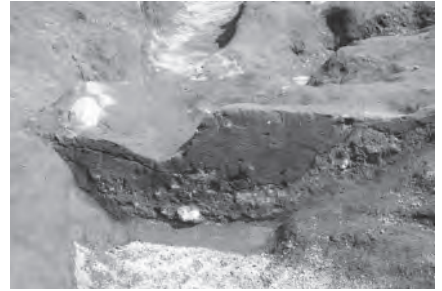
5号道掘り方（北から）



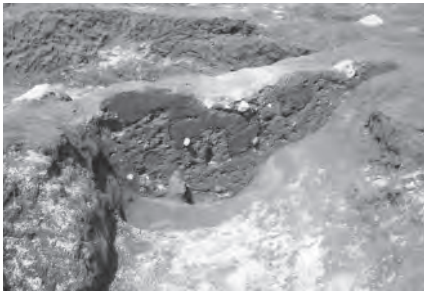
1号溝 (北東から)



1号溝西側 (北から)



1号溝A断面 (南から)



1号溝B断面 (西から)



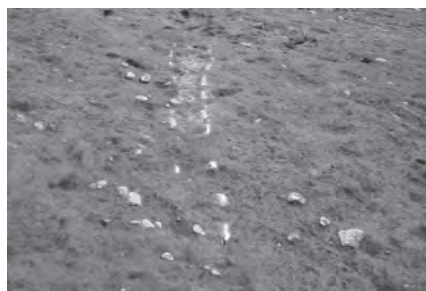
1号溝西側屈曲部分 (北から)



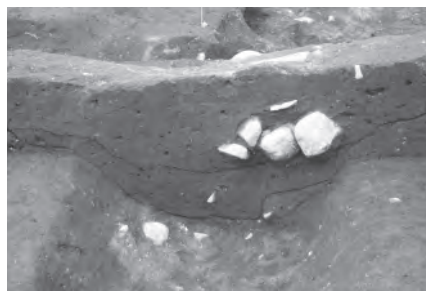
1号溝C断面 (南から)



1号溝北隅 (南から)



2号溝 (西から)



3号溝A断面 (南から)



3号溝 (南から)

PL-30 IV区林跡



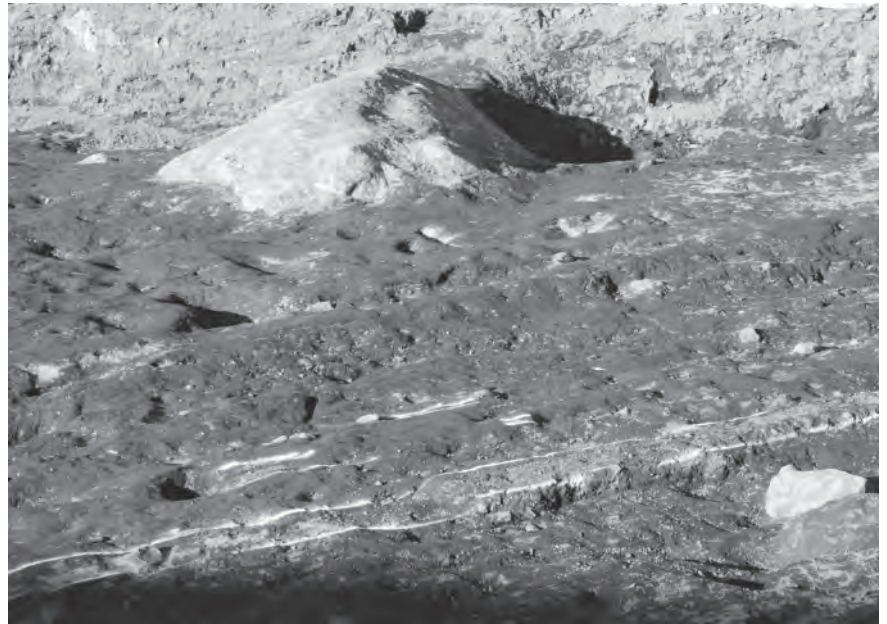
東側林跡確認地点全景（東から）



倒木3（南西から）



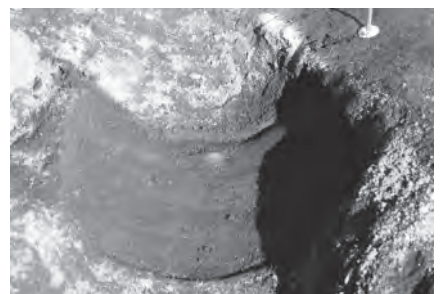
倒木4（南西から）



中央付近林跡確認地点（南東から）



西側林跡確認地点全景（西から）



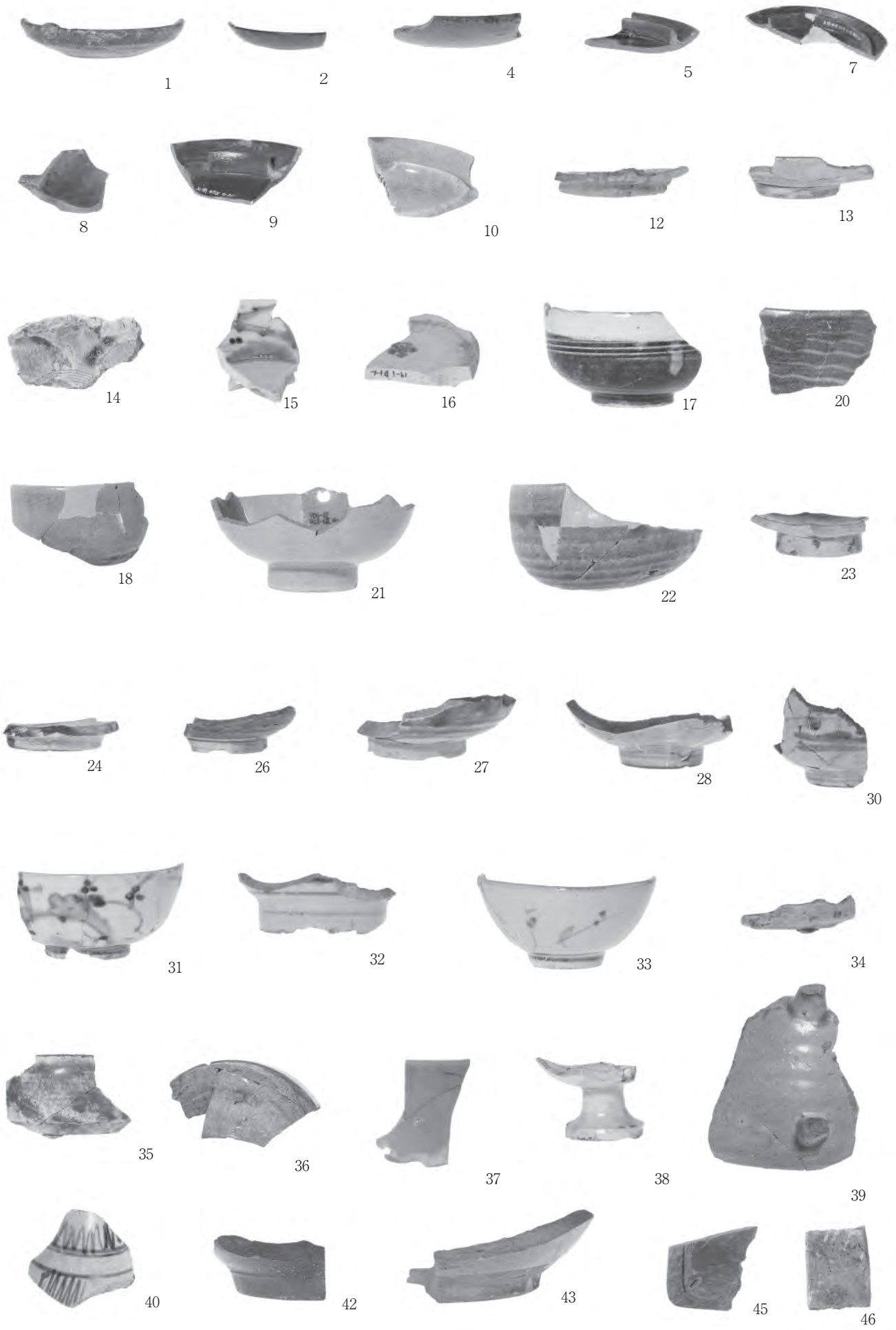
倒木1断面（南西から）



倒木5断面（南東から）



PL-31 IV区 1 面遺構外遺物 1



PL-32 IV区 1面遺構外遺物 2



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



19



18



20



21



22



23



24



29



25



26



27



28



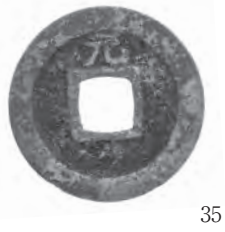
30



31



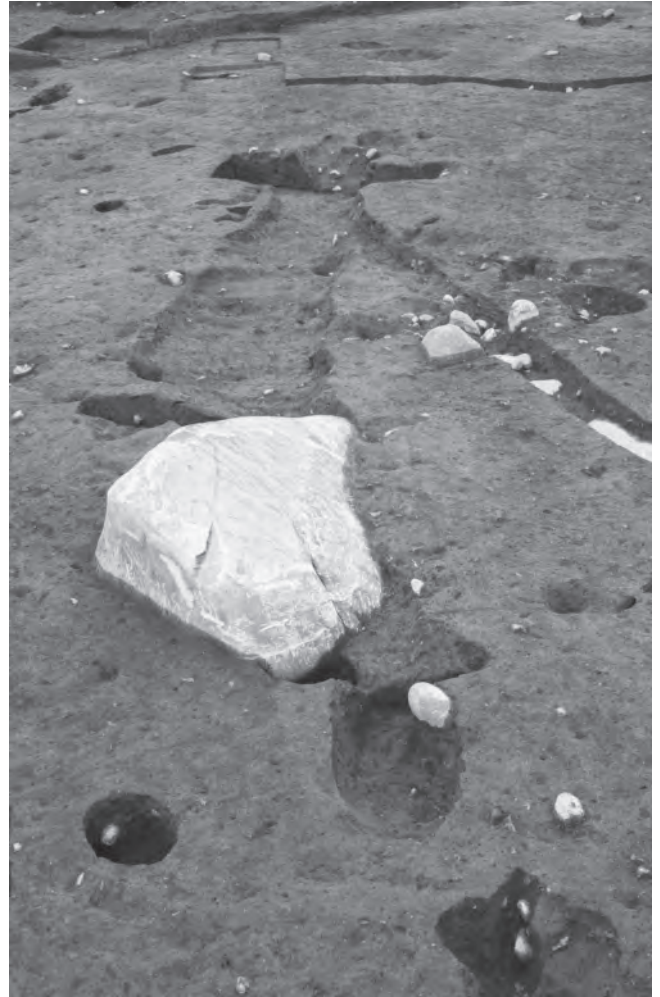
32



6



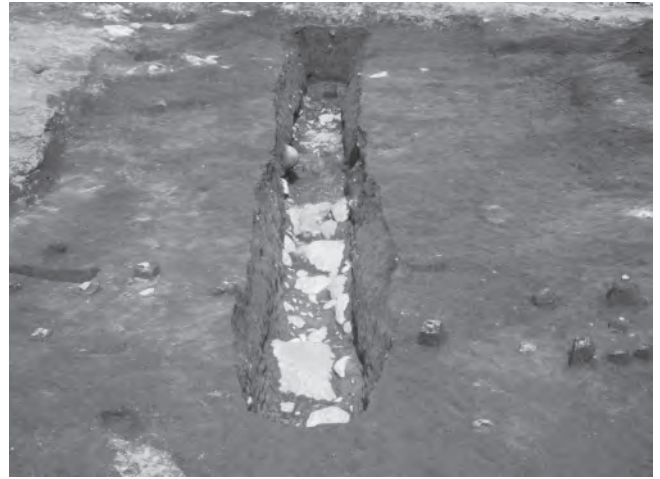
4号溝北側 (南から)



6号溝西側 (東から)



7号溝西側 (東から)



8号溝西側 (西から)



9号溝 (南から)



10・11号溝 (西から)



1～6号土坑全景（北から）



1号土坑（北から）



2号土坑（北から）



3号土坑（北から）



4号土坑上面（南から）



5号土坑（西から）



6号土坑（西から）



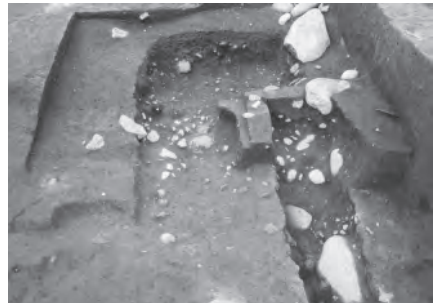
7号土坑（北から）



8号土坑上面（東から）



8号土坑（南から）



10号土坑（南から）



9号土坑上面（北から）



9号土坑（北から）



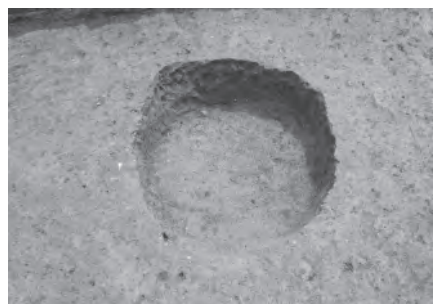
11号土坑（西から）



12・13号土坑（西から）



14号土坑（東から）



15号土坑（北から）

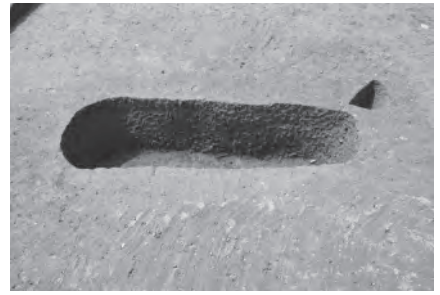
PL-36 IV区土坑2



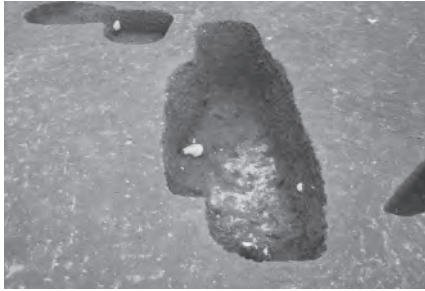
16号土坑（北から）



17・18号土坑（西から）



19号土坑（北から）



20号土坑（西から）



21号土坑（北から）



23号土坑上面（西から）



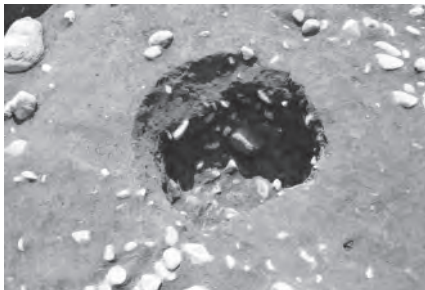
24号土坑（東から）



26号土坑（東から）



23号土坑（東から）



27号土坑（南から）



31号土坑（南から）



32号土坑（東から）



33号土坑（南から）



34号土坑（南から）



35号土坑（南から）



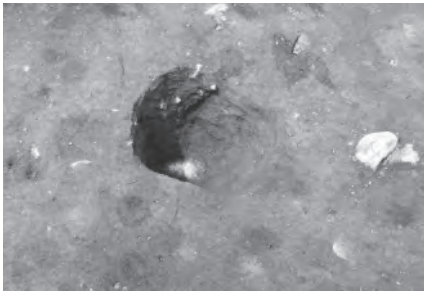
36号土坑（北から）



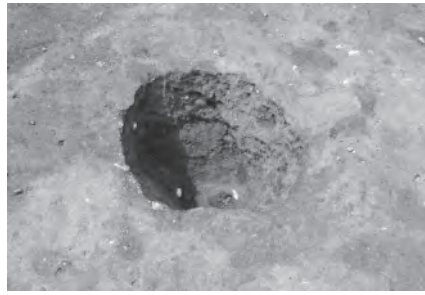
39号土坑（北から）



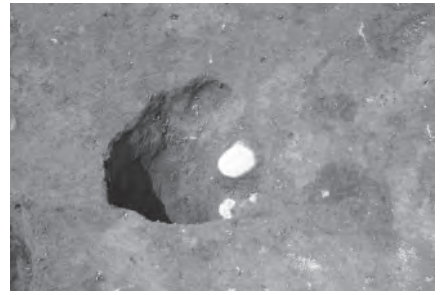
40・41号土坑（北から）



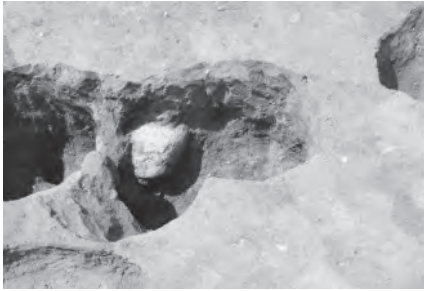
42号土坑 (南西から)



43号土坑 (西から)



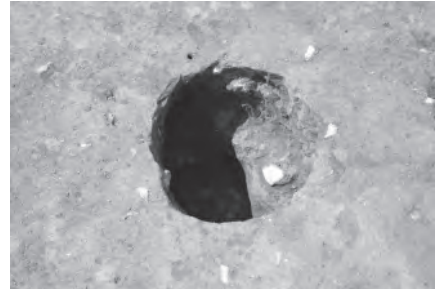
44号土坑 (南から)



46号土坑 (南から)



45号土坑 (南から)



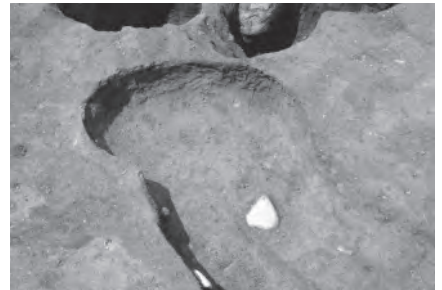
47号土坑 (南から)



48号土坑 (南西から)



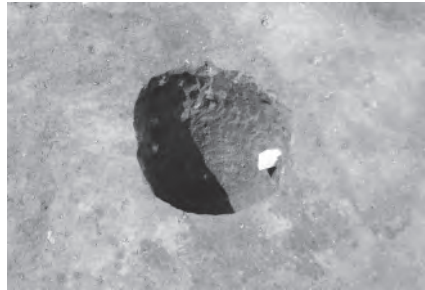
50号土坑 (南から)



49号土坑 (南から)



52号土坑 (南から)



51号土坑 (南から)



53号土坑 (南から)



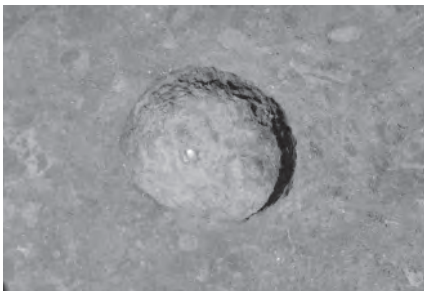
52号土坑 (南から)



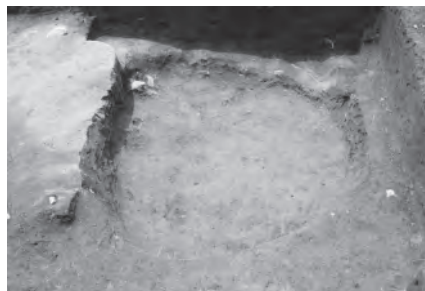
54・55・56号土坑 (南から)



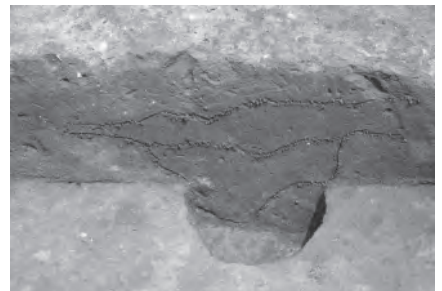
58号土坑 (南から)



59号土坑 (南東から)

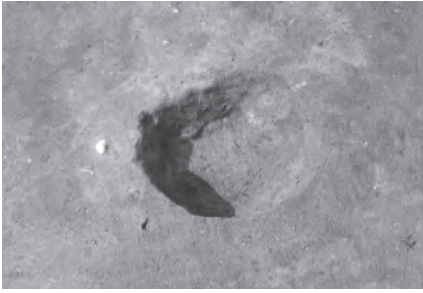


60号土坑 (南から)

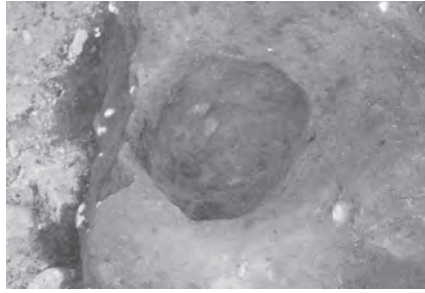


61号土坑 (南から)

PL-38 IV区土坑 4



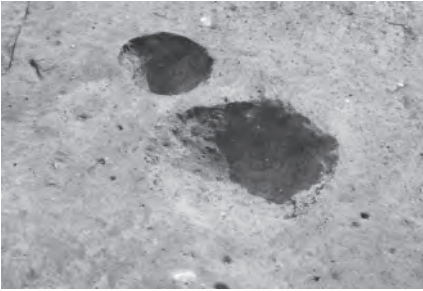
62号土坑 (南から)



63号土坑 (西から)



64号土坑 (北から)



65・78号土坑 (北から)



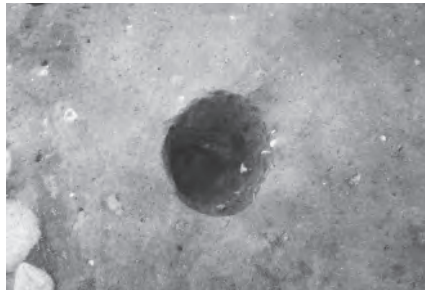
66号土坑 (南から)



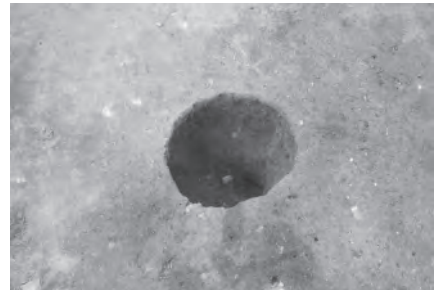
67号土坑 (南から)



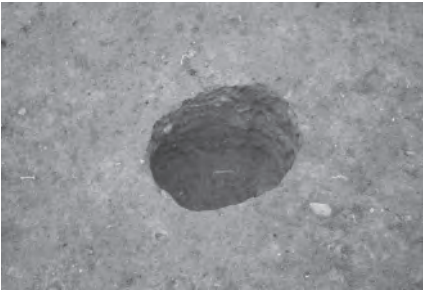
68号土坑 (南から)



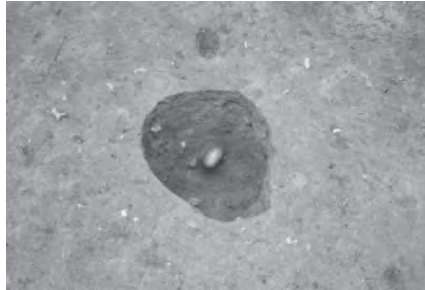
69号土坑 (東から)



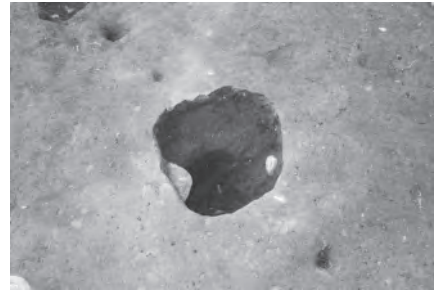
70号土坑 (東から)



71号土坑 (南から)



72号土坑 (南から)



74号土坑 (東から)



76・77号土坑 (南から)



79号土坑 (南から)



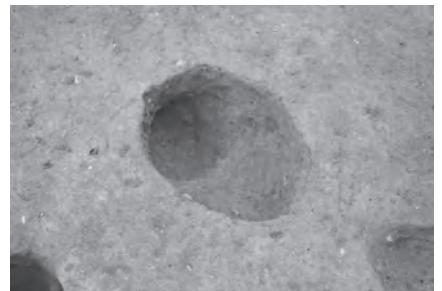
80号土坑 (南から)



81号土坑 (東から)



82号土坑 (東から)



83号土坑 (東から)

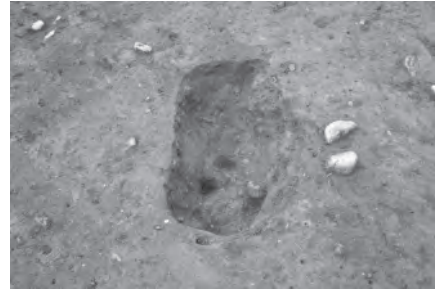




87号土坑 (西から)



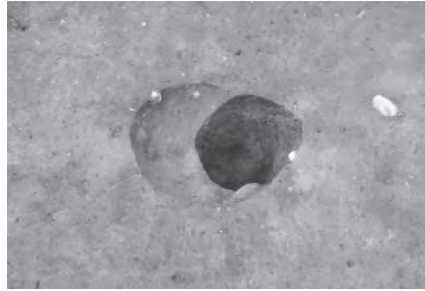
88号土坑 (東から)



89号土坑 (東から)



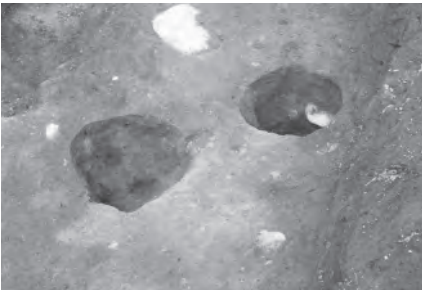
90号土坑 (東から)



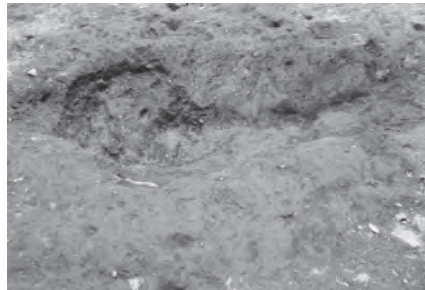
91号土坑 (南東から)



92号土坑 (南東から)



93号土坑 (東から)



94号土坑 (北から)



95号土坑 (南から)



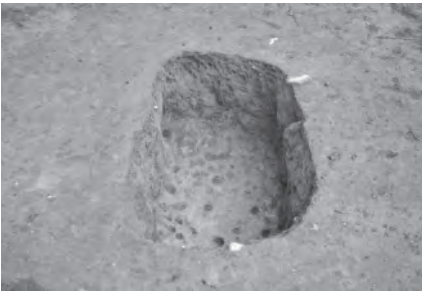
96号土坑 (南から)



97号土坑 (南から)



98号土坑 (南から)



96号土坑 (南から)



97号土坑 (南から)



99号土坑 (南から)



100・101号土坑 (南から)



103号土坑 (南から)



104号土坑 (南から)

PL-40 IV区土坑6



105号土坑 (南から)



106号土坑 (南から)



107号土坑 (南から)



108号土坑 (南から)



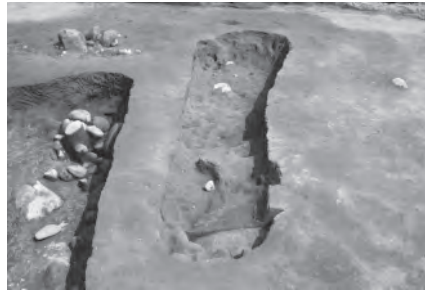
109号土坑 (南から)



110号土坑 (南から)



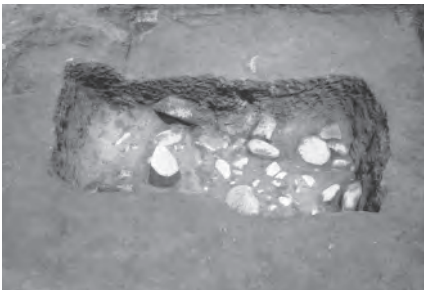
112号土坑 (南から)



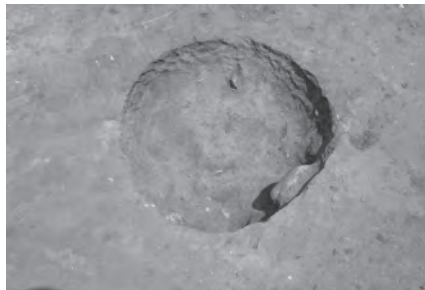
116・117号土坑 (南から)



120・121号土坑 (南から)



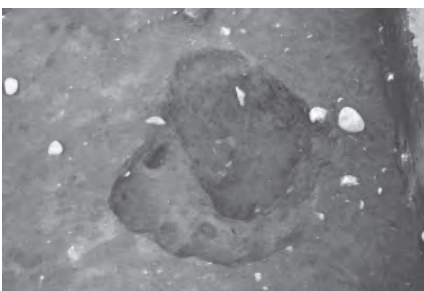
122号土坑 (南から)



124号土坑 (南から)



128号土坑 (南から)



137号土坑 (南から)



127・144号土坑 (南から)



127・144号土坑 (南から)



131・132号土坑 (南から)



146号土坑内 磔 (南から)



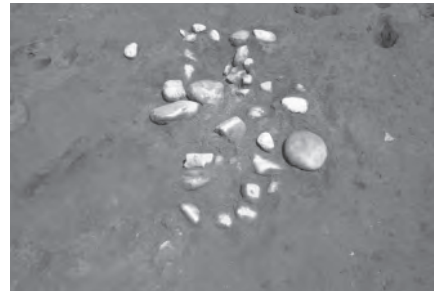
146号土坑 (南から)



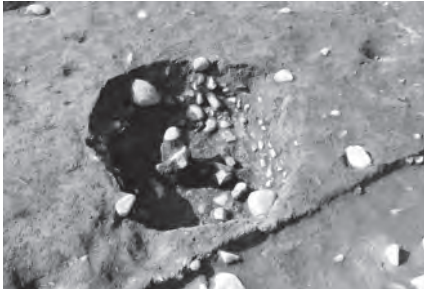
138・139号土坑（南から）



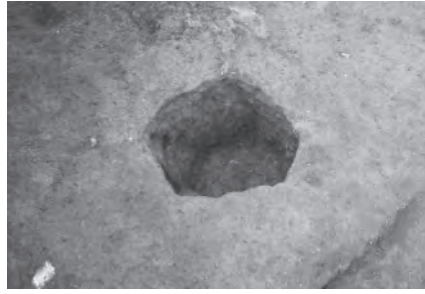
147号土坑（南から）



148号土坑表面（南から）



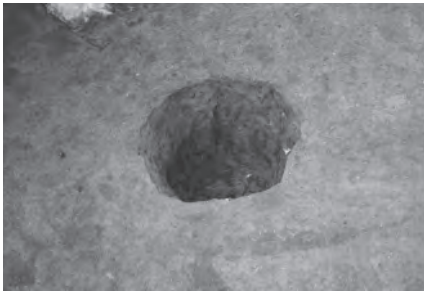
149号土坑（北から）



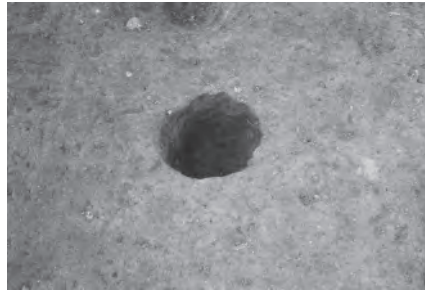
150号土坑（南から）



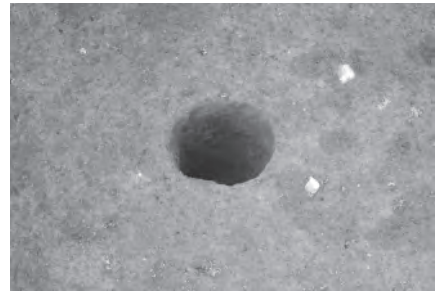
148号土坑（北から）



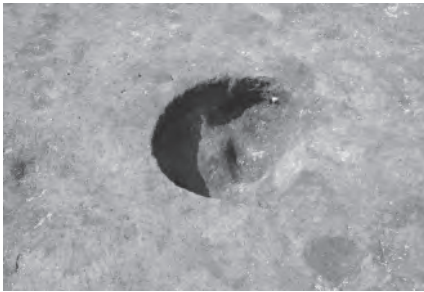
151号土坑（南から）



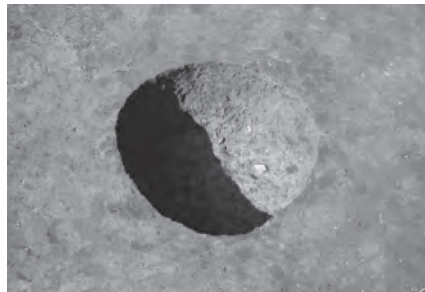
152号土坑（南から）



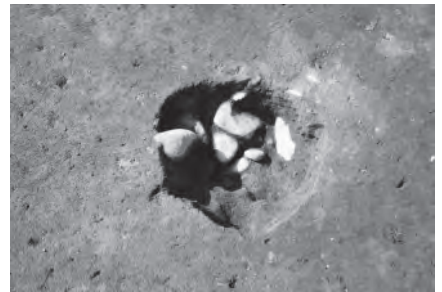
153号土坑（南から）



154号土坑（西から）



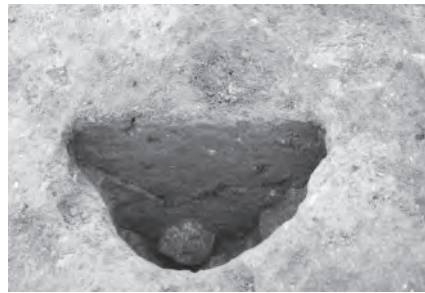
155号土坑（東から）



156号土坑（南から）



158・159号土坑（東から）



160号土坑（西から）



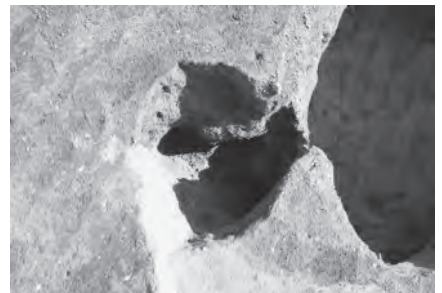
161号土坑（西から）



162号土坑（西から）



163号土坑（西から）

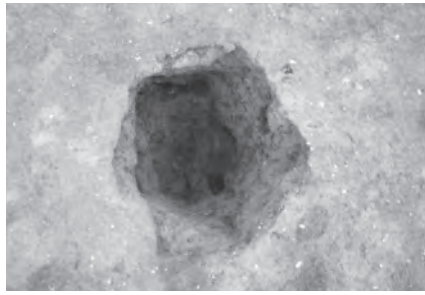


164号土坑（西から）

PL-42 IV区土坑8



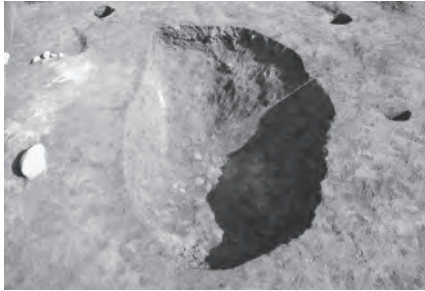
165号土坑 (西から)



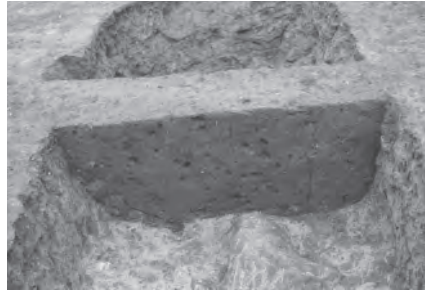
166号土坑 (西から)



167号土坑 (西から)



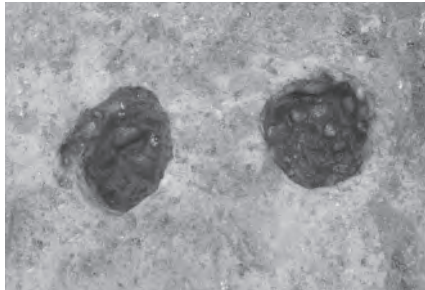
168号土坑 (西から)



169号土坑 (西から)



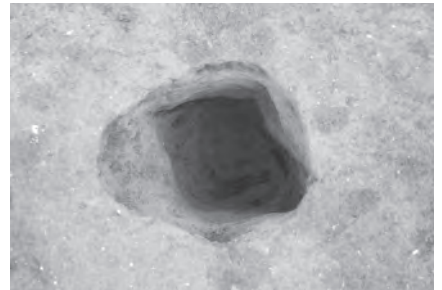
170号土坑断面 (西から)



160・171号土坑 (西から)



172号土坑 (西から)



170号土坑 (西から)



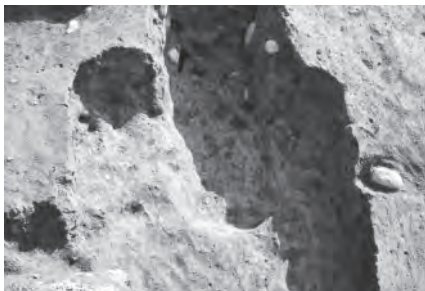
173号土坑 (東から)



174号土坑 (西から)



175号土坑 (北から)



175・176号土坑 (南から)



178・179号土坑 (南から)



177号土坑 (南から)



180号土坑 (西から)



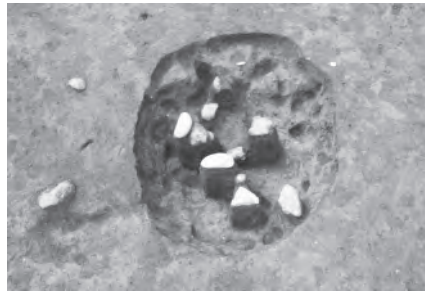
181号土坑 (南から)



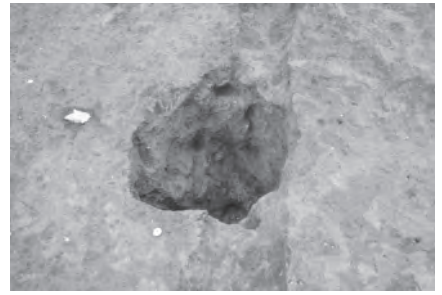
177号土坑 (南から)



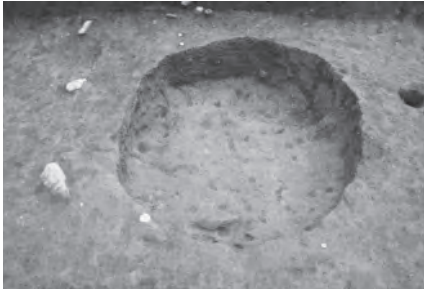
182号土坑調査状況（西から）



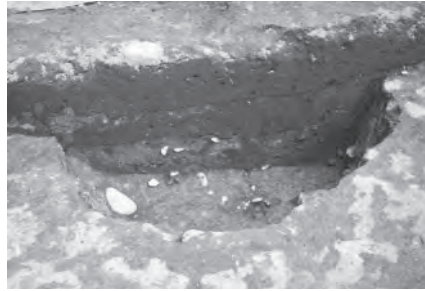
183号土坑（西から）



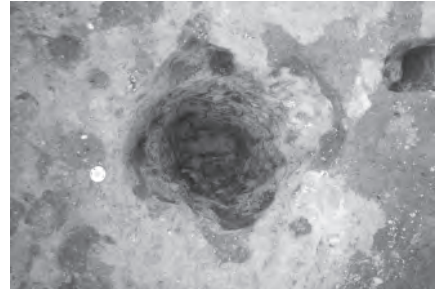
184号土坑（東から）



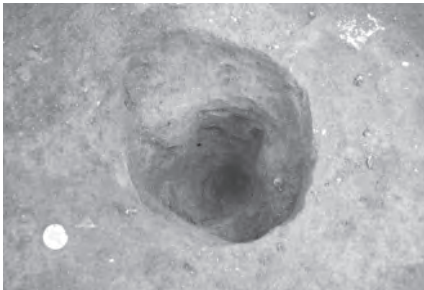
182号土坑（北から）



185号土坑（西から）



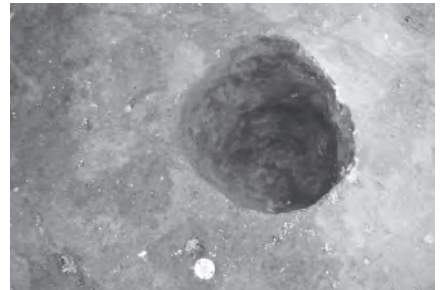
186号土坑（東から）



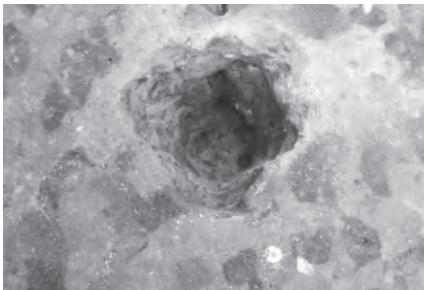
187号土坑（東から）



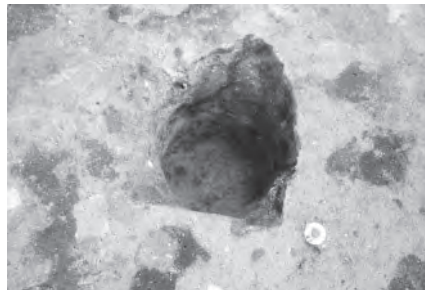
188号土坑断面（南から）



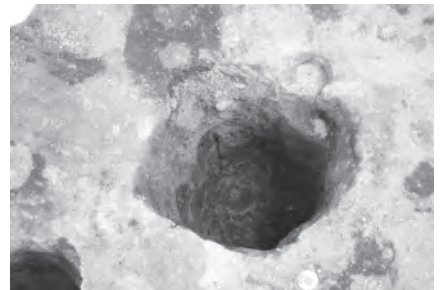
188号土坑（東から）



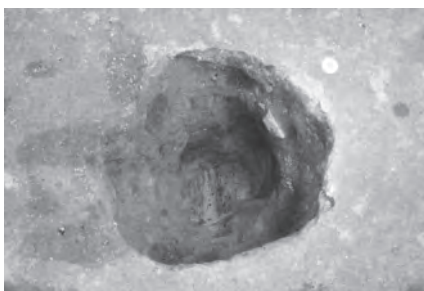
189号土坑（東から）



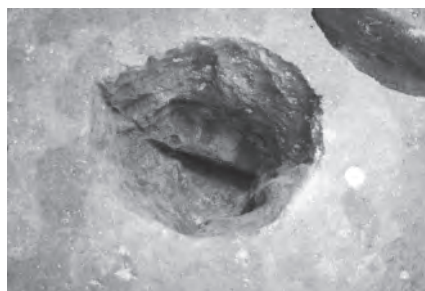
190号土坑（東から）



191号土坑（東から）



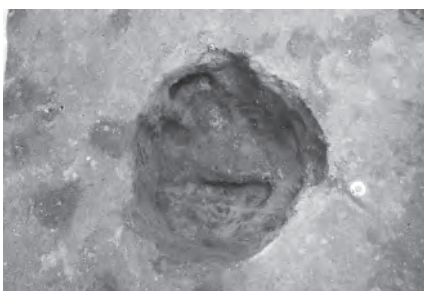
192号土坑（東から）



193号土坑（東から）



194号土坑（東から）



195号土坑（東から）

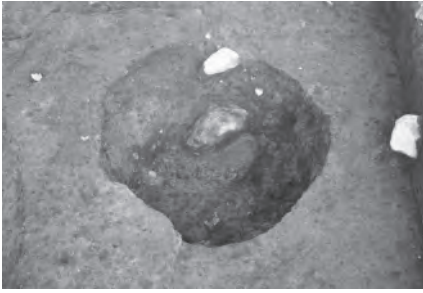


196号土坑（北から）



197号土坑（東から）

PL-44 IV区土坑 10



198号土坑 (西から)



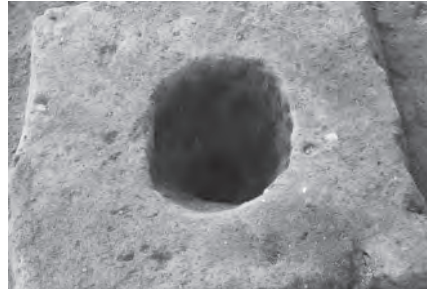
199号土坑 (西から)



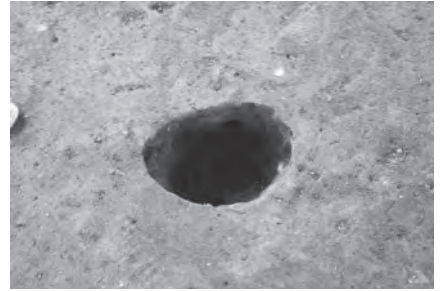
200号土坑 (東から)



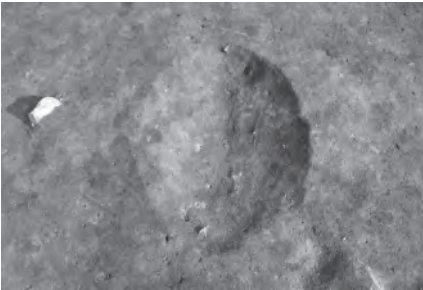
198号土坑断面 (西から)



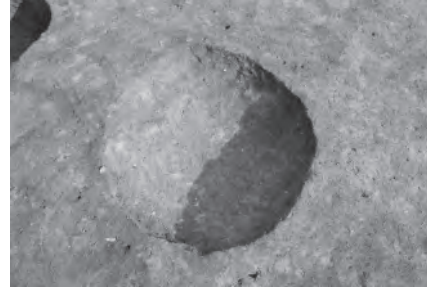
201号土坑 (東から)



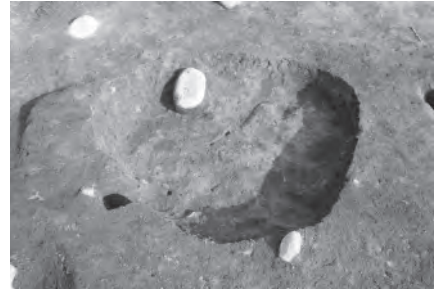
202号土坑 (東から)



203号土坑 (西から)



204号土坑 (南から)



205号土坑 (西から)



206号土坑 (南から)



207号土坑 (西から)



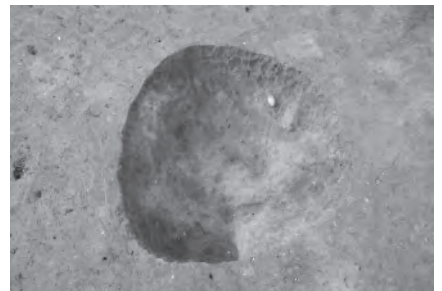
209号土坑 (南から)



210号土坑 (東から)



211号土坑 (南から)



212号土坑 (南から)



213号土坑 (南から)



214号土坑 (北から)



215号土坑 (東から)



216号土坑 (東から)



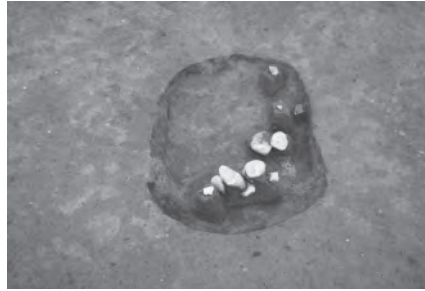
217号土坑 (東から)



218号土坑 (南から)



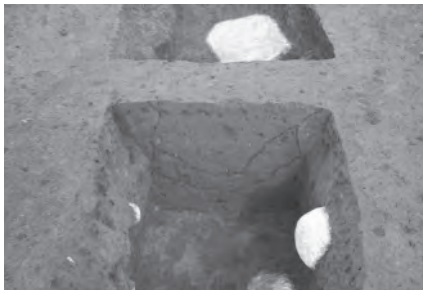
219号土坑 (南から)



220号土坑 (南から)



221号土坑 (南から)



222号土坑 (南から)



223号土坑 (南から)



224号土坑 (南から)



225号土坑 (南から)



226号土坑 (北から)



224号土坑 (北から)



227号土坑 (北から)



228号土坑 (南から)



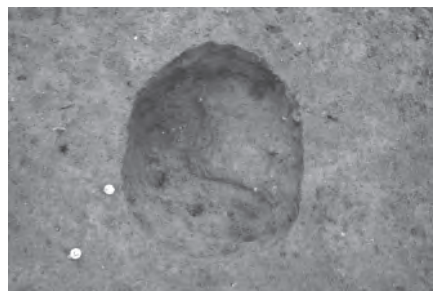
229号土坑 (北から)



230号土坑 (北から)



231号土坑 (東から)

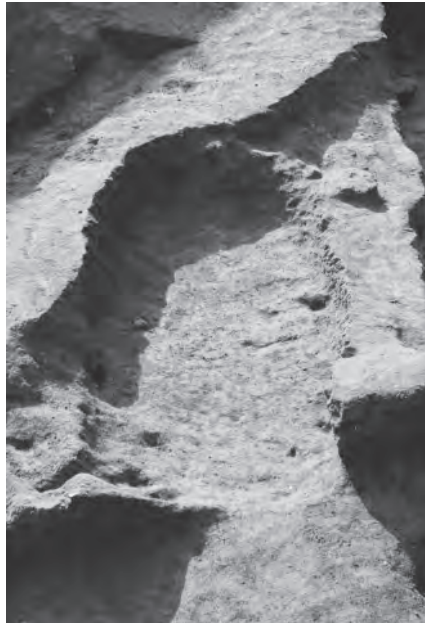


232号土坑 (南から)

PL-46 IV区土坑 12 1号墓坑



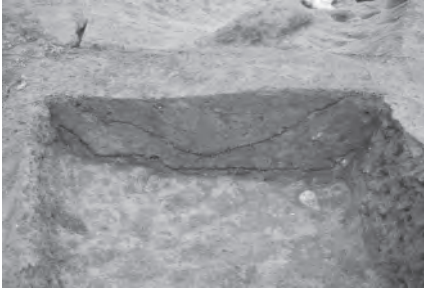
233号土坑（北から）



234号土坑（北から）



235号土坑（北から）



233号土坑断面（西から）



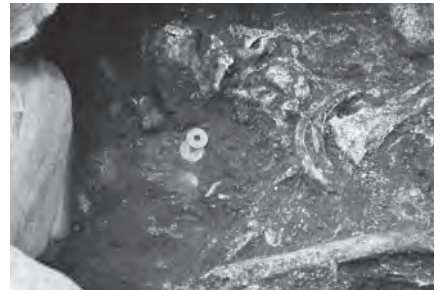
235号土坑断面（東から）



1号墓坑 人骨確認状態（上方が南）



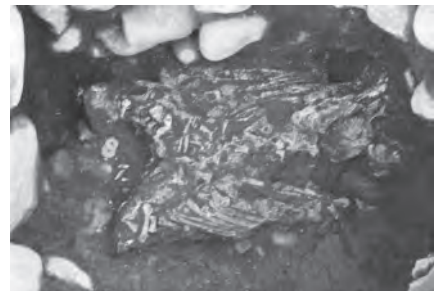
1号墓坑確認状態（東から）



古銭出土状態



1号墓坑下面人骨出土状態



下面人骨出土状態



1号墓坑掘り方

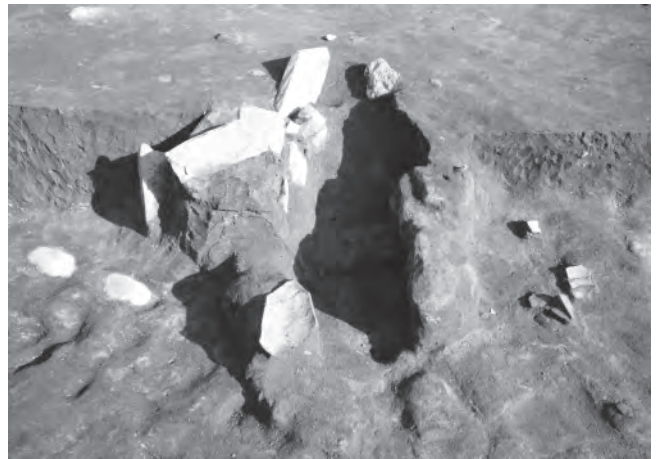




全景（西から）



遺物出土状態全景（西から）



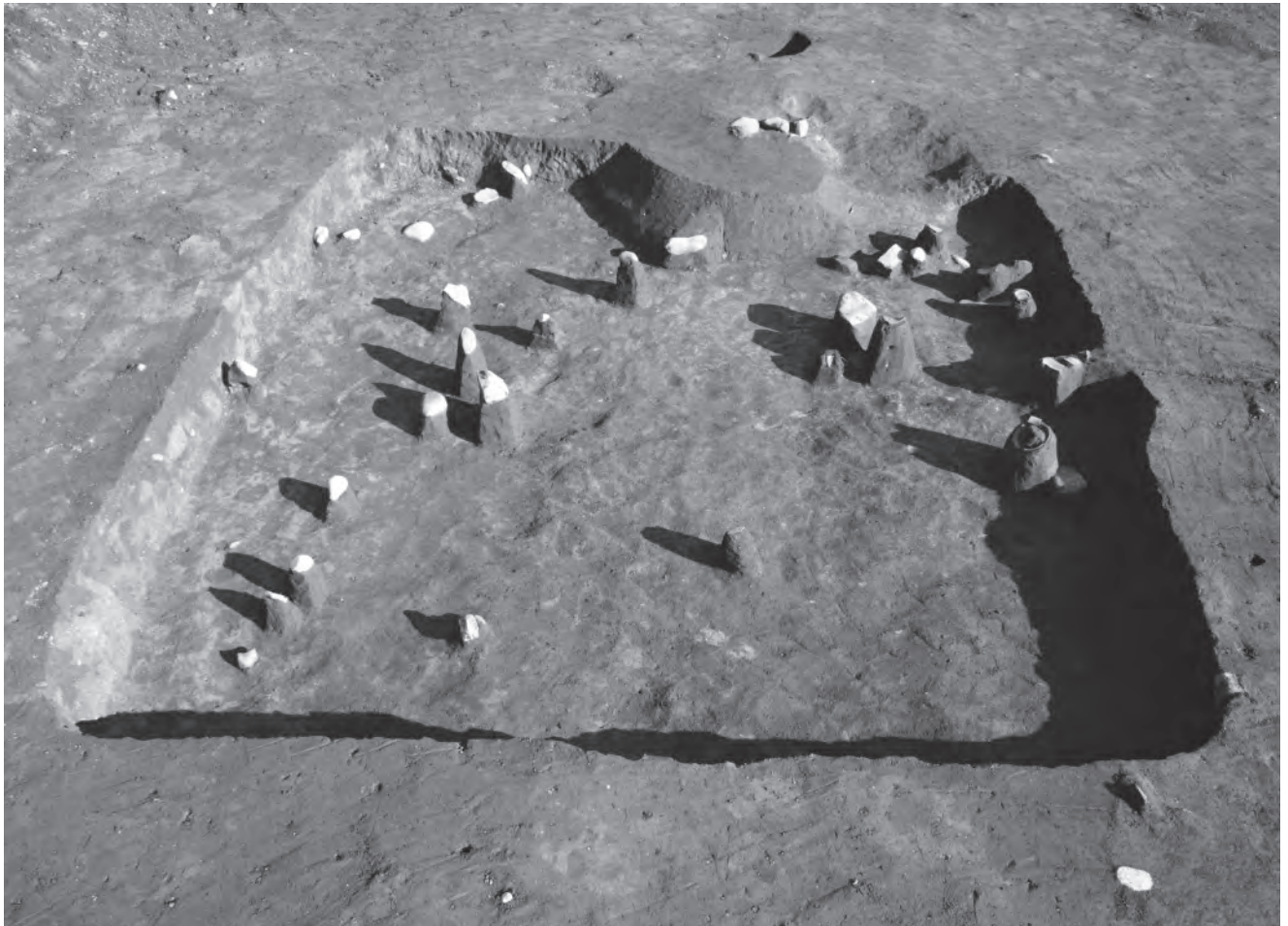
カマド（西から）



カマド前遺物出土状態（北から）



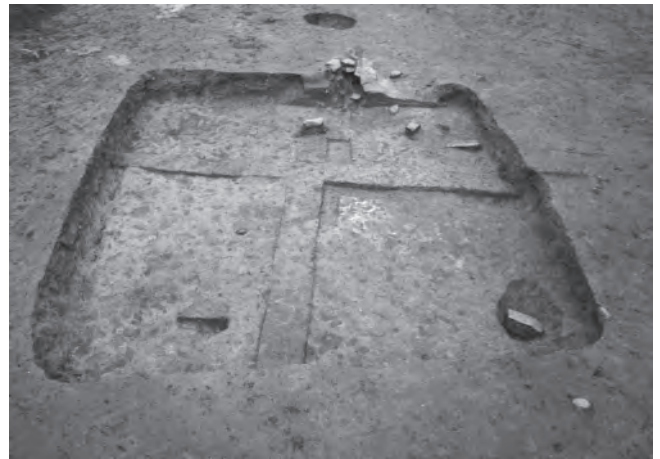
掘り方（西から）



全景（西から）



断面と出土遺物（南から）



掘り方（西から）



カマド（西から）



カマド掘り方（西から）

PL-49 IV区住居出土遺物



1住-1



1住-2



1住-3



1住-4



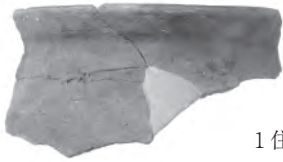
1住-5



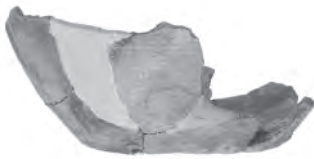
1住-6



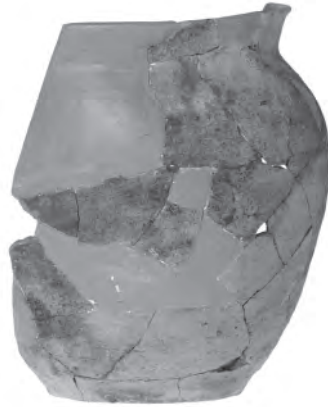
1住-7



1住-8



1住-9



1住-10



1住-11



1住-12



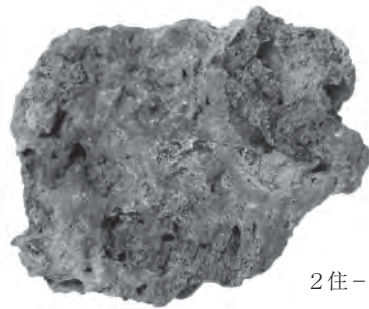
1住-13



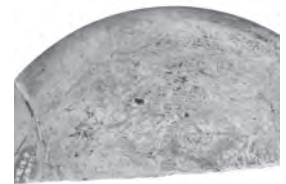
1住-14



2住-15



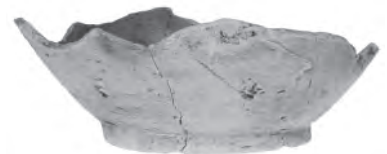
2住-16



2住-1



2住-2



2住-3



2住-6



2住-7



2住-4



2住-5

PL-50 V区畑 1



2～4号畑 (西から)



1・2号畑 (西から)



2～4号畑 (東から)



5・6号畑 (東から)



4号畑西境 (南から)



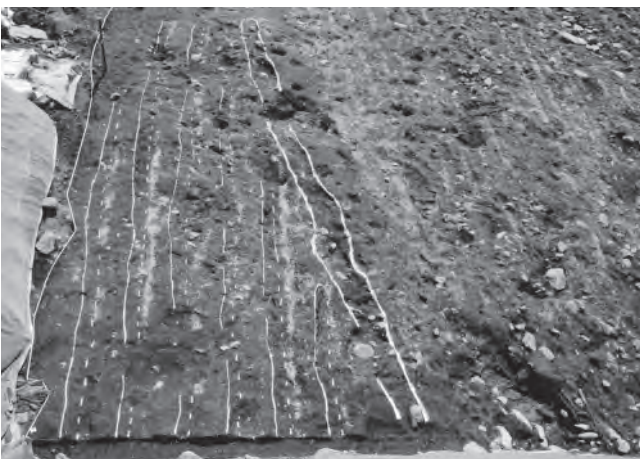
7・8号畑（南から）



6号畑（西から）



6・7号畑（南から）

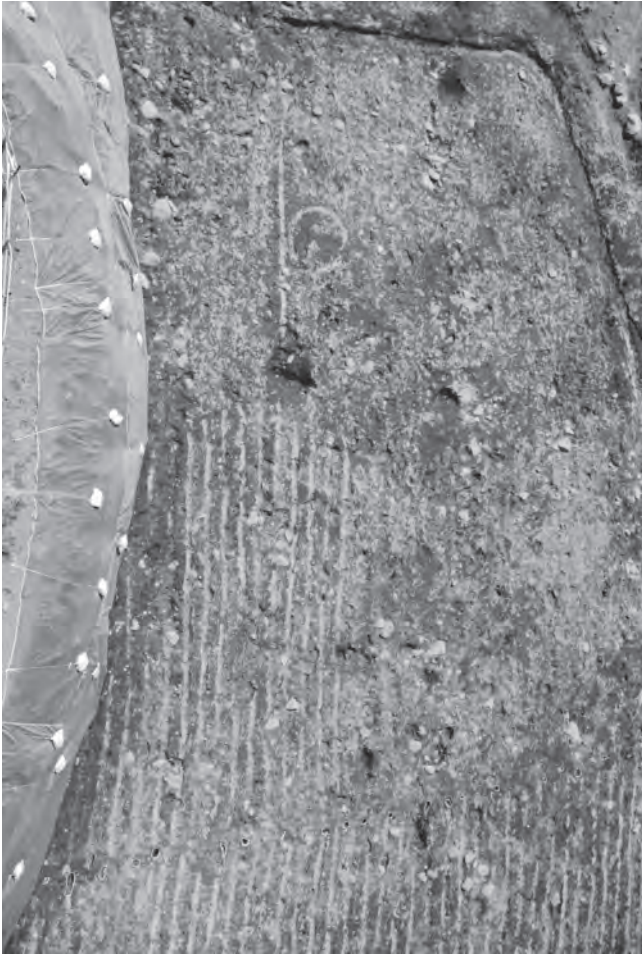


5・12号畑境（東から）



8・10号畑（南から）

PL-52 V区畑3



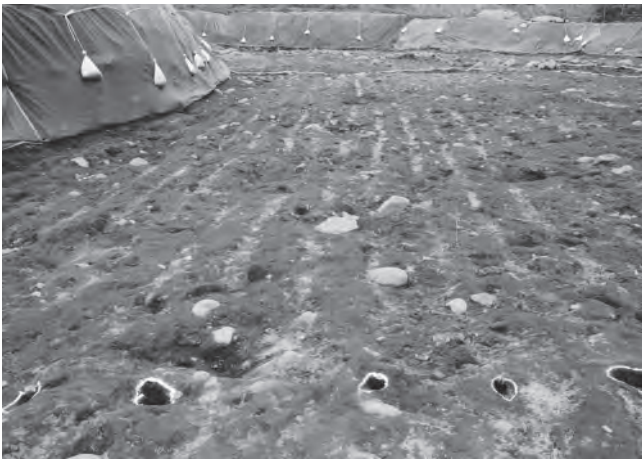
10・11号畑（上が西方）



10号畑周辺（南から）



8号畑（西から）



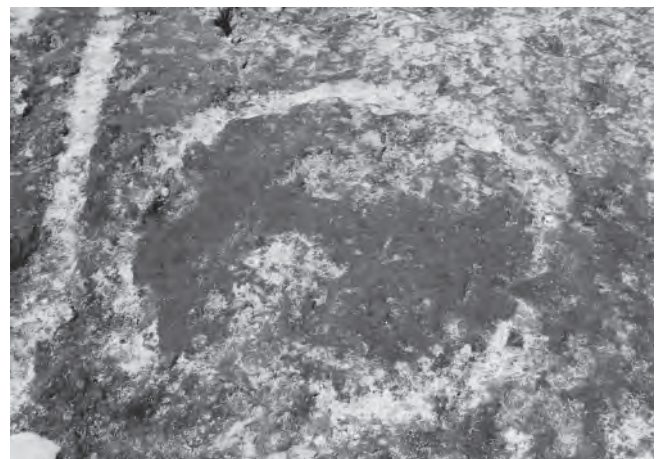
10号畑（東から）



13号畑（西から）



14号畑（西から）



11号畑円形平坦面（東から）



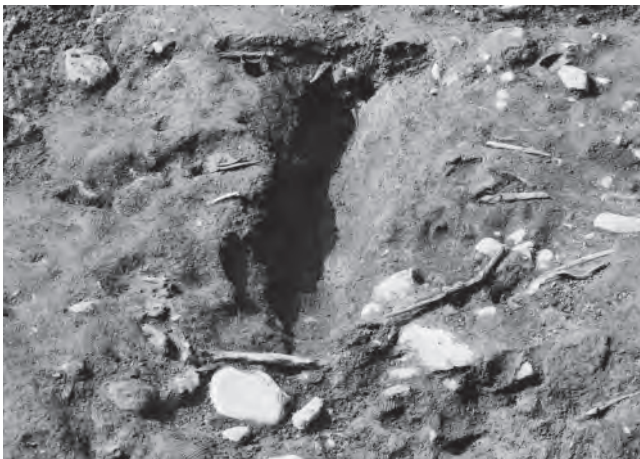
1号溝



1号溝西隅と道



3号溝 (東から)



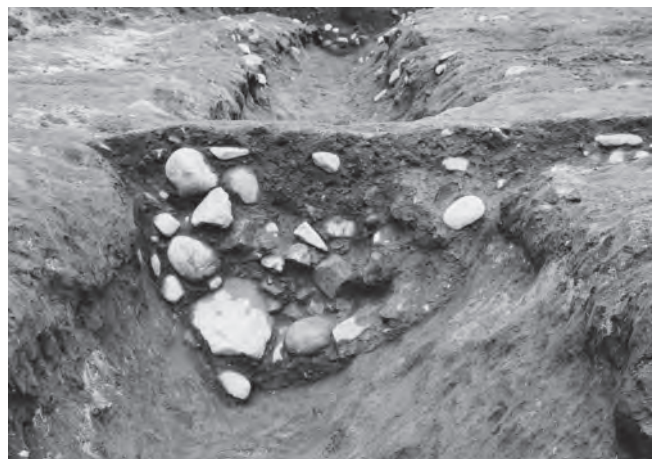
4号溝



5・6号溝 (北西から)

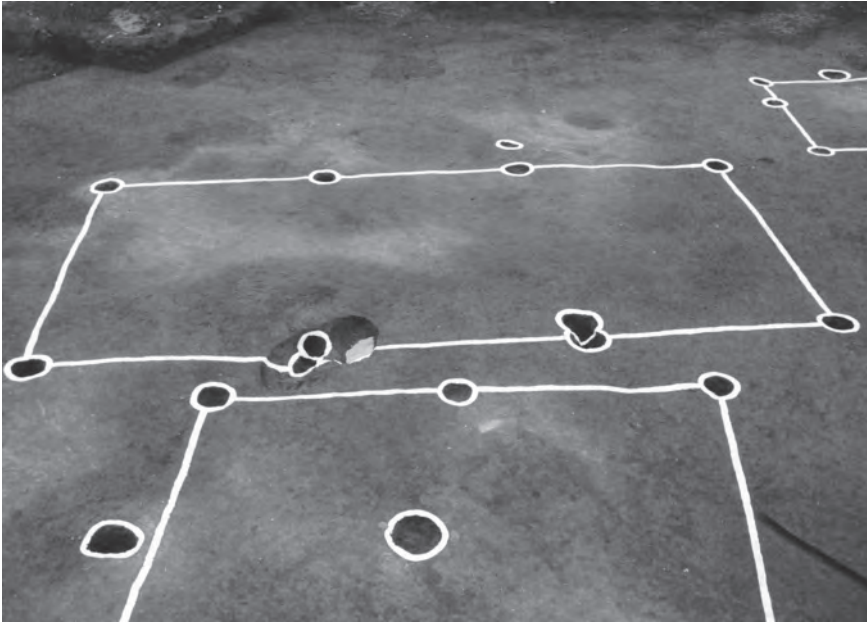


5～7号溝

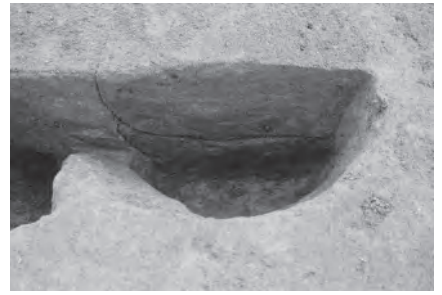


5号溝 C断面

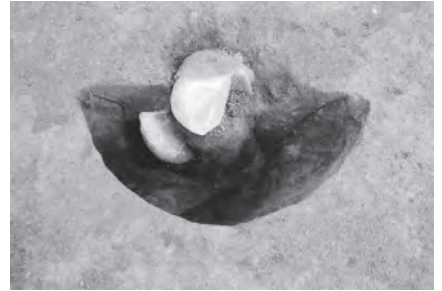
PL-54 1～3号掘立柱建物



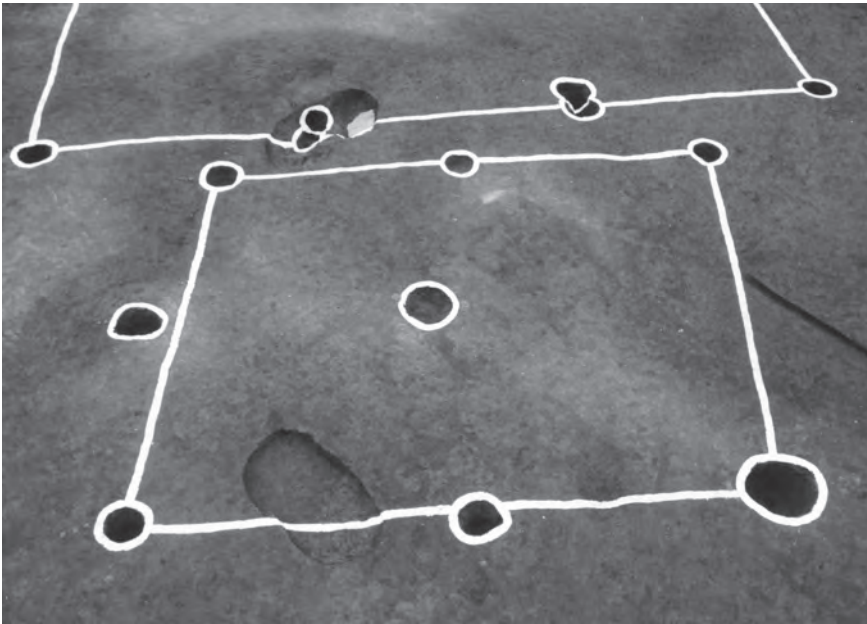
1号掘立柱建物 (南から)



1号掘立柱建物 P2



1号掘立柱建物 P4



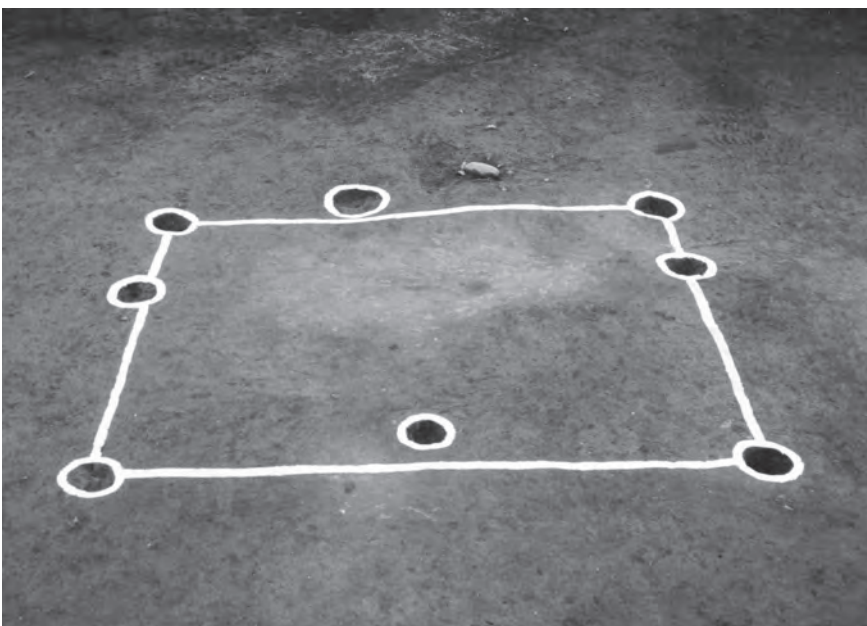
2号掘立柱建物 (南から)



2号掘立柱建物 P1



2号掘立柱建物 P3



3号掘立柱建物 (南から)

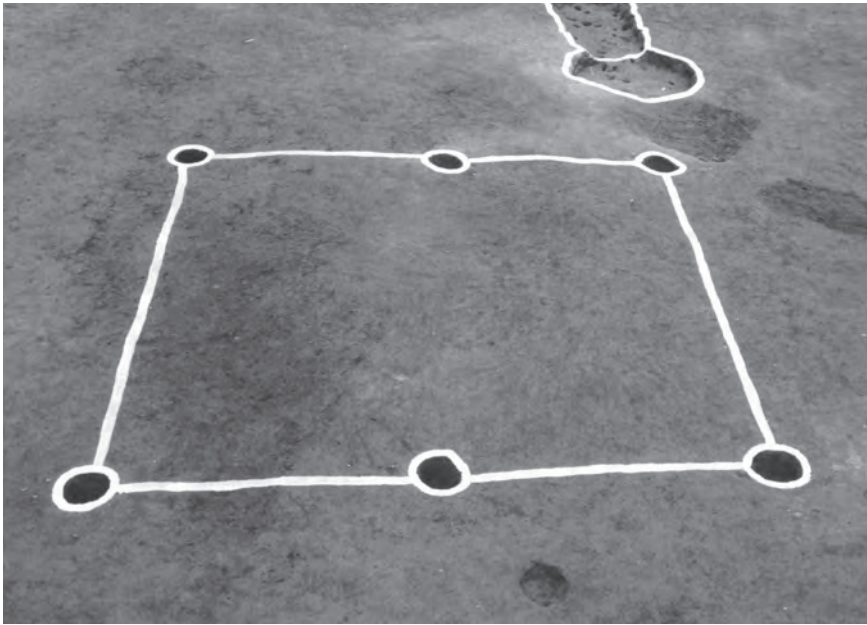


3号掘立柱建物 P1



3号掘立柱建物 P6





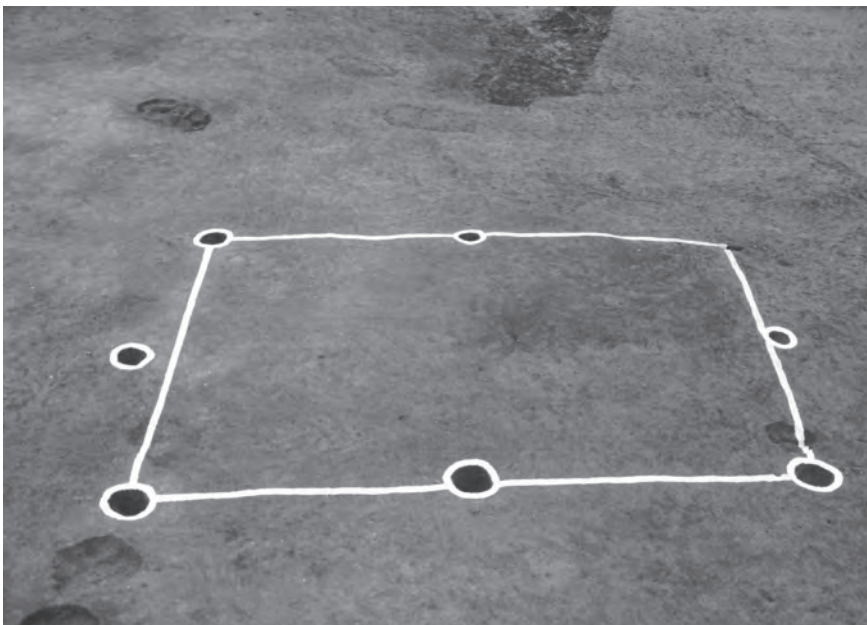
4号掘立柱建物（西から）



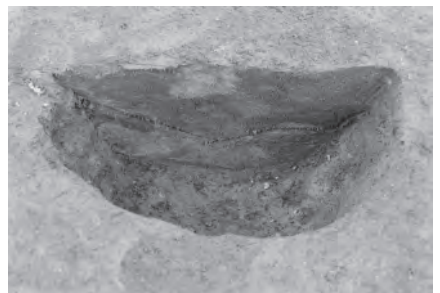
4号掘立柱建物 P1



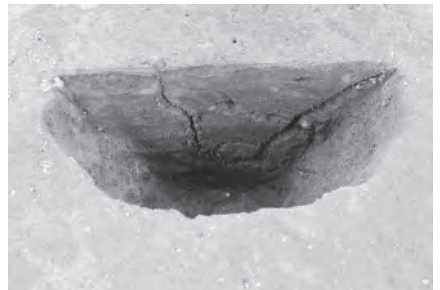
4号掘立柱建物 P6



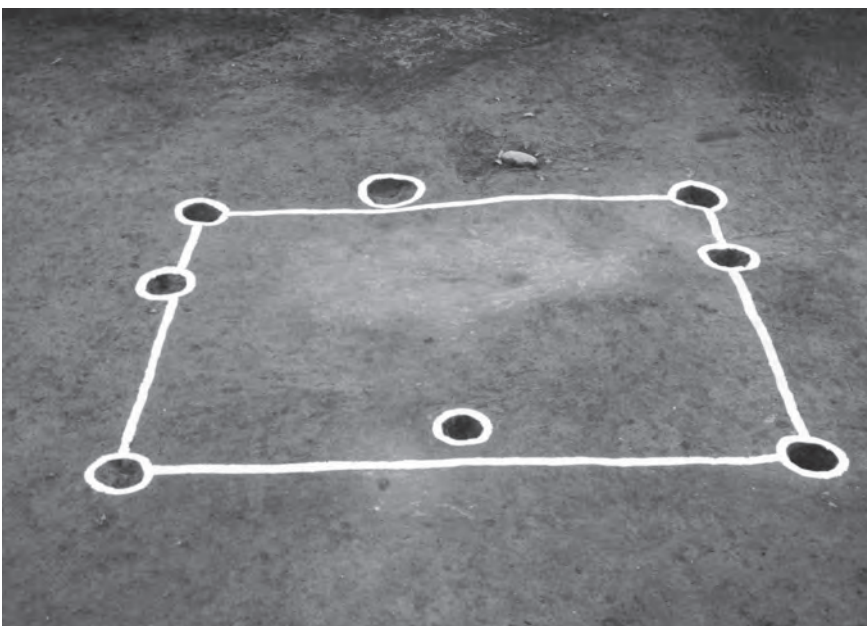
5号掘立柱建物（西から）



5号掘立柱建物 P3



5号掘立柱建物 P4



6号掘立柱建物（東から）



6号掘立柱建物 P3

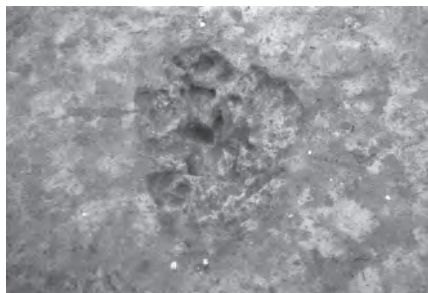


6号掘立柱建物 P6

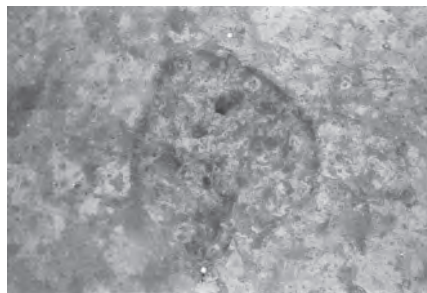
PL-56 V区土坑 1



1号土坑 (東から)



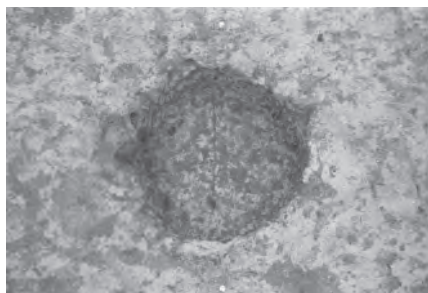
2号土坑 (東から)



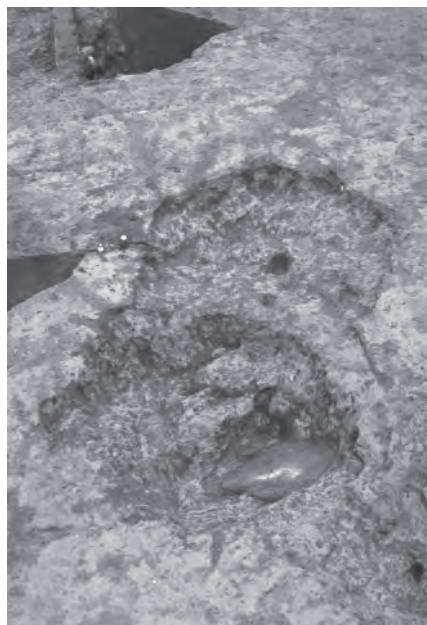
3号土坑 (東から)



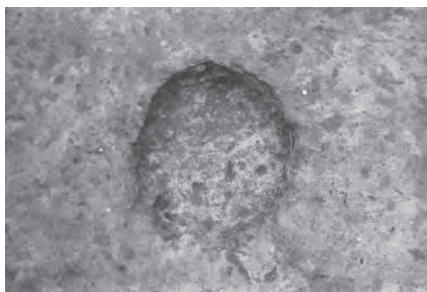
4号土坑 (東から)



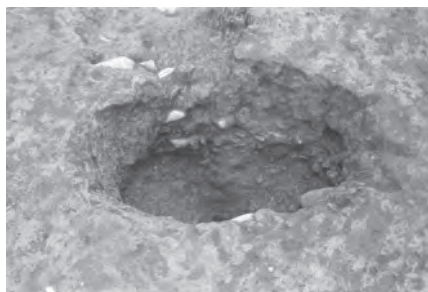
5号土坑 (東から)



6・7号土坑 (東から)



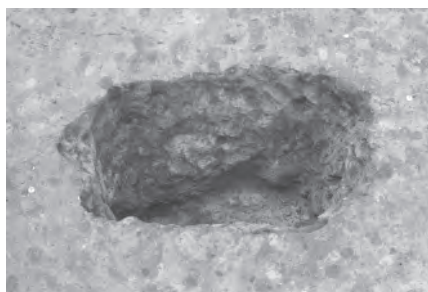
8号土坑 (東から)



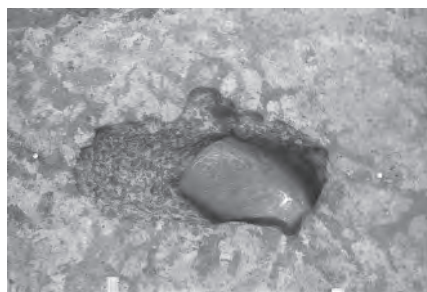
9号土坑 (西から)



11・15号土坑 (南から)



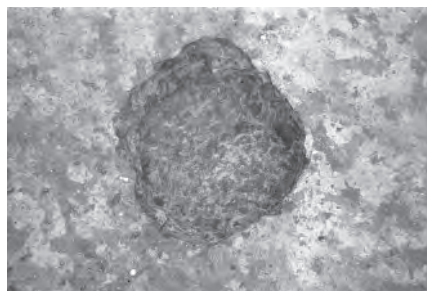
10号土坑 (東から)



12号土坑 (西から)



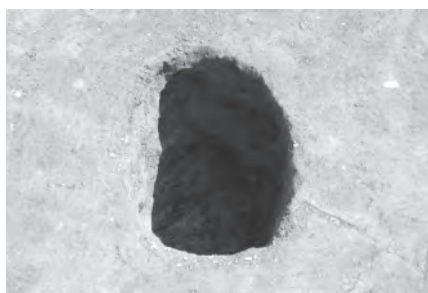
13号土坑 (東から)



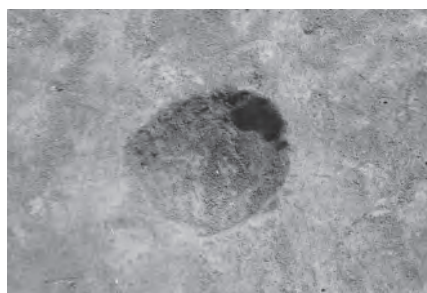
14号土坑 (西から)



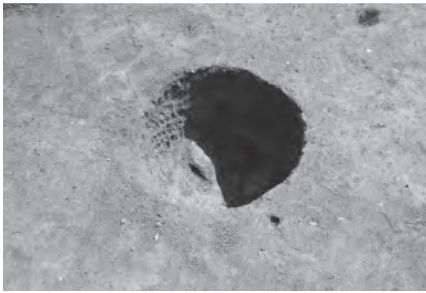
11号土坑断面 (西から)



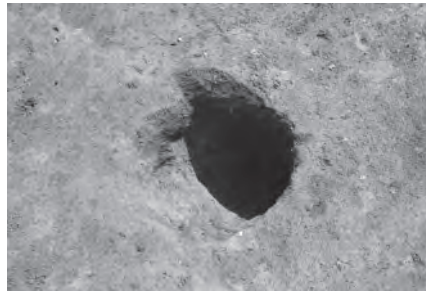
16号土坑 (西から)



17号土坑 (西から)



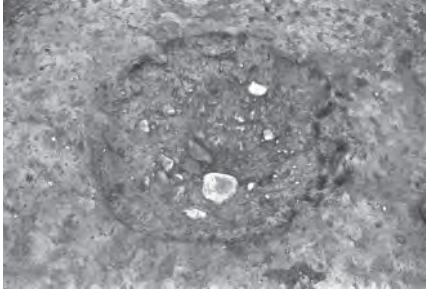
18号土坑（西から）



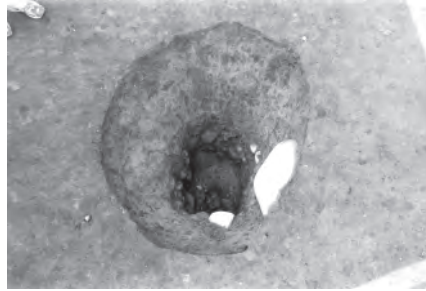
19号土坑（西から）



20号土坑（東から）



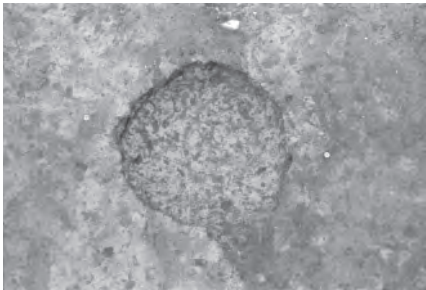
21号土坑（南から）



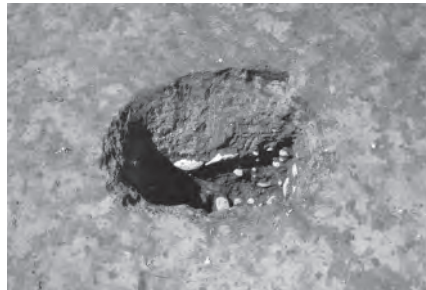
22号土坑（南から）



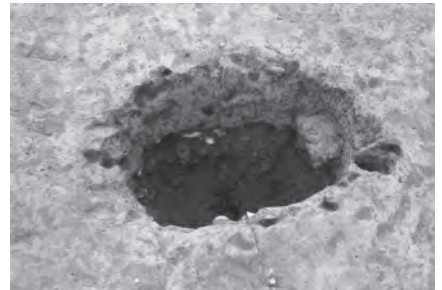
23号土坑（南から）



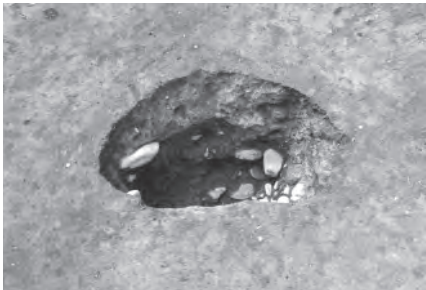
24号土坑（南から）



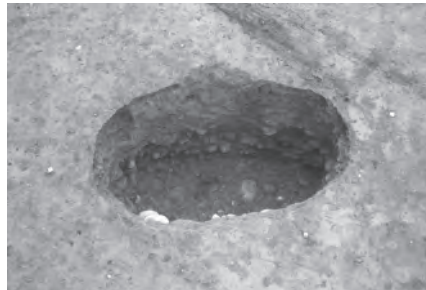
25号土坑（東から）



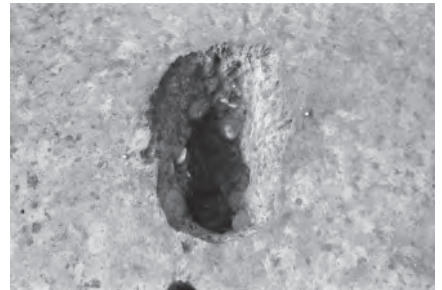
26号土坑（東から）



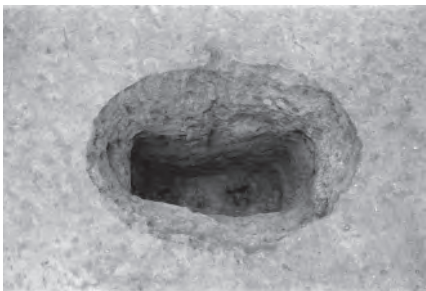
27号土坑（東から）



28号土坑（東から）



29号土坑（南から）



31号土坑（西から）



30号土坑（北から）



31号土坑断面（南から）

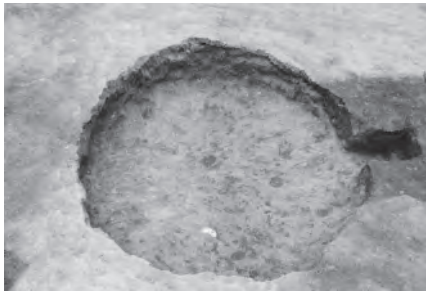


32号土坑断面（北から）



32号土坑（南から）

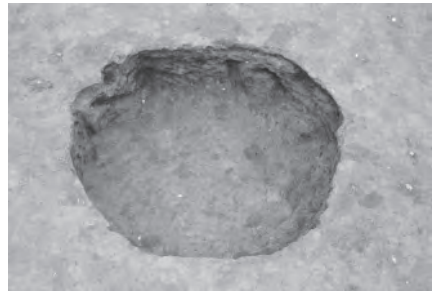
PL-58 V区土坑3



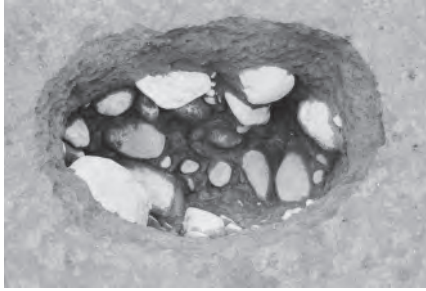
33号土坑 (南から)



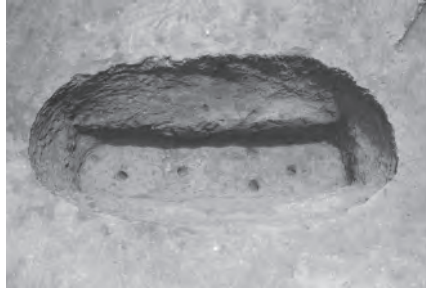
34号土坑 (南から)



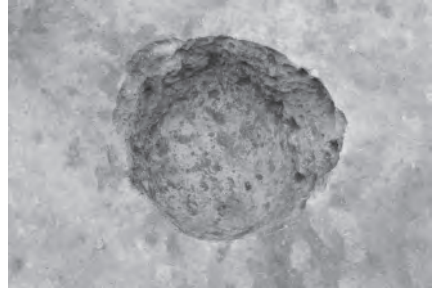
35号土坑 (南から)



36号土坑 (北から)



39号土坑 (北から)



37号土坑 (北から)



36号土坑断面 (西から)



39号土坑断面 (西から)



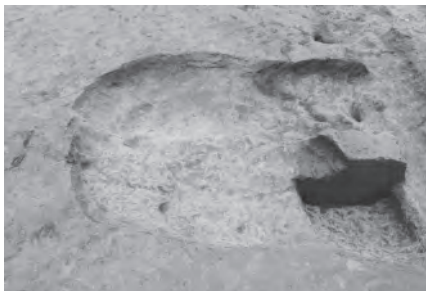
38号土坑 (東から)



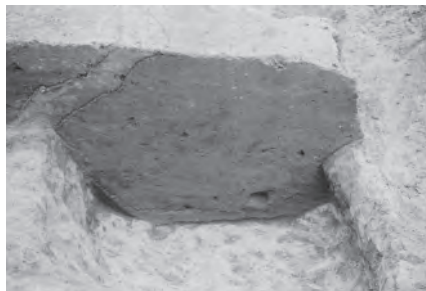
40号土坑 (東から)



41号土坑 (西から)



42号土坑 (西から)



43号土坑断面 (西から)



44号土坑 (南西から)



45号土坑 (北から)



46号土坑 (西から)



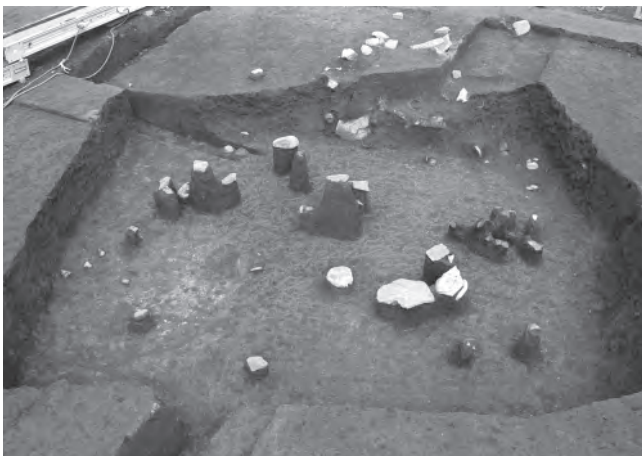
全景（西から）



カマド（西から）



カマド構築材



遺物出土状態（西から）



カマド脇遺物

PL-60 V区2・3号住居



2号住居（右）・3号住居（左）全景（西から）



2号住居全景



2号住居掘り方



3号住居全景



3号住居カマド



全景（南から）



炭化材



炭化材



カマド確認状態



カマド



全景（西から）



炭化材・遺物出土状態



遺物出土状態



カマド



カマド基部





1住-1



1住-2



1住-3



1住-4



1住-5



1住-6



1住-7



1住-8



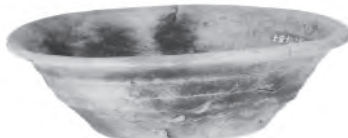
1住-9



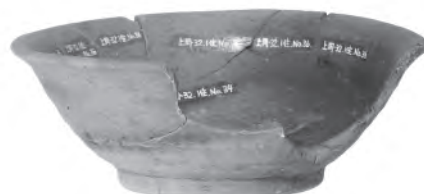
1住-11



1住-10



1住-12



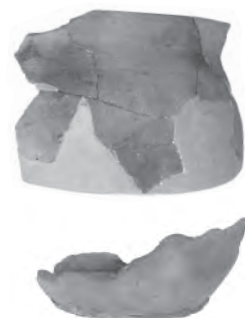
1住-13



1住-14



1住-15



1住-16

PL-64 V区 住居遺物 2



1住-17



1住-18



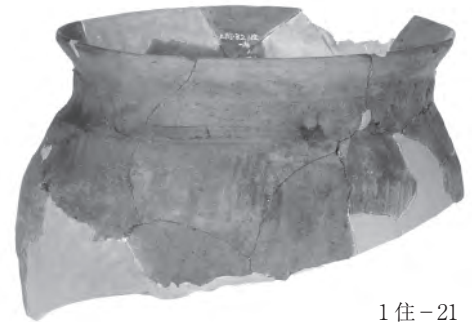
1住-19



1住-20



1住-22



1住-21



2住-1



2住-3



2住-6



2住-5



2住-2



2住-4



2住-7



3住-1



3住-2



3住-3



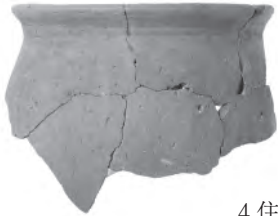
4住-1



4住-3



4住-6



4住-4



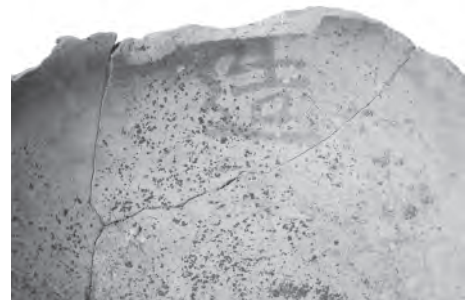
4住-5



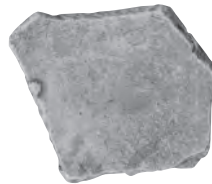
5住-1



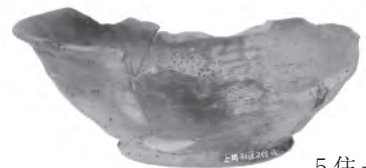
5住-2



5住-4



5住-5



5住-3

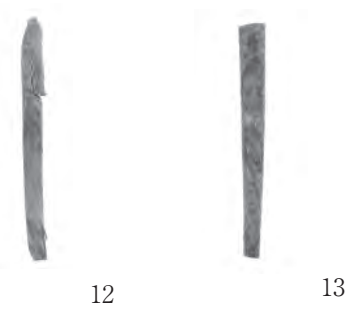
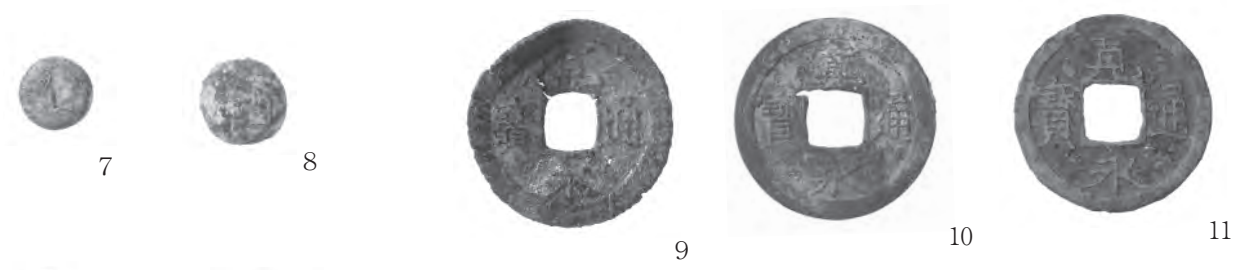
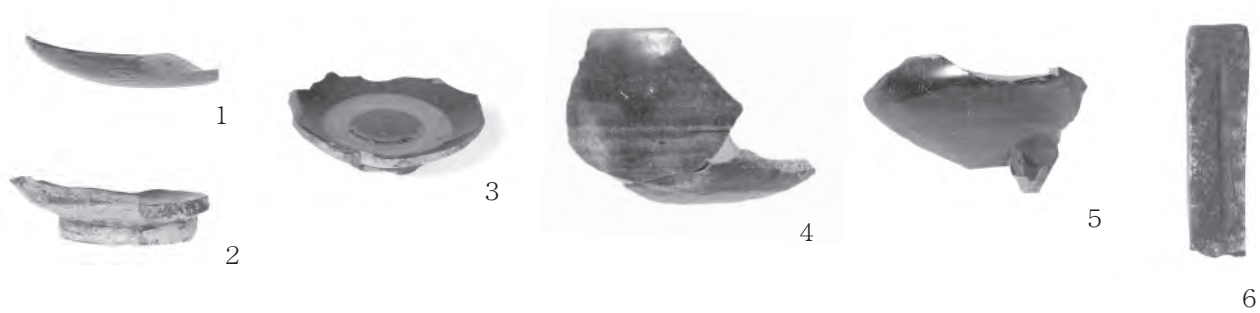


5住-6



5住-7

PL-66 V区遺構外遺物



# 報 告 書 抄 録

書名ふりがな	かみごうおかのはらーいせきーに
書名	上郷岡原遺跡（2）
副書名	八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	21
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	438
編著者名	飯田陽一・楢崎修一郎
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20080325
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田 784 番地 2
遺跡名ふりがな	かみごうおかのはらいせき
遺跡名	上郷岡原遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんひがしあがつままちみしまあざかみごう
遺跡所在地	群馬県吾妻郡東吾妻町三島字上郷
市町村コード	10423
遺跡番号	95
北緯（日本測地系）	363401
東経（日本測地系）	1384426
北緯（世界測地系）	363412
東経（世界測地系）	1384415
調査期間	20010401 - 20061231
調査面積	30.660 m <sup>2</sup>
調査原因	八ッ場ダム建設工事
種別	集落／生産
主な時代	平安／中世／江戸
遺跡概要	集落－平安－竪穴住居 7－須恵器＋土師器＋鉄製品／集落－中世－掘立柱建物 6＋土坑 282／集落－江戸－掘立柱建物 1＋建物壁 2＋墓 1－陶磁器＋古銭＋金属製品／生産－江戸－畑＋道
特記事項	天明三年（1783）浅間山噴火に伴う泥流で埋もれた畑地
要約	遺跡周辺は江戸時代麻の著名な産地であったが、泥流に覆われた遺跡からは収穫が始まった直後の麻畑の様子が克明に表われた。他に、麻屋（おや）と呼ばれる麻の乾燥施設の壁材が出土した。古代の集落では「占」の墨書須恵器が複数出土し、地域的特徴を持つ文字として注目される。

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第438集

## 上郷岡原遺跡（2）

八ツ場ダム建設工事に伴う埋蔵  
文化財発掘調査報告書 第21集

2008年（平成20年）3月17日 印刷

2008年（平成20年）3月25日 発行

編集・発行／財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

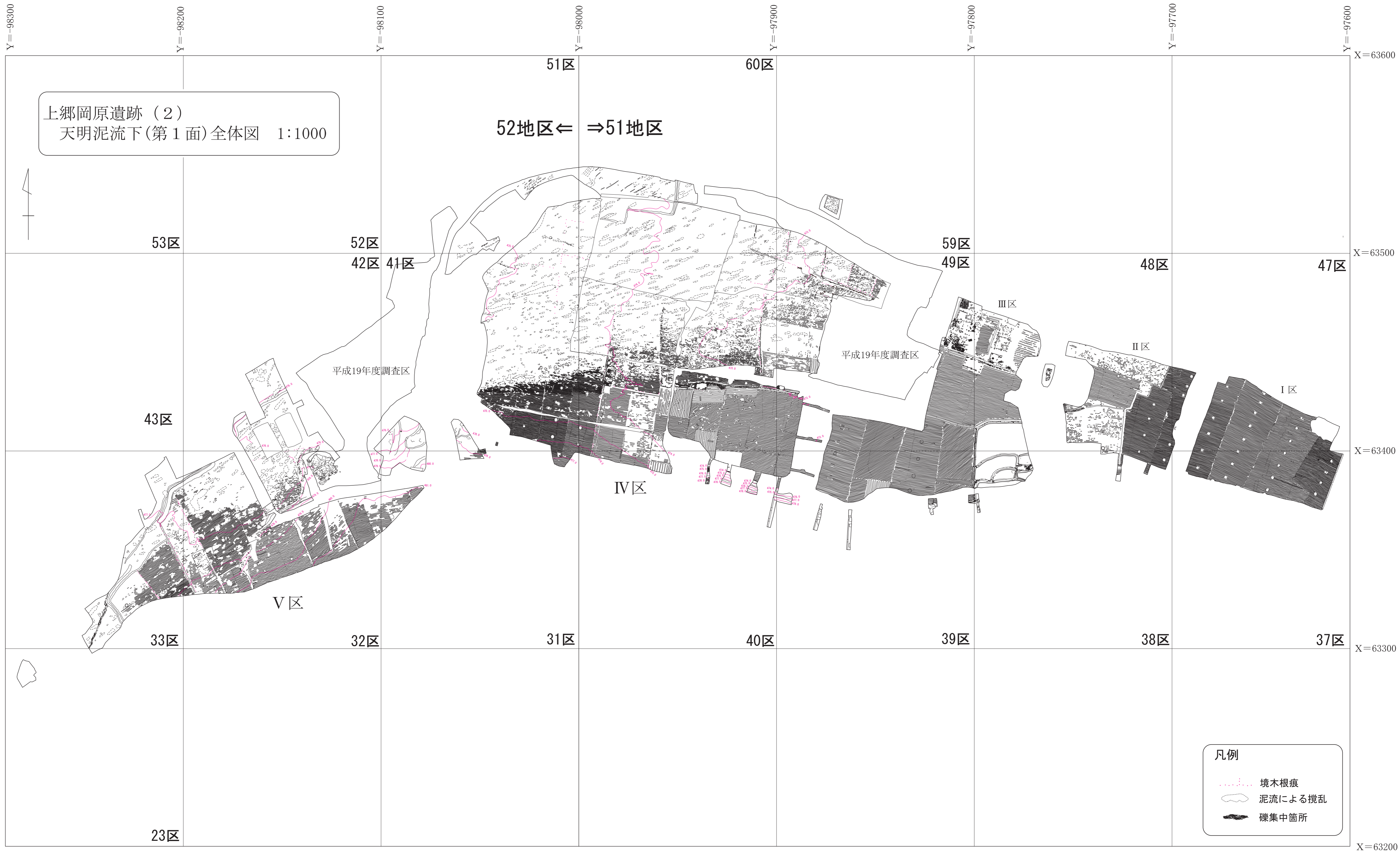
〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地の2

電話 0279-52-2511（代表）

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／上武印刷株式会社





上郷岡原遺跡(2)  
天明泥流下(第1面)全体図 1:1000

52地区 ← ⇒ 51地区

平成19年度調査区

平成19年度調査区

- 凡例
- 境木根痕
  - 泥流による攪乱
  - 礫集中箇所

0 1:1000 100m